THE CENTRAL REVIEW

中央公論

秋期大附錄號

第三十四年第十號
第三百七十四號

永井荷風氏序
谷崎潤一郎氏著

近代情痴集

小室雪岱氏畫及装幀
―挿畫十七頁―

大版四百十頁
價壹圓六拾錢
郵送料拾貳錢

天下の奇書

内容の奇―装幀の奇―全く意表に出でん

現文壇を二分してその浪漫派の領域に君臨する谷崎潤一郎氏の新著也。題目既に警抜、その内容の尋常のものたらざるは、何人も推想し得ん。即ち、肉に眼覺める少年が、一妖婦の美の魅惑に逢うて、たとへば牡丹の蕋に溺るる蜂の如く、喜んでその毒手に陶醉の死を死ぬる少年悲劇「戀を知る頃」、豐麗の少女に好色の老爺を配してマソヒズムの極致を盡せる「富美子の足」を始めとして、世の常ならぬ罪と戀とを描ける諸名篇を收め、更に、附するに、「異國綺談」を以てし、怪奇なる幻想を清新なる異國情調に糾へる「西湖の月」以下の三傑作を蒐めたり。谷崎氏の作風は瑰麗にして芳醇、しかもまた深刻にして凄愴、たとへば毒草の花の、毒愈々深くして色益々濃かなるに似たり。日本の文壇が生める唯美派藝術として正に世界に誇るに足る可きもの、此の一巻に於て粋をつくす。装幀と挿畫は、小室雪岱畫伯が苦心に成り、明治初年の出版物に模して、特異の美觀をなせるもの、この點、また近時出版界の一驚異たらむ。

東京牛込矢來中の丸
振替東京一七四二二番
新潮社
電話八〇九番
番町八九九番

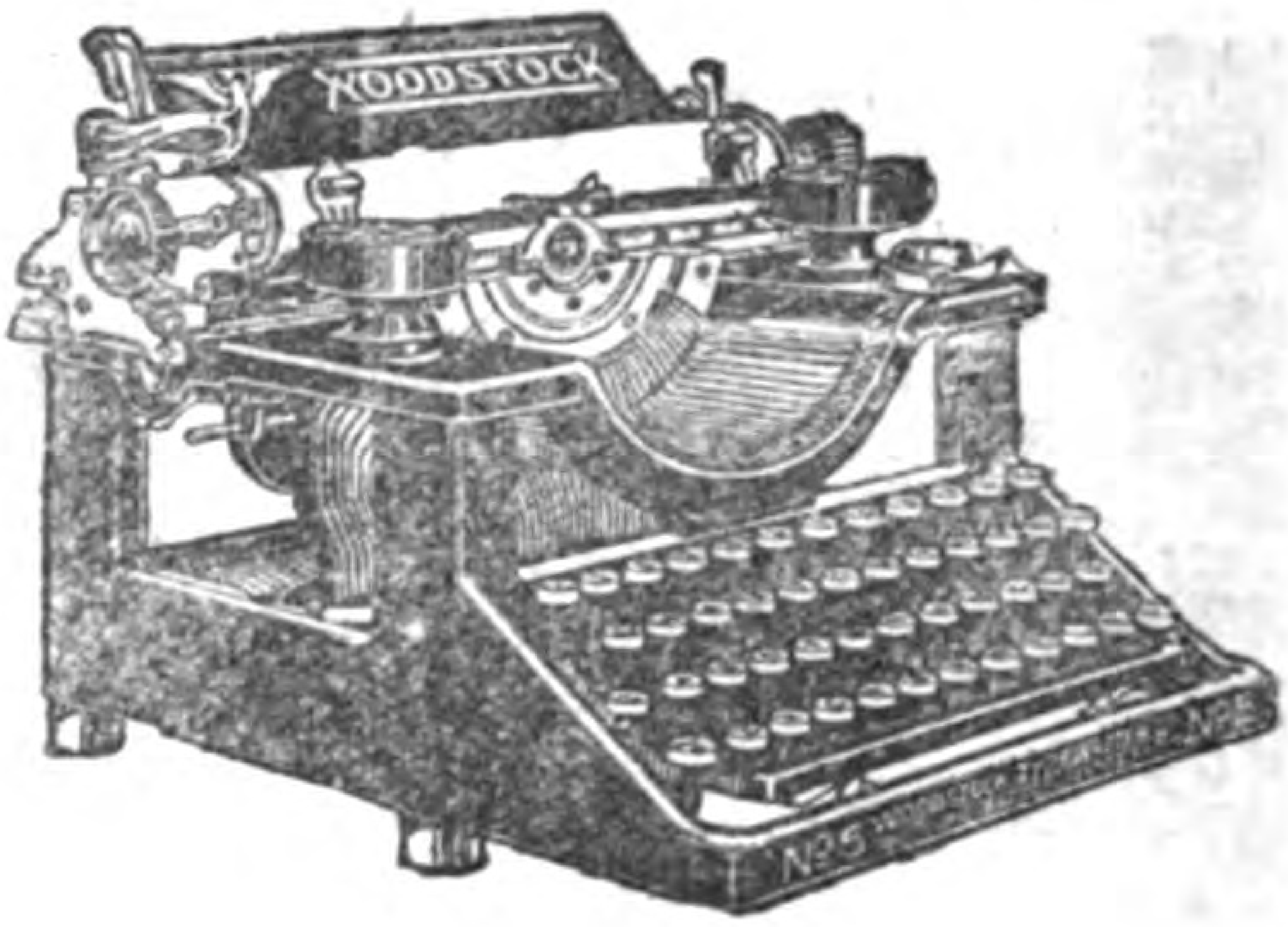
WOODSTOCK

LATEST VISIBLE SILENT BALL-BEARING STANDARD

TYPEWRITER

Made in U. S. A.

米國製
ウードストック
最新式
タイプライター



御注意

僅の差にてリビユルト(中古)を購入する勿れニユー(新機)は使用後其の眞價を現す

(目録進呈)

ペント式手提金庫
タイプライター
ペント式金庫
實務用器各種
日本紙器製品
直輸入並製造

大阪市東區平野町三丁目

木本商店

電話本局
長壹壹參五
貳五八八
參七六六

代理店募る

幕末武士と露國農夫の血を享けた 私の自叙傳……大泉黑石……一
關東と關西……橫山健堂……六一
ユウトオピア物語(完)……井箆節三……八一
對話 無産有識階級の人々……生方敏郎……一二三
嵯峨大臣物語……村松梢風……一四〇

[illegible]
日本温浴史話……中桐確太郎　一三[illegible]
研究會の膨脹と其構成分子……鶴崎鷺城　一七八
續　發　音　遊　戯……菅原教造　一八五

▼時論と思潮

新總督及び新總監を迎ふ
擴大せられたる研究會に望む





LE LABOUR

BY E. RENE MENARD

何の點に講和特使の成敗を論ずべき

西園寺侯の歸朝を迎へて、講和特使の巴里に於ける効績は之を成功と認むべきや將た失敗と認むべきやの論、改めて朝野の間に矢釜しくなつた。

西園寺侯を始め牧野男以下の一行の誰も彼もが、堂々たる帝國の代表者として毫も其使命を辱めなかつたといふならば、是れ餘りに白々しき虚飾である。兎角當局者を悪し樣に罵倒するのが日本人の通弊だとしても、特使委員達の醜態は、同じく巴里に遊んだ新聞通信員諸君等より之を聞く斗りでなく、西洋の人々の口からも可なり皮肉に説かれて居る。此意味に於て特使の一行が日本帝國の面目を傷けたるの見苦しき失態は、最早如何にしても之を蔽ふことが出來ないと謂はねばならぬ。

併し乍ら、モ少し譯の分つた人が往つたらモ少し多くのお土産があつたらうと云ふ意味に於て成敗を說くのなら、吾人はまた斷じて之に與みしない。蓋し今次の講和會議は、單に利害の調節を協定するといふに止まらず、實に一理想的原理に依て指導さると云ふ點に於て、全然從來のと其面目を異にする。假令細目の條項に就て所謂樽俎折衝の餘地ありしとするも、其歸着すべき所の何かは、眼ある者には始から明白であつた。例へば南洋諸島の處分に就ても、將た人種案・山東案に就ても、本誌の夙に唱導せし所と實際の決定とを照合せば、思半に過ぐるものがあらう。故に大體の結着は、始から自ら定る所あり、特使の働に依つて之を左右することの出來るものではなかつた。謂はゞ三條約に依つて日本の獲得せるものゝ分量を論斷とせん乎、そは特使の成功でもなければ又失敗でもない。只問題越へ往つて物を買ふ樣なもので、西園寺侯を遣つても、お花さんを遣つても、あれ丈けの物は間違なく獲られる。只問題は、正札のついた物を買ふの傍ら將來の商業取引の改善の事など論ぜる際に、日本の代表者の態度は相當に重きを爲したか如何にある。改善の問題に就ては、全然之に理解と興味とを有せざるかに誤解せらるゝ程度の極度の沈默を守り乍ら、物を買ふと云ふ段になると、まけろのひけろのと散々番頭と傍觀者との罵聲を買ひつゝ結局正札通りに投げられて來たといふのが、一行の赤裸々の成績ではないか。斯んな頭の所有者だから、本人は何處までも成功の積で居るかも知れない。けれども吾々國民は人を更へたならモット獲物があつたらうなどゝ殘念がる理由もない。

中央公論



第卅四年第十號
秋期大附錄號
第三百七十四號

生活難の増進と住宅問題の解決

法學博士　渡邊鐵藏

一、文明と生活難

人間生きるのに衣、食、住を缺くことの出來ぬのはいふまでもないこと。其内第一に食物は命の泉、特別の修行でもせぬ限り日に三度は缺かすことの出來ぬものである。人類創生の時と所とは自然の條件がよくて、食に事缺かず、衣住の必要はなかつたようにも思はれぬ。しかし鳥、獸より蟲けらに至るまで巣を作つてをる、まして猿より進化した人類の事であるから棲家を作ることは、創生の時より既に、之を知つてをり、又其必要を感じたかも知れぬ。進化論を信ずる限りは、人間が土の塊に魂が入つて出來たものとも天から降つて來たものとも考へられぬ、又人間が猿の後裔であり親類で

ある以上他の動物と全く隔絶した所に住むでをつたとも考へられぬ。して見たばもろ／＼の毒蟲や、毒氣を吹く大蛇や、血を吸ふ大蝙蝠や、肉を喰ふ猛獸の害を防ぎ、又天然の災を逃れ、雨露をも凌ぐためには適宜の場所を選み相當の設備をしたことと思はれる。始めは自然の洞窟を利用し、岩陸の土を堀り、草を蓐とする位であつたらうが、更に角安全な隠家、睡眠の場所を求むる必要はあつたであらう。棲家があつても出でて木の實を採り、穀實を集め、草の根を掘るにつけ刺す蟲、血を吸ふ蟲の害を避けるためには木の葉を身に纏ひ、枯草を足に附けるほどの用意は間もなく考へ付いたに相違ない。時經て人間の數が増すと共に食を求むるためには樂園の外にも移り住まねばならぬ、從つて住居衣服に寒暑の備もせねばならぬ。文明の世となつては體裁を飾り、美を競ふこと丶もなる。かくして住居衣服は對敵、對自然から美觀と追々贅澤になつて來る。

このように食は第一、住は第二、衣は第三に人間の生活の必要條件である。然るに時を經て、人の數、人の欲望の増加するに從ひ、此三のものを求むるについて「マルサス」の人口論の憂ふるような困難な經濟上の問題が生じて來る。此三者を獲得するためになすべき人の勞力は追々增して來る。又技術的、職業的、地方的と次第／＼に生産に關する分業が發達して人間が複雑なる社會經濟組織の下に生活するようになるに從ひ、各人が次第に變化する生活と欲望とに應じて適當なる食、住、衣を求むるについての經濟上の問題は一層複雑となつて來る。此三者を購ふべき收入を得るためにする勞力の分量は一層增加する。殊に産業革命と貨幣、信用經濟の發達は益々分業の發達、人口の都會集中、資本の集中を助長し、勞力の提供者は如何なる種類の者でも地主及び資本家に對して經濟上不利益な地位に立たねばならぬように世の中が進むで來る。貧乏人は增加する一方である。それに近世國家財政の需要と國民の文化的向上の要求とは、多數個人の支出に對して益々重い負擔を課するようになる。かくして文明の進むと共に、總ての人が樂に、滿足に、追々に贅

滓となつて來る食、住、衣を得ることは愈々困難な問題となつて來る。

人間が、木の實、草の根を喰ひ、土を掘つて住むで居つた原始的の時代から、人間が空を翔つたり、水中を潛る道具を作るようになつた近世文明の時代に至るまでには、吾々人類は間斷のない勞力をなして、漸次に複雜な社會組織と經濟組織を作り上げて來たのである。そして此長い期間には生活直接の必需品の外に道具、機械、工場、船舶、埠頭、倉庫、鐵道、電車、電信、電話、電燈、瓦斯、寺院、學校、圖書館、美術館、劇場、旅館、別莊、軍艦、砲臺、大砲、彈丸、自働車、飛行機、潛水艇と色々のものが造り出され此先きまだどのような物が造り出されるか豫想することも出來ぬ。又此間に生活必需品の直接生產者の外に商人、企業家、役人、政治家、醫師、辯護士、學者、教育家、學生、藝術家、僧侶、貴族、軍人と色々の種類の人の數が殖えて來てをる。此樣に土地も、自然の物も勞力も原始生活的生產以外に文明と國家の要求に基いて使用せらるゝことが殆無限のようである。此勢で進むで行けば如何に產業革命の生產上に及ぼせる効果が偉大であつて、其後も常に其能率が增進せられてをるとはいへ、人類が生產結果の分配と、各人所得の利用（資本の運用）と、國家財政收支の計畫と運用とを最も合理的にしなければ、たゞでさへ「マルサス」人口論の眞理の支配を怖れねばならぬ人類は自己の經濟組織の作り方と、經濟生活の仕方の不合理、拙劣なために生活と、國家と、文明と、この三の重荷を背負ひ切ることが出來ぬようになるかも知れぬ。

現在此三つの重荷を樂に、しかも希望を以つて、ひつさげて步く個人もあるが、むしろ四苦八苦で、或は惰勢的に之をかつぎ上げて居る個人の方が多數であつて其數が追々增すように見える。此儘で進めば大多數の個人が此三つの重荷を背負ひ步くことを馬鹿らしく考へたり、苦しく感じたり、或ひは、事實上それを背負ひ切れぬようになる時が來るかも知れぬ。其時こそは誰も生活の荷を先きに捨てる者はあるまい――犧牲者、心的盲者の例外はあるが――多くの者は

其時の國家と文明の二者と、これを支持する經濟組織、社會組織、政治組織とを見つけたり、或ひは遂に是等を捨ててよりうとするかも知れぬ。それこそ社會は一時大修羅場となつて、さて其後案外理想國が出來るかも知れぬか、復た半原始時代が出現するかも知れぬ。今まで人間がすべて文明生活に慣れてをるだけ、その新しい世の中に適應するのには思ひがけぬ苦しみがあらう。されば不用意にこのような世の中に人間を追ひ込まぬように、人々は三つの重荷の背負ひ方について互にうまい方法を考へねばならぬ。

生活難の聲は分配の公平に行はれぬ限り、若くは經濟組織が合理的に進化せぬ限り、國家の强大と、文明の進步とに正比例して大となることは斷じて誤らない眞理である。現在吾々は吾々の經濟組織と社會組織の今日に至るまでの歷史的進化の結果として、吾々の收入の中から常に生活物資代を支拂ふのみならず、營利經濟料（資本的經濟組織の特徵）國家料、文明料を支拂はねばならぬ。現在多數の人は生活の必需品（主として、食、住、衣、更に廣く言へば燃料、燈火、交通）を營利經濟の供給に受けねばならぬ。是等の企業利益が少ければ是等の企業は起らず、多過ぎれば需要者の損である。そこで是等のものゝ生產については營利經濟排斥論が起る理である。我國に於いても是等のものゝ一部については既に營利經濟を廢して國若くは公共團體に於いて社會的所有若くは經營を行つてをるのである。しかし生活の第一次の必需品である。食、住、衣等については我國においては從來社會的所有若くは經營のことは多く考へられなかつたようである。然しながら今回の大戰爭の我國民の經濟上の分配關係に及せる事實上の影響と、其一表現である昨年の八月騷動の勃發とを見てより、我國の朝野において右の問題に關する考慮をなす者が多くなつたことは爭い難い事實のようである。

次に余のいふ國家料、文明料といふのは國家存立の必要のために、及び敎育、學術、藝術娛樂等國民の文化的向上のために國家及び地方團體の財政を通じて、或ひは個人が直接に是等の目的に支出する費用である。此種の個人支出は强國

の民、文明國の民としては固より當然負擔すべきものであるが、國家料の方は時期や程度を辨へぬ軍備のために不必要に重くせらるゝ虞もあるから此點はよく注意せねばならぬ。要するに多數の人の懷から支拂はれる金が生活の必需品の正當なる對價として、及び文明料並びに適當なる國家料として轉化するのならば誠に結構であるが、若し之に反して此支出の主たる部分が營利經濟料として少數資本階級の懷に轉じ、又不要若くは不急の國費として用ひられ其結果として、不當に多數個人の生活を壓迫するのみならず、一般國民の文明的生活の向上を阻害するやうなことに成ることは甚好ましからぬことである。換言すれば多數個人の生活上の直接の幸福と人類文明の向上を、一部資本家の利益と、誤つた軍國主義の犧牲とに供してはならぬといふのである。

極端なる分配の不平等、多數者の生活困難等の現象は、或國が近世産業國的變化をなした場合に於いて、其國の政治組織が眞實に立憲的ならずして其施設が多數國民の經濟生活上の要求と相容れず、且つ其國民の社會道德に於いて、正義と人道の觀念薄く、且つ又其國民が經濟的にも亦政治的にも自治的能力を備へざる如き場合に於て、殊更に其結果が重大となる。之を匡正するためには政府と國民とに大なる反省と勇氣とが第一に肝要である。

國威發揚、軍備擴張の必要な時期もあらうが、內政改革、國民生活改善の大切な時期もある。一方のみに偏して他を捨つる必要はないが千遍一律の無理な、拙手な政治をされたならば國民は堪へられるものでない。世界改造の聲に醒されて引廻はされるのではない。日本には獨立に、しかも世界と同じやうな經濟上、思想上の變化が生じてをる。それは何等か經濟上、政治上、社會上の改革を要求して止まぬに相違ない。再び言ふ、改革には何事にも反省と勇氣とが第一に肝要である。第二に方法の研究と迅速なる實行とが必要である。

二、生活難と都市民

生活難は文明の一現象である、都市は文明の發現地であるだけに其内に住む者は特別に文明と生活との渦中に投ぜねばならぬ。農民とて固より生活の必需品についてすべて一家園田自足經濟を營み得るわけではないが、都市に文明が作つたものであつて、其内で、文明の作つた種類の人が文明的の生活をしてをるだけに特殊の生活難の苦痛を受けねばならぬ。農民も其の大多數は主要食物以外のものは多く營利經濟より供給を受けてをるのであらうが、都市の住民は食物も住居も衣服も其他、二三の例外を除くの外、すべて皆營利經濟より供給を受けねばならぬ。都市の住民は何物にも營利經濟料を支拂はねばならぬばかりでなく、いろ〳〵の文明料を支拂はねばならぬ。帽子、洋服、靴、絹の着物、水道、電燈、瓦斯、電車、活動寫眞それに市稅と臨分金のかゝるものが多い。從つて大なる企業收益のある者、不動產、有價證券收益のある者其他大收入を有する少數の者を除く外、大多數の都市民は營利經濟料と文明料のために年毎に生活難の深みへ押し遣られる。その上に「マルサス」の人口論の實現であるか、田舍から食物の少しも出來ない都市へ「喰ひに」出て來る者がある。都市の經濟上の力によつて田舍から人口を吸收するのならば都市も何とかそれ等の者を生活難に苦しましめぬ力があらうが、田舍の經濟上の理由から取敢えず都市に逃場を求める者や、たゞ何となく都市の文明生活にあこがれて出て來る者が增加することゝなると、たゞさえ生活難文明難に苦しむ都市民は是等の風來人と折り重なつて益々生活難のどん底に沈まねばならぬ。

都市民の大多數は生活難に苦しまねばならぬ運命を持つてをるのであるが、日本の都市民はまだ半文明的の生活をしてをるのに過ぎないのであるから、此先き歐米都市民のような文明生活をしようといふには、餘程うまい方法を考へぬと行先が見えぬことになる。いつそのこと文明の打切りをして生活難の增加を逃れようか。學校も、上下水道も、道路も、交通機關も此まゝに打捨てゝをこうか。しかし正當な文明の要求にも國家の要求にも國民が尻込みをするようになつて

は其國民の向上は御止まりである。そこでどうしても吾々は文明と生活との調和について適當な方法を考へねばならぬ。即ち文明が進むでも生活難が加はらぬか若くは減退する方法を考へねばならぬ。それには前節に於いて述べたように出來得る限り所得分配の公平を計ること、營利經濟組織の部分的改革を行ふこと、國及び地方の財政を合理的ならしむること等が必要であるが、それと同時に各人が生活の方法について出來得る限り經濟主義の實行と協同組織の利用とに努めることが最肝要であると信ずる。そして又國家も、公共團體も、資本家も、國民の生活難の輕減若くは生活の改善につきて注意と、援助とを怠らぬことが大切である。

三、生活費と住宅問題

生活難防止策は上述のようにいろ〳〵あるが、その内食、住、衣の供給が經濟的に行はれるといふことは最効果のある一策であらう。殊に都市の住民にとつてそれがどれ位有難いことであるか知れぬ。收入の少ないものほど文明はたゞ見せ付けられるだけで、その仲間入りは出來ぬ。收入の殆全部を食、住、衣のために支出して辛じて生活を維持するのみであつて、文明世界に生きて、近世的經濟組織の一員となつて、しかも僅に原始的欲望の滿足を激しい努力によつて購ひ得るのみである。

都市に於ける小收入者の生活費の内で食、住、衣がどれほど大きな部分を占めて居るかといふことを示すために一二の例を擧げて見よう。

甲、紐育市に於ける勞働者の家計

所得階級	調査家族數	支出に對する百分率 食料費	家賃	被服費	燃料、燈火費	保健費	交通費	保險費	雜費
四〇〇—四九九弗	八	四〇、八	二六、八	一三、〇	五、六	三、一	二、六	一、二	六、九
五〇〇—五九九	一七	四四、四	二五、九	一二、四	五、九	一、九	一、八	一、三	六、四
六〇〇—六九九	七二	四四、六	二三、六	一二、九	五、八	二、一	一、七	二、〇	七、三
七〇〇—七九九	七九	四五、六	二一、九	一三、四	五、〇	一、九	一、五	二、五	八、二
八〇〇—八九九	七三	四四、三	二〇、七	一四、〇	五、〇	二、七	二、〇	二、二	九、一
九〇〇—九九九	六三	四四、七	一九、〇	一四、六	五、一	二、六	一、五	二、六	九、九
一、〇〇〇—一、〇九九	三一	四四、七	一八、一	一五、五	四、五	一、五	一、八	二、五	一一、四
一、一〇〇—一、一九九	一八	四五、六	一六、二	一四、九	三、八	三、六	一、九	二、五	一一、五
一、二〇〇—一、二九九	八	四五、〇	一九、八	一五、二	三、八	一、三	二、二	二、一	一〇、五
一、三〇〇—一、三九九	八	四三、六	一六、八	一三、七	三、六	一、一	一、一	四、九	一五、一
一、四〇〇—一、五九九	六	三五、八	一六、三	一六、八	四、一	七、四	一、二	二、三	一五、一

(Chapin; The Standard of Living among Workingmens Families in N.Y.)

乙、伯林市に於ける小收入者家計例

職業	家族數	總收入	總支出	過不足	支出に對する百分率 食費	家費	被服	燈火、燃料	交通費	文明費、稅其他
巡査	四人	一、一五三円	九九九円	(+)一五四円	四八、四	二五、一	一〇、四	三、五	三、一	二、七	略
小學教師	六人	一、四八三	一、九三〇	(−)四四七	三一、八	二二、〇	一六、四	三、一	一、六	八、〇	略

(Erhebung von Wirtschaftsrechnungen von minderbemittelten Familien im Deutschen Reich. 1909)

右の表を一覧すれば何れも支出の大部分は食、住、衣のために用ひられ、食費は全支出の三分の一乃至二分の一弱を占め、家賃が第二位被服費が第三位を占め此三者で大抵全支出の約八割を占めてをるようである。家賃の負擔は收入の少き者ほど重く、之に反して收入の增加するに從つて多少被服費の割合が增加し、殊に雜費(即ち其主要部は文明費)の增加することが注目される。此樣な數字を見れば食料費が多數者の生活難にどれほどの重要な關係があり、又住宅費が貧乏人にとつてどれほどの重荷であるかゞわかるであらう。右の數字は幾分古きに過ぎる嫌はあるが、今回の世界的の大戰爭の結果として一般物價の騰貴は世界的に驚くべき勢で進むでをるに拘らず、多數者の收入は勿論其割合には增加して居ないのであるから、小收入者の食、住、衣に對する支出の割合の增加したことは疑を入れず、生活難は增す一方である。我國には纏つた家計調査の統計はないが高野博士の「東京に於ける二十職工家計調査」や其外婦人雜誌、新聞紙等に散見する材料に就いて見ても同じような結果が窺はれる。

此樣な有樣であるから、食、住、衣を出來るだけ低廉に供給する方法の考案せられることは、小收入者にとつては無上の福音である。それには先づ出來得る限り營利經濟料を支拂ふ必要の少ないようにして出來得る場合には需要者の協同組織を奬勵し、且つ國家も、公共團體も立法、行政、財政の力を以つて充分の後援をせねばならぬ。

食物、被服類其他一部の必要品については從來或僅少の方面に於いては消費組合が出來てをり、又近來公設市場、簡易食堂等の企てもあり、殊に米については國營論も唱へられるようになつてをる。しかし住宅については我國では從來之を經濟的に供給するといふことについては殆何事もなされて居なかつたようである。

食物は毎日消費するだけづゝ買へばよい、一時に澤山の金はいらぬ、被服類も必要な折に時々買へばよいのであつて、收入の少い人が割合に値る張の物を買はねばならぬ場合でも二三ケ月も準備すれば大抵は買へる。しかし住宅となると

そうは行かぬ。住宅は一生涯に大抵一つあれば充分であるが、それを買ふとなると一時に巨額の金が要る。大多數の人は勿論一時にそれだけの支出をなし得るものでないから、分割拂買入の方法のない以上は金持ちの建てた住宅を借りるより外に方法はない。始終使ふ物を借りるほど損なことはない。いつも家主さんに頭を下げて割高の營利經濟料を納せねばならぬ。地主さんと家主さんとは昔から威張つたものであるが、人間の一番大切なものを掌握してをるのであるから威張るのは無理がない。家主の社會的の勢力は減退せむとしてをるか、其經濟上の權力には店子は何時も屈服せねばならぬ。しかし資本家でなければ巨額の金の要る家を建てゝ見れる者はない。こゝに住宅問題の經濟上の困難が存在するのである。生活上食物に次いで大切な住宅の建設を全然資本家の營利經濟に一任せねばならぬといふことは、住宅問題が生活難の一大原因となる所以である。

四、住宅問題の解決方法

住宅問題は社會的にも、保安的にも、保健的にも、技術的にも、美術的にも論ぜられようが、先づ主として經濟的の方面より論じて見よう。經濟的方面より住宅問題を見れば營利經濟の横暴と無責任とより、住宅の需要者を救濟することとが眼目である。それには國營、市營、組合、特殊の企業組織等種々の方法があらうが、要するに小資力者に住宅の購入を容易ならしむる方法と、低廉なる賃貸料を以つて住宅の供給をなし得る方法とを考案すればよいのである。

住宅を一般的に國有若くは公有となすことは其實行方法の點より、需要供給の適合の點より又管理の點より見て殆ど不可能のことである。又新に國營住宅の建設をなすほどなれば利害關係の最密接なる自治團體に任す方が正當である。但官公吏の住宅を國又は公共團體にて供給することは固より特殊の問題である。都市が其土地を公有とすることは最理想的であるが、住宅についても市の財政の許す範圍に於いて其の經營をなすことは固より適當である。又大企業家か其

使用人に對して住宅の供給をなすことも可である。然しながら住宅問題の一般的の解決方法として特に研究すべきものは住宅組合と特殊の會社組織とである。前者は住宅の需要者が協同の組織によつて相互的に住宅の獲得方法を考案せるものであつて、後者は資本家と國家及公共團體が協力して低廉なる住宅を大規模に供給せむとするものである。

五、建築組合

建築組合は住宅を買入れ若くは建築するために資金の借入れを欲する者が大勢ある場合に、各自が共同に積立てて順次に其の必要とする資金を借受け得る仕組みである。無盡に似て居るが受取つた金で伊勢參宮をするのと家を買ふのとが違ふ。

建築組合は何事にも共同自助の方法の發達してをる英國で最初に又最よく發達したのであるが、英國に於いては既に千七百九十五年に「バーミンガム」に建築倶樂部が存在し、千八百〇九年には「グリニッチ、ユニオン」建築組合が成立してをつた、千七百九十三年に共濟組合法（フレンドリー・ソサイティー）が成立し、千八百三十四年に共同目的事項が擴張されてより建築組合は共濟組合として登錄されてをつたが、千八百三十六年に初めて共益（ベネフィット）建築組合法が制定せられ、爾來建築組合は長足の進歩を以つて普及するに至つたのである。其後千八百七十四年に建築組合法が制定されて種々の改良が行はれ千八百九十四年の法律によつて又種々の改正が行はれたのである。

此建築組合の根本の考案は、各組合員が毎月一口十圓以内の拂込をなし、千五百圓未滿の貸付けを受けむとするのである。一人で數口を持つことも出來る。假りに一定數の會員が出來て百五十口を引受け毎月一口十圓を拂込むとすると、第一月には組合に千五百圓の資金が出來る。これで既に一口に對する貸付資金が出來たのである。組合が組合員に貸付をなす場合には組合員の買つた（若くは建てた）住宅を抵當に取るのである。組合は英國の建築組合法に認められてをる

所では、其有する抵當不動產の三分の二迄の借入金が出來るのであるから卽ち此時には組合は千圓の借入金が出來る。そこで第二月には此千圓の借入金と第二月の拂込金千五百圓を合せて組合は都合二千五百圓の貸付資金を有することゝなる。此金額を組合員に貸付けた場合には組合は之に對する抵當不動產價格の三分の二卽ち千六百六十圓の借入金をなすことが出來る。そこで第三月には此金額と第三月の拂込金千五百圓を加へて、組合は三千百六十圓の貸付資金を有することゝなる。之を貸付ければ又抵當不動產に對して二千百圓の借入金が出來て第四月には組合に三千六百圓の貸付資金が出來る。此調子で借入金の利用によつて組合の貸付資金は漸次に增加して來る。此の如き方法によつて組合の作りたる貸付け資金によつて住宅買入又は建築の資金の融通を受けた組合員は、其の以後は賃借料を支拂ふ必要が無くなるのであるから、其金を以つて組合よりの借受け金の償還金に充當することが出來る。これによつて更に組合が貸付けに用ひ得べき金額が增加する故に、右のような方法によつて比較的短い期間内に於いて總ての組合員が住宅資金の融通を受け得ることゝなるのである。各組合員は其持口に對して貸付けを受けたときには前に述べたように其の不動產を組合に抵當に入れるのであるが、其借受け金を全部償還したときには抵當權が消滅して其住宅が完全に自分の所有となる。

組合は組合員が買入れ若くは建築せむとする家屋が組合の貸付金に對して充分の擔保力のあることが明でなければ貸付けをしない。そして多くの確實なる組合では自己の安全の保證として組合員の抵當に供する不動產價格の或部分以上には貸付けをしない。此抵當不動產價格と貸付金額との差額を組合の「安全限度」といつてをる。そこで建築組合員が組合を利用して建築資金を調達せむとする場合には、組合の「安全限度」に相當する金額だけは別に自ら之を調達せねばならぬ。例へば組合が五分の一の安全限度を採用してをる場合には、五千圓の家屋を買入れんとする組合員は組合よりは四千圓の貸付を得るのみであるから、自ら別に千圓を調達せねば其の家屋買入れの目的を達することが出來ぬ。それ

にしても他の普通の方面より借入れる場合には建築組合以上に安全限度を要求される故に、やはり建築組合を利用して金を借りる方が得である。其理由は普通の不動產抵當貸付と建築組合の不動產抵當貸付とは其の性質が異るからである。第一に、普通の抵當貸付の場合には貸主は正確に利子の支拂を受けて約定の時期に元本の返濟を受ければよいのであつて、其時までは最初の貸付金額は變化せずに其儘殘つてをる。之に反して建築組合の抵當貸付けの場合には借主は期間を定めて絕えず元本の一部分並びに利子の割賦額を返濟してをるのである。即ち組合の借主は元本と利子を約定期間內に償還するに足る金額に相當する年金を支拂ふ約定をしてをるのである(後掲の表參照)。

第二に普通の抵當貸付の場合には實は明確な償還期限がない。利子の支拂が確實であつて擔保物が安全である以上は、貸主は之に滿足していつまでも貸付けを繼續する。之に反して建築組合の抵當貸付けの方は借主が約定期間內右の年金を繼續して拂込み終りたるときには直に抵當權は消滅するのである。是等の理由により建築組合信用の方が確實であるだけに借主にとつても條件が有利である。

此關係を明瞭にするために一つ極く簡單な例を取つて見よう。建築組合より五年償還にて千圓の不動產抵當貸付を得て、年五分の複利年金で償還するとすれば每月十九圓二十五錢若くは每年二百三十一圓を割賦拂戾せばよいことになる。即ち組合員は二百三十一圓を五回即ち五年間に總計千百五十五圓を拂戾せば全く組合に對する債務を免れるのである。之に反して普通の不動產抵當にて千圓の資金を借りた者は、金利を同じく年五分とすれば、五年間には二百五十圓だけを支拂へばよいが、これは利子だけであつてなほ千圓の借金は殘つてをる。此場合に債務を償還するとすれば結局千二百五十圓を支拂ふことになつて、前の建築組合抵當で借りた方が九十五圓だけ得になるわけである。

又安全限度の點からいつても建築組合は普通の貸主より遙に安全な地位にある。例へば建築組合が不動產價格の五

分の一を安全限度とする場合に、千二百五十圓の價格のある不動産を擔保として五ヶ年の期限にて千圓を貸付けたとすれば、第一年目の終には、組合はなほ千二百五十圓の抵當財産を保持するに拘らず、それの擔保する債務は僅に八百十九圓$(1000-(261-80))$であつて、安全限度は三割五分弱$\left(\frac{1250-819}{1250}\right)$即ち三分の一以上になるのである。而して拂戻のある毎に此の安全限度は漸次増加してゆくのである。之に反して普通の不動産抵當貸付に於いては抵當財産價格も其擔保する債務額も一定不變であるから、安全限度は常に同一であつて決して増加することはない。此故に建築組合は普通の貸主に比較して遙かに低い最初の安全限度を以つて貸付に應ずることが出來る。

前例の償還期限は五年であつて一時の拂戻年金額は割合大である故其負擔が困難である場合には償還期限を長くすれば拂戻金額は少額で濟むことになる。此期間を適度に長くして拂戻年金額を、從來支拂つてをつた家屋賃借料と大差のないようにも出來る。例へば償還期限を十年とすれば、五分利、千圓に對する拂戻年金は月十圓八十錢若くは年百二十九圓五十錢となり、十五年とすれば月八圓五錢若くは年九十六圓五十錢でよいことになる。今假りに從來年二百五十圓の家賃を支拂つてをつた家屋を買入れるについて、建築組合より二千五百圓を借入れ、之に自ら幾分の補足をして右の家屋を買入れたとすれば、此借主は十五年間每年二百四十一圓二十五錢の拂戻をすればよいのである。即ち彼は每年八圓七十五錢の餘剩を得るのみならず、十五年目の終りには其家屋は彼の所有となつて、彼は何等の支拂をもなすことを要しないようになる。なんと樂に家の持主になれる方法ではあるまいか。

或人が二十五歳で建築組合に加入して、家屋買入のため組合より十五年償還の貸付金を得て、彼が從來支拂つてをつた家賃と大差のない拂戻金をなして、彼が四十歳に達した時に完全に其家屋の所有權を得たとする。即ち彼は今や自分の住む家の完全な持主であつて、而して彼の支出は以來右の拂戻年金額だけ減少するわけである。そこで彼は其餘裕金

を再び建築組合に拂込むことにして更に貸付金を得て又他の家屋を買入るゝことも出來る。然らば五十五歳にして彼は家主さんと相り濟すことが出來るのである。そして此貸家より入り來る賃貸料收入を拂戻金に充てゝ更に組合より他の貸付金を得て家屋を買入れ、此方法をどこまでも繰返すことが出來る。このようにして貧乏な借家人が建築組合を利用して多くの家の持主となつた例が澤山にある。

右のような利益のある所から英吉利では建築組合が大いに發達して、十年ほど前で少し古い數字ではあるが、建築組合の利益を受けた人の數は二十五萬人を超へるほどである。そして組合が每年取扱つた抵當貸付は二萬件を超へ每年の貸付金額は一億圓に達し、一時に存在する抵當貸付金額は五億圓を超ゆる有樣である。此數字の關係によつて一件平均貸付額五千圓償還期限平均約十年であることが認められる。

建築組合には借主があると同時に固より資金を供給する投資者が存在せねばならぬ。組合に對する投資者は持口者と貸金者との二種である。前に組合員は、組合から家屋買入に要する資金の金額を借入るゝことは出來ない、組合が安全限度とする部分だけの金額は自分で別に調達せねばならぬことを說いた。そこで、之に對する準備として最良の方法は先づ組合の投資會員となつて、右の安全限度の金額に達するまで組合に投資することである。そうすれば組合員が家屋を購入せむとするときには、一部は彼の投資額を引出し、一部は他の組合員の投資によつて集つた組合の一般資金の中から貸付けを受けて、こゝに家屋購入に必要なる全金額を組合より受領することが出來る。

建築組合の經營について最大切なことは算數的の計畫を建てると、借主の支拂ふべき利子、投資會員に支拂ふべき利子を定めることである。英國では建築組合の起つた當初は借主に六分、七分の高い利子を課してをつたが其後競爭の結果五分若くは四分位に下つてをる。組合の經營費を支辨し相當の利益を殘すためには借主に對する利子と投資に對する利子

との間に適當の開きが必要である。從つて借主に對する利子を七分若くは六分とすれば、投資會員に對する利子は六分若くは五分とする等凡そ一部位の利鞘を置くことが必要である。「ナショナル、フリーホールド、ランド、エンド、ビルディング、ソサイテイー」では一九一〇年に借主に五分、投資會員に三分の利子を用ゐてをる。我國では借主投資者に對する利子共に英國より多少高くなければならぬことは勿論である。現在の我國の金融状況では借主に對する利子は七分、乃至八分、投資會員に對する利子は五分乃至六分位ならば建築組合は成立經營し得ることゝ考へる。

此所に掲げた甲表は組合の借主が六分若くは七分利にて千圓の借受け金に對して拂戻をなすべき年金額を示したものであつて、乙表は組合の投資會員が五分若くは六分利にて毎月十圓の拂込みをなした場合の總投資額を示すものである。

註、甲表は月賦拂戻とすれば表に示されたる金額の十二分の一、年四回拂とすれば三分の一の金額を拂込めばよいのである。乙表は毎年末に金利を繰入れての複利計算である。

甲．借受人拂戻年金額
（借受金千圓ニ付キ）

償還年限	6%	7%
	円	円
3	374.50	381.50
4	289.00	295.50
5	237.50	244.00
6	203.50	210.00
7	179.50	186.00
8	161.00	167.50
9	147.00	153.50
10	136.00	142.50
11	127.00	133.50
12	119.50	126.00
13	113.00	120.00
14	108.00	114.50
15	103.00	110.00
16	99.00	106.00
17	95.50	102.50
18	92.50	99.50
19	90.00	97.00
20	87.50	94.50

乙．投資會員受取金額
（毎月十圓拂込）

拂込年數	5%	6%
	円	円
3	378.00	382.00
4	517.00	524.50
5	663.00	676.00
6	816.00	837.00
7	977.00	1007.00
8	1145.50	1187.50
9	1323.00	1378.30
10	1509.00	1581.50
11	1704.50	1796.50
12	1910.00	2024.00
13	2125.50	2265.50
14	2351.00	2521.50
15	2589.00	2793.50
16	2838.50	3080.50
17	3100.50	3385.50
18	3375.50	3708.50
19	3664.50	4051.00
20	3967.50	4414.00

例へば建築組合に加入して毎月十圓の拂込をして置けば六分利の場合には五年目の終には乙表により投資總額六百七十六圓となる。其時三千圓の家屋を購入しようと思へば其家屋を抵當に組合から約二千四百圓位（組合の欲する安全限

度を差引いて）は借受けることが出來るのであるから、此金に右の六百餘圓の投資額を引出し合せて三千圓として、直ちに右の家屋を買受けることが出來る。そして組合に對し二千四百圓の借受金を償還するためには甲表によつて假りに七分利十三年償還とすれば毎年二百八十八圓（一二×二四）若くは毎月二十四圓を拂戻せばよいのである。若し組合員が其家屋若くは同樣の他の家屋に對して從來二十圓の家賃を支拂つてをつたものとすれば此組合員は右の家屋の購入前には家賃と組合への投資額を合せて毎月三十圓を支拂つてをつたのであるが、家屋購入後には單に組合に對して毎月二十四圓の拂戻をなせばよいのであつて、そして償還濟の後には完全に家屋の所有者となり得るのである。

本誌上に於いて此樣に面倒な數字話しを並べ立てることは御迷惑ではあらうが、熱烈な主義論にたゞ人の心の浮立つ折柄此樣な煩瑣な數字論の對照も亦役立つこともあらうか。

最近東京市に一二建築組合が出來かけてをるようである。雨後の筍のように殖えればよい。しかし特別の建築組合法が出來ねば建築組合は充分に發達しないであらう。英吉利の建築組合發達の歴史について見てもそうである、しかし此事は後に再び述べる機會があらう。

六、建築會社と建築組合の比較

建築に關する特殊會社の組織については私は本誌の本年正月號の都市改善論と題する論文中に於いて「都市住宅問題解決の一案」として公共的建築會社設立の必要と其組織の大體に關する提案をなして置いたが、私は今日なほ此案が我國の現狀に照して最適切なものであることを確信してをるから、こゝには別に建築會社に關する論述をなすことを要せぬと思ふ。たゞ一日も早く此種の案の實現せむことを願ふのみである。

近時或新聞を見ると住宅建築會社設立の大廣告が出てをる、見ると二割五分の配當繼續請合ひとある。四年間で資本

の回收をしよう、又それが出來るといふ豫定で、それで住宅難を救ふ慈善的事業であるとも申してをる。些方に渡邊竹次郎氏は配當六分制限を標榜して住宅建築株式會社の設立計畫を公表し、世間の樣子を見てをる。此勝負は面白い見物である。前者が多數の應募者を得れば我國の資本家がいかに欲張りであつて、且つ又いかに馬鹿であるか、窺ひ知られる。後者が多數の應募者を得れば私は之は珍らしいことゝ驚く。前者の結果はまだわからぬが、借家商賣して四年で資本の回收が出來ると思ふ田舍者も、又それで公益に盡してをるのだと考へる低能兒もあまり澤山はあるまい。後者の方は既に其の結果がわかつたようであるが僅に四名の應募者しかないとのこと、渡邊氏は此結果を評して自分は少しも勸誘せず資本家の考へを試驗して見たのだといつてをられる。中々面白い言葉である。日本の資本家は震災前の會社の低能試驗に合格はしまいが、後の會社の高等試驗にも合格は出來まい。そこで私は再び例の特殊公共的建築會社案を提唱する。これならば日本の資本家に對する試驗問題としては丁度適當であるのみならず、勞働者でも、月給取りでも、隱居でも後家さんでも此試驗には合格することが出來ると信ずる。

日本の住宅問題の解決について建築組合と建築會社と、何れが宜ろしからうか。これはよほど落付いて考へねばならぬ問題である。經濟上の點からも、社會上の點からも、建築の技術上の點からも見ればならぬ。建築組合は協同の組織によつて組合員をして住宅の割賦拂的の所有を可能ならしむるものであつて、貧乏なる賃借人を家屋の持主とならしめ經濟上社會上の地位を高むるものである。之に反して建築會社は大企業經營の長所を利用して自ら住宅の建築をなし、割合に低廉なる賃貸料を以て住宅の供給をなさむとするものであつて、建築せる家屋を賣却することはむしろ副的事業である。換言すれば建築組合は組合員の家屋購入若くは建築の組織的相互的金融機關となるに過ぎないのであるが、建築會社は自ら家屋の供給を増加し、主として公衆に對して低廉に之を賃貸するものである。又建築組合は多くは散在せる

組合員が任意の所に於いて不動產を獲得することを援助するものであるが、(集中的の場合もあり)建築會社は多く一定の地域に於いて集中的に建設經營をなすものである。從つて建築會社は材料の購入、利用に於いて經濟上の利益あるのみならず、都市計畫、建築法規の適用、實行等に便宜であつて、保安、衞生、美觀等の點より或程度の理想を實現することを得べく、此點より保健上並びに建築の技術上の利益があると考へる。殊に勞働者住宅等の建築經營を一時に大企模に行はむとする場合には建築會社の方が適當であらう。佐野利器博士は我國の建築材料の不統一、加工機關の不備、勞力の不經濟的使用等を擧げて我國の家屋建設費の不合理に高價なる原因であると說いてをられるが、是等のことも大企模の建築會社を設立すれば改善せられることであらうと考へる。或ひは之によつて建築上の大革命が行ひ得らるゝかも知れぬ。要するに建築組合と建築會社は其目的と作用とに於いて各特徵を有するのであるが、兩者相俟つて小資力者に對する、住宅所有、住宅供給增加、賃貸料低下等を可能ならしめ、所謂住宅難を緩和すると同時に廣義の住宅改良問題の解決をも助くるものである。余のいふ特殊公共的建築會社は或程度まで兩者を包括せるが如き性質を備へてをるものである。

但し建築組合は相互的、自治的性質を有するものなる故、我國に於ける產業組合の發達の不充分なるが如く、我國民性に不適合のようにも思はれる。然しながら彼の我國に於ける生命保險業が株式企業と共に相互組織も亦頗る隆昌なる狀況を呈せるを見れば、每年一定の拂込金をなして一定期間の後に豫定の金額を受取る生命保險が相互組織を以つても成効せるが如く、同樣に每年一定の拂込金をなして一定期間後に豫定の金額を受取り、若くは或る家屋を完全に自己の所有となし得る相互組織の建築組合が成効せぬ理由はない。殊に生命保險にありては契約期間中に於いては被保險者は單に危險保險なる抽象的の利益を受くるに過ぎないが、建築組合にありては借主は拂戾期間中最初より獲得せる家屋を

所有使用し得るといふ具體的の利益があり、又投資會員は生命保險料よりは高き利子を得せしめるゝ利益がある。但し建築組合と生命保險とは加入者の目的が異る故、前者が後者の競爭者となるわけではない。たゞ建築組合には忠實なる管理者と、數理的智識を有する經營者を必要とする故に我國内に多數迅速に普及せしむるには困難なる事情があるかも知れぬ。又一方建築會社は之を純然たる營利事業として自然に放任する場合は資本家の收益採算のために成立困難となり、或ひはたとへ成立するも收益主眼のために其賃貸料は個人の供給する家屋の賃貸料に比して必しも低からず、或ひは又粗製の住宅を濫造する等住宅問題の理想的解決より遠ざかる憂もある。是等の點を考ふれば余のいふ如く建築會社には公共的の性質を帶びしめ且つ之に特權を與へて近世的に改良せられたる小住宅の建築を獎勵すると同時に營利企業の弊害を除去するの必要があると思ふ。

要するに建築組合、建築會社は共に、將來日本に於いて、堅實なる發達と普及をなさしむる必要ある故、政府及び公共團體は適當なる立法によつて、又充分なる財政的の援助によつて之を誘掖、助長することに努めねばならぬ。

七、國家の強制貯蓄による住宅改良

之は獨逸人「ビーパーシュタイン」氏の提案する所であつて、獨逸國が國家的強制保險制度を行ひたる如く、更に新に男女の少年勞働者に對して國家的の強制貯蓄制度を施行し、之によつて集積せる資金を全部住宅改良のみに利用せむとするものである。此主張の前提として彼が住宅改良問題について論ずる所に暫らく耳を傾けよう。

人類の個性を向上せしめ各個人の有する天賦を社會進化のために教養し利用せむと欲すれば、先づ人類の物質的生活を保障せねばならぬ。若し饑餓困窮のために貴き天賦を與へられたる者が、一生の苦鬪を續けねばならぬときは、平均能力の多數者は生存の貴き目的に協はず、空しく其身を終らねばならぬ。此故に下級社會の物質的生活を保障し、漸次に

彼等の生存狀態を改善し、其地位の向上を可能ならしむることにはあらゆる努力を盡さねばならぬ。

國家が果して斯の如き理想に基く諸問題を解決するの任務を有するものなるか又其の資格を備ふるや否やといふ疑問は、獨逸國の例に倣ひて殆ど總ての文明國が社會保險を行ひて經濟的弱者に對する組織的救濟の第一步を始めてより、事實上解決せられたのである。

現在解決せねばならぬ大なる社會問題中第一位にあるものは住宅問題と失業者救濟とである。之に關して滿足なる解決を見出すことは吾々全體の文明的向上にとつて看過すべからざる重要なることである。文明とは精神的、物質的の人類の向上を意味する、鑛山や、工場や、激しい勞働や、家庭に於ける生活が、狹い濕潤な不健康な場所に於いて營まれてをる有樣では、何とて文明の向上を考へることが出來ようか。此故に住宅問題について大切なことは「社會的」といふことであつて良好なる住宅の供給によつて凡ての人の生活を改善せむとするのである。肺結核や飲酒征伐、乳兒死亡率の減少、出產率の增力、犯罪の豫防等吾人の從來長く奮鬪してしかも効果の尠なかつた問題の解決も、住居狀態の徹底的の改善によつてすべて大いに促進されるに相違ない。都市に於いては住宅問題の解決は一層急を要する。過度の密集生活から生ずる、種々の損害に加へて、自然に離れ、友も無く、家庭も無い者が多い。又都市の兒童の身體や性質の惡化を豫防するためには乳兒保護や、結核療養所や、託兒所や、小兒保育所や、遊戲場や、勞働者公園やなどのようなものは皆姑息の手段に過ぎない。いろ／＼の社會的の害惡を根底より除去するためには、現在の窮迫と損害が大きいだけに其對抗手段も亦大企模徹底的のものでなければならぬ。

千九百十二年獨逸帝國議會は住宅問題解決のために全會一致を以つて聯合各國政府に對して帝國住宅法制定の希望を傳へ、普魯西政府は千九百十三年正月住宅法の草案を公表した。之によつて種々の點において從來唱へられたる住宅改

良問題の解決が出來るであらうが、之のみにては未だ根本的の害惡を防止することは出來ない。即ち法外に高價なる賃貸料をいかにすべきかといふ問題が存在する。現在は收入の少きに從つて賃貸料の負擔が比較的に益々重くなるといふ法則が支配してをる。こんな鬼のような、殘酷な法則は速に打破せねばならぬ。吾々は自己の努力を盡し、充分に勞働する凡ての國民が其收入に適應する賃借料を以つて、漸次に人間らしい、行屆いた、健康的な住宅を獲得し得る方法を發見することに努力せねばならぬ。之を夢想的なりと思惟するものは、人類の進歩に疑惑を懐く者である。然ながら國家の權力を以つて收入状態に重大なる影響を與ふることは出來ない故に、第二の方法を取るより外に途はない、即ち家屋賃貸料を直接又は間接の方法を以つて低下せしめねばならぬ。普魯西の住宅法草案にも地價の制限、建築費の低下等によつて賃貸料の低下を圖らむとしてをるが其効果は尠少に過ぎない。玆に於いて吾々は別に根本的の方法を講ずるの必要がある。

「ビーバーシュタイン」氏は以上の論據によつて最初に述べたる如く帝國の法律を以つて少年勞働者に貯蓄を強制し、之によつて集積せる資金に對して更に公共團體が大規模に資金の援助をなし又出來得る限り個人資本を吸收して合せて住宅問題の解決に必要なる金額を調達せむとするのである。

氏は疾病、災害、老廢等に對する強制的社會保險の存在すると同じく、住宅改良に關しても、國家が社會共同の利益のために個人の自由に制限を加へて強制的手段を取ることを正當なりとし、殊に年々増加する人口に備ふるために國家が良好なる住宅の供給を増加する方法を講ずる必要ありとしてをる。其の少年に對して貯蓄を強制する理由は、（一）少年に對して自己並に社會に對する責任觀念を養成する手段となること、（二）之を以つて住宅改良の手段に利用し、貯蓄者並びに社會が其利益を受け得ること、（三）現在の賃銀制度は勞力の賣買であつて家族の生活上の必要を顧慮しないも

のである。從つて少年も家庭の維持者も同一の待遇に於いて賃銀を受くるものなる故少年時代に於いて貯蓄をなして老後の負擔に對する平衡を取り置くこと、(四)未成年者が兩親と等しき賃銀を得て無責任なるまゝに自由に之を費消することは浪費に導くのみならず自己を墮落せしむる虞あること等である。

斯の如き趣意に基いて行ふ強制貯蓄をいかなる方法を以つて行ふべきかといふに貯蓄者の範圍、貯蓄の年限、拂込金額等種々詳細なる規定を必要とするのであるが、今其の最簡單なる要領のみを述べる。

(一)貯蓄者の範圍。總ての賃銀勞働者を例外なく強制貯蓄に加入せしむること、大體に於いて貯蓄義務者の範圍は老廢保險に加入すべきものゝ範圍と等しくすること。

(二)貯蓄の年限。義務教育を終了して營利生活に入る時より成年即ち徴兵適齢年限に達したる時、若くは結婚の時迄、換言すれば通常十四歲より二十一歲に至る七ケ年間。但便宜のため成年後も貯蓄金額が百を以つて除し得る數に至るまで繼續して貯蓄すること。

(三)積立金額。收入金額の一割を下らざること、但例外を認むることあるべし。

強制貯蓄案の要領は右のようであるが、少年が生活上の負擔少き時期に於いて收入の一割を貯蓄することは、家族を有する勞働者が重き生活上の負擔を有することから考へれば、固より何等の苦痛を感ぜぬことであつて、之によつて彼等のために住宅改良の資金が作られることゝなれば其利益はむしろ頗る大なるものといはねばならぬ。

次に貯蓄金の取扱方法及運用方法は左の如き要領によつて之を行はむとするのである。

(一)貯蓄金は貯蓄者の居住する市町村に於いて之を集金し、且つ管理すること。大なる都市は獨立に住宅改良のため一區域をなすことを得れども、町村等は相合して住宅改良のため特別の團體を作るべきこと。此團體は各貯蓄者に對

して其貯蓄債權に對する保證を與へ且つ貯蓄金を其區域内に於ける小資力者の住宅狀態の改良のために利用するの方法を講ずる義務を負擔す。此團體を假りに保證組合と名付ける。

(二)貯蓄金は傭主が差引き保留し、老廢保險の場合と同じく、各保證組合が特に其區域に對して發行する印紙を買求めて之を一の通帳に貼附し之を勞働者に交付するのである。一年の期間の後に此貯蓄通帳を保證組合若くは其委託を受けたる貯蓄金庫に呈示して貯蓄債權と利子の記入を受けるのである。斯くの如くして每年同樣に貯蓄通帳に貯蓄額を記入し、貯蓄期限が滿了し且つ貯蓄金額が百を以つて除し得べき數に達したるときに於いて貯蓄義務は終了するのである。

(三)貯蓄者が住居地を變更したるときは其債權を新住居地の保證組合に振替へ記入す。

(四)保證組合は每年新に增加する貯蓄額の二倍を小資力階級の住宅改良の目的のために貸付け若くは、自己の所有地の建築準備工事のために利用するの義務を有す。此金額は丁度當該保證組合の住宅需要程度に比例するものである。

(五)貯蓄年限滿了者の貯蓄債權に對する利子は、住宅改良の目的のみに利用することを得る。其の拂出しは保證組合の金庫より直接に家主に對して之をなす。

(六)貯蓄金は住宅問題の改善のためにのみ之を利用することを得る、故に貯蓄年限滿了後と雖其權利者が之を家屋購入のために使用せむとする場合に於いてのみ之を拂出すことを得る。

(七)各保證組合が貯蓄金並びに組合の提供する資金に依つて、住宅改良を行ふべき方法は、當該保證組合が帝國住宅局の監督の下に、帝國住宅法の一般規定並びに聯合各國の特別規定の範圍に於いて之を決定するのである。其際貯蓄者の代表者の參加を廣く承認せねばならぬ。一般的には貯蓄者と保證組合と、個人資本家とを合して一團となり混合

的建築企業の設立に努むることが適當である。

最後は「ビーバーシュタイン」氏が强制貯蓄金運用の方法として唱道する貯蓄者と、保證組合と資本家との混合的企業組織の要點を紹介して彼の提案の說明を終ることとする。

(一)、國家的强制貯蓄制度を施行すると同時に、人口四萬以上の都市に混合的企業組織を以つて建築株式會社を設立すること。

(二)、此建築會社の資本金は當該市に於いて豫想し得べき一年間の貯蓄金額の十五倍とし(一萬馬克を單位とす)、五年以内に貯蓄者、市、及び資本家が各其三分の一を拂込むものとす。其後五年目毎に從來の貯蓄金年額の平均額の十五倍の增資をなすものとす。

(三)、建築會社の株式は左の三種とす。

A、貯蓄者の記名株式、　一株額面百馬克

B、資本家の無記名株式、　一株額面千馬克

C、市の持株。　一株額面千馬克

(四)、市有株式に對しては市が此株式購入のために借入れたる公債の利子に相當する率の配當を繼續して與ふ。貯蓄者のA株式に對しては、市が長期貸付に對する一般金利の率まで配當を保證す。

(五)、市は建築會社の重役會の承認を經て金錢の代りに土地を以て拂込みをなすことを得。之に對して市は其土地の原價格に相當するC株式を受領す。土地の一般價格が原價以上となるときは市は此增價格に對してD株式を受領し、此株式はA及びB株式に對して六分の配當ありたる後は之と共に配當に參加することを得。

(六)、市は建築に適する自己の所有地を先づ建築會社に提供することなくして他に賣却することを得ず、

(七)、建築會社は營利の目的を以つて土地の賣買をなすことを得ず。建築會社が土地を賣却するときは市が優先買權を有す。

(八)、市は建築會社の請求により無償若くは共同負擔にて事務所並びに各種の公吏の勤務を供與す。

(九)、建築會社の株主總會及び重役會には國家の監督官が出席、投票權を有す。

右の外此の混合式、若くは半官的建築會社の特長、作用等については種々述ぶべきこともあるが、前に建築組合について煩雜な數字を並べて讀む人を苦め、今又堅苦しい法律めいた説明を續けて再度の迷惑をかけることを好まぬ故、これ最後の一言を加へて此節を終る。

日本では零細なる資金の集合である郵便貯金の大部分を支那の借款や其他妙な所に運用してをる。之に反して獨逸では國家の強制貯蓄を行つてまでも住宅の改良を圖らむと努めてをる。是等の國情の差違を見れば日本人の住宅が年毎に退化して、元來マッチ箱のような家が近頃では輸出マッチのように一層劣悪にならむとしてをるに反して、獨逸人の住宅が年毎に改善されて近世的の建築と設備の標本を見るように理想化しつゝある面白い事實の對照の由來を容易に悟ることが出來るであらう。

(八) 英國における住宅改良運動

英國に於いては建築組合の發達以前は産業組合、共濟組合等が不動産擔保の融通をなしてをつたが、建築組合が非常な發達を遂げて後も是等の組合は此方面の金融に相當の勢力を有し、殊に共濟組合は好むで建築組合式の方法にて不動産擔保にて會員に貸付をなし、其結果組合の投資物は最初は主として公債であつたが後には不動産に重きを置くに至

千八百九十九年頃には共濟組合の不動産擔保融通額は一億七千萬圓に上つてをつて、建築組合に對して一種の競爭者のような形になつてをつた。英國に於いては是等の組合が建築に對する金融をなしたのみならず株式組織の建築會社もあつて是等凡ての機關が相俟つて大いに英國の住宅建築を發達せしめたのである。加之千八百九十九年には小住宅獲得法が制定せられて、地方官廳は此法に基いて自己の現住する四千圓以下の家屋を購入せむとする者に對して三十年以内の償還年限にて三千圓を限度として資金を貸付くるの權限を與へられた。此外英國に於いては勞働者住宅に關しては既に千八百九十年に勞働者住宅法が制定せられ、千八百九十四年、千九百年、千九百〇三年等に屢々改正せられて千九百〇九年には彼の住宅及び都市計畫法が制定せらるゝに至り、英國の勞働者住宅は此三十年の間に著しく改善せらるゝことを得たのである。斯の如く英國に於ける住宅建築、殊に小住宅並に勞働者住宅の建築は、百餘年以前よりの建築に關する特殊組織の金融機關の發達と、數十年來の政府の立法上の盡力と、地方團體の財政的援助とによつて著しき進化を遂げ來つたのであるが、今回の歐洲大戰爭の影響により最近又住宅問題が熱心に論議せらるゝに至つたようである。

今回の大戰爭の影響として戰時中材料騰貴、勞力不足等の原因によつて平和的需要物である一般住宅建築及改修の等閑に付せられたることは交戰國一般の實狀である。大陸出征者の數の莫大であつた英國では戰時中は住宅の不足を感ずるほどではなかつたであらうが、戰爭終了後動員解除と共に多數の兵士が本國に歸來すると同時に忽ちに住宅の不足、住宅の不良、賃貸料の騰貴等に對する不平の聲の生ずることは免れ難い事情であつた。「ロイド、ジョージ」氏は之に對應するために休戰後直ちに其政綱の一として勞働者住宅の改良問題を加へてをる。其後英國の政府及議會に於いて、住宅問題に關して種々の研究議論が行はれたが、最近の政府報告書に依れば英國は今後三年間に五十萬戸の住宅を建築するの必要あり、一戸の建築費を五千圓とすれば向ふ三年間に二十五億圓の資金を要し、一戸七千圓とすれば三十五億圓の資金

を要するといふことである。英國に於いては住宅法案が今將に議會に提出せられんとしてをるが、特に此の國の政府方面に關して充分の理解を得むがために、改造大臣は委員を任命し、過去及び將來の一般的住宅政策に關する報告をなさしめてをるが其經過は頗る興味がある。委員會に於ける主たる結論は、中央政府に於いて認定せる住宅建築時期には補助金を支給すると、適當なる場合には政府が建築組合の資金を補充すると、但組合が自己の資金によつて貸付をなす場合に限り組合の貸付額二磅毎に政府が一磅を組合に預入して之に資金を給すると、地方公共團體は認定されたる建築組合の不動產抵當貸付の償還を保證すると等である。なほ最近注目すべき提案は市營住宅銀行案である。即ち大都市は勞働者階級の小貯蓄を吸收して、住宅建築の資金を供給すべき住宅銀行を設立するの權限を有する。此市營住宅銀行は凡ての預金者に對して、預金者が市內にある五千圓以下の家屋を自ら所有する目的を以つて購入せむとする場合に限り、不動產を擔保として貸付けをなすものである。其他最近英國政府が勞働者住宅の改良を圖らむがために炭礦業者をして石炭の產額一噸について一片の積立をなさしめ一年一千萬磅の住宅改良資金を得むとするが如きも亦注目に値する事項である。

（九）現在の日本の問題

住宅改良、家屋賃貸料の低下、家屋購入の金融等に關して從來殆何等の注意を拂はず、住宅建築の企業組織についても何等の考慮をなさざりし我國に於いて、住宅の粗造、危險、不衞生、高價、供給不足賃貸料の不廉等の好ましからざる狀態が加はり行くことは當然ではあるが、斯の如きことは經濟問題としてのみならず社會問題として頗る寒心すべきことである。住宅問題は單に經濟上の問題としてのみならず社會問題として、國民生活の幸福と人類の文明的向上に影響する最重要なる問題として其解決方法を考へねばならぬ。更に我國に於いては住宅のみならず一般家屋の建築様式及建築材料を如何に定むべきかといふ建築上の根本問題も速に解決せられねばならぬ。此事の決定如何は將來の國民の生活上に於い

てあらゆる方面にたいて種々の大變動を生ぜしむるものである。歐米諸國は多年の考案と努力の結果現在の近世的住宅を得たのである。しかもなほ近來諸國に於いて住宅改良の呼號は益々大ならむとしてをる。我國の當局も亦立法上、行政上住宅問題に對して手を染むべき事項が頗る多きを感ずることであらう。建築組合、建築會社、住宅等に關する立法政府及び公共團體の財政上の援助、郵便貯金運用委員の設置、住宅委員の設置其他考ふべきこと、行ふべきこと數多きことであらう。住宅委員は勿論一般的調査をなすものであらうが、陸軍省、宮内省、三菱、大藏省の代表者其他數名の人を交へた特殊の住宅委員でも出來上れば東京市の住宅問題の一面のみは割合に容易に解決が出來そうに思はれる。余が本誌の本年正月號に試みに掲げた東京市地下鐵道線路中高田線なるものは陸軍戸山ケ原を將來の東京市郊外住宅地と豫定しての案である。陸軍が無償で之を市に交附するとに強て反對ならば低廉なる價格にて之を市に拂下げればよい、此外市内に於る廣漠たる陸軍用地にも同樣の處分をしてもよいものが多々ある。市が是等の土地を出資として株式の一部を引受ければ公共的建築會社の成立は甚容易である。住宅問題の解決と都市の土地政策とは離るべからざる關係にあるものである。過度に大なる官有地の存在及資本家の土地投機によつて、市内に間地若くは非都市的土地の多數に存在するとは都市の財政上に累を及すのみならず、種々の點に於いて都市の組織的近世化を妨げ、殊に住宅問題の解決に對しては大なる障害をなすものである。是等の土地は出來得る限り市有となして合理的、永久的の利用策を計畫し、又適當なる部分は住宅問題の解決のために計畫的の準備をなして住宅建設の奬勵をなさせねばならぬ。Cujus est solum ejus est usque ad coelum 即ち The man to whom the soil belongs takes everything that is put upon it even to the height of heaven itself. といふ諺がある。よく土地所有者の偉大なる利益を表示してをるではないか。都市の土地公有は住宅問題の解決を助くるのみならず都市財政の永久的根底を作るものである。

要するに住宅問題は、直接には建築企業組織の奬勵、政府の建築、住宅並びに住宅建築及び金融企業組織に關する立法、政府並びに公共團體の財政的及行政的の援助等、又間接には都市の土地政策の樹立、地域制限、交通系統の確立等、すべて是等の實行が相竢つて始めて理想的の解決を見出し得るのである。(完)

ベルトランド・ラッセルの立場

中澤臨川

一

ベルトランド・ラッセルの現在の立場を說明する爲めには、我等は彼の前半生――この言葉は、よく世間でトルストイの生涯を前半生、後半生と二つに分つやうな意味で用ゐたのであるが、かやうな差別的の言ひかたをするに就ての理由は後に明かにする――の經歷から驗べてかゝらねばならぬ。

ラッセルは英國に於ける名門の出で、若くしてケンブリッヂ大學の教授となつた。彼の最初の專門は數學であつたが、この方面では同學のホワイトヘッドと協力して、非常に重要な研究結果を公けにしてゐる。其後彼は數學から論理學へ進んだ。彼の論理學は、現存せる獨逸の數學者ゲオルグ・カントルの創見に基礎を置いたもので、數學の根本命題を基礎として一の新しい論理學を組立て、アリストートル以後最近迄二千年間殆んど何等の進歩をも見ないで來た斯學を、根本から改造した大發見である。ポアンカレイをして「古い論理は死んだ」と歎稱せしめた其功績の大部分は、主として彼と佛蘭西のヘルバルトが分つべきものである。彼が最近の著書に於て、「わたくしはつい先頃まで、世界中の何人も教へることのできない一の新科學を教授してゐた」と、何心なく自分の誇を告白してゐるのは、確かに彼の獨創にかゝる論理學を指してゐるのであらう。

ラッセルの論理學は、次で彼の新哲學を導いた。彼自らは之に「論理的原子論」(logical atomism)と命名してゐるが、世間ではおもに「新實在論」の名のもとに、ハーバード大學のペリイ一派の哲學と同系にくるめてゐる。新實在論は、その名の示す如く、古來の唯心論に反對して立つたもので、同時に一面にはカント哲學の知識論を正誤し、更に他の一面にはジエームスやベルグソンの生命主義(バイタリズム)に抗議を挾むところに、その謂る「新」の字の意義を見出すのである

ラッセルの哲學は至て難解であつて、恐らく專門の哲學者でさへ諒得に苦しむであらうと思はれる點が多い。要するに、彼の

『哲學の諸問題』や『哲學に於ける科學的方法』やは、講壇哲學者にも生命派の驍將にも一の難關であらう。彼等は彼の論敵ウィルドン・カールと與に「憤りの雜つた驚きの感情」を以て彼に對するであらう。然し彼は終始一貫して、透明でそして大膽で、飽くまで自己の信念に忠實であつた。サンタヤナの指摘した如く彼の說はよく變つた。然しその變化は自然にそして自省的であつた。彼は人間がどれほど眞理を恐れるものであり、或る場合には死にも增して之を忌避するといふことを知つてゐた。彼はベルクソンが「自働作用は敵である」と言つたと同じ意味で因習や惰性の恐るべきことを痛感してゐた。彼は言つた、「數學の絕對境にさへ矢張一種の因習が伴ふ」と。また彼は「哲學に於ける科學的方法」の中で次のやうに言つてゐる。「一個の科學的哲學者となるためには或る特種の心的訓練が必要だ。それには第一に哲學的眞理を知らうとする欲望が無ければならぬ、而してこの欲望はそれに對する滿足を見出す望みのなささうな幾年かを經ても猶充分強く生き殘つてゐるものでなければならぬ。哲學的眞理の知得に對する斯樣な欲望は甚だ稀である—それが純なる形では、哲學者の仲間に於てさへ缺けてゐる」と、彼は或る哲學者に於ては知らうとする欲望が考へる欲望に代つてゐるのを見た、又或る哲學者に於てはそれが信ずる欲望といふ安價な快樂に代つてゐるのを見た、又他の哲學者に於てはそれが「體系製造家の虛榮心」と變じたのを發見した。彼はつく〴〵と眞理への道の難いことを知り且つ戒めたのである。「因習の境地を破る爲めには、我等は古慣をも、理性をも、道德をも、要するにあらゆる物を疑ふべく我等の最善を致さねばならぬ」。

ラッセルの哲學はベルグソンのそれと反對の極に立つてゐるが、その態度に於ては同一であつた。二人ともに哲學的良心が透明であり、知的欲望が熾烈であり、二人ともに因習と體系とを恐れることと蛇蝎の如きものがあり、二人ともに信ずるところに大膽で、講壇哲學者のひねくれた近眼から見れば、思ひきり荒削りの說を表明して悔いなんだ。

「偉大なる哲學とは批難のない哲學ではない。それは恐れのない哲學である。

「偉大なる哲學とは一の口授ではない。最偉大なる哲學とは誤謬のないそれではない。

「偉大なる哲學とはそれに反對すべき何物をも持たぬ哲學ではない。それは何物かを言表した哲學である。

「それは一つの瑕瑾をも有たない哲學ではない。それは一つの間隙をも有たない哲學でもない。それは禮儀を有つた哲學である。

「眞の哲學者は彼の敵と對してゐるのではないことを知つてゐる。然し彼は常に偉きな一つの神秘な實在に面してゐるのだといふことを知つてゐる。」（シャール・ベギイ）

ラッセルの冷靜な數理的思索の奥に、かうした情熱を認めえない者は、遂に彼を認めえない者である。彼が眞理に對するハンブルな敬仰とそれから起る毅然たる態度とは、後に世界大戰といふ非常時に際會して彼を一個の志士化した。彼のこの態度は終始一貫して、彼の人と成りの根底を築くものである。

ラッセルの哲學に就ては、私は四五年前に拙著「舊き文明より新しき文明へ」の中で紹介したことがあるので、玆には簡單にそれを説明して置から。

彼はバークレイやライブニッツの唯心論に反對して、物的世界の存在を承認する。それと同時にまた心の存在をも承認する。更に彼はカントルの發見にかゝる「具體的無限」の觀念を藉りて、カントの時間、空間、及び因果律に關する先天的知識の誤謬を指摘し、是等のものは單に心の自律した主觀的觀念ではなくして、實在界の眞の特性であり、かやうな先天的知識と實在との間にはカントの言ふ如き區別がないことを闡明した。彼に從へば、數學や論理學の對象とする世界は、實在に於ける或る種類の世界で、「物」とも「心」とも違つた一つの實體の世界を想はせる。ラッセルはかやうな實在に於けて「普遍」（universals）と云つた。而して所謂普遍世界に於ける最も重要な特性即ち「關係」を取扱ふものが logic の知識である。

ラッセルの哲學は多元的である。彼は「物」及び「心」の獨立存在を承認すると同時に、更にも一つの獨立した實在「普遍」を假設立てゝゐる。それは取も直さずプラトンの「觀念」又は「形」と同一であるが、彼の言ふところによれば、是等の言葉は永く言ひ古るされ、誤り傳へられた結果、觀念とは天上に在る或る物のやうに思ひ做され、それにいろいろ神秘的幻想が附着してゐるから、寧ろこれを「普遍」といふ新しい名で呼ぶ方が便利である。「普遍」の一重要な特質は關係の世界である。それは物とも心とも全く獨立した實在で、我等は先天的知識によつて之を理解することができるが然し之を創造することは出來ない。關係の世界は一の完體としての實在で、我等の心とは獨立に存在する。換言すればそれは物的でもなく、心的でもなく而も確かに或物である。

我等は玆に常に變化して時間の影響をうけるものを指して「存在物」（existence）と稱ぶことが便宜である。すると、思想、感

精などに現はれる「心」や、外界の「物」やは、皆な常に轉變するものであるから、是等は存在する。が、「普遍」はこの意味では存在しない。それは寧ろ潜在(to subsist)する。或はそれは「存在物」に對して「本在物」(being)であるといへる。而して玆に言ふ本在とは時を超越するといふ意味である。思ふに、かやうな本在界の獨立存在に對して疑を挾むやうになつたのは近世哲學の一大傾向である。殊にカントは因習的な無限の觀念に伴ふ矛盾を力說して、この傾向を增長させた、とラッセルは言つてゐる。從て彼の哲學は我等の理智を唯心論的の又はカント的の主觀性から解放して、一の高い實在へ導くことを任務としたのである。

次にラッセルの哲學をベルグソンのそれと比較するならば、この二つは何れの方面から見ても鮮やかな對照をなしてゐる。然も二つともが古來の哲學界の因習を破つて新しい天地を開拓してゐるのである。前者が「本在」または「普遍」の世界を力說するに反して後者は「生命」の世界を樹立しやうとする。前者は不變永久の實在を對象とするのに對して、後者は流轉または持續の實在を對象とする。前者の世界をば空間が支配し、後者の世界をば時間が支配する。また方法論上から言へば、ベルグソンの哲學を根本的經驗說と稱ぶならば、ラッセルの哲學は根本的合理說と謂ふことができる。然しラッセルにしてが、流轉世界の實在を拒むわけではないが、「かやうに變り易く、判然とした境界もなく、明瞭な設計も配置もない」世界は、「哲學者、論理學者、その他生命よりは完全を愛する凡ての人」を喜ばせるわけにいかない。彼の擇ぶ世界は「不變で、堅固で、正確な」本在の世界であつた。彼は諧謔的にベルグソンの哲學を評して、かう言つてゐる。「若し彼の哲學が勝利を得た曉には、凡ての議論は已み、我等の理智に直觀の高まつた海の上で浮かし付けられるであらう。然しかやうな終局の來るまでは理知の反抗は續くであらう」と。

ラッセルは『哲學に於ける科學的方法』の中で、現代の哲學を三つに大別してゐる。その第一は古典派哲學で、希臘以來の傳統を繼ぎ、カント及ヘーゲルの流を汲んだもので、沒批判的にアリストートルの論理學を受け入れてゐることゝ、a priori の知識を盲信することと體系を愛することとが、この派の特色である。第二は「進化主義」とも稱ふべきもので、ダーウヰンから起り、スペンサアの哲學を經て、それが今日ずつと廣く深く耕されたものがジエームスやベルグソンの思想である。然し生物學は唯一の科學ではなく、また凡ての他の科學の模範たるべき科學でもない。地球の表面に於ける存在の一小部分が關みする變化の法則は、よしや我等にとつて實際的必要のものであら

うしても、それが哲學者の取扱ふ唯一の對象ではない。哲學はもつと一般的に凡ての存在に對して公平な眼を持たねばならない。「眞の科學的哲學はもつと骨の折れる、もつと高踏的の、より俗氣の少ない、そして之れに到達するにはもつときびしい訓練を要する或物である」。然るに進化主義の動機は眞の知識欲よりも寧ろ實行欲から起つてゐて、その目的は道德と幸福とにある。

上述の如き古典派哲學と進化主義との兩方に反對して立つたものが、ラッセルの分析による第三の哲學で、彼自らがその一人の主張者であるところの「新實在論」である。「哲學の目的は、この世界の理論的理解であつて、それは動物や、野蠻人や、多數の文明人にさへ、餘り實踐的必要のない事柄である。………哲學は非常に精微な、非常に文明的な仕事であるので、その成功には本能的生活からの或る解放を要し、時としては凡ての世間的希望と恐怖とに超越することさへ必要である」。然らばかやうな哲學はいかなる道に由て達せられるかといふに、彼によれば、それは論理的分析法によつて「科學的」に進まねばならない。古來の哲學者を悩した數學的無限は幸ひにしてカントルの努力によつて解かれたが、「知覺的物體を與件として組立てられた數學的構成により、問題の積極的、詳細的解決をなすには、數學的論理學の發達によるほかはない。」

二

わたくしはラッセルの哲學の大要を説いたが、それは彼の前半生の心的傾向と對世間的態度とを窺ふに必要だからである。

以上の說明から讀者の得らるゝ印象は、疑もなく頭の良い眞面目な學者としての一個の人間の面影であるが、然かしその餘りに超世間的で、いかにも實社會といふものを無視したやうな、惡く言へば獨善的の態度が氣に障らないでもなからう。わたくしのラッセルから得た最初の印象は矢張さうであつた。ウイルドン・カールではないが、「憤りの雜つた驚きの感情」が適切にわたくしにも湧いた。何人もさうと見へて、五六年前に私が或る雜誌で彼の哲學的態度を斷片的に紹介したときにも、その讀者からいろ〱な反抗の聲を聽いた。

ラッセル家といへば英國でも最も古い名門の一つである。その豪族の流れを汲んだ彼が、世の辛慘の味一つ知らず、大學では數學といふ實社會と緣遠い學問を修め、頭腦の優れてゐるところから年少大學の教授に擧げられそれより約十餘年全く思索的生活にのみ耽つてゐたのであるから、境遇から言つても、專門學から言つても、多少は傲慢になり、高踏的になつたのは已むを得ないことであらう。然し彼の本來の質は非常に良いものであり、稀に天の賦へる才能をさへ有してゐたのである。懐い

同情と、徹底した理解と、その中から生れる愛と勇氣と」が、彼の内部で「時」を待つてゐた。で、それ等の表現されたものが即ち彼の後半生であつた。

然し彼の尊い人格的潜力は、一種の情熱となつて、彼の冷靜な哲學的思索の中にも現はれずに措かなんだ。それは彼の一生を貫く偉きな力であつた。

スピノザの萬有神に對する智的愛が一の狂信であつた如く、カントの「絶對命令」が彼の至上な情緒であつた如く、ラッセルの「普遍」世界は彼の殿堂であり、凡ての知慧と幸福との源であつた。彼はそれを認める爲めには「凡ての世間的希望と恐怖と」を超脱することとさへ辭せなんだ。彼にとつてはカントルの數學的無限は論理的必然であるばかりでなく、心理的にも體得されてゐた。彼は「二十二は四」の眞理を「現存する物も可能の物も、あらゆる物が從はなければならない一の必然である」と感じた。數學は彼にとつて一の美的滿足であつた。彼の論文『自由人の信仰』や『數學の研究』やは、理智に對する至純の禮讃であつた。彼は言つた、「まさしく數學は唯だ眞理であるばかりでなく、至上の美――彫刻のそれのやうな冷たく嚴そかな美――を持つてゐる。喜悅、昇天(エクザルテーション)の眞精神、即ち最も高い優越の度の試金石なる人間以上であるといふ感情は、詩に於ける如く數學に於ても亦確かに見出される。………多數の人にとつては、この現實の世界は理想と可能との間の斷えざる妥協にとゞまつてゐる。然し純粹理性の世界には妥協もなく、實用的制限もなく凡ての偉大な事業の源なる完全に對する熱い憧憬を立派に含んでゐるところの創造的活力に對する障害もない。世間的情熱からかけ離れ、憐むべき自然の些事からも遠ざかり乍ら、我等の概念作用は次第に一の規則正しい宇宙を作つた。この宇宙では、純粹思想が故郷に於ての如く住むことができ、また我等の尊い衝動が現實世界の恐ろしい配所から逃れることができる」と。それのみならず、數學は「繪や音樂のやうに物々しい裝飾がなく、もつと崇だかく、淨く、唯だ最偉の藝術のみが達しうる嚴そかな完全」を有して居り、「そが純なる形に於て最も普遍であるところの物を示さうとする」と。

是等の言葉から、讀者はメロの『ウィイナス』に眺め入りつゝある敬虔なロダンの面影を想ひ浮べなんだか。我等はラッセルのかうした態度に眞摯の祈禱を聽かなんだか。「理解することよ、觀ることとよ、眞に觀ることとよ!、理解することとよ!、それは――死を免れることである」とロダンの言つた法悅鄕は、「觀る」といふ字を「認める」といふ字に改めることによつて、直ちにラッセルの法悅鄕である。されば哲學は彼の宗教でもあつた

彼は言つた。「私的幸福の爭鬪を捨て、一時的欲望の熱を冷まし、永遠の事物に向つて情熱を燃やすこと――これが解放である、これが自由人の信仰である」と。

ラッセルは所謂「實際家」の偏見を嫌つた。彼等は肉體の食物をば過重視するが、精神の食物には全く無頓着である。然るに「若し萬人がよき生活を送るやうになり、貧困と病氣とがその最小限まで驅逐されたとしても、そこに價値ある社會を作り出すには猶ほ爲さるべき許多の仕事が餘されてゐる。現に今日の社會に於てさへ精神の財産は少くとも肉體の財産と同等に必要である」。

上の言葉は『哲學の諸問題』の中から引用したものであるが、かうした彼の態度は後半生に至つても變らなんだ。『なぜ人間は戰ふか』の中で彼は次のやうに言つてゐる。「この世界は生命の向上を補ける一の哲學又は一の宗教を要する。然し生命を向上させる爲めには、單なる生命よりは別な或物を尊重する必要がある。たゞ生命の爲めに捧げられた生命は眞の人間的價値を有しない一の動物であつて、凡ては空虚であるといふ感情と倦怠とから不斷に人間を救ふわけにいかない。生命が充分にフューマンである爲めには、それは人生の外に立つ如くみえる或る目的即ち神とか眞理とか美とかいふやうな非人格的で超人間的な或る目的に使へなければならない。最もよく生命を向上させる人達は彼等自らの目的の爲めに生命を使はぬ。彼等は寧ろ一の漸的權現とも見らるべきものを志す。即ち[illegible]敗と「時」の呑噬とから遠く離れて天上に住む如く想像される或物、を人間生活に取入れることを志す。かやうな外的世界との接觸は――よしそれが唯だ我等の想像の世界である場合でも――我等のその日〱の生活の闘爭と失敗とによつて全く打破ることのできない力と根本的な和とを我等に齎す、外的世界に對するかうした幸福な冥想は、スピノザが神の智的愛と稱んだところのものである。で、一度之を知つた者には、それは實に智慧の鍵である」と。

ラッセルの持つ貴い或る物を說明する爲めに費した上述の說明が、少しは讀者に役立つたであらうか。先づわたくし自身の感想から告白しよう。かやうに見て來るときに、私たちは既う彼の高踏的傲慢と見えた或る影をば打消すことか能きた。「憤りの雜つた驚きの感情」はおのづから除去された。私達は彼の智的法悅郷のどれだけ貴いものであるかを想像して、之を羨まないわけにはいかない。然し羨むと同時に、それが私達にはとても及ばない境地であることを想ふ。その境地がどれだけ人間離れのした遠い所であるかを想ふ。「それは實に智慧の鍵であるとラッ

セルが教へてくれても、之を志す勇氣を振り起すことがむづかしい。よしんばそれが何人にも行きうる境地であるとしてが、かやうに人間離れしたところへ行く氣になるか何うか、行くべきものであるか何うかが疑問である。わたくしの讀者はそれをどう考へられるか。要するにその境地に自ら高しとしつゝあるラッセルは、我等とはまだ親みが薄いといはなければならない。

之が前半生のラッセルである。然らば後半生のラッセルはどう變つたかといふに、一言でいへば、彼は雲の上に浮かしてゐた脚をしつかと大地に着けた。彼は理智の高踏郷から本能の地の上へ降りた。彼は最近の著書の中でかう言つてゐる。「智能生活は、その分離性のために、一人の人間を他の人間から内的に離さうとする傾向がある」。或は「智能生活は、本能と餘りに廣く離れてゐる、そして餘りに孤立的で、餘りに内的生長を缺いてゐる。その爲めにそれは本能のよき導きとなり、又は本能を精錬することができない」。高踏的な理智的愛は人間と人間との間の溝渠をふさぐ役には立たない。それは溝渠の此方から眺めてゐる非人格的同情で、本能の如く端的に他人の中に住む親密性をもたない。要するに理智には理智の役目があるが、たゞそれ自らだけでは物足りないと。

何がラッセルを變へたか、さういふ動機で彼の生涯は轉機を劃したか。どう彼は變つたのか。それを見よう。

三

先頃の歐洲戰爭は人類の文明に對する一つの大きな嵐であつた。その勃發と同時に、世界の人心は擧つて一種の獸的な狂熱に襲はれた。そして幾千年の試錬を誇とする文明といふもののいかに虛僞な「合せ物」であり、人心の何れだけ脆弱なものだかといふことを遺憾なく曝露した。殊に平生眞理の闡究を以てその職とし、世間でも許し自らもそれを誇としてゐたかに見える哲學者、思想家、僧侶、科學者の徒までが、殆んど一人殘らずこの狂熱の嵐に捲き込まれて、自國の立場を曲辯し、敵國の惡意を捏造し、互に罵詈誹謗を盡した恥知らずの態度は、滑稽にして悲慘な見物であつた。獨逸側ではハウプトマン、オイツケン、オストワルド、ヘッケル、トーマス・マンまでが總出で「文化」と軍國主義の辯護をすれば、聯合國側ではメーテルリンク、ベルグソン、ブートルオ、バレス、モーラス、ダヌンチオなどが獨逸の野心を攻撃し、業々しく自由とデモクラシイとの危機を叫ぶといふ有様であつた。然るにかやうな世界的狂熱の中に立つて、毅然として平生の所信を捲げず、飽くまで眞理と正義とに忠實であつた貴い例外を誰とかなす。わたくしは之に對して、佛蘭西ではロマン・ローラン、英國ではベルトランド・ラッセル――

この二人を挙げることが出来る。「我等はわが敵の道理を理解せねばならぬ、疑もなくわが敵は我等の如く熱心に眞面目である」「わが敵よ、汝の文化(クルチュル)が日耳曼の土地で最も強く最も肥えた人道の穀物を實らすならば、わが國には汝の人工的栽培物にまさる淨い花がある、それは自由といふ野の薫である」とローランが言ひ、「獨逸は秩序と學問と音樂とを愛する、その凡ては良き物である、然るに佛蘭西人と英國人はデモクラシイと自由とを愛する、これ等も亦良き物である」とラッセルが言ふ。「我等の文明はその拠て立つ柱を根の動かされる惧のないほど堅固なものであらうか、その一柱が折れるとき凡てが崩れることを知らないか」とローランが言ひ、「戰爭が永續する場合、獨逸、佛蘭西及英國の持つ凡ての良き理想は死ぬであらう、ペロポンネシアの戰によつてスパルタとアゼンスの理想が共倒れしたやうに。」とラッセルが言ふ。されば、「我等は國境を防護すると同時に我等の意識をも防護せねばならぬ、我等はその威を擅まゝにする狂熱と不正義と曖昧とから自防せねばならぬ、軍隊の任務は郷土を保護することにあり、思想家の任務は思想を保護することにある」とローランが言ひ、「學問に携はる者、眞理の探求を以て日々の職とする者のこの場合に於ける任務は、彼等が眞理の代辯者となり、自分側に於て虚僞であるものと敵側に於て眞(まこと)である者とを識別することであらねばならぬ」とラッセルが言ふ。「人衆を破るな、よく目の開いた稀な側は避りが早い、それに恐を入れるな、我等は憎悪してはならない」とローランが言ひ、「來るべき平和は低級による休憩であつてはならない、それは親密な和解であらねばならぬ」とラッセルが言ふ。

境遇の爲めに、その優れた才能の凡てを挙げて理性の神に捧げ、よそ眼には索然として冷静無趣味に見える一種の超越郷に半生を埋め、非虐に思索と情緒と敬仰と愛との一切の天地をはぐくみ育ててゐたラッセルにとつて、歐洲戰爭の破綻は實に一大衝撃であつた。正しく物を考へることに就て嚴しい良心の訓錬を經てゐた彼には、一様に狂亂の嵐の中に捲き込まれつゝある人間がいかにも不思議に見えた。殊に彼が平生友達とし、最も頼もしい文明の使徒と信じてゐた人達までが同じ狂亂の捕虜(とりこ)となつて、恥もなくその無智とイゴイズムとを暴露した態度は、少なからず彼を失望さした。十九世紀に於ける科學の進歩、それから得た自然の征服がどれだけ人類を驕傲にし、その爲めに何れだけ彼等が精神的用意を缺いたかといふことを彼は視た。近代文明の缺點は智識階級の間に於て理智のみが異常な發達をなし、本能と感との訓錬が全く顧みられなかつたといふことで、その爲めに人間が何れだけ皮肉になり、利己的主觀主義に陥つ

たかといふことを彼は觀た。精錬された思想と野蠻な本能とが並存する生活の恐ろしい矛盾を彼は觀た。かやうな人達の思想がいかに利己的であり、殘忍であり、破壞的であるかといふことを彼は眼前につきつけられた。今彼の前に現はれたものは獸性の發露、野蠻な殺生、權力の鬪爭、利己心の衝突、自己保護の哲學、恐怖の怨嗟に充ちた世界であつた。彼は之に對して何うすればよかつたか、どう爲ねばならなんだか。彼は正直ではあるが小賢こくそして小心な思想家（多くの大學教授がさうであつた）の如く、この場合に沈默を守ることが出來なんだ。そこで彼は評つた。彼は大膽な平和論者、公平な中立思想家として世に向つた。我等の想像する如く、果して世間は彼に對して寛大でありえなんだ。卑怯な罵言と強迫とが彼の身邊に蝟集した。その事は彼をしてより勇敢ならしめた。彼は憤怒した。彼の眞理に對する厚い信念が彼の好戰的良心を振ひ起させて、一個の平和な哲學者は見る〳〵一個の志士と變つた。彼は思想の力を信じた。最後の勝利が正しい思想の側にあることを疑はなんだ。「あなたは或る藝術家なり思想家なりを殺すことはできるが、然しあなたは彼の藝術なり思想なりを奪ふわけにはいかない」と彼は言つた。平和を說き、戰爭の害毒を說き、文明の危機を悲み、或は無抵抗主義を提唱した彼の筆は、或場合には敵國の殘虐に對する味方の誇大な報導をあばいたり、自國の外交に關して思ひきつた攻擊を向けたりした。それが累をなして、彼は大學教授の職を拋ち、剩さへ一年間ほど牢獄の苦を嘗めさせられた。（その間に佛蘭西ではジョーレスが殺され、ローランは周圍の攻擊に耐へられないで瑞西へ避難した。）

當時のラッセルの論文は『戰時に於ける正義』といふ書に集められてゐる。その中で最も人の注意を牽くのは彼の無抵抗主義の唱道である。彼はいふ、無抵抗の教義は基督が唱へ出したのであるが、社會の實情と相容れない教だとして、トルストイかクエーカー宗の徒でなければ之を信ずる者のない有樣である。世間のこの意見は或場合正しいが、然し又或場合にはこの教義が存外有效であつて、それは實際政策として無限に賢しい方法であることがある。凡そ個人に於ても國家に於ても「所謂自衞の權利」なるものは、之を適當に施してよい場合は稀である。よしんばそれが正當防護と見られる場合でも、力を用ゐて他人の意志を制肘するといふことは我等の心に一の獸的で暴戾な狀態を養ふことで、外から强ひられた不幸よりも內的平和に害あるものである。國家に就ていふならば、我等の誤られた愛國の觀念は力を餘りに重要視する嫌ひがある。消極的無抵抗によつて他の力に相對するにはより多くの勇氣と訓練とを要するが、

然しそれは國民的生活の高き諸要素を保持する手段である。といふので、彼はその例として獨逸が侵略的野心を持つてゐる場合、英國が無抵抗主義を標榜し、あらゆる軍備を捨てて、儼然として之に對したとしたときを想像して、詳しくその結果を論じてゐる。

『戰時に於ける正義』は單純にして正直な思想家の實社會に對する反抗と憤懣である。その中には殆ど明らかに理智の優越が働いてゐる。驚きと怖れと憎しみの情さへがそれを色彩つてゐる。それは彼の過渡期を劃する思想の現はれであつた。

四

彼の立つ位置は危うかつた。彼は一切の社會的地位を捨てねばならなんだ。それでも猶ほ彼の周圍には迫害があつた。彼は孤獨であつた。戰爭に熱狂してゐる世間では何人(だれ)ひとり彼を諒解するものがなかつた。いつの世にも思想家を陥れるところの「思想の無力」といふ絶望の魔が彼の背際をおびやかした。若し彼が弱い人間であつたならば彼は第一に世間と妥協したであらう。その上彼がずるい人間であつたならば、その妥協は能く世間の學者のするやうに思想家としての彼の名聲を汚さずに巧みに行はれたであらう。また若し彼が眞理に忠實な人間であつて、妥協を潔しとしないにしても、彼が充分フリーマンでなかつたならば、彼はニーチエの陥つたやうな「獨斷」を必要としたであらう。即ち彼は高踏病に陥つたであらう。然るに彼はその何れにも行かなんだ。彼は最も正しいそして最も困難な道を採つた。彼は言つた――

> 多くの人はその一生を通じて世間並みの信條と行爲とを甘受し、それに從はずに進みさへすれば世の中は自分の味方だと考へてゐる。然るに社會に對する新らしい思想はかやうな安易な服從とは兩立しない。それは或る智的獨立と孤立のエネルギイと、世間及世間の見解を心的に征御する力とを要する。甘んじて孤獨を受け入れる者でなければ新思想を持ちえない。猶ほその上にこの新思想が目的に到達する爲めには、それは高踏的であつてはならない、なぜならその場合は他人との親和が傷けられ、その人の智的獨立は冷笑に陥るから。かやうに我等の要する精神的態度は微妙でそして困難である故に、無視されて、それは智的に孤立でありながら高踏的であつてはならないために、どうも實世間に關する有效な思想は稀であり、且つ多くの理論家が俗に流れたり冷笑に傾いたりするのである。實際正しき思想は稀少であり、そして困難である。然しそれは無力ではない。

彼は戰爭が起した世間の狂熱に對して反抗することが、何れだけ非人情的に見られ、どれだけ堪えがたい孤獨であるかを味つた。然し自分に對する世間の憎みは甚だしくても、反對に世間

を憎み返すことは何うあつても慎まうと決心した。それには温かい理解と同情とが必要であると考へた。「理解と同情なしには社會が維りつゝある罪悪に對する療法を見出すことは出來ない」と彼は言つた。彼のこの態度は、ローランが「わが敵に告げる、あなた方は私を憎むことはできるが、私に憎むことを教へることはできない」といつたのと同じである。

かうした心的經路を辿んで、ラッセルは社會改造家として新しく世の中に立つに到つた。

なぜ人間は戰ふのか、なぜ我等はお互に殺し合ふのか。なぜ我等はかやうな野蠻な罪悪を續けねばならないのか。といふ疑問が深くラッセルを惱ました。彼は最初(一)殖民の戰爭(二)主義の戰爭(三)自衞の戰爭(四)名譽の爲めの戰爭といふやうな範疇を造つてみた。然しさやうな分類が何の役に立たうぞ。資本主義制度の悪果、英國の冷靜な傲慢と獨逸の火焔的嫉妬との衝突、かういふ政治上又は經濟上の原因は幾つでも擧げえようが、然し戰爭の心理にはもつと〳〵深い何物かゞある。ラッセルはそれを搜して遂に我等の本能の奧に力強い働きをなしてゐる「衝動」「impulse」に行き當つた。彼はいふ「戰爭の終局原因は經濟的でも政治的でもない。戰爭の起源は我等が國際的論爭を纏める方法を見出すに就ての機械的困難に依るのではない。戰爭の終局原因は人類の大部分が協同よりは鬪爭を好む衝動を有つためである」と。然るに、一方からみるに、今日各國民を戰爭に驅る衝動の大部分は、活潑で進歩的な生活には必要缺くべからざる物ばかりである。冒險の思想と好尚とがなければ如何なる社會も忽ち沈滯する。鬪爭それ自らは、破壊的でそして殘忍的でない限り、人間の活動を刺戟するに必要である。昔から平和論者の考は餘りに消極的であつた。彼等のユートピアは忍びきれない物憂さである。彼等は人間の幸福の大部分が活動により、その僅かな殘部が消極的愉樂によるのであるといふことに氣附かなんだ。我等が社會を虚勢することによつて其處に平和を招來するのは容易い。羅馬帝國は平和的であつたが、然し無産的であつた。ペリクレスの雅典は最も多産的な社會であつたと同時に最も好戰的であつた。現代が誇とする産物は科學であるが、然も最も戰好きな獨逸は最も科學の發達した邦である。されば問題は、これ等の衝動を活かしつゝなほ且いかにして戰爭を防止しうべきかといふことである。ウイリアム・ジェームスの「戰爭の道徳的代償」といふ論文は、今までのところではこの問題に適當に觸れたたつた一つの立策であつた。

戰爭の原因を究めれば究めるほど、ラッセルは人間を支配する衝動の力の如何に大きいものだかといふことに想ひ當つた。

「新しい印象と新奇な思想とを受け入れる力をもつた凡ての者に對して、この戰爭は彼の從前の信念と希望とに或る變更をなさしめた。その變更のいかなるものであるかは各人の性格と境遇とに由ることであるが、然しそれは何等かの形に於て殆んど普遍的に行はれた。私としては、この戰爭を通じて學びえた主要事は人間の行爲の源に關する一の見解であつた」と彼は言つてゐる。從來の因襲的道德家は理性の力を重く見て、之によつて情熱や欲望を制することを說いてゐるが、思想は（考へる欲望それ自らが一の情熱であるほど強いものでない限り）餘りに消極的で、生命に乏しく、至て無力である。一の情熱を制するには矢張他の情熱を以てせねばならぬ。我等の行爲を支配するものは意識的の思想でなくして、盲目的の衝動である。

　彼自ら正直に告白してゐるとほり、茲にラッセルの哲學——もつと適切に言へば彼の人生觀——の變更がある。讀者は昨日の彼がいかに超然たる理性宗の使徒であつたかといふことを考へてみるがよからう。勿論彼は後半生に至つても決して純粹思想の功用を非議する者ではなかつた。「なぜ人間は戰ふか」の中に於て彼は言つた、本能の力が何れだけ强くそして人生に必要であるにしても理性は決して之に屈從すべきものではない。かやうな征服の結果生れ出たもの即ち生命主義とか、未來主義とか、[illegible]主義とかいふ最近の哲學であるが、それは余りに[illegible]な妄說である「思想は本能との調和[illegible]に十分の發達を遂げねばならぬ」と。かくは言ふものの、彼は最早昨日の如く理智萬能乃至は理智優越の信者ではなかつた。彼は人間の生活を支配し、人類の未來の生長に最も力ある本能又は衝動の威力を認めないわけにはいかなんだ。換言すれば彼は理性の功用、その美、その齎す幸福に就ては昔の儘の信用を拂つてゐるが然し彼は昨日の如くその萬能と至上とを之に許すのではなくて、それは人間活動の一小部分を形造るに過ぎないといふことを承認せざるをえないやうになつた。理性はおとなしくして上品な彼の第一の戀人であつた。彼はその戀人の爲めに彼の半生を捧げた。然るに彼には衝動といふ第二の戀人ができた。新しい戀人は野性的で肉的ではあるが、いかにも活潑でみづ／＼しく、不思議に彼を牽き附ける魔力を有してゐた。彼は恐れ乍ら彼女に近づいた。第一の戀人に對する未練をもちながら猶且つ彼女により強い愛着を見出した。

　彼の哲學が上述の如き變化を閱みすると同時に、その當然の結果として、根本から面目を改めたのは彼の道德觀であつた。彼及び彼の同學ホワイトヘッドの論理學は、やはり理性至上主義の産物として、カントの「絶對命令」と略〻同型のものであつた。理

ち彼等の倫理學は、快樂說とか功利說とかいふ如き行爲を目的とした英國派の道德說に反對して立つものであつた。（ラッセルの倫理說は彼の著『哲學論文集』の中の一文『倫理學の要素』によつて窺ふことができるが、もつと詳しくはムーアの"Principia Ethica"を參照すべきである）。その說に曰く「一の物はそれ自身だけの爲めにその存在を要する時そは善であり、又それ自身だけの爲めにその存在を要しない場合にそは惡である」と。即ち他の物の手段として善なるものが必ずしも善ではない。good as endsとしてのみ其の物に倫理的の價値がある。善惡は物の本然的價値である。で、かやうな本然的價値の認識は亦一種の先天的知識で、「非論理的先天知識」とも謂はるべきものであると。かやうな合理的倫理說が後の衝動說と相容れざるものであることは言ふまでもない。「人間の行爲の源」が本能または衝動の働きであつて理性は生活に對して「餘りに消極的で、餘りに生に乏しい」ものならば、合理的といふことを主眼としたラッセルの昨日の倫理說は根底から壞れたわけである。

善惡は物の本然的價値であるといふ彼の說も亦變更を要した。彼の先の哲學の中心觀念は、「普遍」即ち一の完體としての實在の認識を目的としたもので、そこは創造の行はれない世界、即ちそれ自らの中に目的をも含む世界であつたが、後に彼は生命の中心をなす「生長の法則」(principle of growth)を認むるに到つた。個々人に於けるこの內奥的中心は、我等が彼を直觀的に理解する場合初めて想像に浮べうるものであつて、それは一人々々に於て相違し、そして各人の特徵を定めるものである」と言つてゐる。生命の法則の理解は直觀的でなければならぬといひ、各個の生命には獨特の個性が在ると言つてゐるあたりは、ベルグソンその儘である。即ち知るラッセルは行爲に關する哲學に於て生命派（ヴァイタリスト）の主張に近づいてゐることを。（ベルグソンは物的世界に於て理性の法則の行はれることを拒むものでなかつた。彼は何人にも增して科學の信者であつた。是等の點から見て、ラッセルとベルグソンとの哲學の距離は氣質及用語の相違であるとも言へる）。既に生命が生長（進化）であるならば、その目的は未來での完成にある。即ち人間の行爲はそれ自らの外に目的を持たねばならぬ。生長の法則を補救する行爲が善であり、その反對が惡である。ラッセル自らの言葉でいふならば、「一の善き生活又は一の善き社會と考へられるものを增進する力によつて行爲を判斷」すべきである。「トルストイはその結果によつて行爲を判斷せずに、もろ〳〵の行爲は本然的に善又は惡である」といつたが、それは誤りであるとラッセルは言つた。

五

ラッセルに從へば、凡て人間の活動は衝動及び欲望の二つの源から生れる。樹木が光の方へ延びるやうに、人間には生長の中心法則があつて、それが本能的に一定の方向に生命を導く。さまざまの衝動と欲望とは皆な此の中心法則から發するものであつて、それ等は健全である限り相互に離れ〴〵のものではない。

欲望とは不滿足の狀態にある人心があらま欲しと想像する事物に對する情慾で、欲求の意識と之を滿足さす機會までとの間に時間が挾まれてゐる。而して、欲望による我等の行爲には苦痛を伴ひ、意志がその苦痛を制して行く。この事は能く知られてゐる事實で、在來の政治哲學は人間の行爲の源として殆んど全く欲望のみを認めてゐたのである。

然し欲望は人間活動のうちの意識的で、明瞭で、そして文明的な一小部分を掌つてゐるに過ぎない。我等の行爲の大部分を支配する動機は、もつと本能的な根深いもので、それは一定の目的を持つ欲望とは違ひ、直接活動に推し進むところの衝動である。小供が走つたり叫んだりするのは、それに目的があるからではなく、唯だ走つたり叫んだりしたい直接の衝動からである。犬が月に對して吠えるのもそれで、吠えてから何か利得しようとは考へてゐない。同様に飲食、戀愛、喧嘩などの行爲は、目的を豫見してではなく、全く盲目なる衝動の結果である。これに附隨的行爲は生命に對して望ましき結果を齎す場合が多く、又それ〴〵の衝動は之に隷從して起る幾多の欲望を作ふので、理性的動物と自負してゐる人間は、恰も自ら目的を立てて行動してゐるかのやうに裝ふのであるが、その實小供や犬と大差はない。衝動が無目的であるといふ一例を擧ぐれば、それが極端に強い發現をなす場合は、自身の破滅をさへ厭はない場合がある。

衝動はその本質として盲目的で、非常規的で、無政府的（アナーキカル）である。然しその力は強い。で、その自由な發露は社會の秩序に害のある場合がある。そこで人間はかやうな衝動を馴らす爲めにいろ〳〵の方法を案出した。多くの哲學は、純粹の智的衝動から出立したものでなくて、その實衝動の馴致または辯護の爲めに生れた擬智的の產物である。また多くの倫理説は、衝動の危險を恐れるところから、意志によつて之を制御することを教へる爲めに生れた。

欲望を衝動に對抗させ、意志を以て衝動を制するといふことは、或る程度までは可からう。然し衝動それ自らは本來が惡いものでもなければ、又外から制しきれるものでもない。盲目的衝動は時として破滅と死とを導くこともあるが、然し社會が有する最も貴い物を作つたのも同じく衝動である。衝動は恐るべ

き戰爭の原因にもなるが、一方には科學や藝術や愛の源でもある。それ故に我等の心得べきことは衝動の鎭壓ではなくて死と滅亡とから生と發育との方へ衝動を導くといふことである。

ラッセルの衝動説は彼の政治哲學及人生觀のあらゆる根底をなすので、それが正しいか否かを檢討することは、彼を解する上に甚だ必要である。然しこの説は理智と欲望とに囚はれた近代の倫理説または社會哲學には珍らしいかも知れぬが、あらゆる宗教や實踐哲學の奥底には無意識的にもせよ衝動の大きな力がその動機をなしてゐるのであり、文學に現はれた「悲劇」の眞作者は例外なしにその主人公の劇しい衝動であるところから見れば、衝動が主として人間の行爲を支配するといふ説は、些しも言ひ過ぎた説ではなく、最も肯綮をえた説であると云ふことが出來る。

十八世紀以來、科學の勝利によつて自然の征服に格段の成功を奏した人類は、一種の驕傲に陷つた。人間社會が最早安固な基礎の上に築かれたといふ怠惰な安心さへが之に伴つた。彼等の内外の世界は萬能な理性によつて統一されたと信じられてゐた。彼等は理智に對する絶對でそして危險な信仰を持つてゐた。然るに我等の敵は我等の外にあるのでなくて、理性の力の及ばない心の内奥に巣を喰つてゐるのであつた。戰爭の破綻は圖らずもこの敵に乘ずべき機會を與へた。戸は開かれた。かずかずのデモンは一切に内から頭を擡げた。無意識界の深淵が鋤かへされて、我等の心はめづらしくその裸體を見せた。幾千年の文明が隱さへ隱して來た「獸」が白晝街に現はれて其の赤い舌を吐くのであつた。

伊太利の深刻な心理解剖學者フロイドは、ラッセルと同じく、矢張此度の戰爭によつて、衝動の本能力のどれだけ根強いものであり、我等の内にある獸性が依然として馴致されてゐないことを觀た一人（ひとり）であつた。その著「戰爭と死とに對する考察」はさうした研究結果の發表である。彼はいつた。「心理學的の、もつと詳しく言へば心理解剖學的の研究によれば、人間の奥底をなす性格は凡ての人に於て同樣であるところの根本的な衝動かり成り立つ。これ等の衝動の目的は原始的欲求の滿足である。これ等の衝動はそれ自らは善でも惡でもない。……これ等の原始的衝動は人間の行爲に現はれるまでには長い發達の經路を要する。一の衝動が他の衝動の目的や領分の中に住まうことがあり、幾つかの衝動が互に結合しその目的を交換したり、又は自分自らに反旗を翻したりする。而して或る二三の衝動に對抗する反動の構成は、全くその内容が變化したかに見える虛僞的外觀を與へることがある」と。フロイドは人間の衝動がどうい

ふ風に畸形されて行爲に現はれるかといふことを詳しく研究しつゝ斯う言つた、「狡猾な意味に於て、原始的心理は破壞すべからざるものである」と。またいつた、「我等の理智を獨立したりとしてのみ取扱ひ、それが我等の感情的生活に依存するといふ事實を見逃すことは誤である」と。

我等の行爲を支配する主たる原動力が衝動であるといふこと、衝動は不可滅であるといふことはフロイドもラッセルも一致するところである。衝動は壓迫すべきものでなくて、善導すべきものである。無理解に衝動を壓迫するとそこに忌むべき結果が起る。

意志によつて衝動を完全に制御せよとは、時に道德家の說くところであり、また屢ば經濟的必要から強いられるところであるが、それは眞に好ましいことではない。衝動を度外して目的と欲望のみにより支配される生活は倦怠の生活である。それは生活力を枯らし、終にはその人をして彼が目ざす當の目的にさへ冷淡ならしめる。一の國民がかやうな有樣で生活するとき、その國民は衰頽する。……かやうな生活が永く續くならば、その結果は生命の泉を涸らし盡すか、さうでなければ、意志が制御し馴れないそして思想が意識しない新らしい衝動を生ずる。かやうな新衝動は先に壓抑された衝動よりもその結果に於て惡いものである。外から餘儀なくされた過當な抑制は殘忍及び破壞の衝動を生み出すことが多い。帝國主義が國民性格の上に惡結果を齎すのはこの理からである。要するに、自然的衝動がその出口をふさがれた場合の結果は、生活力の衰頽かさうでなければ生命に有害な衝動の發生である。

とラッセルは言つてゐる。佝僂と跛者の根性曲りは世間の通りものであるが、精神的に傷けられた者にも同じやうな傾向が存在する。人が、いかなる理由に拘らず、正常な發達を阻害された場合、彼は曲りくねつて不自然の形に育ち上る。彼はその周圍を敵視し、そして憎惡を以て充たされる。生活の喜びが彼を捨てたときに、彼は友情の代りに惡意を持つ。

然らば我等はどうすればよいか。衝動の善導とは何を意味するのか。ラッセルに從へば、衝動は不當に壓迫すべきものでなく、またさう爲ようとしても本來不可壞のものであるが、然し「人間の衝動は生れつきにより最初から固定されてゐるのでなくて、或る廣い範圍内に於て、境遇と生活狀態とにより深く改變されるものである」から、之を善い方向へ導くことも出來る。よく世間では人の性は不變のもののやうにいふが、それは皮相の觀察で、「我等の性格の本能的部分でさへ案外柔軟に出來てゐる」。即ち我等の衝動は信仰により、物質的境遇により、社會の事情により乃至は政治的組織によつて變形を受ける。

茲にも亦吾等はロマン・ローランを引合に出さねばならぬ。彼も亦戰爭といふ非常事によつて、人間の盲目的本能力の何れだけ強いものだかといふことを痛感した一人であつた。彼はフオレル博士の蟻に關する忠實な研究を讀んで悟るところがあり、最近「蟻に學べ」といふ一小論文を公にしてゐる。二つの相敵する蟻を相當の方法で馴らすと、終には彼等の間に存在した嫌惡的本能が消えて親密な同盟が成立するといふ事實から、彼は次のやうに推斷してゐる。「かやうな實例は、本能の不可更といふものを擬聖的の事實として信じてゐる人々の重大な謬を正すに充分である。本能はあらゆる範圍に於て統制することが能きる、不可撓にも可撓にも絕對的にも相對的にも、永續的にも一時的にも。本能は出發點ではなくして、進化の一成果である。そして斷えず進歩しつゝある。最も固定的の本能は最も古いものだけに限られてゐる」。蟻にして果して然りとすれば、人間たるものがひとり最惡の戰爭本能に縛られてゐるといふことを忍びうるであらうか。ローランの結論はかうである。「かやうな進歩が不可能でないと知ることは――よしんばそれが實現されないまでも――いかなる事情のもとにも人間は石の壁につき當るものだと知る事よりも、わたくしにとつてはより幸ひな思想だ。それは密閉された窓で、その外には輝く空氣がある。その窓は恐らく開けきりには能きないかも知れぬ。然しそれには一つの扉がついてゐるだけだ。自由な一擧手の勞を要するに過ぎない」と。

以上わたくしはラッセルの衝動論を確かめる爲めに、フロイドを引用し、ローランを引用して、這回の戰爭が何れだけ本能力の強く恐るべきものだかといふことを思想家に教えたかといふこと、本能の不可滅であるといふこと、然し本能は絕對に不可更ではなくて或る範圍內では可撓性であるといふことを述べた。ラッセルの政治哲學はかやうな基礎の上に立つてゐる。ラッセルは更に一歩を進めて、人間の衝動を二種類に分つてゐる。第一は所有の衝動(Possessive impulse)、而して第二は創造の衝動(Creatire impulse)。前者には蓄財、權力、戰爭等の衝動が含まれ、後者には藝術、知識、愛、建設、生の喜び等の衝動が含まれる。前者は死に向ふ衝動で、後者は生に向ふ衝動である。所有衝動は私有の可能な品物――即ち共分することのできない品物――を獲得保有しようとするが、創造衝動は萬人のお互に樂むことのできる品物――即ち獨占といふことのない品物――を社會に提供する。一人の者の食物と着物とは他人の食物と着物ではない。若しも供給が不充分の場合は一人が有つ物は或る他人を損害せねばえられぬ。この事は一般の物質的品物に就て言ひえられることで、從て現代社會の經濟生活の大部分にあつては

きる。然るに心的財寶的品物には他を除外した或る一人の専有物ではない。或る者が一の科學を知つてゐたにしても、それは同一科學を他人が知ることの妨げにはならない。却てそれは他人が知識をうる扶けになるのだ。また或者が立派な藝術家であり詩人であることは、他人が畫を描き詩を作る妨げにはならないばかりか、寧ろそれを勵ます效がある。また若し或者が特定の人に對し善意を有してゐるとしても、その爲めほかの人間の間に分たれる善意が尠くなるわけではない。一人が多くの善意を有てば有つほど、彼はより多く他人の間に善意の種を蒔くであらう。されば是等のものには所有といふことがない。なぜなら決まつた量が分配されるわけでないから。で、何處にでも増加があれば、あらゆる處に増加を生じて行く」。

所有衝動と創造衝動とは一人の人間の中で相鬪いでゐる。藝術家や科學者の間には此度の戰爭に全く無關心な者や中立を守つてゐた者があつた。それは彼等の感情が弱いからではなく、彼等の創造衝動が鬪爭衝動よりも強かつた爲めである。之に反し所有衝動の強いときには、全く創造的であることを要する活動をさへ害する場合がある。或る重要な發見を爲した者が他の競爭的發見者を妬むやうな場合がそれである。例へば或る學者には癌に對する治療法を發見し、他の學者は腸病に對する治療法を發見したところに、その一人が他の人の發見を妨げてゐたと聞いて一時の喜びを覺えるやうなことがないでもない。この場合その人は、知識の爲めの知識を欲し、またはその效用の爲めの知識を欲したのでなくて、單に名譽の爲めにそれを欲してゐたのである。かうして凡らゆる創造衝動は所有衝動の爲めに汚される。愛情に嫉妬の影の伴ふのもそれである。青春を失つた老人が、自分の有たない物を樂むことから他を妨げようとして、壯者に對し屢々鋭い嫉妬を懐くのもその爲めである。聖道の全者でさへより上達した聖人を見ては嫉ましく思ふといふ。

然し、所有衝動と創造衝動とが相反した兩極端の如く見えるのは、道德的又は政治的に觀察した場合である。之を心理的に見るときは、兩者の間に根本的差別が存するわけでなく、訓練と境遇とによつて、一は容易く他に振り變へることができる。また今日のそれよりももつと公明な或る經濟組織のもとでは、物質的生存は一の立派な創造的事業である。

六

ラッセルの政治哲學は上節の説明からおのづから明らかである。在來の政治は主として人間の物質的欲求の滿足といふことに重きを置き、欲望と意志とを人間の行爲の唯一の發動力と見做したところに由々敷誤りをなした。人間の欲求に關するかう

した不當に簡單な說では、どうして這回の戰爭の如き重大な事實を說明しえようぞ。近代人の心の奥底に宿る深い不滿を癒するためには、我等はもつと適切な政治哲學を要する。社會主義が失望を買つた原因は、良き經濟組織さへ造れば人間の幸福は直ちに獲られると信じた安價な假定の爲めである。然るに「人間の求めるものは唯だにより多き品物ばかりでなく、より多き自由、より多き自治、より多き創造の發動、より多き生の喜びの機會、より多き自發的協同、及び彼等自らのものでない目的に對してのより尠ない不本意な服從である。今日自然に對して獲ちえた我等の知識及び力が、善き生活を爲すべく充全の實を結ぶためには、未來の制度は我等の諸要求を滿たすことを助けるものでなければならぬ。」

政治の目的は個々人の生活を能きるだけ良くするといふことにほかならぬ。即ち政治上の理想は個人生活の要求する諸理想を基とすべきである。政治家はこの社會を構成してゐるさまざまの男、女、小供のことに專念すべきで、それ以外の事又はそれ以上の事を考へる必要がない。政治の問題は凡らゆる個人が個別に能きるだけ良い生活を送れるやうな方法に於て衆多の關係を調整することだ。此に於て第一に起る問題は、良いとせられる個人生活とはいかなるものかといふことである。

我等はあらゆる人間が同樣であることを要求しない。全ての人間を何等かの方法でそれにはめ込む爲めの型を造り出すことは氣短かな行政家か惡教師のすることだ。政治の要諦は凡ての人間が一の理想を持つといふことでなく、各個の人間が個別の理想を持つといふことである。人間には自然に一定した「生長の原則」がある。肉體の發育は空氣、食物、運動などにより助成され、支那婦人の足を小さくするやうな方法によつて妨害される。それと同じやうに、精神的發育も亦外界の影響によつて、或は助成され、或は妨害される。發育を助成する外界の影響とは、心的機能を鍊磨する爲めに、奬勵なり精神的食物なり機會なりを與へることで、また發育を妨害する影響とは、訓鍊、權勢、恐怖、輿論の暴力、不似合な職業の强制等により干渉することである。最も惡いのはその人の有する良き衝動を遮げ又は抑めることで、かやうな影響は恐らく一生癒すことの能きない內的危害をその人に及ぼすであらう。とにかく何んな人間でも、善惡何れかに發達すべき彼獨自の理想をその內に有してゐる。で、彼の善良な能力が發育を遂げるか壓し潰されるか、それとも彼の惡い衝動の芽が增長するか又は次第に善い方向に振向けられるかによつて、時の政治の良否が判斷される。

そこで政治の第一理想は、個々人の發達を能きるだけ助成す

るといふことであり、之をラッセルの衝動說を以て置き代へると「創造の衝動が最も汎き部分を占き、所有の衝動が最も狹き部分を占める」やうに人間の生活を導くといふことである。

在來の欲望本位の社會改造論―例へば社會主義―は主として物質的正義を目がけた。現代に於ける富の不平等は正義でない、それは改むべきだといふ。かやうな要求は至當であつて、その聲は我等の良心が聞かないではゐられないものである。然し正義を社會改造の唯一の目標とすることはどうであらうか。正義の要求する平等は、我等の凡てが幸福である時に得られるやうに、我等の凡てが不幸である時にも得られる。「正義は一度實現された後は、それ以上に新しい生活の源を持たぬ」。マルクスの社會主義はその黃金世界の設立されたあとの狀態に就て關心を拂はなんだ。彼はその後の人間がお伽話の中の皇子皇女のやうに、永く無爲で幸福な生活を續けるものと考へてゐたかに見える。然しかやうな生活が我等の堪えうるものであらうか。現代社會が人間に課する疲勞の生活は悲惨の出來事である。そこで過度の疲勞から我等は、我等の幸福の爲めにはたゞ休息のみが必要だといふ誤つた幻想を生んだ。然し或る休息の後には必ず倦怠が伴ひ、その倦怠は一の活動を要求するに違ひない。希望と目的と活氣とに充ちた生活のみがいつの世にも我等を滿足さす。エリザベス時代の英國は、社會的不安定の存在したに拘らず、冒險、詩、音樂、建築等を生み出した立派な時代であつた。

安寧と自由とは良き政治組織の消極的條件である。之れ等のものが獲得された時に我等は積極的條件―即ち創造的エネルギイの發動を要する。單なる安寧は小奇麗でそして停滯した社會を生ずるに過ぎない。我等は安寧の相手として創造を要する。そこで初めて生命の進步と興味とが保もたれ、絕えず新らしくそしてより良き事物の方への運動が開かれる。人間社會の制度には終局目標はない。より良き制度の方へ最も多く進步を促がす制度が最も良き制度である。努力と變化のない人間生活は永く良いものでありえない。我等の望むべきは安定したユートピアでなくて、想像と希望とが活躍してゐる世界である。

かやうな目的を達する爲めには、第一に人々の有する創造衝動に能きるだけの出口を與へてやることが必要である。どんな人間にも、それが惡用によつて萎縮させられない限り、本然に一の建設本能、即ち何物かを造り出さうとする本能がある。この本能の強い者は、氣質と機會との相違により、或は藝術家となり、或は科學者となり、或は政治家となり、或は工業家となつて現はれる。かやうな本能によつて刺戟された勞働は、よしん

ばそれが面倒であり困難であらうとも、丁度犬が兎を追ふ努力にと同じく、その人にとつては滿足である。創造又は建設の衝動の働かない世界はチベットの沙漠のやうに荒涼であり、次第に內部の死海へ沈み行くであらう。

個々人の有する獨自の創造衝動を能きるだけ生かすといふことが政治の第一理想である。然かしこの社會が多數の個人の集合から成り立つ以上は、一の「個」はいかにして他の「個」と相犯さずに濟むか、一の「我」はいかにして多數の「我」と調和しうるかが問題になる。そこで「一個人または一社會の發達は能きるだけ他を侵害せずに行はれねばならぬ」といふことが、政治の第二理想でなければならぬ。獨逸人の横溢したエネルギイは不幸にもその隣國の活動と相容れざるものであつた。今日まで男子の有してゐた生氣（ヴァイタリチー）は女子の發達の障害をなした。近き未來には同じ意味で女子が男子の障害になるやも知れぬ。その他個々の人間の間でお互の發達が衝突し合ふのは日常の出來事である。

この理想に對して、政治上で叫ばれた言葉は「自由」であつた。然し自由それ自らは一の消極的原則であつて、それは他人に干渉するなとは告げるが、何等建設的の意味をもたぬ。それは在來の悪い制度に對する反抗の聲としてはいゝか、然らば何うすればよいのかといふ解決を自ら持つて居らぬ。ラッセルは之に對して尊敬（reverence）の法則を提唱した。尊敬とは我等が自分の生命內に感知しえた貴い物を他人の中にも認めることであつて、人間が益々創造の衝動に生き所有の衝動を卑むやうになればなるほど、尊敬の衝動は深くなるのである。なぜなら我等は個性のあるところに差別があり、均一は死を意味するといふことを知るであらうから。なぜなら、我等は我等の中にある善根の如く、他人の中にある善根も亦限りなく貴いものであると同時にいかにも脆いものであるといふことを感ずるであらうから。なぜなら我等は力の濫用によつて外から及ぼす害惡と力によつて得た財品の無價値とを了得するであらうから。で、尊敬の衝動の深くなればなるほど、人間は他人の自由に對して敬意を仕拂ふやうになり、哉く前に同情するやうになり、親切になり、一人々々の人間が能きるだけ生きたものであり能きるだけ機械的の物でないことを望むやうになる。即ち尊敬の法則は之を政治的の言葉で現はすと自由となる。否な、自由は尊敬の法則の消極的な一部分である。尊敬の法則はそれ自らだけでは充分とは言はれないが、然し望ましき社會組織がいかなるものであるかを指示する一の有力な動因である。

こゝに於て我等の希望する社會組織はおのづから明らかにな

つた。(一)それ等の制度は所有衝動を抑制し忍從するだけに強い創造衝動を各個の人間に奬勵するかどうか、(二)それ等の制度は人間同士の間に尊敬の精神を增進させるかどうか。

これ等の點に就て見るに、現に我等の住む社會は在るを要するところのものより實に甚だ遠く距たつてゐる。今日の社會組織が據て立つ二大柱は富と權力とであるが、この二つ共に不公平に分配されてゐる。而して二つともに所有衝動の生產である。全部が競爭の上に築かれた今の社會に於て、人間がその創造衝動を發揮しようといふことは困難な仕事である。財產のないところには自由もなく安全もなく、權力のないところには創意を働かすいかなる機會もない。そこでは名譽と力と尊敬とは智慧よりも富に與へられ、法律は所有せざる者たちの方へ不正義を荷はせる。まことに今の社會は、我等が我等の必要品を利獲する爲めに已むなく採る手段でさへ、その醜しさに眼を閉ぢずには能きないほど理不盡に成り立つてゐる。「成功」と謂ふ誤つた觀念が、多數の者を驅つて彼等の生々した衝動を殺す生活へ導き、同時に安靜のない疲勞の中で生の喜びを失はしめる。彼等の一生は知らず〳〵他人の目的の爲めに使はれ、彼等に殘はれた「無力(インポテンス)」のあきらめは僅かに消極的快樂を以て彼等を滿足さす。かやうな環境の中では創造の天才さへが競爭の毒に染ま

ねわけにいかぬ。そこで人間は富と權力との追求に適宜な爲めにいろ〳〵な團體を結ぶ。團體に對する忠義といふことと貪欲の衝動を中心として、一種の[illegible]中にもこの汚濁があり、今日流行りの勞働組合も亦この罪惡を免れない。

凡て之等の事實は不必要であり、智慧と勇氣とを以て斷絕させねばならない。若しもこれ等の不正義が消滅するならば、人間の衝動的生活は全く別の方面を指さし、明日の人類は新しき幸福と活氣とに向ふであらう。然し「何人も我等が忍びつゝある罪惡の多くが避けられるものであり、それ等は我等の協同的動作によつて數年中に廢止しうるものだといふことに氣附かぬと見える。若しも一の文明國に於てその民衆の多數がそれを望んでみよ。我等は二十年內には凡ての汚賤な貧困と、社會に於ける病氣の過半と人口の十分の九を束縛せる經濟的奴隷の全部とを斷やすことが能きる。そして我等は美と喜びとを以て社會を充たし、世界的平和を招致することが能きる。その能きなくてゐるのは我等が無感覺であるからである。我等の想像力が痴鈍であるために、今まで在つたものは何時もさう在らねばならぬと考へてゐるからである。善き意志と博大な心と知識とは之等の物を爲すであらう」。

七

かやうな見地からラッセルはいろ／＼の方面に渉つて、彼の具體的意見を發表してゐる。然しその詳細を紹介批評することはこの文章の任務でないので、玆にはたゞ筋書だけを掲げるに止めて置く。

（一）國家――今日の國家は一方に於ては非常に有害であるが、然しまた缺くべからざる機關である。それが資本家の手先となり、又は侵略的目的を以て强大な軍備をなす如きはその罪惡の主なるものである。今日の國家の任務は餘りに廣大に失する。そのうち權力に代へるに法律を以てし、又は全然民間の手に委して差支ないものが澤山ある。組織と自由との間の調和を求める爲めには國家の有する權力は成るべく少ない方がよい。例へば警察機關の如きは必ずしも國家の支配下に置く必要を認めない。之に反して一方には、今日の國家がより多く世話を見なければならない積極的の仕事がある。その第一は經濟的不公平を除去する權力で、之は社會主義の特に力を入れてゐる點である。その第二は衞生とか傳染病の豫防とか幼年保護とか義務教育とか、科學の獎勵とかいふ事業である。

今日の國家は餘りに廣大に失する。一の國家を組織する民衆は全く自由の合同から成立ち强制的に加入さすべき者でない、然し今日の社會がどの方面によらず大きな組織から成立するのは避くべからざる現象で、一部の改革家（例へばウイリアム・モリス）の唱へる如く强て之を破壞する必要はない。組織の大きくなればなるほど個人の自由との調節は益々困難になるが、さればとて不可能ではない。之に對する重要な進歩は、各機能の統治を民主的にするといふことである。

民主政治は政府が個人の自由に干渉することを少くする手段として、今日まで發明された最上の方法である。然し我等の立法制度は（女子が除外されてゐるといふ重要な事實を除けば）先づ以て民主的であるが、我等の行政制度は今に官僚的であり、經濟制度に至つては全く專政的である。で、デモクラシイがその精神に添つた立派な方法でありうる爲めには、今日の組織は廣い範圍に於て責任轉委（デヴオリユーション）を爲さねばならぬ。卽ち下への分權が行はれねばならぬ。

今日の國家は餘りに廣大である爲めに、選擧權を持つ各個人をして、その國家の政策を決定する一因子であるといふ自覺を懷かせるに困難である。彼に何等かの抱負があつても、彼が優れた人間でない限り、その抱負は自分の無力といふ觀念によつて打消される。また餘りに廣い國家に於ては、一地方又は一團體の少數者の正義は、之に興味を有たない大多數によつて蹂躪

される。然るに現在の代議制度を廢して廣く責任轉嫁を行ひ、一地方一團體に自治を許すことになれば、上述の二つの弊害は除きうるであらう。

（二）國際關係――一の國家を形成するものは、その民衆が同一の種屬であるといふ本能、風俗習慣の相似寄つてゐるといふ感情である。國民的感情が強い事實である限り、それはどうあつても度外視することの能きないものである。我等の望むべきは凡ての國民の特質を除き去つた世界主義（コスモポリタニズム）ではない。然し國民的感情その者には濁つた分子がある。人類がお互に局部々々にその同情を制限するといふ事は、道理でもなければ、望ましき感情でもない。戰爭本能は一個の強い衝動である上に、人間の所有衝動が國際的の競爭を劇しからしめる爲めに、國家と國家との間には愈よ深い溝渠が出來る。今日存在してゐる國際的利益の衝突を見るに、第一は關稅――之は迷想である、第二は劣等人種の奪ひ合ひ――之は罪である、第三は權力と領土との誇り――之は小學生徒の興味である。我等はかやうな執念から離脫せねばならぬ。

更に我等は國際的精神の涵養に努めねばならぬ。我等は偏狹な愛國心を精錬せねばならぬ。我等の家族の愛が國家の愛と抵觸しないやうに、我等の人類の愛は國家の愛を抱擁して立たねばならぬ。我等はこの精神が自由の道德であることを知るばかりでなく、また政治の解決であることを知らねばならぬ。要するに國際問題の解決は斯樣な愛によるほかはない。

（三）資本と勞働――金錢の崇拜は古代からの事實であるが、近世の産業組織はますます勞働をして厭ふべきものとなした一方、近代人に發達した正義の觀念は資本主義と相容れないために、經濟問題が重要な相を帶びて來た。

一の經濟組織が有する目的は凡そ次の四項である。（一）能ふだけ多くの生産をなすといふこと、（二）分配を公平にするといふこと、（三）缺乏を防いで、人間に安定の生活を與へるといふこと、（四）所有衝動を減じ創造衝動を解放するといふこと。

今日の資本制度は前揭の凡ての目的に失敗してゐる。或人は資本制度が右のうちの第一目的に缺くべからざるもののやうに信じてゐるが、それさへが近視眼的の見解である。

次に社會主義を見るに、それは物質的安定生活を與へ、今日よりも多くの公平を我等に保證するには相違ないが、然し人間の創造的衝動を解放して進步のある社會を造るといふことには不向である。その事は前節に述べたところから明らかである。ラッセルの社會主義評は彼の三四の著書の中で屢ば用ゐふので(ママ)あるが深い心理がその徹底した見識に現はれてゐる。

社會主義が國家の權力を以て生產を統制しようとするに反し、サンヂカリズムは各產業の自治を唱へ、如何なる形の中央的權力からも全く獨立した團體を造らうとしてゐる。然しそれは分配の點に於て不公平を惹起し易い。そこで、分配を國家の統制に委し、生產を勞働組合の自治とするギルド社會主義は、今日まで發見されたところでは一番に完全な組織のやうに思はれる。たゞその手段に於て、彼等はひたすら勞働組合の直接行動にのみ依るべきことを說いてゐるが、なぜ政治的行動をそれほど排斥するのかわからない。ラッセルの考では、經濟的行動と並行して政治的行動も亦必要であるとなしてゐる。

ラッセルが一番に重く見てゐるのは、創造衝動の解放である。いかなる經濟組織も之に適はないものは彼によつて强く排斥される。彼は又資本制度の全盤といふことをばさほど重大視してゐない。

（四）教育――今日の教育は服從と訓練とのうへに立ち、人間を或る鑄型にはめることを目的としてゐる。政府の教育に對する方針の主眼は現制度の維持といふことで、偶々教育を受ける個人を主として考へる場合には世間的の成功を第一義とする。よき位置を得よ、金をつくれ、ordinary であれ――これが理想である。それに今日の教育は何等かの政治的目的を持たないものはない。軍隊教育、宗教教育はその著しい例であるが、一般に修身、歷史などの教授に於て國民的偏見が涵養される。イートンやオックスフォードの學風をなしてゐる“good form”は鑄型教育のよい例である。その精神は、社會に於て一番必要なものは一種柔らかな氣取つた動作であるといふことで、彼等は之によつて同僚間の軋轢を減らし、巧みな殘酷を以て下の者を威嚇するに用ゐてゐる。それは政治的には上流者及び富豪の特權を存置するに有效である。然しそれが生命と思想とを何れだけ傷害してゐるかわからない。偉大な精神力につきものであるところの粗大と不器用とに對する彼等の輕侮は生命の破壞を意味する。

教育の本旨は創造的生活に必要な希望の鼓吹であつて、恐怖の分子を雜へてはならない。教育に於て殊に必要であるのは尊敬の精神である。人間の柔かな若芽を完全に育て上げるには心底から尊敬の念を以て貫かれた者でなければできぬ。尊敬は博い想像を要し、生々した溫かい同情を要する。眞にかやうな精神を以て充ちた者は「小兒に對して一種言ひやうのない謙遜――多くの父母や教師の安價な自慢よりは知り深い謙遜――に打たれる」。

教育の精神は生徒に自由質疑をさせることで

的にその思想の自由を失はせることである。[illegible]入によ
対して、多くの討議をなさしむべきである。消極的受入れ主義は
生徒の独立心を殺すことによつて一生涯災する。

精神的冒険の愛を鼓吹するのが教育の第一任務であるといふ
ことを、ラッセルは詳しく説いてゐる。「思想の力、この驚異な
よ！」その驚くべく豊富な材料の中を旅する者は、せせこまし
い俗世の関心から遠く離れて喜悦の世界に遊ぶことができる。
それは南極探険や戦争と等しい冒険奮励の結果であるが、然も
無害で有益でそして高尚である。精神的冒険の愛は幼少者には
珍らしくないのであるが、教育の為めに殺されてしまふのが多い。

「人間は地上の何物にもまして思想を惧れる——破滅よりも、
死よりも。思想は顛覆的で、革命的で、破壊的で、戦慄的であ
る。思想は特権と現制度と安易な習慣とを無視する。思想は無
政府的で、無法律で、権勢に阿らず、時代の潮流に無頓着であ
る。思想は惧れなく地獄の口をのぞく、思想は沈黙の底知れぬ
深淵に囲まれた一小泡沫として人間を観る。然し思想は宛かも
宇宙の王であるかの如くそれ自ら昂然と構へてゐる。思想は偉
大で迅速で自由で、世界の光であり、人間第一の光栄である」。

然し思想がかく惧れられるのは、それが小数者の特権である
間であつて、大多数の所有に帰するときにその恐怖は消滅す
る。労働者は資本に従つて居る、[illegible]になりはせぬか。その時民
[illegible]者はどうなるだらうか。若い男女が[illegible]に対て自由にあへ
るやうになりはせぬか。この時今日の道徳はどうなるだらうか
か！一兵士が戦争に就て考へるやうになりはせぬか。この時軍
規はどうなるだらうか」——かう今の人は恐れてゐる。

（五）結婚問題——結婚制度の是非は、（一）結婚が出来るか
男女の発達と性格とにいかなる影響を及ぼすか、（二）それが小
児の教育と人口とにいかなる影響を及ぼすか、といふことによ
つて判断される。

現代の経済組織は青年男女の多くをして結婚を遅延せし
め、同時に多くの児を持つことを避けしめる。今日の青年男女
は性欲に関して驚くべくそして悲惨な虚偽心を示してゐる。結
婚及育児忌避の弊は性欲と子を持つことへの欲求とが相添はない
ことである。子を持つことの欲求が彼等に自覚されることは遅
う彼等の青春は過ぎ去つてゐるといふ状態である。かくて子の
ない夫婦生活は充たされざる欲求と孤独の苦痛との為めに彼等
の性格に悪い影響を及ぼす。

一方に於て、現代の婦人の自覚は自由の要求となり、彼等をして
結婚及育児を忌避せしめる傾向がある。その結果欧洲の文明諸
国に於て、知識階級と熟練職工とに於て多大の減少を来し最下

階級に於て增加を示してゐる。この傾向は文明の衰頽を意味するものである。

婦人の自覺に伴ふ結婚忌避と窮屈な結婚制度の影響は、自由戀愛となつて現はれる。然し現代に於て夫婦以外の性的關係は秘密の間に行はれ、共同生活と子を持つことが許されない。かやうな關係は性慾に重きを置きすぎる傾きがあり、刺戟的でそして駭心的である。男女間の關係はどうしても愛と共同生活と小兒との三つの鎖でつながれない限り堅固でない。(浪曼主義運動は戀愛を過當に神聖視した爲め、實際生活には却て害をなした)。

現代の結婚制度はどの道行き詰つた。それは舊制の遺物である。傳習道德はならねばならぬ事よりもあつてはならぬ事に重きを置いた。人類が文明の頽廢を防ぎ、男女間の關係を幸福に健全に保つためには、我等は新しい組織を要する。で、その新しい組織は本能に對する良い通路であるとともに、精神的發達を鼓吹するものでなければならぬ。それから小兒を國家の費用を以て育てるといふことが手段として必要だ。生涯を通じての一夫一婦主義は最も望ましい制度ではあるが、複雜して來た人間の要求は甚だ屢々離婚を正しい方法たらしめる。社會のあらゆる制度に同じく、結婚も亦自由の原則の上に立てられねばならぬ。

然らば適當な新制度とは如何なるものかといふに、それが解決はまだ與へられて居らぬ。今日の婦人は自由を欲しながら之を得る方法に於て困難を感じてゐる。また今日の男子は理に於ては女子の自由に贊同しながら、自分の性慾の中に生き殘つてゐる壓制的分子に苦められてゐる。その結果一方は自由の爲めに戰つてゐ、一方に生の爲めに戰つてゐる。婦人はその自由を護らねばならぬと考へ、男子は本能自制が活動生活と兩立すべからざることを感ずる。そこで二つの性の協調が不可能になり、男と女とは離れた單位として生存する。そこで男女關係は一時的のつまらぬものとなり、深い生の要求の滿足の代りに肉的快樂が求められる。

ラツセルの結論はかうである。「この難題は安價で平易な解決法を以ては、救ふことが能きない。それは最も文明的な男女に浸み渡つてゐる難題であり、精神的進步から當然發生する個性の自覺の結果である。わたくしの考では、之が根本的救濟は、本能生活を壓倒するほどに强く眞面目な或る形の宗教に俟つほかはない。個人はそれ自らの生存が唯一の目的ではない。個人の外に社會があり、人類の未來があり、無限の宇宙がある。男と女とが共に全人類生活に比しての各自の微少を感じ、そしてお互の、生命に對する尊敬を持ち合ふならば、彼等は互の自由を犯さず

に共同者となりうるだらう、そして心と靈との生活に統理を生[illegible]に本能の結合を達しうるであらう。古い結婚制度を宗教が治めた如く、新しい結婚制度をも宗教が治めねばならぬ。然しその宗教は、權力と法律と地獄の火との上に立てられたものでなく、自由と正義と愛との上に立てられた新宗教でなければならぬ。

八

ラツセルは宗教の必要を認めた。制度は骸であり、之に魂を入れるものは人間の精神である。社會の各員の自由の爲めに必要な尊敬の法則といひ、男女間の微妙な關係をつなぐ法則といひ、之を充分に發揮させるには人間の自發に俟たねばならない。そこでラツセルは社會組織の改造とともに人生哲學の改造を說き、新しき時代に適應した新宗教の必要を提唱するのである。

廣く一般に信じられる人生哲學は社會進化の上に偉大な影響を及ぼす。新教主義（プロテスタント）の道德は主として我等の心の罪と狀態とに重きを置き、外界に對する心の關係をば輕く見た。之は行爲よりも思想の多過ぎた近世文明の成果であつて、病的主觀主義に隨したものである。そこでは我等の意志はひたすら內部に向つて集注され、消極的でそして無目的の冥想が人間の精神を喰ひ減らした。我等の必要とするところはもつと積極的の思想であ

らねばならぬ。深く健全なる衝動から發して[illegible]的目的に熱中する生活のみが生命を發達する。かやうな主觀主義とともに、更に深く近代人を支配した人生哲學に、人間の幸福は偏に物的富に據るといふ信念であつた。この信念に伴ふ習慣は活動それ自らよりも其結果を、創造的衝動よりも物財を要求するといふことである。金錢の崇拜は人間の內的敗北によつて得られる。一般に近代人に於ける生命力の衰弱は物質崇拜の宗教を招來し、同時に物質崇拜の宗教は生命力の衰頽を誘致した。金錢の崇拜者は彼の活動自體の中に幸福を求めずして、幸福は外界から得られる消極的快樂だと考へる。然るに藝術家や戀人はその眼ざす目的の中に金錢を求めはせぬ。反對に、金錢の崇拜者は藝術家や戀人の如く貴い或物を持ち得はせぬ。

この社會は、金錢崇拜の死的單調から逃れる爲に、生命の增進に益する一の哲學を切要する。然るに生命の增進は單なる生命以外の或物に對する崇敬によらなければならない。單純な生活の爲めに向けられた生命は動物的であつて人間的價値を持たぬ。我等がまことにヒユーマンである爲めには、我等は神といひ、眞理といひ、美といふやうな人間以上の或目的に使へなければならない。貴い人間生活は一の漸的[illegible]化――久遠にして無窮な[illegible]なる物を我等の體內に吸收する過程である。かやうな外界と

の接觸は――よしんばそれが我等の想像の世界だけに止まるにしても――我等のその日〳〵の生活の鬪爭や一時的失敗によつては全く壞つことの能きない或る力と根本的平和とを我等に惠む。ゴス人が羅馬を併呑した時に、セント・オーガスチンは『神の都』を書いて、永遠に消すことのできない靈的希望を殘した。今日の非常時に處する我等も亦一の不可滅な理想を建てなければならない。

眞にフューマンな生活を生きる爲めに或る偉大な世界との接觸を企てるといふことは、取も直さず一の宗教生活に這入るといふことである。

ラッセルによれば、人間の諸活動は凡そ三つの源から發する。その源とは本能(インスチンクト)、智能(マインド)、及び靈能(スピリット)である。本能生活は他の動物と共有的のもので、自己保存と生殖とを目的とする。智能生活は智識の獲得を目的とし、好奇心の衝動から發してその高きものは人間特有の科學的智識にまで到達する。即ち我等の智能生活は非我的思想を目懸けてゐる。之に對して我等の靈能生活は非我的感情を目的として發動する。凡ての藝術は本能から起つて靈能の聖域に上つたものであり、凡ての宗教は靈能に發して本能を指導しようとするものである。宗教生活は取も直さず靈能生活である。

ラッセルの宗教觀は『宗教の本質』と題する一論文(『ヒッバート・ジョーナル』一九一二年十月)によつて其詳細を窺ふことが能きる。但しその後彼の哲學の變遷した如く、彼の宗教觀も餘程變つては來てゐる。即ち後年の彼は本能生活を以前よりも重く考へるやうになつた。彼によれば宗教とは「自我」を高い「非自我」に合從させることである。

多くの人間にとつてはその有限我は常に宇宙的心靈に對する牢獄となつてゐる。他の人間にあつては、時々そして僅かの時間だけ出獄が許される。極く稀な者に限つて獄の墻が撤廢され宇宙的心靈との自由な交渉が與へられる。この牢獄からの脫出は、より偉大な世界から漏れて來る光のやうに、我等の或る時期或る思想に無限の性質を帶ばしめる。喧騒の中にみる不意の美、思ひ設けない戀、樹林に渡る深夜の風などが、我等の日常生活の爭ひや世迷事から距つた生活、いかなる不幸も亂し能はぬ平和のある生活の可能を我等に暗示することがある。かやうな無限の性質をもつた事物は我等のその日〳〵の生活に於ける斷片的知識よりは深い內省力を含んでゐるかに見える。で、この內省力を以つて貫かれた生活は、有限我の本能的欲望によつて築かれた牢獄の外にあつて、鬪爭から離れた生活であり、全體と調和した生活であるかに見える。かやうた突契的の知慧の經驗こそ宗教の本質をなす源である。

宗教の三要素として我等は崇拜、甘從及び愛の三つを數へる

ことが能きる。崇拜のあるところに喜悦があり、憧憬があり、そして神秘がある。その神秘は半ば開かれた不可思議な叡智と光榮との扉である。甘從は或る偉きなものに縋りかゝつての賢いあきらめであつて、憤怒と悲嘆との牢獄から我等を救ひ出す。若しそれ聖愛に至つては、博く他人の悲喜哀樂に共鳴せしめ、慈愛であつて慈愛よりも廣く、深い瞑想の中から非我的の行爲を生み出すところのものである。

古い宗教の衰頽は、よかれ惡しかれ、近世紀の大きな出來事である。我等の之を失つたのは我等の靈能が鈍つたからでなく、我等の智能が發達したからである。傳習的宗教の信者は熱激の泉を過去に求める。然し新しい世界の要求する幾多の要素は福音者の中に缺けてゐる。トルストイは眞面目に聖書を信じた結果、無學の百姓を人間性上の典型と信じ、極端で實行不可能な無政府主義を以て凡らゆる政治上の問題を抹殺しようとした。我等は寧ろ新しい宗教を求むべきである。「神」といふドグマの死によつて我等の信仰はより困難になつたが、困難なだけそれだけ宗教の要素たる崇拜も、甘服も愛も一たんそれを得た上はドグマによる安價なそれ等よりもより深遂であるべき筈だ。で、何よりも新宗教の第一要求は、服從の道德に代る獨創の道德の上に立てられ、恐怖に代る希望を基と爲ねばならない。それは悲みと禁欲であつてはならない。それは未來の人道に憧憬をもち、創造の喜びを以て基礎であり、自由と希望との廣い自由な世界に生きねばならぬ。社會はその爲めに若く美しくなり、勇氣を以て充たされねばならぬ。

本能、智能、靈能の三つは何れも一の完全生活に必要である。そのどれもが優れた點を持ち、又そのどれもが墮落を伴つてゐる。本能は力を與へ、智能は一の目的に向つてこの力に方向を與へ、靈能はこの力の非我的使用を勸める。然しその三能が一の生活に於て調和することは稀であつて、各々相叛逆する傾向を有してゐる。本能は智能又は靈能と爭ひ、智能と靈能とはまた互に相爭ふ。今、近代人の生活を見るに、智能が本能及び靈能を犧牲としてひとり發達した結果、一種不可思議な非人情、不活氣の狀態を呈し、冷笑主義(シニシズム)と智的破壞主義とか一世にはびこつてゐる形である。況して物質偏重の人生哲學が我等の本能を荒らげ、我等の靈能生活は四方から窘束を蒙つてゐる。我等の生活が再び調和に取り戾される爲めには、我等は新しい宗教によつて二等の靈能生活を復活させねばならない。

わたくしは結論に達した。そしてラッセルの歩んで來た路筋を回顧する。彼の前半生は高踏的な理智主義者であつた。彼は

或る意味ではシニカルでもあつた。彼は智能の世界に自ら高しとした潔癖家であつた。然るに戰爭といふ非常時は彼を驅つて一個の正義派たらしめ、これまでの哲學者は擧世の反對を物ともせぬ志士と變じた。憤怒が世故に馴れない正直一片の彼を燃やした。「戰時に於ける正義」はその焰である。彼は大膽で、そしてその敵に對して殘酷とも見えるほど正理に走つた。それが彼に災をなして彼は愛着の深い教授の職を拋ち、剩さへ牢獄の苦みまで嘗めねばならなんだ。どれだけか彼は苦んだであらう。その苦みは彼に愛の福音を授け、忍從の德を教え、彼をして靈能生活に眼ざめしめた。新しく蘇つた博大な心には今迄見られなんだところの情け深い善意とユーモアとの光が輝き初めた。彼の態度は沈着（おちつき）を加へた。凡ての義務が彼には行ひ易くなり、凡ての務めが喜びのうちに行はれるかに見える。彼には悲みがある。然しその悲みはより深くなり、より、賢くなり、悲哀は人間生活の一の善き根であることを談るかにみえる。個人的論爭のにがみを拾了せた彼の目的は希望のうちに摑められ、彼の論策は透明の度を增した。次の一節は彼の精神を最もよく談るものであらう。

わたくしは仕合せにも教師の一人として多くの邦の青年――希望に生き創造力に充ちた青年――と接觸する機會を有してゐた。然るに彼等は、敵側としてまた味方側として、戰爭に追ひやられた。その或者はまだ戰場にあり、或者は傷けられ、或者は殺された、生き殘つた者に於ても、その多くは靈能生活を失つたであらうといふこと、希望が斷やされたであらうといふこと、活力が消燼されたであらうといふこと、彼等の殘生がたゞ墓への物憂き旅であらうといふことが氣づかはれる。かうした悲劇のかずかずを、政壇にゐる人たちは少しも感ぜぬかに見える。彼等は無情な論理を以つて、これ等青年の犧牲にされたのは已むをえないことだとして、或る冷たい抽象的目的を說いてゐる。彼等はその爲に心を亂されない。感情の一時的襲擊を受けたあとは、彼等は既う平安な心持に歸つてゐる。これ等の人達の靈能生活は消渴しきつてゐるのである。若しそれが活きてゐたとしたら、それは父母の愛の如き剴切な愛を以て青年たちの靈を迎はなければならない筈である。靈能生活は自我の境界を知らぬために、青年の悲劇はその人自身の悲劇でなければならぬ筈である。何物かゞから叫ぶ、「それは正しい事でない、それは善い事でない、それは賢い道でない。その爲めに青年の光明は破られ暗らまされた。罪は我等老人にある。青年を戰場に送つたのは、我等の惡い情慾であり、我等の精神的死であり、溫かい心と生きた靈の眼とを缺いてゐる爲めに神聖な生活をすることの能きない我等の失敗の結果である。我等をしてこの死から蘇らしめよ。なぜといふに本質に於て死んだのは我等であつて我等が生活の恐怖から殺ろした青年ではない。彼等の幽靈は我等よりも活きてゐる。彼等の幽靈からこそ新らしい生命が起らなければならぬ。そして彼等に生かして貰はねばならないのは我等である。

讀者はどう思ふ？　あなたがたの想像にはこの言葉の持主がどんな人であり、その人がこの先きどういふ道に進むであらうかといふことのわからない筈はない。わたくしは言ふ、未來のラッセルは一の宗教家として立つに到るであらうと。（おはり）

勞働の苦痛

慶大教授 小泉信三

（一）

物の價値は其物の製作に投ぜられた（投ぜらるべき）勞働量に依て決せられると云ふ學說に對しては異論が多い。今日經濟學者の意見を徴つて見れば此學說に對する贊否は相半ばすと云ふよりも、反對說が贊成論を壓してゐると云ふ方が遙かに當つてゐるだらう。私自身もまた餘程制限的な條件を付けてでなければ所謂勞働價値說なるものを承認する事が出來ないのである。併し直ちに勞働價値說を承認しないと云ふ事は、勞働が生產の唯一の働因たることを認めないと云ふ事を意味しては居ない。一社會全體若しくは「人間」全體がその享受すべき財を購ふ爲めに、「自然」に對して何を支拂ふかと云へば、人間の支拂ふべき窮極の代價は勞働の外に何もない。此點に就ては異論のあるべき筈はない。此意味でヒユウムが「地上一切のものは勞働に依て購はる」と謂ひ、アダムスミスが、世上一切の富はもと凡て勞働に依て購はれたるものなり。勞働は一切のものに對して支拂はれたる最初の代價、本來の購買金なりと云ふのは、論ずる迄もない自明の理を述べたに過ぎないのである。

一切のものは勞働に依て購はると云ふのと相並んで、同じく自明の公理のやうに看做されてゐるのは、勞働は苦痛なりと云ふ認定である。勞働は苦痛であるとすれば人が勞働の爲めに勞働すると云ふ事は考へられぬ。そこで人をして、その本來嫌ふ所の勞働に從事せしめるには外部に之を促がすものがなくてはならぬ。昔の社會ならば笞杖を以て人を強制することが出來た。併しそれが出來なくなつた今日では飢餓を以て脅かすか、利益を以て誘ふか、何れかにしなくては人間は勞働を肯じない。要するに報酬がなければ、人は勞働しないと云ふのである。既に報酬の爲めに勞働するとすれば、苟も人が理性的に行動する以上は、成る可く僅かな勞働で、成る可く多くの目的を達しようと努めるのは當然である。而してこの一定の目的に到達するに最少の犧牲を以てしようとする、所謂經濟の本則が、今日の

經濟理論の基礎をなしてゐることは改めて斷はるまでもない、十九世紀前半の英吉利經濟學は一切の行動に於て完全に經濟本則を遵守する人間を假想して之を前提として其經濟理論を築き上げた。この「經濟人」の想定を現今の經濟學者は一樣に排斥してゐるけれども、新しい經濟學と雖も若し勞働の苦痛と云ふ事がなくなれば其成立の根柢は覆へされると云つて宜いのである。

（二）

學者の教へる所に依れば、勞働とは「苦痛ある力作」であると云ふ。併し力作その者が必しも常に苦痛として人の回避する譯でない事は誰も氣が付いてゐる。それは學者の研究、藝術家の制作、或は人が遊戲や競技に熱中する場合を考へて見れば直ぐ分る。運動家が球を投げたり、疾走したりする、たゞ其の肉體を役する事から云へば必しも車夫一日の勞働に劣つてゐるとは云へない。而かも運動家は何の義務も必要もないのに、自ら進んで此力作を敢てするのである。學問の研究、藝術上の製作の場合も之と同じである。勿論、此場合の學者、藝術家の精神狀態はもつと切迫したもので、面白いとか愉快とか云ふ言葉では云ひ現はす事が出來ないだらう。その心神を勞する事から云へば、人間の仕事の中で他に之に比較すべきものはないかも知れぬ。併し何故研究し、何故創作するかと云へば、したいからする、せずには居られないからすると云ふより外答へやうはない。必しも競技が面白いと云ふ意味で研究製作が面白いと云ふ必要はない。たゞ人間が必ず常に力作を苦痛として、外に之を償ふ誘因（最も多くの場合には報酬）がない限り、成る可く之を回避しやうとする者でない事丈けは之に依ても明かである。實に力作が必しも苦痛でないばかりではない。普通の健康狀態にある人には全く心身を働かせない事が却て苦しい苦痛なのである。極度の力作を强制されると、絶對的の無爲を餘儀なくされるのと、何れの苦痛が甚しいかと云へば、若し兩方の經驗を嘗めた人なら恐らく速かに答へる事が出來ないだらう。更にもし注意して觀察して見れば、苦痛ある力作と愉快なる力作との別は、力作その者の種類にあるのではない。それは同じ仕事が或場合には娯樂として行はれ、或場合には勞働として行はれる幾多の實例を見れば分る事である。それ許りでなく、本職としては苦痛ある力作でも、必しも始めから終りまで、其仕事の各瞬間に苦痛が感じられて居る譯ではない。始めは勞働として着手した仕事でもして居る中に熱中して、或瞬間には仕事その者が樂しくなる、少くも暫らく其不快を忘れてゐると云ふ經驗は恐らく誰れにもある事だらう。（小説「アンナ・カレニナ」を讀ん

だものはもう公レエギンが農民に伍して牧草を刈る一段を覺えてゐるだらう。レエギンが働いて居る中に段々仕事に引き込まれて、仕舞には忘我とも云ふべき精神状態に入ることをトルストイは實に精密に寫してゐる。)

(三)

人間は勞働に依て自然からその求める所のものを贖ふ。而してその勞働は人の苦痛とする處である。この苦痛が人間の自然に對して負擔する究極の犠牲なのである。今力作に苦痛あらしめる事情が除かれて、一切の勞働が謂はゞ遊戯と化する事があるたらば、人間の自然克服は其時初めて完成したと云つても宜い。今日の水や空氣と同樣に、人間の求める一切のものは其時初めて自由財となる可き筈である。「勞働の苦痛からの解放」は歴史あつて以來、絶えず憧憬されて、曾て實現されない人類の理想境なのである。然るに力作は必しも苦痛でないとすれば、その必しも苦痛でない力作に苦痛あらしめる事情は何だらうか。此事情は果して除く事の出來ないものだらうか。茲まで來れば何うしても此問題を考へない譯には行かぬ。上古の哲學者は姑らく措いて、トオマス・モア以後、社會改造の理想家で、多少なりとも此問題に頭を惱まさないものはないと云つて宜いのである。

但し、空想的理想家も概して云へば、勞働の苦痛を以て已むを得ざる人世の負擔と認めた。即ち彼等は如何にして此の已む事を得ざる負擔を輕減すべきかと云ふ範圍に其問題を局限した。それで、彼等は各その理想國を描くに當つて、其國で人々の負擔する勞働が現在の社會に於けるよりも遙かに輕易な者である事を示した。併し、之より更に一歩を進めて勞働の苦痛を全然除き、之を化して遊戯とするの能否如何には想ひ及ばなかつたらしい。私の知る限りでは始めてこの大膽な考を試みたのは佛蘭西人シャアル・フリエ(一七七二年生一八三七年死)である。彼謂らく、「苟も人間が自由を口にする前に人間は先づ勞働の苦痛から自由にならなければならぬ。羅馬人やアルジェリヤ人は笞杖を怖れて働く、英人佛人は其の乏しい家計に迫る飢餓を恐れて働く。今日吾々が其自由を讃美する古代希臘人羅馬人は奴隷の制度の爲め、刑罰を怖れて働らいた事は正に今日の植民地の黒奴と擇ぶ處がない。……然るに、海狸や、蜜蜂や蟻の如き動物に取ては勞働は快樂である。神は是等の動物に授くるに彼等を産業に惹付け、彼等をして産業の裡に幸福を見出さしめる樣な社會組織を以てした。何故神は是等の動物に對すると同じ恩惠を人間に許し給はぬか。彼等の産業状態と吾等の産業状態との間には如何なる差違が存するか。」フリエは此疑問に答へるは

め、今日吾々の勞働を不快ならしめる諸種の原因を探究して其所謂「愉快なる勞働」(travail attrayant) 之七則を立て、之を以て其空想した和諧社會の基礎としたのである。その七則を列記すれば左の如し。曰く、

(一)勞働者は組合員となり、賃銀を受けずして配當を以て酬ゐらるべき事。

(二)各男子各女子各小兒は三種の資格即ち資本、勞働及び技倆に應じ報酬を受く可き事。

(三)産業上の仕事は一日約八回變更すべき事。農業上工業上の一職務に對する熱心は一時間半乃至二時間以上持續する事能はざるを以てなり。

(四)仕事は任意に結合せる人人の群をして行はしめ、相互の競爭心を以て鼓舞せしむべき事。

(五)作業場及び耕地は淸潔と美麗とを以て勞働者を誘引すべき事。

(六)極度まで分業を行ひ、男女各年齡の人をして各々己れに適せる職分に就かしむべき事。

(七)この職分の分配に於て各男子女子小兒を常に自由に其能力と傾向とが導くところの勞働部門に參加し得べき事。

而してフーリエは此七則を守る彼の理想社會に於ては、勞働は凡て化して遊戯となるべきを斷言したのである。

此方面に於てフリエに次で學ぶべきは英吉利の詩人、美術家にして社會主義者たるヰリヤム・モリス(一八三四年生一八九六年死)であらう。モリスはフリエの影響を受けたかも知れぬ。併し彼をフリエと共通の點多き社會主義者にしたものは、他人の影響よりも主として commercialism を憎むモリスの藝術家としての天質であつたらう。通常社會主義者の傳記を見れば民衆の貧窮、富裕階級の横暴に對する憤激が社會主義を奉ずるに至らしめる動機となつて居る場合が最も多い。然るにヰリヤム・モリスの場合は少し趣を異にして居る。彼は民衆の貧困を歎き、富豪の横暴を憤らぬ事はない。併し彼れの最も堪え難く感じた事は民衆の貧困ではなくて、資本主義の齎らす醜惡と卑俗とである。この惡は何から生ずるか。モリスは其原因を資本主義社會に於て製作の喜悅 [illegible] の失はれた事に歸して居る。現在の社會に於ては、殆ど凡てのものが營利の手段として造られる。製作者が其製作に喜悅を感じて居る限り、その造るものに醜惡なものがあり得る筈はない。モリスが憧憬措かざる十四世紀の工藝は卽ち製作の喜悅から生れたものである。工藝家は製作その者に幸福を見出したのである。然るに現代に於ては生産は利潤の爲めに行はれる。生産者は其の製作物がただ金になる事の

みを知つて、製作物その者には何の賞賛をも誇りをも感じてゐない。其製作物が何處で誰の手に渡るかは更に介するところでないのである。既に營利の爲めに生產するとなれば、營利の目的に適ふ以上は人は如何なる物をも造つて恥ぢない。現代の英吉利が安ぽい俗惡な製造品を以て滿たされてゐるのは一に資本主義が製作の喜悅を滅ぼしたが爲めである。この立場から出發して、モリスは現在社會を破壞した其跡に建設さるべき、次の社會に於て再び製作の喜悅の甦へることを夢想した。モリスのユウトピヤたる News from Nowhere は此見地から書かれたものである。この新社會では固より貧困の跡を絕つ。併しそれ許りではない。新社會の人の最大の幸福は消極的な生活の安樂と云ふ事には存せずして、其創作衝動の赴くに任せて物を作り出すの一事に存してゐる。News from Nowhere に描かれてゐる人間が、他のユウトピヤに現はれる人物とは趣を異にして、溌溂たる生氣に滿ちてゐるのは他のユウトピヤが專ら貧困の絕滅、消費の安全と云ふ事を主眼にして書かれてゐるのに反し、モリスは製作と云ふ人間生活の積極的方面に幸福を求めてゐる一事に由るものであらう。

（四）

現在の人で同じ問題を最も學術的に取扱つて居るはピョトル・クロポトキンだらう。クロポトキンもフウリエ等と同じく一切の勞働を化して愉快な力作とするの可能を信じたのである。謂らく「勞働は固より不快である。併し仕事その者は不快ではない。少數者に贅澤をさせる爲めの過勞は不快である。併し凡ての人の幸福の爲めにする仕事は不快ではない。働くと云ふ事は生理上の必要である。蓄積された體力を消費する必要なので、それが即ち健康及び生命その者なのである。然るに今日はかく多くの有益な仕事が樣々行はれてゐるとすれば、それは仕事が過勞を意味するか、又は仕事が適當に組織されてゐないか何れかに由る。然るに吾々は、若し凡ての人が生產的勞働に從事し、而して生產力が今日のやうに浪費されなかつたならば、毎日四時間の勞働は各人に相當に裕かな中流家族程度の生活を營ませて猶りあるべき事を知つて居る。然らば誰が不愉快な仕事に當るか。この五十年間組織された幼稚な門に對しては、私は率直に悔む。我學者先生等が生涯の一日でも好いからその不愉快な仕事をさせられて見なかつた事を惜むのである。若し其れ自體頗に不快な仕事が猶ほありとすれば、それは學者が其不快を輕減すべき方法を考察するの勞を取らなかつた爲めに外ならぬ。肉體に苦しむ人間が充分多勢あつて、一日僅かに時間を投じさへすれば喜んでその不快な仕事に當る事を學者は常

承知してゐたのである」と。（本文に私はクロポトキンを現存の人と書いたが、果してさう書いて宜いか悪いかは分らない。露西亞帝制覆滅後、五十年振りで歸國したクロポトキンは、ボルシエヰキ政府と相容れないと云ふ事だが、今何處に何うしてゐるか私は知らない。一八四二年に生れて七十八の高齢になるのだから、もう今日は「現存の人」ではないのかも知れぬ。序に記して置く。クロポトキンとレエニン政府と相容れない理由に就ては一二の推測説を耳にしたが、私丈けの臆測では、クロポトキンはレエニン政府の對獨逸政策を非として、之と衝突したのではないかと思ふ。クロポトキンの著作を見れば誰れでも著者が珍らしく寛容の德を具へた人で、此人の弱點は人間を事實以上に善きものと觀て、一切の惡は現在の社會組織から生れるので、決して人間の本性に必然なものではないと樂觀して居る點にある事を感ずるだらう。然るにこの寛容な一面と著しい對照をなしてゐるのは、クロポトキンの激しい獨逸嫌ひである。その獨逸嫌ひは啻に獨逸の官僚政府を嫌ふ許りでなく、獨逸の社會黨をも好かないのである。彼にはマルクス、エンゲルスが抑も氣に入らないのである。彼はマルクスの名を口にする時は之を verkleinern する言葉を添えるにあらざれば必ず冷かな語氣を以てする。之は獨逸流の社會主義がクロポトキンの無權力共產主義と相容れない爲めか、それともクロポトキンの先輩のバクウニンがマルクスから意地の悪い取扱を受けた其恨を忘れ得ないのに出るか、何れにしても彼は獨逸のものは凡べて嫌ひなのである。この獨逸嫌が彼をして、レエニン政府の露獨單獨講和に反對せしめ、之がクロポトキンとレエニン等と相容れざるに至らしめた眞なる原因となつたのではないだらうか。姑らく臆測を記して露西亞通の教を待つ。）

そこで吾々はこのフリエエ、モリス、クロポトキン等の取扱つた問題を何う觀るか。勞働は果して之を化して遊戲とする事が出來るか。勞働の遊戲となる事を妨げる事情は何であるか、私はそれを稍詳かに觀察して見たいのである。

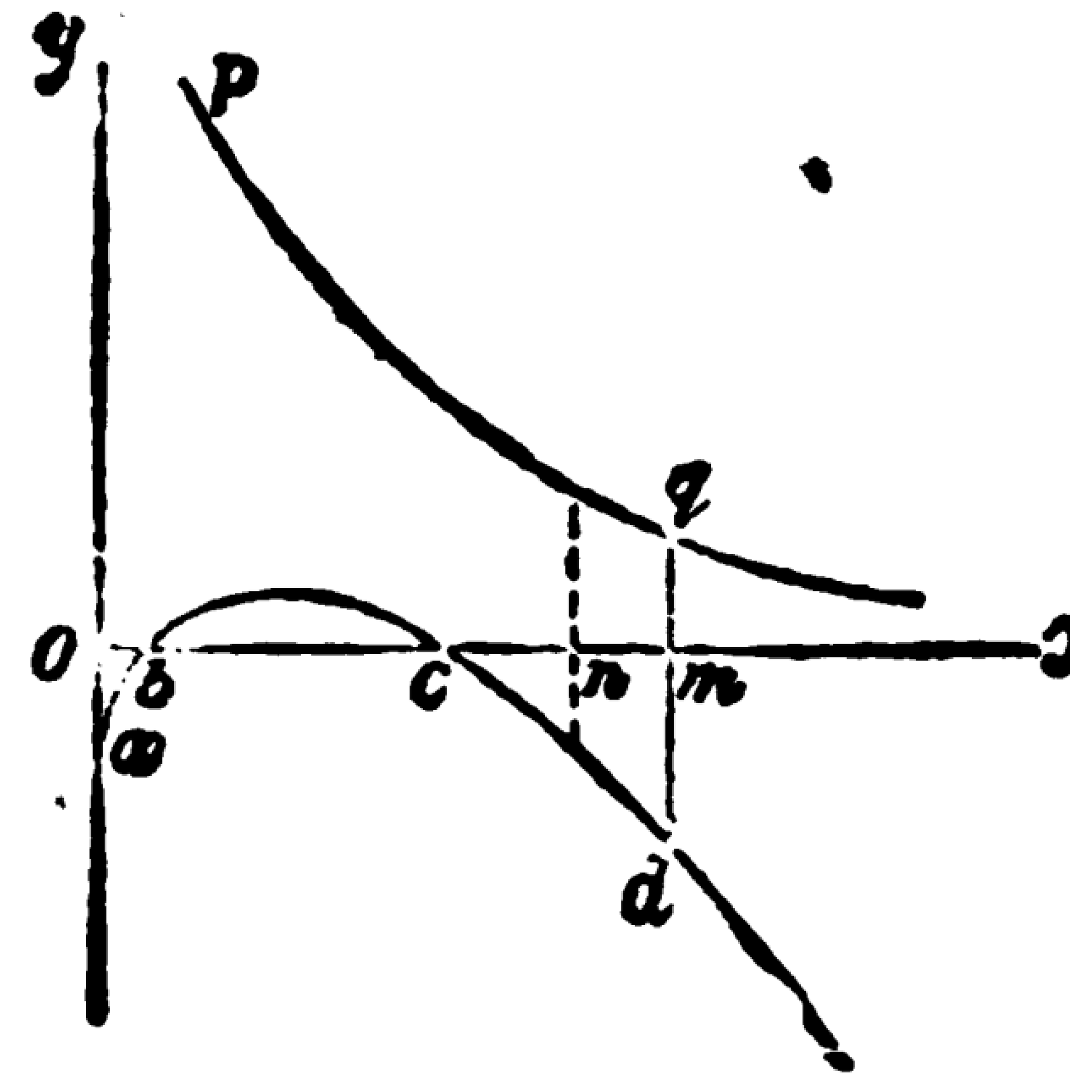
（五）

力作がそれ自體として必しも苦痛を意味するものでない事は既に述べた。その必しも苦痛でない力作に如何なる事情が苦痛あらしめるか。此問に面して誰でも最初に氣の付く事は勞働の苦痛と勞働時間との關係である。通常の仕事に就て見れば仕事其者が苦しいのではない、或程度以上の時間に亘つて同じ仕事を繼續しなければならないので苦痛を感じるのである。固より仕事の種類に依て、短時間の内に倦怠を覺えしめる者と、稍々長時間の繼續に堪えるものとの別はあるが、概して謂はば力作

の苦痛は勞働時間が或限度以上に上るために生ずるので、[illegible]なく愉快なる時間に亘つて一[illegible]して、[illegible]不快を感ぜしめない仕事の想像し難いと同樣に、如何なる短時間内にも苦痛を感ぜしめる力作も亦例外に屬するのである。如何に運動の好きな學生でも、日々十數時間に亘つて其好きな競技を繼續することを命ぜられたなら彼は其苦痛に堪へなくなるだらう。其反對に今日勞働として行はれてゐる仕事でも、假に一日二三時間を其仕事に費す丈けならば人は恐らく苦痛を感ぜずに濟む事だらう。勿論今日の勞働の苦痛なのは、それが長時間に亘つて心神を役する事許りに由るのではない。外界の事情(殊に經濟的必要)の爲めに或仕事を餘儀なくされるその被拘束の意識が實際の肉體精神の疲勞以上に勞働を不快ならしめるのである。併し此事を考慮の中に置いても、猶ほ勞働の苦痛の一大原因が勞働時間の過長にあることは爭はれぬ。報酬の爲めに已むを得ずしてゐる仕事でも、それを爲て居る中に身が入つて來て、或時間の間は其事の苦痛を忘れる事が出來る事は人の屢々經驗する所である。今日學校教育を受け、適當の境遇に置けば、隨分學問藝術の價値をも了解し得べき多くの青年が、報酬の爲め、或は其他の事情の爲め餘儀なくされて、他人の札を數へたり、他人の儲けた金額を帳簿に記入したりする無趣味の勞役に就かせられてゐる。併し斯の如き仕事でも、これに要する時間が短くさへあれば、愉快とまでは行かないでも、少くも苦しい不快を感ぜずに濟むのである。又被拘束の意識が勞働の苦痛を甚しからしめるとしても、力作その者が極めて輕微である間は吾々は之を忘れてゐる場合が多い。被拘束の感は長時間勞働のため力作の苦を感ずる事が漸く甚しきを加へて、而してその苦役は外部の事情の爲めに之を逃れることが出來ぬと思ふときに始めて甚だ痛切となるのである。

經濟學者ジエヲンスは勞働繼續の長短と勞働の快不快との關係を圖を以て示してゐる。彼の觀る所に從へば通則として人は或仕事に着手すると、暫くは其仕事に慣れない爲め凝滯の不快感を受ける。ところが暫く力作を續けてゐると凝滯の感は漸次減少して遂に全く消滅する。更に進むと仕事その者が積極的に樂しくなる。この力作の快感は漸々高まつて、遂に或點に達すると今度は漸次下降し始めて遂に全く快不快を感じない點に達する。そこで更に力作を續けて行くと漸く苦痛を感じ始め、其苦痛は勞働の繼續と共に愈々加はる許りとなる。一方に勞働の繼續と共に勞働生産物の數は增加する。然るに個々の生産物から受ける快感(利用)は生産物の増加するに從つて漸く減少する。そこで何時か勞働の苦痛と、勞働生産物から受ける快感との相平

均する點に到着する。人間がジエヴンス等の推定する如く常に苦痛の餘剩を避けて快樂の餘剩を求めるものとすれば、人はこの點で勞働を止む可き筈である。ジエヴンスの圖は福田博士、勞働經濟講話の讀者は既に知つてゐるだらうが、念の爲め茲に揭げる。ox線は勞働繼續時間を示し、oy線は快不快の度(ox線より上は快感、下は苦痛)を示すとすれば、勞働繼續の長短に由る勞働の、快不快の交代增減は abcd 曲線に依て現はされ、生産物より受くる快感の遞減は pq 線に依て示される。m は生産物より受くる快感と勞働不快感との相平均する點である。



ジエヴンスの觀察は大體に於て人の首肯する處である。從て假に經驗に依て、om の長さが發見されたならば理論上勞働を大體に於て遊戲(愉快なる力作を遊戲と呼ぶならば)と化することは不可能ではないのである。兎に角、トオマス・モア以來社會改造の理想家は皆勞働時間短縮の事を考へてゐる。即ちモアのユウトピヤに於ては、勞働時間は午前三時間、午後三時間と定め、カムパネルラの「日の國」(Civitas solis) では一日四時間、エイラツスの「セヴラムブ」(Sevarambes) では八時間、カベエの「イカリイ」(Icarie) では冬季六時間、夏季七時間と定めてゐる。極端なのはヰリヤム・ゴツドヰンで、彼は若し人間が、獨り財のみならず、又勞働をも平等に分配するならば一日半時間の勞働は優に簡易な生活の必要品を給するに足るであらうと言ひ、ロバアト・オヱンも亦同じ説を述べて居る。

(六)

勞働時間短縮の主張に對しては直ぐに疑問が起る。勞働時間を短縮して、それで必要品の生産が不足しはせぬかと云ふ疑問である。此疑問に對する最も愉快な答へは、勞働時間の短縮は勞働能率の增進を來たすから、生産額は時間短縮に比例して減少しない許りではなく屢々生産總量は時間短縮の爲めに却て增加すると云ふ論である。併し、此說は比較的狹小な限度内に於て正しいので、勞働時間を短縮すればする程生産總額は增加すると云ふ事が云はれない(そんな事を考へて居るものはない)以上は、此說丈けを信じて安心してゐる譯には行かぬ。今生産增收を主眼として(或は少くも生産額の減少を來たさないやうに顧慮しつゝ)勞働時間を短縮するのならば問題は起らぬけれども、勞働の苦痛を輕減するか、又は之を皆無にするかの

目的を以て財物引換を行ふ場合には、必しも生産的勞働を爲して居る譯には行かぬ。先づ職業は或るべきものと豫定しなくてはならぬのである。それでは如何にして此生産職業を行ふかと云ふ問題が起る。之に對する社會主義者の答へは略一定してゐるの觀がある。即ち彼等の言ふ所に從へば今日の社會には何等の生産的勞働に服せずして、他人の勞働の産物に寄生する多數の遊惰者がある。此遊惰階級を驅つて生産的勞働に從事させれば好い。次に今日の社會に於ては生産力が甚しく浪費されてゐる。即ち富裕階級の贅澤の爲めに、生活必需品の生産に充てらるべき生産力が無益な贅澤物の生産に濫用されてゐる。だから一方では從來遊食の階級をして有益な勞働に服せしむると同時に、他方では無益な贅澤物のために、徒費されてゐる生産力をもつと正しい用途に使用すれば、必需品の生産は決して乏しきを感じないと云ふのである。これはモア以來凡てのユトピストが殆ど例外なく一致する點である。併し此説を批評しようとすると吾々は先づ其前にもつと困難な問題を解決してかゝらなければならぬ。遊惰階級を絶滅すると云ふに對しては異論はなささうなものであるが、若し所謂生産的勞働に服してゐないものを凡て遊惰階級の中に含ませることになると、この階級の絶滅に對しては遽かに可不可を云ふことを躊躇する人があるだらう。士人をして政治其他の高尚な仕事に從らせる爲めには、奴隸を存して卑賤な勞役に服せしめなければならぬと云つた。アリストテレエスの思想はもう今日の世には容れられない。併し、同時に如何なる天賦の才能を懐く者をも皆一様に小さき鑄木の生産勞働に服せしめて、それで果して文明が損失する處はないかとは多くの人に起る疑問だらう。（左右田博士曾て謂らく、民衆の生存權を保障する爲めにはギヨオテ近松の作を棄てゝ之を工場勞働に服せしめざる可らざるかと）今日の社會に於て生産力が濫費されて居ると云ふ説に對しても同様である。孔雀の舌の炙肉の爲めに米の生産を壓抑して差支へないかと云へば、普通の人は然りとは答へまい。併し又其反對に、所謂生活必需品の外一切のものを贅澤なりとして其生産を排斥すべきかと云へば、之に對しても遽かに答へる處を知らぬ人は少くないのである。かう極端まで押詰めると問題は容易に何れとも答へられない。併し此極端まで進しない限度内で勞働階級の現在の負擔を輕くする餘地があるかないかと云へば、それはあるに極まつてゐる。それは現在の社會に於て、確かに如何なる點にも社會の爲めに貢献する處なき遊惰階級が存すると同時に、學問、藝術、道德何れの見地から見ても有害無益としか思はれない方面に、生産力の濫用されてゐる事實は誰の目にも明かだからであ

る。

（七）

次に勞働時間の過長と關聯して勞働の苦痛の一重要原因となるものは分業である。

生産上に於ける分業の利益に就ては今改めて說くを須ゐない。分業の功德を頌する爲めにはアダムスミスは既に云ふべき事の凡てを云ひ盡してゐる。スミス謂らく、狩獵や漁撈に從事する野蠻人の社會では苟も働らく能力のあるものは何かしら有益の仕事に就て居る。これにも拘らず、彼等は甚しく貧困で、窮迫の餘り屢々其老人小兒病者を殺すか、棄てるかを餘儀なくされるのである。之に反して文明國民中には全く何等の仕事をもしない者が多勢ある、而して其或者は勞働に從事してゐる者の十倍乃至百倍の富を消費する。而かも猶ほ社會全體の勞働生産物は非常に多量に上るので、凡ての者は屢々充分の供給を受け、最下級最貧困の勞働者と雖も、苟も儉約にして勤勉なる者ならば野蠻人の如何なる者も企て及ばない程に必需品と快適品の分前に與かる事が出來るのである。此相違の由て來る原因は何か。國富論の初めではスミスは之に詳しい原因があるらしく說いてゐる。併し本文に入つて其說を窺ふと彼は分業なる一原因の外他の何者をも論じてゐないのである。實にアダムスミスは分業の利益を高唱してたゞ足らざらん事を恐れて居るの感がある。而かもそのアダムスミスと雖も其利益の背後に潜む分業の弊害を看過することは出來なかつたのである。彼は國富論の終りに近く、國家の文教上の經費を論ずるに當つて、職工の熟練は屢々之を得んが爲めに其知能上、社會上、軍事上の德性を犧牲にする事を論じ、「極く僅かな、簡單な作業を反覆して生涯を送る人間は、其理解力をも、困難を切り拔ける工夫心をも働らかせる機會がない爲めに、自然と其力を失つて仕舞ふ。而して人間として、なり得る限りの鈍物愚物になる。心が痲痺してゐるので筋道の立つた話などが出來なくなる許りでなく、寬大、高尚優婉な情操を了解することが出來なくなり、從て日常生活の義務に對して正しい判斷を下す能力を失つて仕舞ふのである」(大意)と。アダムスミスの言は寧ろ驚かれる許り苛酷である。併し近世工業上に行はれて居る極端な分業の人に及ぼす影響を觀察するものは、この弊害の當を得て居る事を認めない譯には行かないのである。

アダムスミスは一本の留針を造る手續が十八の部分に分たれて行はれる結果、其製造高が驚くべく增加するの實例を擧げて居る。併し留針の十八分の一部分を造る許りで終る生涯が果して人間の一生と云ふに足るか何うかと云ふ疑問は誰にも起る。

分業（主として技術上の分業を指す）は一物の製造の各過程を分解して、其の夫々に独立した技術的作業とする。而して其部分的作業を各労働者に宛てたものである。之れと同時に、各部分的作業は相互に独立して行ふ事を許されない。一の部分は他の部分に依頼し、此部分は更に第三の部分に依頼することは時計の歯車の何れもが単独に回転することを許されないと同じである。人間は共同作業をなぶと云つても、それは自分の価値に従つて計画を立て、外界の抵抗に打克つて其計画を遂行し、而して其完成した製作物を自己の所産として認めることを喜ぶのである。留針の十八分の一を造る者に何の価値、何の計画がある。況や一個の時計、一台の共鋳器械の幾十幾百分の一を造るものに於ておやである。而して斯の如き分割した部分的作業を行ふのに、労働者は自分の意思を働かす余地がない。自分の意思で動き、自分の意思で止まる事が出来ない。大きな機械の中の一歯輪が単独に回転し、単独に停止することの出来ないと等しく、労働者は常に自分の意思には由らずに他から動き出され他から牽かれるやうにして働らくのである。被拘束の意識が労働の不快を甚しくすることは前述の通りであるが、その機械的生産を特に経済上の必要から已むを得ずして嫌な仕事をさせられるといふ計りでなく、技術上からも分業の細かく行はれてゐる為めに一層さうなるのである。

（八）

人間の幸福が受動的な消費の安全潤澤といふ事のみにあるものとすれば、其消費を安全潤澤にする為めには、即ち生産額を増加する為めには、どんな犠牲を払つても差支ない訳である。人間の生産創造的方面の幸福をも亦閑却することを許さぬと考へる者には此方面の快楽を全然殺して仕舞ふ極端な分業を斥けるのは当然である。クロポトキンは正面から分業に反対してゐる。彼の理想は地方的分業を排して比較的狭い経済団体内に於て、其団体内で需要されるものを自給すると同時に、農工業の分立を避けて、所謂農場、工場、作業場 fields, factories, workshops 三者を密接に連絡するにある。中世の手工業者に見られる製作の本能を、次の社会で甦えらせようと夢想したウリヤム・モリスが同じく分業の嫌悪者であつた事は論を俟たぬ。然るにフリエに至つては前述の如く極度まで分業を行ふべき事を主張してゐる。此點丈けを見る　、少し許り取り扱く思はれるが、同時に彼は各人の仕事を一日約八回変更すべき事を主張して居るのである。果然 Harmonians（フリエが理想社会の住民）は揺籃を出てから墓に入る迄、繰返し留針の十八分の一許りを造つてゐないで済むのである。

近來英吉利で盛になりかけて居るギルドソシヤリズムはヰリヤム・モリスの系統を引いて、製作の喜悦、生產創造の幸福を力說する一種の社會主義運動であるが、此派の一人とも倣すべきペンチイは曰く「產業の目的が貨物を低廉ならしむるにあるならば分業の制は最も喜ぶ可し。併乍ら產業の目的が人間と人間の幸福とを作るにあるならば分業は人類の上に許れる最大の禍殃として呪ふ可きものである。……分業は貨物を低廉ならしむる事に始まつて、而して人間を低級ならしむる事に終つた」と。ペンチイはギルドソシヤリストの中でも復古的色彩の著しい論者であるから、彼の意見は彼等を代表するものとは云ひ難いが、併し分業が物の爲めに人間を犧牲にして顧みないと云ふ不平は彼等に共通のものと見て宜からう。更に分業を極端にして、人間を器械にして仕舞はうとする傾向に對して、之に逆行しようとする努力が勢ひを得つゝある事は注意すべき事實である。

此處で、分業を制限する結果は何うなるか。分業制限の結果製作欲の復活を見て、勞働能率の增進が分業制限の爲めに當然來るべき生產減少を償うか、又は償つて剩りあるものとすれば何等の問題は起らない。此事は固より有り得可らざる事とは云へない。併し普通の經驗に徵すれば甚だ珍らしかるべき事である。其處で分業制限の要求は生產增收の要求と相撞着する事を覺悟しなくてはならないのである。分業制限の爲めに生產減收を來たす場合に吾々の逢着する問題は勞働時間短縮の爲めに生產減收を來たす場合と同じ問題である。たゞ今日の社會に於て時間短縮の場合にも、分業制限の場合にも、既に困難な問題を一層紛糾させるものは、勞働時間短縮（又は分業制限）の利益を受ける者と其爲めに生ずる減收の損失を負擔する者とが全く別人であると云ふ事實である。既に勞働時間短縮の結果たる勞働能率の增進が極めて狹い範圍內に於てのみ行はれ、分業制限の結果たる勞働心の復活に就ても亦生產收益の上からは甚だ多くを望む事が出來ないとすれば、現在の賃銀制度が存續する限り、生產生活上に於ける幸福の要求は、階級利害の衝突と云ふ形を取て現はれる事は已むを得ないのである。

（九）

分業が人間を器械化することに依て勞働の興味を減殺するのと相對して勞働を遇するに貨物を以てする事に依て、同じく勞働の興味を殺すものは賃銀制度である。だから勞働の興味製作の快樂と云ふやうな事に注意してゐるものは皆賃銀制度に攻擊の鉾を向ける。フリエは流石に早くも玆に着目して、前に揭げた「愉快なる勞働之七則」の第一條に勞働者を組合員として、

之に酬ゆるに賃銀を以てせずして、配分を以てすべき事を掲げて居るのである。それでは賃銀制度と、他の報酬支給の制度とは何處が異ふか。一言にして云へば賃銀制度とは労働を貨物として切賣り切買ひ(若しさう云ふ言葉を遣ふ事が出来るならば)するの制度である。それを稍詳しく説明するには、近年流行のコオルの産業自治論の一節を引用するのが簡便である。曰く賃銀制度には四の特徴がある。其を最も明瞭簡單に列記すれば左の如し

(一)賃銀制度は労働者から「労働」を引き摘く(アブストラクト)。其結果として労働者と労働とは切り離されて賣買される。

(二)從て賃銀は賃銀労働者に對して、之を雇傭する事が資本家に取りて有利なる時にのみ支拂はれる。

(三)賃銀労働者は賃銀を受ける代りに生産組織に對する一切の支配權を放棄する。

(四)賃銀労働者は賃銀を受ける代りに己れが労働の産物に對する一切の權利を放棄すると。

要するに賃銀労働に特有なるは他人の爲めに働くと云ふ事と、其他人の意思の前には己れの意思を抂げなければならぬと云ふ服從の意識である。私は前に、人が製作の喜悦を味ひ得る爲めには製作物を自己の所産として認識し得る事を要すと云つ

たが、今技術上の分業は吾人を設計の[illegible]自覚を[illegible]

能とする。而して[illegible]賃銀制度は[illegible]作物を[illegible]す

るのである。

然るに社会主義者は従来賃銀制度の存在に対して一向[illegible]

であつた。或人の言葉を借りて云へば彼等は労働者の[illegible]を[illegible]て其奴隷(スレヴアイ)を見なかつたのである。彼等は土地資本の公有を主張した。或程土地資本を公有に移せば、地代利潤として私人の懐に入る可かりしものは国民若くは市民全体の収入となるだらう。併し、それは国民市民が消費者として受ける利益に過ぎない。生産者としての労働者が賃銀奴隷たる事は今日も昨日も変らない。たゞ昨日まで資本家だつた雇主が今日は国家又は自治体に変つたと云ふだけの事である。その外最低賃銀法にしても[illegible]年金制にしても社会保険にしても、皆其主眼とする処は国民の消費を安全にし又は潤沢にするの一事にあると云つて可い。是等のものは何れも歓迎すべきものに違ひないが、受動的な消費の方面許りが人間の生活ではないと思ふものに取つては是丈けでは不満足であらう。今日英吉利の社会主義は大体に於てフエビヤン協会に指導されてゐる。而して其のフエビヤン協会は、社会主義が賃銀制度を廃止するものにあらず、[illegible]廃止す[illegible]きものにあらずと云ふ事を屢々宣言して[illegible]である。成程[illegible]

ビヤン協會の主腦たるシドニイエッブは土地、資本公有の曉と雖も、生産者の利益を擁護する爲め、勞働組合運動の決して廢棄すべからざる事を論じては居る。併し、其の生産者の利益と云ふのは主として賃銀を指して云ふので、賃銀制度の存廢に到つては遂に之を問題にしなかつたのである。エッブの大著は題して「産業上の民主々義」と云ふけれども之と標題の似た、コオルが「産業上の自治」などゝは其說くところに餘程逕庭があるのである。畢竟フエビヤン協會の社會主義者は國民の消費者としての幸福のみを念頭に置いたのである。勿論彼等と雖も生産者の利益と云ふ言葉を遣ふ事は遣ふ。けれども彼等が生産者の利益と云ふものは主として勞働報酬額に關して云ふのである。卽ち生産者が消費者たる場合の利益を指して謂ふのである。汝はパンの爲めに製作するや將た製作をなし得んが爲めにパンを必要とするや。天分の裕かな、而して良心の强い藝術家が自分で自分に此問を發したならば、彼は必ず前の問に否、後の問に然りと答へるだらう。若し斯る藝術家に製作は出來なくても生活を安全にさへして置けば滿足するだらうと云ふものがあれば、彼は其人を賤しむことを禁じ得ないだらう。ヰリヤム・モリスなどは正に斯る藝術家の一人であつた。從つてモリスやモリスの後繼者に取て、フエビヤニズムが甚だ不滿足に感じられたのは異しむに足りないのである。フエビヤニズムはモリス等の目には國民にパンを供給する爲めの行政事務的方面に許り注意して、もつと深い人間の要求には耳を傾けない、甚だ俗な社會主義の樣に思はれたのである。フエビヤニズムが吏臭を帶びてゐるとの評を受けるのも同じ理由に基づくのである。

(十)

賃銀制度を廢止しやうとする最も素朴な試みは生産組合であつた。之は勞働者の零細な貯蓄を集めて企業を起す。而して勞働者が自分で自分の雇主にならうとするのである。此企には十九世紀の中頃に近く、英佛で流行したが大體に於て皆失敗に終つた。或ものは資金と經營上の知識の不足の爲め企業として失敗し、或者は企業としては存續しても生産組合たるの性質を失つて普通の株式會社類似のものに退化したのである。獨逸ではフエルヂナンド・ラッサルが普通選擧と生産組合とを標語として勞働者運動を起したが、ラッサルの死と共に生産組合運動の方は實を結ばずに終つた。獨逸社會民主黨の綱領に生産組合なる文字が上つた事もあつたけれども、夫も今では昔話になつたのである。其頃には無政府共産主義が賃銀制度を廢止しようとした。無政府共産主義は資本家を否認すると共に國家並に一切の公共團體を否認するのだから、資本家に代つて勞働者の雇主と

たるべきものがない。雇主被傭者の別がなければ賃銀制度も本成立つ事は出來ない譯である。併し賃銀制度廢止の要求が強大な勢力となりかけたのは無政府主義の血を引いたサンヂカリズムの運動が佛蘭西に起つてからである。サンヂカリズムは現在の社會及び社會(集産)主義の社會が、消費生活を主位に置いて組織せられるのに反し、生産創造の生活を中心とする社會、誇張して云へば人間が合理主義から解放されて行爲の爲めに行爲する社會を建設しようとする。サンヂカリズムが將來實現を期する社會組織の細目に就てはサンヂカリストは豫言を避けてゐる。併し社會主義が所謂生産財産の公有を主張するのに對して、サンヂカリズムは資本家を倒し、國家を廢して勞働者の組合たるサンヂカアに一切産業上の支配權を移さうと主張する事丈けは明である。賃銀制度廢止の要求が最も有力に主張されたのは此運動に始まるのである。サンヂカリズムの運動は社會主義並に賃銀制度に不滿を感じてゐた諸國の勞働者、及び社會的論客の間に反響を喚起した。亞米利加に於ける急進的な勞働組合運動、英吉利に於けるギルドソシヤリズムは何れも夫々其國特有の事情とサンヂカリズムの影響とから生れ出たものである。而して是等は皆賃銀制度廢止、勞働者の生産管理の要求に於て共通點を持て居るのである。此外猶ほ guild socialism industrial unionism とまで、纏まつた形を成さない程度内で勞働者の生産管理を要求する聲は漸く高くなりつゝある。而して其要求は或程度まで聴かれやうとして居る。賃銀制度廢止とまでは行かないでも其修正は行はれやうとして居るのである。勞働組合の要求が賃銀の引上の一事にのみ集中したのは過去の事になつた。形勢はもう餘程變りかけて居るのである。

（十一）

勞働者の懶惰怠慢を訴へることは雇主の口癖の様になつてゐる。私は或意味で雇主の苦情を尤もだと思ふ。それは概して云へば勞働者は確かに雇主ほど仕事に熱心でないからである。併し、それは決して特に勞働者の道念義務心が欠けて居るからではない。勞働者の仕事が雇主、又は其支配人の仕事ほど面白くないからである。何故勞働者の仕事は面白くないか。私はそれを説明する爲めに勞働時間の過長、分業及び賃銀制度を擧げて之を論じた。併し、勞働を不快にする原因は之で盡きて居るのではない。此外にまだ最後の重大な一原因が殘つてゐる。それは詐術(ボデナイ)である。

度々説明した様に、人は決して力作その者を厭ふものではない。併し、人はそれ自體に於ては決して厭ふべき理由のない力作をも、之を餘儀なくされてする事を好まない。而して其の人

をして一事をする事を餘義なくする事情の最重なるものは經濟上の必要(ネセシティ)である。本來厭ふべき理由のない力作が、經濟上の必要に迫られてする爲めに不快となるのである。既に經濟上の必要に促がされてする以上は、力作の目的は力作以外に存する。從て其力作は必しも其人の趣味傾向に適した者である事を保し難い許りでなく、假に其仕事は彼の好む所であつたとしても、經濟上の必要を滿たさんが爲めに之に從ふ以上は、彼は其力作を長時間に亘つて繼續しなければならないのを常とする。それがために必しも不快ならざる力作が苦痛に感じられて來る。併し之れ丈けの說明では不充分である。運動家が身體を役する事は必しも力役者の勞働に遜らない。單に時間の長短と云ふ事から云へば人が、遊戯に耽る時間は必しも常にその勞働に服する時間より短かいとは云へないのである。して見れば、遊戯と勞働の別を明にするには、現實の疲勞の有無と云ふ事許りでなく、別に何物かなくてはならぬ。それは何かと云へば拘束の有無である。遊戯はそれ自體の爲めに行はれる。之をするとせざるとは自由である。勞働は力作以外の或目的のためにする。其目的に達する事が必要已む可らざる限り、人は其好惡に拘らず勞働しなければならぬ。この被拘束の意識が勞働を不快にするのである。通常遊戯の場合には甚しき疲勞を感じない程度に力作を止める。併し人が遊戯を樂しみ得るのは現實に疲勞を感じる事かないからではなくて、嫌になれば何時でも止めて差支ないと云ふ自由の意識があるからである。勞働の場合にはそれと反對である。勿論今日勞働者の多數は長時間の作業のために、生理上耐へ得る限度(以上)の疲勞を感じてゐる事は事實である。併し勞働者の感ずる苦痛はこの事實上の疲勞許りではない。止め度い勞働を止める事が出來ぬと云ふ拒阻、被拘束の感が勞働の不快を一層苦しくするのである。止め度い勞働を何故止める事が出來ぬか。答へて曰く生計上の必要が切迫して居るからである。從てこの生計上の顧慮を忘れさせる事が出來ない限り、勞働の苦痛の一要素たる被拘束の意識は遂に之を除く事が出來ない。そこで勞働の快樂を要求し、生產上の幸福を高唱するものも亦先づ生存保障の必要を認める理由が生ずるのである。即ちフリエが愉快なる勞働之七則を立てた後、この七則の樞軸をなすものとして更に一ケ條を加へ、勞働を愉快ならしめるためには、先づ生活の最低限を保障し、之に依て一切の不安を忘れしむるの必要を說いてゐる所以である。(Enfin, que le peuple jouisse dans ce nouvel ordre, d'une garantie de bien être, d'un minimum suffisant pour le temps présent et a' venir, et que cette garantie le délivre de toute inquiétude pour lui et les

斯く論じて茲に至ると、勞働の苦痛の問題は防貧救貧の問題と甚だ密接に關聯してゐる事が解る。併し今私は茲に防貧救貧の問題を詳しく論ずる必要を認めない。これは私が此問題を輕視し閑却するからではない。此問題は充分人の注意を惹いて、或は社會問題は貧困問題を以て終始すると云ふ程に既に具さに論じられてゐるからである。今私は勞働の苦痛の問題が生存保障の問題と密接なる關係がある事丈けを指摘すれば宜い。而して之れで私が此文章で云はふと思つた事は略ぼ盡きてゐるのである。

（十二）

最近の西洋勞働者運動に若し著しい特徴の認むべきものがありとすれば、それは勞働者が「賃銀奴隷（エーヂスレーヴ）」としての境遇を改善する事に甘んじないで、賃銀制度を廢して、自ら産業の支配權を掌握しようとする要求の現はれて來た事である。此種傾向が佛蘭西のサンヂカリズムに端を發して、英米二國の勞働組合運動に多少變形されて波及した事は本文中に之を述べた。而して此傾向は等しく從來の社會主義に對する批評として起つて來てゐる。固より社會主義に對する不滿の程度は一樣でない。サンヂカリズムは社會主義を放棄して別の或物を以て之に代らせようとする。ギルドソシヤリズムは社會主義を不充分なりとして他の或物を以て之を補はうとする。併し是等の何れも從來の社會主義に對する不滿から生れ出たものである事は一樣である。而してその不滿の一ヶ條は從來の社會主義が人の消費者としての利害をのみ眼中に置いたと云ふ點にある。即ち新運動の特徴の一は生産者の幸福、製作創造の歡喜を力説する事に存するのである。私は佛蘭西に於けるサンヂカリズム運動の將來をトするに足る充分の報道を有つてゐない。併し、英吉利に就て見れば數年前一部の青年論客の間に唱へられて、結局智識階級間の一理論として終る事だらうと思はれたギルドソシヤリズムは存外に大きい勢力とならうとして居る。生産者の幸福を論ずるには先づ勞働の苦痛を分析しなければならぬ。私は此の最近の時事問題に刺戟せられ、傍らフエリ等の著作に暗示（ヒント）を得て試みに此一文を草したのである。（完）

大正八年八月十五日

物價調節策としての通貨收縮と公定相場論

法學博士　堀江歸一

物價の個別的騰貴と一般的騰貴

個々の物資の代價に於ける高低を調節するには、其物資に對する需要若しくは物資の供給に生じたる變動に遡り、之に對抗する施設を講ずるを以て、當面の急務なりとす可し。例へば昨年[illegible]凶に於て、米價が異常の騰貴を來したる原因の一にして、內地市場に於ける米の供給不足に存する以上は、進んで外國米を輸入して、供給を潤澤ならしむるか、退ひて國民に消費の節約を勸奬するか、二法の一に依らざれば、到底米價をして舊狀に復せしむることを望む能はざるの道理なり。歐洲開戰の當初、我國に於て鐵、染料、藥品等の代價の騰貴したるが如き、其原因の供給杜絕に存する以上は、他に代用品を求むるか、消費を節約するか、孰れか一の方法を以てせざれば、之に處する能はざりしや、說を俟たず。當時政府が製鐵業獎勵法や、染料藥品製造獎勵法を制定して、是等事業の內地に起ることを獎勵し、物資の內地に於ける供給を增加せんとしたる、物價調節策としては、迂遠を極むるの嫌なきを得ざりしと雖も、寧ろ物價問題を根本的に解決する方法の正道を歩みつゝありしことを認めざる可からず。

歐洲開戰の當初に於ては、我國の物價は單に個別的に騰貴し、其騰貴の原因は需要供給に生じたる變動に徵して、之を理解するを得たり。其後船舶の價格の騰貴したる、生絲其他對米輸出品の代價の騰貴したる、將た又歐洲交戰諸國に向つて、軍需品として輸出せらるゝ物資の代價の騰貴したるは何れも物資に於ける需要供給の變動に其原因を求む可きや、論を俟たず。然るに戰局の進行して、一兩年を經過するや、我國の物價は個別的騰貴より一般的騰貴に移り、現に今日の如き、我國に於ける諸物資は時局に關係あると否と、戰爭の爲めに需要供給の關係を攪亂せられたると否とを問はず、盡く、代價に騰貴を惹起し、一として其常調を保てるものなし。物價の個別的騰貴は物資の需要供給に於ける變動に依て、之を說明するを得べしと雖も、斯る

一般的騰貴に至つては、其原因を通貨の關係に求めざるを得ず。

歐洲開戰以來我國の經濟社會に生じたる變動は一にして足らずと雖も、就中其重大なるものは貿易上の變動なり。輸出貿易も輸入貿易も數量に於て共に增加したりと雖も、前者の增加は後者に倍徙し、斯くて連年多額の輸出超過を現出したり。我國民の多數は貿易上に於て、連年輸出超過の現象を生ずるや、之を以て經濟社會に於ける絕對無比の利益なりとし、政府の輸出獎勵策と相呼應して、益々輸出の繁盛を熱望したり。然も當時內國に於て物資の生產を獎勵し、又は其供給を豐富ならしむる政策は一として講ぜられたるものなく、而して內國に存する物資は需要の起る儘に外國に輸出せられたりとすれば、內地に於て物資の供給に不足を來し、此點に於て物價騰貴の原因を成しつゝありしは、疑を容れず。或は內國に於て不足したる物資の供給高と均衡を保つ程度に於て、通貨が調節せられたらんには、物價も亦均衡を得たるの道理なれども、大隈內閣より寺內內閣を經て、原內閣の今日に至るまで、歷代政府の通貨政策は甚だしく放漫を極め、殆ど政策を以て目す可きものを存せず。輸出超過、補給料、運賃等の收入に依て、巨額の正貨が我國の所有に歸するも、纔に其一部分を以て、外國債に應募し、外債を償還し、對支放資に充てたるに止まり、他の大部分は之を處分利用するの道を講ぜざりしが爲めに、自然國內の通貨を膨脹せしむるに至れり。物資の供給減少して、一方に通貨が膨脹する以上は、一般物價が今日の如き異常の騰貴を招くに至るも亦怪むに足らず。內國に於て生產の增加するに隨ひ、其增加する程度と平衡を保ちて行はるゝ輸出貿易にして、始めて國民經濟全體の利益に一致す可しと雖も、內國に生產の增加するものなくして、獨り輸出の盛なる場合に於ては、其輸出の增加は輸出業者又は輸出品の製造業者を利益するに止まり、却て國民全體に物資缺乏に伴ふ不利益を蒙らしめざれば已まざるの道理なり。政府が斯る偏頗なる經濟上の事相の顯著なるに及んで、之に何等の干涉を試みず、却て之を助長したるは、驚歎に値する所とせざる可からず。

現金通貨と信用通貨

政府にして物價を調節し、其騰貴をして今日の如く甚だしきに至らしめざるの誠意を有したらんには、爲す可き手段の多々ありしことを否定す可からず。生產を獎勵するも、輸入を盛ならしむるも、將た又輸出を制限するも、其手段として價值ありしや、論を俟たず。然も今日に於て是等の策を施すも、殆ど時機を逸したるの憾なき能はず。唯既往に於て價值ありしが如く、今日に於ても有効なる物價の調節策は通貨の收縮にして、一般物價の騰貴する勢を抑制すると共に、其低落する勢を[illegible]

には此一事を除いて、他に適當なる政策を求むるが如き、不可能の沙汰とせざる可からず。單に通貨と云ふも、其內容に於て、現金通貨と信用通貨との二種あり、通貨收縮の方法を案ずる場合にも、是等二種の通貨に就て、區別するの必要あり。蓋し現金通貨の大部分を占むるものは日本銀行兌換券にして其發行高は前記の如く內國に正貨の吸收せらるゝ一方に、輸出獎勵の目的を以て、爲替資金の供給を謀れる爲めに、著しく增加し、例へば大正三年末に於て三億八千五百五十八萬九千餘圓に過ぎざりしものが、大正七年末に於ては十一億四千四百七十三萬九千餘圓に上れり。若しも政府が銳意正貨を利用處分するか、又は輸出貿易に制限を施して、正貨の增加を或る程度に調節したらんには、通貨の膨脹する勢を制するを得たる道理なれども、前者に對しては、政府の爲す所徹底せず、後者に對しては何事をも爲さず、爲めに通貨を膨脹するの勢に任せて、顧みる所なかりしは、物價騰貴を促したる所以なりとす。

現金通貨の外に、信用通貨の今日の經濟社會に於て、大なる効果を有するものあるの一事は通貨又は物價の問題を論ずる者の閑却す可からざる所たり。信用通貨は銀行の預金に依て代表せらるゝものとす。蓋し前記の如く日本銀行の兌換券は增發せられたりと雖も、其全部は悉く民間市場に出でゝ流通するに非ず、其一部分は市中諸銀行の手に入りて、所謂金銀在高の一部に供せられ、市中諸銀行は之を支拂準備金として、預金に對する信用を支持す可し。今日本銀行の兌換券が前記の事情に依て、增發せられたりとせんか、市中諸銀行は從前に比較して、容易に多額の支拂準備金を兌換券の形態に於て所有するを得べく、支拂準備金にして豐富なる以上は、銀行は利子步合を低廉にして、貸出割引を盛にし、以て預金を膨脹せしむるに勉む可く、斯く膨脹したる預金に對して、銀行の取引先が小切手を振出さんには、其小切手は世間に於て現金通貨と同樣の効果を現はす可く、今日の經濟社會に於て、信用通貨の現金通貨と共に、重要視せられざる可からざる所以なり。

今日我國に於て信用通貨が如何なる狀態に於て、膨脹しつゝあるやを知る爲めに、左に東京交換所組合諸銀行の諸預金、金銀在高並に兩者の比率に就て大正三年七月末と大正八年五月末とを比較す可し。

	大正三年七月	大正八年五月
諸預金	四三九、一〇〇、三六〇圓	一、五七九、八八九、三三九圓
金銀在高	四六、九六三、六五一	一二八、一〇九、一二〇
比率	一割〇分七厘	七分一厘

右の諸預金に對して、取引先が如何なる程度まで、小切手を

濫用し、爲めに信用通貨を膨脹せしめつゝありやは、之を知る能はずと雖も、諸預金が約五年間に於て、一に對する三・六の割合を以て、増加したる以上は、信用通貨の膨脹したる程度も亦略ぼ之に近きものと推測するを得べく、而して諸銀行が準備金比率を一割七厘より七分一厘に低減して、以て信用通貨膨脹の勢を助成したるの一事は通貨問題を攻究する者の深く念頭に置く可き所なりとす。

通貨問題と政府の無方針

大隈內閣以來歷代の政府は盡く通貨問題に對して、確乎たる方針を樹立するを得ざりしが、殊に方針の濫妄なるものを以て、今の原內閣なりとす。是れ即ち通貨問題に就て、何等の理解を有せざる高橋是清氏が藏相として、財務を主宰する一方に、通貨の收縮に依て、商工業社會の人氣を害することを恐るゝが故なる可しと雖も、物價を今日の如き騰貴せる狀態に置き、而して國民全體の所得を豐富にし、斯る代價の騰貴したる物資を消費して、何等の苦痛を感ぜざるに至らしむるが如きは、到底之を企及する能はず、官吏の增俸は行はれたりと雖も、物價騰貴率の一倍以上なるに對して、增俸率の三四割に止まるに於ては、如何にして生活難を除却するを得べきか。官吏以外に定額の俸給を以て衣食する者は全國を擧げて、何萬を以て數ふ可く、而して俸給を支給する團體が時局に依り收入を増さしむるの地位に在らざる限り、俸給生活者に生活難を除却する程度に於て、増俸を與ふるは事實に於て、困難なりとせざる可からず。故に於てか昨年內閣の組織以來物價問題を閑却したる政府も人心の變調り知る可からざるを恐れ、近來に至りて遂に方針を一變し、一方に物價騰貴に基く生活難は國民自ら所得を豐富にして解決す可き者なることを唱出しながら、他の一方に於ては、通貨の膨脹をも抑制するに怠らざることを聲明し、過般來政府が公債を募集し、又政府直轄の銀行會社等が社債券を發行するを以て、通貨を回收するの手段なりとして、政府の怠慢を非難する世間の攻擊に當らんとしつゝあり。然も斯の如きは通貨問題に對する眞正の解決を以て、目するを得るやと云へば、吾輩は其然るを信ずる能はざるなり。

政府が國民に向つて、自ら所得を增加するの計を講じて、生活難に當る可しと云へるは、一二閣僚の放言に過ぎざりしか、或は別に信ずる所ありて、此言を爲したるものなるか、之を知らずと雖も、勞働者は勿論俸給生活者までが昨今頻に同盟罷業若しくは之に類する不穩の擧動に依て、所得の增加を企てつゝあるが如き、要するに政府の所言に挑發せられたる所少なからざる者ありと認めざる可からず。或は政府は學校教員の家族に對して、內職を獎勵すの訓諭を發したりと雖も、內職の如き勞働と

して最も報酬の低廉なる者なる上に、最近の如く經濟社會に反動的趨勢の襲來せるとの顯著なる場合には内職共者の供給必ずしも大なりとする能はず、然らば勞働者が所得を增加するには、同盟罷業を武器として、傭者に賃銀の割增を要求するを至當とす可く、俸給生活者が所得を增加するには、總辭職を手段として、增俸を要請するの外に道の求む可き者なきの道理なり。政府が以上の害を爲したるは、物價問題を解決するの困難を感じ、自家の責任を回避するの目的に出でたる者なる可しと雖も、同時に傭者被傭者間に於ける紛擾を大ならしめたるの非難を免かるゝ能はざるなり。

民間に於ける通貨收縮の要求の次第に盛なるに隨ひ、政府も之が等閑に付する能はず。公債の發行に依て、通貨を收縮することを聲明しつゝあり。通貨膨脹を以て、物價騰貴の原因に非ずと云ふ意見を懷抱する政府の當局者が如何に民間に物論の盛なるものありと云ひながら、之に屈して、通貨收縮の手段を施すが如き、矛盾の沙汰にして、政府の威信を害すること大なりと雖も、此點は姑く措き、公債の發行は通貨收縮の有効なる手段たるを得るやと考ふれば、予輩は其然らざることを認むるものなり。即ち從來の事實に徵するに、政府が公債を發行するや、之に應募する者は銀行若しく[illegible]して、何れも放資の目的物として、公債を取扱ふの事實を爭ふ可からず。一方に金利步合の低廉なることと今日の如き場合に於ては、斯る公債は金融上の必要に關聯して、資金を融通する擔保物に供せられ、自ら信用通貨を膨脹する所以と爲る一方に、國庫が公債應募の代金として回收したる通貨は其償銷却せらるゝに非ず、財政の運用に作うて、再び世上に發行せらるゝに於ては、公債の募集は必ずしも通貨回收の手段たる能はず、時に信用通貨を膨脹せしむる危險の大なるものあり。政府が今日に至るまで公債の募集を以て、通貨回收の方便に充てんとするが如きは、世間の耳目を欺くの譏を免かれざるなり。或は公債の發行に依て、通貨を收縮せんとする場合には、其公債は極めて之を小額面にし、廣く細民社會に其應募を求めて、資金吸收の目的物たらしめず、一方に公債募集に依て、國庫の吸收したる資金を固く保藏する必要とすべしと雖も、斯る小額面の公債發行には自ら限りあるを以て、通貨收縮の手段として、大なる効果を期待する能はざるなり。

通貨收縮の眞手段如何

通貨を收縮する眞の手段を求めんにするには、現金通貨を收縮するものと、信用通貨を收縮するものとの二種類に區別せざる可からず。現金通貨を收縮するには、主として正貨を返分する目的を以て、外國に投資を行うを捷徑とす可しと雖も、今日

四圍の狀況を察するに、對外放資の好時機とする能はず。現金通貨の收縮は今後貿易上に輸入超過の趨勢を生じ、通貨備蓄料の收入の減少する時の到來を待たざるを得ずと雖も、信用通貨の收縮を行はんとすれば、其方便の乏しきに苦します。就中信用通貨を收縮するに必要なるは日本銀行が率先して、金利を引上ぐるの一事なり。近年日本銀行が市中諸銀行に對して貸出割引に依て、資金を融通する程度は必ずしも大なりとする能はず。玆に於てか世人或は日本銀行の金利引上に依て、同銀行の回收するを得る兌換券の小額に過ぎざることを云ひ、通貨收縮の手段として、日本銀行金利引上の効果を否認し、又は輕視せんとするの傾なきに非ずと雖も、吾輩を以て見れば、此議論する、要するに現金通貨あるを知つて、信用通貨あるを知らざるの過誤に陷れるものなるのみ。信用通貨が今日如何なる程度に於て、膨脹したるやは、前記東京交換所組合銀行の預金並に金銀在高に關する數字に依て其一斑を推するを得べし。銀行の預金に對する金銀在高が七分一厘の低きに至れるが如き、單に數字上より論ずるときは、信用に於ける過度の膨脹と認めざる可からず。他日經濟社會に反動的趨勢を生じて、預金に對する取付の漸く急ならんとする場合に際會し銀行は如何にして營業上の安全を期圖するやの一事は斯く預金に對する準備金率の薄弱と爲れる事實に對して、何人も想到する所なる可し。

然も諸銀行が自家の營業狀態を危險に暴露するを顧みず、斯く準備金率を薄弱にして、信用通貨を膨脹せしめつゝあるは、要するに他に依賴するの力あるを以てなり。銀行が他に依賴すると稱するは即ち日本銀行に就て資金の融通を仰ぐを得るの自由に外ならず。日本銀行の金利の低廉なること從來の如く爲る以上は、諸銀行は平生高率の準備金を維持するよりも、寧ろ準備金率を著しく低減せしむるまで、信用を膨脹し、萬一の場合には、低廉なる金利を以て、日本銀行に就て、資金の融通を仰ぎ、準備金の不足を補充するを利益ありとす可し、果して然らば日本銀行が金利步合を引上げ、少なくとも之を市場に警戒を與ふる程度に置き、市中諸銀行をして萬一の場合に日本銀行に資金の融通を仰ぐときは、殆ど禁止的利率を負擔せざる可からざるの狀況に接することを想像せしめんか、市中諸銀行は漫に日本銀行に依賴するを不可なりとし、自ら多額の準備金を擁し、又高き準備金率を維持するの必要上、信用の膨脹に制限を加へ、自然信用通貨の收縮を實現するを得べし。今日現金通貨たる日本銀行の兌換券を收縮する目的を以て、同銀行の金利引上を唱ふる者あらんか、實際の事情に適合せざるの嫌あり。唯現金通貨の外に、信用通貨の効果の偉大なるものあり、而して其の膨脹が

日本銀行の金利歩合の低廉なるに基く以上は、信用通貨の收縮を促すの方便として、日本銀行金利引上の理由あるや、論を俟たず。吾輩が從來此事を主張したる所以なり。

金利引上を困難とする事情

從來通貨縮小の必要唱道せられ、政府も亦時に通貨の縮小を目的とする政策を施すと稱しながら、實際の効果頗る思はしからず、物價騰貴の勢を抑制するに、何等の益するものなきは、要するに縮小の方便が其要點に觸れざるが故なるのみ。而して政府が高橋是清氏の說論に與して、今日まで通貨收縮の計を講ぜざるは、必ずしも高橋氏の理論を是認したの結果に非ず。政友會內閣如何に識見に乏しと雖も、其閣員中に通貨と物價との關係に就て、正當の理解を有する者ある可く、否所屬議員中にも高橋氏の說論を根柢とする政策に異論を懷く者あるやに傳へらる。然も依然として通貨問題に就て、正論を主張し、通貨縮小政策を實現するの機運を醸成するに努力する者なきは、畢竟通貨縮小の商工業に及ぼす影響を掛念し、又政黨として商工業界に人氣を失墜するを顧慮するが故なる可し。世間の人氣の得喪を生命とする政黨內閣としては、斯る邊に意を廻すことも亦已むを得ざる可しと雖も、吾輩は之を以て政黨內閣なるものが黨利を先にして國利を後にする弊害の甚だしきものとせざるを得ず。

金利上進し、金融亦緊縮せんか、第一に影響を受くるものは株式市場にして、株式の市價の低落すると共に、市況亦沈衰す可く、第二に昨今尚ほ跡を絕たざる新事業の如き、株式市場に打擊を蒙り、金融緊縮するときは、自ら中途に挫折す可く、第三に金融の緊縮は既設事業の經營にも困難を招かざるを得ざる可し。

以上の諸影響たる金利引上、通貨收縮に伴ふ經濟的現象として、免かるゝ能はざる所にして、世間に通貨縮小を非なりとする議論あるは、畢竟斯る現象の發生に依て、商工業に不景氣を誘致するを恐るゝものなる可しと雖も、是等の現象に接することなくして、能く、我國經濟社會を常態に復せしたるの道ありや否や。既往數年を通じて、我國の經濟社會が所謂戰爭景氣に依て、繁昌を告げつゝありし間、商工業者の間には、戰時利益の幾分を蓄積して、事業の基礎を鞏固にしたるもの少なしとせず。現に諸種會社の增資を行ひ、積立金を增加し、固定資本を銷却したる一方に、幾多の個人事業が會社事業に組織を改めたるが如き、幾く商工業の基礎を堅實ならしめたる證據とす可く、隨て今後金利上進し、通貨收縮するも、爲めに影響を蒙るは經濟社會の一小部面にして、他の大部面は一時の變動に堪へ得るの實力を備ふるものとす可し。而して其一小部面たる、基礎の薄弱なる事業、成否の不明なる事業、若しくは着手後未成の事業に外な

らすとすれば、是等の貨幣の回收することに依て、一方に通貨收縮、物價低落の結果として、國民生活の窮狀を救濟するを得るは、何等憚る所ありとす可からず。是れぞ俗に所謂小の蟲を殺して、大の蟲を生かすものにして、政治の局に當る者が此大小の蟲を辨別する能はずとせんか、施政の能力を有せざるものと許するの外なかる可きのみ。現内閣が今や斯る無能力者たるの事實を實際政治の業績に依て、暴露しつゝあるは、憐れむ可しとす。

最高價格の公定

政府が確乎たる決心を以て、通貨を收縮するの方針に出でんか、一般物價は自ら低落す可く、將來の代價騰貴を豫想して、行はれつゝある買占賣惜みの如きも、代價低落の傾勢を示すときには、忽にして其跡を絶つに至る可し、唯物價騰貴の程度を如何なる點に抑制すれば、國民生活を安易ならしむを得るやは、物資の種類に依て、異なる所あると共に、通貨の收縮に依て、物價に及ぼす影響は其普偏的なる代りに、時に緊切急速なるを得ざる場合あるを以て、通貨の收縮の効果を補助するの一端として、或る種類の物資に限り、其最高價格を公定して、一方に投機取引の行はるゝ流弊を絶ち、他の一方に生産者の收むる可き利益の限度を或る標準に置くの必要あることを認めざる可からず。

米價の如き、最高價格公定の場合に、第一に其目的物たる可きものなることは、萬人の信を置きて、疑はざる所なり。然も吾輩は最高價格を決定する場合には、米とか、薪炭とか、特に或る限られたる少數の物資に止まらず、國民の生活に關係を有する多數の物資に對して、此制度を適用するを必要とするものなり。從來政府が物價を調節するに當り、唯一の米價を取つて、之を低落せしむれば、百事足れりとするが如き態度に出でたるは、米が我國民の生活に重要の關係あるの故を以てなる可く、又米價にして低落すれば、諸種の物價をも低落せしむるに至る効果あるの故を以てなる可しと雖も、吾輩は斯る調節策には其根柢に於て、大なる誤謬の存することを認めざる能はざりき。蓋し今日我國の農民は如何なる寒村僻邑に居る者と雖も、自給自足の生活を營む者に非ず、其多くは米穀を賣りて、一方に日常の生活に於て必要とする諸般の物資を購うものなるが故に、後者の代價の甚く騰貴せる今日の如き場合に於て、獨り前者の代價のみを低落せしめんか、地方農民の經濟に大なる窮迫を加へざれば已まず。我國の米價調節策は幸か不幸か、今日に至るまで、何等の効を奏せざりしを以て、地方農民間に物議の生ずるも、なきを得たれ、若し實質的に米價を低落せしめたりとせんか、殆

民は何故に一般の物價、換言すれば自己が生活上に於て購入する物資の代價を高貴なる儘に措きて、獨り自己の賣却する米の代價のみを低廉ならしむるの不公正を爲すやの點に就て、政府に抗議す可きは勿論にして、此抗議には充分の理由ありとせざる可からず。故に物資の最高價格を決定する場合には、都鄙全體を通じて、國民の生活に必要とする物資例へば、米、麥、綿布、木材、薪炭、石油、砂糖等の價格を公定するの處置に出づることの肝要なるや、論を俟たざるなり。

然れども最高價格の公定たる、之を言ふに易くして、行ふに難きの事情あり。獨り米價を制限して、一方に農民の購入する物資の代價を制限せざるの不公正は、曩に之を論じたるが、今政府が或る製造品の價格を公定し、之を市場の自由競爭に依て定まるものよりも、低くしたりとせんか、消費者は此公定に依て、利益ある地位に立つ可しと雖も、生産者に價格の騰貴したる原料品を使用し、又自己の雇入るゝ勞働者に對して、高貴なる賃銀を支拂ひつゝあるものなりとすれば、獨り製造品の代價の公定せらるゝことに依て、大なる不利益を蒙らざるを得ず。玆に於てか、國家が最高價格公定の政策を施す場合には、一より二に、二より三に、殆ど際限なく各種の貨物に對して、價格公定の手を及ぼさゞる可からず。然も一の製造品が何を原料品とし、而して其原料の代價が如何なる程度に居るや、一の製造品を得る爲めに、幾何の勞働若しくは勤勞を必要とし、之に對して、幾何の賃銀報酬を支拂ひたるやを精査し、一方に生産者に公正の利潤を保證しつゝ適當なる價格を公定するは、極めて錯雜したる問題にして、政府が如何なる機關を設けて、其行政を掌らしむるも、實行上に大なる困難を感ぜざるを得ず。然らば物價問題を解決するには、國民の生活に重要なる關係を有する物資に對して、價格を公定するに止まらず、更に一歩を進め、斯る物資を生産製造する事業を挙げて、國家の所有に移し、國家自ら生産の局に當り、自己と消費者たる國民との利益を調和する點に於て定められたる價格を以て、物資の分配を掌るを可なりとす。通貨問題を放擲し、最高價格公定問題を閑却し、國家管理制度の問題を看過しつゝある政府が物價問題の解決に就て、結局如何なる難關に陥る可きや、政府の苦むは吾輩の深く意とする所に非す、唯之が爲めに國民生活が益々紛糾したる狀態に推移するの一事は吾輩の掛念に堪へざる所なり。

餘論

吾輩は今夏長野縣諸地方を遊歴して、多數の地方人士に會見し、時事の問題に就て、意見を交換するの機會を得たるが、地方人士が農作に、養蠶に大なる利益を收めつゝあるに拘はらず、

尙ほ現在の經濟組織に滿足する能はず、種々の方面に改革を必要とするの意見に傾したり。即ち彼等は商工業の好景氣に伴ひ、近年意想外の利益を收めたるに相違なしと雖も、一方に自己並に家族の勤勞を役することの大なるものあり、又兩三年來の利益は多く積年の負債を償還するの用に供せられ、此以外に剩るもの大ならず。然るに大都會に於ては殆ど自己の勤勞を役することなくして、巨額の利益を獲取する者の少なからざるに拘はらず、地方人の利益は之を目の敵の如くにして、米價調節を急とするは何故なるか、政府は宜しく都鄙を通じて、公正ならざる可からずと云ふは、彼等が異口一樣に叫ぶ所にして、吾輩亦其所說に一理の存することを認めざるを得ざるなり。米價の公定固より可なり、殊に同時の公定も亦不可なりと云はず。然も一つの物價を選んで、之を調節し、又一の物價を取つて、其價格を公定するは、共に經濟社會に於ける公正の關係を維持する所以に非ず、更に經濟組織の根本的改造を企劃し、荷も勤勞を役せずして、富を獲得するが如き弊風を一掃し、又人の勤勞に依て蒙れる苦痛や、犧牲と勤勞に對する報酬との間に、均衡を保たしむるは當面の急務として、之を解決するに非されば、如何に物價の調節に腐心するも、經濟の調節は到底實際に見る能はざるものと知る可きなり。

思想上の十字路に迷へる米國

——世界文明の指導者か威嚇者か——

永井柳太郎

一

凡そ一代の文明を指導する如き國民の背後には、常に一代の思想を指導する如き大哲人がある。希臘が起り、初めて歐洲文明の基礎を確立したるは紀元前五世紀乃至四世紀の事であるが、之より前希臘の思想界は、既にミレートス、エレア、ピタゴラス及ソフィストの諸學派を成し、殊にソクラテス、プラトー

ン及アリストテレス等の出づるに及んで、希臘哲學は其全盛時代に達した。此等の大哲人が啻に希臘のみならず、又全世界に於ける一般人心の傾向、希望及信仰を決するに偉大なる勢力を有したるは、歴史上爭ひ難き事實であつて、西洋古代の思想史は殆ど全く希臘思想史である。中世より近代に渉り世界文明を指導する地位に立ちしは英吉利・佛蘭西及獨逸等の諸國なるが、此等の諸國も亦孰れも一代の思想界を指導するに足る大哲人を產出せし國々である。例へばトーマス・ホッブスの如き、デッド・ヒュームの如き、ジョン・ロックの如き、ゼレミー・ベンサムの如き、ジョン・スチュアート・ミルの如き、又ハーバート・スペンサーの如き、此等は單に英吉利の大思想家たるのみならず、又世界の大思想家である。殊に所謂經驗學派の發生及進歩は主として英吉利の功業であるから、英吉利の思想史を知らざれば、世界の思想史を解する事が出來ない。佛蘭西は十七世紀の頃既に歐洲の大國として世界に雄飛したけれども、其文明史上に於ける最も重大なる時期に到達したるは佛蘭西革命以後である。即ち佛蘭西革命の炬火は、獨り佛蘭西に於ける專制政治のみならず、又全歐洲に於ける專制政治を燼滅せんとする勢を以て蔓延した。那翁戰爭に際し、戰場に於て佛蘭西の軍隊を撃破したる英吉利及東歐羅巴諸國も、佛蘭西より侵入し來る自由革命の思想に敵する能はず、或は民主國となり、或は立憲政治を起して、ために歐洲文明は一新紀元を劃したのである。而して佛蘭西が世界文明史上に如斯き大業をなしたる所以のものは、モンテスキュー、ヴォルテール及ルッソーの如き大思想家が相次で出現したるに由る事大なるは勿論である。若し夫れ獨逸に至つては文藝復興時代より既に哲學勃興の氣運を有し、殊にカント出づるに及んで所謂批評哲學の新見地を開き、世界哲學を全然未見の境地に導いた。世人は一時獨逸の帝國主義を非難し、之を以て卑近なる領土的欲望の發現に過ぎざる如く解したりと雖も、之は決して正解でない。固より多數の獨逸國民中には卑俗なる領土的野心よりして帝國主義を信じた者もあつたであらうが、少くとも獨逸國民を指導すべき地位にありし人々は、ニイチエや、トライチケや、ベルンハーデイー等の帝國主義哲學に心醉し、獨逸文明の世界的優越に關する一大信念を有したるは事實である。此信念が獨逸國民の血となり、又肉となり、遂に獨逸國民を驅て今度の大戰に見たるが如き驚天動地の大活動に出でしめたのであつた。而してニイチエや、トライチケや、ベルンハーデイー等の帝國主義哲學も、又決して偶然に起りしにあらず、其思想の背後にはフイヒテや、シエリンクや、ヘーゲル等の大哲學者あるを爭ふ事が出來ない。即ち其强き自我の觀念は、此等

の十八世紀後半より十九世紀の中に輩出したる理想主義哲學者の理想に於て既に其萌芽を見た。殊にフイヒテ氏が萬有の根元を我に歸し、我は靜かなる一個の存在にあらずして、實は活動其者なりとしたる思想は、自ら帝國主義哲學の倫理的前提を成したのである。而してフイヒテや、シエリングや、ヘーゲル等の哲學も亦、其根本思想は凡てカントに出でたる事を思はゞ、誰か獨逸國民の帝國主義的活動の淵源する所の深且大なるに驚かさる者ぞ。如斯く孰れの國民に於ても、偉大なる活動の背後には常に偉大なる思想があり、燦然たる文明史の中心には、必づ燦然たる哲學史がある。

二

此點より見る時は、米國は尚未だ眞に世界文明を指導する地位に達して居ない。蓋し米國は其建國が比較的新しきのみならず、其國土は所謂新開地にして、國民の多數は出稼人若くは出稼人の子孫であるから、單に哲學のみならず、文學でも文藝術でも、其發達は未だ甚だ幼稚である。米國の太平洋岸に於ける都市を訪ふ者は、必ずやホテルと土地賣買廣告と活動寫眞館との多數なるに驚くであらう。ホテルの多數なるは、彼等が尚未だ遊牧の生活を脱せず、利益を追ふて轉々しつゝある證據である。土地賣買廣告の多數なるは、未開墾地多く、新來の資本及勞力を必要とすることの如何に大なるかを示すものである。小さき活動寫眞館のみ多きにして、大きなるを見る事稀なるに、彼等の趣味が低級にして、高等なる娯樂を鑑賞する素養に乏しき反映である。固より太平洋岸の大都市に於ては、大劇場とか大オペラ館とか云ふものが決して少からざるのみならず、此等の場所に消費せらるゝる金額も亦年々激增するを算し、マダム・テットラジニをして「若しオペラに投ずる金錢の多寡に依り其都市の音樂趣味を判斷し得とせば、紐育は當に世界第一の音樂都市なるべし。」と嘆ぜしめた程であるけれども、其演藝の内容に至ては、之を歐洲のそれに比して、到底貧弱の譏を免かれない。教育普及の程度も、日本に及ばざる事遠く、日本の小學校に於ける就學者の割合が學齡兒童百人に付九八・六一なるに對し、米國のそれは僅かに七九・八一に過ぎぬ。從て米國人と稱するも、米國語を解し能はざる者多く、本年二月米國上下兩院の教育調査委員が發表したる報告書を見るに、十歳以上の米國人にして英語を讀み能はざる者約八百五十萬を算し、内五百五十萬は啻に英語のみならず、他の如何なる國語をも讀み能はずと云ふ。内務卿レーンが大統領に上書し、歐洲派遣の米兵二百萬中、英語の命令書を讀み能はざる者二十萬に達する事を陳述し、「如斯き軍隊を以て果して眞に民主々義を擁護し得べきや。」と云へるは、實に當然の

變遷である。

故に今日の米國は、其思想上の進歩に於ては、未だ遙かに歐洲に及ばぬ。英吉利哲學とか佛蘭西哲學とか、又獨逸哲學とか云ふと同一意味に於ける米國哲學なるものは、未だ存在しないのである。固より米國に於ても、今後文明が發達し、社會が進歩すると共に、哲學思想も變遷し、遂には米國獨特の哲學を産するに至るであらうけれども、今日まで米國哲學者として知られたる者の多くは、唯に外國の思想を借り來り、之に部分的修正を加へて米國の社會狀態に適合せる學說を立てたと云ふに過ぎぬのであつて、未だ他國の學者の主張したる事なき獨創的思想を出すに至らない。エマーソンは米國の代表的思想家である。彼が十八世紀の終りから十九世紀の初めに亘りて米國に存在したる諸種の思想に嚴正批判を施し、米國思想を改造したる功績は蔽ふべからずと雖も、然もエマソーン自身の思想は、其獨創にあらずして、多く古代希臘の思想である。プラグマティズムは一見革命的哲學と見えるが、之も其實は舊來の英國經驗論の稍進化したる變形に他ならぬ。現にジエームス自身も其著「プラグマティズム」に於て其哲學は新しき名稱を有する舊き思想に過ぎざる事を自白して居る。米國人は米國を以て民主々義の大本山の如く吹聽するけれども、民主々義に關する哲學其者でも、決して米國に於て顯著なる發達を遂げて居ない。米國に於て民主々義に關する眞摯なる大著作と云へば、ド・トクィギールの「米國に於ける民主政治」及ジエームス・ブライスの「米國共和政體」の二つであるが、前者は佛蘭西人であり、後者は英吉利人である。土着の米國人中に於ても、或はゴッドギンとか、或はモーゼスとか、或はギッディングスとか、或はエリオットとか、或はローウエルとか、民主々義に關する哲學的又は科學的考察を試みた者がないではないが、孰れも未だ國民思想を指導するに足る權威を以て許す事は出來ない。從て米國人の民主々義的理想には不徹底なる所頗る多く、唯自己の經濟的利益と一致する場合に於てのみ之を主張すれども、苟くも自己の經濟的利益に反すれば、直ちに之を捨てゝ顧みざる傾向がある。米國政府が戰時中軍事公債を募集するに當り、各所に廣告して"Fight and earn interest for you at the same time" と叫びたるは、能く米國に於ける一般民衆の心理狀態を理解したるものにして、同時に又米國人の所謂民主々義が如何なる程度のものであるかを說明するのである。故ルーズヴエルトは屢々ウイルソンの民主々義を嘲り、獨逸が中立條約を蹂躙して白耳義に侵入したる時早く之と戰はずして、却て獨逸が米國の利益を脅すに及んで初めて宣戰し以て民主々義のために戰ふと稱するの矛盾を指摘し

たりと雖も、ルーズヴェルト自身の率ゐたる共和黨も亦獨自の帝國主義を排斥しつゝ、自ら帝國主義の異名同體たる「世界の米化」を繼承しつゝではないか。之を要するに米國は尚未だ世界を指導するに足る大理想を持たぬ。其主張する民主々義も之を約言すれば自利的民主々義と云ふを得べく、其適用は人に依て異り、時に依て變じ、矛盾、撞着及錯亂を免かれざる者である。

三

此矛盾、撞着及錯亂に富む米國が媾和會議を指導せんとしたる事は唯さへ矛盾、撞着及錯亂に陷り易き媾和會議を一層大なる矛盾、撞着及錯亂に導いた。國際聯盟は米國大統領の發議に出ると雖も、最先に其精神を蹂躙したるは、米國自身である。將一に國際聯盟をして眞に世界平和の有效なる保障たらしめんと欲せば、國際裁判の權威を確立する事が急務である。而して國際裁判の權威を確立するためには、勢ひ其聯盟に屬する諸國の主權を制限せざるを得ぬ。若し聯盟諸國が孰れも絶對自由の主權を固執し、如何なる場合に於ても其制限を受くる事を肯ぜざるに於ては、國際聯盟ありと雖も、實は國際無政府に等しく、世界平和の保障は不可能である。蓋し國際聯盟なるものは、決して今日に始つたのではない。千六百四十八年既に羅馬帝國の皇帝、諸侯及佛蘭西王の間に三十年戰爭の災禍を復たびせざる事を保障する目的を以て國際聯盟を成立し、千七百十一年西班牙王位繼承戰爭後に於ても亦同様の聯盟を見た。次で千七百十三年ウトレヒト條約あり、更に廣汎なる範圍に於ける平和同盟を出現し、千八百十五年那翁戰爭後に於ても、又歐洲平和を保障するを名として英、墺、普、露の四國間に國際聯盟を結成したのであつた。然るに此等の相繼ぎて起れる國際聯盟が孰れも、其目的を貫徹するに至らずして、空しく瓦解したるは何故なるかと云ふに、聯盟各國自身が其運命を國際聯盟の保護に托するの誠意なく、各自絶對自由の主權を主張して止まざりしがためである。故に今度の國際聯盟を組織するに際しても、眞に其成功を欲するならば、先づ發議者たる米國自身進んで其運命を國際聯盟の保護に托し、國際裁判の權威を確立するがために必要なる犧牲は、之を拂ふに躊躇せざるべき筈であつた。然るに米國は最初より絶對に其主權を束縛するが如き義務を負ふを欲せず、其元老院は國際聯盟に關する協議の進行中に於ても、幾度か米國は其主權を束縛せらるゝが如き義務を負ふて國際聯盟に加入するよりも寧ろ完全無缺の主權を保持して國際聯盟に加入せざるを得策とすと宣明した。如斯くにして國際聯盟條約が規定したる國際裁判なるものは、其實質に於て、多く從來の國際裁判に異なる所なく、各國は各々其獨立又は國體に關すと認むべき重大問題は、假令

國際裁判の判決を仰ぐも、之に服從せざるの自由を留保するに至つたのである。殊に米國が英吉利及佛蘭西と共に、國際聯盟以外に於て、別に防禦同盟を組織したるが如きは、米國自ら國際聯盟の効力を否認し、其價値を信ぜざるに等しく、世界人類の國際聯盟に對する信仰を破壞したる事大なりと云はざるを得ぬ。如斯きは實に國際聯盟の發議者としては一大矛盾であるのみならず、又國際聯盟に對する一大迫害である。

四

第二に國際聯盟なるものは武斷的帝國主義に對して世界各民族の獨立、自由及平和の保障を目的とするのであるから、其根本思想は世界的自由主義又は國際的機會均等主義であらねばならぬ。故に異人種なる故を以て特殊の民族を排斥し、又他民族と同等の待遇を與ふるを拒むが如きは、國際聯盟の根本思想に反する事大なりと云ふべく、米國にして眞に世界的自由主義又は國際的機會均等主義を徹底せしめんと欲したらんには、當然人種の相異に基く移民排斥法の撤廢に贊成しなければならぬのであつた。

全體米國の面積は三百萬方哩を超ゆるに拘らず、其人口は尙未だ一億に過ぎぬ。從て百里の平野へ未だ犂鋤を入れず、千古の森林嘗て斧鉞を加へざる者多く、ロッキー山脈以西十一州の如きは一平方哩の平均人口八・一を出でないのである。故に日本人の如き勤勉にして農業に熟達せる移民を入れて之を開懇せしむる事は、彼我兩者の利益であらねばならぬ。戰時中米國が歐洲聯合國に於ける砂糖の缺乏を補ふがため多量の砂糖を輸出し、遂に米國自身砂糖の缺乏に苦みたる時の如きも、若し日本移民を招致して西部又は南部の未開墾地にシュガー・ビーツの栽培をさせたならば、數ケ月にして其供給は增大したるべく、米國人自身顏を歪がめて苦がい珈琲や茶を飲む必要はなかつたであらう。米國人中には日本移民の生活程度低きを非難し、其入國を許可する時は米國勞働者も亦之と競爭する必要上遂に自己の生活程度をも低下せざるべからざる危險ありとなす者多きも、米國に於ける日本移民の生活程度低きは現存せる米國々法の罪である。米國の法律は日本人の歸化權を認めざるのみならず、太平洋岸諸州の如きは日本人の土地所有權及長期借地權をすら否認するのである。從て日本移民は勢ひ入國の翌日より既に歸國の準備に取掛らざるを得ない。然るに彼等が歸國の時、自ら攜帶し得べきものは、唯金錢のみであるから、日本移民が出來得る限り衣食住の費用を節約し、生活程度の低下を顧みず、汲々として金錢の貯蓄に腐心するは、寧ろ當然である。故に日本移民は、其貯蓄額に於て、毫も米國勞働者に劣らざるのみならず、

等しく日本移民と雖も、合衆國政府の方法に依りたに土地所有權を獲得したる者は、其生活程度に於ても、又其家族の教育に於ても決して米國人に比して劣つて居ない。況んや日本は開國以來率先して獨逸の勢力を東洋より驅逐し、世界文明及世界平和の樹立に貢獻したる點に於て、如何なる聯合國にも譲らぬのであるから、戰後日本國民が、如何なる場合に於ても、此等の聯合國民と對等の待遇を受くべきは當然の事にして、米國が一方に於て世界的自由主義又は國際的機會均等主義を唱へつゝあるに拘らず、他方に於て戰前獨逸、墺地利及伊太利の諸國民に與へたる程度の待遇をだに之を日本國民に及ぼす事を拒むが如きは、實に矛盾、撞着及錯亂も亦甚しと云ふべきである。

然かし假りに米國の日本移民を排斥するは、其眞意にあらずして、已むを得ざる内部の事情に出でたりとするも、若し米國にして眞に世界的自由主義又は國際的機會均等主義を信じ、出來得る限りの機會に於て之を實現せんとするの熱誠を有したらんには、少くとも今度新たに國際聯盟の領土となれる舊獨逸植民地だけは之を國際聯盟に屬する各國民に開放し、以て世界的自由主義又は國際的機會均等主義に基く模範社會を建設するに努力すべき筈である。然るに米國は此當然なる世界の改造をだに試みず、却て濠洲が其委任統治すべき領土を濠洲の不可分

[illegible]とするに同意し、暗默の裡に濠洲が其不當なる[illegible]の効力を永遠に持續せんとするを承認したるが如きは、實に一大矛盾にあらずして何ぞ。蓋し米國人のみならず、一般にアングロサクソン人種に屬する諸國民は、有色人種に對して、他の白人種よりも一層残忍である。英、米孰れの領土に於ても多數の黑人種が居るが、此等の黑人種に至ては、從て奴隷として賣買せられ、今は解放せられて自由の市民たりと雖も、其境遇の悲惨なる殆ど昔日の奴隷に異ならぬ。米國南部の如き、白人と黑人との生活は全然隔離され、黑人は白人と結婚し、又其近隣に居住する事能はざるのみならず、席を同うして汽車電車及汽船に乘る事さへも出來ない。如斯き状態であるから兩者は屢々衝突するのであるが、衝突の結果動もすればリンチングの如き残忍なる行爲が起る。米國に於けるリンチングは次第に減少しつゝありと稱せらるゝも、千九百十七年に於て約七十の多きを算した。英、米兩國民が此人種的感情を去り、眞に自由、平等及友愛の大精神を以て有色人種に接せざる限り、彼等は白人種の指導者となる事は出來るかも知れぬが、決して全人類の指導者となる事は出來ない。

第三に米國は國際聯盟の規約中特にモンロー主義を公認する一條を挾む事に努力したのであるが、如斯き努力も亦國際聯盟の精神に反する事大なりと云はざるを得ぬ。モンロー主義は千八百二十三年時の大統領モンロー氏の宣言したる所にして、其根本精神は新舊世界自ら別ありと云ふに存する。即ち歐洲は歐洲人自ら之を治むべく、米大陸は米人自ら之を統べ、敢へて他の容喙を許さずと云ふのであるから、其根本思想は人類活動の地方的封鎖であつて、一種の封建思想である。今や封建思想は前世紀の遺物に屬し、苟くも眞に自由、平等及友愛の大義を信ずる者は、孰れも世界は全人類の世界たらざるべからずと云ふ自覺を有するに至つた。國際聯盟の新規約も、此自覺を實現するを目的としてこそ有意義であるのに、其發議者たる米國自身が其規約中モンロー主義を公認せん事を求むるが如きは、實に米國自身國際聯盟の世界文明史的意味を蹂躙したるものである。然かも米國が一方に於てモンロー主義を主張すると同時に、他方に於ても亦米大陸以外の大陸に絶對に干渉せざるならば、稍恕すべきであるけれども、米國自身は毫もモンロー主義の精神を奉ぜず、屢々世界の政治に干渉しつゝ、獨り他國に對してのみモンロー主義を公認せん事を迫るのであるから、米國の態度は、事實に於て、世界的帝國主義のそれである。現に今度の講和會議に於ても、米國全權は唯に米大陸の問題のみならず、歐羅巴、亞細亞及阿弗利加等の諸問題に容喙し、其背後に於ける國力の強大を頼んで殆ど世界に號令せんとする概があつたではないか。

米國人は屢々モンロー主義が過去に於てラテン・アメーカの分割を防ぐに有効なりし事を指摘し、將來に於ても亦缺くべからざるが如く論ずと雖も、ラテン共和國は今日既に獨立國として充分なる發達を遂げ、最早や如何なる強國と雖も、恣に之を分割する事能はず、假りに之を分割せんとする者あるも、國際聯盟をして其野心を制せしむるは容易である。然るにラテン・アメリカをして米國のみの保護に屬せしめ、國際聯盟の保護にすら之を托する事を肯せざるが如きは、之れ米國獨り南北兩米を壟斷せんとするものにあらずして何ぞ。墨耳其の前大統領ウエルタは曾てデーリー・テレグラフ記者に語りて曰く

「モンロー主義は既に其目的を遂げたり。ラテン共和國は尚未だ幼稚にして獨立し能はざる時代に於て、モンロー主義は能く其獨立を保ち、其發達を助けたりき。然れども今やラテン共和國は已に發達したるが故、強いて之を昔日の如く、他國に依りて監督し、又は訓練せんことは、却つて諸種の困難を惹起すべし。殊に米國の如く暴力を用ゐ、掠奪的精神を以て干渉を試むる場合に於て、特に甚しきを

見る。」

と云ふウエルタの人物に就きては種々の批評ありと雖も、吾等は其人の故を以て此言を棄つる事は出來ない。米國にあらざれば、實にラテン・アメリカを保護し、其發達を助くる者なしと云ふが如きは、彼の亞米利加人が常に亞米利加のみは、如何に強大となるも、世界の平和を威嚇する事なしと云ふと等しく、世界に通用せざる獨斷である。

六

如斯き矛盾、撞着及錯亂に富む米國が其戰時中に蓄積し又統一したる國力の強大を恃んで講和會議を指導する地位に立つた事は、寧ろ世界の不幸であつた。本年五月三日發行の英國雜誌ネーションが其社説に於て國際聯盟の指導者が孰れも世界の所謂強國にして、其根本思想は依然として強國專制主義なる事を痛罵し「國際聯盟に屬する各國が其國土の大小強弱に拘らず凡て同一の決議權を有するに至らざれば、國際聯盟は未だ以て眞に世界的民主々義を體現したるものと云ふ事能はざるなり。今日の如き國際聯盟は某々大國が共同的帝國主義を遂行せんとする一種の機關に過ぎざるのみ。」と云へるは至言である。然かし米國の矛盾、撞着及錯亂は、以上の場合に於けるよりも、露國に對する場合に於て、更に顯著である。米國大統領は參戰の當初より「民主主義を擁護」したるに係らず、[illegible]所ありたのみ[illegible]して、[illegible]しても所謂過激派なるものが、屡々世人の想像する如く、全然國家を破壞せんとする無政府主義者であるならば、如何なる國家も自己防衞のために之と戰はざるべからざるは當然である。然かし過激派は決して國家を否認しては居ない。彼等は革命以前の國家を以て資本家階級の利益を代表するものとなし、之を否認したけれども、新たに社會共存の倫理を基礎としたる社會主義的國家を建設せんとするのである。現に昨年七月十日に制定せられたる新憲法に於ても、彼等は其國を呼んで「露國社會主義聯邦ソヰエツト共和國」と稱し、其條文の劈頭に於て

「露國は勞働者、兵士及農民の代表者より成立せるソヰエツトの共和國なり。凡ての中央及地方の權力は此等のソヰエツトに屬す。

露國ソヰエツト共和國は自由なる民族の自由なる結合を基礎として組織せらる。故に幾多の民族的ソヰエツト共和國の聯盟なり。」

と宣言したるに徴するも、彼等の理想が現在の資本主義及帝國主義の國家を否認して、專ら民族自身の自由意志に基く社會主義的民族自決主義の國家を建設するに存するは明白である。故

に革命前の舊國家と革命後の新國家とは、其政治組織の根本思想を異にするけれども、兩者ともに權力服從の關係を認容する點に至つては、即ち一である。然るに米國は、其大統領の標榜としたる民族自決主義を自國の比律賓や、英國の愛蘭、埃及及印度や、凡て資本的膨張に必要なる地域に實現する事を肯ぜざりし如く、資本主義を否認し、資本的膨張を不可能ならしめんとする露國の過激派に適用する事を拒んだ。

フランシク・カールトン博士は其著「勞働組合史論」に於て「經濟社會は專制主義の最後の殘壘なり。」と云つて居るが、此言葉を最も適切に實證するは米國である。米國は千七百七十六年既に政治上に於ける專制主義を打破し、民主々義の基礎を確立したりと雖も、其經濟上の專制主義に至つては、尚未だ牢乎として拔くべからざるものがある。固より米國に於ける勞働者の勢力も決して微弱でない。サムエル・ゴムパースの率ゆる米國勞働聯盟は千八百八十一年僅に約三萬の會員を有したるに拘らず、今日既に四百萬に垂んたる狀態である。社會主義勞働黨及社會黨も、共に逐年發展し、彼のユージーン・デツブスの如きは千九百年の大統領選擧に於ける社會黨候補者として僅に八萬七千餘票を收めたるのみなるに、千九百十二年のそれには其得票九十萬を超えたのである。殊に戰時及戰後に於ける經濟上の混亂と思想上の變動とは著しく勞働者を刺激し、今や勞働者の非資本主義運動は未曾有の程度に發展しつゝあるけれども、元來米國に於ける資本主義の根柢は頗る深く、政治機關の要所には悉く其勢力を扶植してあるのだから、之を撲滅する事は一朝一夕の業でない。昨年の上下兩院議員改選に當り、民主黨は大統領以下必勝を期して戰つたに拘らず、却て共和黨が上下兩院を通じて勝利を收め得たるが如きも、其重大なる原因の一は、大統領が近來頻りに勞働者の歡心を求め、屢々自己に不利益なる法令を發布するに憤慨せる資本家が直接又は間接に共和黨を援助した事にある。殊に米國は、歐洲諸國と異り、各自生活を改善するの機會を得るは容易なるのみならず、其勞働者中に於ても、終生勞働者たる事を欲せず、速に資本家となるを目的とし渡米したる者少からざるが故、米國に於ける非資本主義運動は、之を歐洲諸國のそれに比ぶれば、其發展が容易でない。從つて米國の內治外交は、共に尚未だ資本家專制の弊風を脫する能はず、それが時に現れて二十億弗の貿易奬勵金支出となり、時に現れて所謂借款引受運動となる。而して大統領が其民族自決主義を露國に適用すべくして然かも之を適用し能はざりし所以も亦此に存するのである。

七

後世の歴史家をして自由に批判せしめたならば、文明史上に於ける最後の最大たる事に於て、米國の約現は到底露國の革命に若かずと云ふであらう。露國の革命はカール・マルクスの所謂階級戰爭を實現したものである。レーニン及トロツキーがカール・マルクスの學說を奉ずる者たる事は、彼等自身の著書に依て明白である。カール・マルクスの學說は、大體に於て之を(イ)唯物史觀、(ロ)餘剩價値說、(ハ)階級戰爭論の三部に分つ事が出來ると思ふが、此孰れに就ても從來種々の批評や疑惑が存在した。此等の批評や疑惑は當然レーニン及トロツキー等の思想にも及ぶべく、露國革命の經濟學上に於ける眞價を決定するは容易の業でない。然かし其經濟學上に於ける眞價が何うあらうとも、其文明史上に於ける意義に至つては、十八世紀末に於ける佛蘭西革命にも劣らざる程度に重大である。恰も佛蘭西革命の根本思想であつたルツソーの天賦人權論が學術上種々の非難を受けたにも拘らず、革命自身は當時歐洲に存在したる貴族專制に對して一般人民の抱懷せる反感に共鳴し、那翁戰後漸く歐洲諸國は自由民權の叫びに滿ち、續て之がために立憲政治の出現を見るに至りし如く、露國革命も亦其の經濟學上に於ける眞價に至つては種々の議論あるべけれども、多年資本家の壓制に呻吟せられたる各國に於ける勞働者の自覺を刺戟し、今や過去に於て

も例に[illegible]も、其資本家[illegible]共棄し、新たなる生産及分配の制度を樹立せんとするに至つた。之れ實に露國革命が文明史上に與へたる一大衝動と云ふべく、假令それが合理であるにせよ、不合理であるにせよ、又それが破壞的であるにせよ、建設的であるにせよ、遂に全世界人類の間に一の新理想を齎らしたる事實に至つては、米國が唯其國内の強大を恃んで新しき經濟の下に強て個人主義を行はんとするに比して遙かに大なるものありと云はなければならぬ。

固より米國人自身は、常に進化しつゝある。彼等は西洋人中最も進步的であつて、日進月歩せざれば止まざる國民である。殊に其大多數は歐洲人で、其歐洲人の性格に潜んで居る能力が、米國に於ける特殊の境遇に刺激せられて次第に發展し、遂に歐洲より出でゝ、然かも歐洲文明に與へし文明を組織せんとするのであるから、必ずや將來は文明史上に於ける大國民となるに相違ない。然かし今日の米國人は何未だ文明進化の中途に在りて其生活上に於ける理想の如きも、何等一定の確立したるものなく、大統領は屢々天下に宣言して民主々義を唱ふと雖も、其所謂民主々義なるものが獨立戰爭時代の單純なる政治的民主々義なるや、將た又進んで經濟的民主々義をも包含するものなるやに在つては、恐らく大統領自身も之を決し得ぬのである。べ

ルトランド・ラッセルが本年六月七日發行のネーション雜誌に於て米國が獨立戰爭時代の所謂自由主義を以て現代の世界に臨まんとするは既に一種の時代錯誤に屬する事を警告し、

「英國に於て勞働黨の內閣を組織するは近き將來にあり。佛、伊國亦之に從はん。然れども米國にして其强大なる勢力を提げて自由競爭主義に固執せんか、此等の新內閣は安定を得る事不可能なり。……知らず米國は依然として資本家專制を維持しつゝ、空虛なる自由主義の幻影を追はんとするや。將たゼファーソン時代の傳道的精神を振起し、世界に率先して眞に健全且自由なる新政治主義を鼓吹するや。之れ全人類の將來を左右すべき重大なる問題なり。」

と云へるは、唯に米國人のみならず、凡そ世界文明を指導せんとする野心を有する各國民の傾聽に値する。殊に今日の米國は屢々嶄新なる名詞と雄麗なる形容詞とを以て其行動を辯護すと雖も、其思想に至ては未だ資本主義と勞働主義、帝國主義と民族自決主義、白人專制主義と世界的機會均等主義、强力主義と人類主義の十字路に彷徨し、米國自身思想界の迷兒たる狀態を脫し得ないのであるから、今日の米國を以て强て世界文明を指導せんとする結果は、偶々以て世界文明を今日以上の矛盾撞着及錯亂に陷るゝ事となりはしないか。米國にして眞に世界文明を指導し、全人類をして如何に生くべきかを知らしめんと欲するならば、先づ米國自身如何に生くべきかを知るべきである。ニーチエは嘗て良心を論じ「人間の殘酷なる本能が外に向はずして內に向ひ、他を虐待する能はざるより自己を虐待せんとして現れ出てたるもの之れ良心なり。」と云つた。吾等は今爰にニーチエの良心論の是非を論ずるのではないが、少くとも最近に於ける米國の殘酷なる本能は、常に內に向ずして外にのみ向つて居る。而して其殘酷なる本能の向ひつゝある眞正面に立つは日本である。最近米國元老院議員中屢々日本を以て東洋若くは世界の威嚇（メネース）なりと罵る者あれども、日本と米國と孰れか眞に東洋及世界の威嚇なる。之を明瞭にして米國の反省を促がすは、啻に日本の權利なるのみならず、又世界文明の擁護である。

資本家の勞働問題觀

――武藤山治氏の「吾國勞働問題解決法」を讀む

法學博士 吉野作造

(一)

八月一日發行の「ダイヤモンド」に武藤山治氏の「我國勞働問題解決法」と云ふ長論文が載つて居る。同社より是非之を讀んで呉れろといふ丁寧な書面を添へて態々一部送つて呉れられたのは、恐らく執筆者の意思に依るものであらう。何れにしても予輩は此處に武藤氏並びに「ダイヤモンド」社に對して深く厚意を謝する。

武藤氏が我國の資本家中最もよく勞働問題に精通し、又勞働者に對して最も深き同情を有し、公正仁慈の紳士として嶄然頭角を抜き、常に各方面から多大の尊敬を受けて居ることは今更申す迄もない。此點に於て武藤氏の勞働問題に關する意見は、最も卓越せる資本家中の最も卓越せる代表的意見として大に傾聽するの價値あるものである。而かも同氏の「ダイヤモンド」一に寄せた論文は、五段組にギッシリと組んだ四六二倍の大形十二頁の長さに亘り、項目を分つこと十五、頗る精細を極めたるものである。之れ丈でも我等の研究欲を唆るに充分であるが、特に予は嘗て桑田博士の紹介に依り、或公共事業に同氏の援助を求めて、竊に同氏を徳として居る所から、特別の熱心を以て同氏の所論を讀んだのである。

然るに不幸にして予は同氏の論文を讀了して大に失望した。何に失望したかと云へば、同氏が全然勞働問題の意味を理解して居ない事である。そこで余は考へた、武藤氏程の紳士にして尚且つ斯くの如くんば、他の一般資本家の状態推して知るべきであると。果して然らば如何に政府が勞資協調を唱へても、如何に澁澤男が偉大の資本家を集めて双方の調停を試みやうと企てゝも、何の效果も挙る見込も無いではないか。何故ならば此等の運動の中堅となつて居る資本家階級の連中が、全然勞働問題の意味を了解して居ないからである。問題の意味を解せずして解

決を說くのは、恰も病状を究めずして投藥を說くが如きもので ある。之れでは先づ資本家に勞働問題を說くが先決の急務であらねばならぬ。之れ予が此一篇を草して、之を本誌の餘白に托する所以である。今頃こんな議論をするのは天下の識者に對しては全然無用の論であることは云ふ迄もない。

武藤氏が全然勞働問題の意味を解して居ないと云ふのは、氏が勞働問題に就いて何等の智識をも有つて居ないと云ふ意味ではない。勞働問題に關し氏が相當なる智識と經驗とを有することは世間公知の事實であり、又少くとも氏の論文を通しても十分に窺はれる。尤も平素文筆に親しんで居る人でないから、其發表された論文は體裁として整つても居ないし、又恐らく同氏の意見を十二分に云ひ盡したものではなからう。重大な點を云ひ殘したり、愚にもつかない一寸の思附きを仰々しく並べ立てた點も數々あるらしい。殊に自家の說を論證せんとして引いた例の中には、隨分滑稽な見當違ひもある。中にも鈴木梅四郎氏を批難した點の如きは（二二頁）最も著しきものであらう。けれども共等の細い點に亙つて一々揚げ足を取るやうなことを止めて、暫く同氏の腹になつて同氏の論文を繰り返して讀むと、勞働問題に關する同氏の立場は明かである。予の觀る所にして誤なくんば、同氏の考へは（一）我國の勞働問題は我國特有の方法に其解決を俟つべきこと、（二）勞働問題解決の前提として社會の各方面に亙り、勞働者の反感を挑發するが如き種々の禍根を去り、之と同時に勞働者の爲め種々の救濟方法を講ずること、（三）徒らに西洋の學理と流行とに追從して本地に波瀾を起す底の學者論客の勞働者煽動論を愼ましめ、併せて勞働者並びに資本家に自反自省を促すこと、（四）其上にて各種勞働の個々の場合に就き其實況を究め、適當なる解決案を勞働者資本家の協議に依つて定め、之が實行を政府に求むることの四點に歸着する。然し乍ら之れ丈でも明白なるが如く、かゝる立場は勞働問題を解して居ると云ふことゝ果して兩立し得るものであらうか。

（二）

予は武藤氏を以て全然今日の勞働問題の意義を理解して居ないと斷言した。何故に斯く斷言するかを說く前に、先づ勞働問題の意味を武藤氏は如何に理解して居るかを明にして見よう。

勞働問題とは文字通りに解すれば、勞働に關する總ての問題を含む譯になる。然し之れでは、社會問題とは社會に關する總ての問題の事だと云ふと同じく、當今の用例ではない。そこで勞働問題とは勞働に關して何う云ふ事を要求するのかゞ問題となる。此點に就いて武藤氏は何う觀て居らるゝか。

第一に武藤氏は勞働問題とは個々の勞働者の生活上の利益等

福の増進を計る事と考へて居らるゝやうだ。資本組織に於ては資本と勞働との一般關係如何の如きは全然同氏の念頭に無い。であるから氏は動もすれば勞働問題を、解決するには、先づ個々の勞働者の境遇を知らなければならないとか、又、個々の勞働者の要求に通じなければならないとか云ふ。恰度醫者が病人に藥を盛るやうなもので、個々の勞働者に就き其利益幸福を計つてやらなければならないのだから、なかなか複雜な問題で外間の人の容易に手を下し得る問題でない。「斯く勞働者の性質に依り同一ならず、一概に論ずべからざることを第一に了解し置かざるべからず」と云つて居る。從つて氏の見解に依れば、勞働問題などは局外の學者などが抽象的に論じ得べきものではないのである。是れ同氏が「學者中盛に勞働問題を論ずる者」を以て、學者の本分に背く者となし、特に第十一編に於て大に警告せられて居る所以である。氏は曰ふ、勞働問題は各種の勞働者に對して各別の意見を要する。予の如き明治廿七年以來紡績業に身を委ね、紡績職工に關する勞働問題のみにても尚常に不敏を感ずるものなるに、學者が流行に驅られ單に統計を手にして斯かる複雜なる實際問題に立ち入り、又立ち入らんと欲する者の如く心得、傍若無人の態度を示すのは甚だ見苦しくもあり、又何の役にも立たないと(一八頁)。之に依つて氏が如何に勞働問題を中心として[illegible]。

然し乍ら今日の勞働問題の本質は[illegible]るゝ如きものではない。個々の勞働者の境遇が[illegible]る點、當時に之を改善して遣りたいと[illegible]勞働問題の[illegible]者であつた。今日に於ても勞働問題が此形に於て提供せらるゝ事が無いではない。然し乍ら今日の勞働問題は如何なる形に於て之を説くにしろ、常に必ず產業組織に於ける勞働と資本との[illegible]しき關係に置くと云ふ思想的背景を根據として居る。今日の產業組織に於て資本と勞働とは共に缺くべからざる二大要素である。然るに此兩者が比較にならぬ程其境遇を同じうせざるは果して正當なことであらうか。懶惰放埒の結果貧乏するのは致し方がない。勤勉であつても尚且つ貧乏せねばならぬとは、之れ也つた運命として諦めねばならぬ事だらうか。之を[illegible]を得ざる運命だとするなら、封建時代の百姓の如く虐げられたまゝ何等の怨言をも發しなかつたらう。然し今日の勞働者は、否、世人一般は之を正當な關係と認めない。若し勞資兩者が產業組織に於て各々正當の地歩を占めるやうになつたら、殊更に地位の向上を計つてやらなくとも、勞働者の利益幸福は自ら増進するであらう。少くとも今日の勞働問題はこゝに根[illegible]置いて居ると云へる。今は餘りに勞働者の境遇が惨めだから、[illegible]利益幸福の増進を

要求するのだけれども、よしんば利益分配が相當に増進されても、勞働對資本の正當なる關係が確立せられたと認めらるゝ迄は、勞働問題は其跡を絶たない、現に西洋では立派に飯の食へる、否、相當裕福なる勞働者程勞働問題に熱中して居るではないか。此等の點に武藤氏は更らに觸れて居ない。氏は自ら「余は明治廿八年以來此仲間の中に在りて、女工を以て未だ獨立せる判斷力を有せざる娘と考へる。其保護者として總て余の經營法を實行し來れり」(一四頁)と誇つて居られる。而して氏の今日迄の經營は眞に誇示するに足る立派なものであることは普く世に知る所であるけれども、而し斯うさへして置けば勞働問題は起らない、又、勞働問題の解決は之に盡きて居ると考へるなら大なる誤である。

(三)

武藤氏が勞働問題の本義が勞働對資本の正當なる關係の確立に在りといふ事に如何に無理解であるかは、同氏の配當率論(一八頁)にも表はれて居る。昨今世上で各種株の驚くべき高率の配當を攻撃して居る事は隱れもない事實であるが、武藤氏は世間で之を攻撃する意味を正當に理解して居ない。同氏の觀る所に據ると、配當率の高きは即ち資本主の利益の大いなるを語るものなりとして、資本家の貪慾が非難の的となつて居る。之れに對して配當率の高低は必ずしも資本の利益の大小を論ずるの基礎となるものでないと抗辯して居るのは、聊か詭辯を弄するの嫌なからずと思ふが、何れにしても之れのみが配當高率を難ずる理由ではない。無論世間には此點から資本家を罵倒するものが頗る多い。之れにも相當の理由ありと思ふが、もう一つは假りに資本の利益の大小と關係が無いとしても、配當率の高い事は物價及び勞働者を犧牲にして不當に資本家を利するものであるといふ非難を、武藤氏は曾て考へた事があるか。勞働問題の本質を明かにする爲めに、予輩は少しく此事に就いて同氏の考慮を煩はさう。

手つ取り早く例を以て述べる。此處に一萬五千圓の現金を有つて居るものがあるとする。之を元にして時價三百五十圓の鐘紡株百株を買つたとする。之を其儘擔保として銀行から二萬圓を借り、最初の一萬五千圓と合せて殘金の支拂を完了した。一年の終りに收支の計算が何うなるかと云ふに、一割の配當は百株に對して三千五百圓である。二萬圓の銀行利子は年八分と見て千六百圓である。すると純收入として千九百圓殘る。若し彼が一萬五千圓の現金を確實な銀行に定期預けにして置けば、年六分と見て僅に九百圓の收入あるに過ぎない。公債や債券を割安に買つたところが千圓を得ることが難しい。然らば彼が一

萬五千圓の現金所有者として當然得る所は多くとも千圓を出でないのに、偶々今日の資本主義的組織を巧みに利用することに因つて九百圓の餘分の收入を得た。之れ資本家たることに由つて彼が初めて儲け得た所であつて、考へて見れば之れ程旨いことはない。僅に一萬五千圓の資本家にして斯くの如くであるから、もつと大きい資本家の利益の如何に大なるかは想像するに餘りある。斯う云ふと人或は紡績の投資には危險を伴ふと言ふ。理窟はさうだけれども、實際鐘紡株に對する投資の如きは、銀行に預金するよりも確實なりとせられて居る。多少の危險を冒す積りなら、もつと巨額の利益を僥倖することが出來る。其處で茲に予輩は大事な問題が潜んで居ると思ふのである。卽ち當該産業に殆ど何等與ることと無くして、而かも借金までして株を買つたものが、普通に與へらるべき額の殆ど二倍に相當する收入を得るのは何ういふ財源から惹き出されたか。他の言葉を以て云へば、所謂資本家の其餘分の收入は、必ずや他の當然の要求權あるものを害して得たものと觀なければならない。然らば其隱れたる被害者は何かと云ふに、之れ疑もなく第一には勞働者であり、第二には社會其物である。卽ち資本家は社會及び勞働者を犧牲にして不當の暴利を貪つて居る。と云つて予は此處に資本家の横暴を責める積りはない。之は固より資本家の責任ではない。斯の如き不當なる事實の生ずるを許し、否、寧ろこを助長するところの今日の制度が惡い。眞の責任は資本家にあらずして資本主義にある。資本主義の惡いのは喋々之を論ずる[illegible]故に世間は之を攻擊するのである。詳しく云へば資本主義の惡いことを攻擊するのではなくして、偶々之に因つて暴露された資本勞働の正しくない關係を非難するのである。此點は予輩の特に深く武藤氏の反省を求めんとする點である。

第二に武藤氏は今日の勞働問題が勞働者が資本家に對抗して、喧嘩腰になつて賃銀の値上げや時間の短縮を要求するといふ形に表はれて居るのを非難して居る。今日勞働問題を提げて起つ勞働者が、動もすれば資本家を敵視するのは、予の武藤氏と共に甚だ遺憾とする所である。勞働問題に關する勞働者の要求は、本來必ずしも資本家と喧嘩しなくとも解決し得ないではない。尤も此見解に對しては一部の社會主義者の間に異論あることは知つて居る。けれども今日は勞働者が其要求の貫徹に熱中して、遂に資本家を敵視せんとするに至つたに就ては、深く且つ大に考ふべき點がある。武藤氏は此點を甚だ無造作に解釋して居られる。卽ち一つには資本家の態度などに勞働者の反感を挑發するやうな事があつた爲め、又一つには西洋の勞資對抗主義を錯つて實情に疎き輕薄なる學者論客が、本來溫情主義を以

て資本家と結ばれて居つた勞働者を煽動した爲めと觀て居る。然し單に之れだけであらうか。更に進んで同氏は資本家といふものは「誠に罪なき他愛なきものにて……………富を作るが樂みにて、あとは他人の取るに任せ、自分は其内にあつて餓死するものなり……………金の顏を見るが樂みにて……………一旦金を手に握れば之を他の方法にて取り去るも、さほど反抗せざるものなり」(二十頁)と言つて居る。「勞働時間の減少や賃銀の増加の如きはなるべく控へ目にして、他の勞働者の利益幸福となるべき種々の方法を研究し……………資本家側の團體に相談せば存外容易に實行し得べし」(二十頁)と觀て居る。武藤氏自身は斯ういふのんびりした態度で居らるるに相違なからんも、一般の資本家に氏と同じやうな態度を望むことが出來るだらうか。今日の資本家を好く見るのは餘りに樂觀に過ぎて、武藤氏の口から出たればこそ之も氏自身の感情として眞假もすれ、若し之れが他の一般資本家の口より發せられたか、勞働者は言ふまでもなく一般世人も亦、人を馬鹿にするも程があると大いに憤慨するであらう。何れにしても武藤氏の見解は鐘ヶ淵紡績の勞働者を納得せしむることが出來たとしても、一般の勞働者を納得せしむることは斷じて出來ない。況んや其上多數の其限者おや。

予輩の見る所に依れば(此處ト予輩は最近多くの交友を得

者間に存し、其見聞と經驗とに基ゐて立論することを明言して置く。)勞働者はもと〱徒らに資本家と對抗することを好むものではない。けれども勞働資本間の正當なる關係の一般的確立は、之を一に資本家の誠意に恃んで安心すべき問題ではない。株の所有は一種の掠奪なりと覺悟して之を賣拂つても何の役にも立たないと同じく、武藤氏のみが勞働者を正當に取扱つても、一般の問題は依然として舊の如くである。從て勞働問題の解釋は之が資本家個人の誠意にのみ托するを得ず、何うしても制度の力に俟たなければならない。然し制度改革に由つて根本的の改善を圖らうとすれば、之れに反對するものは何時でも資本家だ。此處に於て勞働運動は其活動の第一着に於て資本家と鬪はねばならぬことになる。先づ勞働者が資本家に對抗して物を言ひ得るようにならう、それまでは一時の損害は忍ばうと云ふのである。此處まで來るには西洋と言はず、日本と言はず、勞働者間から言へば實に長い〱我慢を經たのである。之を顧慮することなく漫然と資本家と對抗するのは惡い、兎や角文句を言ふのは却て勞働者の爲めではないと云ふのでは、何うして勞働者を納得せしむることが出來ようか。若し夫れ氏が「資本家と常に相反目せば、今日は何と云つても我國の政治家は資本家の味方となりて勞働者の要求を顧みざるべければ、勞働時間や賃銀の要求は

達しても結局其の目的は來らざる」（二一一頁）と論評するに至つては、之れ寧ろ勞働者の反感を挑發するに過ぎない。予輩は勞働者が極度に資本家を敵視するを非とする。從て此點に關する夫のボルシエヴイズムに贊成しない。武藤氏のボルシエヴイズム觀（一九頁）は誤解と曲解の甚だしいものであるけれども、唯氏が此點に於て勞働者を戒めんとするの精神には同情する。之れ予が前々號に於て「勞働運動の人道主義的指導」を說ける所以である。けれども勞働者が其主張を貫徹するが爲めに資本家と對抗せざるを得ざる所以に至つては　亦之れに無限の同情を寄せるものである。之れだけの理解あるもののみが始めて勞働者に向つて其態度の穩健を要求する資格がある。

武藤氏は資本家對抗を非とする許りでない。之に依つて達せんとする勞働時間の短縮及び賃銀の値上げをも必ずしも勞働者の眞の利益ではないと言つて居る。少くとも之れだけでは勞働者の眞の利益增進は來ないと言つて居る。氏は曰ふ「單に勞働時間の長短や賃銀の高下のみを以て勞働者の利益の大小と爲すが如きも、斯くの如きは大なる誤りにして資本家が斯くして失ふ所は直ちに勞働者に向つて其勞働力の增進を迫り、之を償はんことを求むべし」（一三頁）と。又曰ふ、勞働者は資本家と折衝して其要求を達しても、單にそれだけでは何回やつても命は常に[illegible]の向上は資本家のそれに比すれば、比較にならない[illegible]（一一頁）と。氏の議論の誤謬は之を指摘すべく許りに明白であるから略する。唯予輩は武藤氏が此要求を反問して何を求めよと勞働者に教へたかを調べて見よう。不幸にして氏は他の方法に據れとか、種々の方法を研究しろとか言つて、其細目を與へて居ない。唯一つ「賃銀や時間などとは比較にならざる重要問題」の一例として擧げてゐる所は實業補習教育機關の完全なる設備である（二一頁）之に由つて予輩は武藤氏が如何に今日の勞働問題に無理解であり、今日の勞働者の要求に盲目であるかを明かにし得た。氏は貧民の子弟に對する實業教育とに比較にならざる數多き大學を設立するの案を採用して多額の國費を投じ」たるの故を以て中橋文相を攻擊して居るが（一一頁）、併し今日の勞働者は貧民の子弟でも大學に入り得るやうにして欲しいと要求して居るのである。否、經濟組織が正義の要求に合するやうに改造せらるれば、吾々の子弟でも優に大學の教育を受け得ると確信して居るのである。實業補習教育位で甘んずるのが本來の運命と諦める位なら、何も勞働問題などと騷ぎはしない。中橋文相の遣り方が正しかつたと裏書するではないけれども、武藤氏の此點に關する所論は餘りに要點を逸して居るのを遺憾と

する。

（日）

第三に武藤氏は近頃の日本に於ける勞働問題は主として學者論客の騷ぎ立てるが爲に起つて居ると觀ることに於て、更に一層の無理解を暴露して居る。氏は曰ふ「勞働者本人の勞働問題に干與するもの少く、學者の間に於ける議論の方が高きこと、恰も明治の初めに於て國會開設の囂しきと同樣の觀あり」（一三頁）と。氏の觀る所に據れば日本の勞働者の大部分は小作人である。工場に働く者は比較的少數なるに、其少數なる者の大部分も亦西洋とは全く境遇を異にし、傭主との間に溫情を以て結ばれて居るから、本當に勞働運動に熱中する者は本來極めて少數である。西洋では過去に於て資本家の勞働者を虐待した時代が久しいが、日本では最近まで主に家庭工業で傭主・被傭者との間には一家内の如き溫情が存し、物質上の取扱は不良でも精神上の感じは寧ろ良かつたと云つて居る。さうして見ると氏は勞働問題といふものは、勞働者の虐待されて居る處に於て、其虐待されて居る勞働者のみが騷ぎ立つる問題であると觀て居る。之だけを明かにしても、以て如何に氏が勞働問題の何たるかを知らないといふ事が明白であらう。所謂工場勞働者の大多數は傭主と溫情を以て結ばれて居るから、勞働問題の解決を西洋流に解決するの必要が無いといふ此考は氏が別の所で、「之（溫情主義）を以て現時の勞働問題を解決せんとするの不條理なるは明かなり」（一三頁）と說かれたことと如何に調和が出來るかは、吾々に取つては大いなる疑問であるが、併し現に武藤氏は所謂溫情主義論者たることを疑なきが故に、此事は別に項を改めて論ずることにしよう。此處には唯今日我國の工場勞働には所謂溫情關係は失くなりつゝある。昔は有つたとしても之が段々失くなることは當然の筋道である。此事は武藤氏が全く別問題に置いた所の小作人に就いても同樣に云へると思ふ。即ち傭主と被傭者との關係は昔は彼と此と直接相對するの人情の關係であつた。凶作の時には特に窮狀を愬へて地主の人情に縋ることも出來た。否、凶作の時ばかりではない一家に不時の災厄があつた時でも、情を愬へて地主の哀憐を乞ふことも出來た。其代り又地主の側に事あれば、小作人は進んで其爲めにいろいろ骨を折ることを惜しまない。けども此頃は此地主と小作人との關係でさ規則づくめになり、殊に少し大きい地主になると月給を以つて雇つた小作事務監理者を置いて直接小作人との交渉に當らしむるから其間に人情を訴へる餘地が無い。何ういふ特別の窮迫の事情があつても、定つた小作料を遲滯なく支拂はざるべからざると、恰も租税の納付を怠るべからざると同樣である。若し夫れ工場勞

働に至つては営業の甚だしい。縦一本立つたからとて規定の金額以外一銭でも餘計に出す者があるか。偶々情を加へる者があつても、雇主は冷然として曰ふ、事情は氣の毒だけれども會社もそれ〳〵の規定があるから此上何とも致し方が無いと。斯くして双方の關係は全然人格的關係から非人格的の契約關係になつて居るではないか。之は資本主義の經濟組織に伴ふ當然の結果であつて、國の東西に亙つて其趣を異にすべき譯のものではない。日本と雖も此例に洩るゝとは出來ず、現に漸々非人格的關係になり進みつゝあるではないか。甚だしきに至つては今日尚未だ人格的關係に支配さるゝの餘地ある下女下男との關係の如く、彼等に對しては殆ど全人格を擧げて奉仕せねばならぬ程の大いなる義務を要求しながら、彼等に對して殆ど契約以上の義務は少しも之を負はさらんとして居るではないか。斯く當今の趨勢を如實に且つ先入の偏見なく觀察する時は、我國の勞働狀態は一歩一歩西洋の夫に近づきつゝあるとを見る。之を資本家が勞働者を虐待すると觀るのは、西洋の事を說く場合と我國の事を說く場合とを問はず、失當の言であつて咎むべきは資本家にあらずして實は資本主義である。而して資本主義を其儘維持して而も之より生ずる弊害を除かんとする以上、所謂社會政策に依らなければならない。社會政策は即ち昔の封建的產業時代に於て主從の人格的關係にて解決したものを今日の非人格的關係の時代に解決せんとするものである。而して此社會政策は獨り資本家の温情に委すべき問題ではなくして、國家公共の問題である。之を國家公共の問題とする以上、勞働者が之を論ずるのは何の妨げが無い。否、此事に最も直接の關係ある勞働者が主として之を叫ぶのは亦自然の數である。今日我國で眞に心から勞働問題を叫ぶ勞働者は其數に於て案外少いかも知れない。然し我國は西洋とは事情を異にするから大多數の勞働者は勞働問題などを說かない筈であると觀るのは、途方も無い見當違ひである。我國には漫然西洋の學理に醉ふて其弊を受ける者も多いが、西洋と我國とは事情が異なるの、西洋の學理は直ちに我國に適用が無いなどといふ先入的偏見に捉へられて居る者も、上下各階級を通じて餘りに多數なるに驚かざるを得ない。

此處に予輩は温情主義に就いて一言武藤氏の反省を促したい。近來勞働問題を取扱ふ學者論客の殆ど全部が、所謂温情主義を排斥することに疑ふもない事實である。武藤氏は斯くの如き言論は甚だ勞働者を誤まるものとして學者論客に警告を與へて居るが、併し武藤氏は何故に學者論客の多數が温情主義を排斥するやを深く考へられたことがあるか。よつて予輩は分り切つた事ではあるけれども、温情主義に對する吾々の見解を此處

に明かにして置から。

最初に吾々は資本家の所謂溫情主義は、勞働問題の一解決法として之を排斥するといふ事を明かにして置きたい。單に之を資本家たる者は溫情を以て勞働者に接すべしといふ道德上の心得といふだけの意味ならば、何も反對する理由はない。さういふ意味ならば吾々は勞働者に向つても亦溫情主義を以て資本家に對せよと云へる。斯ういふ銘々の心掛けの事を言ふのならば、勞働者の實際境遇を知らない學者は其本分を守つて勞働問題を説かない方がいゝとか、又は勞働問題の何たるかを知らない資本家がうつかり此問題に手を染めて無識を天下に暴露しない方がいゝとか云ふの同じく、銘々の心掛けとして之を傾聽し、何等反對すべき理由は無い。けれども吾々は勞働問題を解決せんとして或は勞働組合のことを云々したり、賃銀や時間のことを云々する。之に對抗して資本家側が溫情主義を持出すのだから、吾々は之を解決策の一提案として受取り、又斯く觀て之に反對するのである。武藤氏は此點の觀方を誤つて居るのではないか。

解決方策としての溫情主義の賴み難きは云ふまでも無からう。何となれば一二の資本家が溫情を以て勞働者を恤んでも、天下の勞働問題は由つて以つて解決せらるるの見込無きのみならず、産業界に於ける今日の劇烈なる競爭の下に於ては、正義の要求するだけの溫情の傾倒を特殊の資本家に求むることは出來ない。少しでも資本家側の現在の利益を犧牲にする底の解決策は、何うしても之を國家の力に待つ、制度の形に具體化するとかが必要である。溫情主義では此事の實現は不可能だ、そこで全體としての資本と勞働との折衝になる。さうすると資本家はそれなら其問題を協調主義で行けと云ふ、之もいゝ。然しながら勞資の協調によつて問題を公平に解決せんとするには、其前提條件として先づ勞働を資本と對等の地位に置かなければならない。對等の地位に置かないで協調を云々するのは殿樣の平民主義と同樣で、甚だ當てになつたものではない。そこで協調を可能ならしむるといふ點から觀ても、勞働者として先づ其要求を權利として爭ひ得る地位まで上らしめて置くことが必要である。此點が實に勞働問題の根本であつて、即ち吾々が或は勞働組合權を主張し、或は同盟罷業權を主張する所以である。斯く云へばとて吾々は勞働問題を常に權利問題として爭はんとするのではない。權利問題として爭ひ得る地位を主張するのである。然るに所謂溫情主義者は資本家の誠意に信賴して、其要求を棄てよと云ふ。彼等は權利として要求せらるることを欲せざるが故のみならず、權利として要求し得るの地位をさへ與へん

としない。何處までも勞働者を奴隷的地位に甘んぜしめやうとするのだから、そこで温情主義に極力反抗するのである。もち武藤氏は資本家を産業組織の首腦者に戴くことは天命であつて、又必要だと云つて（二〇頁）、何處までも資本家の産業獨占を前提として居るから、勞働者の奴隷的地位は恰も封建時代の町人の如く、當然のものと考へられて居るのかも知れない。然らば氏が温情主義を説いて學者論客を警告されるのは、論理上正しいと云はなければならない。併し乍ら勞働と資本との間に斯くの如く主從の別を立てるといふことが、正しいか何うかが問題である。吾々は温情主義を排斥するからと云つて、一から十まで喧嘩腰に資本家に對抗するものではない。唯凡ての公平なる解釋は、當事者の双方を平等たる地位に置く時にのみ爲し得ることを主張するのみである。

此點に關して終りにもう一言したいのは、勞働問題を説く所謂學者の本分に關する氏の見解に就いてである。此事は何も福田博士や予輩の名が擧げられて居つたから兎や角言ふのではない。此點に關する氏の見解の中にも勞働問題に關する氏の著しき無理解が含まれて居ることを指摘し、並に世の資本家の反省を促したいからである。氏は勞働問題といふものは資本家から虐待されて居る勞働者が起すもので、而かも日本には此種の勞働者は至つて少いのに、學者は[illegible]西洋の學説を[illegible]こしらへを[illegible]くからむづかしい問題となして居る。吾々學者から言へば、と云へば直ぐに西洋の學説を振廻はすと速斷するのは、今日の學界に通ぜざる嗤ふべき觀察である。今日我國の學界は一から十まで西洋から輸入した器械で仕事をして居る[illegible]し、案外に西洋から獨立して居るのである。

此點は何うでもいゝ。此問題は學者が勞働者の利害休戚に關する問題を横合から説くのは僭越か否かの點である。勞働問題は虐げられて居る勞働者のみの問題とするなら、學者が之を説くのは僭越かも知れない。けれども吾々は勞働者が虐げられて居るといふこと、否、根本的には勞働と資本とが正しき關係に立つて居ないといふことを、單に勞働者のみの問題と見たい。昔國民問題が重要な政治上の問題であつたと同樣に、勞働者の生活が常に不安に襲はれて居るといふことは、社會の健康の爲めに等閑に附すべからざる大問題である。蓋し夫れ勞働資本の不正なる關係に至つては、之れ直に社會文化の進歩に至大の關係を有する問題である。然らば勞働問題は勞働者のみの問題でなくして一國文化の問題であり、從つて凡ての國民の問題である。資本家の問題であると同時に亦特に社會の先覺を以て任じて居る學者の問題でもある。唯斯くの如き問題は最も多く、又最も

直接に利害關係のある者から特に説かるるを自然とし又必要とする。如何に社會公共の問題でも、之と利害相反する者は兎角其解決に熱を有たないこと、恰も今日普通の資本家の如くである。故に實際問題としては勞働問題は勞働者の問題であり、又あらしめねばならぬ。然し勞働者が亦ぼんやりして此事に氣が附かないからと云つて安心すべき問題ではない。之れ即ち學者論客が其社會に對する本分を守り、時として勞働者に先立つて勞働問題を論じ、勞働者に其主張すべき所を指示するを要する所以である。「勞働者が考へもしない事を學者が云ふのは、時に勞働者に有難迷惑のもの無きにあらず」（一二頁）と云ふのは、勞働問題が同時に社會文化の問題であるといふことを知らざるより來る斷定である。尤も今日の學者論客の勞働問題を論ずる者、凡て其任務を適當に盡して居るか何うかは判らない。然し乍ら之を爲すのは武藤氏が此問題に手を着けるのと同様の誠意に出づるものにして、又偶々勞働問題の一文化問題たる所以を明かにするものである。

尚も一つ武藤氏に希望したきは、學者の態度を論ぜられる以上、少くとも其名指す所の學者の説は一應眞面目に讀まれんことである。福田博士の所論は知らず、少くとも予等に關する範圍に於ては、氏は予の論文を讀んで居られないことは明白である。何故なれば氏が「ダイヤモンド」所載の論文を起草された當時までは、予は勞働問題に關して殆ど何等纏つた意見を發表して居ないからである。

（五）

以上を以て氏が勞働問題を如何に觀て居るかを説いた。終りに同氏の所謂解決方策を觀てみよう。同氏は勞働問題とは畢竟勞働者の利益幸福を其個々の境遇に應じて謀つてやることだから、一般的原則を擧げる事は出來ない。勞働者の個々の所望につき、個々別々に調査研究して策を建つべきである。夫れが爲めには勞働者は須らく其反抗的態度を棄て、資本家と共同すべきであると言つて居る。而して今日勞働者が反抗的態度を取つて居るのは、一時の流行に驅られ、或は學者の説に迷はされたのであつて、其求むる處も畢竟眞に勞働者の爲めになるものではないと云ふ立場から、一方には學者に其本分を守らんことを求め、又一方にては勞働者にも自省を促して居る。唯武藤氏は社會の各方面に勞働者の反抗を挑發するが如き事實あるを認め、速に此等の原因を取除かんことを主張して居る。即ち氏の見解に從へば此等反抗挑發の原因を除けば、勞働者は喜んで資本家と提携するに至るべしと樂觀して居る。

然らば其の主要の原因として氏の擧ぐる所は何かと云へば一つは資本家にあり、一つは資本家にあり。も一つは政府其物にあり。更にも一つは勞働者に對する政府の怠慢にあると。此等の點に新なる施設を加へ、以て適に勞働者の反感を緩和すべしと說いて居る。政府其物に向つては、(一)認可權の整理、(二)大臣送迎の根絶、(三)帝室財產中林野及株券の處分と擧げて居る(一七頁)。又資本家側に對するものとしては、(一)綜淨稅の賦課、(二)實業界の廓淸、(三)特殊會社又は特殊事業の保護の全廢又は漸減、(四)銀行會社の重役使用人に對する官吏瀆職罪の適用、(五)取引所法の大改正、(六)實業界に於ける社交過多の弊風の改善を擧げて居る(一四—一五頁)。更に直接勞働者に對する政府の新施設としては、(一)勞働爭議に對する警察干涉の廢止、(二)勞働組合法の制定、(三)老衰者及病者救濟法の制定、(四)下級負擔の輕減、殊に輸入關稅及內國消費稅の全廢又は輕減、(五)下級者に對する資金の低利融通(一四—一七頁)を擧げて居る。

此等の方法に依つて果して能く勞働者の態度を武藤氏の希望するが如く更め得るや否やは大いなる疑問であるが、「勞働組合が出來たりとて、勞働者の利益[illegible]機關の如くならざる事は……甚だ明白なるも、今日の場合斯かる小問題にて勞働者及び其味方の運動を排斥するは賢明なる政策に非ず、寧ろ[illegible]……所々の弊害あり、之に過度の望みを繫ぐは誤りなるも……之を拒むは徒らに知識階級をして政府が資本家に味方し、下級の利益を無視する者と誤解せしめ、資本家に對する反感を強め、結局相互の爭を激成せしむることゝなるを以て、政府に於ては逆に勞働組合法制定の準備に着手し、其成立を妨ぐるよりも進んで之を助け」(一六頁)よと云ふやうな考が其基礎となつて居るのでは、緩和どころか却つて今日の勞働者を一層反撥せしむるに止まることはなからうか。

(六)

武藤氏は我國現下の資本家中勞働問題の一面に最も精通する人として、殊に勞働者に多大の同情を有する紳士として許されて居ることに、私も亦喜んで賛成する。けれども遺憾ながら予は現代勞働問題を少しでも理解する人として武藤氏を擧げる事には、絕對に贊同し能はざることを遺憾とする。現代勞働問題には疑もなく資本主義に對する深刻なる批判から發端する。從つて問題の此態度を承認するや否やは人に由つて各々見る所を異にしようも、少くとも此立場を理解しなくては勞働問題に喙を容るゝ資格はない。武藤氏が現下の勞働問題の共通の要求に贊成するや否やは問はずその勝手たけれども、予の信ずる所にして誤らず

ふば、氏は賛否の意見を發表する前に、先づ以つて勞働問題の意味の了解に努力する事が必要だ。

予が此　文の起草に着手したのは勞働問題に最も精通せるの評ある武藤氏にして尙且つ然る所以を明かにして、聊か資本家側の反省と併せて其冷靜なる將來の研究とを促さんとしたのであるが、其後新聞の報ずる所に據れば武藤氏は最も勞働問題に精通する人として今度の國際勞働會議に資本家の代表として列席せんとすとのことである。既に氏も亦之を承諾したと云ふことであるが、果して然らば吾輩の此論文は氏の受けたる此推薦に對する抗議の如くにも見える。併し斯の如きは予の當初の趣意に非ざるのみならず、現在に於ても斯の考はない。何となれば現代の資本家中氏を措いて然るべき人は無いからである。氏はあれでも勞働會議の代表者としては今日の日本に於て資本家中の最良のものであらう。氏の華盛頓に赴くことは予も亦熱心に之に賛成するに躊躇しないが、唯氏が今日の勞働問題の本質に關して全然無理解であることは蔽ふべからざる事實なるが故に愈々渡米すると云ふなら、尙更ら心機一轉して新に研究工夫せられんことを希望する。氏の聰明と同情とは必ずや此問題に關する氏の知識を一新し、且つ豐富ならしむるに相違ない。

次號卷頭論文豫告

個人策及び國策としての聖雄主義

杉森孝次郎

本號に掲載すべき筈なりし右論文は意外の長篇となつて本號締切までに僅かに三分の一より出來せざるを以て之を次號卷頭論文として發表することとなせり。著者が歸朝以來初めて自己の積極的人生觀を披攊せる此論文は必ずや大いに江湖の視聽を聳かすものあらん。

新聞印刷職工の罷業と新聞休刊事件

双方の失態と反省

（一）

室伏高信

いふまでもなく今度の新聞印刷職工のストライキは純同盟罷工と称せられるものではない。それはたゞ東京全體における各新聞社の印刷職工が一致してストライキに加はつたといふだけのことであるからこれを純同盟罷工と見ることは何等理由なきものである。その目的からいつてもそのストライキの經濟的重要性の程度からいつても、それはたゞのストライキであつて決して純同盟罷工とたさるべきものではない。けれどもそれが純同盟罷工であると否とにかゝわらず、またそれが經濟的にどれだけの重要性をもつてゐたかの如何にかゝわらず、この新聞印刷職工ストライキ問題は決して社會問題としての重要性を失ふものではない。繰返していへばこの新聞印刷職工のストライキは直接に經濟上に重要な影響を與へてゐるもではなく從つて勞働者對資本家の階級鬪爭の直接の效果は寧ろ微弱である。けれどもこのストライキについて看過することのできない特質はそれが單なる經濟問題として以外に一般的の非常な注意を集中したことである。ストライキは十月三十一日に始まつて四日間に亘つたその間の人心の不安は新聞紙の社會的に有する存在の意義の重要であることを反省せしめるのに充分であつた。諸多の新聞紙は復刊號で直にこの點を利用し諸家の意見を掲げて新聞紙の社會的地位とその營業上の利益のためにプロパガンダを實行することを怠らなかつたのである。けれども人々の反省はたゞこれだけにはとまつてゐなかつた。人々は、みなこの事件を通して、階級鬪爭の現實についての自覺にと入らないわけにはゆかなかつたのである。然り、この事件は日本における資本勞働兩階級の鬪爭の現實を人々の心のうちに深刻に自覺せしめた效果において日本に存在したる他の如何なるストライキよりも重要な價値をもつてゐる。從つてこのストライキは日本における歴史的のストライキの一つとして計へらるべきものでなくてはならない。

（二）

このストライキの原因としては勞働者の自覺、物價騰貴、世界的刺激、先行ストライキ特に博文館印刷職工ストライキの成功等の諸原因を計へることができる。原因は複雜である。凡ての事件の原因が複雜であるごとくにこの新聞印刷職工ストライキの原因もまた複雜である。けれどもこゝにいひえられることは、このストライキが少しも産業組合主義またはサンヂカリズムの機關としてのストライキの性質を帶びてゐないといふことである。卽ち純然たる職業別組合主義 Craft unionism の精神の範圍に止まつてゐるといふことである。從つて勞働者が現狀に不滿を抱き階級鬪爭の自覺をもつてゐるにしても、彼等はその次に來るべき社會について何等の明確なる理想をも抱いてゐないことを證據立てゝゐるものであり、また現狀打破の徹底したる理解をもつてゐないことを證據立てゝゐるものである。彼等の求むるところはたゞコレクチヴ・バアゲニングを通しての勞働條件の改善といふことであるに過ぎない。爭ひの凡ては物質的のものであり、問題の凡ては貧困の問題である。この點から見れば、彼等のストライキは、これを英國の勞働運動に比較して、一八八九年のドック・ストライキよりもより以前のものであるに過ぎない。ストライキとしては最も幼稚なストライキであり、勞働者の自覺としては自覺の第一歩であるにしか過ぎない。それは資本主義を承認してのストライキであり、勞働の商品性を前提としてのストライキであるに過ぎない。從つて勞働者の自覺といつてもそれはただ商品としての勞働の價格についての自覺であつて彼れが社會的に占めつゝある賃銀奴隷としての地位についての深刻な自覺ではない。だからこのストライキについての批評はたゞこの範圍においてのみの批評であることが必要であり、またこのストライキの價値といつてもたゞこの範圍内においてのみの價値であるに過ぎない。この點はこのストライキの地位を明確にするうへに第一に承知しなくてはならないことであると思ひます。

（三）

このストライキの目的はどこまでも勞働條件改善の一點だけである。その條件は一日八時間勞働、一週一日の休業、最低賃銀月額七十圓の三つである。この三條件を要求したのが勞働者側である。これに對して反對したのが資本家側である。先づ勞働時間について見る。勞働者の要求は八時間、一週四十八時間である。この要求は正當である。如何なる意味においてもこの要求を不當とすべき理由がない。否なそれは既に世界的に承認された原則である。その要求は今日においては寧ろ勞働者の要

来でにない。八時間労働が労働組合主義の看板であつた時代は既に去つた。米国における炭坑夫ストライキ問題について見るも、八時間労働は資本家側の主張である。労働者の要求は六時間労働である。否、資本家の側においてもレヴアハルム卿は六時間労働を主張してゐるのである。ゴムパアスの率ゐる米国の労働組合聯合は世界における最も旧式なる労働組合であり、またそれは労働界の貴族主義者であるとされてゐるほどであるにもかゝわらず、今や八時間労働よりも即ち一週四十八時間労働よりも更にその要求に一歩を進めるに至つてゐるのである。世界の趨勢はかくのごとくである。国際労働会議は近くこの問題を世界の労働者――世界の最も後れたる労働者のためにこの制度を確立しようとしつゝある。日本において、日本における資本主義の中心地としての大阪の實業家の代表者は紡績業者を除いて既に八時間労働制を承認するとに決定してゐるのである。それゆゑにわれ等は新聞職工の八時間労働の要求をもつて妥協的であるといふことはできるにしてもこれをもつて「不當」であるとなすべき何等の理由をもたないものである。これを不當であると主張したものとしては、私の承知してゐる範囲においては交詢社資本閥の代表者としての資本労働研究会と大阪における資本閥中の劣悪分子たる紡績業資本家の代表者とさうして東京新聞資本家の要望上の三者である。即ち日本においてさへもその資本主義的精神の最も昂宿せるものとして新聞資本家の醜態を挙げることができるのである。

（四）

第二には賃銀の問題である。最低賃銀を七十圓とすることは労働者の希望としては素より當然である。最低賃銀の性質がかれ及び彼れの家族の生存と相當の快樂とを保障することにある以上、月給七十圓の要求は必ずしも不當ではない。また物價騰貴が戰前に比し十三割に達してゐるにもかゝわらず新聞印刷職工の賃銀がそれに伴つてゐないとすれば、賃銀値上の要求が多少急激の内容をもつこともやむをえないことである。けれどもこの最低賃銀七十圓の要求は日本の今日の一般の生活状態からいへば多少隔りがある。他の一般の賃銀労働者に比べ、或はまた今日まで體力労働者よりも社會上優等の階級に屬するものと考へられてきた月給取階級 Salariat のうけてゐる收入に比べても、最低七十圓の要求は多少の隔りがある。この點は職工側の要求のうちで一大弱點であることを免れない。即ちこの最低七十圓の要求が汎く一般労働者の生活賃銀の標準を示し、これによつて一般労働者の生活の向上に資するといふ考であつたとすれば兎も角も、さうでないとすれば、新聞職工がその團結

のカを頼んで一般の標準と相當の隔りがあり、從つて世間をして職工側の要求を妥當でないと思はせる程度の要求をなすことは決してストライキの目的を達せしむる所以ではない。それは勞働者自身が自己の要求を正當なりとすることの確信を弱くする所以でないとともにまた社會的同情を喚起する所以でもないこうなるとストライキは半ば失敗の道を歩むでゐるのである。この場合において尚ほ職工側の主張に妥當性を與へまたはストライキを成功せしめる方法に三つある。その一つは職工側の賃銀要求についての計算の根據を示すことである。次に職工組合そのものの基礎の鞏固であることである。第三にはストライキの戰術に關するものである。先づその第一點について見るに、職工側はこの點において何等の用意もなかつた。彼等はこの點についての用意がなかつたのみならず、またその能力もなかつたように思はれる。素より凡ての勞働者にかゝる用意を望むことは不可能である。ウエッブの指摘してゐるとほり一般の勞働者は産業上の知識に缺けてゐる。これは各國に通じての事實である。けれども職工組合が成立してゐるとすれば、その組合の指導者の地位を占めてゐるものとしては當然にこの種の用意があつて然るべきではないか。その用意のなかつたことは資本家側に對する勞働者の鬪爭における一大弱點である。この弱點についての責任は組合——革進會の指導者がこれを負はなくてはならない。彼等が勞働組合の指導者として或はストライキの指導者としての能力を缺いてゐたことは明白である。次に職工側の團體について見る。この團體の發達の如何が直接にストライキの効果に影響することは勿論である。英國においてストライキが多く成功し、獨佛においてストライキが多く失敗してゐることは主として職工組合の發達の如何の問題である。(一九一二年に英國ではストライキの全然不成功に終つたものは〇・一パアセントであるに對し獨逸では同年に四三・六パアセントであり、佛國では四八・四八パアセントである)ところが新聞職工の組合即ち革進會なるものについて見るに成立後ストライキまで二週日、ストライキ、ファンドのないことは勿論である。そのうへにその會の指導者として擧げられてゐる人について見るも、それ等の人の政談演説家としての地位の如何は私の知らないところであるが、私は未だ嘗つて彼等が勞働問題の研究家であつたことを知らない。また彼等は勞働者自身でもない。素より私はこれ等の人々について批評せんとするものではない。それ等の人々に多くの美點の存在することも私の認めるところであり、率先して勞働運動に參加したる勇氣に對しては寧ろ多くの敬意を表するものであるが、またそれとゝもに彼等が今日のまゝで勞

盟組合の目的たり、作業進行の指導者としての、何等の適當なる要素をも發見することはできない。それにもかゝわらず、新聞印刷職工がこれ等の人々に絶大の權力を與へ勞働運動の指導者としての信用を繫つてきたことは彼等の團體の内部的缺陷を暴露するものであり、また從つてその勞働者團體としての威信を失墜し資本家をしてこれに乘ぜしめる所以となるものでなくてはならぬ。第三に彼等が各館の新聞紙に對して同時に要求を提示し且つ同時にストライキを宣言したことはその策戰において一大失態である。彼等の多くはこれをもつて總同盟罷工(ゼネラルストライキ)であるとなしてゐたようであるが、新聞事業のごときもの、即ち一國の重要産業として計へらるべきものでないものについては、總同盟罷工なるものは絶對に成立の餘地がないではないか。これをもつて總同盟罷工なりとなすことは總同盟罷工の意義と効果とを解せざるの結果であるに過ぎない。また彼等のあるものは、各社に亙つての罷工をもつて、一種の同情罷工(シンパシイストライキ)であるとなしてゐたようである。これもまた同情罷工の意義と効果とについて何等の理解もないことを證據立てゝゐるものである。彼等はよく團結した。團結は如何なる場合にも力である。けれどもその目的と効果とについて明確なる理解なくして行はれる團結は却つて屢々その敵を利するものである。各新聞社印刷職工の連盟はこれである。各新聞社の連盟は各社の資本家的利益に基いたことは明白である。そうして常に相互に競爭者である所の相對立し競ひつゝありたる新聞社資本家の間に共通の利益――勞働者に對する點において共通の利益のあることを自覺せしむるの動機を作ることゝなつた。新聞社の資本家聯盟の生れたことはかくのごとくにして職工側の拙劣なる策戰もまたその責任の一半を擔ふべきものである。さうしてまたその結果として東京において一枚の新聞紙も發行されず、從つて言論の自由を奪ひ文化的發展を阻害するの現象を導いたことは決して職工側の責任と切り離して考へらるべきことではない。こういふわけであるから今度の三十一日ストライキは職工側の態度に大に非議すべきところがあり、就中その指導者の無能と失態とは致命的のものであるといはなくてはならない。

（五）

職工側の失態よりも資本家側――新聞協會の失態は更により以上である。職工がその最低七十圓要求の計算の基礎についての何等の用意がなかつたごとく新聞協會側もまたそれを不當とすべき何等の根據をも示すことはできなかつたではないか。さうしてたゞ漫然として職工側の要求を不當なりとなしたに過ぎぬ。彼等は職工側の要求を不當なりとして世間に報告した。け

れども世間の聽かんとするところはかゝる抽象的の言葉ではない。職工側の要求が何故に不當であつたかについての具體的の説明である。平常多辯なる新聞紙、政黨の代辯をなし、政府の代辯をなすことの餘裕をもつてゐる新聞紙が何故にこの點について沈默を守つたのであるか。特に聽かんとすることは八時間勞働が何故に不當であるかの點である。平常その社説と稱する『幹部欄』において八時間勞働の正當なることを自ら主張してきた新聞紙が自らその使用する職工に對して八時間勞働を不當なりとすることには果して如何なる合理的根據があるか。われ等は新聞社の末席に列る一記者としてもまた讀者の立場としてもこの點を聽かんことを求めるものである。

(六)

それと同じ程度においてわれ等の理解に苦しむことは新聞社が職工の團結に對して自ら資本聯盟を組織して置きながら職工側の團體——團體としての存在と職能を認めなかつたこと即ちこれとコレクチヴ・バアゲニングをなすことを拒絶したることと並にロック・アウトを斷行したこととの二點である。先づ勞働組合の承認問題から見るに、彼等が資本家またはその閥團のものとしての立場を維持するため、即ちどこまでもニスキート、シヨップ』の立場を維持しようとするためには、勞働組合を承認しないことが便利であるにしても、勞働組合の承認は既に日本の今日の社會組織においても必然的に要求せられてゐるものであり、資本家の代辯者としての政府——原内閣でさへ既に勞働組合の公認にまで進んできた時に、平生社會の木鐸と自稱する新聞紙が何故に勞働組合の公認を拒絶するのであるか。否、彼等は既に社説欄を通して勞働組合の公認の必要なる所以を主張してきたにもかゝわらずその自己の利害の關する問題に逢着すると忽ちその態度を一變するに至るような輕薄な行動が果して新聞紙の社會的信用を増進せしむる所以であるか。また彼等が逸早くロック・アウトの擧に出でたことは、それが資本家的精神の發露であることの以外に、何等かの尤もらしい理由でもあるであらうか。

(七)

これを要するに今回のストライキに對して新聞協會のとつた態度は世人をして今日の新聞紙の信用と權威とに對して多くの疑惑を與へる原因にあらざるはない。彼等はその平常の言論に自ら裏切つた。彼等は社會の公平なる批評家であるよりも先づ彼等自身資本家であつた。彼等が八時間勞働を不當なりとして斥け、またロック・アウトを斷行して職工の無條件降伏を要求し、勞働組合を承認せずして勞働者の團結を妨げたことのこと

きは、資本家的根帶の品位といふことの以外に、何か世人を首肯せしむるの根據があるであらうか。これ等の問題は實に重大なる社會問題であるとともに實に新聞紙の信用と威力とに關する重要な問題である。彼等はこの點について先づ世間の疑惑を解かなくてはならぬ。これ彼等の世間に對する責任であるとともにまた新聞紙そのものに對する幹部としての彼等の當然の責任でなくてはならぬ。一新聞記者としてのわれ等にとつてはこの惑が一層痛切ならざるをえない。

（八）

今日までの日本の新聞紙の信用と威力とはたゞ極めて少數の人々――資本家またはその周圍の人々によつてのみ代表せられてきた。さうしてその結果は全體の新聞、全體の新聞記者の負はされるものであつた。新聞協會なるものがあつて資本聯盟を組織し春秋會なるものがあつて各社の幹部と稱する老巧者の聯盟を作つてゐる。聯盟は力である。その力は彼等の側にのみ存在し、彼等の側にのみ許されてゐる。これ等の資本家または老巧者の會議によつて決定せられてきたことは新聞界の凡てを支配した。彼等が絶對的の治者階級であるに對し大多數の新聞記者、大多數の新聞從業者は絶對的の被治者階級である。口にデモクラシーを唱道する新聞紙、口に社會改革を主張する新聞紙の多くはかくのごとくにしてその內部においてのオートクラシーであり、大多數の人々、新聞當局の大多數の人々は、彼等自身を語るべき何の自由も許されてはゐないのである。かくのごとくにして新聞紙は眞に健全なる發達を遂げることができるであらうか。かくのごとくにして新聞紙の社會的信用を増進し、その新聞紙の重要なる使命を完うしてゆくことができるであらうか。私は新聞紙の使命の何ものにも劣らざる重要なものであることを信ずる。これを信ずるが故に新聞紙の態度については深甚なる注意と嚴正なる批判とを與へざるをえない。さうしてこの立場から今度のストライキ事件に對してとりたる新聞社幹部派の態度をもつて拭ふべからざる失態であると信ずるものである。この失態は彼等の全部がこれを負はなくてはならぬ。私は思ふ、凡ての他のものと同じく、新聞紙もまた少數の老巧者から解放されなくてはならぬ。（八月十九日）

新聞印刷工同盟罷工事件の表裏及び批判

○○新聞記者 江湖歌容

一 罷工事件の經過

大正八年八月一日より四日に至る迄、日本帝國の首都に一枚の新聞をも見ることが出來なかつたと云ふことは、兎も角も珍らしいことであつた。斯くの如き事例は歐洲には絶對になく、米國に於ては唯だ千八百九十八年に市俄古に起つたとがある、此時は恰かも米西戰爭中であつて、米國側の大勝利も全新聞紙休刊の爲めに市民に傳はらず、市俄古市民は休刊中の四五日間、唯だ九十哩先きのミルオーキ新聞に依りて、纔かに新聞慾を充たしたといふことである。之れが日本に起つたのである。政治の首都、社會事變の首都、藝術の中心たる東京に起つたのである。問題は唯だ之れ丈のみとするも甚だ重大であると思ふ。然らば先づ其事實はドーであつたか。

（一）革新會の創立

社會主義的運動、勞働條件の叫び聲が、漸く全國に彌漫した結果として、最先に同盟罷工を實現したものは印刷工であつた、常に新聞、雜誌に於ける文字上の智識を吸收する印刷工は、當然に勞働者中の理解ある者であるからである。而して博文館の印刷工が極めて巧みに其運動に成功した理由も固より夫れに原因する。東京新聞印刷工も此大勢に順應すべく、整版部員は既に六月十五日芝區新櫻田町の八郡倶樂部に其事務所を設け、委員二十名を選擧して各新聞社を說き、且つ各職長及び工場監督官側の了解を得るに努めたのである。然るに從前より毎月二十日に開かれて居る各新聞社の職長會議なるものは、常に下級印刷工を脅迫して、徒らに新聞社主の鼻息を窺ふの嫌ひがあつたので、整版部員の新團體に職工長を加入せしむべきや否やに付き、會員間に色々の議論があつた。然しながら既に印刷工の同盟である以上、徒らに小感情に囚はるべきにあらずとして、結局は印刷工全部を網羅することゝなし、同二十日午前七時日本橋區の柳川亭に其創立總會を開催した。會するもの六百餘名、委任狀に依る出席者五百名と云ふ盛會であつたのである。午前七時と云ふ時間を定めたのは、其日の就業に支障なからしむることと、其日に開かるべき各社職工長會議に委員を出席せしめて、革新會側の意見を開陳せしむる必要からであつたらしい、斯くて新聞印刷工同盟の革新會は成立し、左の綱領を宣言した。

△[illegible]の爲めに[illegible]を開く事
△從業者の品格を高くする事
△從業者の生活を相互に保障する事
△從業者の利益に關し一致の行動を取る事
△從業者の勞働時間を減少する事
△從業者の日用品其他の購買の便を圖る事

最も生活を相互に保障する事。賃金に關し一致の行動を取る事の二項に關しては、雇主反對側に於て、當初削除を要求したものであるが、大勢如何ともすること出來なかつたのである。

八月一日を以て會報第一號を發刊することに付きては、會員中間より一人の反對もなかつたのであるが、會長を會員外、即ち世間の所謂名士に求むべきか否やに付きては、殆むど議論百出であつた。吾々は自己改造、自己救濟、自己革命の見地に立脚して、自個の權利と幸福とを主張するものである。今日の名士と稱するものは大體に於て權力閥、財閥の走狗である。會長は會員中より之を選擇すべしと云ふ議論もあつたが、結局指導者を得るの目的を以て、今井嘉幸博士、黑須龍太郎、横山勝太郎の二代議士中より之を求むることとし、各委員の投票に依りて横山氏が推薦され、革新會は形式内容を具備して、日本に於ける最初の勞働團體たるに至つたのである。

（二）　增給運動起る

時恰も東京日日新聞の會員は、七月、二十人の一早くも給料を要求した。是れは東京日日新聞が他社に比し給料は少いので、會社側より印刷工の生活費を調査したるに、印刷工側は家族持、家族五人平均として最低六拾五圓の要求をなし、會社側は五拾圓位を以て妥協せむとしたのであつた。日々新聞社は此形勢を豫見して、六拾圓内外を容認することとなつたとの風說ありし爲め、日日社會員の增給運動は、更に朝日社會員の結束を促し、同社に屬する革新會員は、猛烈に會社側に回答を迫りたる結果、會社は二十七日を以て承諾する旨を告げ、日日、朝日の兩社は大體に於て八時間勞働、其夜二部制、一週一日休暇を認めたる折柄、二十八日に至り讀賣新聞社に增給問題起り、延いて萬朝報社に及ぼし、事態容易ならざる形勢となつた。依りて革新會は三十日夜臨時幹事會を澁川亭に召集して應急策を議し、會長横山氏、並に『勞働世界』の主幹にして、博文館同盟事件に盡力した加藤勘十兩氏の出席を乞ひ、更に幹事會を大會に變更して、右の實際問題の討議に入り、其結果(一)八時間勞働(二)賃銀最低七拾圓(三)二部制度(四)一週一日休暇(五)利益配當の五ケ條を決議事項とし、横山、加藤二氏は右決議を齎して讀賣社に石黑理事を訪問した。然るに同理事は一言の下に之を拒絕して自由行動差支なき旨を返答したる爲め、會員の感情は

一時に激發し、漸く悲壯の調を帶るに至つたのである。之れより先き朝報社長黑岩涙香氏は、飛箋に接して三十日夜十一時歸京し、印刷工一同を編輯會議室に召集して、縷々數萬言、自分が過去十數年間、社會問題、勞働問題の提唱者、研究者たる歷史を語り、此際自社より諸君の同盟休業を見るに至るが如きことあらば、自分は社會的に公人たる生命を失はねばならぬ。必ず諸君の希望を認容さるゝことを條件として、就業せられたき旨を懇望した爲め、印刷工側も黑岩氏の熱誠に動され、徹夜して三十一日の朝刊を發行したが、讀賣新聞は同日より休刊し萬朝報も遂に夕刊を出すこと出來ず、時事新報社にも亦た同日より增給問題起り、東京全市新聞印刷工の總同盟罷業を惹起するに至つたのである。

〈三〉 新聞協會と黑岩涙香

新聞紙營業上の協定をなすことを目的とする新聞協會は、印刷工側の革新會成立するや、至大の注意を之れに拂ひつゝあつたが、二十八日讀賣社、朝報社の印刷工が、積極的、具體的に增給要望をなし、其結合頗ぶる鞏固なるものあるを看破するや、二十九日窃かに交詢社に會合して、從來各社營業部の主任を以て組織せられた協會を改めて、更に社主又は經營者を以てする會合となし、築地精養軒に事務所を置きて、印刷工側に應戰すべく決議した。蓋し黑岩涙香氏の策案に基いたものであらう、黑岩氏は係秋會に勢力を失ひてより悶々の色あり、今や風雲に乘じて縱橫の計策をなしたのである。蓋し此際時事、朝日、日日報知の各社は、略ぼ革新會の要求に近接する優遇方法を定めむとする場合であつたので、增給運動に痛切の利害を感ずるものは、寧ろ中流以下の新聞社であつた。此故に新聞協會を結束して、以上の大新聞社を第二流以下の新聞社の利害に一致せしむることは、萬朝報の爲めにも、涙香氏自身の勢力回復の爲めにも必要であつた。三十日夜より三十一日に亘りて、涙香氏が大車輪の暗中飛躍を遣つたことは無理ならぬことである。斯くて新聞協會は一面に於て職工長を利用して、革新會員の動靜を探らしめ、同會議の決議をも參酌して左の如き同盟決議をした。

△聯盟新聞社は大正八年八月一日以後全部休刊することを協約す
休刊中は號外其他如何なる名義を以てするも新聞を發行して頒賣することを得ず
△同盟罷工を爲したる職工に對しては當該新聞社に於て直に之を解雇することを約諾す
△本契約に違反したる新聞社は違約金一萬圓を聯盟に支拂ひ且つ印刷機械一切を封印せられ發行停止の强制執行を受くるも何等異議なきことを誓約す

之れに參加した新聞社は、朝日、報知、やまと、時事、日日

都、國民、毎夕、中外、毎日、讀賣、中央、二六、萬朝、帝國、大勢の十六社であつて、申合として休刊豫定を一ケ月とし、同時に職工全部に解雇通知をしたのである。洋紙問屋に交渉して他新聞社で從來以上の紙を販賣せしめぬ手段を取つたり、印刷工側の米屋中に供給を斷るものが出來たりしたのは、流石に機敏なものであつた。斯くて兩軍は愈々對峙するに至つたのである。

（四）警視廳の干渉

七月三十一日正午に總同盟罷工をした革新會は、横山會長が新聞協定の法律顧問たる鈴木富士彌氏を通じて交渉したるも、遂に峻拒せられた事實を聞き、各社一名の委員を擧げ、床次内相、阿部知事、各政黨本部、三宅雪嶺博士、福田博士、今井嘉幸、吉野博士、宮島次郎氏、貴衆兩院議長を訪問したるも、多く不在若くは面會拒絶の爲め、要領を得ざる間に解雇の通知に接したのである。依りて同會幹部は三十一日深更協議の結果、事務所を日本橋際の常盤木倶樂部に移して大會を開くことゝした、八月一日午前八時會員は炎暑を衝いて殺到し出席者八百名、加藤勘十氏議長席に着きて正九時に大會は開かれた。横山會長は交渉の全權を委任するや否やを議場に諮つた。會員中には條件付委任説もあつたが、結局は會長を信賴して全權を委任した。

然るに此時關警視總監の使者として來り、横山氏を別室に招きて會長の辭任を勸告し、且つ新聞紙は天下の公器、其全部休刊は人心の不安を喚起して、一大騷擾を誘發するの危險なるを説き、會長にして革新會員を屈服すること能はずんば、政府は緊急勅令を以て公安妨害罪に問擬するかも知れずと揚言した。而して更に之を會員の前に繰り返して、一場の訓示演説を試みた。此の前日より横山氏の友人等は、同氏の一身に危害あらむことを慮れ、頻りに脱退を勸告しつゝあつた關係もあり、横山氏は窮々進退に窮して、遂に關總監に調停を依賴したのである。關總監は之を諾し、午後八時三十分を期して回答することを約し、新聞協會と交渉の結果

△最低三拾ヶ圓最高六拾ヶ圓とする事
△夜勤賃金として一時貳拾錢平均支給の事
△勞働時間は各社の協定に依る事
△解雇職工の復職は各社の任意に由る事

の妥協條件を定めた。然し以上は全然從來通りの新聞社側の主張であつて、印刷工側の要求は毫末も加つて居らぬのである。換言すれば調停にあらずして壓迫であり屈服であるのである。午後八時半總監邸に赴き、新聞社側の案を示された横山氏は悄然として歸り、階下の一室に幹部會を開きて内容を示し、自ら使

命を完ふする能はざるは、過去十年間の公生涯に經驗したことなき失敗なる事、自己の微力を知らず漫然會長の職に就きたることの誤りなりしこと、今後若し諸君の生活に苦痛起らば、自ら私財を投じて應分の義務を盡すべきに付き、今回は枉げて之に應ぜられたし、諸君は明二日午前十時迄前雇主に入社を申出でられたし」と雄辯的に然かも熱情的に要望した、然るに讀賣社の會員先づ反對し、形勢混沌として定まらず、憤激感動して流涕するもの各所に起つた。唯だ各社幹部は既に横山氏に一任した以上、結果の善惡に係はらず之に服從し、大義名分に殉ずべしと會員を說き翌二日午前一時半散會するに至つた。

（五）　新聞社側の大勝利

革新會の幹部は掉尾の運動を試むべく、二日正午常盤木俱樂部に集合したが、形勢非にして各社の幹事を招致することが出來なかつた。夫れでも朝日、日日、時事、都の四社幹事は其態度を決する爲め、各社會員の意向を徵することに決し、朝日は八重洲俱樂部、時事は京橋區俱樂部、都は芝區琴平町の事務所に會諸して其意見を纏め、大會を京橋區新肴町の統一教會に開いた、雜誌「勞働世界」の社長にして立憲青年黨の總理と稱する橋本德馬氏の如き、當日出席して大に加藤勘十氏の不徹底なる態度を非難したが、同日午前既に横山會長より辭任屆けを郵送し來り、且つ革新會は事實上解散した狀態となりし爲め、何等の決議を見るに至らずして散會した。而かして一流の某社の如きは一日數千圓の損失を忍ぶよりも、寧ろ拾萬圓の違約金を提供して新聞を發行し、大に販路を擴張すべしとの論社内に起り、或は四日より發刊を見るべき勢ひとなつたので、若し斯くて拾萬圓能力あるものが、全部發刊するものとすれば四五の一流新聞を除き他は悉く廢刊の餘儀なきに至り、印刷工の增給運動は何等の結果を齎せざる次第となる爲め、印刷工中漸く其將來の不安を感ずるものあるに至つた。此機に乘じて其翌三日各新聞社は夫れ〴〵採用者を定め、讀賣社は四名の幹事會員を諭旨して二百圓宛の慰勞金を與へ、報知社も同樣解雇者に各二百圓を與へ、日日、國民、時事其他の各社は幹事會員の主なる者を解雇し、全く復舊狀態に入つたが、獨り朝日社會員のみは全部復社を條件とせざれば、新聞社側の交渉に應ぜずと結束し、新聞社側に五六人の不採用者あることを條件として下らず、形勢頗る印刷工側に有利であつた。茲に於て築地警察署長は仲裁と稱し、自動車二臺を其事務所に寄せて會員の主なる者の同行を求め、遂に其中十人を檢束するに至つたが、印刷工側の結合堅固にして、官憲の壓迫も其功なく、朝日新聞社のみは全部入社を承認し、斯くて各新聞社の印刷工は、四日より從前の如く就業したので

ある。即ち新聞印刷工同盟罷業事件は、全然資本主たる新聞社側の勝利に帰し、労働者たる印刷工側の運動は、何等の痕跡を留めずに失敗したのである。換言すれば斯くの如き巨大の労働運動にして、斯くの如く脆き最後を遂げたものはない、印刷工側に何等の加ふるところなくして、失ふところ甚だ多大なものがあるに至つたのである。

二　罷工事件の観察

世界戦争に依りて適切に開展せられた労働問題の解決は、今日既に日本国に於ても論議することを要せぬものとなつて居る、社会主義、労働条件の改善、資本家の横暴に対する反抗、此等の文章言論が如何に日出に熾烈に書かれてあるか、而して門閥頑冥なる官憲も、近頃は如何に之れを解放して居るか、固より架説を要せぬことである。故に印刷工同盟罷工事件の批評も、主義主張に関する理智の解剖よりも、主として其態度の事態の問題である。唯だ学者、政治家、弁護士と称する人々が、之れに対する研究と批判とを忘れて居るは何故であるか。之れは畢竟同盟が社会の報知機関たる新聞紙を一方の当事者とした関係上、其事件が世間に伝はらず、随つて正当な公判を下すことが不可能であること、及び其真相を闡明せさる批判が、却つて此問題を冷却せしめん為めであるまいか。新聞印刷工同盟罷業事件は其結果に於ては勿論失敗であつた。或る点に於ては当然の失敗であつた。夫れには新聞社側の横暴もあり、印刷工側の計画上の欠陥もあるが、問題を問題として取扱ふに於ては、其問題、其内容、其結果に於て重大なる意義を有して居るものと云はねばならぬ。私は以上の事実に基きて之れに対する感想を述べて見たいと思ふ。

（一）新聞社側の横暴と無責任

此事件に対する新聞社側の態度が、何等の理解と判断を有せざる資本主義的経営主の横暴であつたことは、殆むど争ふの余地がない。筆を揮べては官僚、資本家を攻撃し、英米に於ける資本主義的経済思想が、既に破綻を来して居ることを説き居る新聞社側が、自側の範疇より起つた労働運動に対して、何等の諒解と勇気とを有せず、進むで親しく印刷工側と膝を交へて、與ふべきものは之を與ふるの雅量を示さず、暴君に均しき高圧的の手段を取つたと云ふことは、実に情けなき次第である。勿論斯くの如きは何れなる資本、従来何れに認められた為めでもあらう。然しながら最新智識を誇る新聞社が、最も新しき工場の経営を行ひ、多年使用せる印刷工を敵視して、日本の同盟罷工に先例なき無条件降伏を強ゐたことなどは、實に驚くべき横暴と云はねばならぬ。印刷工同盟罷工事件に就きては、新聞社側に

一切沈默して居るから、之れに對する意見を知ることが出來ぬ唯だ新聞協會の法律顧問と稱する鈴木富士彌氏が、新聞記者に語つたところのものが、卽ち新聞社側を代表した意見であるやうに思ふ。それには此事件に於ける印刷工側の三個の誤解なるものを擧げて居る。其一は印刷工のみが新聞發行の要素であると思ふたことであると云ふ、之れに依れば新聞社側は同盟罷工を以て、單に新聞發行を不能ならしむると云ふ恐喝手段に依りて、不當の要求をなすものと見て居るらしい、之れは勞働問題同盟罷工の意義も本質も知らない舊時代の資本家の口吻で、苟くも新聞社とか辯護士とか云ふ時代思潮の先驅者たるものが、こんな馬鹿氣たことを云はれるものであらうか、其二には印刷工を增給するならば、其前に新聞記者を增俸せねばならぬ、印刷工が新聞記者より先むじて、增俸を受ける理由はないと、封建時代に於て武士のみが人であつて、百姓は奴隷であるから御手打差支なしと云ふやうた心持がする、何故に印刷工は新聞記者に先むじて、增俸を受けることが出來ぬか、記者も印刷工も同じく新聞發行に要する人であり力である。判任官は高等官に先むじて增俸を受ること能はずと云ふものあらば、時代錯誤の甚しきものでないか、其三として新聞社は營利事業でない、故に增給を求むべきでないと云ふか、今日の新聞紙に於て營利を目的とせざるもの幾千もない、營利を目的とせざるものでもそれは其經營者の政治上、實業上の或る目的に供せられて居るものである。公益事業でもなければ慈善事業でもない、若し此論を以てすれば朝日社、日日社、都社、時事社は增俸要求を受入して差支ない譯である。損をして居る新聞社の印刷工は無給で働かねばならぬ譯である。私は新聞社側が徒らに牽强附會の言を弄することを悲む、印刷工同盟罷工に於ける新聞社側の態度は、今後東京新聞紙が勞働問題を議するの資格なきこと、官僚軍閥などを攻擊することを得ざること、東京の新聞社なるものは無智無理解なること。平素の論議は唯だ口頭の禪たるに過ぎざることを暴露したもので、要するに言論の權威を失墜せしめたことは多大なるものである。八月五日後の各新聞紙は、卑怯にも同盟罷工、勞働運動の內外記事を減少した。之れは却つて一種の滑稽であるか、印刷工同盟罷工の含まれた精神は、斯くの如き壓迫と小細工に依りて消滅するものであらうか。現に朝日新聞社印刷工の如きは、復歸後に於て職長公選を主張して居ると云ふではないか、此際各新聞社は年來其紙上に主張したことを事實に具體するの意味に於て、徹底的の解決を下すべきである。更に奇怪なるは五日復刊後の新聞紙は、何れも四日間の休刊に付きて、責任を自覺して居らぬことである。印刷工が居

らぬ以上は發刊は不能である。那は印刷工にありて新聞社にあらずと云ふて居るが、之れは責任の意義を解せざることと甚しきものと云はねばならぬ。鐵道汽車が衝突したとき、新聞紙は局長、總裁の責任を問ふて居るではないか。農商務省から高等官の殺人犯を出したとき、主務大臣の引退を迫つた新聞紙もあつた。印刷工をして同盟罷工せしむるに至り、新聞休刊を餘儀なくした新聞社は、社會と讀者とに對して固より責任を辭すべきでない。宮相が德富國民社長に對して、　陛下が宸襟を惱せられたことを詫つたと云ふ事實の眞僞は別として、四日間の不便と不安とは一通りでなかつた。此責任に對して何等自覺を有せざる新聞社が、責任政治を說くなどは、不論理極りなき次第でないか、要するに各新聞社は此事件に於て、印刷工の人格を容認した以上の大損害を受けたものである。而かして是れ實に日本の言論の恥辱、日本の國民の恥辱である。

（二）　警視廳の大失態

民本主義を高潮して、民衆の爲めの警察を行ふと提唱して居る岡總監は、事實に於て多少の抱負を示したが、印刷工同盟罷工事件に關して、遂に其馬脚を現はした嫌ひがある。此事件と總監との交渉は、警視廳の自發的行爲であるか、或は新聞社側の依頼であるか、革新會側の懇請であるか。そんなことは吟味する必要がない。唯だ總監の態度は公然片手落であつたやうに思ふ。第一に總監は職責上當然であるべき中正の觀念を失ひ、新聞紙休刊に伴ふ責任を印刷工の不法行爲にあると主張した。然し此場合警視廳は何故に、新聞社側の一ヶ月間休刊同盟を看過したか。新聞社は新聞紙を發刊する義務を有し、夫れに伴ふ幾多の特典を與へられて居る。其爲すべき義務を放棄したものに違約金拾萬圓を課すると云ふ同盟契約の如きは、固より安寧秩序を紊するものである。少くとも不正不當の契約であることは爭ふべくもない。然るに岡總監が新聞社側には何等加ふるところなく、印刷工側に對してのみ緊急勅令を以つて威壓した如きは、勞働運動を容認すると稱する岡總監にも似合はぬ弱い者苛めである。總監は何故に新聞社側と革新會側の幹部を一堂に會し、雙方の主張を聽取して判斷を下すことをなさなかつたか、之れは恐らく總監の此運動に對する觀察の誤りが原因して居るであらうと思ふ。活文館印刷工の同盟運動には、憲政會一味の黑幕ありとの噂さがあつた。憲政會代議士の横山氏を會長とする革新會、憲政會の機關雜誌に關係する加藤勘十氏、更に府下憲政會の闘將たる八鄰俱樂部に屬する内田社委員が、最も强硬なりし事實より推して、總監は此運動と憲政會とが一脈相通ずるものと見たらしい。斯くの如き不徹底、認識の誤謬をなして、

治安警察法第十七條を高閣に東ねると稱した警視廳が、更に緊急勅令を口にするに至つては、宛乎として保安條例時代の警視廳である。警視廳としては狼狽もしたらう、新聞紙に對する恐怖もあつたらう、然しこんな無理解、無勇氣を以つて勞資協調會を組織するやうでは、全然資本家の傀儡たるに過ぎぬであらう。自ら仲介者たることを望んだ同總監は、全然新聞社側の要求主張を採つて、之を革新會側に取次いだに過ぎぬ。之れでは新聞社側の傳令使であつて、總監獨自の面目がない、印刷工側の要求の當不當を研究判斷せずして、斯くの如き行動に出るは、一種の脅制脅迫と認むべきものであるまいか、斯くの如き事件に官憲の干渉は無用である。當事者と理解ある斯道の第三者に依りて徹底的に解決すべきものであるが、苟くも官憲が介入する以上、公平適正の判斷を以つて双方に滿足せしむべきであらう、金ピカ服を脱いで請様になつたと云ふ同總監も、愈々となれば朝鮮時代の官僚型に還元せらるゝとは情けないことである。今後は充分に注意して貰ひたい。

(三) 革新會側の缺陷弱點

日本人は組織を持たぬ國民である。革新會側の第一缺陷は統一と充實とを缺いたことであつた。而かしてそれは會長を勞働者より選擇しなかつたことに原因する。私は横山氏が縣知事を罵倒したり市長を叱咤したりすることを以つて、横山氏を硬骨男兒なりとは思はない、寧ろ一種の罪惡であると思ふて居る。し現代に於て誰れか進むで弱者の味方たるものがあるか、横山氏が革新會の會長になつたことは、或意味に於て横山氏の人格を偉大にする、唯だそれが必ずしも革新會の爲めに祝すべきことでなかつた。横山氏自らが新聞記者に語つた如く、横山氏は止むなく此運動に參加したものである。而して代議士、辯護士と云ふ身分から、周圍を顧慮せざるを得ぬのであるから、眞劍でなく死地に入つたものでもない。多大の努力が陸離たる光彩を放下せずして、自ら退かねばならぬに至つた所以である。唯だ横山氏が之れが爲め新聞紙、警視廳、資本家より敵視せられ勞働者よりも弱腰と看做さるゝに至つたことは、洵に氣の毒千萬である。社會公衆は横山氏に向つて感謝を拂ひ、其將來に同情すべきであらう。第二は訓錬と融和とを缺き、健實なる準備を缺きたることである。革新會側には八百圓の戰費よりなかつたとのこと、固より持久戰に堪へぬ、一ケ月休刊と云ふ事に驚かされて、會内早く戰意なきものを生じたことも無理でない。換言すれば革新會は輕擧妄動した、隨つて事件が愈々社會公衆の注意を惹くに至つても、堂々と演説會を開きて天下に呼號することも忘れて居つた。革新會側立後僅かに五十日、組織また

免からざるに同盟罷工を敢行して、關係なき同業に迷つたことは遺憾至極である。第三には職工長が新聞社側に屬するものであることを打算しなかつたことを數へたい、新聞社の職長は二三十年來の文選、植字の生活者たるもので、新時代の政治思想を有せざるものが多い、若き印刷工を統御するに困難を感じて居つたに相違ない。而して革新會の各社委員は卽ち新知識の印刷工である。職長側は其去ることを望んで其優遇せられて居ることを欲しない理由がある。果然此事件に於て職長側は新聞社側に味方して、革新會の運動を挫折せしめたのである。第四は少壯記者連の仲裁援助を豫想したことも誤算の一であるらしい、記者の増俸運動は五六月頃より朝報社其他に起り、一流の某新聞社の社會部記者の如きは、七月二十五日に袋入の月給袋を持參して日比谷に集合し、何れも其薄俸を慨慨して、增給運動をなすべく約した位である。經濟者、記者、印刷工と云ふ關係よりするも、記者は好個の仲裁者であらねばならぬ。唯だ新聞記者は更に職業を得ることに於て弱い。印刷工には他に同一收入を得べき他の職業が幾らもあるが、記者には夫れが仲々困難である。新聞社側の團結意外に強固なる場合に於て、印刷工に味方することは其生活を危險ならしむる所以であらねばならぬ、記者側の沈默は斯くて此運動を不利に導いたのである。之を要するに日本には[illegible]時機[illegible]價値なくして、[illegible]に[illegible]ス[illegible]運動がない。勞働者に今後大に自覺奮發して、自己を組織し團結すべきであると思ふ。

新聞職工の罷業と新聞休刊事件

法學博士 堀江歸一

東京市内で發行される新聞紙が八月一日から數日間に亙つて休刊したことは、未曾有の珍事と云はなければならぬ。當時私は信州地方を旅行して居つたが、漸く地方の新聞紙で東京を中心として起つた出來事を斷片的に知り得ただけであつて、一體東京には今如何なる事件が發生して居るか、知己が友は無事であるか、どうか、少しも知ることが出來ず、五里霧中に彷徨よる人と異ならなかつたのである。定めて新聞記事に依つて商賣上の報道を得やうとか、又は新聞紙を通じて、營業上の廣告をしやうと云ふ人々は非常に困つたことゝ想像される。一體今度の事件は印刷職工が賃銀五割增を請求し、新聞社が之を容れず職工が同盟罷業をすると相前後して、新聞社は同盟休刊を[illegible]

したのであるから、同盟罷業と同盟閉鎖と同時に行はれたものと認められる。此事件に對して、私の懐いた感想は左の數點に外ならない。

第一、政府が今日まで根本的に物價問題を解決せず、國民の生活を窮迫させたのは、今度のやうな事件を惹起した一般的原因であつて、新聞職工の同盟罷業で、世間一般に損害を蒙つたとすれば、政府こそ其責任の一部を負はなければならぬ。新聞紙と云ふ中流以上の階級に取つて、極めて必要な物資の供給が遮斷されたればこそ、勞働爭議の如何に慘憺たる害悪を國民生活に及ぼすやと云ふことが餘程強く世人の腦裡に印象されたやうであるが、色々の方面で此頃は殆ど絶へず爭議が起つて居り、而して此爭議は物價問題に對する政府の無方針が原因を成して居る以上は、吾人は先づ政府の怠慢を責めるのである。

第二、勞働爭議は今や世界的潮流の一つであつて、斯る危局の到來す可きことは歐洲戰爭中より何人も想像して居る所であつた。然るに我國では勞働爭議の起つた場合に、之を解決する準備が少しも講じて居られなかつた。私の所信を以てすれば、社會には所謂公益事業と云ふ可きものがある。新聞紙の發行の如きは即ち是れであつて、斯る事業には國家は法律を以て、同盟罷業や、同盟解雇の行はれることを禁止する。其代りに傭者なり、勞働者なり、孰れかの側に勞働條件に就て、不滿足の[illegible]があり、爭議の起らうとした場合には、豫め事件を仲裁裁判にかけ、仲裁裁判で公平な判決を下して、或る期間此判決で定まつた條件で、勞働に就かせることゝするのが必要である。此制度を實施するには、其前に職工組合を組織することが必要であつて、完全なる仲裁制度は一朝夕の間に出來るものではないが、兎に角不完全ながらも仲裁制度を組織して、今度のやうな事件に備へるといふのは極めて肝要のことであつた。政府が此邊の用意を怠つて、今度のやうな事件に對して、殆ど手の下しやうがなく、例の自由放任の態度を取つたのは、是れ亦政府として怠慢の非難を免かれないのである。

第三、此期間中から内務省筋の官僚連は日本で職工組合を造るなら、縦に造る可きで、横に造るべきでないと云ふことを公言して居つた。即ち彼等の考では、一工場内で勞働する勞働者が、組合を造るのは宜しいが、同業に從事する關係から、他の工場で働く勞働者と組合を造るのは宜しくないと云ふのであるが、彼等が如何なる考を持つて居るに拘はらず、今度の事件で見れば、新聞社の印刷職工が横の組合を造つて居ることは甚だ明であつて、日本だけを勞働運動の潮流から、除外させることは本質不可能である。

第四、然し勞働者も勞働運動をするならば、堅固な組合を造り、一ツの目的の爲めに、組合の全力を擧げて、働く方法を取らなければならぬ。聞く所に據れば印刷職工は月初に罷業を始めれば、商賣人から掛勘定で、何でも買へると、多寡を括つて罷業を行つたのであるが、商賣人も仲々拔目なく、罷業が始まつてから、現金勘定でなければ、一切印刷職工には品物を賣らないことにした。是れが彼等に取つての大打擊であつて、血の出るやうな思ひで、少し許りの醵金をした所で、到底一致團結した新聞社に對抗し得られる見込はなく、中途に挫折の已むを得さるに至つた次第である。勞働者にして勞働運動をするならば、何はさて置き、組合を造つて、平生から醵金を徵收し、或る目的の爲めに罷業を行つたときには、之に堪へるだけの用意をすることが極めて肝要である。

第五、印刷職工が賃銀の五割増を請求したことは生活上の狀態から見て道理あるとすれば、新聞社が此要求を容れなかつたことも、社の經濟から見て、同じく道理あることである。私は之を機會として、新聞社が經濟狀態を改良して、社員や職工の待遇を優良にする方法を工風することを希望するのである。一體、物價の騰貴して居る今日、新聞紙の購讀料や、廣告料は極めて低廉であつて、諸物價と均衡を保たない。一方に新聞紙が如何に國民の生活に有用であるかは今度の事件が證明して居るとすれば、新聞紙の如きは今少し料金を引上げる餘地があり、世間も亦之を承認するに、吝ならざるものであらう。諸事業が合同し、集中して行く世の中で、新聞紙のみが分立して居るのは如何なる譯であらうか。小規模の新聞社が互に合同して、大規模と爲り、一方に料金を引上げて、社員や職工を優遇するに至つたならば、今度の事件は即ち禍を轉じて、福とするものである。要するに勞働問題は今や我國に於て、焦眉の問題と爲つた。國民の生活に重要な關係を持つて居る仕事は一つの新聞紙のみでなく、食糧に燃料に點燈にそれ〲同樣の仕事がある。是等の仕事に於て同盟罷業が起つても、治安警察法で禁壓を加へる以外に之に當る方法がないと云ふのは、誠に心細い話であつて、私は此點から考へて、今度の新聞休刊事件は勞働問題に就いて國民を警しめた天の意であると思ふ。然し我國の官民は矢張り數日間新聞が休刊されて、不便であつたと云ふ以外に、何の感じをも持たないのであらうか、左りとは餘りに[illegible]の放心的なるに驚かさるを得ないのである。

東京帝國大學農科大學助教授

理學博士草野俊助先生著

我が植物觀

四六判總クロス特製

正價金壹圓廿八錢　送料金八錢

山河草木觀の新記錄

自然は一大謎語也。彼の欝蒼晝暗き原生林。荒涼たる蕁野原。穀物蔬菜より嬋妍たる花卉、露こぼるゝ野草に至るまで、物質的に精神的に人生と深き交渉を有し、世間に至大なる意義を含めり。本書は著者が多年の蘊蓄を以て、之を自然的に、哲學的に、將又、經濟的に、歴史的等に觀察し、着眼奇警、趣味豐富、蝶の舞ひ花の笑ふ美觀より、日常卑近の憂所科學に至るまで、隨感隨記し、時に或は著者の本領を出でゝ復た本領に入り、趣味津々、卷を措く能はざらしむ。綠陰に、清窓に、海に、山に靜に之を繙かば、清新潑溂たる植物觀に接するを得て、無限の感興を惹起すべし。

内容＝◎天然の山人工の野◎櫻花と江戸ッ兒◎腐朽腐敗防腐◎日光の贈土産◎植物の目次＝夏服と冬服◎草と木との軋轢◎鎭守の森◎植物の經濟主義◎南洋の植物◎外廿章

鳥居龍藏先生著

有史以前の日本

忽六版出來

◎小判總クロス特製

◎寫眞銅版數十葉

◎定價金壹圓八十錢

◎小包送料金拾貳錢

發行所　東京日本橋區鐵砲町六番地　振替東京〔壹五〇五六番〕　磯部甲陽堂　電話神田八四五番



幕末武士と露國農夫の血を享けた

私の自敍傳

大泉黑石

一　幼年時代

アレキサンドル・ワホウイツチは俺の親爺だ。親爺は露西亞人だが、俺は國際的の居候だ。あつちへ行つたり此方へ來たりしてゐる。泥坊や人殺しこそしないが、大抵のことはやつて來たんだから、大抵のことは知つてゐる積りだ。ことに露西亞人で俺位日本語の旨い奴は確かにゐまい。これ程圖迂々々しく自慢が出來なくちや、愚にもつかぬ身の上譚が臆面もなく出來るものぢやない。

露西亞の先祖はヤスナヤ・ポリヤナから出た。レオフ・トルストイの邸から二十町ばかり手前で、今殘つてゐる農夫のワホウヰツチと云ふのが本家だ。俺の親爺は本家の總領だつた。

日本の先祖は何處から來たんだか、あまりいゝ家柄でないと見えて系圖も何もない。

祖父の代から知つてゐるだけだ。俺の祖父は本川と云つた。下の關の最初の稅關長がそうだ。

維新頃日本にも賄賂が流行したと見えて、祖父は賄賂を取つたのか、取り損ねたのか、そこははつきり知らないが、長州の小さい村で自殺した。あまり人聞きのいゝ話ではないが、恥を打ち明けないと眞相が解らないから、敢て祖先の恥を晒す。嘸不孝な孫だと思つてゐるだらう。

俺のお袋 Keita（惠子）はこの人の娘だ。俺を生むと一週目に死んだから、まるで顏を知らない。そんな理由から親類の有象無象が俺のことを仇子と云ふんだらう。俺には兄弟がない。

天にも地にもたつた一人だ。



著者の母

露西亜の先皇が日本を見舞つた——その時はまだ彼は皇太子だつた——とき親爺も末社の一人だつた。親爺が長崎へ立ち寄



著者の父

つたとき、或官吏の世話でお袋を貰つたんださうだ。その時親爺はまだ天津の領事館に居た。

お袋は露西亜文學の熱心な研究者だつた。それは彼女の日記や藏書を見ても解る。それで、親爺がお袋を呉れろと談判に來たとき、物の解らない親類の奴共が大反對をしたにも拘はらず、彼女は默つて家を跳び出して行つた。舊弊人共が、お惠さんは亂暴な女だと、攻撃した。わたしは、その時どうしやうかと思つて困り果(はて)たばなと、祖母が言つた。

俺は二十七だ。

支那海の浪が長崎港へ押寄せて來るまともに英彦山が見ゆるだらう。山麓の螢茶屋から三つ目の橋際に芝居小屋があるだらう。その隣りが八幡宮だ。鳥居をくゞると青桐の蔭に白壁の暗い家がある。今でも無論ある筈だ。そこでお袋は俺を生んで直ぐ死んだ。死んだときは十六だつた。

「おばあさまに難儀をかけずに、大きくなつてくだはれ」と云つて息を引取つたさうだが、おばあさまには、それ以來難儀のかけ通しで、まことに申しわけがない。

乳母は淫奔な女だつたと誰でも言ふ。俺を三つ迄世話して、情夫と豐後へ駈け落ちする途中、耶馬溪の柿坂で病歿したさうで、乳母の母親が、娘が可愛さうだから、何卒石塔を一基建て

てくれと何遍も頼みに來たが、頑固な祖母が、不人情な坊主お裏(乳母の名もお裏と同じだつた)に建てゝやる石塔はないと云つて斷つたさうだ。だから今でも乳母は石塔のない土饅頭の下で眠つてゐる。

俺の代になつたから、こつそり建てゝやらうと思ふが、いつも自分一人を持てあましてゐる俺だから、そこまで手が出ぬ。

乳母が逃げた後は、祖母の手一つで、曲りなりに育つて來た。俺は疳癪持ちだから、隨分だゝをこねて老婆を弱らせたと云ふが、それはほんたうだらう。

俺が泣くと、雨が降らうが、風が吹かうが、山の麓から海岸まで脊負ふて行つた。祖母は目が惡い處へ持つて行つて餘り智慧のあるたちでなかつたから、俺を脊中へ縛りつけて海岸へ行つて、海を見せさへすれば、得心して泣き止むものだと定めてゐるらしかつた。

今でもあるが、その時波戸場に大きな、まんまるい大砲の丸があつた。

「ほら、大砲ん丸。な。ふてえ丸ぢやろが。よう見なはれ。唐人船うちに使ふたもんばい、ふてえ丸ぢやろが」と云つた。「ふてえ丸ぢやろが」を何百遍聞いたか知れない。祖母の方でも、俺を持てあましたらうが、俺の方でも、大砲の彈丸には泣かされました。

俺が三つの時、化け物のやうな奴が突然やつて來た。俺は玄關で乳母と一緒に裸で納豆の皮を剝いてゐた。するとこの化け物が俺の顔を見てかつと赤い舌を吐いて抱かうとするから、俺は納豆のざるを抱へたまゝ泣き出したら、台所から油虫と一緒に祖母が飛んで來て「まあ〳〵。おとつつあんたい。よう來なはつた」と、あべこべに化け物にお辭儀をしたことを記憶へてゐる。これが俺の親爺だ。その時分八幡樣の石段の下に、高山彥九郎の後胤が貧乏世帶を張つてゐた。此家の爺さんが、俺が日本を離れるとき「ジャッパン國にキリシタンの御堂を建立したなあ、この俺ぢやと云ふてくだはれ。オロシヤ人は眞ふばい」と云つた。誰に事傳てするのか、それは本人も知らないらしかつた。長崎に黑船が來た時、中町にキリシタンのお寺を建てやうと云ひ出したのがこの爺さんで、俺の祖母と一緒に高安寺の繪踏みを恐れて暫く姿を眩ましてゐたんださうだ。中町のお寺は今名物になつてゐる。爺さんは漆師だつた。

俺を可愛がつて春德寺下の幼稚園へ入る手續きをしてくれたのも、この高山の爺さんだ。

幼稚園で俺の組に、色の黒いギス〱の子が居つた。大きな紫メリンスの帶をしめて異彩を放つてゐた。その時分メリンスの帶なんぞ卷いて歩く子がなかつたからだらう。先生はこの子を一番可愛がつて小便までさせてやつた。高木と云ふ長崎代官の子と俺が、竹竿で先生を叩いたとき、半日罰を食つて廊下に立往生を命ぜられたら、メリンスの帶が來て手を叩いて囃した。代官の子と俺が相談してメリンス帶を毆ると、わい〱泣き乍ら、下女を小使部屋から呼んで來た。

「若樣。この子でございますかのし」

と下女が俺を指すと、メリンス帶がウンその子だ。早う叩つてくれと云ふ。

「畜生。この異人めが。若樣をようたゝいた」と云ひ乍ら俺の頰つぺたをぐつとつねつた。

代官の子は慄へてゐた。代官の子なんてものは弱いもんだ。だから親爺が代官をやめられて、目藥を賣つたり神主なんぞになるんだと思つた。メリンスの帶は小松原英太郎の子だつた。もう大分大きくなつてゐるだらう。

よその親爺とは少し違つてゐるから譯を質問したら祖母が偉さ な顏をして

「そら、あんた、おとつつあんは、露西亞のお方かい、ちつた違ふとつたい」

と敎へて呉れた。「露西亞のお方けん」―靴穿きで疊を荒したり、石臼の上にお釋迦樣のやうにあぐらを搔いたりするのだと云ふことも解つた。然し何故俺の側へ始終居ないのか解らない。

隣の車屋の三公や煙草屋の留太郎が毎晩德利に酒を買つて門前を通る。

俺は祖母にあれは誰が飲むかと尋ねた。說明によると三公や留太郎の親爺が飲むんださうだ。俺の親爺にも買つて飲ませたいが、一體何處に逃げたんだと、折り返して聞いた。そしたら、

「はんかをに居らつしやるけん。こつちで酒を買つてやらんでもよか。」

と云ふことだつた。はんかをは酒を飲まないんだ。三公の親爺も留太郎の親爺もはんかをに行かないから飲むんだ。然し町内で德利を下げて酒を買ひに行かない子は幅が利かぬ規則になつてゐたから、俺の親爺も早くはんかをを免職にして歸つて來ればいい。日に二度でも三度でも德利を振り廻してやると殘念でたまらなかつた。俺は幼稚園へ入つたばつかりだつたが近所の子に負けるのは嫌ひだ。鍛掛屋の子が一番俺を酷めた。此奴が

「おめいの親爺は酒がのめねいのか」

と云ふから

「俺の親爺は、はんかをだから飲まねいぞ」とやつつけた。そしたら此奴が

「はんかをなんぞ、うつちやつちまへ」

「うつちやるもんか。はんかをは高價いぞ」

「いくらだい」

俺は生憎、祖母にはんかをの相場を聞いてゐなかつたが、默つて居れば、はんかをを馬鹿にするから、大抵行軍將棋位の値段だらうと考して少し安いとは思つたが、

「五錢だい。さまあ見ろ」

と凹ませて歸つた。

祖母に、はんかをは五錢にいくつ呉れるか様子を糺すと、はんかをは一つだいと答へて呉れた。一應尤もだ。はんかをは五錢に一つと定めて、それから、はんかをの事を誰が尋ねても、高いから一つだ。親爺は、はんかをを貰つて了つたら俺の家へ戻つて來るんだと威張つてやつた。

大きくなつてから學校の先生に、はんかをは支那の都會だ。かうかきますと、漢口と云ふ字を書いて教へて貰つた。

もひとつ腑に落ちない奴がゐた。それは俺の家に、俺が生れぬ前から寢てゐる女だ。この女を祖母がお母さんと呼べと命令したから、中途はんぱから具合が惡いけれども、止むを得ずお袋にして、間もなく死んだ時も、お袋なみに、ばかりよく泣いてやつたが、あとでこの女の惡口が露顯して、ほんたうのお袋の姉だといふ譯がわかつたとき、いくら可愛いがつて貰つたつて、も少し泣き惜みすればよかつたと後悔した。ところで、家族は祖々母と祖母と俺と三人になつて、小さい[illegible]家へ引越した。

親爺は不人情な奴で、到々二度と長崎へ來ないで了つた。俺は櫻の馬場の小學校を三年生で打ち切つて漢口へ親爺の顏を見に行つた。親爺が露西亞領事館にすましてゐるから、領事館で小使ひさんをやつてゐるかと思つたら、親爺が「領事はわしぢや」と吐しをつた。

こゝの處で説明をする。俺の親爺はウイツテ伯爵と前後にペテログラード大學の法科を出た支那通だ。何、始めから、こんな臭い處に來る氣ぢやない。やつぱり國會議員で通す意氣込みだつたらうが、儲かると思つて、政府にだまされて追ひやられたんだらう。親爺は法學博士だ。俺は二十八で博士になつた。お前も俺を見習へ。そうするとアレキサンドル・ネヴスキー勳章はゆづつてやると云つた。その時は俺だつて二十八で博士になる約束をしたやうに覺えてゐる。

親爺が明治三十四年に死んで、俺は到頭孤兒になつて了つた。

然し、親が揃つてゐたつて、滿足な人間になるやうな手輕な兒でないことを自覺してゐたから、親がなくても不自由だとも、肩身が狹いとも思はなかつた。親爺が濱口で死んだ年俺は遺骸をヴラヂヲストツクの露西亞人の墓地へ埋めに行つた。その足で叔母ラリーザとそのまゝモスクワへ行つた。親爺には三人の兄弟があつた。二人は男で、一人は女だ。女が叔母ラリーザだ。男の方は二人共藪醫者で、モスクワに一人、西伯利のイルクーツクに一人開業してゐる。俺が叔母ラリーザとモスクワで落ちついた處が、その三男の藪醫者の家だつた。此處にもまた伯母が居る。馬面の三十代のフインランド女で、タニヤと云つた。

俺は男の癖にこの馬面の伯母をタニヤ、タニヤと呼びつけにしてゐた。

しみつたれで、見え坊で、足を洗はぬ前がマルイ劇場附の女優だつた故か、馬鹿にひがみ根性の、嫉妬心の深い女だ。生意氣に、女權擴張者のソフイ・コワレヴスカヤなどゝ往復してゐた。バーチナがどうの、ペロヴースカがどうの、イアキモヴが、どうのと變な本を買ひ込んで來て、伯父に喧嘩を吹つかけてゐた。

俺はこのターニヤが大嫌ひだ。お前の母さんは日本人だからキヨスキーは露西亞ぢやないと言ふ。キヨスキーと云ふのは俺のことだ。俺をタニヤにあづけて置いて、叔母ラリーザは、巴里のローマ教女學校へ教師に迎へられて行つた。

その時分俺はニコラス二世の乘馬軍服が、その頃流行つてゐたので、學校通ひの制服に、ねだつて拵へて貰つて小學校へ伯母の家から出掛けたもんだ。

讀本を開いて「犬が吠ゆる」。「狼がうなる」「鶯が唱ひます」なんて、露西亞だけに「ハナ・ハト・タコ・マリ」と穩かに行かないから面白いと思つた。荒つぽくて、何でもガサ／＼して珍らしかつた。

二　少年時代

一

俺はモスクワの小學校へ放り込まれたが。露西亞語が滿足に解らないので、半年の間啞で通した。何と罵られても平氣でにこ／＼してゐた。困つたのは運動時間に露西亞人の子が、不思議な奴が來たと云ふので、俺の周圍に、うよ／＼集つて勝手な熱を吹いてゐた。それが五月蠅くつて仕樣がない。露西亞人で露西亞語が解らないなんて、天下の奇觀だ。然し三年たつたらやつと解つた。そしたら巴里の叔母ラリーザから、自分の勸めてゐる學校の先生で、お隣りの中學校にも敎へに行く人がある。

其處で生徒を募集してゐるから、來い。來る氣なら、こちらから暇を見て連れに行くと云つて來た。

「叔母さんの側なら、いつでも行きたい。」

と返事を出して置いた。それは十二月の中頃だつた。雪が引つきりなしに降つてゐた。

俺は頭が單純だから、何でも、くど／＼書くことが嫌ひだ。書かうつたつて書けない。自叙傳なんか、くど／＼やつて行つたら締りがない上に、きりがつかぬ。大ざつぱな處、俺が巴里へ返事を出して二三日したら、タニヤと伯父は、ペトログラードへ病院を建てるから地所の撰定に行くと云つてモスクワを發つた。俺は、よく俺の話の中へ出て來るイエドロフの宿屋へ當分の厄介をかけることにして、即日其處へ引移つた。アレクセイ屋と云ふ行商人の木賃宿だ。どほせ俺をあづかつて世話するといふ家はその位の處だらう。イエドロフは旅宿の方は細君のサミヤとサミヤのお袋にまかせて、自分は馭者を本職にして 始終伯父の處へも出入したから、知つてゐるんだ。俺の荷物は長崎の大徳寺の門前で買つた二圓五十錢の柳行李が一つあるだけで懇意の番兵に錢をやつて宿まで擔いで行つた貰つた。宿は「雀が丘」にあつた。細君のサミヤと婆さんが出て來て「キヨスキーは今夜から、うちの者になんだよ」と云つて歡迎して與れたのはよかつたが、俺にあてがはれた部屋が狹い上に、階段の昇降口にあつたから騒々しくつていけない。部屋を取り替へてくれと頼んでも、そこが一番上等の部屋だ、あとはみんな勞働者があばれるから、壁も床もこはれてゐると肯かなかつた。

部屋は俺が荷物の中から聖[illegible]像を出して[illegible]になつたが、食い物の拙いのには弱つた。

それも我慢するとして、今度は下等な露西亞人が、扉を蹴るのに閉口した。自分の部屋の扉を開けるのに、何も靴で蹴らなくつたつて、排して入ればいゝのに、無暗に蹴つて音を立てる。それも辛棒するとして、今度は煙草の烟とアルコホールが鋭く鼻を衝いて來る。晩になつてイエドロフが戻つて來ると、他に能がないものだから、婆さんと口論する。サミヤが子供だと思つて、いつでも俺の部屋へ飛んで來て、めそ／＼してゐた。

或晩烈しく妻のサミヤと口論したイエドロフは翌朝、ふらりと家出したまゝ歸つて來なかつた。意氣地なしの厄介者が何處へ失せ居ると、婆さんは結局喜んでゐた。サミヤは淋しさうな様子をしてゐた。そして、俺を捕へて、うちの亭主は猫子だ、やれ、家出しちや飢ゑ死するだらうと云つた。然しどうしたのか一向戻つて來ない。

厄介な宿屋だ。俺は毎日々々巴里から叔母が迎ひに來るのを

待つてゐた。仲々來ない。

女の聲がするから跳び出して見ると、いつも、旅宿人が化性なユダヤ女を連れ込んで來て騷いでゐるのだつた。

二週間ばかりすると、ひよつこり伯父が洒落込んで、旅舍へやつて來た。何しに來たかと思つたら、クリスマス前に一度ヤスナヤ・ポリヤナを廻ると言ふ。お前も來ないか、先祖の百姓家があると云ふ。俺は行くと答へた。

ヤスナヤ・ポリヤナ村の先祖の農家といふのは樅の林の中にあつた。最初其處へ寄つて、それから馬車橇で煉瓦造りの小さい「青玉燈塔」の寺院へ行つた。其處で神父を誘ふて、村の病人のうちを片つ端から廻つて歩いた。處で、途中で一人の見すぼらしい老人に出逢つた。この老人が路傍で拾つた痩せ犬を引つ張つてゐる。俺の伯父が、帽子に人差指を當てゝ挨拶してゐるから、不見識な眞似をするもんだと思ふと、これが、はじめて聞いて、始めて見るレオフ・トルストイだから可笑しい。伯父は俺を連れてトルストイの家へ立ち寄る積りらしかつた。それで一緒になつて歩るき出した。老爺は病家へ見舞ひに行つて歸りだつた。不思議なことには行衛不明のイエドロフか、突然この村で馭者になつてゐたことだ。彼は俺達の顏を見ると、驚いて跳んで來た。

俺達は乘合馬車の輪が動かなくなつたので歩くことにした。爺さんの大きな鼻の尖が赤蕪のやうに赤くなつて、灰色の口髭にぶら下つた鼻汁と髭とが、申し合せて白く凍つてゐる。口をもぐ〳〵動かすと崩れて落ちさうだが、爺さんは平氣で歩いてゐる。

先登に此爺さんが痩せ犬を引つ張つて行く。その後ろからアキモフ神父と伯父が行く。次に俺とイエドロフが神妙にくつついて、ぼそ〳〵歩いた。イエドロフは一體何處へ行くんだらう。揃ひも揃つてみんな薄汚ないシユバを引つ被つて、一樣に鼻つ柱を赤くしてゐるが、俺の伯父だけは洒落てゐる。

伯父の外套の襟は大野猫の毛皮だ。その茶色の毛が、ぎらぎら光るのを俺は感心して見てゐた。然し今日考へて見ると、この外套も矢張り俺の親爺の金で工面した一張羅の晴着かも知れなかつた。

俺は後で巴里のヲリーザ叔母に聞いたんだが、親爺が死ぬと親爺の遺産爭ひをして、この伯父が、半分橫領したさうだ。さう云へば、狡猾さうな面構へだ。だから、俺の懷には親爺の金が半分しか入らなかつた。

遺産爭ひの理由と云ふのが、俺のお袋は日本人だから、露西亞人の子を產む筈がないと云ふのださうだ。そんなら誰の子が

俺だらう。

その時態々巴里のラリーザ叔母が俺の人相を見分に來て、俺の目が海のやうな色をして、俺の髪が黄金色に輝いてゐたものだから、「勝訴だ、勝訴だ」と叫んで露西亞の神聖なる裁判官に「キョスキーは目が靑くつて髪の毛が灰色だから、露西亞人に違ひない」と言つたら、裁判官が「そんなら喧嘩のないやうに、ワホウキッチの遺産を半分分けに取らせる」と云つたさうだ。妙な裁判があるもんだと俺は感心した。

俺の伯父はモスクワの數附者だから、獸皮の外套が買へる理屈がない。

その時俺は貧乏者を毛嫌ひした。その癖本人は人並外れて困つてゐた。俺は大野猫の外套の襟に顏を埋めてゐる伯父が、この中で一番偉いと定めた。反對に俺とイエドロフはまるで御話にならぬ程、哀れな風をしたゐたのだ。

痩せ犬を引摺つて歩るく爺さんも尖つ張り左樣で、黒茶がゝつたシュバにくるまつて、芋俵のやうな形で歩いてゐる。その棕櫚の皮見たいな、さゝくれた毛織の毛に觸るとさら〳〵した。

一二町ばかり、雪靴で雪を踏んで來たとき、振り返ると乘合馬車橇は農家に遮られて見えなくなつてゐた。北風が吹き止んで、雪は吹き散らなくなつた。氣持ちのいゝ白い湯氣だ、口からと、鼻からと、噴き出て來る。それでも空は低く垂れて、一帶いつになつたら太陽が光を見せるか、想像すらつかない。

茫漠たる平野の中央を通つ切る路の兩側は畑で、畑の畦に、すく〳〵と枯木立が立ち並んでゐる。枯木の枝は眞白だ。自然の沈默なる仕事とはこれだらう。

たまには大きな奴が塊つて森をつくつてゐる。森の根にまるで雪の中に島流しに遭つたやうな低い農夫の家が蹲つてゐる。それが飛び〳〵に雪を冠つて恐縮してゐる。恐縮してゐると云ふよりも、雪に押し潰されて、低頭平身してゐると云つた方が適切だらう。

前を見ても、後ろを見ても、眞つ白な雪が一面に世界を埋めてゐる中を、ペチカの烟がもや〳〵と騰つた。忽ち雪の中から黑い人間の粒が滲り出て、芋蟲のやうに動き出した。やがて芋蟲が、こつちへ近づくに從つて段々大きくなると、しまひには「さあーつ」と俺達の側を掠めて飛で行く。手橇だ。

手橇の上から百姓の子が、兩手を擧げて、

「ブラヴォ！」

と怒鳴ると、爺さんが、ちよいと立ち停つて、

「へえ――へえ――」

と、元氣のいゝ農夫の倅を凝然と見詰め乍ら、背中に大き

な凹んだ目をしばたいて、また、ぼそ〳〵と歩るき出す。

「俺達は全體何處まで歩くんですかい」

と默り込んでゐるイエドロフに尋ねると、

「旦那の家でさあ。旦那の家に定まつてまさあね。大きくて、廣くつて、馬鹿に俺は好きになつちまつた。それに旦那は旅の御客さんが好きだと來て居るからね」

と云ふ。

「それでお前さんは何處へ行くんだね」

「旦那の御供をするんでさあ」

當り然ぢやないかと云ふやうな顏をした。

「お前さんが、旦那々々といふのはあの爺かね」

「左樣でさあね。」

又でさあねえと下司な露西亞語で云ふ。

「あの爺さんは誰だい。イエドロフ」

イエドロフは大きな草入水晶のやうな青い眼の球を、大きく膨らせて、ぐる〳〵と廻轉させた。これが俺の親友イエドロフの呆れた時の唯一の表情である。

「あれや別莊の親方でさあ。キヨスキーはまだ知らないかね」

「別莊つて、何處の別莊だい。」

「モスクワさ」

「モスクワ？」

「うんモスクワ」

モスクワの別莊の親方だと云へば、先は大抵呑込めさうなもんだと云ふ積りであらうが、實の處、俺には見當がつき兼ねた。

「モスクワの別莊の旦那だよ。俺はよく話をしたんだ。あの旦那とね」

「お前さんがゝね。へえ。何處で」

「別莊の庭でさ。お早うございますと云へば、親方が、お前さん、お早う。働くかねと來るんだ。間違ひつこなしだよ」

イエドロフが話をしたと云ふのは、通りかゝりに帽子を取つて挨拶したことだつた。

「旦那がソハを擔いで庭を歩いてゐる。其處へ俺が出掛けて行く。お早うと言ふんでさあ。」

まさかこの爺さんが、重いソハなんぞ擔ぐこともあるまいと思ふと、イエドロフの言ふことが、俺にはます〳〵解らなくなつて來る。

向うから百姓がやつて來て俺達と行き違ひ樣先登の爺さんに饒舌り掛ける。百姓の話によると何でも爺さんに此百姓が牡牛を一匹買つて與れと頼んで置いたのが漸く昨日か一昨日か買手が附いて話が纏まつたといふのである。別莊の旦那に牛を賣つ

て貰ふといふのがそも／＼聞えないぢやないか。此百姓も爺さんに對つて旦那と云つたが目禮もしないでさつさと行つちまつた。

爺さんは何といふ名前の人だとイエドロフに[illegible]からかと考へたがまた妙な事を言ふと癪に障るから止した。

丘といふ名には過ぎる位の畦を通り抜けると、林が目の前に展けて眞黑な小鳥が蚊のやうに群がつてゐる。林迄歩かせられては堪らないと思つてゐると、爺さんはぐるりと踵を巡らせて岐路へ這入つて了つた。

傾き掛つた處に白い寒さうな家が此方に向つて門を閉してゐる。二人は默つて扉を排して家の中へ這入つた。一番尻からのこ／＼跟いて來るイエドロフが勝手知つた顔で肩を縮めた。

「イエドロフ。これが爺さんの家かい。」

「ウム。ウム。」

イエドロフは莞爾々々してゐる。氣がつくと俺の長靴は雪にぬれてゐたから薄暗い廣い室へ這入つて行かうとして、まごまごしてゐると、爺さんがどしり／＼と俺の方へ歩いて來て、

「ヘエ。ヘエ。」と露西亞人特有の唸り聲で怒り出した。そして圓い眼で俺の靴を見下ろしてゐる。

俺は最初から此爺さんが怖かつたので、此處で眼を剝かれて、どぎまぎし乍ら、面喰つて其暗い部屋の中へ片足を踏み込むと、

「こら、こら、こら、こら」と俺の二の腕をぐつと引摑んで俺をするする戸口へ引つ張つて行つた。

到頭其處の石段で長靴の雪を手袋で叩き落して[illegible]俺の仕事を茫然眺めてゐる爺さんに連れられて再び暗い部屋へ引返して見るとイエドロフが居ない。

暗い室が卓子の上の窓から覗かれて爐邊に蹲踞んでゐる俺の尻がぽか／＼暖かくなつて來た。

今迄、外を歩いてゐる時はお互に口を利くのが億劫だつたが少し暖まると恐ろしく饒舌り出した。俺の伯父も椅子に腰を下ろして、頻りに此爺さんと話をしてゐる。話は何であつたか、俺は記憶してゐない。

雪の崩れる音が室外に聞えて、窓から見ゆる空の模様は段々いけなくなつて來る。部屋の中が暗くなると爺さんは卓子の上に蠟燭を立てて、火を點した。灰色の壁に灯が映つて[illegible]の燃ゆる音がぼうぼうと尻の方で鳴る。

からして神父と伯父とを相手に腰をかがめ乍ら口を動かしてゐる爺さんの、恰も高麗犬のやうな格好の顔を見詰めてゐると死んだ祖爺の顔を思ひ出した。俺の親爺は此[illegible]じみた油汚

ない爺さんよりは十位若くもあつたがもつと顔立が立派だと思つた。同じ露西亞人でも如何しても俺の親爺の方が小柄ではあるが容貌が上等だと思つてゐると、ひよいと俺の方を見て、

「お父さんの墓へ行つたかい。」と俺に尋ねる。俺は默つて點頭いて見せた。俺の先祖の墓は此爺さんと同じ村にあるんだ。どう云ふ譯だが親爺の遺骸だけはウラジヲストクのミハイル僧正の寺院に埋めてある。

「何と云ふ名前だつたね、坊は。」と伯父に尋ねてゐる。此爺さんの眼から見ると十二になりかけてゐる俺は確に、「坊」であつたに違ひない。此時伯父は、

「キヨスキー」と云つたやうに覺えてゐる。伯父からして俺の事をキヨスキーと呼ぶから、イエドロフ親子だつてキヨスキーで通すのだ。

　俺は此處でもキヨスキーで我慢を餘儀なくされた。すると爺さんは、つと立つて、

「キヨスキー」と言ひ乍ら、先刻のやうに俺の片腕を摑まへて、爺さんの膝の方へ引き寄せて置いて顏の檢査を始めた。伯父はにこ〳〵笑てゐる。

「ステパノに似て居るね。」一寸抱へる眞似をした。此時伯父は部屋の外へ出て行つて了つた。爺さんはポッケットに手を突込んで見たが、何も無いと云ふやうな顔をする。其處へ、今迄何處へ行つたか解らないで居たイエドロフが、

「マーレンキー」と云つてのつそり這入つて來た。右の手には一封の手紙を摑んでゐる。それを俺に見ろと云ふのらしい。

　爺さんは、半ば卓子に凭り掛り乍ら、伯父と話を復活させてゐた。俺が其手紙を手に取つて見ようとすると、

「一寸待つて呉れ」と件の手紙を引奪つて爺さんの方へ持つて行く。爺さん其手紙にざつと目を通すと、頭を斜めに振つて、浮かぬ顔をした。そしてペンを取ると、封筒の上に、すら〳〵走らせた。それを今度はイエドロフが更めて俺の處へ持つて來て見せた。

「愛するレオフ・トルストイより」と書いてある。

「ウン、ウン、レオフ・トルストイ」イエドロフは頻りに喜んでゐる。今度は表面を返して見ると、

「神に忠なる寡婦へ」とあつた。

「レオ・トルストイといふのは此爺さんだねえ」

「レオ・トルストイ？ ム左樣だ」

「寡婦といふのは誰かい？」

「モスクワの婆さんさ」

「ム。ム。」

あの欲張りの宿屋の婆さんに、此爺さんは何の用があつて此樣手紙を書いたのだらうと少なからず好奇心に驅られて、封をしてない儘れ、中から手紙を引き出しかけて、一寸、イエドロフの顔色を窺つたが、別に、苦情も言はず、眼波を寄せてゐる。手紙は誰が書いたものか知らないけれども、文句は、確にイエドロフが家出の事に就て、冗々しく並べ立てゝある。今にモスクワへ歸るが喧嘩をしては神の罰が怖ろしい、婆さんにも忠實なる神い僕になつて吳れ。と云ふやうな事が書いてゐつた。これは後でモスクワへ歸つてからアレキシス屋の婆さんに聞いたのであるが、イエドロフは、何でも此爺さんの別莊で何か用達しをしてゐたらしいのである。それで夫婦喧嘩の仲裁迄賴み込んだのであらう。

「イエドロフ。これを持つて家へ歸るの？」

「歸る。」

「何時」

「キヨスキーと一緒に歸りたいねえ。」と途方もない事を申し込んだ。

「俺は何時歸るか解らないよ。」

「明日でも歸つたらどうだね。」

「伯父さんに尋ねて見るとい〻。」「俺は成る可くなら此樣な男と一緒に歸りたくなかつた。世間を知らぬ此も、流石に、伯父には懸け合はないで浮かぬ顔をしてゐる。實を云へば俺も早くモスクワへ歸りたかつたけれども、此方へ來てからまだ一日しきやならないから折角誘つて吳れた伯父に、もう歸りませうとは云ひ兼ねて、此塩梅では、毎日毎日雪の上を駈けずり廻らねばならぬかも知れないと思つて情けなくなる。伯父だけは落ち着いてゐた。

俺と伯父は間もなく爺さんの家を辭して外へ出た。爺さんはむつつりした顔で戶口まで出て來て送つて吳れた。その後ろに田舍風の女が二人俺の顔を凝乎と眺めてゐるのを發見した。

イエドロフは、如何したか知らない。來がけの路を、とぼ〱步いて五六軒疎らに農夫の家が塊つてゐる處へ來ると、馬車が待つてゐた。けれども馭者が變つてゐる。

僕は伯父の脇に小さくなつて乘つた。午後二時頃、可なり賑やかな村に着くと、其處で下車てこれからまた顏も名も、まるで未知の人々の處へ一夜の宿を賴みに行かねばならぬのである。

俺は雪の上を步くのが大分上手になつた。

翌日も空が曇つてゐたが、降りさうには見えなかつた。伯父は俺を殘して朝の內から何處かへ出掛けて行つて未だ歸つて來ずにゐる。昨夜寢た此家は、如何やら宿屋ではない樣だ。

昨夜寒さに眼が醒めたので、寢臺の上に起き上つて窓の外を眺めると、茫々として果てしない眞白な雪の原を、汽車が眞紅な火を噴いて走つてゐた。夜が明けてから今一度夜半に覺めた處を見直したが何もない。けれども、田舍停車場に近い處だとは、近所に踏切りがあるので受取れる。ヤスナヤ・ボリヤナから三里位はあるだらうか。

村の名は地圖を擴げて見れば、今でも思ひ出せさうである。

俺は此一日、伯父が歸るのを待ち暮らして、一寸も家を出なかつた。

夕飯時に、家族の人々と顔を合はす外には絶えて口を利かない。顔も見ないで、貧しい爐邊に、うつらうつらしてゐると日が暮れて、伯父は歸つた。其翌日も晴れてゐた。降り積んでゐる雪は次第に硬くなつて來た。俺は此日、恐しい光景を見物した。見物したばかりではない、一昨日別れたばかりのトルストイ爺さんと一緒になつて働いたのだ。

今日でも其時の有樣を追想すると身慄ひがする。

俺は此一日の事を話す。

モスクワを去つてから丁度三日目の朝であつた。伯父と俺は再びヤスナヤ・ボリヤナの村へ向つて馬車を走らせた。

朝のうちは、空模樣が險しいといふ程でもなかつたが、俺達がヤスナヤ・ボリヤナに着く頃から、四邊は恐ろしく暗くなつて來て、物凄い雪雲に反響する鞭の唸りがヒユウ、ヒユウと聞えて來る。やがて馭者臺から、帽子をすつぽりと耳の上まで被り込んだ馭者が、

「降るぞ、降るぞ」と獨り言を云つた通りに、灰のやうな雪が一面に狂ひ舞つて來た。

俺は伯父の眞似をして、頭から外套の大きな袋頭巾を引つ被つてゐると、瞬く間に雪は來た。二三間先が、朧ろ氣に見ゆるだけで、右も左も眞白な簾に閉さゝれて了つた。折々例の鞭の音が風を斫つて響くのと轍が雪に食ひ込んで、がら〳〵軋る音が耳につく丈で、雪を恐れて、此邊へ散らばつてゐる人の影もまるで家から出て來ないと見えた。

何れにしても俺はこんな寂しい處で深い雪に出逢つたことは始めてゞある。最初美しく見えた景色が、段々怖くなつて來てなまなか出掛けずに居ればよかつたと後悔する。頭を襟に埋めて眼だけ出して、鼻と口とは袋頭巾の平べつたい紐で隱して置いて、眞向から打つつかつて來る風雪を、少し腰を曲げて頭で、突つ切る工夫をした。伯父も馭者も雪と風に對する防禦策を講じてゐる。かうして馬車が恐ろしく動搖し乍ら駈けて行く途すがら、伯父は手提鞄を小脇に抱へた儘で二三度馬車を下りて、

川を足して來る。その都度俺は馬車の上に十分なり十五分なりぽつんとして伯父の歸るのを待つのであるが、凝乎としてゐると、寒さが靴の底から全身に泌み渡つて來て、身を堅く縮めて力んでゐた。

俺の伯父は、厚い布を張つた屋根の下で小口の瓶から黃色い臭い酒をぐい／＼呷つた。

そして、無言で俺にその飲かけを押しつけた。俺も呷つた。足の指の頭が、千切れて落ちそうにぎりぎりと痛んで仕様がない。眼の底から冷たい涙が、ぼろ／＼湧いて來て、小鼻から頰を傳つて唇へ流れ込む。

かうして爺さんが住んでゐる村は素通りして了つて、小さい貧乏村へ入ると、村の入口に出迎ひの百姓が一人路傍に俺達を待つてゐた。其男は俺達を見ると、早口に何とか云ひ乍ら雪を蹴散らして馬車に乘つた。

馬車は動き出した。雪は愈々酷くなる。爺さんの村から一里半ばかりの處で馬車は、ごとり止まつて、第一に百姓の男が飛び下りる。此處で下りて了ふのかなと思つてゐると第二番に伯父が下りる。續いて俺が下りようと、馬車の柱に一生懸命捕つて居ると、百姓の男が、後から抱き下ろして呉れた。

三人は一口も利かずに、寒さを堪へ乍ら、五六間雪靴を引き摺ると、其處から往還が二つに岐れてゐて、其分岐點の眼の下を狹い小川が流れてゐる。片足を上げて氷を踏んで見たが、何の音もしない處を見ると、底まで凍つてゐるらしい。四五尺程の雪の路を苦心して歩くより、此小川の水の上を辿つた方が如何位樂だか知れない。前の百姓も伯父も俺の眞似をして川の上を渡り始めた。

少し淺い個處はギシギシと氷の咬み合ふ音がする。これで、一町も來たなと思ふ頃、水車小屋が眼の前に現れて、飴のやうな氷柱がぶら下つてゐる。其處から汚ない百姓の家が幾つか疎らに續いてゐる。

急ぎ足で雪を蹴つてゐた伯父は、おや、と思ふ間に、一軒の薄暗な百姓屋に紛れ込んで了つた。

「彼處だ。彼處だ」と此百姓はいきなり俺を驅け拔いて、其百姓屋へ飛び込む。俺も後から、ぽつりと這入つて行くと、伯父は見た處此百姓の妻君らしい下品な人相の女を相手に焚火を團み乍ら饒舌つてゐた。黑い薪の煙りが、粗末な家の中に、卷き上つて、蛇の舌のやうな眞紅な焰が、爐邊の二人の顏をてか／＼と照した。

俺は先刻の百姓と膝を突き合せて、焚火の前に蹲踞んだ。途端に、焰の中に茫乎した赤鬼の顏が、焰の具合で現はれて、お

や、と思ひ乍ら、一心に煙の底を見詰めると、其鬼のやうな顔は爐の向ふ側にあるらしい。煙がむく／＼と立ち登ると忽ち消えて了ふ。

俺は薪の煙を避けるために、ぐるりと向ふ側へ位置を換へると「キョスキー」と怒つて、俺の肩を叩いた者がある。ひよいと振り向くと、頭の上に先刻の赤鬼の顔が現はれた。俺は立ち上つた。よく見ると、赤鬼の面に見えたのは、此薄暗い土間とも板の間ともつかぬ程、泥で汚れてゐる床に積み重ねた薪の上に腰を下ろしてゐる一昨日の爺さんだ。トルストイ爺さんだ。

爺さんは煙の中で圓い眼をしばだたかせてゐた。兎もすればぼう／＼と燃え上る焰に、赤鬼の樣に見えたのである。爺さんの顔を見ると、イエドロフの事を思ひ出したが、此爺さんに、イエドロフは如何したかと、尋ねる氣にもならず默つてゐると、先刻の百姓がばた／＼と表口から駈けこんで來て、「旦那？ 早くしねえと危なうございますぜ」と伯父に向つて言ふ。何が危ないのか俺には解らなかつたが、此爺さんと伯父と百姓との綴りのつかぬ話を聞いて居ると、何でも近所の百姓が何處かで怪我をして生命が危ないので、醫者の處へ、此の百姓が駈けつけたけれども、遠くへ出掛けた留守なんだ。仕方がないから、爺さんを引つ張つて來たと云ふのである、引つ張られて來た爺さんだつて、醫者でないから、怪我人の家へは行かずに、此家で焚火に尻をあぶつてゐる。

「そんなに危ないのかね」

「危ぶなうございます。」伯父も呑氣な醫者で、危ないかね、危ないかね、を繰り返すだけで中々動く氣色がない。處で、或醫者が暫く此爺さんの家に厄介になつてゐたが、生憎居ない。何處かの宿場に醫者がゐるから、遠くもないし、早速呼んで呉れろと爺さんが百姓に頼んだから、百姓は呼びに行つて、漸く連れて來たといふのだ。その醫者が俺の伯父だから驚いてゐると、此爺さんは尻をあぶるのが嫌になつたと見えて、芋俵のやうな外套の頭巾を被つた。兎も角も行つて見やうと云ふ。

「何時怪我をしたのかね」と俺はお神さんに尋ねる。

「昨日の夕方でさあ。昨日の夕方」

昨日の夕方、そんなに酷く負傷した人間を、如何してゐるのだか知らないけれども、一日放つといたら可憐相に死んで了ふだらうと、俺は一人で心配してゐると、爺さんと伯父と百姓が家を出て、ざくりざくりと歩るき出す。

「お前さんは焚火にでもあたつて居た方がいゝよ」お神さんは後から御苦勞にも跟いて行かうとする俺を引き止めようとした。

俺は頭を振つて聞かなかつた。

大怪我をした百姓の家は小高い岸の横腹に氣味惡く建てゝある。門口に佇んでゐた細君が、乳吞兒を抱いて、蒼い顔をしてゐた。

俺達を見ると、忽ち怒鳴り出した。

「カルジンはもう死んで了つた、口も利かずに、唇を動かして。」

「死んちまつたかい？」百姓は細君の顔を見詰めた。

細君は默つて返事もせず抱いてゐる子を揺つた。

「どれ、どれ。」百姓の後から伯父と爺さんが暗い物置のやうな部屋の中に這入つて行くと、部屋の入口には、筵と薪がうんと積んである。大怪我をした百姓は一體何處に轉つて死んでゐるのかしら、と怖々其處を見廻してゐると、誰かがシユツとマッチを擦つた。やがて其のマッチの火が蠟燭の心に移されると、部屋の中が仄かに明るくなつて來る。

「旦那、カルジンは床の上に寢てゐます」と指さす方を三人は一樣に眺めた。藁蒲團の上に夜具を敷いて、その上に仰向けに寢てゐるのが怪我をした百姓で、今迄此暗い部屋の隅に一日呻吟通しに呻吟いてゐたのだと云ふ。其處から臭い匂が洩れて來た。爺さんは、一間ばかり離れて兩手をポッケットに突つ込んだなりで立つてゐる。

「死んちまつたかしら」

「一寸お待。」

伯父は、此病人が頭に卷きつけてゐる鉢卷をぐる〳〵解いて行かうとすると、錆色の血塊が鉢卷にこびり附いて、剝すまいとする。伯父は無理に引き剝した。眼を閉ぢてゐた男が「ウーン」と呻いた。もう血の氣がない。「矢つ張り生きてゐるね」例の百姓は鬼爪らしくカルジンの枕邊に寄り添うた。伯父は暫く傷口を調べてゐたが、其處にカルジンの妻君が居ないことを確めると、

「駄目です」

と低い聲で爺さんの方を顧りみた。

「可哀相に助からないかなあカルジンは」爺さんは凝乎として動かない。伯父は、眞個に駄目だと云ふ顔をして再び傷口に繃帶をした。

「もう長い事はないだらう」と呟やく。

俺は此男の妻君が可哀相になつて來た。半死人の枕邊に燈した蠟燭の灯が、天井から落ちて來る漏水の雫を吸ふて、ジイジイと彈く。火の氣の一つない部屋の中へ、恐ろしい寒さが襲つて來た。半死人は次第に冷たくなつて行く。伯父は情ない顔をして、

「如何してカルジンは負傷したかい？」

「氷柱が崩れて頭が飛んぢまつたんでさあ」

と大きな氷柱のやうな風をして見せる。

「何處だらう」

「直ぐ裏の丘でカルジンは鐵砲を打つてゐたんでさあ。プンと鐵砲が鳴つて駈け出さうとすると、旦那、もうカルジンは引つ繰り返つちまつて氷柱と打つ突かつたんで。見なせえまし、この傷がそれなんでさあ！……貧乏者――可哀相に、死んぢまふのかな」と百姓は、見物して居た樣に話をした。

「左樣かね。行つて見ませう。」

伯父は爺さんを誘つた。

「フム、フム」

爺さんは老年の癖に氷柱の下へ行つて見る積りだ。

此處を出る時、伯父は、細君に彼の蠟燭を消すなと言つた。細君は矢つ張り怒つた顏をして居つた。

直ぐ此半死人の家の後から登り難い短かな石段がついてゐる。それから一寸した丘の上に出ると、樺の林がある。恐ろしく巨きな老樹が枝を參差して、一丈餘りの大氷柱が、鐘乳石の樣にぶら下つてゐる。人間の脊よりもずつと高く、人間の體よりも餘程大きい。如何して斯樣な大な氷柱が出來上つたのか不思議でならない。

半死人の百姓は此處へ獵に出掛けて來たのであらう。靴の跡は雪に印された儘で一尺ばかり凹んでゐる。其足跡を辿つて行くと、大きな岩で行き詰つた。其處で靴の痕は消えてゐる。

「此處だ、此處だ」

百姓は岩の根を指して見せた。

「俺は此處からカルジンを擔いで歸つたんですぜ。其時鐵砲を忘れてゐた。」

とぐるぐる其岩の根を探り廻してゐる。此處で打つ仆れたものだとすれば、血痕でも殘つてゐる筈だが、そんな穢ない物は何にもない。

小止みになつた雪は、再び林の枯枝を潜つて、どしどし落ちて來る。

「此處かね」

爺さんが百姓の男を見ると、

「間違ひなく此處でございますよ。」

と薪の先で、雪の上を搔きまわして見せた。

「どれ。私にそれを貸して御覽。」

と爺さんは、件の薪を雪の中へ突き差してがさがさ掘ぜくる。昨日から積雪の上に更に一尺以上も積んでゐた。せつせと、掘

つて行くと、雪の中から眞黑なものが頭を見せた。

「お爺さん。俺が掘る」

俺が、いきなり、兩手を搔つて雪を掘らうとすると、

「キヨスキー、へえ、へえ。危ない。危ない」と云ひ乍ら、俺の手を靴の先で拂ひのけた。

すると側から木の枝を拾つて來た百姓が、ごり〳〵探し始めた。掘り出して行くうちに黑い物は段々、はつきりと形を現はした。最後に出て來たのは一挺のマキシム銃だつた。

十五分間ばかり、氷柱の下に俺達は立つてゐたが、間もなく例の焚火の家へ引き揚げた。それから三日目にまたモスクワの下宿へ戾つた。ヤスナヤ・ポリヤナを出るとき、この爺さんが、

「さようなら。キヨスキー、またモスクワで逢ふわい」

と云つた。果してそれから暫くして俺は修道院で、この爺さんにぽつこり出逢つた。それはもつと先だ。

モスクワへ戾ると、ペトログラードから伯母ターニヤが家へ歸つてゐた。

「伯母さんや伯父さんが、まだモスクワへ戾つたんだから、イエドロフの宿から引揚げておいで。あんな汚ない處にゐるもんぢやありませんよ」

と云つた。人を馬鹿にしてゐる。汚ないやうな處へ何故、最初から俺を預けたんだと思つた。

その晩、またいやなターニヤの側でくらすことになつた。巴里からは、なか〳〵叔母ラリーザが俺を迎へに來ない。三月經つた。

或る日の午後のことだ。

俺が應接間のソファに兩足を伸ばして讀書してゐると、「男爵夫人」が、のつそり入つて來た。「男爵夫人」はタニアが俺よりも旨い物を食はせて寵愛してゐる牝猫だ。

此猫が微風の如く、こつそり入つて來た。暫く俺の顏を迂散臭い目で見詰めて居た。そのうちにぴよいと卓上へ跳び上つて、肛門を膨らせた。忌々しい。突落してやらうと考へた刹那に、窓際に松茸帽を冠つて、土耳古の皮手袋を穿めたタニアが現はれた。

すると、「男爵夫人」がいきなり窓掛へ跳び移つた。その拍子にインキ壺が後趾で蹴倒されたから、讀みかけの本が滅茶滅茶になつた。癪に障つてゐる矢先だから俺は手を延ばして「男爵夫人」の柔らかい首筋を摑んで力任せに床へ叩きつけたら、ぎゆうと呻つて動かなくなつて了つた。

心配になるから猫を摘み上げて見ると、死んでゐる。俺は少なからず狼狽した。美しい動物なんてものは案外脆いもんだ。

次の瞬間に恐ろしい目が俺を睨んでゐるのを發見した。惡いことをしたと思つたが、後の祭りだ。ひたすら恐惶してゐると女だてらにタニアが窓を跨いで入つて來て、眞つ赤な顏に、ぼろ〳〵涙を零し乍ら、くやしさうに猫の死骸を抱いて接吻した。

美しい動物と云ふものは果報なもんだ。タニアは俺が死んだつて涙一つ零して呉れまい。

それから戰々兢々として悸んでゐる俺の耳を、ぐい〳〵引つ張つた。この邊で涙を零して泣いて見せたら、死んだ畜生の弔ひにもなるし、タニアの怒りも、いくらか鎭まるだらうと思つて、思ひ切り哀れな聲でわいわい泣いた。

然し泣きやうが非公式だつたんだらう。到々門口から地下室へ摘み出されて了つた。

地下室は最初は眞つ暗だつたが、段々馴れて來ると、何でもない薄明るい冷つこい處だ。タニアの側にゐるより餘つ程いい。

俺は醫者の邸宅に地下室があらうとは思はなかつた。四方の壁は黃色い石と耐火煉瓦で積んである。床は厚い砂磐で、靴の先で、こつ〳〵掘つて見たら、馬鈴薯が、ころ〳〵と轉り出た。面白いから、こつ〳〵と掘る。またころ〳〵と飛び出す。今度は壁の隅に列べてある大樽を覗いた。一種の刺激性な惡臭が鼻を衝いて來る。腕まくりをして、樽の中へ手を突込むと、ひやりと針で刺すやうな冷氣が腦天まで響いて來る。はゝあ水だなと思つた時、俺の指の先に柔かい肉のやうなものが引つ掛つた。引き上げて見ると、鹽漬けのキヤベツだ。キヤベツが醱酵してゐるために、ぬら〳〵と指の間から逃げ出さうとしてゐたんだ。

俺がパンの間へ挾んで食つたり、豚の肉を包んで食つたりするのがこれだなと思つた。

俺は日本に居る時、何にも知らずに糟味噌へ手を突つ込んで水膨れに腫れたことがある。今度も、どうかなりやしないかと思つて心配したが、何ともなかつた。

次の樽を覗くと、腐りかけたスウヨークラ菜が泡を噴いてゐた。二度目に露西亞へ來たとき知つたのであるが、實は今俺が幽閉されてゐる地下室が、貯藏畑だつた。だから、砂の中から色々の野菜が出て來ると思つた。冬は溫かくて、夏は涼しい。晝間暑くつてやり切れない時は、投げ込まれないでも、自分で志願して入つてやる。砂畑に轉つてゐると、去年漬け物の手傳ひに態々遠い田舍から汽車でやつて來た百姓の娘を思ひ出した。頭から風呂敷を被つて、庭先で鼻唄を唱ひ乍ら、膝から下

は素裸で、畑の中へ入つて豆を撒いたり、キャベツを踏んだりしてゐた。あゝしないと出來ないのだらう。あの娘は、あれが毎門で、都會を見だけ廻つて歩るくのだらうと思つた。

俺は日本に殘して來た片目の祖母が、金比羅様に、俺が早く日本へ歸りますやうにと祈願を込めてゐる夢を見乍ら、砂畑の上に寢てしまつた。

タニヤが、その晩貯藏畑を覗きに來た時、俺は砂の上で、手も足も顔も砂だらけにして、ぐつすり寢込んでゐた。タニアは空氣ランプを提げてかう言つた。

「お前は學校へ行くんですよ」

俺は驚いて

「學校は休暇ぢやありませんか」

と言つた。

「可哀さうに無邪氣な猫を殺すやうな酷い兒に休暇なんぞいるものか。さうだらう？」

「學校へ行つたつて誰も居やしませんよ」

「お前の學校ぢやないよ。ゾウスカ先生が親切に休暇中でもお前の世話をしてくれるさうだから」

そんな親切があるものかと思つた。

「誰がそんなことを頼んだんです。伯母さん」

「妾ですよ。お前のやうな娘が學校は休みなしで、みつしり続けて貰はないと、碌な者になりやしない」

碌な者にならんでも構はんさ。

「今晩から行くんですか」

「いゝえ。明日お出で。電話で先刻さう言つて來たから、今晩は大人しくお寢み。お祈りする時に、私に新らしい心を下さいますやうにと、神様に忘れずにお願ひするんですよ。」

「新らしい心つて何です」

「何でもいゝから、左様云つてお願ひさへすれば、神様の方ではちやんと解つてお出だ」

神様は、して見ると、學校の教師のやうなもんだ。學校の教師は俺が理解の出來ぬ答案を書いて出しても、ほんたうに解つてゐるものだと感違ひ（かんちがひ）して及第させてくれる。

「今夜お前が突然死ぬやうことがあつて御覧、お前は何處へ行くかい」

「何處へ行くか知るものか」

「いゝえ。知れてるとも」

「ぢや何處へ行くんです」

「地獄さ」

俺は漸く釋放されて、寢室へ護送された。寢床へ這ひ上る時就寢前の挨拶をした。

「お寢みなさい伯母さん。今晩死んだら地獄へ行きます。だから接吻をして下さい」

「いけません。お前なんかちつとも可愛かないよ。お前の悪戯が世間に知れたら鼻摘みにされます。お前は大きくなつたら人殺しでもやり兼ねまい」

と毒づいた。

「私ほんたうに濟みませんでした。ほんたうにすみません。もう二度とあんな眞似はしません」

俺は急に心細くなつたから、藁蒲團の上に、きちんと坐り直して、頸に掛けた十字架の鎖を外して、叮嚀に詫びた。

「妾も油斷しない。またどんな悪戯しないとも限らない。一すぢ縄で行かない兒だからねえ。それではお祈りを忘れないやうに」

と言つてタニアは出て行つて了つた。俺は眠くつて仕方がないけれども、命ぜられた通り十字架の黒い珠數玉を繰り乍ら、熱心に祈りをして、いつまでも善良な兒であるやうにと願つて寢た。

後で聞いたら、「男爵夫人」はタニヤが伊太利人から百留で買つたんださうだ。して見ると俺の一ケ月の學費の三倍になる。つくづく悪いことをしたと思つて後悔した。

俺は、自分の手足と胴とを別々に取り脱して函の中へ入れて、「これだとつゞまりがいゝ」と安心して首だけで寢て居る夢を見た。

二

翌朝俺はセルギヴスカヤ學校へ追ひ遣られた。ヤロスラヴスキー停車場で、俺を受取に來て居たゾヴスカといふ貧相な女先生の手に引き渡された。

そして囚人同様の監視の下に、學校へ着いて見ると驚いた。其處は尼さんを養成する女學校だ。休暇で女學生は一人も居ないからよかつたが、それでなければ、吃驚して脱走を企てたかも知れない。

校舎はがらんとしてゐた。ゾヴスカさんは俺を引張つて、校舎をぐるぐる巡り歩いた。俺の部屋を決めたり、湯桶を敎へたり、食堂を覗かせたりした。斷つて置くが、俺はあてがつて貰つた湯桶を一度も使はなかつた。食堂にも入らなかつた。休暇中留守をあづかつてゐる女中が怠け者と來て居るので、別段に女學生の世話を燒くやうに更まつた湯桶に入らなくつてよからうと云ふから、ウンいゝと答へたら、女中が入る風呂桶に一緒

に俺を入れた。不都合な女だとは思つたが、惡作に背中を流したり、腕を洗つてくれたりするから文句も出なかつた。同じやうな理窟で、食堂は陰氣だ、それより自分の友達が、いつも御茶呑みに來るから、食事は臺所で間に合はせた方がいゝと獨りで決めて了つた。

寢室と湯槽と食堂の検分が濟むと、今度は花園へ出た。

花園と云ふと綺麗に聞えるから、荒れ果てたことを言ひ表はすために廢園と云ふことにする。

ゾヴスカさんは痩せた色の白い、脊の高い、ひよろ／＼した四十年配の露西亞正教の尼さんだ。ゾヴスカ尼さんと俺は廢園の入口に列んで立つた。

そこから、石垣を越えて、トロイツコ・セルギヴスカヤ・ラヴラの古城が見える。石垣から廢園の小徑を、巨きな楡と、ソースナ松樹と、ツーブ樫が、翼を擴げてゐる。塔のやうな簇葉の隙目を黄金色の朝の光が、[illegible]搖と潜つて來る。樹の葉が搖れるのでなくて、まるで光が瞬くやうにぎら／＼閃めいた。啄木鳥のくちばしで啄いた樹の皮が、蝗蟲の刺青見たやうに、點々と刻まれて、鐵砲蟲の出た痕が白茶化けてゐる。

校舍の周圍は廢墟だ。廢園の雜草が遠慮なく延びてゐる。五月菊と、[illegible]菜が小さい花を開いてゐた。[illegible]

ゾヴスカ尼僧と俺の頭の上から、復活寺の午鐘ががらん、がらんがらん、鳴り出した。俺はこんな幽靈屋敷じみた氣味の惡い家を見たことがない。モスクワの街は不思議な處だ。街のまんなかの丘にクレムリンの城廓があつたり、「赤い町」があつたり、ユダヤ町があつたり、貧民窟があつたり、酒場の窓から尼さんの顏が出たり、勸工場の門から牛が出て來たりする。モスクワ河畔にこんな寂しい學校があることも知らなかつた。愈々今夜から先生と二人で此家に寢起するのかと尋ねたら、ゾヴスカさんは氣の毒さうな顏をした。

「妾は旅行するからお前さんはコロドナが世話をします」

と云ふ。コロドナとは誰のことだか解らない。

「お前さんはタニアさんの家と此處と、どちらがお好きか」

と尋ねる。

「どつちも嫌だ」

と正直な返事をすると、仕方がない、一ケ月我慢しなさい、さうすれば、授業が始まるから家へ歸れると云つたが、タニヤの家へ戻る位なら、いつまでゝも此處に居る。いけなければ飛び出して乞食にでもなつた方が、いくらましか知れやしない。

女はほゝと笑つて、それでは妾が歸るまで大人しくしてゐらつしやい。ペトロクラードで一週間以内に用を足して來ますと

云つて、裏木戸から往來へ出て行つて了つた。幽靈のやうな賴りのない先生だ。このゾヴスカさんとタニヤが、どんな交渉ひの友達だか知らない。いくら大切な猫を殺したからとて、こんな意地惡い復讐をしなくつてもいゝだらう。猫を殺す少し前にリーザといふ田舍娘が下婢に雇れてゐた。解傭される日に、アストラハンの黑茶碗を破したり、イコナの前に釣してある提燭盞のオリーブ油を刺繡の絹綸の壁畫に零したりした時、タニアは火の如に怒つてリーザを靴で蹴つた。リーザは烈しい畏怖に襲はれて、絨氈の上に跪づき乍ら、タニアの着物の裾を捕へて續け樣に何遍も何遍も接吻して

「神樣。何卒奥樣が妾の粗忽を許るして下さるやうに、奥樣の心を和らげて下さい」

と叫んだ。俺は其晩リーザが大きな風呂敷包みを抱えて、頭から顏を隱すやうに絹巾を被つて門を出て行く姿が可哀相でならなかつた。田舍へ歸るのか、雇女紹介處へ行つて訴へるのか知らないけれども、彼女に錢のないことはよく知つてゐたから、馬車賃を惠んでやらうと思つて金入を探つたら郵便切手がたつた一枚あつた。

叔父は患者の家へ出掛けた留守だつた。タニヤだから、入口で見張つてゐたかも知れない。だから、猫を殺した罰に空家同樣の學校へ放り込む位のことは、恩典だと思へと言ふ氣でゐるのだらう。

それで居て、巴里のラリーザ叔母の手前は、休暇中でも學校で勉強させてゐます。義姉さん御安心下さい、妾があづかつて世話を見てゐる以上は、決してあの兒の不爲になるやうなことはしない。序に今月分の學費を寄越してくれるやうに旨くたくらむに違ひない。俺はそれが口惜しかつた。手紙にも一二度タニヤの讒訴をして內證で出したが、ラリーザ叔母は何と云つたつて年寄と共鳴するだらう。

露西亞の女は、みんな年を取るとこんなだらうかと思つてゐると、スコッチ縞紗の肩掛けを引つ掛けて、白いリボンの饅頭帽子を冠つた女中風の中年の女が、臺處の入口に出て

「キヨスキー」

と黃い聲を出して、俺を手招ぎした。

ゾヴスカさんより、ずつと下卑た着物を着流してゐるが、ゾヴスカさんよりは、顏が氣持ちよく出來てゐる。一見してユダヤ女だと悟つた。

臺處へ入つて行くと、卓子の端に黑麵麭と牛乳の壺と肉饅頭に赤い粉を振りかけた皿が列べてあつた。俺に食はせるのだらうと思つて椅子に掛けやうとしたら、この女が俺の手を握つて

引き寄せるや否や、電光石火の早業で額に接吻した。俺はその時、この女が綺麗な耳環を穿めてゐるのを見た。

「キヨスキー。いゝ子になるんですよ。今夜から、妾がお前さんの母さんになつて上げる。」

こんな荒つぽい下品なお母さんが何處の國にあるものか。ゾヴスカさんがコロドナがお前さんの世話を燒くと云つたのが、この女かと思ふと、何だか變な氣がした。然し、いつの間にか、俺の名を記憶へ込んでゐる處だけは感心した。

俺は最初この下婢のコロドナが俺を馬鹿にするやうな樣子だつたから癪に障つたが、段々馴れると、案外氣の利いた、よく捌けた、親切なことが解つたから、俺は何でもコロドナに相談した。翌晩コロドナが飯を食ふ時、

「お前さんは酒がのめるか」

と云ふ。俺は大好だ。此處にあるなら、内證で出して呉れと云つたら、コロドナは大きな口を開けて笑ひ出した。

「此處は修道院だからアルコホルは何にもない。お前さんが好きなら今度外出した時、貰つて來て上げる」

「何處から貰つて來るのかい」

コロドナは笑つて答へなかつた。この女の自讃によると、彼女が學校の生徒間で一番の人氣者ださうだ。然しゾヴスカさんとは犬と猿のやうな惡い仲で、いつも彼女が授業振りに口を出して叱られるさうだ。最初の晩は誰も來なかつたが、二日目からコロドナの遊び相手が來て、終日饒舌り續けてゐた。この連中も矢つ張り何處かで水仕事をしてゐるのだらう。コロドナには話相手があつたり、仕事があつたりするから氣が紛れていゝが、俺には話相手も仕事もない。たまに退屈だから、馬鈴薯の皮むきの手傳ひをしかけると、コロドナは口を尖らせて怒つた。彼女は自分の領分へ少しでも手を出されるのが嫌らしい。

だから殆んど一日を寢間でくらした。庭も飽き飽きした。陰鬱な部屋に閉ぢ籠るのは一番氣が腐つた。たまに石垣を越えて川畔へ出ると、コロドナは後から追つかけて來て、

「お前さんに散歩をしろと誰が云ひました」

と俺を頭から叱り飛ばした。公園のミハイロ銅像の鐵鎖にぶら下つてゐると、

「妾が、庭へブランコを釣つて上げるから、公園などへ行くもんぢやありません。公園にぶらついてゐる奴は、みんな惡人だから」

と云つて、寢間の楡の枝へ綱を掛けて、粗末なブランコを作つてくれた。公園に行く奴はみんな惡人だ、死んだら地獄へ行くのかも知れない。この學校では、そんなことも教へてゐるか

ら、コロドナが開きかじつてゐるのだらう。

俺の部屋は教室だ。塵つぽくて、汚れたインキ壺が隅の方へ掃き寄せてある。黒いアカシア樫の机とデヴアンが積み重ねて、その上へ地圖が卷いて乘てゝあつた。黒板には消しかけた白墨の文字が、いくらも殘つてゐる。

聖母マリアの像が柱時計の上に掛けてある。窓が三つ、廊下に一つと、廢園に面して二つあけてある。「スシスタス」から冷たい風が流れ込んで來る。壁は薄色に塗られ、點々として黄色い雨の痕に、黴が見えた。俺は午前六時から此處で、三十分祈禱をする。祈禱の本を机に立てかけて、床の上に跪坐して祈る聲が、洞穴のやうな部屋の中に、釣鐘の音の如く反響した。祈り乍ら、ふと止めて、自分の聲に耳を傾けると、壁に當つて戻つて來るのが聞える。

それが濟むと、朝餐だ。コロドナは俺に、朝の挨拶をした。そして一緒に椅子に掛けて、甘つたるい人參と馬鈴薯と、キャベツと肉塊を投げ込んで攪きまぜたスープを啜るのだ。

「食事が濟んだら、庭へ行つて遊んでゐらつしやい。」

とコロドナが俺を庭へ追ひ遣つて置いて、彼女は友達が來なければ、獨りで編み物の針を動かしてゐる。俺はこの位不思議な生活は、何處へ行つたつてなからうと思ふ。朝起きて黒麵麭を噛り肉汁を啜つたら庭へ出て、晝飯を食つたら、また庭へ出て、晩餐をしまつたら、また庭へ出て、睡氣がさす頃、キョスキーもうお寢みと云ふから引つ込んで寢仕度にとりかゝる。

これで押して行つたら、今に、頭が馬鹿になり、智慧が引つ込んで胴體ばかり大きくて、どんな退屈な世界へ旅行しても、平氣な人間が出來るだらう。コロドナもいゝ加減中毒してゐるのかも知れない。

寢室は低い屋根裏だ。三疊敷位の狹い處だ。そこへ木造の小露西亞型の寢床が据えてある。天井には大きな横梁が二本渡されてゐる。夜中に目が醒めると、この横梁が、みしみしと烈しく鳴ることがある。天井の板の目には、地瀝青と松脂とを煉り合せた、どろどろの塗料が塗り込められて、寒さを防いでゐる。柱には聖畫像が掛けて、棚に小形の福音書が埃を被つてゐる。寢床の足元には、石油ランプが釣してあつた。

明り窓の代りにペチカの側へ圓い一尺ばかりの硝子張りの孔が見える。夜明け頃にこの二重硝子の小孔から仄白い光が流れ込んで來る細工だ。はじめの晩に猫の夢を見た。夜になると猫の死骸を思ひ出す。同時に忘れやうとしてゐる恐ろしい犯罪の意識が、烈しく記憶の底から甦つて來る。

二日目に廢園の樹蔭に彳んでゐると、石垣の隣家の窓から白い女の顔が現はれた。女の顔は珍らしさうに鐵格子の內から俺を見下ろしてゐた。俺は引返してコロドナに

「隣家には誰が住んでゐるの」

と尋ねると、コロドナは不思議さうに、

「老人と娘が住んでゐるんです。お前さんはあの娘の顔を窓口に見やしなくつて？」

俺は頷いて見せた。

「あの娘を呼んで遊んぢやいけないかしら」

「飛んでもない。いけませんとも。あそこの老人は娘と一緒に遊ばせてもいゝ善良な兒はモスクワに居ないと思つてゐるんです。可哀さうにあの娘は毎日家の中にとぢ籠められてゐるから、あんな憔悴た顔をしてゐるんでさあ」

「放つとけば病氣になるだらうね」

「左樣ですとも。卵のやうに白い顔をして大變咳をするから。この頃は喉を喧らしてゐますよ。でも近いうちに佛蘭西へ行くと云ふから、今に居なくなるでせう。お前さんはあの娘と遊んぢや駄目ですよ。あの老人がお前さんなんぞと遊ばせるものかね」

コロドナも俺が猫を殺したことを知つてゐるんだ。俺は眞つ赤な顔をして逃げ出した。隣家の壁と學校の壁の間に空地があつて、一面に短い草が萌えてゐる。其處へ足を投げ出して、俺は何故猫を殺したらうと考へた。

少年時代に猫を殺した者は、罪人として永久に暗い汚點が着き纏ふて行くのではないだらうかと思ふと、俺は悲しくなつて來た。

古風な廢園、馬のない厩、つたの垣が目の前に現はれた。俺は草原に顔をあてゝ、死んだ親の名を呼んだ。廢園にはコロドナも出て居なかつた、然し誰か俺を見守つてゐるやうな氣がして仕方がない。

厩の壁には葡萄蔓が匍ひ廻つてゐる。まだ青い粒がいぼのやうに、ぽつつり、ぽつつりと梢に吹き出たばかりだ。俺は薔薇の花瓣をしやぶり乍ら、黃昏まで草原に坐つて、葡萄の實を數へてゐた。其夜は早く寢た。寢る時に「いつまでも善良な兒でありますやうに」を繰り返した。俺の眞面目な振舞は、この祈禱位なものだ。

三日目の朝、俺は樂しい過去もなければ、光輝の希望の將來もない、只無終止無際限の堪へ難い現在に生きて居る、棄て鉢の悲慘な獨りぼつちのみじめな兒として目が醒めた。目が醒めてから寢るまで、また廢園でくらした。俺の目には廢園が牢獄

の如く見えた。そして大人が牢獄を忌むやうに、廢園を厭ふた。逃げ出さうと決心したこともあつたが、その度に、僅かに巴里のラリーザ叔母へ手紙を出して、自分を慰めてゐた。猫事件を報せてやつたら、あべこべに愛相をつかされる恐れがあつたけれども、猫を引合に出さなければ、尼さんの學校へ押し込められた原因が解らなくなるから思ひ切つて訴へてやつた。

俺が生れる刹那から脊負ひ廻つてゐる陰欝な心はだん／＼險しく暗くなつた。何者か絶へず俺を見守つてゐるやうな、つけ狙はれてゐるやうな氣がした。

淋しい日はつゞいた。俺がこれから一生擔いで行かねばならぬ陰慘不滅の刻印は、この時、心にも頭にも、深く烙りつけられたものだと思つて伯母を恨んでゐる。

俺は此處へ來てから長い長い三日間といふものを廢園と寢床の中で過した。四日目に廢園のヅーブ樫の蔭から隣家の窓を仰ぐと、娘の顔が見えた。

娘は蒼褪めた小さい顔をしてゐる。瞳の青さが病的な曇りを帶びて暗碧色に、うつとり濡んでゐる。長い灰色の髮が、白い肩掛けの兩側に垂れて、髮だけが額から丸い木櫛で後ろへ押し分けてある。その先が短かく切れて、丁度繿褸裂の縁飾りの如く、そゝけてゐる。

娘は突然白鳥が羽搏きするやうな格好で、俺を手招きして微笑を浮べた。

「おーい。あんたは病氣かい？」

少女は微笑して幽かに、ぶる／＼と唇を動したが、何とも答へなかつた。

「聲が嗄れて出ないのかい。外へ出ちや駄目？」

少女は笑ひ乍ら默つて頭を振つた。

「あんたと口を利いたつて誰も怒りやしないぢやないか。左樣だらう？」

彼女はまた默つて唇を慄はせた。そんなことは云ふなと云ふやうな目で俺を一心に見詰めてゐた。

「そんな處に居て飽きやしない？」

すると、彼女は飽き飽きしてゐる顔をした。

「何か投げ込んで上げやうか」

と云ふと不思議に娘は聲を出して

「いらないわ」

と云つた。そして、

「妾はあなたが其處で遊んでゐるのを見てゐるのが好きなの」

とつけ足した。俺は夢中で廐の屋根へ石垣を傳つて登つて、屋根の端に兩脚をぶら下げ、調子を取つて、靴の踵で棟を叩た

くと、彼女に微笑し乍ら、拵のない拍子をしてくれた。
俺は一週間ばかり隣の屋根でこの娘と饒りつゞけた。遅くなるとコロドナが俺を引づり下ろしに來た。背伸びをすると、コロドナの肩が隣の軒まで屆く。コロドナは兩手を擴げて俺が跳びつくのを待つて、俺を背負ふと、さつさと寢室へ擔ぎ込んだ。俺がコロドナの背中であばれると、少女は窓の内で、聲を揚げて笑ひこけた。
朝起きると、今日も娘が窓口に出て與れゝばいゝがと心配した。樂しい心配に戰いた。
少女は俺が猫を殺したことを知らない。俺はそれを隱して居るのが苦しくつて到頭自分から白狀した。そして俺はそんな嫌な、今に殺人犯人になるやうな兒だと云つた。猫のことを考へると、無性に口惜しくて、涙がぼろ〳〵溢れて來る。
すると、少女は美しい目を見張つて、
「そんなこと妾構はないわ。妾あなたを、そんな怖い兒だとは思はなくつてよ」
と慰めて與れた。俺は安心した。
「あんたの名は何と云ふかい」
「ナタリア・ボノヴ」
「何歳？」
「十二」
俺も十二だと答へた。かすれてゐた彼女の聲が、段々明きとれるやうになる頃俺は隣の屋根の上に色々のものを持ち出して遊んで見せた。傾斜の急な板の上で時節外れの羽根を廻したり、玉を彈いたりして見せる。手際よく行くと、俺はナタリアの拍手を豫期して彼女を見たものだ。露西亜の唄が稍ぎれになると、日本の唱歌をうろ覺えに聞かせた。ナタリヤは窓のうちで足踏みし乍ら喜んだ。
俺は話を多く知らないが、俺の物語ることが、半間で、間が抜けてゐやうが、てんで嘘だらうが、ナタリアは熱心に耳を傾けてくれた。
俺は世の中の凡てが夢のやうに見えた。やまびこする部屋も、コロドナの下袴も、明るい饅頭帽子も、コロドナの友達も、黒パンもスープも、俺の寢床も、朦朧として夢の如く、たゞ、世の中に眞實のものは、窓から顔を出すナタリナだけだつた。
暗い鐵格子の窓から出る痩せた蒼い顔。一束の栗の髮。俺のすることを興味深く見る目、蒼白い手！
俺はナタリヤの身の上を毎日少しづゝコロドナに聞いた。俺にはも一つ眞個のものがあつた。それは夜の夢だ。夢に俺は窓のなかでナタリヤと遊んだ。そして歸るときに俺は目隱しをさ

れて彼女に導かれた。

俺は夢でなければ彼女と一緒に遊べなかつたのだ。俺はラリーザ叔母が來て巴里へ連れて行かれることを忘れてゐた。俺は僅かにナタリアの顔を見るために生きてゐたやうなものだ。コロドナが時々、俺をナタリヤから遠ざけやうとするのを悪魔のごとく嫌つた。

一週間以内にペトログラードから戻つて來ると云つたゾウスカさんは仲々歸らない。

コロドナが「今度外出したら貰つて來る」と云つた酒は、なか／＼貰つた來なかつた。何とかかんとか云つて胡魔化してばかり居る。市中に酒を賣つてないことはよく知つて居るから、何處から持つて來るか、何遍訊ね直しても只笑つてばかりゐる。俺はこの下婢め、嘘をついたな、子供だと思つて馬鹿にしてゐると獨りで憤慨してゐると、突然ワルシヤワから電報が來た。無論俺に來たのだ。

俺が暗い煤けたランプを天井から釣した湯室のカーテンを絞つて、脱いだ着物を釘に掛けて、湯氣の中へ跳び込んで、じやぶ／＼やつてゐる時、裏木戸の鈴が鳴つた。間もなく、コロドナが電報を持つて來た。

「ラリーザからお前さんに電報ですよ。ほら。妾封を切つて讀んで上げるわ。お前さんは其處で聞いてゐらつしやい。これでも妾電報位樂に讀めてよ」

と云ひ乍ら、びり／＼封を裂いた。電報にはラリーザ叔母が三日經つたら、モスクワへ着くとあつた。コロドナは自分で讀み乍ら、頻りに身振をする女だ。

俺は電報を自分で讀み直した時眞個に救けれたやうな氣がした。電報を石鹸函へ上げやうとしたが其棚に手が屆かないので鏡の前へぴつたり貼りつけた。コロドナはいつものやうに着物をカーテンの陰で脱いだ。そして裸になつてから、手拭を忘れたと云ひ出した。

「キヨスキー。今度だけでいゝから、お前さんのをお貸し」

「いやだ。誰が女に貸すものか」

「貸さなければ、借りなくつてもよござんすよ。その代り酒を持つて來て上げないから同じことだわ」

「貸したつて持つて來やしない癖に」

「今晩は眞個に貰つて上げる。だから體を拭くときだけでいゝから手拭をお貸しよ」

「貰つてやるたつて、錢がないだらう」

コロドナは十三から二十八まで、小使錢を一コペックも自分のものとして持たずに來たと自分で云つた。さうだらう。正教派の女學校の下婢に小使ひは要らない。買つてやると云ふから、それもいゝだらうと思つた。するとコロドナは裸で蒸熱い湯氣の中へ突つ立つたまゝ、赤い顏をして、編み物をスラヴヰアンスキーバザールの商人に賣つた金があると胸を叩いて見せた。彼女の全體から玉のやうな太い汗の粒が湧いてゐた。編み物を始終やつてゐることは知つてゐるが、その時編物の何を賣つたとか云つたが、忘れて了つた。何にした處で下婢の編み物だから大したものではない。俺は何だかこの女が可哀さうになつて來たから、

「手拭は貸すけど、酒はもう要らない」

と云つて手拭を渡してやつた。暫くすると、

「來週でなければもう湯を立てないから、叔母さんが來て汚れてゐちや妾が叱られる。こつちへ、上つていらつしやい。洗つて上げる」

と俺の腰掛を拵へて吳れた。其處へ坐ると、彼女は毛深い太い脚を投げ出して、脂ぎつた眞つ白な腕を伸して、俺の肩から脊中へかけて、ごし／＼擦り始めた。彼女は、毛深い脚と毛深い太い手が自慢なのだ。

「今晩お前さんをバザールへ連れて行つて上げやうか。行くかね。キヨスキー」

多分また編み物の帽子でも賣るのだらうと思つて、俺は行くと云つた。コロドナに頭から湯を浴びせて貰つて出て行かうとする時、彼女が俺を抱かうとしたから怖くなつてカーテンの中へ逃げ込んだ。

其晩ドロシキーを驅つてスラヴィアンスキーバザールへ行つたら小型のイコナを買つてくれた。歸りにツヴエルスカヤ街のブツフエツトで琥珀色のスウエトルイ・クワの中へウヰスキーを混ぜて飮ませてくれた。俺が金を拂はうとしたら、コロドナは目をむいて怒つたから、俺は慌てゝ金入を引込めた。ドロシキーの馭者がシユツ、シユツと鳴らす鞭が、金十字架の聖なる都の巷を學校の方角へ、敷石を彈いて猛然に走つた。

街の夜の灯がちら／＼動いて行く。突然コロドナが俺の腕を捕へた。俺はその時、コロドナが無理に接吻を求めた顏を忘れることが出來ない。

校舍へ戾つた時、彼女は小氣な顏をして寢室まで送つて吳れた。俺は恐ろしい、忌な氣持ちがした。翌朝買つて吳れたイコナは卓上のサモヴールの側に小さい額に納めてあつた。

タニヤの家にも叔母から電報が屆いたと見えて、俺を連れ戾

しに來た。半日ごたくロ論して到々俺は頑張り通した。この日も俺は遂に窓からナタリアが顏を出すのを見ることが出來なかつた。

俺の日記にはその翌日もナタリアの顏を隣りの窓口に見ないと記してある。

ラリーザ叔母は、質素な風をして、トロイカで、こつそり校舍の裏口から入つて來たさうだ。それはもう日が暮れて俺は寢床の上で「いつまでも善良な兒」を繰り返してゐた。

突然廊下を歩るく靴音がした。扉が開いて、コロドナとラリーザ叔母が入つて來た。俺は寢床の上から叔母へ犬のやうに跳びついた。俺は尻ごみするラリーザ叔母を無理に寢床へかけさせて、到頭一時過ぎまで起して置いた。コロドナの話によると、俺が「まるで戀人にめぐり逢つたやうな嬉しさ」で叔母を捕へて放さなかつたさうだ。

目を醒すと、昨夜は何處でどうして寢たのか、服を着替へて、叔母は臺處でコロドナと話をしてゐた。

俺は默つて殿園に出た。最後にナタリアを見たときとは、まるで違つた心持ちで、今日は「左樣なら」を告げやうと思つたが、窓は彼の扉が堅く閉されてゐた。

「ナタリヤ！　ナタリヤ！」

續け樣に呼んだ。すると、慌てゝ臺處からコロドナが出て來た。

「キュスキー。いらつしやい。お前さん早く手と顏を洗ふんですよ！」

「後ですぐ洗ふから一寸……」

「いゝえ、駄目ですよ。牛乳と、ほら……叔母さんが持て來なすつた綺麗な菓子を食べて、出發するんですよ」

「一寸今用があると云ふぢやないか」

「何です。用と云ふのは」

俺はこの女に隱したつて仕樣がないと思つたつたから、低聲で、

「隣りの娘に逢つてから行くんだ」

と云つた。するとコロドナが呆れた樣子で、

「ナタリヤさんに？　あの娘はゐませんよ」

と云ひ乍ら恐ろしい力で、俺の腕を摑んだ。

「さあ。さあいらつしやい。叔母さんが待つてゐるぢやありませんか。もうちやんと荷造りが出來てゐるのに。何です、見つともない。」

恐ろしい馬鹿力の女もあるものだ。俺を一間ばかり、ずるずる引つ張つた。其處へ誰かのそく入つて來た。俺は、するす

る肩を摑られ乍ら、その人の顔を見ると、ボリヤナの老爺さんだ。

「お爺さん。杖でコロードナの足を叩いて下さい。駄目なんだ。駄目なんだ。」

「いけませんよ。」

「何故僕は庭へ行つて、ナターリアを見ちやいけなのかね」

俺は、それでも抵抗した。

「見やうつたつて、あの娘は死んだんです」

爺さんが目を丸くくして臺所へ入つて行つた。多分俺の叔母に逢ふためだらうと思つて、今は猛烈に藻掻き出した。

「死んだなんて、嘘だ。」

「お前さんは何と云ふ馬鹿だらう。死んだ者に逢へるものかね。さあ。大人しく、いらつしやい」

俺は、草叢の中に埋もれてゐる井戸端に、柱からぶら下つて居る砂袋の下まで引寄せられた。

「ほんたうに死んだのかい」

「眞個てすとも。可憐さうに今頃は天使になつて、お前さんと狡とが爭つてゐるのを天國から見物してゐるでせう。疑つたつて仕様がない」

俺は、矢つ張り「嘘だ」と云ひ張つた。するとコロドナはそんならと云つて、先刻の場所まで俺を連れて行つた。そして堅く閉されて居る窓の戸を指して、あれでも嘘かと云つた。俺は彼女がほんたうに死んだものと漸く信ずるやうになつた。

其處へ

「肺病で昨日死んで、今日は老人が埋めに行つたから、家の中は誰も居ないんです」と押つかぶせて說き伏せて了つた。俺が茫然立つてゐると、また臺所から爺さんが出て來た。コロドナが、

「旦那樣。隣りの娘は死んだんでございますねえ。」

「死んだ?」

爺さんは肩を揺つて、肩へ首を縮み込ませた。そして額を顰めて、口を尖らせた。

「ニコラス・リユベイモヴ僧正の姪のナタリヤが死んだとは思はぬ。」

「それ見ろ。コロドナ。爺さんが知つてら。ね。お爺さん。死ぬもんかね。」

「コロドナが左樣云つたかい。キヨスキー」

この爺さんはまだ俺の名を記憶てゐた。

「嘘をついたんですよ。お爺さん。」

「はつはつは。キヨスキー。それぢや死んだかも知れんぞ。そ

れよりお前をラリーザが呼んでゐる。早く行かないと、俺が菓子を貰つて行くぞ」

俺は胡麻化されて臺所へ入つた。すると、叔母ラリーザが、こ俺を指して暫く爺さんと立話をしてゐる。多分俺の惡口でも列べてゐたんだらう。爺さんは中氣病みのやうな目をして、口をもぐ／＼動かせて、汚ない髯をすごき乍ら默つて、ふむ、ふむと頷いてゐた。

爺さんは別莊へ來たんださうだ。

「キョスキー、巴里へ行くのか」

と云ふから、

「モスクワなんぞに居るものか。お爺さんお菓子を上げやう。」

と云つた。俺が菓子の小さい包みを爺さんに握らせると、乞食の樣な手附をして、ポッケットへ入れた。多分馬車の上で食ふのだらうと思つた。ラリーザは俺が小供の癖に酒を飲むと云つたものだから、爺さんが、恐ろしい顏をして、俺の耳を引つ張つた。俺と爺さんが、裏木戸で別れる時、俺の荷物を積んだトロイカが、廢園の中から、ごろ／＼と川端へ出て行つた。

「巴里へ行つたら、ナターリナに逢へるわ」と云ひ乍ら、爺さんは俺に尻を押されて馬車に乘つて、俺の荷車を追ふて去つた。俺は後ろから、小石を拾つて爺さんの馬車へ、五つ六つ投げつけた。爺さんは杖を振つて怒つた。いつ見ても薄汚ない爺(ぢい)だ。

一度タニヤの家へ立ち寄つてから立たうと云つたラリーザ叔母の言葉を俺は最後まで退けた。そして旅行に馴れてゐるとは云ひ乍ら、可憐さうにラリーザを促してその翌朝、ニコラエヴスキー停車場からモスクワを去つた。俺の日記には一八九七年三月十五日とある。コロドナが、「お前さんの側へ姿も追つかけて行くから待つてゐらつしやい」と云つた顏がしばらく停車場の窓口に見えてゐた。

三　青年時代

巴里に三年居たが勉強も何もしなかつた。俺の友達は怠けるのを名譽と心得てゐたから、試驗前にはいつも狼狽した。佛蘭西の兒と露西亞の兒とが、仲がよくつて、亞米利加人や、獨逸人やいぎりす人の兒とは、まるで交際(つきあ)はないでしまつた。

俺の學校はノートル・ダム寺院の近所にあつた。木造の古いサン・ゲルマン・リセーだ。俺は寄宿してゐたから、二階の寢室の窓から毎日、ノートル・ダムの屋根を眺めた。ノートル・ダム橋を渡る群衆も見えた。

學校の舍監が嫌な奴で、日曜日に俺のグループが外出先から

げつて來ると、一人一人舍監室へ呼びつけて置いて、大のやうな鼻をうごめかして、俺等の口を嗅かぐんだ。俺達のグループと云ふのは、シャールに俺に、ボールに其他今は名を忘れて了つたが、何でも總勢七人ばかり居つた。そのうち俺が一番年下の癖に、誰かゞ酒を呑むと蔭口を利いたので、俺は注意人物になつてゐた。

酒は些か好くんだ。だから、どうもこうも我慢のきかない時がある。或雪の降る晩だ。俺は共同寢室の便所へ行つて、歸りに、舍監室を覗いたら、舍監のヴヰグレーと云ふ親爺が、暖爐の前に椅子を寄せて、寢込んでゐたから、しめたと喜んだ。共同寢室には寢臺が七十脚ばかり列べてある。俺は、たちが惡いから隅つこの方へ遠ざけてあつた。三十五臺を左右に分けて、中央が步廊だ、天井の梁からケチな角ランプが釣してある。俺は向ふ見ずの子が好きだから、向ふ見ずのボールを揺り起したら、

「ヴレヴ・ブランドル・デ・ボツソン」

なんて妙な寢言を言ひ乍ら起きた。此男に蝙蝠傘を持たせ、外套を小脇に抱え、寢臺の下を潜つたら階段の入口に匐ひ出た。其處に扉がある。困つたことには鍵がかゝつてゐたから、また寢臺の下を逆戻りして、舍監の部屋の中を匐ふて過ぎた。便所

の窓から、廊下へ出て、鐘樓の頂を足だにして、[illegible]を攀ぢ登つた。

石垣と云つても左程高くないから、鐘樓からボールが蝙蝠傘をさしかけてゐると、俺の頭――帽子を被らぬ頭――に雪がかゝらぬ。

然し乍ら、積んでゐる雪に手と足が埋まつて、辷然するとに辷りさうだ。俺が登ると、今度はボールが來た。ボールを先へ往來へ跳ばせて置いて最後に俺が蝙蝠傘をボールへ渡して、跳ぶから退いてくれ、退いてくれと云つて居るうちに、垣の頭が崩れて、運動場へ墜ちてうんと腰の骨を打つた。

ボールは蝙蝠傘を拡いで、戻る譯にも行かず、一晩巴里のラテン街を慄え廻つたさうだ。俺は腰の骨を痛めた上、停學一週間を喰つて叔母に嚴しく怒られた。

俺は校長室に引張られて青竹で尻を叩かれた。その時校長室の窓に凭りかゝつて 俺がぽろ／＼涙を零してゐる悲劇を、にや／＼笑ひ乍ら見物してゐた爺がある。此爺がアルフォンス・ドオデエだと云ふから、アルフォンス・ドオデエと云ふ奴は物の解らぬ奴だと思つた。此爺いはよく俺の學校へのこ／＼やつて來て、教室をぐる／＼見廻つて步いた。俺の面を見ると、眉を釣つて笑つた。いやなぢゝいだ。



ルバシカ服（露國平服）の著者



日本服の著者

巴里へ來て二年目にラリーザ叔母は、スイスの女學校へ轉職した。俺はまた一人ぽつちになつた。一人ぽつちになつた方が結句呑氣だが、學資を出して呉れるのがラリーザ叔母で、遠く離れて了ふと、金は直接俺の手に入らずに、學校の會計へ來た。だから、小使に窮して會計係へ貰ひに行くと、いつも厭な顏をして、「何を買ふんだ？」と尋ねる。

「帽子を買ひます」と答へる。俺は、買ふものはいつも帽子に定めてゐた。他のものは大抵學校で賣つてゐたが、こればかりはなかつた。ないものを云へば帽子は學校にないから、靴で間に合はせろと云へないからだ。すると會計め、「ウヰスキーの間違だらう。」と妙な目付で俺を弱らせた。一ケ月に二度も三度も帽子を買ひますと云つたことがある。處が月末の精算書を會計係からラリーザ叔母へ送つた。返事に、「こんなに帽子ばつかり買はないで、靴でも取り替へたらいゝだらう」と云つて來た。

靴は學校で賣つてゐるから駄目だ。この時分あんまり帽子の殺生をしたから、それが祟つて此頃は、季節の帽子すら樂に買へないでゐる。

まだある。俺がいよ〱この學校を追はれる三日前のことだ。俺は酒は呑んでも、寺には毎週缺かさず參詣したから偉いと思つてゐる。

ダリユ街の公園モンサウ池の側に露西亞寺院がある。今でもあるだらう。其處で露西亞人が集まつて祈禱をあげることにな

つて、俺の學校にも露西亞人はみんな出て來いと言つて來た。多分露西亞大使官が退屈まぎれに場へ出したんだらうと思ふが何の積りだつたか趣意書になかつたさうだ。日露戰爭がすんだばかりだつたから。敗戰悄氣かも知れない。すると、俺のやうな露西亞留學生が見る間に集つた。中に女學生も少なくなかつた。

その崩れが、モンサウ公園に集まつて、露西亞人ばつかりで秘密結社を造らうと言ひ出した。

この時牛耳を取つたのがレリーと云ふ音樂學校の女學生だから不思議だ。二十四五歲の女で、情夫があつた。日本人や英吉利人やアメリカの學生を排斥するから、力を貸してくれ、往來で彼奴等を見たら、男なら須らく引つぱたけ、女だつたら余が引搔くれ、嫌だと云つたら、髮の毛を引つ張れと主張した。その時分の過激派だらう。日本人にお袋を持つてゐる癖に俺もその結社へ入つた。何と云ふ腑抜け者だらうと、今でも思ひ出すと、冷汗が出る。而も、この結社に入つたために俺は非道い目に逢つて學校まで、出なくては叶はぬやうになつたんだ。入社式の話をしやう。

入社式はボヘミヤ町のマデレーヌと云ふ汚い美術學生の酒場で行つた。俺に吞兵の席で、同志三四人一緒に乾杯させられるのだ。

レリーは大將株だから、ビールの空瓶で卓子をどん／＼叩く。これが大將の合圖である。誰かゞ俺の目隱しをした。

俺は目隱しをされたまゝ、酒場の裏へ引つ張り出された。

レリーが大將のやうな聲を出して、

「キヨスキー。お前は聖なる兄弟の一人に選ばれるのだ。その前に眞個の名を白狀しろ。嘘つくと咽喉をナイフで刳るぜ。お前のほんたうの名は何だい」

ほんたうに咽喉を刳りさうな剣幕だから俺は怖くなつて、

「アレキサンドル・ステパノウヰツチ・コクセキー」

と云つてやつた。

「それぢやキヨスキーは誰の名か。矢つ張りお前の名だらう。」

俺も困つた。キヨスキーは日本語でキヨシだ。長崎で生れた時、來合せた肥後の浪人が、大泉なら清に限ると云つて、清が名になつた。八幡様の繪馬の額にも「清泰納」とある、その位由緒つきの名だ。それを親爺が嫌がつてキヨスキーに變へて了つた。スキーだけ餘計かも知れない。ポールは俺のことをキヨスクと呼ぶが、キヨスクは小店といふ言葉だ。成る可くスキーの方にしてくれと頼んでである。小店なんて縁起でもない。

「キヨスキーは日本人ぽつけな名だ。今云つたのは親ゆづりの

露西亞名だ」
「お前は日本人に友達があるのか」
ある處ぢやないお袋はKeitaと云ふ日本の淑女だ。頷いて見せると、この際だから、嫌な顔をしたらう。
「俺達の結社に入つた上は決して裏切らぬと云ふ證據を見せろ」
「證據はないから、殘念だが見せられぬ」
「それでは、誓つたゞけでいゝ」
「小生入社後は決して裏切仕らぬことを誓ひ候也」
とフランスの佳文體でやつたら、後ろから、佛蘭西がセ・ビエンと云つた。露西亞がパコルノ・ハロショウと叫んだ。レリーが
「我が兄弟姉妹よ。諸君はキヨスキーを結社の一員として選ぶべく贊成するか」
と例のビールの空瓶を振ると贊成々々と怒鳴つた。
「それでは、これから試驗をするから、こつちへ來るんだ」
と俺に靴を脱がせて湯殿へ押して行く。眞つ暗だから、どんな仕掛けがあるかさつぱり解らないが、熱い空氣が俺の全身を包んだことを直覺した。
「一歩前に湯桶があるから、足を入れろ」
とレリーが命じた。俺は兩足を浸けた。熱湯だ。
「もし裏切つたらこの湯でお前をうで殺すんだから、忘れないやうに」
俺が、たまらないから熱いと叫んだら、
「靜かにせろ」
と鞭のやうなもので俺の脊を毆つた。
「たまらないから、この邊で勘辨してくれ」
「駄目だ。凝乎として居ないと咽喉を刈るぞ」
刈られて堪るものかと思つて一生懸命で我慢した。こんな酷い目に逢ふのだつたら、最初から逃げればよかつた。亂暴を通り越してこれや殘酷だ。酷い酷いと零してゐると、
「まだ後の試驗があるんだ。確乎りしろ」
と云ふ。漸く靴を穿かされたら、今度は、また目隱しのまゝで煖爐の前へ引出された。
「今度は、ボワルの中から火を摑み出すんだ。男らしくやれ」
男らしくやれと云はれると、俺は引つ込めない性だ。かうなるともう燒け糞だ。そのうち誰か俺の兩手を焚火の正面の見當へ伸ばしてくれた。
突然レリーが
「そら。今だ突つ込め」
と床を靴で鳴らせた。俺は齒を喰ひ縛つて、目を堅く閉ぢ乍ら

燃えてゐる石炭を火壺の間に摑み出して卓子の上へ放り出した。「ブラヴオ！」

「旨く〳〵やつたね」

旨くやつたつて、何になるものか人を馬鹿にしてゐる。レリーが目隠しを外して、

「弟キョスキー、お前は今日から結社の名譽ある一員だ。握手しやう」

握手した後で掌心に疼痛を覺えて來た。馬鹿々々しい。試驗はこれで濟んだらうが、濟まないのは、俺の手足だ。お蔭で一週間ばかりづき〳〵痛みつゞけて夜は呻り通しに呻つた。

目隠しがなくなると、俺を取り卷いてゐる有象無象が、拍手し乍らどつと笑つた。人の災難がそんなに面白いのか忌々しいと思つたから、此奴等を睨み廻してやつた。

レリーがビールの空瓶でどし〳〵卓子を叩く。其處へ、酒場の親爺が籐籠に蠶豆とビール瓶を入れて運んで來た。ビールを呷つて、口をハンケチで拭かうとしたら、ハンケチは贅澤だ。上衣の袖で拭けと云つてレリーが引つ奪くつて了つた。

ひどいもので、ビールを飲んで騷いだら、桁（たるき）がぐら〳〵動いた。一人が風琴を鳴らすと、レリーが美しい聲で唄ひ出した。喧躁の音は酒場に響き渡つて、窓の外を、のたくり歩るく餓えかけた勞働者が、さぞ咽喉を鳴らせたことだらうと思ふ。すると

レリーが演説を始めた。彼女の目は火のやうに閃めき、彼女の頰は紅潮し、灰色の髮の毛は赤燈の光に輝いてゐた。俺はそのときレリーを美しい女だと感心した。

すると、突然、

「皆さん」

と云つて、例のビールの空瓶で、こつ〳〵やる。

「一言述べます。我々は結社の中に新らしく生れた、可愛いゝ弟の健康を祝して盃を擧げます。キョスキーは彼の正義の路を今日見出したのです。皆さんも卓子の上に登つて盃を擧げて下さい」

すると、十七八人の野蠻人や、俺のやうな遊牧の民が、一時に卓子の上を占領して、俺は忽ち左右から硝子洋盃の洗禮を受けた。其處へ慌しく酒場の扉を蹴開けて、酒場の親爺が駈け込んで來た。

「巡査だ。巡査だ。巡査が來たあ」

巡査が來たつて差し支へなからうと泰然と構へてゐたら俺一人が捕つて、警察へ突き出されて了つた。もと〳〵何も惡事がある譯でないが、晝間酒場で酷い騷ぎ方をしたと云ふので、矢ケ間敷しく小言を言はれてゐるところへ突然俺に面會人が來た。

考へなくつても、俺に面會に來る者はない筈だ。學校の舍監だつて俺が、警察の椅子に腰をかけて、署長の說敎を謹聽してゐることは知らない。それとも、誰か報告に行つたとすれば、或は舍監のヴヰグレーかも知れないと、もう覺悟をしてゐた。處が、入つて來たのは舍監でも大工でもない、モスクワの修道女學校の下婢だ。

　俺は意外だから、

「コロドナぢやないか」

と云つたら、コロドナが、

「到頭こんな處で逢つちやつた」

とがつかりしてゐる。この女は二年經つてもやつぱりぼんやりだ。俺が恐縮して署長の說敎を拜聽してゐるにも拘はらず、横合から、ぺちやぺちや饒舌り出して、署長に叱られてゐる。

　一時間たつたら俺は放釋された。署の門をコロドナと二人で跳び出した。コロドナは三十歳になる。もし少し分別があつてもいゝ女だ。いつ見ても子供のやうな、あどけない顏をして妾は無教育者でございます、あなたの御み足を踏みましても知りませんよ、と云ふやうな步るき方をする。

「どうして巴里なんぞへ、やつて來たんだい。コロドナ」

「お前さんを慕つて來たんぢやないの？　いけなくつて？」

俺とコロドナは、外國語學校街の街路樹の陰を列んで步いた。步るき乍ら彼女は、眞個のことを語つた。コロドナはダリユ街の露西亞寺院へ裁縫女に來たんださうだ。一度巴里へ行きたい行きたいと云つて居つた。最初は、寺院なんぞへ行かないで巴里のラリーザ叔母が勤めてゐた學校の洗濯部屋へ雇はるゝやうに叔母が奔走してゐたのが、急に途中で話止みになつて、寺院へ行つたんださうだ。

「こつちへ、長くゐるの」

と尋ねたら、

「いゝえ。誰があんな窮屈な處にゐるものか。お前さんを連れて、直ぐ歸るんですよ」

と俺の知らないことを獨りで勝手に定めてゐる。これが、この女の癖だ。

「お前さんは矢つ張り惡戯坊ですねえ。妾が學校へ訪ねて行つたら、受付へ警察から電話がかゝつて居た處だつたから、直ぐ跳んで來たのよ。」

「それぢや、學校の方ぢやもう知つてゐるんだね」

「知つてゐるとも。」

「どんな奴が受付にゐたかい。」

「白髯の眼鏡爺さん」

「駄目だ。駄目だ。我の命いだと、内證にして呉れないだらう。困つちまつた」

俺は之を聞くと困つてしまつてやうすをすると、コロドナは馬鹿だからほゝと笑つてゐる。

翌日俺は露西亞寺院のコロドナを訪ねた。コロドナは俺をモンサウ公園のベンチへ連れて行つた。今日はこの女を驚かしてやらうと思つて來たんだ。俺は女の顔を見ると、いきなり「俺は到頭退學を命ぜられたんだ。」と言つた。そしたら女は、何んな感じがしたのか、暫く俺の顔を見詰めて、何にも言はなかつた。

困つたからつて俺は女に庇はれる積りではない。櫻の馬場の小學校に通つてゐる時、天長節に絹八丈を着て行つたら、式場で校長が絹の着物は校則に反するから奉祝させる譯に行かない。然し今から家へ歸つて木綿と着替へる時間はない。折角出て來たんだから式場の外で何かしらんを拜めと劍突喰はせた。その時俺がさつさと外へ出やうとしたら、「蒲ちやん、こつち、こつち」と細田と云ふ女の先生が小さい聲で呼び止めて、自分の羽織の中へ、くるまつてくれた。熱くつても好意に對する感謝のしるしに、一時間羽織の中で、うだつてゐた。この先生とはそれつきり逢はないが、今度出逢つたら、天長節といふものは、祝祭させに貰ふんではない。此方から祝祭するもんだと教へてやらうと思ふ。女先生の方がよつぽど開けてゐる。女に庇はれたのは、あとにも先にもこの位のもんだ。

コロドナが俺を疑ふ様子だから、一緒に學校まで來て呉れ。そしたら俺の荷造りを見せると云つた。

「荷造りは見なくつてもお前さんの話を嘘だとは思やしないが、これから、どうする積りです、ラリーザ叔母さんだつて、遊んでゐる人に學費は送りませんよ」

と初めて心配さうな様子をした。俺は

「明日から仕事を探して自分で食つて見せる。コロドナ。さよなら」

と云つて駈け出して寄宿舎へ戻つて見ると、保證人が俺の椿事を聞いて、校長に詫びに來てゐた。俺は寢室で荷を締め乍ら保證人と立ち話をした。

「その荷物を、一體何處へ持つて行くんだね」

「友達のホールの實家へあづけます。」

「そして君は、どうする積りか。明日からでも、何とか後の方法を取らなくつちやなるまい」

「これから働くんです。長々御世話になりました。」

保證人はいぎりす人だ。古いケンブリッヂの卒業生で、四十になるが、まだ細君がない。エルム、パークの伯爵といふのが、この人の親爺である。俺の叔母が巴里で金を預けてゐた銀行の支配人で、叔母がスイスへ去る時、面倒だらうがと云つて俺の保證人になつて貰つた、俺とは丸で性質の變つたいぎりす紳士だ。

「君に出來るやうな仕事はあるかなあ。それより、倫敦の學校へ行つちやどうだらう。君は倫敦は嫌か」

「倫敦は大嫌ひです」

保證人は笑ひ出した。

俺は巴里へ來て一年目に倫敦へ見物に行つた。この保證人が暑中休暇に連れて行つてくれたのである。着いた晩に基督教青年會館で、慈善音樂會があつた。切符を貰つたから俺は保證人に道を聞いて出掛けた。一時間ばかり、馬車と自働車に追ひ廻されて漸く解つた。受付に切符を渡して入らうと思つたら、生憎受付がない。俺は遠慮なく入つた。入ると、眞つ直ぐ所謂うづらに出る廊下と、二階へ昇る階段がある。どつちへ行かうかと其處で暫くまごつた。切符は一等だから、何處へ行つたつて苦情はないが、妙なもので、やつぱり行き場が解らぬと、まごつくものだ。

すると何處からか委員が赤リボンをフロツクに挿して出て來て俺を見ると、

「何處から來たか」

と尋ねた。何處から來たつて切符さへ持つてれやいゝ譯だが、折角尋ねるから、

「ゼームス・アツプロンさんの家から來た」

と答へた。横柄な委員だ。

「ぢや、この椅子を持つて二階へ行つてくれ」

と階段の下から椅子を出して呉れる。默つて二階へ擔いで昇つた。

「はゝあ。此處だな。」

と思つて、觀客の中へ割り込んで見ると、恰度保證人が舞臺で呻つてゐた。處が、先刻の委員がまた來て、も二つ椅子を持つて來いと云ふから、

「椅子は一つで結構です。何卒御かまいなく」

と帽子を脫つて敬々しく挨拶した。すると、委員が、それは困ると云ふ。何が困るんだらう。一人で椅子を二つも三つも脊負はせられた方が餘つ程困るぢやないか。俺は今まで椅子は一つづつ使つたもんだと逆ねぢを食はせたら、おや君は給仕ぢやないのかと吐した。尤も俺の方では巴里の中學生の服を着てゐたが

いくら倫敦だつて中學生がフロツクやモーニングで音樂會へ行く奴もあるまい。

それからまだ癪に障つたことがある。それはアツロン家の娘が飯を食ふ時、俺に

「あんたの服の胸ボタンの處は、スープで汚れて見つともないわ。お尻もよ。溝見たいな人ねえ」

と何でもないことを大勢の中で吹聽した。俺は夏服が一枚しきやないから何處へでもこれで飛り出るが、まだこの娘のやうに小五月蠅い憎まれ口を聞かない。汚れてゐるなら、誰も居ない處で、さつさと拭いて呉れゝばいゝだらう。

まだある。それはこの保證人が、俺に倫敦に居る間小使にしろと云つて金を呉れたから手を出したら、

「英國人は、どんなに困つても他人から金を貰はない習慣がある。日本や露西亞はどうだね」

と皮肉を叩いたから、俺は其時、一旦貰つた金を突つ返して、毎日毎日一文なしで生活した。一層のこと、その時、日本人や露西亞人はそんな氣取り屋で僞善者の英國人の厄介になる間抜けはゐないと云つて巴里へ引つ返さうと思つたが、喧嘩しちや何にもならぬから、俺の方で負けてゐた。

だから、俺はいぎりすが嫌だ、從つていぎりす人と名のつく動物が嫌だ。英吉利人を見ると、此奴は氣取り屋で、僞善者で不人情な奴だと思ふ。

保證人アツロンさんが倫敦の中學校は如何だと尋ねても、どうしても、あんな僞善者になつて、[illegible]つぺらな人間を製造する學校へ行く氣にならなかつたから、いさぎよく斷つた。

保證人は、君の勝手に任せるから、若し相談があつたら自分の家へ來て呉れ給へ、然し學校を止したことは直ぐスイスへ報せてやらなくちやいけないと念を押して歸つた。

俺は校長と舍監に別れて、ポールと一緒に彼の實家へ一先づ落ちつくことにした。

さつと三年の間寢起きした學校をかくして退散した。門を出るとき、目鏡の受付けを大きな目で睨みつけてやつた。俺は矢つ張り露西亞がいゝ。露西亞人が好きだ。たまに俺の伯母タニアのやうな強腹な女がゐても、やつぱり露西亞人に親しみがある。それが當り前かも知れない。

この際俺に眞個の同情を寄せてくれたのはポール位なものだらう。同じグループの中にシヤールと云ふ男があつた。モリオニといふ伊太利の留學生もゐたが、いざ俺が學校と緣切れになつて了ふと、その瞬間から俺に面を外向けるから、彼奴等も取るに足らぬ小人だと、こつちで見限つてやつた。

俺はレセール街に藥種と化粧品の店を出してゐるポールの家(うち)に當分厄介になることに決めた。店には母親とポールの小さい妹がゐた。俺とポールを前へ据えて置いてお袋が、

「キヨスキーは理想通りに放校を食つて、無本望だらう。今度はポールの番ぢやないか」と俺の額を蟲目鏡で覗いた。微塵でもいやしまいし。

「キヨスキーは何の志望で勉強してゐたかい」

「志望なんぞあるものかね小母さん。俺は死ぬまで志望も目的もないんだよ」

ポールの小母さんは呆れてゐたが、今もつて俺に志望も目的もない處を見ると、其時は確かにさうだつたに違ひない。

露西亞人に志望や目的があると思ふが、そも／＼間違ひだ。そんな有難いものは小さい國へ買ひに行くがいゝ。

ポールの家で厄介になつた晩に「では當分、身のおさまりをつけるまで頼む」と云つてポールを、再びあの野蠻な宗教語學校へ送り返した後で、寢室へ歸つて財布の底を逆樣にはたいて見たら、二法(フラン)と五スウあつた。これで明日は食へる。これで手紙を出して、叔母テリーザから何とか返事が來るまで、仕事を探して自活することに決めて悠くり寢た。

俺は他人のうちに因緣がなくて厄介になり得るのんき者でない。翌日俺はレ・ペチ・フランセー雜誌の秋季閑遊會の廣告ビラをシヤンゼリゼー街の大四辻で廣告屋から貰つた。俺は其廣告ビラを利用しやうと考へた。利用すると云つた處で、俺の仕事として廣告ビラを配つて歩くより外に出來さうなことがない。それでもいゝ。俺はレ・ペチ・フランセー社を其足で訪ねた。

メジエー街五番の汚ない家が、この小學生向きの雜誌發行所だ。入つて行つて、廣告ビラを配らせて與れと頼んだ。するとフオリエと云ふ物語作者が出て來て、それは承知したが一日一法(フラン)だ。それでいゝかねと云ふ。一法で飯が食へるものか。

俺は十五歳の少年だ。然し朝から日沒まで稼げばその二倍の骨折賃は何をしたつて貰へるんだ。一法はちと安過ぎる。

俺が思案してゐると、この物語作者が、

「君は白墨で字が旨く書けるか」

と云ふ。俺は無論書けると答へた。すると、今度は、

「鉛の方はどうだね。」

と尋ねる。それも出來ると返事をすると、物語作者がペンと紙を持つて來た。俺の住所姓名が、雜誌者の名簿に載ると、

「今晩は編輯者が交代で徹夜するが、よければ君も手傳つて與れ、明日の朝には四法支拂ふ」

と云ふ。俺に「よろしい。やる」と答へたら「それぢや。活版

屋に詰め切つて呉れ玉へ。直ぐこの先だ」とカプシン街を教へた。俺の仕事は校正刷の紙を番號通りに揃へて印刷部へ廻すのだ。翌朝四法の外に電車賃を貰つた。夕方まで印刷部屋の職工と一緒に紙の上に寝て居た。

人間の運といふものは妙なもんだ。俺はフォリエ文士の家を屢々襲ふた。いつも色々な面相のペンの勞働者が集つて賑やかに騷いでゐた。畫かきが居たり、女が居たりした。

學校を廢して一月ばかり雜誌屋の印刷部屋でパンとバタと水で命をつないでゐた。そのうちに叔母から手紙が來て、眞面目になつて、他の學校を探せ、アツロンさんにも呉々も頼んで置いたと云ふのだ。

その時アツロンさんの手許へ金が送つて來てゐることを知つてたが、アツロンさんの顔を見るのが嫌だから、取りに行かないで居ると、學校を探したから、是非一度英佛銀行支店まで訪ねて呉れと云ふ葉書が、ポールの家へ來た。

暫くポールの家へ行かないでゐるうちに色々の手紙が溜つてゐた。ポールの親爺が久しぶりだと云つて、ペトログラードの支店から戻つて居た。

俺はポールの親爺と一緒に食卓を圍んだ。そして夜に入つて手紙をポケットへ押し込んで印刷所へ引返した。印刷部屋の屋根裏で手紙を讀むと、先刻のアツロンさんから來た葉書が一枚、ポールから來たのが一つ、ラリーザ叔母から來たのが一つ、最後に、モンサウ公園の露西亞のタニア伯母からも來てゐた。露西亞寺院からコロドナの名が、オリーブ色の封筒に見えた。

タニア伯母は金を儲けて、ペトログラードに病院を建てたそうだ。スヴロフ街のスヴロフ將軍の銅像の近くだとある。儲けたんぢやない盜んだんだらう。醫者は强盜のやうなもんだ。强盜は刄物を振ふが醫　盛り殺す。伯父だから或はやつたかも知れない。

ポールの手紙は、たゞ、これだけの手紙が學校へ投げ込んであつたから屆ける。俺に禁酒したからお前もあまり飲むなと殊勝らしい忠告が加へてあつた。コロドナから寄越したオリーブ色の封筒が面白い。文字は拙いから乾度自分がペンを執つて書いたんだと思つて封を裂くと僅か五行しか文句がない。

「お前さんの居處が解らない。やつぱり學校へ居るのだらう。この手紙が屆いたら直ぐお寺まで訪ねておくれ。妾はお前さんのお母さんになるつもりで巴里へ來たんだから、云ふことをよく容くものですよ。」

俺は可笑しくなつて笑つた。あの女は何だつてあんな馬鹿だらう。

俺は筆不性た男だ。漸く叔母ラリーザへ宛てゝ「もう學校へ入ることは斷念した。自分は今、巴里の印刷職工と共に働いてゐる、だから、あなたは金を送らなくつてもいゝ。自分は始めて自分の天職を發見して喜んでゐる。さようなら」と云つてやつた。この手紙がスイスのモントレエ・ボンボールへつく頃、巴里はクリスマスが終へて、新年が巡つて來た。俺は十六になつた。

「おばあさん。おばあさん。今年は何處(どこ)で餅をついて貰ひましたか。」

俺は一年ぶりに長崎の祖母へ手紙を書いてゐたが、筆を止める時になつて、ぼろ〳〵涙が零れた。何か手紙の中へ入れてやらうと思つて、行李の中を搔き廻したが何にもなかつたから、フランスの紙幣を一枚疊込んで、郵便函へ入れた後で、祖母はめくらだから送つても仕方がなかつたと氣がついた。

俺は日本に年に一度しか手紙を書かない。いつも十二月の中頃か末に書く。去年まで、學校から出したが、今年は印刷部屋から出した。

そのうちにポールが休暇で店へ戻つて來た。一度訪ねやうと思つて元日まで行かないで了つた。銀行から寄越した金と稼いだ金とを合せだら二十八法と端錢(はした)が少しあつた。

學校ではモウパッサンの小說の耽讀を禁じてあつた。俺がそんなことゝは知らないから、モオパッサンを露店で買つて舍監へ許可の判を貰ひに行くと、舍監が目をむいて、これは學生の讀む可きものぢやないから沒收する。その代りにこれをやると云つて、書棚の中から宗教小說を出して吳れた。こんなものが讀めるものかと思つたから、そんならモオパッサンは讀まないがこれもいらないと云つて返した。

生意氣な小倅だと思つたゞらう。俺はその時分モオパッサンより偉い人間は居ないと信じて居たから、モオパッサンが若い時分にごろついてゐた下宿とか、遊びに行つた犬の墓地などを尋ね廻つて一人で喜んでゐたもんだ。モオパッサンを讀むなと云ふ奴は、同じフランス人でも愛國の觀念のない下素(げす)だと罵倒した。モオパンサンを眞似損ねた通俗調で文章を拵へてその邊の呑氣者に見せて步いた。

「君は非常に作文が上手だ」

と一人が御世辭を云つた。學校で、圖に乘つて「壞れたインキ壺」と命名した廻覽雜誌を拵へて、三百人餘りのフランスやイギリスやロシアの學生に文章を書かせたことがある。書かせたと云ふとさも偉さうに聞えるが、實は書いて貰つたんだ。その

翁が一人で惡をした。第一號が學校の頭目間に物議をかもして沒收されると、がつかり凹たれてもう第二號を出す勇氣がなく、そのまゝ棄てゝ居るうちに俺が退學を食つたから、到頭出ないで了つたさうだ。一號に教師の下馬評を大膽に列べたから惡かつたらしい。俺は向ふ見ずで、いつも困ると思ふ。その時分、或る男が、

「お前はこの位の文章が書けるんだから、一層のこと文學者にならんけりや嘘だ」

とおだてた。おだてられた俺はいゝ氣になつて、「うん。俺はこの位の文章が書けるんだから、文學者にならんけれや嘘だ」と變なもんだ。思ひ出すと顏から火が出る。それでも、フランセー・イリユストレーと云ふ大きな雜誌——これはその時分週刊で、いつも土曜の朝出た——に、「ウキクトール・ユーゴー博物館の印象」を書いたときは、可なり人氣を集めた。そう云へば、巴里や巴里以外のフランス人に「ユーゴー博物館」を紹介したのは、かく申す俺が最初の人間だと云つてもよからう。因にユーゴー博物館はその年に開かれた。ユーゴー翁の遺物なら大抵此處に蒐めてある。嘘ぢやない。

卓上のインキ壺は翁存生時のまゝだ。翁は十五年此家に住んで物語を拵へてゐた。その後翁の友人でポール・メリスといふ人が住んでゐたのを其時博物館にしたのだ。

その次に「國民印刷局の歴史」を載せた。ロハン僧正(ムド・ヴオルカノ)とカーラーイルが云つた「ダイヤモンド頸飾事件」の悲劇の一部を狙つて書いたものだ。これも成功した。

俺は續けざまに五十法(フラン)路端で拾つたやうな氣がした。その雜誌をスイスの叔母へ送つて、おだてゝ貰ふ積りだつたら、叔母はあべこべに俺を惡魔のやうに罵つて來たから、叔母も話せない女だと、一人で偉がつてゐた。これだからローマ教徒は了見が小さい。新教徒の迫害を受けたつて、それは自業自得だとすましてゐた。

貰つた金を何に使つたか忘れた。多分有頂天になつて酒場でも廻つて歩いたに違ひない。俺は眞面目なローマ教中學校を破門された不良少年だつたから。

酒をのんだり、警察へ厄介をかけたことはラリーザ叔母へは無論言へる義理でなかつたが、舍監が退學顚末を詳しく、大袈裟に報告したと見えて、叔母ラリーザから續いて飛んで來た手紙は怖くつて碌々讀まずに行李の中へそつと藏(しま)つた。今日只今どうかすると、その手紙がひよろひよろ出て來る。不良少年に瑕をかけて始末の惡い碌でなしとして、自分で自分を持てあましてゐる今日でも手紙に飛び出されると、ひやりとする。

其年の夏、スイスの叔母が是非來いと言ふから、スイスへ行つたら、うんと油を絞られて半年振りに放還されてまた巴里へ舞ひ戻つた。スイスの話は書きたくないから廢さう。巴里へ戻ると、コロドナが急に戀しくなつた。間もなく露西亞寺院を訪ねたら、コロドナが、恨めしさうな顏をして。

「何故お前さんは半年も一年も妾に居處を知らせないで隱れてゐたんです」

と頭から叱りつけた。俺はその時

「お前はそんなに俺が好きかい」

と云つた。そしたらコロドナの奴、年にも恥ぢず、

「好きですとも。好きですとも、こんなに好きです」

と俺の横つ面へ、冷めたい頰を痛いほどこすりつけて、抱き上げやうとして、

「まあ。いつの間にこんなに重くなつたんだらう。もう妾の力ぢや抱けないわ」

と驚いた。いつまでも俺をモスクワの湯槽の中の赤ん坊だと思つてゐる。だから智慧のない女だと笑はれるんだ。然しこれがロシアの女かも知れない。

自分では一科の文學者だと自負して居る處へ持つて來て、この女に小僧あつかひにされると、もう、うんざりした。然しこの女は馬鹿でも智慧が足らなくても、何だか戀しい處がある。ユダヤ女だつて、無學者だつて、タニヤに比べると人間が素直で、親切だ。

「お前さん何處に住んでゐるの」

「定つてゐない。スイスから歸つて來て、まだ宿を探さない。俺は今旅館に居るんだ」

「旅館に？そんな贅澤をする金があつて？」

失敬な申條だとは思つたが、これがこの女の持ち前だと知つてゐるから嘘のない處

「實は、叔母から貰つて來た金が少しある。然し旅館に一月も居たら失くなるだらう。どこかいゝ宿はないかね」

「妾よりお前さんの方が街のことは詳しいぢやありませんか。自分で直ぐお探しよ」

成る程さうかも知れない。この女はお寺で、一間先の戸外も見ないやうな尼僧同樣の生活をしてゐるが、俺の方が宿探しなら詳しかつた。

だらしがなくつても、年が若くつても浮浪者には、それだけの不安があるものだ。俺は貧乏者で氣が小さい故か、金のあるうちは、威勢がいゝけれども、なくなると元氣が頓る衰へる。今度困つても遊んでゐるうちは、ちつとも構ひませんよとラリ

ーザ叔母に警告を受けてゐた。その時はへい〳〵大丈夫です、今にいゝ仕事を見つけて眞人間に立ち返りますと安心させて置いたが、まご〳〵居食ひしてゐるうちに、早いもんだ貰つて來た金がなくなつて了つた。その筈だ。アルゼー街のタミス旅館で一泊三法に、朝飯が一法、晝が三法、晩が五法だつた、だから一日平均十法より下ることはなかつた。ヴオジラールのルクセンブル公園から一町ばかりの或鐵道官吏の持ち家の二階を一間借りた時は、財布は空だつた。ナポレオン三世の戀人だつた例のロベスピエールの妹の家や、ラマルチンが泊つた宿といふ家もすぐ近所にあつた。セーヌ河を上下する瀬船の笛もよく聞えた。宿が定まると、俺は直ぐコロドナへ知らせた。翌日彼女が炎天を平氣で乘合馬車に運ばれて來た。コロドナが此家の主婦を捕へて、下手なフランス語で、キヨスキー、キヨスキーと俺の身の上話を饒舌り立てるので、俺は冷々した。

コロドナは勝手に俺の「お母さん」になつた氣で居る。歸りがけに卓上に投げ出して置いた空財布を開けて、

「お金はないの」

と變な挨拶をする。

「ちつともない。なくつてもいゝ。」

と云つたら、默つて自分の胸の奥へ手を突つ込んでゐたと思ふと、紙幣を出して、空財布へ詰めやうとするから、

「お前にいつ金を呉れろと云つたんだ。そんなことをすると、今度引つ越したら知らせないぞ」

と冷かして突つ返した。そしたら翌日郵便で送つて來た。郵便の外に小包みがあつた。金を包んだ紙に「お前は何故妾の親切を受けてくれないんです。妾がきらいなのか。きらひならきらひでいゝ。お前さんのことは忘れて了つて、もう一生逢はないから。」

とあつた。小包みには新らしい白地の夏服が入つてゐた。値段を書いた名刺が疊み込んであつた。露西亞の田舍者だから、巴里の商賣人に擔(かつ)がれたんだらう。追つかけてまた手紙が來た。

「洗濯物を、他人(ひと)に頼まないやうに一緒に溜て置いて下さい。お坊さんのものと一緒に洗つて上げる。日曜日の晩に訪ねるから」つい先刻は、もうお前さんとは一生逢はないと書く奴が、洗濯もないもんだと思つて思はせぶりに俺は日曜の晩外へ跳び出した。コロドナから貰つた金で、イル・デ・シテの岸からエイフエル塔の下までボートを漕いだ。綠樹が兩岸に鮮やかに見えて、眞白な夏服の女が、ぞろ〳〵葉蔭を歩いてゐた。宿へ遲く戻つて、おかみさんに、

「誰か尋ねて來た者はありませんでしたか」と聞くとおかみさ

んは、いゝえ誰もと首を横に振つた。コロドナに嘘をつかれたと思ふと、こつちは人惡く、家を明けてゐた癖に腹が立つた。俺はこんな我儘者だ。

翌日十二時(晩の)過ぎて、俺はアヅロンさんが銀行の事務員見習に採用するから、我儘を言はず、我を張らずに眞面目に働けと云ふ手紙に對する返事を書いてゐた。いつもなら例の向ふ見ずで、一息に斷つてやるのだが、年を取ると段々人間が意氣地がなくなるもんだ。俺は、餓じ腹に「やれやれ」とすゝめられて貧乏神に弱虫だと嘲けられて、文學の神樣に銀行に勤めましても決して、あなたは忘れませんと卑怯な言ひ譯をし乍ら、何卒宜敷賴みます、もう無賴漢の生活は懲りたから、ぶつつり止ましたと書いてゐるとき、怪しからん嘘吐きだと怒るやうな怒らぬやうな、曖昧な嗚ゝ、拗ねてやらうと構へてゐたコロドナが出し拔けにやつて來て、

「キヨスキー。まだ起きてゐるんですか」

と俺の側へ、倒れさうに、不作法な大きな足を投げ出して椅子に掛けた。

「何だつて今時分やつて來るんだい。」

彼女は額に汗を浮べてゐた。

「洗濯物を取りに來たの。昨日はね、昨日はね。妾寢てたんですよ」

「だから一日待つてたけど、お前來なかつたんだね。」

と俺は嘘をついた、するとコロドナは口をすぼめて、意外だと云ふ表情をした。

「ほんたうに？ほんたうに妾を待つてゐたのキヨスキー？」

「嘘つくもんか。」

「すみませんでしたわねえ。キヨスキーは妾の破約を許るして吳れるでせうね」

俺が默つてゐると、彼女は耳元へ來て私語いた。

「妾どうして寢てたか知つてゝ？知らないでやう。それや意外なんですもの」

「知るもんか。そんなことを尋ねるから、お前は田舍者の馬鹿だと云ふんだよ」

「いゝわ。馬鹿でも狂人でも。妾ねえ。昨日酒をのんで醉つちやつたの」

「お寺で酒を飲む奴があるもんか」

「いゝえ。お寺で飲みはしませんよ。カフエ・デ・カスチヨンで」

「カスチヨンは、直ぐこの近所ぢやないか」

「えゝ。御存じ？あゝ。お前さんは酒飲みだつたわねえ。」

「どうしてカスチョン迄酒のみに來たんだ。何故俺のうちへ寄らなかつたんだ」

コロドナは默つて説明しなかつた。俺は何故この女が酒なんぞ飲むんだらうと考へて見たが解らなかつた。

「のんぢやいけない？」

「いけないとも。お寺にゐる奴が酒なんか飲んでいゝか惡いか解らぬ筈はあるまい」

「左樣？左樣かしら。神父樣に見つかつて追ひ出されたらどうせうかしら。その時、お前さん此處へ置いてくれるでせうね。キヨスキー」

彼女は電燈の下で紅い顏をしてゐた。

「そんなことはどうでもいゝが、よくこんなに遲く出て來られたね。この間の夏服は有難う。まだ着ないよ」

彼女は、俺が禮を述べても知らん顏をして兩手で顏を蔽ふてゐた。そして苦しい息を吐いてゐた。彼の唇は火のやうに赤かつた。

「お前、酒のんでるぢやないか」

俺は顏を支へてゐる彼女の手を引外した。すると彼女は充血した眼を見張つて、幽かに頷いた。何處で飲んで來たんだらう。彼女は唇を慄はせた。何か云はうとして、また力なく默つて了つた。俺は彼女の顏に不思議な變化が起るのを凝乎と見守つてゐると、やがてコロドナは、卓子を抱くやうにして

「妾お寺から逃げて來たの」

と熱い嘆息を洩した。俺は面喰つて嘘だらう。そんな冗談を云つて脅かすなと叱りつけたら「すみません。今云つたのは、嘘です」

と一層俺を何處までなぶるんだらう。その晩また恐ろしい接吻を強られて、一晩不愉快で眠れなかつた。何が不足でコロドナは醉つたんだかちつとも解らない。彼女は洗濯物を抱へて淋しい夜の街をセーヌ河を渡つて歸つた。彼女が居なくなつてから、白い薄い皮手袋が落ちてゐるのを發見した。

銀行の口が略定つて、いつからでも出掛けていゝ準備が出來た時、急にその方を斷らねばならなくなつた。それは瑞西の叔母ラリーザがレオマチスで起てなくなつて、手が足りなくなつたからだ。俺は荷物を纏めてコロドナにもポールにも默つてスイスへ行つた。二度目にゼネヴ湖畔に立つたとき「ルッサウの宿」を觀た。

俺は年を一つ取つた、すると、祖々母が死んだといふ便りが來た。つゞいて、スイスの新聞にトルストイ爺の訃音が載せてあつたが、ほんたうのやうな氣がしなかつた。丁度マリア・ベ

ロヴースカヤが革命運動に來てゐた時だ。慌てゝ旅行の支度をして伊太利ヴェニスへ出た。

伊太利から直ぐ日本へ戻つた。長崎へ着いたら、大部景色が變つてゐた。無論祖々母の葬式は濟んで、小さい家に祖母が一人で、ぽつんとかたづいてゐた。そこで長崎の中學の三年級へ入れて貰つた。宗教學校だから、三年にでも四年にでも喜んで入れるんだらう。くだらない學校だから落第せずに卒業したら默つて二十一になつた。俺は露西亞で偉い人間になつて來ると言つて、祖母が何と云つても容かずにまた跳び出した。その時、死んだ親爺から死んだお袋へ送つた手紙を纏めて鞄の中へ詰めて、オデッサへ着いた。それからモスクワへ行つた。

俺は暫く音信を絶つてゐたコロドナがまた戀しくなつたから一體あの女は、今年いくつになるだらうと指を折つて數へて見たら、もう三十六だ。

三十六でも馬鹿だから、やつぱり、ぼんやりしてゐるだらう。まだ巴里にゐるかしらと思つて、九年前幽閉された修道女學校を訪ねたら、丁度授業中で少々御待ち下さい、私がこの鐘を鳴らすと先生がいらつしやいますと云ひ乍ら、以前井戸だつた處へ屋根つきの柱を立てゝ、簡單な鐘がとりつけてある奴を下からぐい／＼引つ張ると見かけ倒しのしみつたれな音ががんがんと鳴つた。

がんがんと二度鳴らすのが先生を呼び出す暗號だ。入口へ立つてゐると、女先生が「どなた？」と顏を出した。

そして突然、あゝキヨスキーでしたか。よく忘れずに來ましたねえ。今ちよいと授業をしまつて來るから食堂で待つていらつしやい。ほんの十分ばかり、すぐだから、すぐだからと慌てて引つ込んで了つた。

この女先生ゾウスカさんは、俺の顏を見るとすぐ何處かへ飛んで行つて了ふことにきめて居る。九年前も俺を廢園にうつちやつて置いて、すぐ戻るから待つていらつしやい、妾はペトログラードへ行つて來ると行つたのはよかつたが、到頭歸つて來なかつた。鐵砲玉見たいな女で、惡い癖だ。今度は十分間だと云ふから大丈夫だらう。俺はベル鳴らしの爺さんに話しかけた。

「お爺さんはいつ此處へ來たの」

「三年になります。」

「その前誰が居たか、知つてるかね」

「イワノーヴナ婆さんがゐましたよ」

「その前は？」

「知りません」

爺さんは「ヤー・ニズナーユ」と云つて切つて終つた。俺は默

園の方へ廻つた。ププ樫もソースナ松も樺も依然として青黒のまゝだ。只石州が耕はれ、庭が手入れを施されて、綺麗になつてゐた。廐の屋根は地上に立つて、俺の肩もつきさうになつてゐた――早いもんだ――もう九年になる。廐の壁をナイフで刻つた痕だけが殘つてゐた。俺は小學校も訪ねて見たが、反つて、窮屈な月日を送つてゐた此方の方が餘つ程懷しい。殘念に思つたのは、隣りの窓からナターシヤの蒼い顔が見えなかつたことだ。あの時コロドナが、娘は肺病で死んだと云つたが、死んだのが眞個で、「巴里へ行つたら逢へる」と云つたトルストイ爺さんの言葉が嘘なのかも知れない。こゝであの娘が窓から顔を出して「キヨスキー、屋根の上で獨樂を廻して頂戴」と來るなら、小說になるだらう。小說にはなかなか手輕にぶつ突からんもんだ。窓は昔の扉が昔のまゝに寂しく閉ざされてゐた。廐の屋根の上でよく獨樂なんぞ廻したもんだと感心してゐると、鐵砲玉のゾウスカさんが、食堂の入口で、「キヨスキー。キヨスキー。」と呼んでゐた。食堂はまるで變つてゐた。卓子が隅へ位置を替へてサモツアールの側に立てゝあつた聖像の額も何處へ逃げ出したか、なくなつてゐる。棚も釣り替へてあつた。いつもコロドナが編みかけの毛絲の球を乘せて置いたパン函もお廢止になつて居る。その頃此處に通つて居た女の子に、もう皆一科の居さんになつて働いてゐるだらう。かう色々の物が昔の姿を失つてゐるのを見ると、何だか自分ばかりが、いつまでも不人間になり得ずして、下道の世界をうろつき廻つてゐるやうな氣がして恥しい。

「コロドナは今何處に何をしてゐますか」實際俺はコロドナの其後の消息を知りたいばつかりに、見たくもない鐵砲玉のゾウスカさんの皺顔を見るんだ。

「コロドナ――あゝ。あの人は今ペトログラードに居るさうです。」

さうだらう。とてもあの、ぐうたらぼうでは巴里の寺院に辛棒出來るものぢやないと思つたが……

「ペトログラードで何をしてゐるんですか」ペトログラードに居るなら、どんなことがあつても一度逢はう。巴里なんぞに居ると聞いたら、がつかりする處だつた。

「フオンタンカの公園で洗濯女に雇れてゐるさうですが、晝間はボシルニーの傳道會社へ通ふさうです。詳しいことは知りません」

とあまり晴々しい顔をしなかつた。

「何故この學校へ戻つて來ないんですか」

「女は厭になことにしました。ことにあの人はユダヤ人ですか

ら、生徒が嫌うんです」
然し九年前彼女は、自分が一番生徒間の受けがいゝと言つた。どちらが眞個だか解らない、あの女はよくゾヴスカさんと口論したさうだから、それが嫌なんで、コロドナの方でも巴里へ跳び出したし、露西亞へ戻つてゐることが解つても此塲へ寄せつけないのだらう。
俺はゾヴスカさんに恨みはないが、好きかと云へば、嫌ひと答へる。俺は痩せた女と、眼鏡をかけた女は蟲がすかぬ。ゾヴスカさんは痩せて眼鏡をかけてつんと濟ましてゐる。こんな枯木のやうな女より、ユダヤでもコロドナの方が向き合つてゝ感じがいゝ。コロドナは美人ではないが、この人よりずつと愛嬌があると思つた。
その晩ペトログラード行の切符を買ふのに停車場で二十留出したら二〇コペツク釣錢を呉れた。十時間ばかり大きな汽車に揺られてゐたら、ペトログラードのニコライ停車場へ着いた。馬車(イツウオスチツク)を驅つてスヴロフ街へ向つた。
スヴロフ將軍の立像の近くだから、タニヤの家はすぐ解つた久し振りで逢つて見ると、伯父もタニヤも半分白髪を交へてゐた。スイスの叔母だけが、親爺の兄弟の中で一番老けてゐると思つたらさうでない、皆んな老ひ込んで了つてるんだから滑稽だ。コロドナだけは、まだ娘のやうな顔をしてゐるやうに思はれてならない。
今度は落ちついて此市で勉强する覺悟で來たんだと言つたらタニヤも伯父もお前はやつぱり親爺の國で成長しなけれや駄目だ。第一その青い眼と灰色の髮を擔ぎ廻つたつて、日本ぢや相手にしまい。それより、お前は露西亞の學校を出て露西亞の官吏になつて、露西亞の女を妻君に迎へた方が出世する。お前は早く妻君を貰はなくつちいけないとすゝめた。
露西亞に來ると日本へ歸りたくなるし、日本に一年も居るとたまらないほど露西亞が戀しくなる。俺は二つの血に死ぬまで引き廻されるんだらう。そして最後に引つ張つた土が俺の骨を埋むるに定つてゐる。
伯母も伯父も猫一件は忘れたのか今になつて俺を責めたのが氣の毒になつたのか、九年前とは、待遇が違つてゐる。地獄へ行かないやうに神樣へお願ひしたから、心を入れ直して立派な青年になつて來たと思つたのかも知れない。……………三度目にコロドナと逢つたとき彼女は「モドヌイヤ」を喫かしてゐた。そして今度は平氣で俺に口說きかゝつた。
話は大分飛ぶが俺は露西亞革命までペトログラードにゐた。ユダヤ女コロドナとペトログラードを退散するまで同棲して

ゐた。スイスから送つて呉れる學費はコロドナの帽子になつたり外套になつたりして、俺は學校へ出ない日が多かつた。「マルイ劇場」や「ミハイロヴスキー劇場」に入りびたり入つてゐたのもこの時分だ。

一九一六年三月十二日、露都は革命の巷と變つた。俺は學校からの歸途、モスクワ大學生の包圍を受け、大學生の群に投ず可く强迫された。裁判所を襲ふた時に占領した黑自働車を驅使して、砲煙の下を縱横に飛び廻つた。アドミラルスカの街頭で屠られて轉つてゐる二百にあまる市民の死骸の上を、ごろごろ軋り乍ら、車の上から盛んに發砲したときは、痛快は痛快でも流石に怖かつた。

その「赤い日曜日」が漸く夜に入る頃、俺はモスクワ大學生と別れてコロドナの家に戻つた。戻つてゐると、忽ち銃聲が起つて、コロドナの宿の近くは、殆んど晝間この邊へ追い込まれた巡査隊に包まれて火を放たれやうとしてゐたから、俺は驚いてコロドナに伯父の家へ避難しやうと云ひ出した。

四邊の狀況が既に危險に迫られてゐるのを發見したコロドナは、それでは連れて行つて下さいと云つた。二人はかくして闇の中へ跳び込んで、ネヴァ河へ向つて走つた。

コロドナと俺は、大ネヴァ河畔アンドレエ修道院の前まで逃げて來た。

「もう大丈夫ですよ。キヨスキー」

「彼處は大丈夫だらうが橋が渡れるかしら。」

「もしいけなかつたら、今晩は一晩隠れておやすみになりませんか。」

と修道院の中を覗きに行つたコロドナが、

「あつ！尼さんが殺されて窓の下に倒れてゐる。」

と云ひ乍ら年増の顏に、娘のやうな様子をして顏を蔽ふた。ほんたうに十七歳ばかりの尼僧が銃殺されたと見えて死んでゐる一匹のボルザヤ犬が、流れた血のあたりをくんくん嗅いでゐたから、ぞつとして門の外へ跳び出した。

よくみると、門には、恐ろしい力に屈した痕が殘つてゐた。暗い窓の鐵格子と玻璃とが、かき毟られ、聖徒像にさゝげてある釣燭臺が、歪んだまゝ、辛うじて鐵鎖に、からまつてゐた。

夜に入つて、市街は濃霧の底へ沈んでゐた。折々コサックの銃聲が、烈しく、どこからともなく響いて來る。

恐ろしい晩だ。

銃聲は忽ち濃霧に遮られて了ふ。俺やドロシキーは既に通行をやめてゐた。二つ乍ら通行出來ない程危險だつたからだ。俺とコロドナは狂犬のやうな形で、修道院の路の暗い街の路次をふ

らく〳〵歩るき乍ら、後ろを振り返つたり、霧の底をすかして見たりした。

すると、何處かで、突然、

「パピエーダ。パピエーダ」

と犬を呼ぶ女の聲がした。俺と彼女は工場と煉瓦塀の假監獄の通りへ出た。假監獄は數時間前に解放されて、囚人は逃げ落ちた跡だつた。逃げそこねて、コサツク兵や憲兵に銃殺されたのが、門際や、高い壁の下に、ごろごろ轉つてゐた。

アルセナリの前へ出ると、愈々ネヴカの流れへ出て了つた。ネヴカはこの火と黃硫の大市街の心臟を貫く氷河だ。

晝間、この邊一帶を黑自働車に赤い旗を立てゝ驅け廻つた時は、流氷は、少かに解けてゐたが、今見ると鋼のやうに凍りついてゐる。

「お前この河を渡るだけの勇氣があるか。コロドナ」

「渡らなくつて！折角一生懸命でこゝまで逃れて來て、こゝで挫けちや無駄骨ですよ」

俺はこの女の度胸のいゝのに感心した。

「俺は今日お前の家を出る時、牛乳を飲んだつきりで、何にも喰はないでゐるから、腹がぺこ〳〵に減つちまつた。お前何か、口の中へ入れるものは持たんだらうな」

「そんな贅澤云ふもんぢやありませんよ。金はあるけど」

「困つたな。兎も角も橋を突つ切らう。そしたら何かあるだらう」

河岸へ出ると、突然、向岸のウオスクレセンスカヤ街で、消魂しい銃聲が起つた。すると、コロドナが、俺の腕を捕へて、

「あれ、人が………人が殺された。キヨスキー。キヨスキーあれを御覽」

と叫んだ。俺は向岸の街燈の下を見た。俺の充血した目に映つたのは、岸からコサツク士官の長靴に蹴落された男の死骸だ。死骸は河面へ落ちて、する〳〵と一間ばかり滑走した。

いつも瀬のやうに波うつ河が、街頭燈の光を茫々と亂射してゐる景色は、この氷流の深層に、苦悶のまゝの姿で、夥しい生物が、幾重にもかさなり合つてゐることの出來ぬほど、物凄く美しい。コロドナのあとから警戒をし乍ら、アレキサンドル橋を渡らうとする時、

「止れ」

と、横合の暗い鐵柱の蔭から咎められて、殆んど、すくみ上つて了つた。俺は向ふ見ずの無鐵砲な男だが、膽が小さいから、不意に止れと怒鳴られたとき、どきんとした。

處へ舊式のマキシム銃を擔いだ兵士が飛んで來た、よく見る

と、一人は六十前後のよぼよぼの老兵士で、今一人は若僧だ。二人とも、垢光りのする古外套を着込んで寒さうな顔をしてゐる。

悪い奴に出逢つたと思つたが、後の祭だ。愈々この橋の袂で犬死だと覺悟して、俺は二人の隙を狙つてゐる。女を見ると、忌々しい、俺よりも、よつぽど落ちついてゐる。突然、勞働者と學生を滿載した帆かけ船が、さつと橋の下を潜り抜けて行つた。

二人の兵士は、まづコロドナを捕へた。

「おい。美しい眉毛のない妖女！山鵲の若情婦！お前は大國のどこから天降つて來たんだ。」

「ザローフ伯父さんの家から、戻るんです」コロドナは出鱈目を云ふ。そして老兵士の手を振り放した。今度は若僧が俺につつかゝつて來たから、俺は大學生だ。人民の味方の大學生だ。と云つて、自動車の上で分配にあづかつた木綿の赤リボンを出して見せた。するとこの女はお前の何だと尋ねる。人を馬鹿にするなと思つたから、正直に、

「俺の情婦だ」

と怒鳴つた。すると

「情婦？お前のお袋ぢやないのか」

と愈々人を馬鹿すると思つたが、實際、年が十五違ふから、ほんたうに、戀人だの情婦だのと云つたつて誰も左樣だと受取るまい。こんな奴にかゝり合つてゐられるものか。

「美しい皇后樣。行つて終やうぜ」

といきなり老兵士がコロドナを抱かうとした。コロドナは例の恐ろしい腕力で、老兵士を雪の上に突き倒した。同時に、此處だと思つたから、俺は若僧の銃を力任せに引つたくつた。思ひ出しても身慄ひが出る。俺は銃の尻で、若僧を二三度毆つたら、彼は雪の上にへたばつたまゝ、ごろ〲轉げ出した。

「キヨスキー。早く。早く。」

コロドナと俺は河の中へ銃を捨てゝ、夢我夢中で橋を突つきつた。

「駄目だ。駄目だ。橋を渡ると射つぞ」と後ろから老兵士が頻りに叫んでゐたやうな氣がする。俺はミンツ橋や、トロイツキー橋が封鎖されて、對岸へ行くには、どうしても通行税五留を拂つて此橋を通らなければならぬことを知つてゐたから、五留拂ふだけの餘裕はあつたが、老兵士や若僧の云ふことが、癪に障つたから、毆り倒して逃げたのだ。

ウオスクレセンスカヤに出た時、「まあ、よかつた。死なずに濟んだ」とコロドナが俺に獅嚙みついた。獅嚙みつく段ぢやな

い。やつぱりこの女は馬鹿だ。それから、キロチナヤ街から、行路死人の掃きだめ場になつてゐるタブリダ公園へ入らうとして、行手に物々しいカザーキ隊が現はれたから、バセジナヤの四辻まで魂を跳ばせて一氣に駈け抜いたら、

「キヨスキー。妾はもう動けなくなつた」とコロドナがべそを掻き出した。こんな時、駈け落ちやあるまいし、女なんぞ引つ張つて來るのが悪いと思つたが、また、女の宿が、見す見す巡査隊に包囲されるのを見てゐながら、自分だけ姿をくらますのも男らしくない、少なくとも妾同様の彼女を放つて置く譯もないと思つて、危ない道連れにして來たのだ。

低い雪雲とすれ〳〵に、白堊や白煉瓦の商店の軒の下を傳つて、圓い石を埋めた、破壊後の電車道を急いだ。時計を見ると十時過ぎてゐる。家々は悉く戸を閉してゐた。往來は火事場の後のやうだつた。俺とコロドナは、そこに黒い物影を見たり不意に足音を聞く度、何遍十字を切つたか知れない。バセジナヤから、ぐつと左へ折れて、右へ曲るとリゴヴスカヤだ。

俺の伯父の自宅はリゴヴスカヤ街にあつた。ブルーシロフ大將の邸から七八軒目だ。何でも、コロドナを引き摺つて、無茶苦茶に突喊して居つたら、サゴロードニの見晴しで市民兵の装甲自動車に出合して、ひやりとした。市民兵でよかつた。これが、巡査か憲兵隊だつたら、今この話は書けないのだらう。

路傍には硬化した男や女の屍が、他愛もなく重なり合つて雪漬けにされてゐた。ニコライ橋の死館假收容所へ明日にでも廻されさうな生々しいのもあつた。リゴヴスカヤへ曲る辻で、七八人の勞働者が、焚火を圍んで銃を五六本組み合せ、まん中に鼠の死骸を十匹ばかり釣してゐた。

多分あぶつて食ふのだらうと思つて通り過ぎやうとしたら、勞働者連が、

「クデー・ルスキー・ラゲリー。アセドライ・ローシヤヂー！あはつはつは」

と何處かで聞きかじつた兵士の號令の眞似をして、どつと笑ひ崩れた。そして俺を呼び止めて、

「俺の親愛なる友達。お前はセルゲイ宮の前で巡査の騎馬隊に出逢はなかつたか」

と云ふ。俺は否(ニエト)と答へた。コロドナが側から、早く伯父さんの家へ行きませう。妾何だか怖くなつたわと急に焦り出した。處へ突然四辻から慌しい蹄鐵の響が起つた。同時に、轟然たる銃聲が聞えた。

「騎馬隊だ。騎馬隊だ。地獄の犬め！くたばり損ひ！」

「やつつけろー」

恐ろしい喧噪の中から、勞働者の方でも、火蓋が開かれて、共に物凄い深夜の應戰が始まつた。俺はコロドナを引つ張つて伯父の家へ駈け出した。一歩二歩三歩、雪を蹴つて駈け出した時

コロドナが雪の上に、ばつたりのめつた。慌てゝ抱え起さうとして彼女の顳顬に過まつて手を觸れると、俺の三本の指の叉へ血が流れて來た。

「コロドナ。コロドナ。どうしたんだ。起きろ。早く駈けるんだ。起きろ。起きろ」俺が彼女の顔を覗かうとしたら、彼女は俺の靴へ捕まつて仰向けに倒れた。額から胸の白い襟にも血が落ちてゐた。

銃聲は烈しく響いた。雪を掠つて飛ぶ銃丸の呻りと、「ボルジヨム天然カウカシヤ鑛泉。露西亞紳士は誰でも飲む」のガラス窓を劈く裂音が續いて起つた。巡査が鞍から落ちる劒の音も聞えた。

コロドナは何とも答へずして俺の長靴を捕へて放さなかつたが、ふと彼女の髮の生え際を撫でゝ瘢を見た時、俺は跳び上つた。彼女は顳顬の少し上の頭骨を通貫されてゐたのだ。恐らく銃丸は頭の中へ埋まつてゐるだらう。そして苦しまぎれに俺の長靴を捕んだんだらう。死んだと思つたが、それでも三間ばかり俺は屍をずる／＼引摺つて行つた。そして迚もつゞかぬと思つたから、獨りで逃げ出して、伯父の家へ垣を破つて逃げ込んだ。翌日モスクワへ逃れた。

それから日本へまたやつて來た。何だかまだ充分にコロドナの死を見極めなかつたから、暫くしてから、甦へつて、今でも達者で生活してゐるやうな氣がする。然しそんな筈はない。確かに彼女は死んだんだ。

コロドナは幼ない時モスクワの修道院に拾はれた女で、親も兄弟も何處にゐるか解らない。或は居ないのかも知れない。彼女が死んだつて可哀相だと思ふのは俺位なもんだ。ユダヤの女には、えてこんな運命の女が多い。

日本へ歸つた俺は直ぐ京都の高等學校へ入つた。間もなく日本人の妻を貰つて東京へ來た。この間西伯利へ出掛けて歸つたばかりだ。今度は落ちつかうと思ふ。妻を貰つたら、妾はもう死んでもいゝと祖母が云つた。

瀧田樗陰様

以上の話は創作として書いたのではございません。

ほんの私の履歴書の代りのつもりでした。そしたら以上のやうなものになつて了ひました。批評も議論もありませんが、一つは餘裕がなかつたのと、一つは、ごくごく單純な野生な記錄をぶち壞して、文明人の歷史となすことを嫌つたからでございます。どこまでもペンキを塗らない野蠻人の修養を積まうと云ふ主義でございますから。私の露西亞人及日本人觀は今少しく私の世間的の地歩が固まるのを待つて、書くことを貴下もごさんせいのこと丶存じます。

Алекс. Ђоксекій



關東と關西

信堂生

一

關東と關西、東西對抗の氣分は上古から日本の中に漲ぎつて居る。日本を二つに分けて抗爭した始めての顯著なる事實は源平であるが、その次は關ケ原、その次には維新の戰爭、維新に勤王方は多く關西に、佐幕方は多く關東に在つた。源平にも關ケ原にも度々、關西が負けて、勝利は、つねに關東に歸して居たのが、維新だけには關西が關東に勝つた。源平の抗爭の最後の舞臺は壇ノ浦であつた。壇ノ浦といへば、斷末魔を意味するやうになつて居る。それを戊辰の戰爭には、壇ノ浦が東に移つた。五稜廓は即ち戊辰の壇ノ浦である。源平には下關海峽、戊辰には宗谷海峽が壇ノ浦であつた。古來、三度の東西の大抗爭の中、その勝負の尤も内容的、博奕的、刹那的であるのは關ケ原の天下分け目の大抗爭が僅に半日の間に決著して、壇ノ浦も天王山も皆、その中に含まれて居る。東西抗爭の遭遇戰は、唯だ此の一の關ケ原だけで、互に主力を擧げて、一擧に運命が定まつた。此の如き感興的の抗爭は、將來に於ても、再び見ることは難からう。

皇祖、建國の歴史が本土の中央に始められて、皇居の附近、近畿一帶が、東と西との防水壁になつて居る。西は、神代以來、稍、文化の早く開けたところ。東は未だ王化に浴はず、東夷と稱せられて居た。故に、日本の上古より既に、近畿を以て境界とする東西の大區分は出來たので、西の「文」に據つたのが平氏、東の「野」を開拓したのが源氏、赤白の旗が文と野とを代表して居た。東西抗爭の形勢が基礎を築き上げたのは、京都に對する鎌倉、則ち朝廷の都に對する武家の都、衣冠の府に對する弓箭の府との二個の中心が出來たときであるので、長たらしい日本の本土に、二つの焦點を作り出したのは、人物を以て現にせば賴朝である。

鎌倉の政府は、源氏、北條、足利と變遷して、覇業、全く衰へたとき。後の北條氏が崛起して小田原に割據した。小田原は

鎌倉の如く有力なるものでは無いが、兎も角、亂れた戰國の世に於ては、關東に於ける、文明の中心であつた。形の上に於ても、關東政府の繼承者たるを失はなかつた。小田原攻のとき、流石の家康と雖、關東經營の首府として、小田原若しくは鎌倉の外を考へては居なかつた。それを秀吉が武藏野の中心たる江戸の規模宏大なる所以を勸說した。關東の中心としては、鎌倉が發展したのが則ち江戸で、それが、今、日本の首府となつて居る。そして關東の舊都たりし鎌倉も、小田原も、ともに歷史的興趣を保存しつゝ、今日に於ては東都の別莊といふ地位を占めて居る。恰も關西に於て、京都が大阪の爲に住宅地別莊地たる內容を有すると同じ。

二

鎌倉幕府が出現して、始めて關東の焦點が定まると共に、東西抗爭の意味も判明して來た。鎌倉の目標は京都であるが、それには、京都といふ焦點を以て代表せらるる關西に於ける平氏の勢力を壓倒する精神を有つて居た。家康の遺言に、その守刀を久能山の廟に立てゝ、その刃を西に向けよといふた如くに、關東の武家政府が目標とするものは、萬古、つねに、關西であつた。

維新に於ける殊勳閥則ち藩閥、薩長及び土肥が悉く關西なると同じく、關東政府の起るや、その殊勳閥則ち藩閥は皆、關東であつた。德川氏の藩閥が、三河武士、或は御譜代の美名を冠して稱せられた如くに、源氏の殊勳閥は、鎌倉男兒であつた。その鎌倉男兒を解剖して見ると、感興に富める結果を得る。第一の藩閥は伊豆、次は房總、その次は武藏、相模であつた。

抑、賴朝は伊豆の蛭ケ小嶋から崛起した。蛭ケ小嶋は狩野川の沿岸にある。賴朝は狩野川の流域の諸豪、鄉士に擁護せられて旗を揚げた。諸豪の第一は今も狩野川の名蹟たる北條村の北條氏が第一で、その外、狩野、土肥、仁田、伊東、工藤、加藤、天野等の武士が隨つて起つた。維新後の政治史に、藩閥の間の抗爭が行はれたと同じく、鎌倉の藩閥の間にも、激烈なる抗爭があつた。近世の政爭は言論を事とし、昔のは武力に訴へる。

鎌倉の騷動は悉く藩閥の抗爭であつた。平廣常及び畠山重忠の寃死、和田合戰、和田の敗軍を投けて一度は盛りかへした武藏の横山黨、降つて、三浦騷動、三浦に加擔して失敗の結果、關西の安藝の領地に落ちて行つた毛利氏、觀じ來れば、いづれか悉く、第二、第三の藩閥が第一藩閥の爲に征服せられたるものに非る可き。

鹿兒嶋に往つて見ると、加治屋町附近から、萩に往けば、松下村塾を環ぐつて、維新の諸豪傑が群起した蹤蹟が歷然として見られる。薩長を以て、維新の豐沛なりとすれば、伊豆の狩野

川は則ち鎌倉の門前である。試みに明麗なる狩野川の沿岸、韮山富士が、その雄姿を見せて居る桑の葉が洪水の氾濫するやうに波立つ沿岸の平原を辿れよ。鎌倉武士の名が到る所の地名に見出される。修善寺温泉から長岡温泉あたりを散歩すると、趣味に富める「鎌倉の溝渠地圖」を踏査する心持がある。東三河の旅行も亦た同じ趣味を以て見られる。溝渠地圖は古今、東西に展開されてある。

三

東西對抗の象徴は秀吉と家康とである。此の二雄は、ともに東西の中間地帯に生れて、それが一は大阪、一は江戸と、懸隔して、東西の焦點に居据はつた。譬へば、分水嶺から左右に水が分れるように分れ出た。或は又た動植物の區別の如く、牡丹と獅子、竹と虎、梅に鶯との區別は、問題にはならぬが、両方が接近して來た微細動物になると、倹約と吝嗇との判別よりも六つかしくなる。中京の名を以て自ら任ずる名古屋、尾張附近、若し平原を以てすると、小牧の平原を中心とする地帯は、關東と關西との接觸圏である。馬琴の羇旅漫録に、江戸の小説は名古屋まで讀まれ、大阪の小説も名古屋までは讀まれると書いた。此處が東西の分水嶺にして、東西の氣分が入り混じつて居る。東京では看板に、うなぎと書き、大阪ではまむしと書くのが、此處では、両種の看板が、ともに見られる。

信州の高地から裏日本に流れ出る信濃川、表日本に流れ出る天龍川、此の二つの大川の水源は相近き所からされども、水の行末は日本の表、裏になると同じく、秀吉と家康との開拓した江戸と大阪とは、楕圓形の二個の焦點の如くに、長い本土の二個の焦點を形造つて居るが、楕圓形の焦點とは意義を異にし、焦點の性質を異にし、斷面を異にするものになつた。

楕圓形の二の焦點ならば、その性質は同じであらねばならぬ。然るに、江戸も大阪も、ともに、日本の或斷面に於ける唯一の中心、焦點である。江戸は政治の斷面に於て、大阪は經濟の斷面に於て。唯だ此の二の焦點が真中の京都といふ發光體を中に置いて、東西に相隔てゝ、如何にも楕圓形の二焦點であるかのやうに配置せられてある。それが日本の地勢が生んだ自然の興味である。

四

大阪は、江戸の武力政治二百五十年間に醇化せられた經濟上の焦點である。二百五十年の間に、大阪が占有する斷面か、政治から全く經濟に轉じた。

秀吉、家康と両存した時には、その大小、強弱の相違こそあれ、大阪と江戸とは楕圓形の二焦點たるを失はなかつた。若し

家康が秀頼を滅さゞる中に早く死んで、豊臣氏が續いて存して居たら、大阪は光力こそ弱けれ、やはり江戸と同じ斷面に置かれてある二個の焦點であつた。それに、近世の大阪が經濟上の焦點として發達すべきは、自然の運命であるから、若し豊臣氏が續いて居たとすると、大阪は頗る異彩を放つた歴史を有したであらう。大阪の幸運を開發した者は秀吉である。恰も家康が武藏野の開發者である如くに。

　京都は單に名譽の發光體であつた。光榮の焦點であつた。禁裏の二字は、東西の斷面を異にする二焦點を照らす神聖なる光明體であつた。それが維新の際には勤王雄藩の武力を此に集中して、一個の武力の焦點になつた。二百五十年來、關西に消えて沒くなつて居た武力の焦點が、突如として此際に出現した。而して江戸と同じ斷面に於て、武力を抗爭することになつた。從前の歴史に於て、武力の斷面に於ける東西の抗爭には、いつも西方の負に歸して居たのが、維新は世界の大勢とはいへ、此時、容易に西方の勝利に歸し、速かに維新の大業が成就した所以は、新に湧いて出た關西の優勢なる武力の焦點に、加ふるに、大阪といふ經濟の焦點を得たからであつた。これより以前の東西の大抗爭の時には、未だ大阪といふ焦點が無かつた。それが出來てから、初めて起つた東西の大抗爭に、大阪が京都に結び付いたのが、則ち西方の勝利を決した要因である。

　維新の諸豪傑と雖、鳥羽、伏見の戰爭の時には、未だ此の理勢を諒解しては居なかつた。若し鳥羽、伏見が敗軍になつた曉には、天子を奉じて叡山に據り、それから丹波路を經て、山陰道を廻はつて、備後あたりに出て來るといふ大本營の計畫であつた。その準備も着々進行して居た。恰も、建武の昔を手本にして考へて居たのである。それが勝運に叶つて、早速、大阪が掌中に收まつて見ると、彼等と斷面を異にする焦點の價値が急に諒解された。

五

　吾輩、東京から鐵路、下關に來る每に、汽車の窓から見る風物、東西、七百哩の間の一日程、廿五時間に於ける變遷は容易に目に著く。吾輩の所見では、美濃路あたりから、樹色、緑なども變はつて來ると思ふ。東海道の風景と、瀨戸內海の風景、東西の代表的舞臺が全く印象を異にする。東海道には江戸兒的の淡泊な氣分があり、瀨戸內海には、上方式の友染模樣の纖麗さが見える。

　名古屋から琵琶湖畔に出るまでに、何處から判然、東西の風景の印象を異にするといふ境界線は定められるものでも無く、分るものでも無い。風土には國境は無い。關東にも、關西にも

意外に暖かい、寒いといふところがある。それに應じて草木も色彩を異にして來る。例、遠く隔たつて、松島と宮島となれば「趣は全く違ふ。宮島は明媚に、松島は沈鬱。若し松島が瀬戸内海にあつたらどんなに美しからう。空の色、海の色、土の色、植物、松島は東北沿海の氣分が漂ふて居る。松島の絶佳たる所以は、島の分布である。風致、雄偉である。故に、松島は、月明の夜が尤も條件の具備した、美しいときである。

關東の樹は東北から樺太に、關西の樹は、西南から琉球に。北は亞寒帶、南は亞熱帶にまで日本は伸びて行く。「螢の光窓の雪」の唱歌が、兩極端では了解されない。北では窓の雪は分かるが、螢の光を知らぬ。南では、北の反對である。螢の光は、よくわかるが、開闢以來、雪を見たことは無い。無邪氣な作が、無邪氣に歌ふだけである。沖縄縣の如きは、毎年、師範學校卒業前の修學旅行に上京する際、特に中仙道を經過して、日本アルプスの雪色を見ることになつて居る。

六

江南の橘を江北に移すと枳となる如く、關東の林檎は關西に行くと梨になる。その梨もまた關東が好い。關西で林檎が出來ぬわけではないが、肌膚が荒つぽくなる。その代りに關西には豐富なる柑橘がある。夏蜜柑も關東で栽培されるが、酸ぱくして、甘味が少い。

東京附近に、林檎が多く、門司附近にはバナナ、が美しく作られてある。北の二つの對照に、關東が温帶的で、關西が亞熱帶的である事實を現示するものである。

關東で蕎麥、關西ではうどん、東京で蕎麥屋を關西ではうどん屋。また事實に於て關東人はよく蕎麥を食ひ、關西人はうどんを好む。西南に下るに隨つて、うどんのすじが太くなる。東北の汽車旅行に、プラットホームで蕎麥のかけを食べさすのは、吾輩は大贊成である。日本の汽車旅行中の趣味の一であると思ふ。關西には、これに相當すべき趣味のものは無い。尤も東北の寒氣を凌ぐには、熱つい蕎麥の立食が、簡單にして要領を得て居る。東北の氣分が、蕎麥と共に流れ込む。

竹の緑は、如何にも西が美しい。京都の竹、筍、筍飯。それから薩摩、大隅、日向の竹。麗はしいのは京都の竹、竹の畑、畫に描いたような竹藪、芭蕉の句に、「杜鵑、大竹原を漏る月夜」の雅趣は京都の風景美の一つで、東には、竹の緑の美しいのは少い。湘南の孟宗の竹の、天半に聳ゆる緑は、東では見られぬ。

松の緑も西が麗はしいと思ふ、併し東には落葉松がある。落葉松の新緑の美觀は、從來、關西人の想像せざりしところ。西

の楊梅は東に稀に、西のモツコクは東のカナメに對照すべく、風景美として見る雜木林は、東に多い、東の誇である。吾輩は少年時、關西に居るときには、山林といふ事を解して、林野といふ觀念は無かつた。東京に出て、關東の風景に親しむようになつてから、林野を解し、その風景美に趣味を感ずるようになつた。武藏野の雜木林は則ちそれである。關西には森林が山に附屬し、關東には森林が原野に附屬して居る。

七

春の櫻花、秋の紅葉、何事にも關東、關西ともに番附を作つて對抗する。蘇鐵に、泉州堺の妙國寺があり、駿州田子の浦の蘇鐵寺があつて、相對して、そてつの大關と稱して居る。

梅に月瀨があると、關東人は、杉田の梅林を賞揚して、これに對抗させる。青梅の梅花、越ケ谷、水戸などいろ〳〵梅花の名稱、近ごろは小田原の梅花も聲價を揚げた。しかし梅花といへば、何人も第一に月瀨を聯想する。櫻も吉野といふ。京都には東下りに擧げた劈頭の「落花の雪に踏迷ふ片野の春の櫻狩り」、及び「嵐の山の花盛り」、龍頭鷁首の船に乘り、詩歌管絃の宴に侍りし」といふのを始め、櫻の名所は多い。京の櫻は、友染模樣に畫いた花のよう。東の花と氣分が違ふ。櫻花は關東の地味に適するやうに思ふ。東京の荒川の櫻も、小金井の櫻も、吉野山から移植したといふが、地味と氣候と共に、關東に適して居るようである。關西にも櫻は多いが、關東の如くに、早く木が成長せず。近年、東京では到處に櫻花の名所が出現するのは、櫻木が早く育つて、早く花咲くからである。櫻花は日本の花、早く開いて早く散る。それが關東では、更に、早く育つといふ條件が附加される。

八

紅葉は東西に名所があるが、紅楓そのもの丶艶彩は關東が强烈である。碓氷嶺、日光、箱根、鹽原その外いろ〳〵あり、關西にも高尾、嵐山、江州の永源寺、それから瀨戶海の寒霞溪、宮島などあるが、關西では繁霜が東北ほどに厳しくない、京都の紅楓が美しいのは、霜が厳しいからで、畢竟、東西を問はず霜の名所が紅楓の本場である。紅楓に乏しい九州でも、豐後の竹田の用作の紅楓は、その幽深なる溪谷、その楓の大木、紅葉の鮮紅なる、あれほどの南國には珍づらしい。同じく豐後の東海岸、佐伯灣一帶は、亞熱帶の情調を帶びて、ガジユマル（榕樹）さへも生育するのに、山を隔てた竹田の溪谷が、地勢の幽奥なるが爲に、寒冷にして繁霜を催ふし、九州に珍づらしい紅楓の名所を作り出すのである。寒霞溪、宮島は美しい碧海に浮んで紅楓としての鮮麗が、絶景を爲すのである。宮島の如きは

青風の詩を、水分が滴るような心持がして、非常に佳いと思つた。

すべて關西から九州に降るに隨ひ、秋晩の霜が少く、草木の鮮やかな紅葉を得難い。東北には、霜害保險組合があるくらいだが、關西には霜が少く、霜害が著るしきものは無い。關東、東北では、必ずしも楓とは限らず、すべての草木が紅葉する。その爲に、秋來の天地、悉く紅化する美觀、讃ふべきものが無い。吾輩、先年、仙臺の青葉城に登臨したとき、蔦の葉が火のやうに燃えて、城壁に絡みついて居て、火焔の中に擧げられたる城のように見えた。去年の十月、山形縣の上ノ山溫泉に往つたとき、東京を夜汽車で出て、朝起きると、沿道の山川到處紅爛熳、全く紅桃林のじゆーたんをかぶせたようであつたのは、吾輩關西人には、頗る美しく見られた。上ノ山に着くと、その綺麗なじゆーたんの山川の間に、紅柿の無數が繁茂して、家を埋め、村を埋め、紅玉の縟の中に、家を鏤ばめたようである。上ノ山から東京を經過して關西に來ると、無數の青山、車窓の前に叢がり來る。多少の黃葉、山野を點綴するのみ。關東の秋は紅に、關西の秋は黃ろい。紅と黃との相違は、則ち霜の繁疎に由つて分れる。東西の秋を區別する所以のものは霜である。

秋晩の關西には、深紅に染め成す草木は少い。先づ匹敵するものは黃櫨である。菅茶山の黃葉は、備後の神邊にありて、彼の詩は、田園詩の上乘なるもの、而も土地は極めて貧弱であるが、彼が自らその書齋に、命名して、黃葉夕陽村舍としたのは、黃葉の二字、適切に、中國の秋色を寫し出して居る。黃葉の二字は門前の黃葉山に因んだのであるといふが、黃葉山といふのが即ち關西の秋山を代表して居る。關西の木葉、眞紅に染むるものは、櫨紅葉（はぜもみぢ）である。海峽の南北、長州から肥後に至るまでの間を、櫨紅葉の舞臺とする。櫨紅葉は枝態、頗る姿致を爲して、關西の紅葉の尤も美しきものは則ち是。櫨は黃櫨と書くけれども、紅櫨と書くのが却つて適當であらう、黃といふのは、その實である。櫨は、その黃實よりも紅葉が麗はしい。

東西の、趣味の木をいふと、東に白樺あり、西に楠あり。東は白、西は青。利根河畔のナンジヤモンジヤの名木が楠であるのを見ても、關東に楠の珍づらしいことは推知せられる。ナンジヤモンジヤは、南方から利根河口に、漂著したものである。

九

東、西、地氣の變遷は、歌音に現はれて居る。所謂北方悲歌の音は關東、東北人に依つて歌はれる。韓退之の、燕趙は感慨悲歌の士多しといへるもの、まさに關東に該當して居る。悲歌

は則ち悲涼の音。追分、米山、磯節は、悲歌である。新内もそれである。關西人も、能くこれ等の節を歌ふども、悲涼の音が出ない。悲涼の音は節調が高い。東京の義太夫は、悲涼の音を以て語るから、調子が高く、大阪の義太夫の、幅の廣いベースの音に及ばない。東京の角力が大阪角力よりも强いだけ、それだけ大阪の義太夫は東京の義太夫に優さつて居る。誇張的に形容すると、東京の義太夫は、清元の氣分に近づき。關西の追分節は博多節に近寄る。此の故に、東京の義太夫は、ようかんに辛味の混じつて居る、譬へば、わさび羊羹を食ふが如く、辛味がようかんの濃甜を損じる、悲涼の音が累を爲すのである。關西で追分節を聽くと、譬へば白酒を呑むが如く、そのあま味が芳醇を奪ふ。追分節は、酒ならば、尤も芳烈なるもので、その芳烈さが腸に喰ひ入るようでなければならぬ。

南音は太くて低く、北音は鋭くして高い。三味線ならば、關東は細棹、關西は太棹の藝術である。細にも太にも、自ら獨得の妙味が備はつて居るので、相奪ふ可からざるものを有して居る。

酒に對する關東、關西人の趣味が自ら違ふ。灘で、關東向きと稱するのは强い。荒いのをいふ。若し角度を用ゐて、立體的に象徴して見れば、關東の味感は多角形で、關西のは、まるい。味感の調子が内容美の上に現はれて居る。

關東人と雖も、上方に來て飮めば、酒を賞めるであらう。上方の酒は、やさしくて輕い。しかしそれは關東には適しないので、やはり關東には强い、荒いのが好まれる。關東の醸造酒の中で、やさしい輕いといふ感じのするものは滅多に無い。東の强い、多角形の味感、及び西のやさしい、まるい味感。その二つの味感が、則ち東西の地氣で、それが聲音に現れて、代表的のものが、追分と義太夫とになる。地氣は則ち人氣である。

十

たんかを切るのが關東人の特色、たんかを切らないのが關西人の特色。關東人の、たんかを切るや、切れ味の爽やかなること、正宗の短劍のようだ。痛快に、たんかを切るところに、江戸兒の性命はある。たんかの切味は、假令、關西人が、長く東京に住まつても、容易に企て及ぶところでは無い。江戸兒は斬るように話し、上方兒は粘ばつて話す。上方兒は、なか／＼たんかを切らず、醇良なる飴を引伸ばすが如く、切れさうで切れず、粘着性、執着性、强靱性の確かなる事に於ては、江戸兒の夢想するところでは無い。利刄も以て飴を斬る可らず。痛快なる江戸兒のたんかと雖、一度、上方兒に致さるゝのは、たんかの切味も、飴の粘着力に逢うては、鈍らされるからである。

吾輩例、此の論を稿するとき、悟道軒圓玉の講談、一心太助を讀んで、おかしくて、獨りで笑ふ。一心太助は江戸兒の精である。彼が京都から還つて來て、松前屋の隣の烟草屋の店さきで話す。店のおやぢ京都を問ふ。太助答ふ「成程、土地は清潔で、水も好し、女も美しい、その上、言葉もやさしいのは氣に入りましたが、それにつひぞ小粹を見たことは無へ、酒店はあるが、あんな様子ぢやア定めし賣れめえと思ひます。食物の悪るいところで、味噌などはいやに甘味があつて、とても關東者の口には入りませんね。魚は鰻が名物だが、脊から割ねえで、腹から立割り、大椀の中に入れ、金串を打つて頭をつけたまゝで出す。只だ甘いと思つたのは若狹から來る鯖のすしだ、此は江戸にもありません、それに精進料理は、京都が本場だけに、昆布で煮汁を取つた吸物などは、さつぱりして美い味でございます」と。なるほど一心太助の言ひさうな京都の觀察談であるが、安んぞ知らん、それは則ち江戸兒の京都觀であるので、悟道軒圓玉が自ら氣を吐くことを。それから太助は、松前屋の寃罪を聞いて、それを救ふべく、彼の所謂大久保彥左衛門の駿河臺の屋敷に、天秤棒を肩にして、駈けつける。太助は、門から一散に飛び込んだ。楊枝を削つて内職にして居た門番が、通り者がしたと思つて騒いで居る。太助は玄關へ盤燕を脱き、天秤棒を突いて、「お頼み申します、おやぢも居ねえか」此の一句、太助江戸兒の面目が眼前に躍り出る。

江戸で男といはれた一心太助――男といはれたのは則ち江戸兒の理想的。左の腕は、男は氣で持つ。右の腕に、腕は腑で食ふ。脊には一心如鏡と刺青をした變り者。男は氣で持つ、關東兒の金科玉條である。關西兒の粹の粹なるものが一心太助。若し幡隨院長兵衛を以て、關東兒の大乘とすれば、一心太助は小乘に屬するであらうが、しかし吾輩は、より多く一心太助を好む。日本橋兒、神田兒が江戸兒の粹なりとすれば、一心太助は粹の粹なるものである。

十一

關東兒の血管は利根川にして、關西兒のは安治川である。野味を帶びた男性的な利根川の水が脇長差の氣魄を涵發し、その流域は則ち俠客の舞臺である。都びた安治川が分別的な、打算的な上方兒の精神を涵漑する。その流域が上方兒の繁榮しつゝある肥田である。

上方にも俠客僻はある。しかし講談に見る俠客は、關東の長脇差がおもしろい。關西のは分別臭いところがある。關東のは潑剌として意氣を以て貫ぬく、一氣呵成的で、利根川の名物が則ち鯉である如く、長脇差は鯉である。幡隨院長兵衛は六尺の

纒であつた。關東の侠客は武士に近く、關西の侠客は町人の氣である。關西のは武士に衝突いても、やはり市井の氣分を失はず、關東のは武士と同性相衝くの感がある。幡隨院長兵衛と水野十郎左衛門とは、二本と一本との相違だけに見ゆるところもある。その武士に近いといふは、非打算的、非數學的なるところ、その町人を離れざるは、智的、打算的なところをいふのである。

長脇差の氣魄が、社會的に表現するのが侠客にして、國家的に表現するのが、義民である。關東の義民佐倉宗吾と、關西の義民、伏見の文珠九助とを較べ見よ。前者が全く情的にして、後者は町人らしい面影を失はぬ。前者は義勇、後者は智勇、關東兒の理想化した宗吾は、刀を一本帶した武士である。

幕末維新の際、關西の人物は、概ね武士から輩出し、關東に於ては、多く鄕士から輩出した。是の一事は關東、關西の研究に於て看過す可らざる一大事である。長脇差の土着したものが鄕士で、鄕士は則ち禄を有する長脇差である。高山彦九郎も蒲生君平も、皆、それである。長脇差の氣魄が結晶した勤王が則ち彦九郎であるといつて可い。關西に於ては、野武士の氣分が全く消えて、洗錬されたる武士氣質と町人氣質とが對立した、並存した。武家時代に於ける治國平天下は武士の心身に懸つて居るので、所謂純化したる町人氣質は政治に沒趣味のものであつた。關東に於ては、野武士の氣分が關八州の野に磅礴して居た。今に至つて、尚ほ、その餘炎を存する。野武士の氣分が、鄕士を燒ほり、長脇差を煽ほる。高山彦九郎も野武士の雄なる者といふを得る。明治以後に至つて、此の殺伐氣の中から出た立者が星亨であつた。少しく型は小さいけれども、森久保作藏もそれである。村野常右衛門もそれである。

十二

關西に無くして、關東にあるものは俠盜である、義賊である。其手は衝突をなし、盜賊をなせども、其心は弱を扶けて強を挫き、孤獨を憐んで縱横を抑へ、逆に取つて順に與へ、不義を懲らして正義を揚げんとする者である。盜賊を行しつゝ涙もろく、社會の秩序を亂しつゝ、社會の正義を維持せんとする者である。俠盜、義賊といふほど矛盾したる名は無く、これほど理窟の立たぬものは無くて、亂臣賊子とは伍す可らざる或ものを有して居る。

此の如き矛盾の塊ともいふべきものは理知作の發達した關西の産物では無い。例へば國定忠次、鼠小僧、稻葉小僧の如き、此種の義賊は關東の特有物であつた。新編水滸傳といひ、里見八犬傳といひ、ともに關東の文學である。義賊文學の權威たる

忠臣水滸傳は江戸で大流行を極めたことがあつて、その頃は、一町家の娘でさへも、背中に、九紋龍の刺青をして居るものもあつたといふ。今日から想像すると、江戸はローマンチックの都であつた。

彼等の矛盾の由つて起るところは、轉變の現住世界に無頓着にして、常住不滅の正義を貫ぬかんとする、いはゞ理想の錯覺である。その身が現世に、斷川しのならぬ盗賊の業をして居るのは行掛りであるので、一面から見れば現世の壓迫に對する抵抗力が弱かつた爲である。それで抵抗力の強かつた人すら難事とするところのものを、爲さんとするのである。彼等は、義といひ賊といふ、全然異なりたる二つの斷面の交錯線上に立つて居る。義と賊とは併行するものにして、永久に、此の二面が交叉する線を見出す筈は無いのであるが、彼等の義といひ、賊といふものが、ともに嚴正なる義でなく、賊でも無き爲に、交錯線を生ずるわけである。

義賊や、侠盗を産した關東からは、ドン、キ、ホーテが出たかも知れぬが、理智的なる關西からは、ドン、キ、ホーテが生れさうには無い。

十三

山川、文物ともに、關西が舊るくて、關東が新らしい。地殻

の新らしい關東は地震の名所である。新らしい地震の気分に、すべてを奪ふて居る。

日本の歴史は關西から始まつた。日本の古物の過半は關西に存して居る。出雲の國造、阿蘇の國造などは皆、西に居る。千年以上の古美術は、皆、關西に偏して居る。奈良及び京都の古美術は、則ちそれで、關東に誇とする古美術は唯だ中尊寺の一部だけを存する。それとても奈良、京都より新らしいのは言ふまでも無い。關東には古佛像の大なるものは無く、駿河臺の秋元子爵邸に安置する毘沙門像は、關東に於ける古美術の極めて珍なるものとして、故岡覺子は、つねに誇つて居た。

神社佛閣、及び貴家の系圖は同じく西方に偏して居る。大和巡り及び、播州巡りに比較すべき「巡りの國」が關東に無いのは、關東の歴史が新らしいからである。鹿島、香取の神宮は關東に於ける尤も舊るいもので、鹿島詣として、此の兩社及び潮來をまわる簡單なる巡りは江戸時代にもあつたが、その巡りの内容は、到底、大和、攝津に比較するを得べき豐富なるものでは無い。唯だ、その巡りたるや、利根川及びその水郷を舞臺とするから、よく纏まつた趣味のものであつたが、その水郷の中心たる新島の成生は僅に三百年の歴史を有するに過ぎない。常陸風土記に描かれたる常陸の國、筑波川などは、古物の少い關

東に於ては、名山たり、古山たるを失はない。富士山は疑もあり、古くもあるが、琵琶湖を同時に出現したりと傳へらるゝから、傳說の上に於て、關西に比して、古きを誇ることを得ない。

武家の系圖の古いのは、今川に於て、毛利、島津、それから佐竹などであるが、その二の尤も古いのが關西にある。それから松浦黨も古い、松浦伯は松浦黨の雄者である。關東には千年以下の舊物は少くない。武藏七黨もそれである。七百年來連綿として居る韮山の江川氏も、それである。その傳來の舊建築は鎌倉の初以來のもので、神社佛閣は暫らく措き、人が住んで飯を炊く家としては、尤も古るいものゝ一であると稱せられて居る。接骨の醫術は日本特有のものであるが、その名家は高安、名倉、淺井の三家、その尤も古るい高安が、代々、箱根川の水郷に住して、現今の宗悦に至るまで十五代。一家世襲の專業としては實に珍とすべきものであるが、その由來に溯ぼれば、德川氏の初代である。關東の焦點を大成した德川氏は三百年の歷史である。

關東人は、箱根以東には化物が居ないといふて居たが、化物は古來、西から箱根を踰えて東に來た。金毛九尾の狐も西から東に來たでは無い乎。試みに化物の歷史を調べても、東の方が新らしい。然れども西は古いところに、東は新らしいところに、各、その特色もあり、價値もある。

新らしい東には迎新の氣分があり、古い西には尙古の趣味がある。東に於ては、「新」に價値を認め、西に於ては、「古」に信用を寄せる。京都、大阪の料理店、宿屋に、一現の客を嫌ひ東京にては必ずしも嫌はず。老舖の二字は、東よりも西に於て遙かに多くの聲價を有する。故に、上方には老舖の二字、盛んに用ゐられ、關東にては、それほどでも無い。營業の內容、態度如何に係らず、老舖といふ事が、人の注意を曳く、老舖といふは系圖である。系圖が一の資本である。幽靈になつても、桓武天皇九代の後胤平知盛と、系圖を述べるのが、京都氣分を代表して居る。

十四

財政眼から見る舊日本は、極めて奇異にして複雜なるものであつた。東西の二焦點が貨幣の本位を異にして居た。此の如き畸形なる經濟組織を有した歷史は、近世の文明國の中には、日本より外には見られない現象であつた。

政治の府たる東京は「金本位」にして、これに對し、經濟の府たる大阪は則ち「銀本位」であつた。東京の兩替は金を以て相場を立て、大阪の兩替は銀を以て相場を立てた。その焦點に準じて、關東地方では概ね金本位。關西地方では、概ね銀本位であ

つた。此の事實を現示する譬喩語である。關東では、借金（シャッキン）貸金（カシキン）それに對して關西では即ち借銀（シャクギン）貸銀（カシギン）といふ。これが尤も能く、經濟の上に、二標準、二焦點を有した關東、關西の舊日本を、適切に說明して居る。しかしながら事實に於て、關西、關東を通じて、金、銀の複本位が行はれて居たので、複本位の焦點が、東京、大阪といふ二つの市場に分據されたといふ奇觀を呈して居たのである。

大阪の十人兩替、江戶の札差と、東西、對立した武家の御用商人、換言すれば、武家、卽ち將軍及び諸藩の金融機關であり殊に大阪の十人兩替は、今の日本銀行の活用を爲すものと言つて可い。十人兩替は、天王寺屋五兵衞が兩替業、卽ち今の銀行業の開祖で、これは早く絕へ、今、その家筋は、三井、鴻池、石崎、廣岡等である。諸大名に金を貸すのが營業である。大名を相手にする商賣である。諸大名は江戶に集まり、十人兩替は大阪に居る。大阪が資本主で、江戶を始め、諸國の諸大名に投資して居た。諸大名が大阪で借りて江戶でつかう。銀本位の焦點で借りて來て、金本位の焦點で拂つて居た。本位を以て言へば、銀が貸方、金が借方であつた。

江戶は武家の都で、二本差と大名とが多くて町はあるかれたいといつた。二本差は武門である。大名に、人の多い大名には大名が居らず、公家が居らず。而して大名は京に一人も居らない。此の二つの都の中なる京都は卽ち公家の都であつた。昔し舊日本に於て、此の三大都市の紋章を作ると言はゞ、江戶は刀、大阪は小判、而して京都は花の圖案であらう。

江戶の金本位を金目、大阪の銀本位を銀目と稱した。明治維新の翌年、新政府は、大阪の銀目の廢止を命じた。維新といふ政治的革新は、江戶を改めて東京としたが、未だ大阪は、此の如き非常の大影響を受けなかつた。銀目廢止は市民の恐慌。大阪の大變動にして、此時、眞個に、大阪に打撃が來たのであつた。

銀目廢止の一舉に依つて、新日本には、金銀の兩焦點は無くなつた。言換へれば、政治的には、江戶が東京となり、經濟的には、大阪の銀目が廢止された事に因つて、東西、統一して、新日本が此に出現したのである。而して銀目の廢止は、大阪の市場に大恐慌を起し、一時は暗憺たる影響を與へたが、大阪は巴里の如く、飽くまで資本の都である。巴里が獨逸に償金を拂ひつゝ、容易に盛返した如くに、大阪も亦た間も無く盛返して爾後、駸々として、經濟上の焦點たるの勢を大成し、最近の歐洲戰爭に及んで、いよいよ經濟一帶の地は、日本の經濟都とし

てきら〳〵して居る。

十五

關東は『理想的』にして、關西は『實際的』である。理想的の精神の焦點は東京で、これに對する實際的の精神の焦點は卽ち大阪である。試に、女を見よ。天稟の容顏は如何とも爲し難いが、東京女の後姿が佳いといふのは、則ち理想的の氣分の表現として見るべきである。

劇の舞臺の上で、少しく關東、關西を對照して見よう。江戶の歌舞伎は夢幻的であり、大阪のは寫實的であつた。團十郎の『暫』は江戶歌舞伎を象徵するもので、大阪には此の如き夢幻的たものは無い。東京役者と大阪役者との藝風を一見すれば明瞭である。大阪のは何處までも寫生的で、東京のは印象的である。その飽くまで寫生的であるのを、東京人は大阪の臭味だといふ。臭味といふのは、餘りに技巧的に流れるのをいふので、大阪の技巧的に對照して、東京のは藝術的といはれよう。團十郎の藝と、仁左衞門とを思ひ合はすれば、後者の臭味が引立てゝ見える。これほどの名優を引出すまでも無く、一般的にそれである。餘りに寫生的、技巧的になるから、細かい、拘泥する、形に捕はれる。形を描き過ぎる。東京には南畫の氣分があり、大阪のは寫眞的になる。大阪歌舞伎の極致に達したものが、故の名人小團次で、江戶歌舞伎の理想は九代目の團十郎であつた。團十郎は小團次の影響を受けて、あれほどの伎藝を練磨し得たと思はれるが、然し、團十郎は徹頭徹尾、江戶歌舞伎の地金である。

大阪歌舞伎は文樂座の操人形から來るから、操人形は、忠實に形を寫すことを努める、それが舞臺の役者に見える。顏面の細かい筋肉を細かく動かしたり、口遣ひを細かくしたりするから、操人形ならば、それで可いけれども、人間に移して見ると、それが餘りに神經質らしく見える。女ならばヒステリイらしく見えて、大人物を現はすに適しない。世話物には、よろしく、時代物には、おもしろくない。仁左衞門の藝風を見ると、渡邊崋山や、片桐且元に扮しても、どうも一世の人物らしくは見えない、顏面、手足の技巧は、うまいに相違無いが、腹藝が無い。團十郎が景淸に扮して、唯だノサリ〳〵とあるいて居るだけで、萬夫不當の勇士と思はれるとか、チーッと坐はつて居ても流石に大石內藏介らしいと思はせるような腹藝に至つては、こ到底、その面影だも認め難い。仁左衞門の顏面の筋肉は、操人形のように、斷えず動いて居る。然し世話物をやらせると、如何にもうまい。評判だけの價値はあると思ふことがある。

十六

關西は實際的。寫實的であるから、活歴役者も早く出來た。新俳優の本を出したのも大阪である。

活歴に於て、泰斗とせらるゝ尾上菊之助。先代菊五郎の門人だともいふし、能くは分らぬともいふ。それから市川延一郎。雁次郎の門下から中村成太郎その外、嵐市太郎、立女形の片岡長正郎の名は、活歴を占領して居る。東京の新俳優から、活歴に多く投じたが、大阪に比べると、立ち後れである。大阪は何でも早い。事實に現はすことが早い。

新劇の起因に溯つて考へると、明治の初年、歐洲の文明の風が吹き込んで、舞臺の上に、「散切もの」といふものが現はれた。新聞小説、若くは新聞の三面記事を、寫實的に脚色したもので、散髪頭で出て來るから、散髪ものといつた。明治七年頃梅屋敷妾のせり市といふやうな表題で、團十郎、彦三郎、宗十郎等が演つたのは、斬新を以て東京人を驚かしたが、實は散髪ものは、大阪が先鞭である。新修開化當時尖の表題で、右團次が巡査や、女や、書生の早替を演つて見せたのは、明治六年の事で、脚本の作者は勝能進であつた。勝諺蔵の父である。その後、たしか九州、柳川邊であつたか、小學教員の岡本二といふのが百姓末次郎の妻なみのと關係して、夫を殺し、男女ともに死刑に處せられたといふ新聞記事が世間の評判になつたとき、速かに、これを組合せたもの表題で、十二月に上つた。實東京は後藤の名を以て、東京の舞臺に上つたのは、それから稍後の事である。明治十四年頃、大阪の勝能進が作つた明治開化夜嵐の脚本を以て上場された天下の糸平と小學教員とが佛國西語の兵營の談り合ひをするといふ筋は、關東の出來事であるに係らず、早く大阪で芝居になつた。新劇の實現に就ては、理想的の東京は、實際的の大阪に一歩後れて進んで來た。

十七

脚本は河竹默阿彌が出て、東京の天下になつたが、脚本の發達は、元來大阪の方が早かつた。そして同じ種を遣つても、關東、關西と、その趣向を異にして、大阪の寫實的、技巧的、東京の夢幻的、藝術的が脚本の上に現はれて居る。

大阪の脚本は、盲進的に寫實的に進んで來た。團十郎の寫實とか、活歴などいふものは、大阪に比すれば餘程遅そかつた。寧ろ今日から見れば突飛な位に早く新らしい寫實を試みた。大阪脚本の泰斗たる並木正三の作に、入間詞大名賢氣といふがある。入間は入間川、鮎が名物、入間詞といふは、意味が逆になる詞、例へば膝栗毛に見えた「無へもしねヱ」とあるは「ありもしねヱ」といふ事、それは、武王が右に亂臣十人ありといつて、亂臣は治臣であると解釋されて居るが、それ等も入間詞と

いふべきであろう、入側詞は在郷詞である。此の脚本の中に、紀州侯かの行列が出るが、行列の馬を、特に、生馬を出して喝采を博した。然るに、生馬であるから小便したかで、生馬を出すことは中止になつたが、兎に角、寫實では新らしい試であつた。

日本民族の海外發展の精神もしくは國際關係のロウマンスを脚色したものには、關東では鶴屋南北の「天竺徳兵衞」は有名なものであるが、大阪には、「祇園祭禮信仰記」が秀吉の大陸經營の雄圖を脚色したものである。秀吉が松下嘉平治の部下に屬したところから、その雄圖を夢想したといふ筋書で、背景に大陸を見せる。それ等よりも逆に、一頭地を抜いたのは、並木五瓶の作であつたと思ふ。三千世界商往來といふのは、初代歌右衞門に書き卸ろしたもので、上司金右衞門といふ與高の通詞が和蘭人に絡むといふすじである。序幕に、朝鮮、支那、西班牙、露西亞、和蘭人等、いろ／＼の外國人が出て來て、椅子、テーブルを舞臺に持出すといふ術幕に突飛なハイカラ劇である。舞臺に外國人が出るのは、大阪が嚆矢である。

國際關係には國姓爺の和藤内が、早く出來て、それからズーツト後、十一代將軍の頃に、小國姓爺ともいふべき對州の朝鮮通詞鈴木傳藏といふ者が、朝鮮人と長崎の女郎との間に出來た子で、實父の仇たる朝鮮官吏を、大阪の貢使館で殺害したといふ事件があつた。脚本の好題目である。それを、事實のあつた七日目に、大阪で「韓人漢文手管始」といふ表題で舞臺に上ぼせた。大阪人の實際的にして素早いこと驚くべきものである。それには敵が齊藤典藏といふ朝鮮人、高雄太夫といふ女郎、種一文字の鑓り探し、例に由つて型に嵌まつたすじ書はあるが、仇討の場所は國分寺、本願寺の別院を作りかへたのである。敵役は通詞であるが、申合はせて朝鮮服を着けたところを仇討されるので、朝鮮服を以て朝鮮人といふ事をしらせる趣向である。此の際物の脚本は、國際關係から、直ちに興行を停止されたが、その後、世話料理鱸庖刀の表題を以て、名目を改めて、江戸の舞臺にも上ぼせた。

素早いといへば伊勢音頭の福岡貢は、事件後、直ぐに脚本が出來て、京都の舞臺に上ぼせた。それと二三日の差を以て、同じく福岡貢の脚本が別に出來て、同じく京都で、對抗して、上場し、後の方が脚色は面白いようであるが、開場の二三日の差が決勝に爲つて、前の伊勢音頭の方が遂に一世に流行するに至つた。劇の實際的で敏捷なるに於て、古來、關西は、つねに關東を制して居た。

舊の興行人として、守田勘彌、田村成義を以て、松竹に對照すると、前者は、やはり夢幻的である。田村の話術は藝術的であるが、その仕事振は、松竹の打算的なると違う。

大阪の脚本作者の權威たる並木五瓶の父正三は、流行に脚本作者たる丈けの洒落と襟度とを、その最期に見せた。彼の命、いよ〳〵旦夕に迫まつたとき、多くの役者が枕頭に集まつて居た。中村歌七が、いよ〳〵あなたも此度は、あきらめて下さいと言ふて聞かすと、それまで目を閉ぢて居た正三が、忽ち目を開いて、南無三寶、南無三寶といつた。そして辭世を口吟して、筆記をさせた。辭世の歌は、死ぬると見せて、すぐ生き戻そのに、自分は、なぜそうならぬかといふ意味である。劇を生命とした人の洒落である。

南無三寶の一句が痛快だ。これに對して江戸の鶴屋南北も亦た、その最期に、徹底したる脚本作者の襟度を見せた。彼は、その死後に開封すべきことを命じて、一篇の脚本を遺こした。開いて見ると、寂光門松後萬歳といふ脚本で、最期の引導の場を脚色した一幕物で、それで全く送葬を營むように頼んだものであつた。自分の送葬を一幕物にするといふのは頗る振つて居る。十返舍一九が、死後に火葬するに及び、棺の中から突然、火光が迸つて送葬者を驚かした。それは密かに死出の衣の中に、花火を仕込んでをいたといふ話がある。なるほど非凡の作者らしくはあるが、脚本の一幕物の方が興味が深い。その上に、南北は、更に、一周忌の脚本の一幕物をも遺こした。それは團十郎の「暫」に擬したもので、額に三角の紙を當てた亡者が花道から出て來て、暫らく、暫らくと蘇生をするといふ筋書がある。

東西の脚本作者は、ともに徹底したる生涯であつた。最期の趣向は、南北の方が大仕掛けであるが、正三が南無三寶の一言は、一世の名優をして脚本作者の最期の藝を演ぜしむるとも、こんな名句は出まいと思ふ。正三の最期そのものが、脚本の一幕物になる。

十九

男は氣で持つといふ江戸兒の意氣が、役者に依つて舞臺の上にも表現されて居る。東西の役者の傳記としては、一世に人氣のあつた阪東彦三郎と、澤村田之助とには單行本があつて、阪東彦三俊一流と田之助晩華紀といふ。その田之助は早熟の天才で、その妙技は今に喧傳されて居るが、彼は、全く、きかぬ氣の江戸兒で、氣を持つて貫ぬきて、舞臺で喧嘩を度々した。町奴が役者になつたようなのが、田之助である。田之助は今の宗十郎の叔父に當るであらう。女形の名人である

る。年僅に十六にして、安政六年、江戸歌舞伎の立女形になつた。古今稀に見る夙成の才である。彼の得意は、大蛇のお芳、きられお富、紅皿缺皿、笠森おせん、おしづ禮三、鬼神お松、若菜姫等で、判斷可ならざるは無きが、しかし毒婦か、勇婦かいづれ所謂伏艶ものを得意とするのを見ても、彼の人物は想見される。彼は極めて自我の強い性格で、二十代で、早く既に骨疽にかゝつて、遂に兩足を切斷し、舞臺の孫臏であつた。それでも田之助といへば、諸方から引張凧になつたほどの人氣があつた。兩足の無い女形で舞臺に出た。それが後に、骨疽が進んで兩手をも切斷して仕舞つた後も、胴と顏とばかりで、舞臺に上つた。手も足も要らずにする藝は、極めて範圍の狹いものたるは言ふまでも無い。それでも一世の人氣を負ふた。胴ばかりになつてから大阪の舞臺に運ばれて、舞臺の上で、大阪の名優中村宗十郎と喧嘩したほどの意氣があつた。

中村宗十郎は、一代役者である。素人から役者になつたので、維新後に、舞臺を止めて、一時、呉服屋の亭主になつて居た。それが再び舞臺に立つに及び、田之助と一座した、胴ばかりの田之助に附合ふたのである。その役割は、宗十郎が旦那で田之助が妾か何かで、舟中で釣を垂れるとき、田之助の臺詞が尋常で無く、語氣を强めて、故さらに、旦那の薄野呂たるを罵つて、宗十郎に毒づいた。藝が刎ねて、宗十郎は病と稱して休場を申出でた。仲裁が入つて、無事に濟んで和解したが、宗十郎が、胴ばかりの名優に附合ふ爲に、わざ〱引張り出されたのを、田之助ほどの天才から見れば、凡骨に見えたかも知れぬが、兎も角、當時の名優を、顏と口ばかりの女形として、毒附くといふは、如何に意地張りの强かつたかを驚く。田之助の沒年は僅に三十五。舞臺生活の半分は、足無し、手無しであつた。あれほどの天才は再び出るかもしれぬが、あれほどの意地張は、江戸兒といへども、再生を期しがたからう。

二十

上方の「にはか」に對比すべきものは關東には無い。喜劇は關西の占有に歸して居る。鶴屋團十郎及び曾我の家十郎、五郎など、東京の喜劇を占領するの慨がある。關東にも茶番狂言があるが、喜劇として低級なるもので、關西の喜劇に比敵するわけに行かぬ。江戸の遊人は、茶番には隨分、凝つたものらしく、三俗文學の中には、茶番の趣味が多く採取せられ、茶番に關する草雙紙も澤山ある。

關東人は、喜劇の趣味は低くかつた。馬鹿囃子、ヒヨツトコなどを見ると、如何にも原始的であると思ふ。上方の「にはか」は劇として發達し、關東の茶番や、馬鹿囃子は、落語的の座敷藝

若しくはおどけの滑稽なるもの等の除外の上に成立つもので、未だ劇といふ事は出來ぬ。關東の文化が、關西よりも新らしいといふ事が、滑稽の藝術的趣味の發達の後れて居るといふ一の要件でもあらう。關西洒脫い才は、元來、關東人、關西人に及ばず。しかしにはかにはレフアインされたくすぐりがあり、馬鹿囃子には野味が漂ふて居る。洗練されたのが上方人で、野味が關東人に附纏ふて居る。菜花の咲き匂ふ上方の平原と、ケヤキの森が蒼々として聳ゆる、武藏野との氣分の相違は、にはかと馬鹿囃子とに現はれる。

女役者は東西ともにあるが、伎藝を以て見れば、近來に於て久米八が東西に獨歩した。あれほどの技巧は得難い。久米八は歌舞伎の女役者として最後の光で、また今日までに輩出したる第一人であつた。彼女は關東の代表的である。自らも、女團州を以て任じて居た。技巧より見て、あれほど團十郎に酷似したものは無く、海賊船の甲板に、銑を突いて月を仰ぎ見る彼女の毛剃九右衛門は、今の吉右衛門よりも立派なくらゐであつた。女だてらに、團十郎を張つたところが、關東的たる所以である。

新女優には須磨子、多く言ふまでも無い。その技巧は暫らく措き、舞臺度胸の善い事、意地張の強い事、等に於て、須磨子は一女の團之助」であつたといひ得る。彼女の言ふには、その人格の表現である。彼女が新女優に群を抜いた所以も、その[illegible]その技巧よりも、その人格の力であつた。久米八も頭の意地張であたように伺はれる。技巧の點に於ては、須磨子は久米八の壘を摩するを得なかつた。しかし久米八の意地張は、その技巧に現はれ、須磨子の意地張は、その態度に現はれた。此の二つの新舊女優が東西に雄視するに至つたのは、胸中に磅礴する關東兒の意氣が然らしめたのである。

女優のみならず、東西の役者を對照して、一般的に言へば、こ關西の役者は技巧に富んで居るといひ得る。新俳優の開祖川上音次郎の如きも、大阪の卯三郎に得るところが少くなかつたと聞いた。新俳優が旗を擧げたときの、活潑なる立廻りなどは、東京の故左團次などもキビ〳〵して居たが、大阪には、卯三郎また市十郎、今の眼玉などの如き、分科的の技巧を有する者もあつた。吾輩は未だ市十郎を見ない。然れども青年時に聞くところに據れば、彼は、敵役などになつて、大刀を抜き討ちに人を斬つて、向ふを見まはし、刀をツト鞘に投げ込む。滴る血を拭つた刀が、鞘に當てがはないで、スル〳〵とすべり込む。その鮮やかさが敵役を強く引立てゝ見せるといふ話であつた。大阪の役者は、技巧には腐心する。然れども團十郎の如き、蓋世の意氣

を缺く。團十郎までゞなくとも、久米八、須磨子の如く、意地張つて世間を壓倒する者は少い。

二十一

政治の中心たる關東は理想的、東京は理想の府である。經濟の中心たる上方、「實際的」の府は大阪である。政治は理想的であらねばならぬ。政治が實務的に流れては政治が低くなる、日新の國民を導くを得ない。理想的でなければ新らしくない。新に非れば人心を引いてゆくことを得ず。上方は經濟の府たるが故に經濟は實際的でなければならず、古くして堅くなければならぬ。閉からざれば實力を培養することを得ない。理想は高く上に伸び、經濟は低く下に根を持たなければならぬ。

理想的たるが故に、藝術的になる。實際的であるが故に、事務的になる。理想的は「雅」に進み、實際的は「俗」に流れる。「俗」を離れて政治の理想は存し「俗」に沒頭して經濟の事務は繫がる。理想的は「空」に馳せ、實際的は「實」に向ふ。理想的は名を好み、實際的は利に奔る。理想的は突飛にして、實際的は打算に陷り、打算的は着實である。故に、東京は金が少くて議論が多く、上方は議論が少くて、金が多い。

讀書は理想であり、書籍は商品である。東京は本を作るところで、大阪は本を賣るところである。本を作るのは、東京が宜しく、本を賣るのは大阪でなければならぬ。東京で作つた本を大阪で廣告して賣る。東京は出版の府で、大阪は賣捌の府である。關西の賣捌法は、到底、關東人の企及す可らざる實際的技巧を有し、これに反して、大阪の製本に、東京と段違に劣る。著作にも製本にも、理想が籠もり、賣捌にも廣告にも、俗務が籠もつて居る。東京では製本が藝術味を帶びなければ氣が濟まず、大阪は、それに無頓着で、多賣と多利とを擇ぶ。東京は先づ看板を懸けてから賣り、大阪は、しもた屋の儘で多く賣つて居るのもある。

今の絵葉書、昔の錦繪、東京は自ら權威である。東京は雜誌の都である。模様、新柄の都である。流行の源泉は、つねに東京から流れ出る。著想は東京人、これを得意とし、大阪人は、實效を收める。東京は花の都で、大阪は果實の都である。名を爭ふは、東京に於てすべく、利を競ふは上方に於てすべし。關東は潺湲として鳴つて、瀾を揚げる水。關西は、默つて湛える深き水。東京は議論が多く理想が多く、新聞が多くて、經濟は大阪に及ばず。大阪の新聞が大を致した所以は、その經濟の力に存する。

關西と關東との氣分の象徴たる、藝術の特色は、年々の文展に遺憾無く現はれて居る。關西が技巧的、關東が理想的。故に、

新らしい試みは、つねに東京が先鞭を著ける。油畫や彫刻が東京に榮えるのは、今日に於ては東京ならざれば榮えるべき餘地が無いのは、東京に非れば「理想」の修鍊場がないからである。大阪の埠頭を見ると、その經濟的實業の充實するを認むべく、東京の丸ノ內、三菱ヶ原は則ち東京が新文明、新理想に、つねに憧憬しつゝある精神の表現である。されば東京は則ち理想府。趣味國なりといふべく、上方が一番儲かるところで、東京が一番おもしろいところである。抑、理想は自由である、平等である。經濟は、その反對である。故に、東京は自由で、平等で、天空海濶である。見るべきものも多く、學ぶべきところも多い。經濟力に特長を有せざるに係らず、但勢力の特に大なる所以である。

關東、關西の境界線及び境界線の變遷を評論するは、また興味に富める一要項である。然れども吾輩、今、郷里に歸省し、朝夕老母と語りて、筆硯の餘裕少し。暫らく他日を期して、玆に擱筆す。最後の一章は自働車に乘るの前、郷友の書齋にて、河鹿を聽きつゝ。

館堂生拜記

ユウトオピア物語（下）

——見れども盡きぬ永劫の夢＊人間共同の長夜の夢——

非篦笥三

第七　無何有郷見聞記

或る友人が私にこんな話をした。——ズッと以前のことであるが、或る夜、數名の人々が、或る處に會合して、盛んに議論したことがある、話題は いよいよ「革命の曉」になつたら、どんなことになるだらう、どんな結果が生れるだらうといふやうなことから、一體、社會が充分に發達を遂げて完全な狀態になつたら、結局どんな狀態のものになるだらうといふやうな問題に落ちて行つて、坐中の面々がそれに就いて各氣焔を吐いたのである。

問題が問題であつたけれども、議論は甘く調和した。當夜集

つた連中は、社交會や討論會には相當に經驗を積んで居るから、よし他人の意見には一々傾聽しないにしても、（それも此の連中には無いことであるが）、とにかく普通の集會であると、何か話題が興味を惹くと、餘程鄭重な集會でも、多勢が先きを爭つて、發言するものであるが、當夜はさういふことはなかつた。集つたのは七人で、私の友人以外の者は、各々黨派を異にして居たが、其中四人は意見こそ區々ではあつても、とにかくに猛烈な無政府主義者であつた。

私の友人の話しに依ると、その友人と最も懇意な一人の男は、最初の間は沈默して居たが、最後になつてソロソロ氣焔を揚げ、終には大々疾呼して、坐中の面々を散々に罵倒したので、一坐の者も喧々と騷ぎ出したが、それもやがて鎭まつて、暫く一坐が白けて來た。

そこで私の友人は、ごく穩かに挨拶をして、一足先に歸ることにして、汽車で郊外の我家へ向つた。車中は蒸暑くて不快であつたが、今夜に限つたことでもないので、すぐ其事は忘れてしまつて、今度は今夜の議論のことが頭の中に浮んで來た。それがやはり不快である。「今に其日が來たらばなあ、ああ、その日にさへなつたらばな。」

彼が獨言を言つて居ると、汽車は郊外の停車場に留つて、そこから彼の住居までは、徒歩で五分の道程である。其家はテエムズ川の岸にあつて、不格好な橋の袂にある。彼は停車場を出ても、まだ不快で、「今に其日になつたならば」と、尙ほ獨言を繰返して居たが、暫く歩くと、あの不快が急に何處へか消えてしまつた。

それは美しい初冬の夜で、冷々とした快い空氣は、汽車での熱さを冷ましてくれた。近頃幾らか西から北へ廻つた風は、空一面に雲を掃つて、唯だ一片か二片の和毛のやうな輕い雲が、滑かに動くのみである。まだ山の端を出たばかりの若い月は、斜めに東の空に懸つて、丁度家を出る旅人のやうに、丈の高い楡の老樹に絡んで、しばし名殘を惜んで居る。友にはこれがロンドンの市外の光景とは思はれない。何處か自分が今までに全く知らないで居たやうな土地へでも行つた心地がする。

彼は直ぐに河邊へ出て、暫くそこを徘つた。低い垣の向うには、折しも滿潮で滔々としたテエムズの川水が、一面に月の光を浴びて、遙か河上のチスウィツクの小島の邊まで、渦や漣など見渡される。いつもの醜い橋などのことは全く心に浮ばなかつたが、おお、そこに河の面に、一列の銀線が横切つて居る、それが例の橋の影だ。

彼が自分の家に歸つて、雨戸を閉めた其時には、心は全く靜

なりて、先刻[illegible]したときに、あれほど熱心に語り合つた、論理や理想は、いや、その議論そのものまでが、跡形もなく、頭の外へ消えてしまつて、今は唯だ一種の快い漠然たる一道の餘韻だけが、革命の騒動などが経つて、平安な日が來るやうな淡い氣分だけが殘つた。

彼は此の快い氣分で、寝床（ベツト）の中へ飛込んで、二分時間ばかりの後には、早くもスヤスヤと眠つて居た。間もなく彼は眼を醒ましたが、氣分は何となく爽かなので、ジッとそれに浸つて居た。やがて一時が打ち、二時が打ち、三時が打つて、又もや再び眠りに落ちたが、それから一時間程たつて、彼は再び眼を醒ますと、そこで不思議な出來事が、彼の一身に降起つた。今その話しをしやうとするのであるが、その友人のいふことには、これはやはり一人稱にして、その友人の友人である此の「私」が、その友人であつたことにして、話しをした方が宜しからう。さうして私も其の友人の氣持に就いては、世界中の誰よりも善く理解して居るのだから、それも便利であらうと思ふ。〔第一章議論と臥床〕

さて私は眼を醒して見ると、何時の間にか夜着を蹴脱いで居る。しかし、それもその筈で、今朝は大層暖かで、太陽は照々として輝いて居る。私は早速飛起きて、急いで顔を洗つて服を着けたが、[illegible]ときのやうに、[illegible]。そこで直（すぐ）に外へ出ると、氣分が一層爽かになつて、清新な空氣の呼吸（こきう）が如何にも甘く感ぜられる。私はよくよく注意して見ると、これはどうしたことだらう。私が昨夜眠つたときには、確かに冬であつたのに、今は河邊の樹々を見ても、何となく夏のやうな具合で、どうも六月の末か、初夏（はつなつ）の朝としか思はれない。

しかしそこにはテエムズ川が、キラキラと日光を反射しながら流れて居る。丁度昨夜月光の下で眺めたときと同じやうに、淺々と滿潮になつて居る。格別場所が變つたのではない。たしかにロンドンの郊外だ。目の前にはおなぢみのテエムスがある。でも私は面喰つた。夏だと此邊には小艇（ボオト）があつて、泳ぎに人々が來るわけだ。尤も今朝はまだ時間が早いから、ピッフインへでも行かなくては。そんなことを思ひながら、ふと見れば私の直側（すぐそば）に、河へ降りる石段があつたので、私はそれを降りて行つた。

そこには果して幾艘かの小艇（ボオト）があつて、その一つには一人の男が乗つて居て、私に向つて會釋したから、私は一言の挨拶もせず、やにはにそれへ飛乗つた。男も私が言ふまでもなく、泳ぎに來たものと合點したか、早速中流へ漕出した。

「おや、今朝は大層水が善く澄んで居るね。」

「さうですか。私は一向氣が付きませんでしたが。それに上汐のときには幾分か水が濁りますからね。」

「フム、干汐のときだつて隨分ひどい泥水ぢやないか。」

男は之には返事をせず、何だか驚いた樣子であつたが、丁度此時中流へ來たので、私は早速服を脫いで、水の中へ飛込んだ。暫く潜つて頭を出すと、丁度目の前には例の橋が見えなくてはならないのに、さあ大變、私はすつかり驚いて、呆氣に取られてゐるうちに、つい手足を動かすことも忘れたので、ズブズブと水の中へ沈んで行つた。私はあわてて浮上ると、今度は側目もふらず眞直に小舟の方へ泳いで行つた。どうも船頭に理由を聞かぬと、甚だ怪しからぬやうな氣がした。最初水から浮上つて、目に映つた光景はどうだ。私はハツと思ふ拍子に、氣慣さもすつかり打忘れた。

私は船頭の手を借りて、急いで小舟へ飛上つた。

「まう泳ぎはおしまひですか、尤も久しく旅行をなさつて、急に水へお入りですから、今は水が冷いでせう。すぐ岸へ付けませうか、それとも朝飯前にプトニイまで行つて入らつしやいますか。」

どうも此の男の言ふことは、ヘマアスミス邊の船頭の言ふとことは餘程調子が變つて居る。

「ちよつと待つくれ、何だか變だよ。」

「畏りました。いえ、何處でも今朝のやうに早いと氣色が宜しうございます。まだ何しろ五時ですから。」

私が非常に驚いたのは、唯だ河邊の光景ばかりではない。第一此の船頭なるものを、善く善く視ると全く不思議。却々立派な青年で、しかも其の顏付の快活で、その眼付の深切なこと。頭の先から足の先まで、如何にも元氣に滿ち滿ちて、此上もなく幸福さうな。さうして其の衣物はと見れば、船頭などとは似てもつかない。十四世紀の風俗畫でも見るやうな、瀟洒とした暗綠色の衣服で、腰には茶色の革帶を締め、その釦金には美しい模樣を刻んだ鋼鐵が使つてある。どう見ても、これは青年紳士だ。洒落に船頭の眞似をして居るのか。多分それに相違ない。とにかく少し話しをして見やう。

「あの岸で、あれは何をして居るのでせう。これがテエムス川だつたら、鮭の網でもすいて居るところでせうが、玆は――」

「さうです。無論あれは鮭の網です。」

「でも、これはテエムス川ではありませんか。」

と言はうと思つたが、暫く躊躇して、もう一度あの橋を見ると、これにも私は驚かされた。如何にも川の上には橋が架つて

居るし、岸の上には家が並んで居るところを見ると、たしかにロンドンには違ひないが、たつた昨夜一晩のうちに、これはまた何といふ變り方だ。年中煙突から氣味の悪い烟ばかり吐いて居る石鹸工場は、何時の間にか何處かへ行つてしまつた。鐵工場も鑄工場も無くなつて、トネエクロフトの方角から鐵槌の響きも聞えない。それから橋はどうかといふと、私はこんな立派な橋は、夢には見たことがあるかも知らんが、實地には無論見たことはない。フロオレンスのポントヴェチヨでも、とてもこれには比較にならない。如何にも見事な石造で、堅固で而も美しい。船は充分の荷物を積んで、自在に此下を通ることが出來る。殊に私の不思議に思つたのは、ロンドンではどんな建物でも、一二年で直ぐ煤けるのに、此の橋は餘り新しくもないのに、一向煤けて居ないことである。

船頭は私が熱心に、しきりに橋に見惚れて居るので、私の思つたことに答へるやうに、「全く美しい橋ですね。これから川下には無論ですが、川上にも此程なのはありませんよ。」

「餘程古いものですか。」私は思はず斯う尋ねた。

「いえ、そんなに古くはありません。開通は二〇〇三年ですから。以前には木の橋だつたのです。」

二〇〇三年と聞いて、私の口は、啞に鍵でも掛けられたやうに、全く口がきけなくなつた。どうもこれには參つた。大變なことに出遭つたに相違ない。しかし下手に口を利くと、益々失態を演ずるばかりだ。そこで私は一旦は斷念をして、今度は兩岸へ眼をやつた。石鹸工場の無くなつた代りに、立派な家ばかり並んで居る。大抵は煉瓦造り、瓦葺きで、それが如何にも心地よげで、何だか其中に住んで居る人間は親切な、いゝ人物でもあるやうだ。家の前には川に臨んで、庭園が次ぎ次ぎに並んで居て色々な花が今を盛りに、爛漫として咲いて居る。何とも言はれぬ花の匂が水を傳つて浮動する。家の後には丈の高い樹木が鬱蒼として茂つて居て、濃緑の影を川に投げつゝ、遥かにプトニイの方まで續いて居る。濁水を挾んで兩岸に烟筒の林立したテエムスとは違つて、さながらゼネワの湖畔のやうだ。

私は思はず、しかも獨言のやうに、大きな聲で斯う叫んだ。

「いや、あれでパアンネルムスが隠れないから善いね。」

こんな心にもないことを、思はず知らず口外して、私はサツと赤面したが、若者もまたそれを見て、半分ほど微笑しかけたので、私はその場を繕ふため、テレ隠しにかう言つた。

「では、岸へ着けておくれ。もう朝飯を食べるから。」

若者は輕く肯くと、勢よく舟の頭を一漕にグルリと岸の方へ向け、見る間に揚場へ漕付けて、私よりも先に陸へ上り、私の

上るのを待つて居る。勿論、他人に盡した勞力に對して當然の報酬を希望するのだらうと思つたから、私は急いで上衣の隱しに手を入れて、どうも紳士に金をやるのも聊か變だとも思ひながら、とにかく「いくら」と尋ねて見た。

若者は怪訝な面持をして「いくら？おつしやるのは、どういふ意味でございます。汐のことでございますか。汐なら、もう間もなく引汐になりますよ。」

私は又もや赤面して、吃りながら尋ねて見た。「どうぞ惡く取つて下さるなよ。甚だ失禮なわけですが、何程差上げましたら善いでせう。何分私は始めてのことで、此の土地の樣子が分りませんし、それに、こちらではどんな金が通用するのか存じませんが。」

かういひながら、私はよく外國人がするやうに、ポケットから金を一摑み摑んで、若者の前へ差出した。

若者は何も怪訝な面持ではあるが、しかし立腹した樣子もなく、珍らしさうな顏付きをして、チッと金を眺めて居る。さては、此男、やつぱり船頭に相違ない。いくら取つてやらうかと考へて居るのだ。いくらでも取れば善いのに。どうも好きな若者だから、多少は多くやつたところが、格別惜しいとは思はない。何なら二三日案內に雇つてやつても善いのだが。

「おつしやるのは、かういふ意味でございますか。私があなたのために骨を折つたから、何か私に特別の報酬を下さらうといふのでせうか。どうか、それなら御免下さい。私は此の河の岸を漕ぐのが仕事ですから、お禮など戴くのはをかしいではありませんか。それに私が戴けば、外の者も戴かなくてはならない。私ばかりが戴くなんて、あんまり義理が惡いではありませんか。」

若者はさもさも私が言ふことを戯談とでも思つたやうに、大聲で快活に打笑つた。私は何だか氣味が惡くなつた。此男、ことによると狂人（きちがひ）だな。どうも健康さうな若者だが。幸、私は泳ぎの名人だから、いさとなればドブンとやるだけだ。

「大層珍らしいお金ですね。そんなに古くはないやうですが、どれもヴイクトリア王朝のものですね。何處かの博物館へ寄附なさつては如何でせう。尤も此處の博物館には、十九世紀のものまで澤山集めてありますが、全く十九世紀の貨幣といつたら、何といふ無格好なんでせう。私はね、貨金細工が好きでしてね。そら、此の尾錠を見て下さい。これは私がズッと以前に自分で細工したのです。」

どうも狂人に相違ない。私はいやな顏をした。すると若者は氣を變へて、如何にも深切さうな樣で、「御免なさい。あんなつ

まらないことを申しまして。私はあなたが何處か外國から來たお方だと思つたものですから。しかし、あなたは此の土地を方々見物なさるのでせう。それでは如何でございませう。私に案内をさせては下さらないでせうか。私が最初にお目にかかつたのですから。」

「それは大きに有りがたう。しかし——」しかし、あなたには相當な報酬を拂はなければなりますまい、と實は言はうとしたのであつたが、私は途中で言葉を變へた。「しかしお仕事を妨げましては。」

「おお、そんなことは構ひません。さうすれば私の代りに船の役をしたいといふ友達は多勢居ります。その一人はヨオクシアイアの織屋ですが、餘暇には數學の研究で、内の仕事ばかりですから、何か外の仕事が欲しいと、丁度探してゐるところです。尤も私は近い内に、河上へ艸刈に行くことになつて居ますが、それは一週間ばかりのことです。ですから私で間に合ふなら、どうかお伴をさせて下さい。私もあなたのお伴をして、方々見物がしたいのです。」

かう深切に出られては、私も無下には斷はれない。すると彼も早速飲込んで、「では、さう定めることにして、その友達を呼びませう。」

青年は銀の角笛を取り出して、それを聲高く吹き鳴らすと、やがて一人の青年が「旅館」の方から駈けて來た。これも同じやうな衣裝で、その色合は淡綠であるが、胸の邊には金色の模様が淡く縫箔してある。前の青年に比較すると、身體は幾分か虚弱と見えて、顏色が少し蒼白ではあるが、やはり快活な面持である。

「やあ、チクさん、お早う。何だね、用事は。」

「ボブさん、大變嬉しいことがあるんだ。そらね、此のお方が旅行して入らしたのさ。そこで僕お願ひして、案内をさせてもらうことにした。だから今朝から舟の役を君に讓ることが出來るんだよ。」

「本當。」ボブと呼ばれた青年は、兩手を握つて跳躍した。しかし私の姿を見ると、忽ち心の喜びを抑へ、至極丁寧な態度になつて、「それはどうも有りがたう。ですけど、これからお出掛けになると、うつかり食事も忘れますよ。私もまだ朝飯前ですから、それでは御一緒に旅館へ行つて、食事をしやうではございませんか。」〔第二章早朝の水泳〕

私は二人よりも數歩おくれて旅館に向つた。それは旅館といふのは、どんな建物かと思つて、それを眺めるためであつた。さうして、その建物は、思はず私を立留らせた。瓦葺の赤煉瓦造

てではあるが、如何にも藝術的で、私は近代の建築に、こんなに氣に入つた様式(スタイル)を見たことがない。

玄關では二十歳頃の婦人が三人出迎へて、交る交る吾々三人と握手したが、その態度容貌が如何にも親しげで、私は何だか旅行から歸つて、親しい友達に迎へられたやうだ。尤も私は三人の婦人が、チラと私の服裝を見て、不思議さうな面持をしたのを瞥見したが。

旅館の室内や庭園の結構も、その外觀に調和して、簡素で、さうして美的で、スツカリ私の氣に入つた。しかし私が最も注目したのは、やはり三人の婦人である。如何にも健康さうな北の體格と、その愉快で深切さうな容貌と、殊に其の衣裳の美しさ。古代と十四世紀とを折衷したやうで、しかし些も模倣したやうな臭味がない。

三人の中でも優れて美しい一人が、あわてて外へ出て行つたが、やがて一輪の薔薇を折つて來て、透明なコップにそれを挿した。此の薔薇が、また私を驚かせた。こんな大輪が、どうして出來たのだらう。

やがて食事の仕度が出來た。それはいづれも質素な材料に、驚くべき料理の手腕が揮はれて居た。殊に私は數種のパンの味の佳さを尊んだ。私はパンを頬張りながら、フト眼を上げて正面を見ると、そこに一面の掲示があつて、次の文字が浮彫にしてある。

> お客さんに申上げます。此の旅館のある地所には、もとハムマスミスの社會主義者の講堂が建つて居りました。その記念に一杯の祝盃を擧げて下さい。
>
> 一九八二年五月

おや。――私はスツカリ顏色を　へて、暫くは物も言へなかつた。――デツクとボウプとは私の驚きを見て取つたが、わざと言葉を紛らせて、私の生れ故郷のことを尋ねた。私がエッピングの附近で生れたと告げると、デツクが言ふには、あの附近に昔は人家が竝んで居たさうだが、一九五五年に家屋が全部取拂はれて、今では森林になつて居るといふ。それでも私は北庭で生れた。

「それでは、あなたはお幾つですか。」

「私は五十六ですが。」

「ヘエエ」

三人の婦人も其處へ來て、私の話を面白さうに聞いて居たが、私が餘り古い話をするので、餘程の老人かと思つたのに、私は五十六歳であつた。

「まあ、隨分お若いのね。それに、どうしてそんなにふけてい

らうしよるの？

一番美しい婦人が尋ねた。

「別にふけては居りませんが。」

「でも、私だつて四十二ですよ。」

四十二？　私はまた二十ぐらゐとばかり思つたのに。

此時一人の老人が入つて来て、唯今娘から聞いたが、大層珍らしい客人がお越しになつたといふから、お話相手を願ひたいといふ。

「それはいけませんよ、ボッフィンさん。此のお方は當分僕のものです。」

「さやうか。もう約束が済んだのか。それでは君の方が済んだら、私が代らせて貰ふとしやう。」

老人はスゴスゴと立去つた。さうしてデックが斯う話つた。

「あれは本名はヘンリ・ジョンソンといふのですが、悪い癖で古い小説を書きますから、ディッケンスの小説の主人公から思付いて、ボッフィンさんと呼ぶのです。尤も懇意な間柄ですからね。―― さて、そこでソロソロ見物のお伴をいたしませうか」

私とデックとボップとは、彼の老人と三人の少女、いや婦人とに見送られて、おお、何といふ美しい馬と車だ。一輛の馬車に打乗つて旅館を出た。〔旅館と朝食〕

馬車は緩々として直に大路へ出た。そこは既に市場の設けた

さうして其の建築は、すべてが奥ゆかしい中世的で、近代的なものとては殆ど一つもない。良(しばら)くして馬車は郊外に出て、或る田舎で留つた。私は一見して、それが市場であることを知つた。様々の品物を陳列した建物が軒を並べ、買物の人々が群集して居た。しかし私の不思議に思つたのは、群衆が一人の例外なしに、富める美しい人々ばかりであつて、よく市場なぞで見る田舎者や貧乏人の見えないことである。

「田舎者は此處へは来ないのですか。」

「いゝえ、大抵此邊の人達ですよ。」

「それから貧乏人(プウアメン)が居ないのは、どうしたのでせう。」

「プウアメンが居ないと申しますと？　病人なぞのことですか。病人なぞは勿論来ませんよ。」〔市場と途上〕

さては此國には昔のやうに、貧乏人なぞといふものは無いのだな。どうしてそんなことになつたのだらう。

「おお、そのわけですか。それならば私より、私の祖父(ぢい)に聴いて下さい。」

デックは再び馬車を駆つて、今度は或る森林へ出た。

「此處はケンシントン公園(ガアデン)と申しましてね。子供の遊場になつて居るのです。尤も何故こんな森林を公園(ガアデン)といふのか存じま

せんか。」

「それは私が知つて居る」。さう私は答へやうとしたが、實際私にわからない。私は此邊が公園であつたことこそ知つて居るが、どうして森林になつて居るのか、不思議でならない。見れば成程六七歳から十六七歳までの少年少女が、多勢嬉々として遊戯して居る。

「あれは此邊の子供ばかりですか」。

「いいえ、随分遠方から通ふのもありますよ。」

「でも毎日學校があるではありませんか。」

「學校？　子供が學校へ行くといふのですか。」

「さうですとも。教育を受けなくてはなりませんからね。」

「おお、教育ですか。ラテン語のエデウセレのことでせう。それなら學校はいらないわけではありませんか。エデウセレとは天性を發揮するといふ意味でせう。ですから子供は學校なぞへやらなくても、勝手に職業も覺えますし、讀み書きも覺えますよ。」

「でも、相當の年頃までに、充分なことを覺えますか。」

「相當の年頃と申しまして、學問は一生の仕事ではありませんか。何時までに覺えてしまふといふことは出來ないでせう。」

私はデックと語合ひながら、——ボッブは仕事のために去つたので、——樹間に時々隠現する、林間の家屋を眺めつゝ、いつしかウエスト・ミンスタ・アベの附近へ出た。

「おお。あれはまだ殘つて居りますね。」

「ええ、建物だけは保存してありますが、中にあつたものは、もう殘つて居りません。昔は随分つまらないものばかり陳列してあつたさうですね。」

「議事堂も殘つて居りますが……」

「あそこでも昔は随分滑稽な喜劇をやつたものですとね。」〔森林と子供〕

私達はグレエロックスといふ老人夫婦の家に馬車を預けて、ピカデリの市場へ歩いた。そこも以前とは全く變つて居た。昔のやうな不快な建物や愚劣な商品は無くなつて、欲しと思ふ品物ばかりが陳列してあつた。

「何かお求めになりませんか」

「烟草を少し買ひませう。」

私は隠しへ手を入れて、忽ち顔色を青くした。

「何かお忘れ物ですか。それなら少しも心配はありません。無くなる氣間はないのですから。」

烟草屋の店頭には姉弟と見えて、十三歳程の少女と一つほど年少の少年とか、熱心に讀書して居た。私はラタキアを注文し

た。さうしてその煙草は、有るには有つたが、埃が堆く被さつて居た。可憐な店員は、しかし私のために、適當なタバコとパイプとを選んで呉れた。

「お客さんは何方から。」

「私は遠方の者ですよ」私は子供の快活な調子に乘せられて思はずも虛言をいつた。

「では祝盃を上げませうね。」

二人は葡萄酒を持出して、私のために祝つて呉れた。彼等は——すべて此國の少年少女は、快活で、勤勉で、懶惰といふことを知らない。唯だ昔は懶惰といふ珍らしい病氣があつたといふことを、老人から聞いて知つて居るばかりである。〔少しの買物〕

老人夫婦から馬車を受取るとき、老爺だけは一緒に馬車に乘つて、暫く様々な話しをしたが、途中でまた吾々と分れた。彼は逞ましい老人で、その健康は壯者を凌ぐ程であつた。

「一體あれで幾くつでせう。」

「九十ぐらゐでせうね。」〔一人の老友〕

「おお、もう正午になりました。僕の祖父の宅へ寄つて、晝食をいたしませう。」

祖父さんの宅は實に貧弱な見すぼらしいもので、唯だ五月の美しい花の鉢が、所々に配置せられてあるので、頗る快いものであつた。

「これは、ようこそ。大層遠方からお越しの、珍らしいお方のさうですが、一體お國はどちらですか。」

「もとからイギリスに住んで居たのですが、昨日また歸つて參りまして、昨夜はヘムマスミスの旅館に宿りました。」

老人は今年百五だといふが、耳も目も達者で、一向老衰しては居ない。色々話しの始まつたところに、一人の年若い美人が入つて來て、デックの姿を見ると、薔薇のやうに頰を赤くした。彼女はデックの戀人だと見えて、老人は二人をさしまねいて、そこから席を外させた。さうして私の服裝から、昔のことを想ひ出したやうに、老人がまだ少年であつた頃、——百年も前のことを語り出した。

「どうです、それ此邊にある私の宅の道具類は、大抵百年も前の代物ですが、近頃の出來に比べると、何といふ無格好でせう。しかし私は頑然で、親爺の買入れた品物を、今だに使つて居るのです。」

しかし私は話頭を轉じて、唯今の婦人はデックさんの許嫁ですかと尋ねた。

「いや、彼等は永いこと結婚して居ましたが、今度また改めて

結婚するさうです。」

何といふ不思議な返事だらう。しかし老人の說明を聞くと益々不思議である。「二人は極く若い時に結婚して、二年ほど同棲したが、其内クララ――それは婦人の名であるが、――は他に戀人が出來たので、其人と結婚しましたが、今日歸つて參りまして、デックさんはどうだと申しますから、デックはまだお前を戀して居ると申しましたので………。」

「それで子供は無いのですか。」

「子供は二人ありますが、私の娘のところで育てゝ居りますよ。」

「そんなことをして裁判にでもなりはしませんか。」

「昔ならば裁判沙汰といふところですが、何分今日では私有財產といふものが無くなつたので、萬事が淡泊ですから、裁判騷ぎも起りませんよ。」(愛に就いて)

私とハムモンド老人とは、それからそれへと話を進めた。まづ戀愛のことから、教育のことに移つて、老人は自由戀愛と自然教育とに就いて氣焰を吐き、その次ぎには政治の話になつて、昔は議會とか、政府とか、法律とかいふものがあつたが、あれは私有財產といふ制度のあつた結果で、今日はそれがないから、從つて議會もなく、政府もなく、法律もない。それでは惡人をどうするか? あなたは多分尋ねるであらうが、元來人間は先天的に惡人ではないから、會々惡事を働く者があつても、それは畢竟病人であつて、法廷に引渡すよりは醫者に引渡すのが當然、それでも尙ほ惡いことをする人間は、深切にその原因を調査してやる必要がある。………

「それでは、どうして政治をやるのですか。」

「ところが今日では政治といふものはないから、ちよつと說明に困ります。何せよ、今日では人間の思想も生活も、營利主義の時代とは全然一變して居るのですから、富者や野心家が同胞を愚弄するために、さういふ無駄なことはいたしません。政治は人間の天性ですと? 人間の天性とは誰の天性ですか。それは野心家の天性でせうが、人間の天性ではありません。」

「でも共同の仕事は共同でする必要があるではありませんか。」

「さうですとも。ですから今日では大抵のことは、多勢共同でやるのです。しかし共同の利益になることは、何も强制しなくても、自然に共同になるものです。」

「勞働の報酬はどうしますか。」

「勞働の報酬は生活です。普通以上の善いことをしたら? それは神樣のお蔭で創造したのですから、その報酬は神樣のも

のです。」

兎角する中に日暮に近づいたので、吾々四人はブルウムスベレの市場へ行つて、公會食堂で夕食しながら、尚ほ様々の談話に耽つた。さうして過去の百年の間に、どうして此様な變化が起つたかを、詳細に聞知ることが出來た。つまり新らしい思想が起つて、保守主義と爭闘した結果、遂に前者の勝利に歸して、舊時の社會一切の弊源、即ち奴隷制度と特權制度とを全廢した。

その一日は私の生涯に於て最も短い一日であつた。しかし私は翌日も、早朝からデックの案内を受けて、「新社會」を見物した。一日、私はデック夫婦と、さうして私の特別に親しくなつた、エレンといふ文學好きの婦人と四人で、舟を浮べてテエムズを溯つた。私は途中の風景を、言葉を盡して嘆賞した。デツクは何處までも、何處までも、漕いで行つたが、夕方に近づいて舟を捨て、或る田舍の寺へ案内した。其日は此村の祭日で、多くの人々が寺に集つて居た。やがて吾々は其等の人々と卓を並べて食事を始めた。ところが、これはどうしたことか、デツクもクララも、さうしてエレンでさへも、一向私に見向きもしないで、外の人々とのみ樂しげに會話を交換して居るではないか。私は急に孤獨を感じた。さうして孤獨に堪えないで、ソツと席を外して外へ出た。すると私の足は無意識的に田舍道を河邊へ急がせた。

途中で私は一人の男に逢つた。それは見るから氣味の惡い。容貌も衣裳もやつれ果てた、丁度今日の文明を表象したやうな男であつた。私がその男とすれ違ふとき、私はクラクラと眼が眩んで、すべてが暗黒になつてしまつた。

フト氣がついて見ると、私はハムマスミスの自宅の寢臺で、物思ひに耽つて居た。――あれは夢（ドリイム）であつたのであらうか。それとも幻（ヴイジョン）であつたのか。どうも夢とは思はれない。あれほどマザマザと見たのだから。誰でもあんな夢を見たら、やはり幻だと思ふだらう。

　　　　＊

「無何有郷見聞記」は、古來ユウトオピアの中でも、最も詩的な美しい文章ですから、餘り梗概だけを紹介したのでは、甚だ怱率になりますし、それに私は折を見て其の全譯を試みやうと思ひますから、玆には全篇三十二章のうち、最初の半分だけを精しくし、後半は粗く抄譯したのです。また政治や法律や議會に關する部分は「秩序紊亂」に渉ることを虞れて省略しました。

作者ウヰリアム・モオルリスは、イギリスの詩人で、また美術

家で、一八三四年にロンドンで生れ、十三歳にして父を亡ひましたが、家は富裕でありました。初めには建築美術の研究に志し、終には斯道の大家として幾多の建築を設計しました。建築家ロセッチとは青年時代から生涯を通じて親友でした。詩作も青年時代から開始し、種々の詩文を發表しましたが、一八八一年にイギリス社會民主主義同盟が出來た頃には、自由黨を脱して社會主義に入り、同盟の委員に選擧せられ、而も衆望を得て其の牛耳を執り、一時は文學も美術も中止しました。しかるに一八八六年にトラファルガアスクオアの騷動に際して、モオルリスは無政府主義に傾いた急進派と意見が合はなくて、次第に運動から遠ざかり、その美しい夫人と共に、趣味に富んだ安穏な晩年を送りました。

モオルリスは中世主義（メディヴァリズム）の理想家で、その友人であつた詩人スヰンバアンが批評した如く、藝術至上主義の詩人でした。その社會主義も、人道主義から生れたものといふよりは、寧ろその詩歌又は藝術として、彼が歌ひ且つ畫いたものです。詩人は一八九六年に六十三歳で歿しました。

第八　新社會

作者龍溪矢野文雄先生は、大分縣佐伯町の人、安政三年を以て生れ、夙に慶應義塾に學び、イギリスに留學すること數年。歸朝の後は報知新聞記者となり、大隈侯爵を補佐して改進黨の創立に努力し、其後宮内官となり、日清役後特命全權公使として清國北京に駐紮し、また曾て東京錦城中學校及び近事畫報社を創立しました。著作のうち最も有名なのは、「經國美談」、「新社會」「出鱈目の記」の三種です。資性溫雅、容貌秀麗、その性格及び經歷に於て、トマス・モアの面影があります。蓋し近代のサア・トマス・モア、日本のサア・トマス・モアです。

「新社會」が世に出たのは、明治三十五年の夏で、出版旬日にして早く三版を重ねました。當時先生は身を挺して、日本に社會主義の運動を開始せんと決心せられた。しかるに自己身邊の事情もあり、宮内省邊の注意もあつて、暫く躊躇せられた折柄、會々日露戰爭が起り、社會主義の人々が非戰論を高唱するや、官憲の態度が苛刻になつたので、先生も形勢の非なるを見て、素志を放棄せられたといふことです。日本にも終に社會運動の勃興を免かれないとするならば、寧ろ先生のやうな穩健な思想家を指導者に仰ぐこそ、眞に望ましいことであつたのに、返す返すも惜むべきことです。

しかし、とにかく日本からも、近代の五大ユウトオピアン（イギリスのモオルリス、ドイツのヘルツツカ、フランスのカ

[illegible]の一人を出しました。尤も先生の社會は、從來の理想郷と違つて、妻子までも共有にしやうとするやうな、極端な共産主義ではなく、主として生産機關を公有にせんとする、國家社會主義であります。此の傾向は已にベルラミイの回顧錄(バツクワアド)にも現はれて居りますが、「新社會」は更に此點に於て一段の進歩を示して居ります。されば此の「新社會」及び其次に紹介するウエルス氏の「近代的理想社會(モダーン・ユウトオピヤ)」は、古來のユウトオピアよりも實際的で、古來のユウトオピアに對する批評ともなります。但し、實際的であるだけに、ロマンテッシュな風味に乏しく、ユウトオピアとしては低調な憾みのあるのを免がれません。

*

西洋諸國を漫遊して、今しも此の國の都に着き、停車場から程近い、とある公園に入つた二人の旅客は、腰掛(ベンチ)に休息して語り始めた。

「成程、不思議な國だねえ。どうだね、停車場から來る途中も、あの町筋の立派なことは。兩側に立並んで居る建物が實に見事なものだ。どれも、これも、宏壯で、高さまでチヤンと揃つて居る。貧弱な家なぞといふものは、唯の一軒でもないではないか。ロンドン、パリも跣足(はだし)だね。いや、また此の公園の美しいことは[illegible]間に比べると、とても問題にならないではないか。」

「實に見事な公園さね。それに、どうだね、樹だの下を歩いて居る人間も。また此の公園に來る、それ、あの人間の様子を見給へ、一人でも見窄しい身姿(みなり)をした人間は居ないぢやないか。まるでみんな言ひ合せたやうに、愉快さうな顔をして。」

「とにかく、愉快な都だね。しかし今日は祭日か何かで、特別にこんなに賑かなんだらう。毎日こんなわけではないよ。」

「しかし格別祭日らしい様子とても見えないではないか。」

二人は烟草(タバコ)を吸ふことも忘れて、子供か田舎者のやうに、驚異の眼を見張りながら、しきりに喋々して居ると、今しも其處の半日を、公園の樹陰(こかげ)に避りつゝ、散策の快樂を味はつて、家路に就いたのであらう、年の頃七十ばかりと見え、髪も、鬚も、眞白(まつしろ)な、鶴髪童顔の老紳士が、二人の傍を通りかゝつた。旅客の一人は帽子を取つて、慇懃に此の老人に會釋した。

「少々お尋ねいたしますが、今日は何かの祭日で、此様に賑はふのでせうか。」

「いや、さうではないのですが……………。」

老人はつくづくと二人を眺めた。「失禮ぢやがあなた方はどちらから。」

「日本から參りましたのですが、西洋を見物いたしまして、唯今此處へ着きましたところで。」

「ああ、さうですか。あなた方は日本から。それはどうも懷かしい。私も以前には幾度も日本へは行つたことがあります。誠に美しい景色の國だ。近來は大層國が開けて、益々立派になつたさうぢや。私もまた久しぶりで、最近の日本が知りたいと思つて居る所です。どうです、まだお宿をお定めにならないなら、私の宅へお越しになつて、ゆるゆる逗留なすつては。」

「それは有難う存じます。私共は斯らいふ者で。」

二人が差出す名刺を見ると、一人は金尾德太郎、一人は田美野悦藏で、金尾の名刺には何々會社重役などと二つ三つ堂々たる會社の肩書が見える。

*

老人には二人の息子があるが、いづれもそれぞれ別居して、老人は十五六歳の小間使と、下女一人、下男一人を雇つて、至つて、質素な孤獨な生活を送つて居るが、後に奉公人から聞けば、以前には度々議員に選ばれ、今は樞密顧問官として、國家の重職に在るといふ。

金尾、田美野の兩人は、此の老人の深切を喜び、數日此の家に滯在して、此の老人の案内により、此の都の内外を所々方々と見物して、その制度文物のいたく整頓せるに驚き、一々老人の說明を求めた。老人の語るところと二人の問ふところとを綜合すれば、かうである。

二人が此處へ到着した當日は格別祭日ではない。公園が頗る賑かなのも、人々の身裝が整つて、一同愉快さうなのも、此の國では普通のことで、唯だ此の首府だけの現象ではない、國中何處でも同じことである。國民は一般に中學程度以上の教育を受けて居る。農業も工業も商業も、生產事業は國營で、誰でも自由に就職し、各自技倆の等級に應じて、自己の從事する事業の純益を公平に分配せられるから、貧弱な月給や賃銀の奴隷になつて居るのではなく、誰でも相當に生活して、衣食に苦痛を感じない。病者や老人に對しては、一般に國家の經費を以て治療年金を給與する。訴訟とか犯罪とかいふが如き忌はしい現象は極めて稀で、人情は和樂、風俗は淳厚、國中擧つて恐くみな兄弟姉妹の如く、天國極樂と謂ふも溢美でない。

これといふのも此國の制度が善美完全で、國民の生活を安穩ならしめ、弊害の發生すべき餘地がないからであるが、一體、此國で此の制度を斷然採用するに至つたのは、第一に國君が聖明に渡らせられたこと、第二に識者爲政家に先見の明があつたこと、第三には富者資本家が利害の打算に機敏であつたこと、

第四に人民が一般に自主の氣風に富んだこと、此の四つに由來するのであるが、しかしまた一方から言へば、社會、事情が然らしめたので、社會の弊害が累加して、貧者は次第に苦痛を加へ、富者も段々と不安を増し、如何にしても一大改革を國政の根本に加へることが必要になつた。

そもそも從時の社會では、一切の企業經濟を自由競爭に一任した。これは最初の間こそ、個人各自の企業心を自由に發揮せしむべき良法と認められて居たが、生産の方法が進歩して、大量の生産が次第に有利になるに及び、資本の巨大な企業家は、次第に小資本家を壓倒して、富力を獨占するやうになり、生産者と消費者との間、資本家と勞働者との間に、種々の弊害が發出して、社會は益々病的になり、その病弊を防遏するのに、どれほど無用の費用と努力とを浪費しても、之を防止することが出來ない。

そこで之を改革するため色々の意見が現はれたが、最初に此國で採用したのは、勞資共働（コアポレエシャン）、利益分配（プロフィトシエアリング）で、資本家と勞働者とが妥協して、勞働者にも企業利益の幾分を分配することにしたが、資本家の中には、有志の者こそ、此の方法を採用しても、之に贊成しない者もある。しかるに兩者が競爭すると、どうしても前者が不利であるから、出資者は之を回避する。されば此の方法も結局失敗に終つたので、色々と考へた上、斷然たる處置を取ることの必要に迫られたのであつた。此の最後の方法として提案せられたのは區々であつたが、最も有力な提案は即ち左記の三種であつた。

第一、優勝劣敗、弱肉強食は、天地萬物の常法であるから、無用な改革を施さず、自由競爭に放任するか。

第二、社會の貧富を悉く萬人に平均せしめるため、少數富者の資本を奪ひ、之を社會の各員に均分するか。

第三、已往のことは已むを得ずとし、貧富の差別を其儘にし、唯だ將來の生産に對して富者の獨占を禁止するか。

さうして此の三種の中で第一、第二を不當と認め、第三の方法を採用した。その結果として實行したのは、如何なることであるかといふに、個人の所有權を毀損せぬやう注意するといふ方針の下に、まづ個人の所有する土地山林を買上げ、次に各種の工場の固定資本を買收し、次に各種の商店の貯藏商品を買取つた。買收價格は一年の收入と利益配當と賣上純益とを查定して、既往若干年間の平均を以て標準とし、更に將來の盛衰をも參酌して、一割の利益あるものを年六朱の利子に見積り、之に依つて公債の元利を算定し、内國人に限つて所有を許す據置公債を發行し、企業の持主に交付した。

當時此國全體の面積は凡そ五百萬町、その買上價格は一反步平均百圓内外に當り、總額五十億圓であつた。また私有山林の價格は十六億圓、工場の固定資本は二十億圓、商店の貯藏商品は十八億圓、家屋宅地の價格が四十六億圓、合計一百五十億圓に上つた。

斯樣に巨額には上つたけれども、その支拂は公債で、敢て現金を要したのではない。且つ此の公債は國家の都合で、永久に据置くことが出來るから、ただ純益の六朱だけを以前の持主に支拂ふだけで、殘餘の利益は從事者に全部分配することが出來る。さうして之等の企業の利益は、社會の進步發達に連れ、著しく增加するのであるから、實際事業に從事する人々の收入は漸次增加し、公債の利子だけで徒食する人々と次第に富力が平均して來る。また一百五十億圓は如何にも巨額の公債であるが此の買上を躊躇して、一日を弛うするときは、それだけ價格が增進する。故に一日でも早く之を斷行すれば、それだけ利益であるといふので、急速に之を決行した次第であつた。

斯く企業の純益は、六朱を公債の利子に割當て、殘餘を從業者に分配するのであるが、しかし分配は必ずしも平等に均分するのではなく、各人の技能の高下によつて、勞銀に十餘の等級を設け、利益の幾分こそ全員に平等に分配するけれども、殘餘は之等の等級に應じ、また勤勞の多少によつて分配することになつて居るから、決して懶惰を奬勵するとか、競爭を杜絕せしめるとかいふ弊害は起らないのである。

すべて工場の役員は、重役に至るまで、從業者から選擧するが、役員は甚だ少數である。蓋し此國の工場では、專ら製造に從事するのみで、原料の買入とか、製品の販賣とか、すべて取引に亙つたことは、工務省の事務に屬せず、商務省が之を取扱ふからである。即ち商務省は每年の全國の需要を豫算して、之を工務省に通告し、工務省は之に應じて、その製造を全國の工場に對して割當てる。

物品の販賣機關としては、商務省の管下に卸店と賣店との二種があつて、前者は本省に直屬し、後者は町村の自治となし、役員は自治團體に於て之を選擧するのであるが、之は郵便局と同じことで、懸値も掛引も無用であるから、事務は至極簡單である。但し商務省の本省では、物價を査定するために、常に油斷なく海外の市場の景況を觀測して、貿易の懸引に努力する。物價を定めるに、內國限りの關係なれば極めて簡單で事足るが、何分外國貿易があつて、內外の物價が均衡を失ふと、或は內國に必要な物品が入つて來ず、或は內國の品物が過度に國外に流出する。これ即ち商務省の最大努力を必要とする所以であ

る。

銀行事業も商務省の管轄に屬するが、これは頗る簡單である。銀行は國内に唯だ一行、中央銀行があるだけで、私營銀行といふものはなく、各地には中央銀行の支店があるが、その建物でも營業でも、昔のやうに商業取引を補助する機關ではなくなつて、主として爲替送金と貯蓄貯金とを取扱ふに過ぎないから、頗る簡單なものである。

鐵道も非常に發達して、貨物の輸送は盛大であるが、旅客は昔のやうに雜沓しない。これは商業取引のために商人が東奔西走するといふ必要が殆ど皆無になつて、旅客といへば親族故舊を訪問するとか、遊覽のために汽車を利用するに過ぎない。電信、電話、郵便の事務が驚くべく簡單になつたのも、亦た同じ理由からである。

貨幣には紙幣もあり金貨もあつて、銀行は兌換の要求に應ずるが、しかし取引の大部分は切符を以て行はれ、實際貨幣の流通する範圍は頗る狹いのである。

農業には大農主義を採り、三戸乃至五戸を一組となし、共同經營に當らしめるが、怠惰の弊害を豫防するため、原則としては成るべく少數の家族を一組とすることにしてある。しかし肥料の供給が充分であるのと、政府が絶えず新式の農具を貸與することにより、收穫は甚だ豐富であつて、而も農民が安樂である。

都會は中央の首府に限らず、地方の都會に至るまで、一切の設備が完整して、教育機關、娛樂機關、共同食堂、衞生設備、すべて完全になつて居り、都會は便利で愉快であるから、農民でも多くは都會に居住し、毎朝田園に出勤する。勿論、鐵道も郵便も一切無料で利用することが出來る。

此國の住民には大體に於て、公債利子に衣食するのと、公債利子の外に各自適宜の職業によつて收入を得るのと、主として勞働に依賴するのと、やはり三種の階級があるが、奢侈贅澤には特別な重税が賦課してあつて、富者でも決して方度なきことはしない。また貧者でも一定の限度以上の收入は何人でも得られる組織であるから、衣食に困窮するが如きことなく、疾病及び負傷に對しては、相互保險の制度があり、また老者に對しては年金制度が設けてある。されば此國で個人の私有する財產といへば、住宅と公債と預金と什器と、この四種に限るので、食事には共同食堂があり、住宅は間貸になつて居る。尤も個人の嗜好によつて、自身で住宅を建築するのも、食事を自宅で調へるのも、それは各人の自由である。

租税は奢侈税と所得税と海門税との三種であるが、生產も分

當時此國全體の面積は凡そ五百萬町、その買上價格は一反歩平均百圓内外に當り、總額五十億圓であつた。また私有山林の價格は十六億圓、工場の固定資本は二十億圓、商店の貯藏商品は十八億圓、家屋宅地の價格が四十六億圓、合計一百五十億圓に上つた。

斯樣に巨額には上つたけれども、その支拂は公債で、敢て現金を要したのではない。且つ此の公債は國家の都合で、永久に据置くことが出來るから、ただ純益の六朱だけを以前の持主に支拂ふだけで、殘餘の利益は從事者に全部分配することが出來る。さうして之等の企業の利益は、社會の進歩發達に連れ、著しく增加するのであるから、實際事業に從事する人々の收入は漸次增加し、公債の利子だけで徒食する人々と次第に富力が平均して來る。また一百五十億圓は如何にも巨額の公債であるが此の買上を躊躇して、一日を弛うするときは、それだけ價格が增進する。故に一日でも早く之を斷行すれは、それだけ利益であるといふので、斷然に之を決行した次第であつた。

斯く企業の純益は、六朱を公債の利子に割當て、殘餘を從業者に分配するのであるが、しかし分配は必ずしも平等に均分するのではなく、各人の技能の高下によつて、勞銀に十餘の等級を設け、利益の幾分こそ全員に平等に分配するけれども、殘餘は之等の等級に應じ、また勤勞の多少によつて分配することになつて居るから、決して懶惰を奬勵するとか、競爭を杜絶せしめるとかいふ弊害は起らないのである。

すべて工場の役員は、重役に至るまで、從業者から選擧するが、役員は甚だ少數である。蓋し此國の工場では、專ら製造に從事するのみで、原料の買入とか、製品の販賣とか、すべて取引に亘つたことは、工務省の事務に屬せず、商務省が之を取扱ふからである。即ち商務省は毎年の全國の需要を豫算して、之を工務省に通告し、工務省は之に應じて、その製造を全國の工場に割當てる。

物品の販賣機關としては、商務省の管下に卸店と賣店との二種があつて、前者は本省に直屬し、後者は町村の自治となし、役員は自治團體に於て之を選擧するのであるが、之は郵便局と同じことで、懸値も掛引も無用であるから、事務は至極簡單である。但し商務省の本省では、物價を査定するために、常に油斷なく海外の市場の景況を觀測して、貿易の駈引に努力する。物價を定めるに、内國限りの關係なれば極めて簡單で事足るが、何分外國貿易があつて、内外の物價が均衡を失ふと、或は内國に必要な物品が入つて來ず、或は内國の品物が過度に國外に流出する。これ即ち商務省の最大努力を必要とする所以であ

る。

銀行業も商務省の管轄に屬するが、これは頗る簡單である。銀行は國内に唯だ一行、中央銀行があるだけで、私營銀行といふものはなく、各地には中央銀行の支店があるが、その建物でも設備でも、昔のやうに商業取引を補助する機關ではなくなつて、主として爲替送金と貯蓄貯金とを取扱ふに過ぎないから、頗る簡單なものである。

鐵道も非常に發達して、貨物の輸送は盛大であるが、旅客は昔のやうに雜沓しない。これは商業取引のために商人が東奔西走するといふ必要が殆ど皆無になつて、旅客といへば親族故舊を訪問するとか、遊覽のために汽車を利用するに過ぎない。電信、電話、郵便の事務が驚くべく簡單になつたのも、亦た同じ理由からである。

貨幣には紙幣もあり金貨もあつて、銀行は兌換の要求に應ずるが、しかし取引の大部分は切符を以て行はれ、實際貨幣の流通する範圍は頗る狹いのである。

農業には大農主義を採り、三戸乃至五戸を一組となし、共同經營に當らしめるが、怠惰の弊害を豫防するため、原則としては成るべく少數の家族を一組とすることにしてある。しかし肥料の供給が充分であるのと、政府が絶えず新式の機具を貸與することにより、[illegible]る。

都會は中央の首府に限らず、地方の都會に至るまで、一切の設備が完整して、教育機關、娛樂機關、共同食堂、衞生設備、すべて完全になつて居り、都會は便利で愉快であるから、農民でも多くは都會に居住し、毎朝田園に出張する。勿論、鐵道も郵便も一切無料で利用することが出來る。

此國の住民には大體に於て、公債利子に衣食するのと、公債利子の外に各自適宜の職業によつて收入を得るのと、主として勞働に依賴するのと、やはり三種の階級があるが、奢侈贅澤には特別な重税が賦課してあつて、富者でも決して方度なきことはしない。また貧者でも一定の限度以上の收入は何人でも得られる組織であるから、衣食に困窮するが如きことなく、疾病及び負傷に對しては、相互保險の制度があり、また老者に對して年金制度が設けてある。されば此國で個人の私有する財産といへば、住宅と公債と預金と什器と、この四種に限るので、食事には共同食堂があり、住宅は國營になつて居る。尤も個人の嗜好によつて、自身で住宅を建築するのも、食事を自宅で調へるのも、それは各人の自由である。

租税は奢侈税と所得税と海關税との三種であるが、生産も分

配も貿易も、すべて公營であるから、脫税の憂ひなく、租税の賦課、徵收も、精確で而も簡易である。

行政組織も簡單である。一口、此國は共和國であるかの如く思はれやうが、實は立憲王國であつて、君主と人民との關係は頗る親密を極めて居る。蓋し此樣な政體にして、君主と人民との關係は一層親密であり得るのだ。裁判や法律の簡單で、訴訟の甚だ少いことは、前に一言した如くであるが、其他の政務も簡單で、中央に中央政府があり、地方に自治團體がある。この自治團體は都市及び町村であつて、郡縣はなく、町村が政府に直接する。

中央には十二の官省があつて、地方には其の支廳がある。議會は代議と直議とを兼ね、卽ち七十餘州から一人づゝの議員を選擧し、中央議會に出席させる。その任期は五年であつて、中央議會は常設である。重要な議事を討議する場合には、中央議員の意見を添へて、三日以內、地方議會に討議させる。地方議會は普通選擧で、町村に一々之を設ける。故に國家の重大政務には、國民が殆ど悉く直接に參議するのである。

今年の豫算を一覽するに、中央政府の財政は歲入に於ては貨物取扱益金九億萬圓、酒質收入一億二千五百萬圓、絹物及び奢侈品税一億五千五百萬圓、所得税の內、公債利子所得税二億二千五百萬圓、相續税、貯金税、俸給税合計七千五百萬圓貿易益金三千萬圓、關税收入二千萬圓、總計十五億五千五百萬圓であつて、歲出は經常部に於て、公債利子九億萬圓、宮內省費一千萬圓、外務省費五百萬圓、陸海軍費六千三百萬圓、文部省費一百萬圓、農商務省費二百萬圓、工務省費三百萬圓、遞信省費五十萬圓、大藏省費一百萬圓、內務省費六百五十萬圓、司法省費一百五十萬圓、中央議會費一百萬圓、顧問府費百五十萬圓、合計九億九千八百萬圓、臨時部陸海軍費九千萬圓、教育費三億四千五百萬圓、其他合計五億四千七百萬圓、總計十五億五千五百萬圓。卽ち歲出の最大費目は公債利子の九億萬圓と、教育費の三億四千五百萬圓とであるが、前者は產業益金の中から之を支辨することゝし、租税の大部分は教育費に充當することになつて居る。

教育は勿論公營であつて、學校には下に小學校、中に中學と職業學校、これだけを義務教育とし、其の上に高等學校と分科大學とを置くのである。そうして小學、中學の學生は朝食と晝食とを國家が給與する。高等教育を受ける學生には、衣住すべて公費である。

制度の大略は斯くの如くであるが、かく國家が國民を一般に優遇する結果、人口が濫りに增加する危險を豫防するために、

結婚に一定の制限を設け、女子は十九歳以上、男子は二十六歳以下で、相當の收入を有する者に限り、結婚を許可することになつて居る。

唯だ玆に一つの不滿は、世界で我國だけ斯様な制度を布き、一列國が之に倣はざるがために、我邦でも未だ軍備を撤廢するに至らざることである。蓋し軍備の制限とか廢止とかを行つて、世界の平和を確立するには、列國が協同しなくてはならない。今日平和を促進するため、平和協會なぞがあつて、宗教家などが相當に努力して居るが、結局空論徒議である。僅かに列强の勢力の均衡によつて平和を維持して居るが、一朝此の均勢が破れると、忽ち戰端の開ける危險がある。眞の世界を平和にする唯一の手段は、各國の勞働階級が聯絡して、共同の利害を重んずることである。

●

僅々數日の見聞は、百年にも優つた知識を與へた。これこそ今度の漫遊で得た第一の土産でなくてはならない。二人は深く老人の厚志を謝し、懇意になつた主人を始め、下女下男にも見送られて、今日は此家を立去ることになつた。

「それでは兩君、御機嫌よう。」

老人は背後から聲を掛けた。二人はあわてて振向く途端に、玄關の階段で足を滑らし、アツと一聲叫ぶと思へば、覺めやりし短夜の夢。枕頭には勤勉な置時計がチツクタツクと活動して居る。見れば殘月の時刻である。

「おお、あの老人の挨拶と聞いたは、あれはほととぎすであつたのか。」

いのちにもまさりて惜しくあるものは
見はてぬゆめのさむるなりけり

第九　近代的理想社會

作者ヘルバアト・ウエルス氏は、(一八六六年出生)、現今イギリス文壇の名士で、ボアナアド・シヤオ氏と同じく、フエビアン協會の會員(最近には脫會したとのこと)です。種々の空想小説を書きましたが、近年は論文にも筆を染めます。「神は目に見えない王である」といふ小說は、最近に三浦關造君が日本に紹介するさうですが、イギリスの或る富豪は、此の小說に書かれた理想社會に感心して、アフリカに之を建設するために、全財產を提供したといふことです。

玆に紹介する「近代的理想社會」は小說交りの論文で、その全部を抄譯すると、長くもなり、紛雜にもなりますから、唯だ重要な部分だけを拔萃します。前にも一言した如く、これはユ

ウトオピアであるよりは、寧ろ社會主義に對する批評です。

尚ほウエルス氏は日本の武士制度、サムライの精神を以て最も理想的な根本的なものと信じて居ります。尤もウエルス氏のサムライ論に就いては、他日の機會に之を精しく紹介しやうと思ひます。

＊

（一）理想社會の推理　ダアヰンが進化論を發見した結果、近代の新社會は、もはや舊來の新社會(ユウトオピヤ)の如き一定不動の固定した靜的なものではなくなつて、永久不斷に發達する動的なものでなくてはならなくなつた。昔の新社會では人間が悉く善良で、惡人なぞは滅多に居ない。健康と道德と滿足と幸福とを圓滿に兼備した、理想的な人間が社會に充滿して、何處へ行つても同じこと、何代經つても同じこと。しかし、これでは神樣も大抵退屈してしまふ。いや、神樣ばかりではない、人間でも今日の吾々は、そんな氣樂な夢を見て、それで滿足することは出來ない。早速にも實現の出來るやうな新社會でなくては不滿である。少くとも今日は實現が出來なくても、明日は實現が出來るといふやうな、實際的なものでなくては、畫ける餅も同樣である。從つて新社會を設計するにも、昔のやうな大膽な計畫を立てることは出來ない。古人は理想の絕頂に上つて、これ以上に理想的な社會はないといふやうな、最上の新社會を夢想したのであるが、すべて物事は何によらず、此も一時、彼も一時で、絕對的、永久的な新社會なぞは有るべくもない、やはり相對的、一時的で、唯だ現在の社會に比して、幾分か理想的な社會ならば、新社會といふことが出來る。吾々は先づ此の程度を以て滿足したければならないのである。モオルリスの無何有鄕(ノオフオエヤ)に於ける人間のやうに、人間が完全無缺になるには、前途尚ほ遼遠である。ましてや人間の天性が、果してさういふ狀態まで進化し得べきや疑問である。如何に理想的社會でも、如何に黃金時代でも、時間と空間との制限は受ける。人間の「生きんとする意思」は、ショペンハワアの悲觀した如く、時空によつて束縛せられる。人間の思想は複雜で、色々な衝動に支配せられる。剩へ天災もあれば地變もある。かういふ事情を基礎にして、新社會を設計するのだから、不完全は寧ろ當然である。しかし其の代り吾々の設計する近代の新社會は、決して無何有鄕(ノオフオエア)ではない、やはり現實社會である。

さて、しかしながら、苟も理想の社會といふからには、餘り現實の社會にのみ拘泥してはゐられない。また實際、今日の人間は決して現實の社會に滿足しては居ない。且つ人間といふものは、必ずしも境遇にのみ支配せられて、宿命的、運命的に推

移するものでない。人間には意思の自由がある。元來、家屋でも衣服でも、道路でも運河でも、機械でも工場でも、法律でも習慣でも、文學でも宗敎でも、學校でも軍隊でも、人間が自身で製造したものだから、人間の意思で變更も出來る。プラトオンの理想國でも、モアのユウトオピアでも、ヘウエルの善く似た世界でも、ベルラミイの未來のポストンでも、コムトの西洋共和國でも、ヘルツツカの自由國でも、カベヱのイカリアでも、カムパネラの日の國でも、みな舊來の傳統に囚はれないところに價値がある。人間が自由を自覺して、過去の傳統の桎梏から、自己を解放せんとする、そこに理想の價値がある。

ただ昔の新社會では、從前の因襲をこそ脫却したれ、人間が宛も人形のやうで、暖い血が通つて居ない。人間に個性といふものがない。家屋は如何にも立派だが、宛も兵營などのやうに、どれもこれも同じやうで均台よく、單調に、シムメトリカルに竝んで居る。人間は一樣に健康で、幸福で、美麗ではあるが、甲も乙も同じやうで、まるでヴィクトリア王朝の宮廷の儀式の繪卷のやうで、どうも實物とは想はれない。こんな單調無味な社會には、恐らく大抵の人間は、一月と住んでは居られまい。社會には個人と個人との個性特色といふものがあつてこそ、そこに無限の意味がある。萬物に個性が無くなつたら、宇宙は死滅するであらう。されば吾々の新社會では、個人の個性といふものに、相當の價値を認めなくてはならない。

次には新社會を建設すべき地域を如何にすべきかの問題であるが、これも今では昔のやうに、世界の一隅に某地を選んで、そこに限定するといふことは、出來ない。プラトオンの理想國は兵力で隣國から遮斷した。モアのユウトオピアやベエコンの新アトランチスは、宛も支那や日本のやうに、永い間世界から孤立した。これも近代の新社會には、とても出來ないことである。如何に要塞を堅固にしても、飛行機は自在に飛んで來る。ましてや思想の交通には、國境もなく稅關もない。故に吾々の新社會は、アフリカの中央や、アメリカの南端や、乃至南極北極に建てゝも、世界から孤立することは出來ない。惑星にでも建設するか、さもなければ全世界を舞臺にしなければならないのである。而も人間の住めるやうな惑星ならば、そこにはフジヤマもあれば、ヨコハマもある、やはり地球と同じことだから、結局地球の表面を新社會の地域にして、全世界を包容する大々的新社會を建てなくてはならない。

次にはユウトオピアの言語であるが、これはどうしても全世界に共通なものでなくてはならない。言語は人間を禽獸と區別する一大要素であるのに、同じ人間と人間とが、各々言語を異

にするがために、談話を交換することが出來ず、にらみ合つて居るやうでは、決して理想社會ではない。しからば今後世界語として、最も適當なものは何であるか。エスペラントか、ラ・ランギユ・ビリウか、新ラテン語か、ヲラプウクか、リツトン卿か、大倉比ホエトリイの折衷語か、ウエルビイ女史のシグニフイクか。いづれにせよ、世界共通の言語を創定する以上は、それは飽くまで科學的で、宛も數學の公式の如く精確なものでなくてはならない。しかし前にも述べた如く、近代の理想社會では個性を尊重しなければならない。言語は思想の糧である。しからば言語を極端に人爲を以て統一するのは、個性の自由な發展に有害となりはしないであらうか。されば假に世界共通の言語を必要とするにしても、それは必ずしも科學的乃至人爲的なものではなく、寧ろ各國の言語に對して綜合的なものでなくてはならない。例へばイギリスの言語の如きは、他國の言語を無數に取入れ、一種の綜合國語として發達しつゝある。

次には人々の問題が來る。前述の如く近代の理想國は世界的理想國であるから、從つて其の内部には人種の異同がある。プラトオンの理想國では奴隷制度を認めたが、奴隷でも人種は異なつて居なかつた。しかるに近代の理想國には人種の問題が必然に起る。白色人種、黒色人種、赤色人種、黄色人種、單に皮膚の色だけでも、種々に區別することが出來る。しかし此の問題は甚だ簡短に審議するには餘り重大であるから、別に一章を設けて評論することにするが、唯一言すべきことは、すべての人種が平等に待遇せらるべきものであるといふことである。一體人種の區別なるものは、個人の個性を社會的に、家族から部落へ、民族へと、擴張したに過ぎないものであつて、個人と個人とが皮膚によつて人格を上下すべからざる如く、人種と人種とも同一であるから、各々の人種の傳統なり、思想なり、目的なり、特色なりは、相互に尊重しなければならない。

(二)理想社會と自由　理想社會は自由社會である。故に理想社會に關連して當然第一の問題となるのは「自由」である。今や世界の人類は、祖國の異同を問はずして、相互に寛大な態度を以て、各自の自由を尊重するやうになつた。理想社會は言ふまでもなく、此の精神に基づかなければならない。しかし理想の社會に於ては、今日の此種の自由のみを以て滿足することは出來ない。吾々は更に一歩を進めて、國家と個人との關係に於ける自由の擴張を要求する。

これ個人的自由の觀念は、近代思想を中心として、最も重大なものである。當時の理想社會では、自由は左程重要でなかつた。古人は自由を人間の道徳や幸福とは切離すことの出來な

いものとは考へなかつた。しかるに近代の人間は個性の尊嚴を自覺するに連れて、次第に自由の價値を認め、遂には自由こそ人間の根本生命であることを自覺し、自己の自由を所有せずして、外界の理法に絕對に服從するが如きものは、死物であるといふことを知つた。

しかし人間は孤獨的でなく、社會的動物であるから、社會全體の利害を無視して個人の自由を主張することは出來ない。全世界を支配する專制君主でない限りは、自己と交涉する他人と自己の意思の自由とが一致調和する場合に限つて、吾々の意思は自由である。殊に國家を組織して共同に生活する場合には、自他は相互の權利を以て相互に自由を制裁する。

個人の自由といふものは、決して個人主義の人々が考へるやうなものではない。國家が種々の法律を設けて、個人の自由を制限するのは、必ずしも個人の自由の伸展と矛盾撞着するものではない。法律の簡短な國家に於ても必ずしも法律の複雜な國家より、國民の自由が多くはない。社會主義や共產主義は、制度萬能主義とは言はれるが、奴隸主義とは言はれない。却つて無政府主義の下にこそ自由は確保せられない。例へば國家が法律を以て殺人を禁止するといふことは、果して個人の自由に對して有利であるか有害であるか。

但し自由の[illegible]には「禁止」と「命令」との二種である。卽ち「何々すべからず」と「何々すべし」との二つである。尤も「命令」の一種として「條件」といふ制限がある。卽ち「何々すると何々する。」しかし純粹の命令は條件の附かないものである。是が非でも高壓的に之を強制するのである。例へば社會組織が惡くて、國家も兩親も不良であると、十三歲下の小兒をば工場に送るが如きことをする。禁止は無限の自由から一部だけを選拔して、之を制限するに過ぎない。故に禁止は「制限」として最も善良なものである。吾々の理想社會に於ては、多くの禁止があつても宜しい。しかし命令は成るべく少くし、強制は絕對に排斥すべきである。此書で設計する理想社會でも、すべて此の方針に基づくこととする。

吾々の理想社會では如何なることを禁止すべきか。殺人や強盜の禁止すべきは勿論で、之には誰も異存はあるまい。尤も財產の私有を禁止すれば、強盜の必要は無くなるであらうが、しかし私有は必ずしも禁止すべきものであるか。舊時の理想社會では財產を共有にしたが、之がために個人の個性といふものは、著るしく沒却せられた。これ近代人の到底耐ゆべからざるところである。古代ギリシアの哲學者エムペドクレスが言つた如く、萬物には愛憎の二力が相働く。されば人間を餘りに平等に

統一するといふことは、人性の自然に反する。尤も人間は必ずしも近代人の迷信するほど、私有の觀念の強烈なものではない。ましてや人間は決して孤獨を好むものではない。たとひ孤獨を好んでも、それは自己と相合はない人間との接觸を厭ふだけのことで、自己と相合ふ人間とは成るべく接近することを好む。近代人は餘りに私有の觀念が強烈である。今日ほど私有の觀念の強烈なことは、恐らく空前にして絶後であらう。個人と個人、階級と階級、すべてが私有の觀念を障壁にして、寛容の美徳を失つて居る。人心が險しくなつて居る。彼等の思想が今少しく進歩したら、食事でも、休息でも、娯樂でも、勞働でも、公共的にすることを厭はないであらう。しかし、それは尚ほ未來の問題である。現在の社會から、さういふ社會へ進化する過渡時代の必要としては、種々の私有を許さなくてはならない。例へば住宅の如きものは、各人の嗜好に一任して、劃一主義を取つてはならない。但し住宅や庭園に相當の制限を設けることは必要である。餘りに廣大な邸宅を構へて、公園にも優るやうな庭園を私有するが如きは、決して許すべきことでない。かういふものには、邸宅の廣さとか障壁の高さとかに比例して課税すべきである。

また個性を伸張せしめるためには、世界各國の旅行や移住を自由にし且つ交通や旅館の設備を完全にして、四通八達、實に愉快な世界にしなければならない。それには宜しくベエコンのソロマンの館のやうなものを設立して、研究や發明を奬勵しなくてはならない。旅館や酒場の如きものは、公共の管理に移すこと。尤も禁酒の問題の如きは、必ずしも國家の權力を以て強制すべきものではない、寧ろ個人の自覺によつて、その有害を知らせなければならない。如何なるものを飲むも食ふも、それは各人の自由であるが、しかし酒とかタバコとか、ソオダ水とかレモン水とか、珈琲とか茶とかいふものは、メチニコフ博士の意見によると、すべて腸胃に有害である。

（三）理想社會の經濟　近代の理想國は世界大であるとすると、勞力や貨物の交換には、之が媒介の手段として、一種の貨幣を必要とする。トマス・モアのユウトオピアには金錢といふものがなかつたが、しかし一種の金錢は社會には是非とも必要である。リクルグスのスパルタでは金銀を廢して鐵錢を造つたが、近代の理想社會では、貨幣はやはり金貨である。古來理想鄉の空想家は金錢を敵視するが、金錢を惡用する人間にこそ罪はあるが、金錢そのものに罪はない。殺人を憎んで凶器を處罰する法律はない。金錢は正當に使用さへすれば、人生に有用なものである。殊に文明の社會には必要缺くべからざるものであ

る。金錢は社會の血液で、社會の營養を司るものだ、ただ古來人間は金錢の用途を誤つた。經濟の歴史は即ち是れ金錢惡用の歴史である。金錢は社會の血液であるから、決して一處に停滯してはならない。ベルラミイの想像した未來のボストンでは、金錢が廢止して勞働切符を發行し、トマス・モアのユウトオピア及びカベエのイカリアでは中央倉庫へ貯藏すると、貨物は自由に供給せられる。しかし之等の社會では、決して贈與とか相續とかを許さない。これは自身が勞働せずして、他人の勞働の結果に衣食するのは、丁度他人の道德の精をしやぶるやうなもので、最も卑しむべきことだからである。

しかし金錢の價値を決定するには、從來の方法を踏襲したのでは不完全である。金は標準貨幣としては何よりも優れたものであるが、それでも金產額の多少其他種々の事情によつて動搖を免がれない。これがために一切の取引が多少とも投機の性質を帶びて來る。此の缺點を補ふために、或人は貨幣の標準として有形なものを採用することを廢し、無形な「力」を以てすべしと主張する。この思想は、とにかく靜的でなくして動的であるところの、近代的理想社會には適切なものである。舊社會は有形な「物」を多く所有する人間の支配に屬したが、新社會は寧ろ無形な「力」を多く所有する人間の支配に屬しなければならない。吾らは貨幣價格決定の標準に「物」を以てせずして、「力」を以てすると、その結果は如何。

石炭とか水力とか土地とかいふやうな天然の資源が皆な地方政府の管理經營に移るべきものであることは、極端な個人主義者スペンサアの如きでさへ、社會主義者と一致する。しからば「勞力」は如何。勞力が地方政府の管理に屬するやうになると、各々「金」の代りに「力」を價格の標準に採用することが出來る。ところで、近代的理想社會は世界的であつて、地方政府は即ち「國家」であるから、國家は先づ國民の勞力を國營の事業に供給し、次に世界共通の中央政府の共同事業に供給し、こ次に一般公衆に供給するといふ順序を取る。さうして國家と國家、國家と世界、國家と個人との間の需給の決算には、大規模の簿記を備へ、その計算には「金」を標準にせず「力」を標準にする。

無論新社會には商業は無くなる。各人の私有に屬する以外の共通の貨物の生產及び分配は、すべて勞力を標準にして計算し、國家は前年の生產を限度として、自由に勞働切符を發行する。また新社會には前記の如く交通と移住とが自由であるから、勞力は國境を越えて自由に流通する、從つて勞力の需給は國際に平均する。

斯様に需給の大部分が勞働切符で決濟せられることになれば、無論金貨の流通すべき餘地は甚だ乏しくなる。卽ち結局個人と個人との間に於ける日用の取引に利用せられるに過ぎない。換言すれば、社會全般に於ける貨幣は、單に名目として流通するだけで、金貨そのものは餘り多く通用しないのである。

商業や貿易を全廢するとなると、新社會の經濟學者からは必ず異議が出るであらうが、一體經濟と商賣とを同一のものと考へるのが、彼等の舊式思想であつて、商賣は必ずしも經濟に必要な條件ではない。彼等は交換價値といふことを言ふが、一體交換價値とは何であるか。彼等に取つては、それが解くべからざる謎であるが、それは寧ろ當然である。商賣の意味を究極まで推し進めると、結局商賣とは各自の長處、卽ち個性を交換する意味である。しかるに各人の個性は絕對獨特のもので、價値を測定することの出來ないものであり、何物とも交換の出來ないものである。

新社會の經濟學では、商業取引とか交換價値とかいふやうな、間違つた心理を基礎にして問題を硏究しない。科學の進步によつて增進する人間の物質的生産力を、如何にしたならば一般人類の福祉と一致調和せしむべきか、これが新社會の經濟學の根本問題である。勞力でも物質でも、すべて此の見地から取扱はれ、商賣とか取引とかいふものは、たとひ存在しても經濟の一少部分に屬するに過ぎない。

極端に言へば、新社會には經濟學といふ特殊の科學は存在しない。經濟に關する一切の問題は心理學の範圍に屬することになる。新社會の心理學は、大體二種に區別する。第一は個人の心理を取扱ふもので、これは大體に於て、今日の心理學と同一である。第二は個人と個人との關係を取扱ふもので、小は家族、隣保の關係から、團體、結社、大は政府、國家に至るまで、すべて相互の關係を硏究の對象とする。

舊社會の經濟學は商工の繁榮とか、國富の增進とかすべて眞正な經濟の目的でないものを假定して、其上に立てられたものである。商業は經濟の副業であつて、社會生活の根本要素ではない。價値は最も一般的な需要に對してのみ定めらるべきもので、普通の場合に於ては個人の個性を離れて、物質的に評價することの出來ないものである。しかるに舊派の經濟學者は、此等の事實を看過して、富を交換の標準によつて計算し、金儲を唯一の目的とする個人や團體の集合が社會だと迷想して居る。こんな迷妄俗見を基礎にして、砂上の樓閣を築きながら、愚にもつかぬ術語を製造して、經濟上の「法則」を發見するなどと、僭越不遜な囈語を吐く。しかし近頃ではカアライルやラスキ

ンや社會主義者の努力によつて、吾々は斯樣な迷妄から解放せられた。また新派の經濟學者も、之に刺戟せられて Political economy の代りに Economics といふ文字を使用するやうになつたが、これとても吾々から見れば、五十歩を以て百歩に代へただけのことだ、アダム・スミスを製造しないといふだけのことだ。ポリチカルエコノミイの最大罪惡は、人間各自の個性を無視して、一切の努力を概括してしまふことだ。エコノミックスは、これだけは遠慮するやうになつたが、これも實は概括などをするだけの知力が缺けて居るからで、例へば谷間の霧のやうに、統計學と物理學との中間に介在して、人間の個性を無視するでもなく、尊重するでもなく、漠然として彷徨して居る。

昔のユウトピアは一般に小國であつたから、其中に家族と地方政府と國家との區別を立てる必要を認めなかつた。プラトオンやカムパネラは、共產主義を極端まで採用して、妻子までも共有にしたが、一八四八年から一八七九年に亘つて、アメリカではオネイダの共產社會で、此の思想を實行して見た。これは最初の間は成功したが、子孫の時代になると、各自が個人主義を發揮するので、遂に失敗に終つたのである。トマス・モア及びカベエも財產の絶對共有を主張した。尤もカベエの共產主義は「自由販賣」主義で自己の特製した品物に限つて自己の私有となすことが出來る。モリスの無何有鄕でも之と同じことである。モリス及びベルラミイは、近代の人々であるだけに、餘程個人の區別に重きを置くやうになつた。二十世紀のユウトオピアになると、勢ひ社會主義と個人主義との双方に耳を貸さなくてはならない。双方とも種々なことを提議する。しかし此の二者が相互に反目抗爭するのは、畢竟するに「量」の問題と「質」の問題とを混合するからであつて、二者を超越した高處から大觀すると、此の反爭は無意義である。個人主義は人間を强者の奴隷にし、社會主義は人間を國家の奴隷にする。しかし、これは概念の範圍に於ける現象で、實際に於ては社會主義と個人主義とは抵觸しない。社會主義發達すれば、之に比例して人間の個性も伸張する。國家は國民に衣食を與へ、秩序を與へ、健康を與へるのみではない、各自に個性(イニシアテブ)を與へなければならない、それでこそ國家は靜的でなく、無限に動的であり得るのだ。國家は個人のため、法律は自由のため、世界は個人の經驗を綜合して保持するために存在するのだ。これが近代的理想社會の根本信念と目すべきものである。

しからば近代的理想社會に於ける私有財產は如何なる性質のものか。人間は財產なくしては、自由を享受することが出來な

い。財産は自由の尺度である。しかし個人に必要な財産は少量にして足るものであつて、大量の財産は社會にこそ必要なものではあるけれども、個人には必要なものではない。個人が大量の財産を私有すると、自己の自由を以て他人の自由に脈迫を加へるやうになる。故に理想社會の財産制度では、財産の私有を國民各自の自由と牴觸しない範圍に制限するのは當然であるが、その範圍以内にだて正當に生産したものは、自己が私有することが出來る。從つて之を賣買交換することも出來る。例へば衣服とか、寶石とか、什器とか、書籍とかいふが如きものは勿論住宅の如きものも、之を私有し且つ子孫に相續させて差閊ない。極端な民主主義的社會主義者は之に反對して、さういふことを人間に許すと、人間は他の方面へ注ぐべき精力を割いて、さういふ方面へ多く注ぐといふ弊害を生ずるといふかも知れないが、その心配は殆ど無用である。今日の人間こそ間違つた世界に住んで居るから、さういふ卑しい根性も起し兼ねないが、社會組織が完全になつて、大體衣食には困らぬとなれば、そんなに人間は財産の蓄積に戀々たるべきものではない。

利子とか利潤とかいふものには、相當な限度を設けることは必要であるが、しかし國家の經營に屬しない範圍の事業ならば箇人が會社を組織して、共同投資を行ひ、之によつて利潤を獲げるといふことは、決して禁止すべきことではない。事業を經營するのに、之を個人の經營とせず、多勢の共力を利用し、利害を多勢で分擔するといふことは、近世の一大發明である。されば理想社會に於ても、宜しく此の方法を利用すべしであるが、しかし、理想社會では、後章に述べる如く、子女の教育とか老後の扶助といふことには、相當に國家が注意を施すものであるから、私産を蓄積して子孫に貽すといふ必要は甚だ少い。故に箇人が株劵を所有し、配當に與かることは許すも、其の人が死亡すれば國家に沒收する。蓋し會社經營を許すのは、本來收益が目的ではなく、箇人の力では出來なくて、團體經營を必要とする事業の發達を助長するがためである。即ち人間の個性才能の發揮に便じ、且つ社會に有益な發明や事業の發達を希望するが故である。

そこで理想社會の私有財産といへば、前記の家屋とか什器とかいふが如き第一種の財産と、株劵の如き第二種の財産とで、第一種は相續を許し、第二種は一代限りとする。財産の相續を許すと、たとへ第一種だけでも、年代を累ねるに連れて非常な巨額に上るかも知れぬといふ心配もあるが、此の問題に就ては、後に述べる理想社會の結婚制度に對照して考へると、疑問は氷釋するであらう。若しそれ土地其他天然の資源に至つては悉

く之を公有となし、個人に之を賃貸する。但し賃貸の年限は五十年を出でないことが、將來のために必要であらう。

今日の社會では器械や動力や科學の利用が著しく進歩した。昔の社會では簡短な道具こそあれ、機械とか動力とかといふほどのものはないから、簡短な道具と人力と牛馬とに萬事を依頼したものである。三百年前にベエコンは「新アトランチス」を書いて、知識の有りたけを搾つて、未來に於ける科學や機械の發達を空想したが、之を今日の實際に比較すると、尚ほ且つ遙かに幼稚なものである。プラトオンに至つては、機械が社會組織に至大の影響を與へるであらうとは夢にも想はなかつた。多分彼は人間が奴隷を使用するか、さもなければ自身の額に汗を出さなくては、何物も生産の出來ない運命の下に、永久に局促するものと考へたのであらう。だから彼は政治上又は道德上には色々の發明を工夫したけれども、物質上に何物も發明しやうとはしなかつた。機械が發達する結果として、人間が從來の如く骨を折つて勞働することの必要が段々少くなるだらうといふことを率先して主張したのはカベエである。だからカベエ以前の夢想家は、プラトオンでも、トマス・モアでも、奴隷制度の必要を認め、また勞働が人間に愉快なものであるといふやうに説明したのであるが、しかし實際人間は彼等が想像するほどには、勞働を好むものではない。[illegible]ただ隨意に[illegible]の勞働とに從事するといふなら格別であるが、科學や機械に依頼せず、專ら人力で勞働するとなると、勞働は確かに苦痛である。運動のために馬鈴薯を掘るなら、子供でも喜んで働くが、それをしければ飢餓に迫るといふ場合になつては苦痛である。人間がさういふ狀態に局促する間は、衣食のために闘爭するといふのも、亦已むを得ざる現象である。しかるに今日の社會では、人間がそれほどまで苦勞せずとも、社會に實際必要な生産は出來るやうになつた。骨の折れるといふやうな仕事は殆ど全部を機械に任せても差支ないまでに進歩した。だから昔の奴隷のやうに骨を折つて働くことを一生の專門事業とするやうな特殊の階級は無用である。即ち勞働階級を特設する必要がない。今日尚ほ依然として其の必要が殘存するのは、人間が科學の使命を沒却して、科學と道德とを完全に一致せしめないからである。科學は人間の奴隷として奉仕すべく最も適當であるのに、今日の社會では之に反し、科學が一部の人間を助けて、多數の人間を迫害する。しかし人間の理想としては、即ち理想の社會では勞働の必要といふものは、寧ろ無くなるのが當然である。

(四)理想社會の特徴　プラトオンやカムパネラは幾分か個人の競爭を奬勵するの必要を認めたが、其他の夢想家は之を無視

した。しかし競爭は確かに人生の一大要素である。各人が無限に個性を發揮すればこそ、社會の內容が複雜多端になり、社會の生命が永久無限になる。故に近代の理想社會では、競爭に適當な機會を與へ、之を人道的なものとなすことは、充分努力をするけれども、決して競爭そのものを杜絕せしめるが如きことをしない。

古代の理想社會のやうに、人間が悉く善良で且つ聰明であればよいが、近代の理想社會には馬鹿もあれば、狂人もある、凶惡な人間もあれば酒好な人間もある。斯ういふ社會に有害な濟度の困難な人間を、如何に取扱ふべきであるか。人間の種族を優良にするには、どうしても斯ういふ人間を、社會から陶汰しなければならない。また之れと同時に一面には、優良な人間を獎勵する方法を講ずることも必要である。

自然のまゝに放任して置けば、劣等な人間は自然な優良な人間のために陶汰せらる。しかし人間は禽獸と違つて、不自然の動物である。自然に反抗する動物である。故に人間社會には自然陶汰の作用が同く嚴格に行はれない。従つて人爲の作用を以て、優劣陶汰が嚴正に行はれるやうにしなければならない。即ち適當な競爭を獎勵することは必要である。されば人間は永久に競爭的動物でなくてはならない。道徳と智識との增進によつて、競爭を醇化することは必要であるが、しかし競爭そのものを人生から除外するといふことは、寧ろ有害無益である。

勿論、理想の社會では、劣等な人間を陶汰するにしても、現在の社會に於けるが如き、殘忍な方法は採用しない。競爭に失敗したればとて、禽獸にも劣つた境遇に陷り、衣食のために醜惡な習慣を敢てするが如き、野蠻なことは止めなくてはならない。流石に今日の社會では、文明が相當に進歩した結果、昔のやうに多數の人間が、一時に飢餓のために餓死するといふやうな、無殘な現象はなくなつたが、しかし社會の一部には飢寒のために生命を失ふ人間が少くはない。即ち全般的飢饉は無くなつたが、斷片的飢饉は無くならない。却つて文明に反比例して、不斷に增加しつゝある。今後の理想社會では、之は終局を告げるであらう。苟も人間である以上は、相當な家屋に住み、相當な食物を食ひ、相當な健康を保つことの出來るやうな勞働制度を確立することは必要である。衣食に乏しい者には衣食を與へ、健康を失つた者には健康を與へ、教育に乏しい者には教育を與へ、職業を失つた者には職業を與へ、かくして各人が相當の生計を維持することの出來るやうに、收入の最低限度を定めなくてはならない。即ち國家は國民に競爭の自由を許すと同時に、背後に立つて競爭を監視し、國民を庇護することが必要で

ある。尤も今日の文明國では、或る程度まで斯ういふことを現に實行して居るが、それが甚だ不完全であつて、一面には人口が増加する、一面には文化が向上する、此の現象に隨伴するには、國家は不斷に努力して、保護の程度を進めなくてはならないのに、國家はそれほどの熱心を持たず、厭々ながら申譯に、言はば政府の慈善事業として、之を實行するに過ぎない。しかし國民が職業を要求し、之に對して相當の報酬を要求するのは、國民が社會に相當の貢獻をなし、生活の保持を要求するのであつて、之は寧ろ權利である、政府が此の要求に應ずるのは、決して慈善事業ではない。

しかし國家は國民に對して相當の權力は行使する。例へば自己の才能によつて、獨立の生計を維持する上に、妻子を養ふに足るだけの收入を擧げる者でなくては、結婚することを許さない。けれども妻子も係累もなく、自己一身を養ふに足るだけの收入は、何人にも保障しなければならない。

尤も以上の要求は、國家が適當に保護すれば、自己の才能勞働で自己の生活を維持するだけの能力ある人間に限つてのことで、自力で生活するだけの能力に缺けた低能な人間に就いては不當である。先天的に無能な人間や、先天的に不德な人間は、徒らに社會を妨害する。斯ういふ人間は如何にもして社會から除外しなくてはならない。

しからば理想の社會では此種の人間を如何に處分すべきか。現在の社會では此種の人間を、冷遇するか、投獄するか、しからざれば撲殺するのが、政府の當然の處置であるが、元來社會に不良分子の發生するのも、畢竟するに社會組織の缺陷が原因となつて居るのであるから、斯くの如き殘忍な處置を取るのは考物である。しからば之を如何にすべきか。國家は宜しく然るべき島を選んで、そこへ此種の人間を隔離すべきものである。

次に低能ではなく、相當に才能がありながら、怠惰を好む人間は之を如何に處分すべきか。彼は横着ではあるけれども、決して他人に對しても、また社會に對しても、敢て積極的に惡事を働くのではない。故に低能者や犯罪人と同格に取扱はるべきものではない。近代の理想社會では、人間は平等に教育を受け、また生活は保障せられる、機械は適當に利用せられる。誰でも働かなくてはならぬ代りに、勞働時間は少いし、そんなに苦痛な勞働はなし、誰でも相當な才能と健康とを授けられて居るのだから、それにも拘はらず、懶けやうとするのは、敢て勞働を厭ふからではなく、相當の理由がある場合に限る。場合によつては人間は怠惰に一種特別な高尚な趣味を發見するかも知れない。之をしも制裁し絶對に許容しないのに、人間の自由を

拘束する所以である。故に若し金錢に餘裕があるとか、或は淸貧に甘んずるとか、相當の理由がある場合には、怠惰を許すも差間ない。

但だ之に就いて一考すべきは、自己に適當な職業が無いため、心ならずも、或は之を口實にして、怠惰を敢てする場合である。勿論、理想社會では國家が責任を負担して國民に相當な職業を與へる。また交通が自由であつて、勞働に對する世界の需要が完全に平均して居るから、廣い世界には其人に適當な職業が無いといふやうな場合は稀である。今日の社會でこそ、職業が自己に適すると否とを問はず、容易に地位を捨てることが出來ない。一旦職業を失つたら、再び之を發見することが多くの場合に困難である。理想の社會では之と違つて、全世界に於ける職業口が到處の郵便局の壁の上に掲示せられる。餘程特殊な才能でも、適當な需要を發見するとは比較的容易である。しかし餘りに人口が增加する場合、機械の發達が餘りに急激である場合には、勞力に多少の過剩を生じ、從つて就職に幾分の困難を感じなければならない。さうして第一の場合に對しては、婚姻制度に適當な制裁を設けて、人口の過剩を防げば宜しいのであるが、第二の場合に對しては、さう簡短な方法では濟まない。

一體今日の社會では、經濟に多少の餘裕が出來ると、人口が忽ち增加して、「餘裕」は忽ち不足に變化する。文明の理想としては、人口は餘り增加せず、餘裕のみが增加することを望ましい。されば理想の社會に於ては、人口の增加に適當な調節を施し、經濟に餘裕が出來たならば、一面に於ては勞働の時間又は日數を減少し、一面に於ては更に進んで新しい進歩發達のために、その餘裕を利用するやうにしなければならない。殊に人口の調節に關しては、最も細心周到な注意を拂ふことが必要である。

また理想の社會では、人口の移動、即ち移住や交通を飽くまで自由にしなくてはならない。これは今日の如く國家と國家とが利害を異にする場合には、到底行ふべからざることであるが、しかし今日でも國内では、此のことが立派に行はれつゝある。もし理想の社會が實現せられ、世界の移住交通が自由になると、しかし人口の移動に關して精細な記錄が必要である。そこでパリスは其の附近に中央戸籍局を設置し、人間が生れてから死ぬまで、一人殘らずの異動を一々記錄する。之にはカアド式を應用し、各人から指紋を徴發し、或る地方で或る人間の身元を調査する場合には、此の中央局へ紹介すると、直に指紋の寫眞を添へた、明細な戸籍謄本を送付する。今日世界の人口は

大略十五億であるが、これだけの人數のカアドを整理することは、大英博物館のカアドを整理するのに比較して、必ずしも不可能なことではない。

（九）理想社會の婦人　マルサスの人口論に依れば、人間の制止し難き衝動によつて、一國の人口が増加して、底止するところを知らざれば、社會は益々不良の狀態に趨くことを免がれない。之を自然に放任すれば、人口は極度まで増加し、その結果生存競爭は激烈になつて、強者が弱者を淘汰する。種々な發明や發見によつて、生産が増加しない限り、超過した人口は饑餓を免かれない。從つて此の危險を避けるには、人口の増加に適當な制限を加へることが必要である。されば支那では嬰兒を殺すといふ罪惡が盛んに行はれるといふ。今日でも文明が進歩するに連れて、國家は次第に國民の子女に對する教育の負擔を増加しつゝある。されば國家は國民に干渉して子女の産出に相當の制限を加へるのは寧ろ當然の權利である。しからば理想の社會に於ては、此點に關して如何なる制限を出産の上に加へんとするか。

一部の論者は文明國では寧ろ人々が減退する傾向があるから、之を防ぐために牛馬の如く、人間の繁殖場を特設せよと主張するが、吾々は斯かる愚論に對して一顧だも與へることは出來ない。プラトオンは人口の容數を適當にすべしと主張したが、これは當時の頗る幼稚な生物學的智識から立論したに過ぎないのであつて、ダアヰンの進化論の出た以後の今日に於ては、時代後れの議論である。蓋し國家は國民の全般的利福には注意するけれども、國民各自の個性の發揮は、之を個人各自に依頼しなければならない。故に餘り國家にのみ依頼すれば、國民の個性は沒却せられ、平凡な人間ばかり出來る。

國家は人口を調節するため、國民にして相當の能力を具備し、相當の收入を有し、相當の年齡に達し、相當の健康を有し、惡性の遺傳を有せざるものに限り、結婚することを許すことにし、此の禁令に違反して、野合で嬰兒を私生せしめるものには相當の罰金を課することにする。これは聊か人道を無視したことのやうであるが、文明の進歩するに連れて、人間は此點に注意して、相當に自制を加へる傾向があつて、現にイギリスでは一八四六年以後の五箇年間には、私生兒は總出産の二分二厘を占めたが、一八九〇年以後の五箇年間には一分二厘に減少した。これは必ずしも國民の道德が進歩した結果ではなく、人間の個人意識が發達した結果、自己の快樂を標準にして、出産に相當の自制を加へるからである。僅々五十年間にして斯くの如く顯著な變化を見る。ましてや理想の社會に於ては、個人意

識と社會意識との進歩が一層著しかるべきに於ておや。されば理想の社會に於ては、國家は國民の結婚及び産兒に對しては、之大體に於て前記の程度の制限を加へても決して差閊ない。

次には理想社會に於ける男女の關係であるが、男子と女子とは平等に自由を享受しなければならない。これは獨り女子のためだけではなく、また男子のためでもある。勿論制度の上に於て男女を平等にしても、實際に於て女子が男子に比して經濟の能力が劣等であれば、絕對に平等にはならない。さうして今日では一般に、女子は男子に比較して經濟的能力が劣るものと考へられ、女子は自己の生産した品物を賣る代りに、自己の一身を男子に賣り渡して、百年の苦樂を他人に依る。思ふに男女の能力には、それほど顯著な相異があるのではない。ただ女子には産兒及び育兒といふ大役があつて、これは大臣でも大將でも、男子には出來ない職業である。さうして女子が子を生むのは、獨り夫婦のためのみではなく、また國家のためである。されば國家は婦人に對して特別の待遇を與へることこそ寧ろ當然であつて、例へば相當の才能と健康とを所有しながら、貧乏のために結婚の出來ない婦人、また人の妻となつて子女を有する婦人、また多くの優良な兒女を有する婦人に對して、國家が相當の俸給を與へ、敢て男子と同等に勞働するの必要なからしめたならば、不自然な職業婦人や、可憐な寡婦や、また男子の女子に對する不貞や壓迫や、さういふものは無くなつて、いはゆる婦人問題の大部分は解決せられるであらう。これは理想の社會として當然爲すべきことではあるまいか。

理想社會に於ける結婚問題は、隨分困難な問題であるが、その一大原因は畢竟男女の能力關係に對する解釋が複雜だからである。プラトオンは男女の能力には格別異同はないと主張したが、アリストテレエスは之を批難して、女子は造化の誤作である、女子は男子と小兒又は奴隷との中間に位するものだと言つた。しかしプラトオンもアリストテレエスも、畢竟男女關係に對して、「量」の問題と「質」の問題とを混合して居る。男女の異同は「質」の問題であつて、「量」の問題ではない。前にも一言した如く、質に於ては十人十色であるが、量の問題になると、人間の箇性は數量を以て價値を評定することが出來ないものであるから、量に於ては平等であつて、いづれの箇性も絕對である。

プラトオンは男女を質に於ても量に於ても平等と考へたから、男子と同じく女子にも體操や武術の練習を奨勵した。これは無論誤謬である。しかし女子が男子に比して著しく柔弱であるのは、必ずしも先天的であると言ふべきか。勿論先天的に著

たに於て差異があればこそ、後天的に此の差異が著しく發達したのであるか、此の後天的の發達は果して正當なものと言ふべきか。白人の男子と女子との差別は、白人の女子と黑人の女子との差別よりも遙かに著しい。また同じく白人でも、貴族の娘と百姓の娘とを比較すると、前者は著しく柔弱である。女子は經濟の關係に於て、男子の奴隷の地位に墮ちたから、ひたすら容姿を飾ることによつて、男子の甘心を求めなければならない。婦人が美麗になることは、如何にも望ましいことだ。中世の武士は美人を讃美して、佳人に忠誠を拔んずるのを、男子畢生の名譽とした。(しかも女子は男子の奴隷である)。かくて婦人は孔雀のやうに容色の美を發揮する。男子は之を女王のやうに狂熱的に崇拜する。これは如何にも詩的(ロマンチ)ではあるが、婦人は男子と結婚して、子女を儲けると、容色に至大の影響を來すから、美人は之を悅ばず、結婚は次第に困難になる。女子が容色の美を以て唯一の生命とする間は、男女の關係は自ら不自然、不合理にならざるを得ない。之に反して、女子も男子も、お互に奴隷の地位に立たず、對等の地位に立つならば、たとへば夫婦の間柄でも、朋友の關係に唯だ一歩を進めたといふに過ぎない。さうして、男女の對等は、量よりも質を標準にして、能力の大小如何を問はず、男女は平等と認めなくてはならぬ。從つて女子が經濟的に獨立して能力の不足又は不便を免かれないのに對しては、國家は相當の保護を加へ、之に依つて女子が男子から經濟的に獨立することを容易ならしめなければならない。さすれば婦人は容色によつて男子の甘心を買ふを專業とせず、男子も亦た婦人の虛飾のために收入の過半を割くべき必要もない。勿論國家が國民に干渉するのは一般的な範圍に限るべきものであるから、個々の夫婦の間柄では、夫婦談合の結果として、女子が國家から受けた補助を男子に融通するのも、しないのも、それを虛飾に費さうとも、或は夫婦の收入と支出とを全然別個の會計にしやうとも、それは各人の自由に放任して、敢て國家が國民の家庭の秘密にまで立入る必要はない。國家が結婚に干渉するのは、主として善良な子女を擧げしめ、次代の國民を得んがためであるから、國家は之を標準にして、結婚の資格ある妙齡の婦人に限つて補助を與へ、その子女が相當の年齡に達し、補助の必要なきに及んで、之を滿期とすべきである。

第十　理想社會の價値

古來理想の社會を想像した著作の多いことは、この「物語」の冒頭に於て一言した如くですが、就中以上に紹介したのは、その最も代表的なものです。尚ほ此の外にも、カベエの「イカリア

航海記」、フエネロンの「サレユト航海記」、パットラアの「イイルフオン」、ヘルツカの「自由國」、ハリントンの「一大洋洲」など、いづれも面白いものですが、此の「物語」も大分長くなりましたから、一旦これで終りとします。

言ふまでもなく理想の社會は、即ち理想の社會であつて現實の社會ではありません。ウエルス氏の如く理想の社會を現實の社會と唯だ一歩の距離に引下げるのは、寧ろユウトオピアの墮落です。想像の走せ得られるだけ、人間の想像を逞しうして、理想を高處に置いてこそ、そこに理想の價値があります。現實と妥協するやうな理想は下等な理想です。河上博士の言はれる如く、マアルクス以後の社會主義は、實際的になつた代りに、宗教的でなくなりました。理想は宛も北星の如く、近づくに從つて遠ざかるものでなくてはなりません。

しかし理想の社會とても、必ずしも實現しないとは限りません。マウリス・アダムスがトマス・モアのユウトオピアを批評した言葉に「モアのユウトオピアは何處にも無い、しかしそれが何も道理に合つたものである限りは、遂には何處かにあるやうになる、いな、何處にも有るやうになる。」また近頃社會主義に關する種々の著作を以て有名なジョン・スパルゴが最近（本年三月）に著はした「ボルセヰズム」を讀むと、その言葉に「ユウトオピアを夢想することは容易であるが、之を實現することは困難である、しかし之を夢想することは、必ずしも徒勞でない、それが往々にしてユウトオピアを實現せしめる助けとなる。」

サア・ヘンリ・メイン（一八二二―八八）の古代の制度、法律、習慣に關する著作に依れば、原始の氏族社會では一般に共産主義を實行して居ました。これは如何なる民族にも殆ど共通の現象です。莊子に「昔者、容成氏、大庭氏、伯皇氏、中央氏、栗陸氏、驪畜氏、軒轅氏、赫胥氏、尊盧氏、祝融氏、伏戲氏、神農氏、當是時也、民結繩而用之、甘其食、美其服、樂其俗、安其居、隣國相望、雞犬之音相聞、民至老死、不相往來」。これは支那の氏族時代の社會の實際を描寫したもので、決して寓言ではありません。今日でも未開社會には往々にして氏族時代の遺風が發見せられるといふことは、ピタア・クロポオトキンの「相互扶助論」にも書いてあります。

キリストの初代の使徒も共産主義を實行しました。即ち新約全書使徒行傳（第四章）に「信者はみな心を一にし、意を一にして、誰一人その所有を己が物と云ふことなく、凡べて之を共に有てり。使徒たち大いなる力を以て主イエスの蘇りしことを話し、彼等みな大いなる恵を蒙れり。其中に一人も缺乏者な

かりき。そは地面或は家を有てる者は、それを賣りて其の價を持ち來り、使徒たちの足下に置く、之を各の需に從ひて分け與へしが故なり。レビの族にてクプロに生れしヨセフは、使徒たちに呼ばれてバルナバと謂はる。その意味は慰めの子。此人田畑ありけるが、それを賣りて、その金を持ち來り、使徒たちの足下に置けり」。トルストイの小説「光の中に歩め」は、之を材料に採つたものです。

其後、中世になつても、キリスト教徒は、宗派によつては、初代使徒の精神を繼承して、共産主義を實行しました。社會主義は資本主義に對抗して起つた反對論だとも言はれますが、しかしジァネットの「中世社會主義」によつても、資本主義のまだ發生しない中世にも、共産主義の精神は脉々として動いて居ります。「ケントの狂僧」と呼ばれたジョン・ボオルが、屢々引用した有名な文句に、「アダムが耕し、イヴが織る、そのとき誰か紳士ぞや」(Whanne Adam dalf and Eve span, who was than a gentilman?)。また「アッシシの貧者」と呼ばれた聖フランシスは、すべての私有を放棄して、徹底した生活を送りました。當時商業が漸く勃興して、人間は金儲の味を覺え出した。それゆゑフランシスカンの多數派は、聖人の教條を修正して、富者や金錢を卑しまないといふことにしたが、少數派は之に妥協しない。遂には法王に訴へて裁決を仰ぐことになり、法王は僧正や學者を集めて、之を討論させました。結局、法王は時勢に媚びて、多數派の主張に左袒したけれども、少數派は頑として之に承服せず、飽くまで在來の信仰を固守しました。

十八世紀になると、ロバアト・オウエン、サンシモン、シャル・フウリエ、エチヌ・カベエなど、いはゆる空想的社會主義者が輩出し、その思想を新大陸のアメリカで、實行して見やうといふ人々が續出して、ユウトオピアの實現が一時の流行になりました。モリス・ヒルクイットの「合衆國社會主義史」に依れば、當時アメリカに建設せられた共産社會は左記の四種です。

(一)キリスト教共産社會　これは四種の中で最も古いもので、その最初のものは一七七六年に立てられ、その次のは一八〇四年にドイツのウユルテムベルヒからの移民が建てました。其後一八四四年に立てられたアマナ共産社會は、アメリカの共産社會として最も有力なもので、これもドイツから來たものです。一八一一年に建てられたオネイダ共産社會も有名なものです。しかし之等のものは、元來本國では信仰の自由が得られないために、新大地を求めて移住したので、その共産主義は宗教上の信仰に基づき、何等政治的な意味を持たないものでした。

(二)オウエン派共産社會　オウエンは當時内外に有名な實

家でしたが、自己の經營するニウラナアク工場を中心にして共產社會を計畫しました。その思想を遵奉してアメリカで共產社會を建てたのが、一八二四年以後一八二六年までに五箇に及びました。

(三)フウリエ派共產社會　これはフランスには二箇しか出來ませんでしたが、アメリカでは四十以上に及びました。しかしいづれも數年乃至十二三年しか命脈を保ちませんでした。

(四)イカリア派共產社會　これはカベヱの「イカリア航海記」を遵奉するもので、ロバアト・オウエンが之に贊成し、カベヱが自ら團長になつて、一八四八年に千五百名の「イカリア人」がフランスからアメリカへ渡航しました。これは種々の不幸に遭遇して、遂には四方に離散しましたが、カベヱは生涯アメリカに留つて祖國へ歸らず、またイカリア人は一八九五年まで共產社會の孤壘を固守して居りました。

近頃日本でも武者小路氏等が九州に「新しき村」を建てました。現在では隨分經營が困難だといふことですが、何とかして成功させたいものではありませんか。此外京都府綾部町の大本敎でも、先年共產社會を實現しましたが、これは失敗に終りました。その主唱者であつた海軍機關中佐飯森正芳君の直話によれば、最初會員を募集した場合には、六十家族が立地に應募しました。中には借金を持參した者もあつたさうですが、また相當の財產を投出して來た者も少くなかつたさうです。これは「新しき村」の人々とは違つて、そんなに新しい知識のある人々ではなかつたのでせうが、これでも私有財產を放棄することに就いては、存外未練を持たなかつたといふことです。失敗の主因は、つまらぬことばかりで、たとへば誰が鹽を先に使つたとかいふやうな、些細な感情問題が原因になつて、經營が面白くなくなつたのださうです。

西洋にはフリイメェスンといふ一種の祕密結社がありまして、四海同胞主義を實踐躬行して居ります。會員には暗語があつて、お互に會員だと知ると、骨肉同樣の親切を以てお互に扶け合ふ。イギリスが本場で、ロンドンに本部があります。先年(一九〇七)アメリカで大會を開いた場合には、百萬以上の會員が出席しました。その起原は餘程古く且つ神祕なものと信ぜられて居ります、また實際その起原は分明でないのですが、氏族時代の精神やキリスト敎の主義や中世の組合制度の習慣などが結合したものと想像せられます。現在では世界各國を通じて、此の結社の普及しないところはなく、日本でも先年まで銀座の裏通に「共存同衆」といふ表札が掲げてありました。

要するに、理社想會は空想社會で、現實社會との間には餘程の

界を描きましたが、古來理想社會を空想した人々は、必ずしも之を現實社會に實現しやうとしたのではなく、寧ろ現實社會に對する一種の批評又は諷刺として、之を將へ之を書いたので、その作者の多くは哲學者又は諷刺家です。また現實社會に對する批評又は諷刺としては、決して無價値なものではありません。之を讀んで其の荒唐無稽を笑ふ人も、之を現實社會に比較すれば、現世を何となく醜く思ふでせう。もしさう思はない人があつたら、その人は最も不幸な人です。ユウトオピアを讀んで苦笑しない人は、出師表を讀んで泣かない人と同じく、人にして人にあらずです。

トルストイの言葉に、「社會が（經濟其他の方面から、）最も適當に整頓せられたら、各人が全體の利益を重んじ、全體の幸福を計るがためには、自己を犧牲に供することを惜まない。全體が斯樣な心掛であるならば、各自も全力を社會のために盡すであらう。社會が最も不整頓である場合には、各人は唯だ自分だけのために働き、自分だけのために計る。若しこれが人類一般の狀態で、少くとも家族の間だけでなりとも、人間が相互のために働くといふことがなかつたら、私は人間が一日でも生きて行かれやうとは思はない」。

トルストイは社會主義に反對しました。初代使徒の生活

たに無限の發展を恃みませんでした　蓋しトルストイの意見では、社會主義は科學の進歩を根據とし、初代使徒は同胞的なの精神とするからです。とにかく家庭は理想社會、ユウトオピアの模型です。そこでは多く働く者が、却つて少く働く者の犧牲となることを厭ひません。分配を勞働の多寡に依るか、或は需要の多寡に依るか、さういふ問題は起りません。そこには主義もありません。また運動もありません。ユウトオピアは決して無何有郷（NOWHERE）ではありません、寧ろ無不有郷（EVERYWHERE）です。此の意味に於て吾々は誰でもがユウトオピアの住民です。〔終り〕

對話 無産有識階級の人々

生方敏郎

大久保郊外と云へば、天下にその名の高い小説家である。我葦原の瑞穂の國に於いて米の値段が高いのと、小説家とやら云ふ人々の名の高いのは、今日當り前のことゝして何人も承知してゐるから、今茲に郊外先生が有名なる小説家であると言つたからとて、誰もその豪さ加減に驚く人は無からうと思ふが、併し萬が一にも小説家といふ人間の有名なる名士であることを知らぬ人があるとすると、郊外先生の折角の對話も、唯面白可笑しく聞きなされるに止まり、それでは先生も不滿足に違ひない。何卒もつと意味深長なる對話として考へて頂き度いものだ。その必要上一寸その有名なることを吹聽した次第であるが、文壇六號活字子といふ一種の秘密探偵業家の探知し得たところに依ると、郊外先生の原稿料とやらは、一枚凡そ一圓から二圓迄位のものだ相だ。その一枚といふのは二十行二十字の四百字詰であるから、一字二厘五毛から五厘に過ぎない。之をイギリスの文豪が一語一シリングの稿料を受けたり、アメリカの新聞記者が一行一弗（之れ皆物價暴騰以前、戰爭以前の相場）もいか[illegible]めるのと較べると、實に雲てんばつてんの相違だが、又翻つてつら〳〵考ふるに、郊外先生の稿料と雖も一行にすれば五錢乃至十錢である。一行書いては先生の秘藏息子茶目君の爲めにミルクキヤラメルを買ひ、二行書いては先生の愛妻おかめ子さんの爲めに白粉下を購ふことが出來るのであるから、日本銀行で紙幣を發行する如く、大黒樣が打出の小槌で小判小粒を振り出す如く、どん〳〵發行してさへゐれば、物價暴騰も何のその、米が一粒一圓になるまではまだ一寸間が有り相だから、經濟問題なんかはテンデ考へないでも宜い筈である。大學の書生さんの筆記の速度に依ると、一時間に原稿用紙五枚はラクに書ける相だ。それ故、近頃の印刷職工諸君の要求と同程度の要求を貫徹させて頂けば、一日八時間勞働と見て五八の四十枚、之を雜誌社へ持參してお金に換算すると四十圓乃至八十圓になるのだが、小説家は到底職工諸君の樣な人氣を今日持つてはゐないから一日

の勞働時間八時間制は遵奉されまい。鬼外先生などゝ來ると先づ毎朝午前十一時に起きて、午後一時から机に向ひ翌日の午前三四時頃までは勞働しつゞけてある。即ち一日十四時間若しくは十五時間勞働で、時には徹夜をすることも珍らしくない。而かも悦んで徹夜をするのだ。故に一時間五枚とすれば一日實に七十五枚――七十五圓乃至百五十圓である。即ち一ヶ月の收入二千二百五十圓乃至四千五百圓だ。その中から、原稿用紙、インク、吸取紙の代價、及び萬年筆購入準備積立金等の材料購入費の總額金十圓也を除けば、その一ヶ月の純益金、實に二千二百四十圓乃至四千四百九十圓と成る。だから、小説家の收入は、決して／＼世間で考へる如く、そんなに僅少な額ではないのだ。大屋さんが心配し、親類の奴等共が警戒し、紳識人士が見くびる様な、而して愛讀者諸君が日來から憤慨する様なものではない。少くとも、數字の上からは、是非左う成らなければならない。若し、彼がこれだけの收入を得られないとすれば、それは彼の懶怠の致すところといふより他はない。

誰の惡戯かこんなゴシツプが或新聞の端に六ルビで掲げられた。そして、若し此ゴシツプが苟くも職務に忠實なる收税細民諸君たる人の耳に這入つたが最後、決してそのまゝに打捨てゝは置くまい。早速、一文も多く國庫の收入を増殖する爲めの目的を以て、鬼外先生の家へ過剰利得税を取り立てに向ふであらう。さうなれば、鬼外先生たるもの、貪慾無恥、若し今日の實業家並みであるならば、速かに友人知己先輩は素より、細君おかめ子さん子息茶目君姪子君おべそ嬢等に至るまで、こと／＼く驅り催して名義上の株主たらしめ、門前へ「小説著作株式會社」の大招牌を掲げ、現代お歴々の資本家先輩諸氏の轍に倣ひ、以て、宜しく態よく大いに脱税を敢行す可きところで有らう。

然るに何ぞや。若し本當に收税腰辨君が、此有名なる天下の名士を、漸く探し當てゝ此狹い露路内へ來て見れば、門前の軒燈は、取手の邊に蜘蛛の巣を懸け、下なる溝に渡した板は朽ちて危うげに、そして件の小説著作株式會社の大招牌の代りに、

「主人旅行中に就き、面會絶對に謝絶致候」

といふ木製の小さな札がブラ下つてゐるであらう。

そこで『旅行中なら斷る迄も無く、面會は絶對に出來ない筈だ』と呟きつゝ門を這入つて、尚ほよく／＼見れば玄關の障子に「但し御用のお方は五分の面會にてお免し被下度候」とも書いて貼り出してある。見榮を張つて、五燭の軒燈なぞこそ付いてはゐるもの、玄關に脱ぎ捨てゝある書生下駄やら古ぼけた雨傘等から判斷しても、過剰利得税は措て置いて、最低の所得税すら覺へ相な形勢ではない。

併し、若し、腰辨君が、此處でスツカリヒを投げてしまはずに、根氣よく、郊外先生を攻め立てれば、直に落城する見込がある。それは他でもない。今こそ皆な忘れてゐるが、此春西班牙風邪のやうに流行つた選擧權の要求である。郊外先生もその當時、流行熱に浮かされて、何でも頻りに普通選擧を絶叫してゐた樣子だつた。即ち、ロハで選擧權を得やうといふ注文であるらしかつた。併し、それほど、あんな物が慾しいなら、年に十圓やそこいらの端た金を、その爲めに投じることを惜む彼でもあるまい。彼を落城させる攻め口は此處だ。併し、悲い哉。月給三十圓の腰辨君は、それ或は知識階級に屬する人かは知らねど、まだ恐らく此攻口に氣は付くまい。唯、嵩にかかつて「五百や六百の收入の無いことはない」など丶脅しつけるであらう。さうした日には、もう到底駄目だ。容易に埒は明かない。

だが、今日は同じく見すぼらしい洋服細民ではあるけれども、稅務官でなくして、シンガアミシンの勸誘員が來た。併し彼も、商賣柄、一見してミシンを月賦拂ひに貸し込むことの危險を直覺した。

併し、南無三、溝板を踏んだ時の足音を、旅行中の筈の主人郊外先生に聞かれてしまつた。

「誰です？」

と奧から郊外先生の鋭い聲が叫んだ。

「シンガアミシンの販賣人です」

「そんな物に用はない」

と劍もホロヽに放逐された。

町内の衞生組合も彼を智識階級として對手にせず、角兵衞獅子さへ拔いて通る。先達つても平和克復祝賀會の時、町内でも軒毎にほうづき提灯を吊したが、郊外先生のところだけは仕事師も若い衆も前以て談しに行かなかつたので他家で皆吊してから驚いた位だ。氷川神社のお札配りも、近頃は先生の家の例外であることを記臆して、除けて通る。

此邊は同じ番地がバカ〳〵しく廣いので、時たま、玄關先から大聲で、他人の家を訪ねる者がある。こんな時、主人郊外君が書生代りに――書生を置いてゐないから――取次に出て

「坂田さんといふ方は聞きませんが、坂上といふ質屋ならツイ此筋向ふです」

と眞面目にわざ〳〵下駄をはいて、門の外まで出て聞かれもせぬ家を指さして敎へる間拔けさ加減は、何處迄も去年邊り文壇で流行つた人道主義的愚物の標本である。そしてあとから

郊外　變な奴も有つたものだな。此奧には、貧民窟があるか

ら、何うも此間から、此前には宅へ使つて來て、女房なら外套を搔つ攫つて行つたのも、大方あんな奴に違ひない。それから1番地のY君の靴を盗んだのも此度彼奴だよ。

（と郊外は玄關の格子と上り口の障子をぴつしやりしめる）

おかめ子　あ、靜にして下さい。おへそが眼を覺ましますから

（と彼女は庭から叫んだ。）

郊外　俺より、お前の聲の方が餘程矢釜しい。

おかめ子（それには取り合はないで）今のは何でした？

郊外　泥棒さ。俺には直覺的に分つてる。

おかめ子　さう。何か盗まれましたか？

郊外　盗んで行く樣な物が何もなかつたから、助かつた。

おかめ子　さう。何んな風をしてゐました？

郊外　色の青い、營養不良相な奴さ。坂上つて訊くから、お向ふの質屋を敎へてやつたが、あすこへ這入りもしずにコソコソ行つちまつた。質草も何も持つちやゐない。肩の邊の色の褪めたセルの背廣を着てヒヨコヒヨコしてゐたよ。

おかめ子　でも洋服を着てゐるのでは、マサカ泥棒ぢやないでせう。あなたは、去年泥棒に會つてから、誰でも直覺的に盜人にしてしまふけれど……

郊外　バカ、泥棒だつて洋服を着れば、洋食も食ふよ。お前なんかは、身裝さへ良ければ紳士だと思つてゐる。それが抑もの大間違ひだ。昔の泥棒は尻切絆纏に三尺といつた風俗だつたけれど、此頃の泥棒は、大泥棒は勿論紳士風だが、小泥棒にも洋服を着た奴は幾らも有る。それ此間も、新聞に出てゐたぢやないか？

おかめ子　つまりハイカラに成つたのだわね。

郊外　泥棒でも學生でも勞働者でも、乞食でも百姓でも、金が取れりやあ、皆ハイカラにも贅澤にも成る。

おかめ子　勞働者でも何でもお金の取れる方がいゝわね。

郊外　いゝとも――尤も俺だけは御免だがな――お金は取れても、取れないでも、近頃勞働者の持て方といつたらないぢやないか。こないだも、誰やらが何處かに勞働者崇拜論といふ文章を書いてゐたよ。

おかめ子　まあ、勞働者崇拜論！

郊外　表題だけでも大した景氣だらうぢやないか？ソレ、やすり工場へ通つてゐた紺作さんが何時も「此地等(こちとら)勞働者風情の身分で」コヽアなんか御馳走に成つちやロが曲るの、煙草を吸つちや罰が當るの、と言つてゐたつけが、あの人も今年まで生きてゐると、崇拜論を書いて下さる人が現はれたんだが、早

く死んで氣の毒なことをしたなあ。

おかめ子　貧乏だの文士だのは、何時まで生きてたつて、崇拜論を書いて下さる人なんか、出て來相も無いわ。駄目ですねえ。

郊外　その癖、文士は煽動に乘ることに懸けちやあ、決して人後に落ちないんだけれど……あゝ、誰か少し我々文士も煽動して呉れないかなあ。

（おかめ子は先刻から大きなバケツに山のやうに洗濯物を入れて來て、庭の干物竿の竹に通してゐる。此時玄關に訪れる者が有る。鈴の音がする）

おかめ子　玄關で又音がする樣ですが、パパさん。すみませんが、出て見て下さい。

（郊外玄關に行き、一人の青年を伴ふて座敷へ來り、座布團を二つ敷いて、客がまだ立つてゐる間に、自分だけ先へ座る。青年は縞絹の羽織に横縞の袴をつけ、頭は近頃若い人々の間に流行する形で、前をウンと長く伸ばして、後ろへかき上げてゐる。郊外と別懇の間柄なる日本朝刊新聞の記者。早耳菊雄。）

郊外　さあ〳〵、御挨拶は後にして、湯殿で水を浴びて來ませんか？

早耳　さうですね。ぢやあ、失禮して浴びさせて頂きます。

（早耳、湯殿へ行く。郊外はボンヤリと庭で働く妻の方を見てゐる。庭は二坪半ばかりあるが、庭とは名ばかりで、向つて右の垣根垣に四季咲の薔薇が一本ある外には、庭樹は何も無い。その薔薇さへも、一家の人々と同樣營養不良と見えて、萎縮した葉にはあぶら蟲が附き、蕾は出來るが之にも蟲が附いてゐるので花は開かない。垣根といふのは、大屋さんの裏の畠を區劃する竹の垣で、小說などに書く時はその名も建仁寺垣とて、如何にも美し相だが、郊外の庭の建仁寺と來たら、前に數年大屋さんの庭の御用を足した功勞者で、之が若し役人か會社員なら恩給か養老金で生きる身の上なのだ。一朝一昨年の暴風雨で打倒され、大屋さんの垣には新らしい後釜が出來たばかりで、こゝ郊外の庭へ廻され二度の勤めの老後小皺を隱す白粉ならで、細かい青苔がベツタリと塗つたやうに生えてゐる。オアイ屋が來て大屋さんの畑に人糞肥料を施す時は、臭氣ふんぷんたる風が自由に此垣を通過して、郊外先生の家族の晩餐の食卓を襲ふのだが、その癖、庭の草木に對しては日光と風を遮ると見えて、おかめさんが植えたコスモスや百日炎の苗は、いやにいぢけて物に成り相もない。讀者諸君が嘸かし趣味生活を營むことゝ想像される小說家大久保郊外先生の庭の中で、最も幅を利かす物は洗濯物を乾す爲めに立てた二本の丸太棒である。その殺風景

たることは言葉に絶してゐる。やがて早耳は身を拭き終つたと見え袴の紐をしめ乍ら、庭に向つた四畳半へ戻り、郊外先生に對つて坐る。)

早耳　何うもお遅くなりましたね。

郊外　内にゐると、そんなでも有りませんが、電車の中は甚いでせうね。

早耳　兎に角込み合ひますからね。こないだ過労の爲めに電車の車掌が卒倒した相ですが、乗客も實際卒倒し相ですよ。暑かつたり、押されたりですから。奥さん。今日は。

おかめ子　オヤ、入つしやい。

早耳　奥さん。お洗濯ですか。暑いのに大變ですね。

おかめ子　えゝ、子供はずいぶん汚しますからね。無給の下女も、もう大がいで辭職したくなりました。ストライキをしても、パパを困らせるだけのことですしね。偶には、帝劇くらゐ見物させて頂いても罰は當らないと思ひますがね。寄席も茶目が二歳の誕生日に、若竹へ小さんの獨演會を聴きに行つたままですもの……

郊外　下らない。人が來る早々御挨拶もしない中から、愚痴をいふ奴が有るか？　何か御馳走でも支度しろ。

おかめ子　えゝ、もう少しで済みますから、一寸待つて頂戴。早耳さん今日は悠くり遊んでいらつしやること、出來るんでせう。

早耳　私なら、何卒お構ひなさらないで下さい。今、道で済ませて來ましたから。

おかめ子　そりやあ、本當？　何卒御遠慮なんか、なさらずに。

早耳　本當ですとも、今、村井の地下室でチンナアをやつて來ました。

郊外　さうですか。あすこは、一寸いゝですなあ。私も此ないだ、茶目を連れて三越へ行つた歸りに、寄つてみましたよ。女なんかゐないでサツパリしていゝですねえ。

早耳　さうですか。三越はお買物ですか？大變な景氣ですね。

郊外　いやはや、茶目にせがまれましてね。エレヴエーターに乗りに行つたんです。エレヴエーターに六ぺんエスカレーターに二度乗つて、しまひにはエレヴエーターの車掌さんと馴染になりましたよ。あハハハハ……

おかめ子　そうして、自分は坊やと村井へなんか行つて置いて、こないだ私達と行つた時には、「もう歸らう〳〵」つてアイスクリーム一杯飲ませはしないんですの。

郊外　だつて、あの中で、飲み食ひどころの沙汰かい。ほとんど、我々は命カラ〳〵逃げ歸つたんぢやないか？　向ふへ行くと、暑さは暑しね。何しろ、おかめが一人負つて茶目の手を引いてさ、私が蝶子之輔を抱つこでせう。眞直白木へ行つて、三越でも買物をして、後で高島屋へ君の展覧會を見に廻る豫定だつたのです。併し私も腕がぬける様ですし、暑さは暑し、辟易して、白木だけで引上げたのですが、電車には愈よ閉口させられましたよ。行きは十時、歸りは十二時一寸廻つた時分で、まあ一日の中一等車内の隙く頃を見計つて出た積りでしたが、我々は困うして〳〵、込むのはそれほどでもなかつたけれど、我々は三人の子供を連れてゐるのに、不德の致すところか、誰も席を譲つてはくれず、大に困つてゐると、白髪の老人が立つて子供に掛けさせてくれたのは、周圍に見てゐた若い紳士淑女諸君に對し、一寸皮肉の様でした。

おかめ子（庭にゐて）洋服を着たハイカラな會社員だか、官吏だか、さういふ若い人達が一番電車の中では女子供に同情がありませんわ。でも、子供を連れてゐる者を立たせて見てゐるのは、極りが悪いと見えて、ポツケツトから新聞を出して見てゐますわ。

郊外　現代ハイカラ間の智慧も良心も、先づそんな程度のところさ。だが彼等も疲れてゐるんだよ。自己を野へ良心を見せびらかす丈けの餘裕が無いのだらう。

早耳　そんな事はないでせう。役人は兎も角も、會社員は今年の景氣と來たら、それやあ、素晴しいものです。三井物産の此夏のボーナスは月給の四十ケ月分といふことです。内田汽船の某は四千圓だ相です。他の小さい會社の社員でも、相當な者が有つたでせう。昨日も、ライオンの水谷デーに行つて見ましたら、二階も下も満員で、何れもボーナス氣分に醉つてゐる様でした。

郊外　同じ洋服細民の中でも、政商無産無識階級に屬する者は景氣が良いんだね。

早耳　さうしますと、勞作家や教師など貧乏籤を引いてる人々は無産有識階級として、政商と區別するのですか？

郊外　さあ、さうも云へない。生活に餓ゑてゐる者は有るが、比較早く眼覺めることだとは思ふが、概略に言へば、皆な無産無識階級の方だらうなあ。ボーナス氣分なんかにウチヤ、チヤケてゐたんぢやあ、人生の味も時代の悩みも自己の立場も分りはしないが、また餘りに踏まれ蹴され壓迫せられた人間は殺風景に成り勝ちだ。毎も緊張してゐてくれるのは嬉しいが、刑事を撲るのを自慢にしたり、巡査と議論するのを得意と

思ふ様な、先覺者にも、一寸困りますね。昔ならば基督教徒の迫害を受けて投獄せられた者、或は地震がして牢の門が破れた爲めに、逃げ出し得た様に聖書には書いて有るが、牢番の獄卒共を感化して弟子にして終へば何時でも門なんかは破れますよ。無論、典獄から司法大臣へ出す始末書には「地震の爲めに牢門自ら破れたり」と書かれるでせうけれど。吉田松陰も傳馬町の獄屋に入れられた時、獄卒共から崇拜され彼等の先生に成つたやうに傳へられてゐますね。薄給で働く刑事や牢番位を感化し改宗させて、之を自分の子分にする位の德の無い者が、社會の改造だの貧民解放だのと云ふ大それた運動のリーダーに成らうと云ふのは、寧ろ初めから本人の心得違ひではないでせうか？

早耳　いや、併し、この頃の様に社會改造や勞働者解放も流行物になれば、そんなに豪い人でなくとも、誰にでも出來ます。

郊外　そりやあ、誰にも出來ぬことはないだらう。尊王攘夷、自由民權、皆な多勢集つてしたことだ。社會改造、勞働問題、之も多數の人の贊助と協力に待ねばならない。併し彌次馬はいやだね。蛇度飛び出して來るものだけれども……

早耳　それから煽動家は何うです？

郊外　むしろうるさいけれども、煽動家の仕事を見てゐると、暇の時には芝居見物の様な快感を得られますね。先刻も或るおさんと、誰か我々文士も煽動してくれないかなあなんて、冗談を言つたところさ。併し、實際はいやだね。御免だね、汗臭ひ自分を崇拜して貰つたところで、何のタソクにもなりはしないんだから。藝者なら決してそんな奴に惚れやしないけれど、兎角勞働者なんかは單純で正直だから、おだてに乗り易いんだ。勞働者で飯を喰ふ奴は資本家ばかりぢやあない。

早耳　無産無識階級の中にも、そんな人間が有りますか？あ、は、ははは、

(主人も共に笑ふ)

郊外　本當にさ。困つたものだね。中には横文字の社會運動の本やマルクスの飜譯などを拾ひ讀みして、中毒する先生も大分あるのさ。併し、多少の中毒者を出したにしても、モルヒネやアンチヘブリンや石炭酸が醫藥として斥けられない様に、人間生活の幸福の上から考へて社會運動や唯物史觀の經濟學には、何うしても捨てることの出來ないところが有ります。

早耳　實は私等の社にも、職工のストライキが有りましてね……

郊外　成程、それで、新聞が休刊なのだ相ですね。田舎にゐ

りやあ、二日や三日新聞を見ない位は、珍らしくも何ともない。利根川が少し増水すると橋が落ちて、新聞の來ないなんかは始終有ることでした。むしろ、新聞の無い社會の方が、本當の社會なのでせうよ。新聞や歴史を見て居ると、人生は非常な事件ばかりで、大浪が荒れ狂つてゐるやうなものだが、實際の人生はそんな物ぢやあない。波は上つ面の方で上下する小さな淺い運動に過ぎない。人生の底は海の底の樣に平和で靜かなのだ。

おかあ子（茶を持つて出て來て）むづかしいことは私は知りませんけれど、新聞が出ないと、パパから議論を吹つかけられないだけでも、隨分助かりますよ。國際聯盟を毎日〳〵聞かせられるのには、ずいぶん閉口しましたよ。でも、ウイルソンが良い加減になつてしまつたので、それから後は何にも言はなくなりましたが、一時は私が國際聯盟のことを熱心に聽かないつて、ずいぶん酷く怒られましたわ。それからロシヤの革命の時だつて、さうだつたわ。

郊外　何だ。下らないことを！　それから、ストライキの結果は、何うなりました？　もう解決は付きましたか。

早耳　さあ、何うやら今日あたりは付くかも知れませんが、兎に角、職工側は十二割半の賃銀値上要求といふんですから、私の社なんかでは大問題です。

郊外　そりやあ、君の社ばかりぢやありますまい。新聞社で今日利益を上げてゐるなんて處は、幾社もありますまいからね。そいつちや、失敬だけれど、そんなことをした日にやあ、ガタピシ行つてしまふところも中には有り相ですね。

早耳　さうなんです。その位のことは、職工の方にも分つてゐるんですがなあ……

郊外　併し又、我々第三者から考へさせれば、實はそれ位のことで潰れるやうな社は、須く潰れてしまつた方が世間の爲めかも知れませんがね。併し、社として考へれば、自ら倒壞することは好まぬでせう。

早耳　それで、社の方でも、六割迄は讓歩して増すからといふのですけれど、職工の同盟會本部の方で承知せずに頑張つてゐるんです。

郊外　今の物價騰貴ぢや六割上がつても、辛いは辛いだらうけれど、社の方だつて無い袖は振られないといふ理屈でせうからね。双方睨み合ひになるわけですね。

早耳　そこで、幾日頑張れますかしら。その間、飲み食ひしたり、遊んだりだから。

郊外　大きに、大きに、そこが無資本者の悲哀ですなあ。何う

に右往も左往も手の内を見かされるのいゝとチヤンと先方に内兜が見すかされてゐますからね。持久戦をやり得る資力が無い位なら、いゝ加減のところで手を打つたらいゝでせうに。

早耳　そりやあ、無論、そんな心配は彼等にありやあしません。ですから、實際が喜劇です。

郊外　むしろ罪ですなあ。若し此持久戦に負けた日には……尻押は一體誰なんです？

早耳　何とか云つた政治家です。大方、普通選擧の場合を注文してゐるんでせう。

郊外　うふふふ……同族に媚びたり金權に阿つたり、勞働問題を喰物にしたり、さて／＼政治家となるのも亦仲々骨が折れますなあ。經濟や政治は、迚も我々の様な怠け者の手には合はない、あ、ハハハハ……。

早耳　あ、ハハハハ……

おかめ子　何うですかね。他の事にはずゐぶん怠け者だけれど、女の人から來た手紙に返事を出す時なんかは、憎らしいほどマメつたいんですの。

早耳　こりやあ、面白い。あハハハハ

（郊外、苦(にが)り切つて）

郊外　だが、一方から言へば、新聞社のストライキは身から出た錆でせうな。自分のところで言つた契約が、少々利き過ぎたとも見えますからね。

早耳　そりやあ、然うです。併し之で手を焼いて、將來新聞が勞働問題に幾分かでも冷淡に成るといふことは、勞働者の爲めに悲む可き事ですねえ。

郊外　如何にも。新聞社の人が誰も皆早耳君の様な眞面目な考へでゐてくれると、何んな場合にも、新聞ほど社會の爲めになるものはない位なのだが、近頃の記事を見ると、實際呆れる様なことばかりですね。

早耳　何か、間違ひでもありましたか？

郊外　外國電報で、上海と天津を書き違へる位のことは、初中終(しよつちう)だが、そんな事より、米が高い、砂糖が高い、家が無い、などゝ書き立てられるのか、一番困りますよ。「米が高い」と書いたところで、米は決して下りやしませんもの。高いと書けば尚高くなります。默つてゐてくれゝば、遠い田舎の奥の百姓は、知らずに手放してしまふ可き米を、「高い」「高く成る」と書き立てるから、百姓は小使錢を借金しても持米を手放しはしませんとさ。之は先達て上京した從兄弟の話です。そうして置いてから、責任を他に嫁して、ヤレ百姓が米を賣らぬのは間違つてゐるの、ヤレ暴利を貪る商人を倒す可しなどいふが、そん

な事は、皆後の祭だ。こないだも、家賃値げの事で、大屋さんと談判の眞最中に、或新聞の夕刊に、而かも二段抜の大見出しでサ、田尻市長談、東京市で家を建てたいが、「土地も無ければ金も無い」、といふんでせう。さあ大屋さん益々メートルが上つてしまひ、つひに十割の値上要求とは、又逆上せも逆上せたものだが、その中に店子の中から誰か投書した者があると、今度は「因業大屋、家賃十割の値上 店子との紛擾」と來た。マサカ因業といふ程の人でもないのですが、新聞で付けた景氣に煽られて、一時慾に迷つたに過ぎない。迷はせて置いて、後から筆誅する。孔子のロジックで言へば「之れ民を網する者也矣」ぢやないか。材木なんか幾らも有るのに——旅行して見たつて、山は坊主山ばかりでも無いのに「木は無い、無い」と書き立てて、次には「材木が高く成つた」と觸し、家を建てる人々の邪魔をする。皆な新聞記者夫子自らが炊き付けて置いて、そして後から困るのも自分なのだ。その期に及んで筆誅したつて、お米が出て來るもんか？ 勞働者に味方するのは人道上から考へても非常に良いことだが、屢ば殆んど度を越してまで炊き付けて、工賃が上る。資本家とも有らう者が、何で工賃の値上げに遭つて、損をして人道的だと引込むものか？ヽ五割工賃を上げれば、今度は、それを口實にして市場へは八割上げて賣り出すに極きつてる。その高い品物を買ふのは誰だ？ 自分達ぢやないか？ マサカ野宿してゐる家族が澤山有るのでも無いのに、こ家が無い〱と書き立て、人をして爭つて家を求めさせ、そして本當に家が無くなつてから、大屋から政略上の店立てを喰つて、心から困つてゐるのは誰だ。自分達ぢやないか？ 年百年中こんな事ばかりしてゐる新聞記者や著述家が、自ら稱して知識階級とは何事だらう？ 無産有識階級もないものだ。正に無産無識階級といふ方がむしろ大に當つてゐるぢやないか？ 始めは小さな疵や腫物であつたのだから打捨てて自然の恢復力に待てば全快は早いものを、痛い〱と騒ぎ立て多くの鍼醫者の手にかけていぢくり廻し、遂には本當の大疵にしてしまふんだ。

早耳 そんなに、僕をお叱りになつても、仕方が無い。

（皆々笑ふ、郊外、漸く自分の熱してゐたのを悟る）

早耳 記者が良くなり、新聞が良くなればそれで良いのでせう。

郊外 ところが、良くなるなんて事は永久に無い。永遠無窮によくならない。宗教が敎會へ這入れば腐敗する樣に、言論も印刷されゝば生温くなります。敎會が資本家の物で有る樣に、輪轉機も亦資本家の物ですからね。心より心へ！ 之より以上の

傳道は宜い。印刷物のプロパガンダなぞ、駄目の骨頂だ。貧者の味方らしい事の書いてあるトラクトは、皆な富者が放射して印刷したものだ。御用記者、御用印刷屋、御用紙屋、御用製本屋！　而して富者の爲めのプロパガンダが出來上るんだ。

（早耳もそろ／＼郊外の氣焔に中毒せぬ用心をし始める。そして、先づ金口の舶來タバコを吸ふ）

早耳　如何です？　お吸ひになりませんか？

郊外　甘いけれど、品のいゝ味がしますね。こいつを先達て「△△△」の編輯記者三重杉が吸つてましたつけ。私が「豪い金口を吸つてるぢやないか」と云つたら「安いタバコだけれど、一寸飲めます」なんて私に三本呉れましたが、失禮ですが、早耳君、この烟草は何の位します？

早耳　此箱がこないだ迄三十五錢でしたが、今日から四十五錢になりました。

郊外　では、一本四錢五厘ですね。三重杉の月給ぢや、幾箱も買へないのに！　一寸税金の味つてこんなもんですかね。

（郊外、金口をスパ／＼吸ふ）

郊外　税金は甘いなあ。酒にしろ、烟草にしろ、砂糖にしろ、八割は税金だらうが、早耳君、税金の味は結構ですねえ。

早耳　あ、北事言へは、Tさんのところへは所得額を申告する樣について、税務所から來た者ですが、お宅へも參じましたか？

郊外　さうですか？　富裕な樣々の手段で脱税して、お役所の手を省くのでお役人も暇と見えて、いさゝか文學研究に志したのでせう。昔から、罪有る者と收税吏といふ奴は、一番宗教や文學に縁が近いんですから。

（早耳、タバコが好評を博したので、今度は白い一重の封筒を鞄から出して）

早耳　之を御主人へ進上しませう。

郊外　難有う。はゝあ、良い状袋ですね。帶に正札が付いてる。十枚十四錢とは成程いゝ筈だ。端書と一厘しか違はない。私も、こんな物は贅澤品が好きですが、とても此邊には、こんな品は有りませんよ。せい／＼九錢迄位のものです。

早耳　そいつは丹木で今買つて來たところです。奥さん。丸い石鹸を上げませう。何うです？　この鏡はハイカラでせう？　此うがい楊子ですか？　一本一圓五十錢ですよ。

おかめ子　本當に、楊子ばかりは、近頃四五十錢もしたのでは、直き毛が抜けて困りますのね。感じが悪くつて！

郊外　私もまだ獨身の時分、一般の獨身者と同じ樣に石鹸と齒磨粉と楊子なんかには、贅澤をしていつも舶來の品を用ひて

ゐました。そして、同居してゐた親戚の家の人々に「石鹼と齒磨だけの貴族だ」なんて冷かされたものでしたが、今ではそんな方までは金が廻らないから、つい無趣味な話だがライオンで滿足する樣になつてしまつた。

おかめ子　何を買物しても、こんな山の手にや、ロクなものは有りませんよ。

早耳　矢張銀座から山の手の家庭へ文明が移入されるのですね。

郊外　だが、こないだ、白木で見た赤ン坊の着物は欲しかつたですよ。絽ちりめんの友染模樣、一つみの仕立て上りでしたが、店の中でも人目を惹くものでした。しかし、四十五圓といふ札が付いてゐたから、一寸考へた。三四年前なら、思ひ切つて買つてしまつたに違ひないんだが……

おかめ子　パパはおべその事となると甘いこと此上無しなんですからね。その癖、私にはあんな浴衣を唯つた一枚買た丈けなんですもの。それが一年中の御褒美としちやあ、餘り少な過ぎますわ。

郊外　だつて、俺なんか、その一枚も買ひやしない。

おかめ子　さうですとも、あなたなんか、外へ出れば、澤山御馳走を食べたり、梅蘭ふあんも見ればバンドマンも見る。何でも、仕度い三昧をしてゐるんですもの。私はお勝手で物價騰貴に攻められ續けてゐるんぢやありませんか。

郊外　そんな事を言ふけれど、實際綺麗な物を見る位が、我々無産有識階級のせめてもの慰樂なんさ。晩翠軒で硯箱やら筆やら一式揃へて買はうと思つてゐるが、まだ、それさへ出來ない。早耳さん。私は字が下手な癖に、文房具はいゝ物を使ひたいと思ひますよ。

早耳　さう、私も、道具はいゝ物が好きですね。時に、あなた方は此夏は何地らへお出かけですか？

郊外　いや、とても、我々の行くところはないでせうよ。折角、出掛けて行つて、障子の下に陣を取つたり、西日の照り付ける座敷へ置いて貰ふんでは、堪りませんから。溫泉地や海岸で、もう成金に荒らされてゐないところと云つたら、殆んど無い位でせう。以前には印税の百圓も持てば家中で、溫泉へ行くこと位出來たんだけれど、今は、もう、一年に一度の湯治さへ、封じられてしまつたも同樣だ。併し、茶目だけ、岡元の祖父さんに連れられて、山の方へ行つてゐます。あいつだけ一人うまくやつてゐるわけです。

早耳　今年は畫家の連中にも、汗をたらして寫生旅行をするより、内にゐて製作した方がいゝなんていつてる者もあります

よ。矢張旅行がお苦しくなつて來たんですね。

おかめ子　何ですか？　パパは時々、地圖を擴げて終日眺めてゐることがありますの。旅行の快樂を空想してゐるのでせうね。あなた？

郊外　さうさ。無產階級の人々の快樂は、今では空想より外には、何物も殘されてはゐない。山も水も、今は、皆な賣り物に成つてしまつた。金の無いものは、自然の胸に抱れることすら、出來ない。

早耳　あ、申し忘れてゐましたが、赤目が天草の旅行先から繪端書を寄越して、郊外先生にも「何卒よろしく」といふことでした。

郊外　赤目君は、東京私立中學教員聯盟會の幹事として、活動してゐた樣でしたが、あの運動は、その後、何うなりました？

早耳　何でも、二割ばかり、增俸されたといふことです。中學校は生徒の數が制限されてゐるし、所得といへば生徒の月謝だけですから、幾らも有りますまいから、俄に教師の月給をさうトげることも困難なのでせうよ。でも二校三校位は、儲かつてゐるところも有るのだ相です。

郊外　學校商賣といふ事が、誤の根本ですね。教員も、當節二割位の增俸を受けたつてそれこそ、燒け石に水でせう。元來教師なんてものは、品行比較的方正で（彼の性質が善良でなくても）從つて貯金家の方だから、却つて我々より困る樣なことはなからうが、一家族持つ者が百圓以內の收入では、とても生活することは無理ですねえ。そして、日本では昔から孔孟の教が國民道德の根本となつてゐて、その孟子の言葉に「恒產無き者恒心無し」と言つてゐるのに、恒產無き教員に子弟の教育を委ねて平氣でゐるのは、滑稽じみてゐますね。それから、聞くところに依れば腰辨階級の人々も、中產階級擁護運動とかいつて、S・M・U（俸給生活者同盟會）を組織し、いろ〳〵決議した樣ですね。

早耳　皆なが、近頃はよく決議しますよ。決議で何でも要求が滿されるものだと、世の中に困る人はありませんかなあ。あ、ハハハハハ……時に、著作家協會から入會勸誘が有つたでせう？

郊外　えゝ、有るには有りましたが、その性質がまだハツキりしませんから、私は洞ケ峠にゐます。何でも、「新進作家を推薦す」なんといふのが、主なる個條書の中に有りました。相變らず、皆暢氣なことを言つてますぜ、此所では、自分達の生活に關する手前勝手な決議なんか、無さ相です。何うしても、昔デツカンショを唄つた當時の無頓着が、附き纏つてゐるんでせう。

他の無産階級を壓してゐる悲痛の密雲が、此所では何處からか日光の射し込む隙間を持つてゐる樣です。

早耳　それはカルチューアの賜でせうか？

郊外　さあ、そんなことだと結構ですが、大抵生れ落ちたのは中産以上の家庭で、いゝ加減に甘やかされて來た坊ちやんばかりだからなあ。貧乏の苦勞も、晩學ぢや、矢張しみ〴〵と頭に這入りませんよ。

おかめ子　でも、早耳さんなんか、いゝわね？

早耳　何がです？

郊外　何だ？　そんな藪から棒に。

おかめ子　だつて、職工が負けても記者に損はないし、若し職工の賃銀が上れば、記者ばかり捨てゝ置きもしまいから、何う轉んでも増俸ですわ。

早耳　いや、駄目ですよ。

郊外　つまり、漁夫の利を得るわけですね。世の形勢なんてものは、實際どんな方へ變つて行くやら、分つたものぢやありません。我々が、利益を受けるのは、常に豫期しない方面からです。（一段聲を勵まして）だが、新聞記者といふ職業は、何處か知ら浮き〳〵してゐるところが、職業の德ですね。官吏なんて、暢氣なものだが、午後五時頃、あの腰辨街道をゾロ〳〵と行く光景には、些の生氣といふものが見えませんね、それが、此物價騰貴に出會つては、一層生彩を失つてゐることでせう。だが、郵便局員と來たら更に一層悲慘ですね。

早耳　郵便物の遲れることが、彼等のへこたれてゐる何よりの證據でせう。かういふ勤人階級こそ、勞働者よりは遙に悲慘な生活をしてゐるのに、勞働問題の流行物の如く論議せられる傍で、誰も拾ひ手も無く捨てゝあるのは、何うしたものでせう？

郊外　如何にも、〳〵、田舍でも都會でも、今日景氣の好いのは資本家と勞働者で、苦んでゐるのは、智識階級月給階級です。ずいぶん瘠我慢を通して來てはゐるが、この先、いつ迄持ち堪へられるか？　もし此まゝで行けば遂には此階級は滅亡してしまふより他はない。

早耳　全く、此分で押して行けば、人間は資本家と勞働者の二つに分れて、しまふでせう。そして、智識階級といふものも、結局は、勞働階級の中へ吸收せられてしまひませう。

郊外　學問を研究する金は何處から出て來るかね。

早耳　そりやあ、出ますとも。資本家は自分の病氣を癒す爲めには、醫學研究所へ金を出すことを惜まぬでせう。化學工業から利益を引き出す爲めには、立派な理學者を養成するでせう

よつて資本家の息子の皆さん達のみを見て、資本家の中に學者も識者も無いと斷定すると違ひます。彼等は專門を有つてます。恰度、彼等が株を買ひ自動車を買ひ山を買ひ妾を囲ひ、そして遂には國家から勳功を買ひ人爵を買つた樣に、ですよ。（以下廿一行當局者の意嚮を懸念して編輯者刪除、作者並に讀者諸君の御諒恕を乞ふ）

早耳　それはさうと、近頃漢字の讀方も、二タ通りになりましたな。

郊外　昔と訓だらう。

早耳　何うして、そんな形式なのぢやあない。例へば、溫情主義と書いて、何と讀みます。

郊外　オンジヤウシユギでせう。

早耳　そりやあ、資本家讀みといふものです。勞働者の方では、之にカイジウセイサクとルビを振ります。

郊外　懷柔政策か？　溫情主義か？　ふうん。成程、美名と惡名とは同じ物ですねえ。だが、考へて見れば、もう今日だつて、智識階級は上は工學博士より下は電信技手に至るまで、悉く勞働者に相違ない。殺風景に成つたものさねえ。

早耳　その爲か、近頃智識階級に犯罪が多くなりました。以前には犯罪は下層階級に多く現はれ、上流階級に深く潜んでゐ

ましたが、今度は智識階級の者が續出して來ました。ここに於て、著しく眼に付くのは、官吏の犯罪ですが、官紀が緩んでゐるが爲めでせうか。

郊外　全く困つたものです。之までは大官のみの犯罪だから、所謂吞舟の魚は網に入らずで、始末がよかつたが、近頃のは雜魚の犯罪だから慘めなものだ。之も一つは生活の脅迫だらうよ。

早耳　本當に。私の知つてる小學教員でも郵便局員でも、惡いことこそしないが、主義も理想も言つちやゐられない、なんて、生活に疲れて、うだつてますぜ。あなたなんかこそ一ケ月四千五百圓の所得ある可き無産有識階級だから、趣味性の不滿足から來る不平を言つてゐる位に過ぎませんが、所謂洋服細民は實に慘憺たるものですぜ。

郊外　私の所得が四千五百圓？

早耳　そんなことが新聞のゴシップに出てゐましたよ。そのプロバビリティーがあるといふ話なのです。果して、十圓にも懸らない原料を加工して四千五百圓を生産するとすれば、確に暴利取締令に觸れませうよ。フランスでは暴利を貪る奸商を死刑に處す可しと放聞く政治家がある相ですから、御用心なさい。

郊外　四千五百圓の噂が立つだけでも難有いね。暑中にアイスクリームの夢を見る様だ。そんな噂があるのは、我々が普段負け惜みばかり言つてゐた罰なんだ。

早耳　光榮ぢやないですかね？

郊外　いや〳〵、もつと眼覺めて、痩我慢の光榮なんか捨て、我々も勞働者と一緒になつて生活する積りにならないと不可ん。

早耳　公設市場へ買物に出懸ける位までにですね。

郊外　然です。併し妙だね。こないだ、實は一寸視察に行つてみたが、あすこで買物をしてゐる者は、矢張職工と勞働者のお神さんばかりでしたよ。その中に醬油屋の前まで行くと、その息子に「先生」なんて呼び掛けられちやつた。私の家へ遊びに來る文學好の青年さ。青年は私に對つて、頻りに音樂談を持掛けたが、公設市場の眞中で音樂を談ずるのは、周圍と頗る調和を欠いた様に思はれました。それから、乾物屋の前を通ると、又もや私は呼び込まれました。北海道の海産物大問屋から出資してゐたある評論雜誌の編輯人が、早變りして海産物を賣つてゐたんです。私は何だか、市中で知人に逢つた様な氣がしましたよ。

早耳　そんなに氣が弱くちや駄目ですねえ。知識階級の人々が、市場をズン〳〵利用しないつて、ことはない。勞働階級の爲めには、政府も學者も資本家も、社會問題として種々施設の道を講じてゐるけれども、知識階級は、より以上無産階級なるにも拘らず、捨てつぼかしにされてゐるのですもの、せめて一般公衆の爲めに開かれた公設市場位、利用するがいゝんです。ねえ、奥さんが西洋流に自分で買物に出掛ける様でなくつては、いけませんよ。旦那さんが公設市場を散歩して歸つて來るんぢや、仕様がない。

（おかめ子、先刻二人の話の間にお勝手へ下り、フライパンにて何やら簡單な西洋菓子製造中であつたが）

おかめ子　だつて、早見さん、お砂糖一斤を電車に乘つて買ひに行かれもしないわ。

郊外　いろ〳〵澤山買つて來たらいゝだらう。

おかめ子　そんなことを仰言つたつて、現金を持つて行かなければ、知らない商人から品物は買へないぢやありませんか。

早耳　公設市場の上の方の右京ヶ原へ、無産有識階級の爲めに、市で家を建てゝ借す相ですね。利用なすつたら宜いでせう。

郊外　私達も借家難では泣かされてゐるんですが、市で建てる家は何軒でも無いのに、目下希望者は多いでせうから、我々

のところまでお鉢は廻りさすまい。急に電話の申し込みか、勸業債券の富籤みたいな物だからなあ。

おかめ子　さう〳〵、あなたは、いつか千圓當てるんだと仰言つて冬の外套を質に置いて、債券を買つて來たことが有りましたねえ。あの債券は何うなさいました？

郊外　蛭子が入院する時に、質に入れて流してしまつた。今まで持つて居たら、當つたかも知れない。

早耳　實際、文士の子供は、よく病氣して入院しますね。矢張、頭を使ふ人の子は弱いのかも知れない。

おかめ子　本當に！　内なんかでも子供が病氣しないと、もう少し餘裕が出來るんですけれど、パパの本の印税を皆なつぎ込んでも足りないんですからねえ。

早耳　それに子煩惱だから、金を懸けるんでせう、普通の家庭ぢやあ、そんなにしやあしませんよ。

郊外　收入の方は勞働階級の程度であるのに、生活の方は資本家階級の程度にまで、やり度いのだから、無産作識階級は苦しい筈です。こないだも友達が來ての話に、子供を曉星の小學部へ入れやうと思つたところが、入學に就いて服裝や何かに若干の金が要る。そこで、親類の資産家へ借金に行くと、先方では村の小學校へ子供を通はせてゐるとかで「餘り贅澤だ」

と思はされた類だが、我々はこんなことをして〳〵、[illegible]位は思ひ通りにやり度いからなあ。

（此時、玄關に人の氣はひがする。おかめさんお勝手から立つて行き、しばらくして坐敷へ來る）

おかめ子　××評論から原稿の催促ですわ。出來てゐますか？

郊外　まだ〳〵、兎ても。

おかめ子　何日と云つてやつたら、宜いでせう？

郊外　さうだなあ、毎日拵へてはゐるんだけれど、まだ十分に腹案も立たないのだから……さうだな二三日待つて貰へ。

（おかめさん葉書を郊外に渡し）

おかめ子　今玄關へ、これが來てましたよ。丸久ですよ。よございますか？

（おかめさん玄關へ立つて行く）

郊外　呉服屋から、暑中御伺ひだ。

早耳　結構ですね。呉服屋から、暑中見舞が來るやうでは。

郊外　なあに、盆の勘定を、まだしないで有るものだから……一種の催促状さ。雜誌社から直接の催促よりも、此葉書を見ると、背かないちやゐられない。家には商人に内應して攻め立てる人がありますから。

早耳　ぢやあ、仲々お忙しいところなんだ。私もう失禮します。

郊外　まあいゝ、〳〵、今、何か出來ます。暫くで、一杯やりませう。トマトーのもぎたてを大森から貰つたのが有ります。

早耳　さうしてゐちや、お仕事の妨げになりますから……

郊外　いゝさ。そんなに書いた日にや、それこそ四千五百圓の口で、暴利取締令に引懸ります。死刑も貧乏も、同じ様なものではあるけれど……あハヽハヽハ

早耳　ハハハハ……

嵯峨大臣物語

村松梢風

いつの頃かはさだかにはわからない。それは晝寢の束の間に見る夢よりも朧に暗い空を仰いで星の世界に思ひを馳せるよりも遠い。末世に生まれた愚かな人々によつて失はれてしまつたさま〴〵の怪異、人間生活の極度の安楽と不安、さうしたものが何の不思議も矛盾もなしに、限りなく國土を覆うてゐた時代の出來事である。

嵯峨の大臣と呼ばれる人があつた。嵯峨に住居してゐるところから、かう呼びなされて來たのであつた。人間の運不運といふものがさきの世の酬ひであるといふからには、此の大臣はいかなる人の生れ變りであらうかと疑はれた。まつたく、此の世の幸福といはれるものの中で、何一つ嵯峨の大臣に缺けてゐるらしいものはない。權勢は百官を凌駕し、富貴は棟を並べた甍の上にまで輝く。其の上男女數多の子を設けて、一門一家の繁榮え並ぶ方はないのであつた。

大臣は、もう軈て五十の坂に手の屆く齡であつたが、また顔の色は水々して若かつた。此の人の顔には、青春の美しさがすこしも老いずに殘つてゐるのかと怪しまれるくらゐであつた。しかし、大臣の若盛りを知つてゐる人は必ずそれを打ち消して、大臣と雖も矢張り世の常の人と同じやうに老いもすれば美しさも削がれてゐるのだと言つた。折り〳〵さういふ人達の言

妻によつて、今の若い人々には想像の付かない程艶やかであつたといふ。若盛りの大臣の姿が描き出されるのは常であつた。

かうして大臣の美しさはよく一つ噺にされてゐたから、但しも直ぐに、それ程の男の身の上に無くてはかなはぬ美しい物語りを待ち設ける氣になるのであつたが、それはいつでも失望を與へられるに止どまつてゐた。未だ嘗て、嵯峨の大臣に關する戀物語りを聞いたと言ふ者はない。春の花よりも艶やかな、秋の月よりも神々しいやうな男があつたといふだけで、噺はいつもお仕舞ひであつた。「それでは佛造つて魂を入れぬといふものだ」と、聽き手は大抵終ひにつまらないやうな顔をするのが常であつた。

それ程嵯峨の大臣の謹直は名代のものであつた。廣々とした額、水晶のやうに淨く澄んだ眼、彫物のやうな隆々(たかだか)した鼻、雄々しく引き締まつた口許――其の容貌には、温情と嚴格と、智慧と熱情とが整然と織り込まれて、露ほどのあだめかしさも、邪念や秘密を蔵くしてゐる人に現はれる暗い影も見られなかつた。

しかし、此の公明潔白な蛾嵯の大臣に對しても、世人はたつた一つの解き難い疑問を有つてゐた。それは毎年秋の彼岸前後になると、必ず人の口に上る噂であつた。大臣は、毎年秋の彼岸が來ると、東山麓の或りのお寺に大勢の僧を招いて盛んな供養を營むだ。そして功德を修めるために數限りない施物を出すのが例であつたから、其の日は遠近から集つて來る乞食の群れは言ふ迄もなく、洛中洛外の貧しい民を一度に狩り出して、東山の邊りは時ならぬ賑はひを現じるのであつた。處が、此れ程盛大な追善供養が、一體誰人の爲に營まれるのだかを知つてゐる者は一人もないのであつた。どれ程親しい人に訊ねられても、大臣は唯だ輕く笑つてゐるばかりで、事のいはれを語らうとはしなかつた。曇りのない鏡には塵一つさへ大きく映る。嵯峨の大臣の不可解な此の佛事が、退屈な大宮人の神經を惱しましたことは非常であつた。「餘程深い因縁でもなければあれ程にまでする筈はない」と言つて、人々は思ひ思ひの想像を廻らして語り合ふのであつた。

その彼岸も過ぎて、年中行事になつてゐる嵯峨の大臣の供養の噂もいつとなく下火になつた。紫宸殿の前の階庭を照らす陽ざしが急に軟かくなつて、簾越しに舞ひ込む朝夕の涼風が肌身にしみて來た。

或夜、帝(みかど)は端し近くお出ましになつてゐた。篝火(かゞりび)があかあかと燃えてゐるのに、白の御衣を召してゐるので、月のやうなお

顔が一層﨟たけてお見えになつた。常と對き合ひに嵯峨の大臣がゐた。それからすこし離れて、二三の近侍の公卿と、少數の女房達が控へてゐた。それは餘りに月が冴えてゐるので、態々嵯峨の大臣をお召しになつたのであつた。靜かな秋の夜に適はしい樣々の雜談が、其處から其の場の人々の口に交されてゐた。

其の時帝は不圖思ひ付かれたやうに

「今宵は各々身にしみて思ひ出される忍び事を一つ宛語り合はふではないか。一つは懺悔のためぢや。今より輪番にして、何事にまれ、有りの儘に話すことにしやう」と仰せられた。

一同の人達も、それはひとしほ興のある事に違ひないとお答へをした。で、直ぐ樣籤引きで順番を極めて、各々秘密にしてゐる情事を一つ宛語り出した。

ひとの話すを聞いてゐる間はよいが、自分の番が來ると誰しもはたと當惑した。殊に女の中には、其の場になつて逃げ出さうとして抑えられ、無理矢理に話させられたりする者もあつた。しかし、由來殿上人だの女房達の眼や耳は、かうした他人の隱し事などに對しては平常から極端に敏感になつてゐたから、此の場の懺悔噺も大概は當人だけの秘密に過ぎなかつた。だから、噺其のものよりも、顔を赤らめたり口籠つたりしながら話してゐる各々の素振りの可笑しさに氣を取られる方が多かつた。

四五人の人達が順番に話した後で、愈々嵯峨の大臣の番になつた。

「大臣今度は卿の番ぢや。卿は年嵩の事なれば、さぞかし面白い噺があるであらう」と、帝が催促するやうにおつしやつた。

すると大臣は眞面目な顔をして

「わたくしには、今宵申上げる程の事が御座りませぬ。矢張り、各々の物語りを承はつて居ることに致し度う御座ります」と言つた。

「夫れは成らぬ。初めからの約束ぢや。何事にまれ語られい」

「仰せには御座りまするが、わたくしには内所事とやら言ふものは更に御座りませぬ」と、大臣はきつぱりと答へた。

帝は暫時默つて大臣の顔を見て居られたが、軈て賢く眼で笑はれながら

「では、萬一卿の身に關はる密事を中てたならば、卿は屹度それを話すであらうな？」

「それは勿論で御座りまする」

「さらば、卿が例年秋の彼岸に定めて營む供養はそも何人の

[illegible]
なさんた。

嵯峨の大臣は「はッ」として顔色を變へた。平常の沈着さが此の時ばかりは少し失はれて見えた。一同の人達は、今宵の前の思付しを初めて覺ることが出來たのであつた。

急に、途方もない大きな問題にでもぶつかつたやうな氣持で、可成り長い間人々は息をこらして居た。夜がいたく更けて[illegible]の音が劇しく聞こえて來た。

「此の事ばかりは、生涯人に漏らさぬつもりで御座りましたが、仰せに反く譯にもまゐらず、月は、思はぬ叡聞に達しまするといふも、一つの供養かも計られませぬ。是れはもう、夢のやうに遠くなつた昔語りで御座りまする」

嵯峨の大臣はかう言つて口を切つた。其の聲でも態度でもすつかりもとに戻つてゐたが、これから自身が物語らうとしてゐる何ものかの幻を見詰めてゐるかのやうに、眼には悲痛な色が現はれてゐた。

（以下嵯峨大臣の物語）

自分が廿の歳であつたから、もう彼是れ三十年近い昔しである。一とはに三十年と言ふと、餘り永い歳月とは思はぬかも知れないが、其の三十年間の[illegible]出來事に考へ及ぼすと、自分に

[illegible]しいやうに思はれてならないのである。若し十年、否五年後れて生れたならば、自分は自分の經て來た十分の一の異變にも遇はなかつたであらう。當時の人に向つて昔の話をすると誰でも嘘のやうな顏をするが、若しも昔に於て、たつた三十年の後には此の樣な世が來るといふことを豫言する者があつたとしたならば、それは猶更相手にされなかつたに違ひない。然し自分は茲で、世の變りさまを詳しく話してゐる要はない。ただこんな風で、其の頃は總ての樣子が今とは大分變つてゐたといふことを承知して貰へばよいのである。

重ねて言ふが自分は廿であつた。廿といへば、人間の精氣の最も滿ちてくる年頃である。自分の體にも矢張り青春の血が[illegible]き立つてゐた。其の前から自分にはいまの妻があつた。然し今も言ふ血氣の頃であるから、一人の女に滿足してゐた譯ではなかつたが、妻の親達に對する氣兼や、つまらぬ女には關り合ひ度くないといふ自尊心や、それにいざとなると臆病な性質でもあるので、容易に常識の埒が飛び超せなかつた。かういふ風であつたから却つて内の御覺えなどは惡くもなくて、其の年の秋の除目には近衞の中將に補せられた。

或日、自分は十名餘りの侍を引き供して狩りに出掛けた、朝

まだきに家を出て、夜の明ける頃ほひに東山を打ち越えて山科迄行つた。そして終日其の邊りを驅け廻つて雉子を追つたが、幸ひ其の日は意外に獲物が多かつたので、喜び勇んで再び日暮れ前に山越しをして京へ還つた。歸途は路を變へて清水寺のほとりへ出た。其の時分には、短い陽足が山の端に傾いて、深い藍色の海の底に微かに京の屋棟が耀いてゐた。自分は暫時馬の足を停どめて、此の壯大な景色に見惚れてゐた。

上の方で、カン／＼／＼と、夕暮れの慌ただしさを知らせるやうに鉦が鳴り出した。其の音に驚いて自分が馬の手綱を引き締めやうとした時、御堂の方から四五名の供人に圍はれた女が降りて來た。中の乳人らしい女に手を引かせて階段を降りると、自分達の居る脇道の方へ遣つて來る樣子であるから、自分は馬を道端へ寄せて通り過ぎるのを待つてゐた。濃い紫の袿に、紅梅萌黃の打衣を重ねた女の華やかな姿が、殊に寂びた邊りの景色の中に映えて繪のやうに美しい。

自分は急に其の女の顏が見度くなつた。なんとかして此方を見させる工夫はあるまいかなぞと思つてゐると、是れが所謂緣であらう、女が通りすがりに何氣なく振り仰いだので、丁度見下ろしてゐた自分とはつたり顏が合つた。女は自分に見られるとさつと顏を紅く染めたが、それでも割合大膽な眼つきで自分の顏を見返してから徐ろに其の場を通り過ぎた。

自分は、いつ迄も其處に馬を立たせてゐた。暮れ行く空を仰いでゐる自分の眼には今の女の顏が映つてゐた。またなく愛嬌のある額つき、初々しい口許、黑く長い髮、何んとなく淋し氣な可憐なまなざし……

自分は不圖氣が付いて、中に心の利いた侍を一人側へ呼んで「今から彼の女の後について行つて住居を慥かに見屆けて來い」と密かに命けた。そして、再び家路をさして馬を急がせた。

我家へ歸ると、妻をはじめ數多の者が自分達の歸りを待ち侘びてゐた。やがて、山のやうに積み上げられた雉子のまわりを取り卷いてガヤ／＼罵つてゐた。

然し、狩りの事や獲物の事などはもう更に自分の念頭には無かつた。湯浴みをする間も、夕餉をしたためる間も、清水で遇つた女の顏ばかり絕えず眼前きにチラ付いてゐた。

あとへ殘して來た侍が戾つてきたのは餘程遲くなつてからであつた。

「慥かに見屆けて參りました。しかし、京の中では御座りませなんだ。淸水からはずつと南で、阿彌陀ケ峯の北の麓で御座ります。山里の一軒家では御座りますが、家つきも思ひの外立

其て、なつ〳〵ほのかにおとして居りました。定て、ここなのに[illegible]をして居りました年取つた女がそれがしを見咎めて、なんでお供へやうに強いて来るのかと申しまするから、清水でお出逢ひ遊ばした殿が、慥かにお住居をば見屆けて來いと仰せ付けになられたからぢやと、有の儘に言ひましたところ、それでは若し今後用事でもある場合には家を尋ねられるがよいと申しまして、自身の名前を告げて行きさして御座ります」と、彼は叫り自分の側へ来て言つた。

自分は最早躊躇しては居られなかつた。其の翌日自分は女に文を遣つた。すると折り返して女から返事が来たが、それには大概の場合女が言ふやうに嬉いとも悪いとも書いてはなかつた。かうして二三回その遣り取りをしてゐるうちに、或日女から来た返事に「みづからは優人なれば、京などへ出る事はえ行らじ、然らば此方へ渡らせ給へ、物越しにても申さむ」といふやうな事が書いてあつた。

まつたく、飛び立つ程の嬉しさであつた。日の暮れるを待ちかねて自分は家を出た。供に連れた者は、唯一人、小舎人童、馬の舎人と二人だけであつた。

朧月夜であつた。五條邊を過ぎて、鳥邊野あたりに差しかかると、それから次第に道は人家の絶えた山の間へ這入つて行つた。[illegible]なことは一向気にも留まらなかつた。ただ、夜道に馬の足が遅々としてゐるのがもどかしくて堪まらなかつた。

やうやうのことで女の家に辿り着いた。門さきに供を立てて言葉を傳へさせると、間もなく一人の女が出て来て「どうぞ此方へお渡り下さりませ」と言つて内らへ案内した。四方山で圍まれた盆地に、疎開な築垣をめぐらして、屋根の高い壮麗な門が立つてゐた。庭には広い堀があつて、それに橋が架けてある。

「お供の方は此方でお控え下さいませ」

と、橋の前で女は側らの屋を指して供の者に言つた。其處から自分は唯一人女に導かれて、橋を渡つて奥へ行つた。其處には高い棟が深山造になつてゐた。寝殿とおぼしき建物があつた。妻戸を開けて這入ると、立派に造られた室に屏風や几帳など立てて、浄らかな疊が敷かれてゐた。周囲には簾が掛けてあつた。

「暫くお控え下さりませ。おつつけ主がお目通りを致すで御座りましよう」

かう言つて、女は自分を取り残して引いて出て行つた。自分は屋内を見廻はして、燈火の光の及ぶかぎり隈なく眺めた。是れぐらゐ整つた住家は京にも余り澤山は無い。いづれ由あつてこの山郷に住みなしてゐる人に違いないと思ふと、女の身分かひ

とし床しく思はれて來た。

餘程待たせられたてから、主の女が出て來た。女は格別わるびれた風もなく側へ來て「山ざとの女を嬲るのかと思つてゐたのに今宵はよく來て呉れた」なぞと喜ばし氣に言つた。いつぞや淸水で見た時に比べると餘程長(おと)なびてまことは廿ぐらゐになるだらうと思はれる。其の顏は近まさりがして、譬へやうもなく艶やかであつた。自分は堪へ兼ねて、女の手を執つて几張の内へは入つた。

夜の更けるのもしらずに、自分は女と日ごろの思ひなどを語り合つた。そして、此の後はどこまでも便(たよ)りになつて末永く添ひ遂げやうなどと、自分は眞心をこめて女に言つた。すると、女はどうしたわけか、稍もすれば物思ひに沈んでゐるやうな容子をして、微かな溜め息を漏らしたりした。自分はそれが非常に氣懸りになつて來た。

「そもじは何故其のやうに鬱いで居られるのぢや」

自分が女の顏を覗き込むやうにしてから言ふと、女は眼を外らしたまま

「なんとなく物哀しくてなりませぬ」と言つた。

それでも自分は不審が晴れなかつた。又、女の言葉を冷たくも聞きなされた。

「それにしては、餘りただならぬそもじの氣色ぢや。今更隔に隱されることはない。さ、何事にまれ話して見られよ」

から言つて自分が劇しく問ひ詰めると

「其のお尋ねは受けずとも、是れはお隱し申す可き事では御坐りませぬ。唯、口にするさへ嫌はしいので御坐りまする」

と、最後(しまひ)に女は泣く〳〵言つた。

「實は妾は、京に住居した然る可き人の娘で御坐りまするが、父母に死なれて唯一人居りましたのを此の家の主に盜み取られ、か樣に養はれて居りまする。此所の主と申すは元々乞食で、か樣に豐に暮して居りますのも惡事で利得をするゆゑで御坐りまする。時々妾を淸水へ詣でさせ、參り會うた男の中で妾に懸想する人があれば、丁度殿を招いた通りにして此の家へおびき寄せ、眠つた際に主が天井から鉾を差し下し、妾に其の先を男の胸に當てさせて、上より突き殺して衣類持物をば剝ぎ取り供人をも塀の外の家に導いて、皆殺して衣類乘物などを剝ぎ取るので御坐りまする。か樣にした事が今迄に幾度びかわかりませぬ。此の後とても、永らへて居れば此の樣な淺間しい所業を致さねばなりませぬ故、今宵殿に代つて自らの胸に鉾を受け、死ぬる覺悟で御坐りまする。どうぞ早う此の場をお遁げ下さりませ」

と言つて女は激しく泣いた。自分は胸を押し潰されるやうに騒いた。忽ち名状し難い恐怖に襲はれて身うちがワナワナ震ひ出した。自分はもう一刻も此處には居溜まれないやうな氣持になつたが、然し如何に危急な場合とはいひ乍ら此の儘女を見殺しにして逃げるわけにはいかない。何んとかして女をも救ひ出してやらなければならないと考へた。

「ようこそ明かして下された。しかし、そもじを見捨てゝどうして獨り逃げられやう。そもじをも一緒に連れて行かう」

すると女は頭を振つて

「否々、若し鉾の下を空にすれば、直ぐ様追手が出て、殿も妾も二人乍ら殺されるに極まつて居ります。それに妾は、今迄に心ならずも犯した怖ろしい所業を思へば永らへてゐる空は御座りませぬ。何卒殿はお命を保たれて、せめては妾のために功德を作り、未來の苦艱をお救ひ下さりませ。是れが今端のお頼みで御座ります」

と言つて女はどうしても承かなかつた。自分は心苦しくもあれば、また女を哀れとも思つたが、この場合何時迄も言ひ爭つて時を移しては居られなかつた。

「麿の命に代らうと言ふそもじの恩を忘れてよからうか。麿が此の世にある限りは、必ず功德を作つて追善供養を怠らぬであらう」

自分はかう言つて女の頭を抱きしめて泣いた。さうかうしてゐるうち奥の方に人の聲など聞こえた。すると女は氣色を變へて「早く、早く」と言つて急き立てた。自分は側らに脱いで置いた着物を一つ取つてそれを頭から被つた。女も起つて自分を遣戸の側迄送り出した。

「壍の橋は先刻お渡りになつた後で引き外されて居ります故、此處から出て、壍の岸を右の方へ遙かに廻つてお越しになると、築垣に狹い水門が御座ります。それを潜つて外へお脱けなされませ」と女は邊りに心を配り乍ら慌ただしく囁いた。

自分は無言の儘女に別れて外へ下りた。そして教はつた通り遠廻りをして壍を越して、狹い水門をやつとの事で潜り脱けてへ出た。もうさうなると無我夢中で、一目散に驅け出した。すると、自分の後から追ひ掛けて來る者があるから、走りながら振り向いて見ると、それは小舍人童であつた。

「そちはどうして無事で居た、侍共や馬の舍人は如何致した?」と、自分がいたく喜びながら尋ねると、

「殿がお渡り遊ばした後で、壍の橋を引きましたので、それから怖しく存じまして一人で密り築垣を乗り越して出ましたが、其の後で侍共もお馬の舍人も殺されたやうな音が聞こえま

した。殿の御身もどうなられたかと思ふと悲しくなつて歸ることも出來ませず、先刻から藪の中へ這入つて隱れて居りました處、人が走り出しましたので若しやと思つて出て參つたので御坐りまする」と童は泣き乍ら話した。

たつた一人の童が自分には百千の味方のやうに感じられた。自分達は互ひに手を執り合つて、京をさしてひた走りに驅けた。さうして走つてゐながらも、彼の女が、手づから鉾を胸に當てて突き殺される有様を想像すると、自分は眼がくらみさうになつた。

五條橋近來た時後を振り返つて見ると、阿彌陀ケ峯の北に當つて火の手が上つてゐた。計略が齟齬したところから、惡八原が討手を恐れて自ら家に火を掛けて立ち退くのであつた。

次第に熾んになる火の手が空一面眞赤に燒いてゐた。

美術家の欠伸

山本鼎

「頗る落着て居るさうだね」つて？

誰れがそんな噂をするんだい。ちつとも落着て居やあしないよ。そりあ、もう女房も貰つてしまつたし、月々百圓位の收入のあるまでに漕ぎつけたので（漕ぎつけたのじやない運よくひとりでにさうなつたのだ）舊い借金さへなければ衣食住の方は至極安泰さ。處が、心の方はたえず不安なんだ。第一日々の新聞を讀むだけでも落着けなくなるだらうじやないか。揚々然たる殺戮、虐殺、排日、同盟罷業、鮮人謀反、米價暴騰、ボリシェビズム、デモクラシシズム、曰く何、曰く何と美術家にとつて無用な、いや寧ろ有害な問題が多すぎる世の中だよ。而も人間にとつては容易ならぬ時代なんだ。

先刻も西瓜を包むで來た新聞紙を擴げて見たら、露帝末期の記事が載つて居た。ニコラス皇帝といへば、無人格ともいはれた程の好人物だ、帝政の頃は、停車場といふ停車場に聖像と同じやうに、むしろ聖像よりも大きい立派な油繪の肖像を祭られた共人なのだが、皇后皇女もろともにボリシエビキーの兵卒に銃

の事にて[illegible]り殺された上に屍骸にせられて[illegible]の[illegible]にさらし忍まれて了まつたといふことがないか。皇帝を殴り殺した兵卒はもしかしたら、露朝ニコラスの肖像に拭巾をかけて居た、停車場の役夫であつたかも知れやしない。處で、此兇行者は、曾て皇帝の僅かに拭巾をかけた時と同じ了見で、今度はボリシエビズムのために帝を虐殺したのに相違ない。驚く可きはそれとこれとが僕らに一年半ばかりの隔りに於て示された事だ。一體、どんな力が人心をさうまで左右するのだらう？。それは勿論愛じやない、理性でも感情でもあるまい、多分、創腦に鞭韃された亢奮だらう、いや、もつとたあいない事かも知れない、小兒が、更に大きな菓子を見せられると、今までしやぶつて居た菓子を惜氣もなく投げ出して新しいのを取らうとするね——あれかも知れない。何れにしてもだ、或人間の行爲が突然逆轉するのを見ると僕は脅かされるのだ。善人が惡人になるやうな平凡な事でなく、順逆二極の行爲が共に良心によつて指命されるといふ奇異な現象に脅かされるんだ。ちと附會にすぎるか知れないが、あれ程、自然の相を深刻に捉へたピカツソが急轉してキユビストになつて事や、林檎を、腐るまで寫生したセザンヌが、晩年『水浴』のやうな、大きな、サンボリツクな畫(タブロー)を試みた事にも脅かされるんだ。何故脅かされるかと訊(きか)れると言葉に

[illegible]も一致、何物かに強く支配されて居るからなんだよ。

ボリシエビズムのあの異常な傾潮に就ても見給へ、世界はどうも充分な理解を示さないじやないか、むしろ却つて共無法な表現に魅(シヤーム)されて居る態(かたち)じやないかね。

ときに、新思潮は吾々に厭な言葉をふつかけて居るやうだね。

『常に金權の奴僕たる美術家共よ、來るべき革命の日に於て、あはれ、汝等は汝等のパトロンの御馬前に討死せざる可らず』

こんな聲が聽えやーしないかい。癪にさはる聲だが、全くのところ、美術は古來所謂餘剩價値によつて榮えたんだよ。だから見給へ、封建時代が終ると共に美術は小規模になり、美術家は國王と交遊するかわりに商人と取引するやうになつてしまつたじやないか。四大美術は建築に綜合されずに展覽會に雜居して各々(てんでん)に顧客(こかく)を待ち、文化の王座から市場の末班へと零落してしまつたんだよ。けれども其代償として表現はすてきに自由なものになつたのさ、十八世紀末までは傳説と創意の調和が美術の要領であつたものを、今日では個性があくまで活されて、創意の

みが重んぜらるゝやうになり、そして美術に未曾有な形式——即ち未來派主義を生産した。處が此斬新な美術もやつぱり君、貴的族なんだ。何故ならば、未來派の保護者は金持の猶太人で、鑑賞家は主として大學校などに籍をおく虛無黨だといふからね。(美術は本來貴族的なものだ、とは君の持論だが、君の意は別にあるとして、美術が常に富裕者に奉仕して榮えた、といふ需用關係に認める場合にそれに論はないよ、が、併し本來美術は單に己れを好む者を好む利己主義者で、決して勞働階級に背をむけて居るのでなく、勞働階級が美術に背をむけて居るんだよ。だからいつか彼れ等が美術を求めるやうになれば、美術は彼等に順應するにきまつて居るのだ。さて、彼れ等の雰圍氣からどんな美術が生れるか、貴族的な美術に對してどんな創意が示されるか?。これは頗る興味ある問題なんだ。)

まつたく、美術は默つて居ると思想界からおいてけぼりにされさうだよ。どつちが間違つて居るのか知らないが、美術が昔のやうに國家にも個人にも必要でない事だけはたしかだ。必要なのは科學で、まさに中世紀の美術の地位を奪つて國の譽れを獨りで代表して居るわけさ、此風潮に後れじと焦せる吾が日本なぞではめんくらつちまつて、君、美術學校が工業學校の向ふをはり度がつて居るやうな有樣なんだ。賣場に百萬圓をほうり出す人は現れても、現代美術のために百萬圓を出さうといふ人は出て來ない。例の美術館建設問題でも見給へ、美術學校長が中心になつて美術家の大多數を網羅し、それに部下全部の美術記者が委員として加はつた大運動が、一向に反響がないので一座白けて居る始末さへ、皮肉にやしないかね、東京市では、立太子の紀念に丁度同じ位の豫算で公會堂建立を議決したんだぜ。——公會堂に美術館、立太子の紀念としてどつちがふさわしいと思ふ。——美術に冷淡どころじやないね。美術を閑却するのが進步した思想だと思つて居るんだよ。

『倫敦に美術はある、併し美術の雰圍氣がない』とは、英國の畫家の述懷だが、日本はどうだらう。雰圍氣どころぢやない、呼吸すらもありやしない。

美術家は實に多すぎる程居ても、臆病と自惚ればかりで、人間らしい、若くは美術家らしい愛嬌を有つた者はめつたに居やーしない、三十すぎれば藝術の話をするのは野暮なやうに思つてる手合が多くて。早い話が、展覽會歸りなどに三四人知り合の美術家が出會す、ビーヤホールへ立寄つての會話はこんなものだ。

『大層金がありさうに太つたぢやないか』

『これで[illegible]級者に[illegible]たとこさ
『だつてあんな大きな畫をやりつける勢じやないか』
『でも君大部分空(そら)だからね、たつた三週間でやりつけたんだもの……畫布(カンバス)が惡くつて困つた』
『時に、Yのは駄目だつたのだつてね』
『駄目だつた――可哀さうに大きすぎたんだよ。せめて三十號位だとどうにでもなつたのに、つて審査員が慰めたさうだ。』
『だが今度の畫はむしろ院展むきに出來て居たといふじやないか』
とか。
『何にしても素晴しい景氣だね。もう三分の二赤札ですぜ』
『おい、見たかいあれを！』
『え、何を、……ふむ、あの「へなへな雙紙」の前に立つて居た三人かい』
『あの眞なかに居たのが一件だらうじやないか』
『へえ――、あれかい、あの女は高輪の……』
『あれあれ、高輪のしやぶりつかすさ、先生、そんな事はちつとも御存じなく、高輪にからかはれて眞紅さ、アハッハッハッハッ』

『アハ・ハ・ハ・ハ・[illegible]』
『アハッハ・ハ・ハ・』
こういつた風な雜話の連續だ。
一體日本人は、大切な事となると默つちまう様があるんだ。思想の深遠さに壓されて無言となるのではなくて、思想が餘謄に貧弱だからなんだ。貧弱な思想を自から曝露するの恐を飾つて無言になるので、つまり見榮坊さ。
『人も喋れば眞理に當る』と誰れかゞ言つたが、ほんとに、正眞な心で、も少し話す方がいゝんだよ。すると感情なり思想なりを表現する訓練が出來て、生活が文學的な生彩を帶びるのだ。日本の小説が何となく面白味のないのも、日本人の日常が表現的でないからだ。殊に、小説の立役たる女連と來ては、賢い人程無表現だからねえ。
母『さう默つて居ちや困りますね。承知か不承知かあなたの思ふまゝを一と言お仰い、でないと先方へ御返事する事が出來ないから』
娘『………………』
母『じやお嫁にゆくさうです、つてお父様に申上やうかねえ』
娘『御兩親のお撰び下すつた方なら……………』
これが實相(リヤール)で、日本の娘の純良とせらるゝ型(タイプ)なんだ。もし西洋

だつたら、
父「して見るとお前はあの青年を愛してるんだね？……」
娘「いやいやいや？　我慢出來なくつてよ……あんな方の「青年」は何うしても我慢出來なくつてよ！
お父さん若し今一度そんな失禮な事をお仰つたら……わたし眞面目に言つてるのよ、よくつて、眞面目に言つてるのよ！」
父「ぢやお前の好きな樣におし、お前の心任せにするさ。あの人は今一人で待つてるが。もう歸つた方がいゝと婉曲に言はせようかね。
娘「いゝえ、いゝえ、それは餘計な事だわ、それに「婉曲」たんて猶更厭だわ、お父さん一人であの人の所へ出て頂戴、わたし後から直ぐ出ますから。わたしあの……「青年」にお詫をし度いと思つて。だつてあの人に恥をかゝしたんですもの。」

（「白痴」中のアグラーヤの言葉）

と、こうだ。而も内心好いてる青年に就ての言葉なんだよ君、實際日本人の生活は寂しいね。毛唐などは、汽車のなかで知り合つた一面識の人をつかまへても（それが外國人であつても同じだ）氣輕く話かけて、財布や戀人の事まで披瀝するからね。それはつまりこうなんだ。「自分の經驗して居る事柄は人間共通な問題でお互ひに考ふ可き事なんだ」と、これが彼れ等の思想なんだ。だから自分を表現する事に怯れないし、人の生活にもそれ〴〵の考察を傾けるんさ。處が、日本ではさうした態度は、馬鹿な醉つぱらひに限つて居るじやないか。

も一とつ、日本人は社會的の實際問題に冷淡な癖を有つて居るね、殊に美術家に多い（其くせ皆うるさい不平家なんだ）何故といふなら、見給へ、新規な思想がいろ〳〵唱へられながら、一つも話談には表現されて居ないじやないか。例へば今日の新聞にも傳へられて居る「文展改革案」でもそうだ。國家の經營としては、甚しく偏倚した組織になつてしまつて居るのを政府は、永い間傍觀して居るし、美術家は又飽きずにケナして居る。無論、美術家の製作生活其事にとつては、文展の消長などは七義的のこつたが。併し今日、製作品と國民との交涉は主として「展覽會」で支持されて居るのだから、出品者は展覽會の盛大を希望す可きが至當であり、爲政者は又、彼れ自らに展覽會を管理する場合、當代の美術の諸相を採つて國民に紹介す可き當然の義務があるんだ。

君も、屢々こういふ會話をするだらう（よく親友などとね）
「君は何故文展へ出さないの？」

「文展にはきらひなのですかね」

「そんな事を云はずに出し給へよ。みんな出したら、皆な審査で[illegible]つた方がいゝと思ふね。何といつても政府の主催だから一廉の連中の腕つかぎりのものが集るだらうからな」

「處が大違ひ、有力な畫家はだん／＼文展に背をむけちまつて、今では頭に、老人と其新しい生徒とで組織されてるんですよ」

「さうかねえ。でも郷里の方じや文展へ出ない内は一人前でないやうに思つて居るよ」

まつたく、國民の大部分は文展の出品を以て、すべて現代の代表的美術と信じきつて居るのだ。さて其責任の歸する處は何處だ、第一に政府、それから是れを不合理と思惟する者の全部だ。

も一とつは、似た様な理由で、美術學校の改革だ。中橋さんは「教育家も三四年で交代した方が良い」といふやうな事を言つたさうだが、まつたくそれがいゝのだ。美術學校の先生もせめて十年位で交代したらどうだらう。まあそれはとにかくとして、僕は製版科なぞを工業學校へ返納して、版畫科を置くやうにしてほしいのだ。何處の國にも版畫科はあるのに、日本の美術學校にばかりは無いのだからね、尤もそれだけの理由なら、[illegible]が。日本には、何處の國にも無い、又容易に有し得ない一種の版畫が過去に榮えて居て、現在にはなく、それに要する特種の技術なり製具法なりが遠からず、職人（アルチザン）の滅亡と共に亡びてしまはうといふのだから、今に於て是れを保護し、現代藝術と連絡する新しき生命の上に、再び此惠まれた種子を復活せしめ度いと思ふのさ。それは必ずしも美術學校の力をかりなくても叶ふ事かは知れないが。美術學校が、工業的の製版科に、經費を分つ位なら、むしろ其經費を傾けて此興味ある美術的事業に任じてもらひ度いんだ。美術學校長は、創作的版畫の社會的需要に就て不安を感じて居るやうだが、これは容易に解決される問題だと思ふよ。第一他の美術に比して需要面が世界的になり得る特長を有つて居るじやないかね。

次に、普通學に伴ふ美術教育の問題がさうだ。これなぞは將來の國民生活にも又將來の美術及美術工藝にとつても重要なる意味があるんだ。從來では美術教育は美術學校から始まるやうになつて居るが、そんな法があるものか。むしろぽつ／＼小學校からはじめていゝ事だ。中學を出る頃には歴史上の美術及現代の美術に關する大凡の地理を知つて居るやうでなければいけないじやないか。僕は、モスクワのアレクサンドル美術館（主

として模寫や複製によつて歴史的の美術を網羅した博物館）で當高頃の中學生に會つた時、此質問によつて、彼れに美術史上の知識が備つて居るのに感服したが、何、あの位に話せるのは大した事じやないんだ。教授法さへ整頓すれば、小學六年中學四年で充分だよ（一週に一時間としても、ざつと四百餘時間はあるからねえ）そして、美術學校へはいる者は更に其處で高級な知識、美學とか解剖學とかいふものを技法と併せて學ばうといふものだ。

要するに文部省は美術教育に就ての統一的な組織を求さなければいけない。それから、圖畫教授の改革だ。即ち此頃僕がおせつかいを始めて居る、臨本教育破棄自由畫奬勵の問題さ。

先日も小學校の先生が此處へ生徒の自由畫を持て訪ねて來て同感と疑問とを述べたが、僕は云つたのさ。

「皆さんが―それでは仰かなくてもいゝんですか？」とお仰る……試みに質問しますが。あなた方は今日まで文部省の公定した臨畫帳へ一齊に生徒を導いて居られましたか。して見ると、臨畫帳に充分な信認を置いて居らしつたのでせうか？。……私の理論は簡單ですよ。諸君が、一齊の生徒を臨畫帳へ導いて、模寫を修練せしむる事を廢めにして、一齊の生徒を自然へ導いて各人自由に見る處の物を表現するやうに仕向けてもらい度い、といふのです。「放つておいたら兒供は不完全なものを描くだらう」とお仰いますね。では、臨畫を模寫すれば完全な畫が作られるとでも御考へなのですか？。第一、大人の畫に對して兒供の畫が不完全だといふ事は美術上では云へない事ですよ。美術には客觀的な『完全』といふ究極な標準はないのです。單に各人が無限に廣い世界へ置きつはなされて居るだけですよ。だからもし強いて『完全』といふ言葉を與へるならば或人が其欲する處を遺憾なく表現し得た場合に限るでせう。假りに小兒が大人のやうに喋（しやべ）つたとしたら、小兒の魅力は失はれます。反對に大人が小兒の動作をするとしたら馬鹿氣た事じやありませんが。小兒には小兒の感情理性――生活があるんです、印象、感覺、認識（認識は無い位稀薄だ）に捉えられる彼れ等の實相（リアル）が有るのです。ですから、眼と手のあゝ兒なら其處に表現が指命されて、彼れ等の美術が生れ得るわけじやありませんか。同じ形式で、中學生にも、女學生にも、大學生にも美術學校生徒にも、美術家にも、それぞれの美術が生れ得るのです。諸君は小兒を愛し小兒に魅（チャルム）されながら何故小兒の『創作』を愛さないのでせう。

先日私は或教育家から『自由奬勵は結構だ、但し幸ひに美術家が生徒等を指導し得る場合はいゝが小學校の教師に在つて

は[illegible]......」

云々、といふ疑問をよせられました。私はそれに答へて「それは考へ違ひです。從來の教授法こそ或は美術家を要しますが、自由畫――即ち小兒の創作を奬める場合には不必要です。むしろ往々自から描く教師といふものは、自から描くがために小兒の自由に描なる干涉をしたがる癖を有つて居ます。自由畫教授の第一の資格は兒童の創造を愛すといふ事なんです」と云ひましたが。まつたく要領はそれだけです。此思想から、各地方に適應したさまざまな教授法が生れ得ると信じますよ……』

とね。何にしても、大いにプロパガンダをやらなければ駄目だ。それには僕の精力が間歇的だし、お金もなさすぎるんだ。幸ひにも、信州の教育界では、此問題に大いに興味を有つて居て、第二回兒童自由畫展覽會が第一回のより大規模に來月中旬、下伊那の第七支會主催で龍丘小學校で開かれる事になつて居る。東京でも先日同志者が協議會を開いて、

一 兒童自由畫協會を設立して此目的の完成に盡す事。

一 中央に此主義に基く定期的展覽會を發起する事。

一 此主義に基く新規なる教師用書を著述する事。

等を決議した(多分中央の第一回展覽會を此十一月開く事になるだらう)。

[illegible]、[illegible]の教育會には、各郡[illegible]年に二度位、郡教育會と同時にでも開催して平生の[illegible]他に展覽し、優秀のものを選むで中央へ送り、中央ではそれ等を集めて展覽會を催し、出來得べくんば畫集をも發行する、といふやうな國家的な組織にまで達するのを空想して居る次第さ。だが、斯様なおせつかいのためになけなしな精力が製作生活から掠められる事を怖れないではない。……併しそれもこれも等しく僕の創作(クリエーション)だ、それに、もしかしたら、僕にはさういふ仕事が適して居るのかも知れないからね。ゴンチヤロフだかの小說から、『オブロオモフ式』といふのが示されたさうだが、それは、オブロオモフといふ小說の主人公か、教養もあり智力もあり、創意(オリヂナリテイ)もあり、門地財力さへもありながら、氣がついて居る樣々な良い事は單に想つたゞけで、自分に心から美しい戀を寄せた良家の女にも單に無精から明瞭な態度を示さず、たうたう下宿屋の後家さんとずるずるにねんごろになつて、ねそべりながら生涯を終つちまつたといふ、――それから出た事だという。が吾々の周圍にもオブロオモフがだいぶ居る。自分もそれに遠からずだが、

『君の本能には傳道慾がある』とひやかされたのに强(こん)にちきなすに、精一ぱい今日樣につくさうとしやァよ。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

いや、長々と喋つて君も呆れたらう。ほんとの事を云へば僕は此處へ來てからすつかり落着いてしまつたんだ。落着いた處じやない。欠伸のし通しなんだ。

自然を眺めては欠伸、畫を眺めては欠伸さ。つまり、未だに何の奇蹟も現さない己れの性格や才能に飽きて居るせいだか、それよりも十餘年來見古した我が畫の平凡な表現にあきあきしたんだ。

寫生家にはよくいふ自然の征服なんて事はないね（誰れだつてあるもんか）創造だつてない。もしかしたら自然の胸から流れ込んだ神秘があればあるんだが、實際は神秘の代りに苦行があるばかりだ。それは吾々の人生とよく似て居る。

寫生家の極致を君は知つてるかい！。寫生家の極致は、筆を投じて歎じる事――それだ。

（八年八月十八日信州長倉村にて）

日本溫浴史話 其二

中桐確太郎

（四）佛教の溫室思想

世界文化史上、特異の現象ともいふべき日本溫浴は、上述の如く、禊祓思想と温泉趣味と相結びて發達し來りたるものであるが、更に佛教傳來の溫室思想の加はるに及んで一段の進歩を見るに至つたといふべきである。

○佛典における浴

佛典が浴に關して如何なる事を記るしてをるか、未だ佛典の全部を通覽せざる私の何ともいふことの出來ぬ處であるが、私の知り得たる處に於ては、浴に關する佛典の記事は、少くも極樂淨土に於けるものと、娑婆世界に於けるものとの二つに別けることが出來る。

○極樂淨土における浴

につきては平等覺經、阿彌陀經、殊に無量壽經、大乘見王經

に詳しく説かれてをる。今、大善見王經（[illegible]）を松本文三郎博士の重譯せられたるもの）の中から左に抄錄する。

一日大善見王、自から以爲らく、今我此椰子樹の間、百弓、各一蓮池を設けんかと、蓮池即ち日ならずして成り、金、銀、瑠璃、玻瓈、四種の寶珠之を莊嚴す、一々の蓮池四階ありて、金、銀、瑠璃、玻瓈、四種の寶珠之を成す。金階には黃金の欄楯ありて銀鉤之を支へ、銀像之を飾る。銀階には白銀の欄楯ありて、金鉤之を支へ、金像之を飾り、瑠璃階には瑠璃の欄楯ありて玻瓈鉤之を支へ、玻瓈像之を飾る。玻瓈階には玻瓈の欄楯ありて瑠璃鉤之を支へ、瑠璃像之を飾る。蓮池の周圍には金銀二重の垣ありて之を圍繞す。金垣は銀柵と銀柱、並びに銀鉤之を成し、銀垣には金柵と金柱並びに金鉤之を成す。

大善見王、又以爲らく、今我庶民の爲に、青蓮、青水蓮、白蓮、白水蓮を植え、季に及びて各之をして美花を咲かしめんかと、是亦日ならずして成る。而る後大善見王は浴丁をして池邊に侍せしめ、四時此に來るものをして之に浴せしめ、池邊更に休舍を設け飢者は此に食を得、渇者は飲を得、衣なきものに衣を與へ、車なきものには車を與へ、抵[illegible]には妻を求め、貧者には財を與へ、[illegible]るを得せしむ。

是等淨土教典の外例せば眞言密教經典の中などにも、八功德水盈滿せる天の歡喜池の話がある。是等を以て、歐洲民族の描ける歡樂郷の浴池と比較するは、誠に興味あることとなれども、暫く他日の研究に讓ることゝする。

○娑婆世界に於ける浴

につきても、之を說いてをる佛典は種々あるのであるが、浴のことを主題としてをるのは蓋し佛說溫室洗浴衆僧經（略して溫室經）であらう。釋尊が曾て摩掲陀國內沙壜山中に在られた時、王舍城內の大長者の子にして且つ大醫王たる耆域といふ人が來り見え、釋尊を始めとし諸衆僧菩薩大士を請して、其溫室（浴堂）に於て澡浴せしめまつらむことを願ひ出でた。釋尊大にその志を嘉みせられて、之が爲に澡浴に關する七物、七病、七福を說かれたといふのが此經である。所謂七物とは澡浴を施すにつきて必要なるもので（一）然火、（二）淨水、（三）澡豆、（四）酥膏、（五）淳灰、（六）楊枝、（七）內衣等である。所謂七病とは澡浴によりて除去せらるべきもので、洗浴そのものゝ功德である。即ち（一）四大安穩、（二）除風病、（三）除濕痺、（四）除寒氷、（五）除熱氣、（六）除垢穢、（七）身體輕便、眼目

精明、と數へられてゐる。而して所謂七福とは衆僧の七病を除去して此の如き供養をなすことによりて便ち得らるべき果報なのである。即ち

(一)、四大無病、所生常安、勇武丁健、衆所敬仰。
(二)、所生清淨、面目端正、塵水不著、爲人所敬。
(三)、身體常香、衣服淨潔、見者歡喜、莫不恭敬。
(四)、肌體濡澤、威光德大、莫不敬歎、獨步無双。
(五)、多饒人從、拂拭塵垢、自然受福、常識宿命。
(六)、口齒香好、方白齊平、所說敎令、莫不肅用。
(七)、所生之處、自然衣裳、光飾珍寶、見者悚息。

等である。釋尊なほ告げて曰く、『七福如レ是。此の因緣によりて、或は人臣となり、或は帝王となり、或は日月四天神王となり、或は帝釋轉輪聖王となり、或は梵天に生れて受福無量、或は菩薩となり發意持地、功成志就、遂に作佛を致す』と、而して例の如く偈を以て之を讃美し、重ねて耆域に告げて曰はく、『彼三界人天の品類を視るに高下長短福德多少、皆、先世の用心、等しからざるに由る、是を以て所レ受各異不同此の如し、諸の福報を受くるは皆、聖衆の洗浴することに由りて之を得るのみ』と、而してまた弟子阿難に告げて、是れ皆、『諸佛所說、非ニ我獨造ニ』云々と保證せられてゐる。

以上は『溫室經』の綱要で、實に私が溫室思想と名けてゐるものの根據となり、源泉となつてゐるものであるが、是れは娑婆世界（印度）の浴についての說なること云ふまでもない。

○浴法及び浴場

抑も此娑婆世界(印度)に於ける浴は、如何なる場所にて、如何にして行はれたのであるかといふに、溫室經には明かに記してないが、種々の戒律書によれば可なり詳しき想像畫を描くことが出來る。最も印度の南方と北方とに於ては、浴場の構造や、入浴の作法などにも異なりたる定めをなしてゐることであらうから、一概にかうと定めていふことは出來ぬと思ふ。今、英譯東方聖書の Vinaya の卷に收められたる Mahâ-vagga や Kulla vagga 等によりて察すれば、普通に浴と呼ばれるものには少くも熱氣浴と冷水浴との二種があるやうに思はれる。

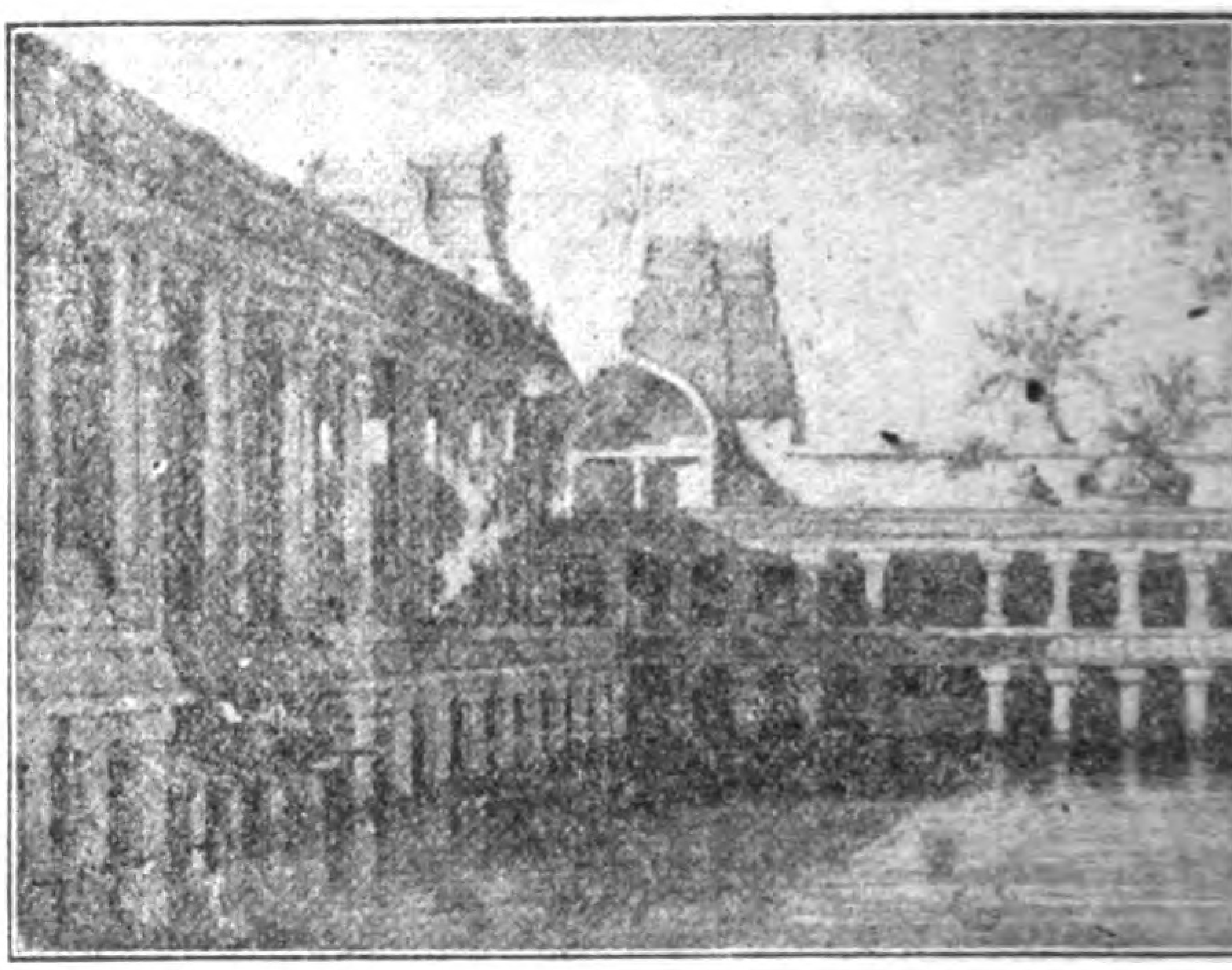
○熱氣浴 を行ふ室を Jantâghara といふ。溫室と譯すべきであらうか。溫室には一の竈がある。（小室には其一隅に置き、大室には其中央に置くことになつてゐる）浴者は室内の腰掛に身を安くのであるが、焔火、顏をやくが故に、香料を和せる泥土を顏に塗り、體をやくが故に、水瓶をそなへ絕えず水を體に注ぎかける。かくて十分に汗をかくに至りたる後、次ぎの室に入りて淨水をあび、更に砂利若しくは石を敷きつめたる一

入りて濕を納ることになつてをる。是によつて見れば之は露西亞式の蒸氣浴でもなく、又日本式の蒸氣浴でもなくして、羅馬式または土耳古式なる熱氣浴である。溫室經にいふ所、幾分か之に類してをる。

○冷水浴 を行ふ所を Pokunaといふ浴池と譯すものであらう。天然の池、若しくは人工の溜池を用ゐる。混濁を防せがんが爲に、甎、石、若くは木材を以て内部を張りつめ、階段を作り、欄を備へ、また時としては屋根を設けることもあるさうである。義淨の南海寄歸内法傳に詳しく記してをるものが是れであらう。

又復所在之處、極饒池水、時人皆以レ穿レ池爲レ福、若行一驛則望見三二十所、或寛一畝、五畝。於ニ其四邊極ニ多雜樹一、高四五十尺、池乃皆承ニ雨水一、湛若ニ清江一、八制底處、皆有ニ世尊洗浴之池一、其水清美異ニ於餘者一。

義淨はなほ那爛陀寺の浴池に於ける浴法を詳述してをるが、かくの如きは釋尊の説かれたといふ溫室經には無い處であつて、



此圖はファガッスンの『印度古代建築』中に収めたものである。南方のセリンガムに於けるものにて、時代も西紀第十二、三世紀頃といふ鑑定であるから、大分後れたものであるが、人工浴池なるものを想像する資料として掲げた。

浴み[illegible]見王經に見ゆる浴[illegible]の趣きに似て[illegible]といふ[illegible]る。

印度に於ける浴には此の他に治療の爲に用ゐる蒸氣浴もあるやうであるが、普通に浴と名けらるゝものは上記の二種に限つてをつたのであらうか、諸々の經典にある浴も、此二種の何れかにのみ關するものであらうか、今は何れとも斷定することは出來ぬが、氣候風土の異なれる支那又は日本に於ける場合には浴場浴法も其形式を異にすべきは當然のことであらう。故に同じく溫室といふも必ずしも熱氣浴ではなくして、溫湯浴と見なければならない場合もある。故にまた溫室思想といふも、換骨奪胎して、溫室經そのまゝのものとは大に趣きを異にして來るのも餘儀なき結果であらう。以下述ぶる溫室思想もその積りで領會し

て頂きたい。

○所謂「温室思想」

佛教の洗浴觀は人類思想史の上に特異の地位を占めてをるものゝやうに私は思うてをる。温室經に結びつけて假りに之を「温室思想」と名けた樣な研究を經なば中々面白いものがあるかと思ふが、私の粗略なる調査によれば、先づ之を次ぎの二つの方面より見ることが出來る。

其一、修養

洗浴に關する種々の清規戒律を定め、入浴の機會を利用して、精神を養ひ、德行を修むるの資けとなさんとすることを姑く修養と名づけた。

華嚴經の淨行品に菩提心を發する者の須らく持すべき百四十種の願を掲げたる中に

○若見浴池　當願衆生　入佛海智　問答無窮
○若入水時　當願衆生　深入佛道　等達三世
○澡浴身體　當願衆生　身心無垢　光明無量

等の句がある。是等に基きたるものであらうが、華嚴宗にては賓頭盧尊者を奉請し、莊嚴なる浴室作法及沐浴作法を行ふことになつてをる。

禪宗にては跋陀婆羅菩薩が十六開士と共に入浴し忽悟水因したるの故事に因みて、浴堂に此の菩薩を奉祀し、入浴に臨みて先づ之に華燭を備ふる作法がある又或る寺院にては十六開士の像に一々明衣を供ふるなど頗ぶる叮嚀なる儀式を行ふ所もあるといふことである。

また眞言宗に於ては、金剛頂瑜珈中略出念誦經に定めたる四種洗浴の法を行ずべきことになつてをるさうである。所謂四種洗浴のうち第一、住三種戒（遮惡修善、衆生救濟の自利利他兩戒律を護ること）、第二、發露勸請（自己の罪業を懺悔し、諸佛菩薩の說法利生を勸請すること）、第三、以レ印契供養（印契を以て本尊を供養し、本尊の三密と相應涉入すること）の三種は理洗浴であつて、精神的に身神を清淨ならしむるもの、而して第四、以レ水洗浴といふが、物質的に入浴することであつて事洗浴と名けてある。此の事洗浴を行ずるには、先づ水に入りては天の歡喜池を想ひ、五方に五部を觀じ、五佛の灌頂を受くることを觀ずべしとのことである。五方、五部、五佛とは

中方――如來部（佛の總德人格）――大日如來
東方――金剛部（佛の大菩提心）――阿閦如來
南方――寶　部（佛の福德）――寶生如來
西方――蓮花部（佛の事業）――釋迦如來
北方――羯磨部（佛の知德）――阿彌陀如來

をいふ。かくして物質的洗浴を直ちに精神的洗浴に一致せしめんとするのであるが、随分念の入つた作法と申すべきであらう。

その他の宗派にも同様なるものが、それ〳〵あることと思ふが、要するに浴の功徳を以て修養に利用せんとする思想であると謂つてよろしからう。

其二、供養

佛教温室思想の一面として見たる供養とは、湯を立て、浴を施こして、佛子に供養し、以て無量の福を受け、遂に佛と成るの因を作らんとすることである。施浴が此の如き功徳を有することは温室經の所説である。即ち衆僧を洗浴せしむることの反報は單に七福を得るのみに止まらずして、「功成志就、遂致作佛」と說いてある。此の思想は修養の思想と相並びて我國に行はれ、種々の變遷を經て、日本温浴の發達に大なる助けを與へつゝあるのである。故に以下に此方面のことを主として述べて見ようと思ふ。

○温室經の渡來弘布

印度の佛典が支那、朝鮮を經て我國に渡來せる事實につきて正史の傳ふる所は、欽明天皇十三年（西紀五五二）百濟國王、佛像と共に經論若干を献すといふを以て初見とするが、爾來同代のことも渡されし、其の來往も頻繁になり、經論もさかんに行はれたのであるから、聖武天皇天平七年（西紀七三五）僧玄昉經論五千餘卷を齎らして歸朝せりといふまでには殆んど凡ての經典は渡來したことゝ思はれる。而して此等の經卷のうちに、浴に關するもの、殊に温室經も存在してをつた事は疑ふまでもない。而して天平寫經の中にも『温室經』の目がある。即ち『大日本古文書卷十追加四』の中に收めてある天平勝寶三年二月の造東寺司解や、東大寺寫一切經所解の中請經師等布施事の中に温室經は他の三經と共に「依進經師天平廿年十一月三十日宣所奉寫」と注せられてある。また西紀九三七年頃の撰述にかゝる倭名抄にも此經を引用して色々の名目を掲げてをるのを見れば可なり讀まれたに相違ない。之よりはずツと後れるが、鹿ケ谷謀反者の一人たる平康頼の作（治承年間西紀一一八〇頃）といはるゝ寶物集に

又佛に灯明を施し、僧に湯を沸して浴みする是の如きの施も多く侍る。されば佛の御膚金色なることは過去にて湯を沸して人に施し給ひし故也。阿難の今、佛弟子たる温室の功徳によるが故也。此故に祈成長者は温室を以て第一の功徳にせしなり

とあるより見れば、温室經が可なりに弘布した事が察せらる

る。併し是れ等のことよりも、凡體的の事實は一層著るき證明を提供してをる。それは寺院内の溫室及び其の盛んたる使用にあらはれたる此思想の實現である。

○寺院內の溫室

溫室殊に浴池は印度にかては、所によりて可なりに用ゐられてをつた事は前に揭げたる義淨の記事によりても察せらるゝが、支那に於ては、さほどに採用されなかつたやうに見える。後唐の知暉といふ人の傳に、梁の乾化四年（西紀九一四）、自二江表一來二帝京一、覩二諸梵宮一、無レ所レ不レ備、溫室洗二雪塵垢一事有レ闕焉とある。只此一事を以て凡てを推すことは出來ぬが、備はらざる所なき迄に完全せる諸々の寺院に、獨り溫室の設備が闕けてをるなどは、日本に於て浴堂が七堂伽藍の一つになつてをるのに比して著るき對照をなしてをると謂はねばならぬ。尤も支那にも昔しは立派な浴堂もあつたに諱ひない。洛陽伽藍記（西紀五四七頃の著）の光寶寺に條の左の記事があるにても察することが出來る。

有二三層浮圖一所一、以レ石爲レ基、形製甚古、畫工雕刻。隱士趙逸、見而歎曰、晋朝石塔寺、今爲二光寶寺一也。人問二其故一、逸曰、晋朝三十二寺、盡皆埋滅、惟有二此寺一獨存。指二園中ノ一處一曰、此是浴堂、前五步應有一井。衆僧掘レ之、果得二屋及井一焉。井雖二頗深一、甎口如レ初。浴堂下猶有二石數十枚一、當時園地平衍、菓菜葱青、莫不歎息焉。

其他玄奘の住した西明寺（西紀六五八建立）にも浴堂があつた事は、それを模して建てたといふ大安寺（後に述べる）により て推すことが出來るし、又唐の道宣（西紀七七一——八四七）の教戒律儀にも『入溫室法』などの詳しき定めもあるから、正式には溫室を備ふることゝなつてをつたと云つてよい。只何となく引立たず形式に止まりて時々廢滅せることは想像に難くない。此點は日本と大に趣きを異にしてをる處であらう。

たほ支那寺院に於ける溫室の有樣につきては識者の示教を切に仰ぐ、啓蒙の慈を賜はらば幸甚。

日本に於ける最初の寺は欽明天皇十三年（西紀五五二）蘇我稻目が其の向原の邸宅を捨したるに起るといはれてある。其後、推古天皇卅二年（西紀六二四）九月の檢作の時に至るまで、七十年許の間に建てられたる寺院四十六箇寺（僧八百十六、尼五百六十九）といふことであるが、私の調べ得たる所にては、最初の數ケ寺には溫室の附設は無かつたやうである。これは多分、未だ、正式の建築法によれる寺院で無かつたからであらう。併しながら、少くとも天平十九年（西紀七四七）二月十一日附の調査にかゝる資財帳によれば、法隆寺（西紀六二三）に

湿室壹口（長七丈八尺、濶三丈二尺）とあり、大安寺に湿室壹口（一口、長六丈三尺、廣二丈。一口、長五丈二尺、廣一丈三尺。一口、長四丈、廣一丈二尺。以上葺檜皮）とあるによりて見れば、寺院には可なり以前から、立派な湿室が附設してあつたことが察せらるゝ。蓋し、佛教が新しく輸入せられ、上下の信仰をうけて漸く盛なるにつれて其堂舍たる寺院も成るべく正式に造築し本儀に違はぬやうにし、模範も出來る丈根本の處に求め、出緒を神聖にしやうとするに至るのは自然の人情であらう。扶桑略記の左の記事は即ち此のことを示してをる。

天武天皇白鳳九年（西紀六八〇）十一月、因ニ皇后病ニ造ニ藥師寺ニ……爲憲記云、藥師寺、淸御原天皇之師僧祚蓮入定見ニ龍宮様ニ習作也。

また此の點より見て面白いのは

○大安寺の緣起

である。大安寺はもと聖德太子の御願によるもので、推古、舒明、皇極、天智、天武、元明の諸天皇が相繼紹して、遷移、改造、また改名せられつゝ來た由緒正しい寺であるが、聖武天皇に至りて、また此寺を一層紹隆せんとせられ、遍ねく綸命して良工を捜求せられてをつた。丁度此時、唐より歸朝せる道慈といへる沙門が、天皇に奏して申す樣、『道慈、問道求法、自ニ唐國ニ求ニ樂器ニ、但有ニ一宿念ニ欲ニ造大寺ニ、冀國ニ取西明寺結構ニ、願ニ聞ニ之ニ』天皇聞しめして大に悦ばれ、我願滿つとなされ、天平元年（西紀七二九）、道慈に敕して此寺を改造せしめられたのであるが、天平十七年（西紀七四七）、もとの名大官大寺といへるの名を改めて大安寺となされた。其時の詔によれば、『天下大平、萬民安樂之義』であるといふことである。而して菅公の書寫と傳ふる大安寺緣起に

中天竺、舍衛國祇園精舍、以ニ兜率天宮ニ爲ニ規模ニ焉、大唐西明寺、以ニ彼祇園精舍ニ爲ニ規模ニ焉、本朝大安寺、以ニ彼西明寺ニ爲ニ規模ニ焉。寺在ニ大和國添上郡ニ。其寶塔、花龕、佛殿、僧房、經藏、鐘樓、食堂、浴室、內外重構、不レ遑ニ具記ニ。

とある。（淡海眞人が寶龜六年（西紀七七五）四月十日に作れる大安寺碑文には西明寺に模して造れることは記してないが、口傳にてかく傳はり來つたものと見へる。）即ち由緒を大唐西明寺（前記玄奘の住したる名寺）より印度の祇園精舍に、それより更に溯つて兜率天の摩尼寶殿にまで持ちあげたものである。此寺は東大、西大兩者に對して南大寺と呼ばれてをつた名刹であつたが、後一條天皇の寬仁元年（西紀一〇一七）に燒失したのは惜みてもあまりあることである。

○浴堂の地位

さて此名刹に於ける浴堂は如何であつたか。其の存在せることとは縁起にも明記されてをるが、其の占めてをる地位は如何であつたらうか。寺院焼失の後は何の跡形も分明ないが、當時の伽藍圖といふもの、高野春秋編年輯錄に掲げてある。それによれば、金堂の西北方、立派な地位に置かれてある。また大安寺の舊記にも

大湯屋

件湯屋者金堂ノ在二戌亥方一。爰者弘法大師鑄レ之、銘文者、藥師之十二神云々。毎月在レ湯、不レ退轉者也

などとある。

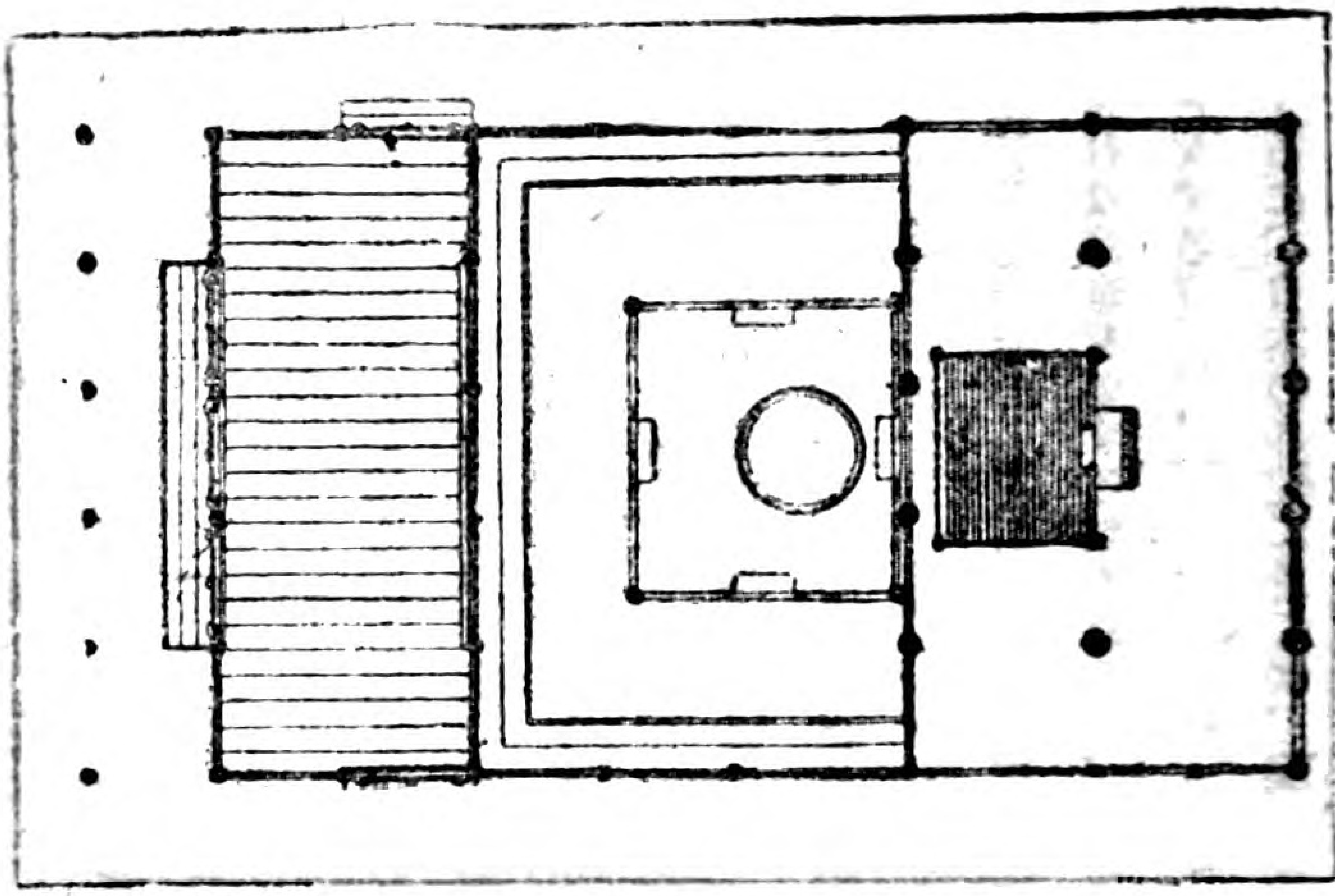
大安寺の規範となりし西明寺の圖、若くは詳しき記錄は未だ見ることを得ざるが故に如何であつたかは知る由もないが、更にその規範であつたといふ祇園精舍にあては戒壇圖經などによりて見るに、浴堂は一院として相當なる地位を占めてをゝ。是等に典型を取りたる我國の寺院に於て、浴堂が七堂伽藍の一つとして嚴立するに至れるも怪しむに足らぬ。(龍宮を模せるといふ藥師寺の圖は未だ見ることを得ざるが、南西大寺中古伽藍圖に於ては、湯屋坊は光明殿院と二聖院との間に置かれてある。)現今に於ては、他の理由があつて、その儘に使用せられてをるものは少ないと思ふが(京都東寺の浴室の如く、今もなほ毎月數回、日を定めて開浴してをるものや奈良法華寺に於て年二回施浴をなす如きは類例稀であらう。)、建造物として大寺院の境内に堂々として屹立し、中には國家の特別保護を受けてをるものもある。奈良東大寺の大湯屋、京都の建仁寺、妙心寺、大徳寺、東福寺等に於ける浴堂はその著るしきものであらう。奈良興福寺の大湯釜を初めとし、あちこちの寺院もしくは神社などに奉納せられて存在する湯釜湯船は何れも盛んなりし當時を物語つてをる。

京都西本願寺飛雲閣内の黄鶴臺は一の浴室であつて、完全な形のまゝに保存せられてをるものであるが、是は今こゝに述べる意味にての浴室とは、少しく趣きを異にしてをるものであるから、是は別の機會に話すことゝして姑く置き、寺院内溫室(湯屋、浴堂)の代表として、最古且つ最大と思はるゝ東大寺の大湯屋につきて少しく記して置くことゝする。

○東大寺の大湯屋

東大寺は聖武天皇の御願に因りて建てられたる總國分寺で、廿五ケ國の寄進により、六十一年の歳月を要して完成せる大寺院であつたが、創立後四百餘年の後、治承四年(西紀一一八○)十二月、平重衡のために焼亡したので、俊乘坊重源上人こ再興大勸進となり、後白河法皇の信頼と源頼朝の助力とにより

て建久六年（西紀一一九六）にその大佛殿の落慶式を行つた。大湯屋はその時に造られたものである。東大寺諸伽藍要錄に左



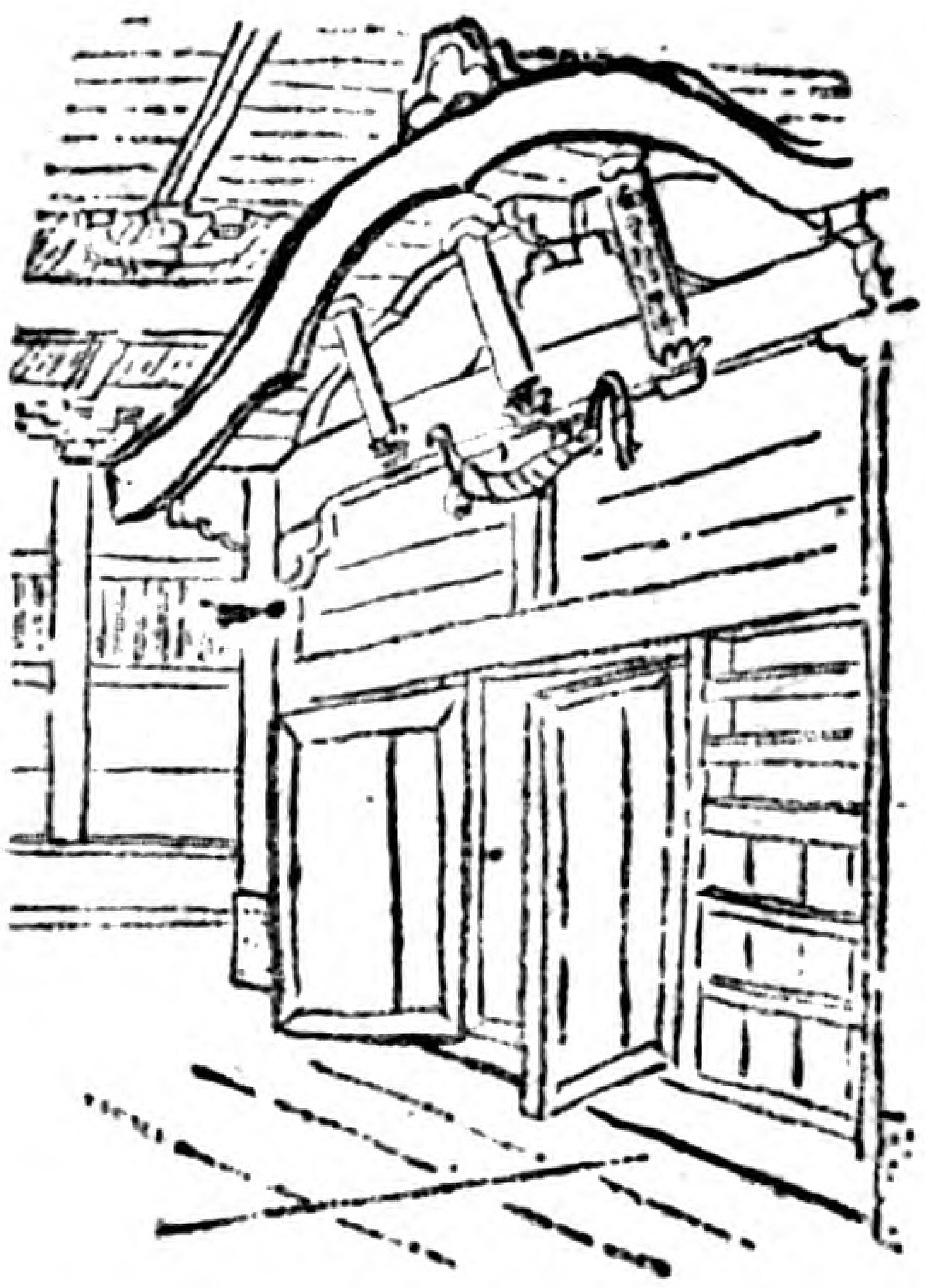
東大寺大湯屋　平面圖

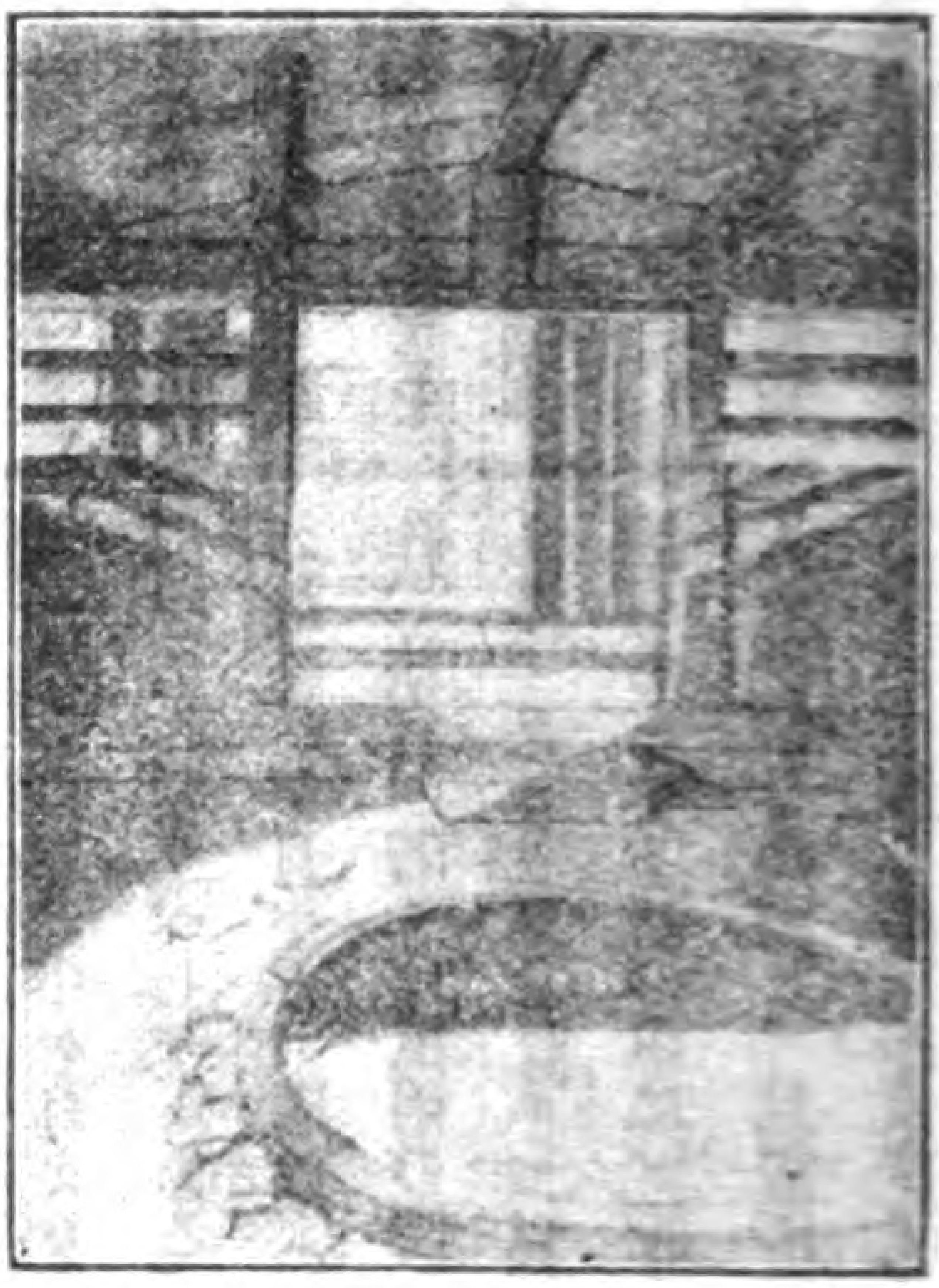
の如くある。

一、浴室在大湯屋　東西六間、南北十六間。

免永祿火難、于今存

建久年中大佛殿再建之時、爲ニ大衆僧並鍛冶番匠等ニ造レ之、懸ニ南無阿彌陀佛之額ニ、重源上人自筆。





大佛殿は永祿十年（西紀一五六七）十月松永久秀のために再び燒かれたのであるが、大湯屋は此火災を免れたものと見ゆる。内部の構造は果して如何であつたか。玆に掲げた平面圖は現在のものである。向つて左は入口で、廣き板の間を通つて次の室に入れば、更に破風作りの門（圖參照）を有する小さき室がある。そこに大きな鐵の釜が据えられてをる（圖參照）更に其次の室に蒸風呂式の設備があり、右の端の廣き室は火たき場へである。

此平面圖は文部省所藏によれるもので、他の二つの圖は中澤弘光氏のスケッチである。

重源上人建造の當時、果して此の如き蒸風呂式の設備があつたかどうかは疑はしい、或は如此ではなかつたかと思はれる。元祿五年（西紀一六九二）頃、公慶上人が修造を加へたといふから、或はその時、現在のやうになつたのではあるまいか。此等の事につきては、別の機會に卑見を陳べて、識者の教示を仰ぎたいと思つてをる。

とにかく東大寺に於ても此浴室は特異の一つと見做されてをつた。それは『東大寺造立供養記』に、新立の東大寺を舊時のものと比較し、十二の優勝を數へてをる中の一ケ條に

鑄二鐵湯船一爲二永代不朽之寺物、大湯屋之寶物一也。薪以二昔之半分一爲二今之湯木一也。雖易之一道、誰不レ察レ之哉

といふてをるのにてもわかる。殊に此大湯屋は重源上人の思想に密接の關係があつて、他の場合の如く、賓頭盧尊者や、跋陀婆羅菩薩を奉祀せないで、『南無阿彌陀佛』の額を掲げてをる。是れは注意を要する點であるが、之につきては後段に述ぶることゝする。

要するに、日本の寺院に於ては、溫室（浴堂）は可なりに重要なる地位を占めてをつた。而して單に建築造營上かくあつた許でなく、其使用を奬勵もし、また實際、盛んに之を使用したものである。

○盛なる使用

佛教の本土たる印度に於ても義淨の南海寄歸傳にもある通り、地方によりては洗浴を毎日行つた處もあるやうであるが、併しその場合多く冷水浴であつたやうだ。日本に於けるが如き、溫浴は如何であつたらうか。冷溫の區別は明かにすることは出來ぬが、佛教の戒律としては、洗浴を度々することにつきては寧ろ否定的態度を取つてをるやうである。例せば Patimokkha（毎月二回、月下に開く布薩の大會に於て、會主たる上座の指名に應じて朗誦する懺悔の文）にかゝげたる九十二條より成る Pakittya（贖罪律？）の第五十七條に『比丘にして、特別なる場合の外、半ケ月より少なき間隔を以て入浴するものは贖罪律に該當すべし』とある。こゝに所謂特別なる場合とは暑期の最終一ケ月半と、雨期の最初一ケ月とであつて、疾病、勞作、旅行、若くは風雨の時なども此除外例に入るといふことである。又 mahāvagga V. 13. に（一アヴンチ人が釋尊に謁して述べんとする語の中に）『世尊よ、南邦及びアヴンチに於ては人々洗浴を熱愛し、且常に水を用ゐることによりて清まらんことを要す願くば南邦及びアヴンチに於ては常に浴を取ることを許されんことを』（以上共に英譯東方聖書 Vinaya にある）といへることがある。即ち佛陀の誡めとしては、洗浴は特別の場合

の外は、半ヶ月毎に一回位になむべしとするにあるのである。

然るに釋日本紀、聖武天皇の條に

天平九年（西紀七三七）八月、命四畿内二監及七道、諸國僧尼、清淨沐浴、一月之內、二三度、令讀最勝王經。

とあるし、また僧堂清規の開浴法には

寒月は五日一浴し、暑天は毎日淋汗す。寒暑の際は準じて節す。或は時々洗脚、住持の指揮に順す。

とある。僧堂清規は面山瑞芳の編述で、今私が自分で制限を置いてをる時代とは大分後のことではあるが、此書は所有ゆる諸清規を斟酌して、特に我國の僧堂に適するものを定めたものであるから、我國寺院の清規を代表するものと見て必ずしも時代錯誤として棄つべきものでもあるまいと思ふ。さて此の天平敕令の沐浴も、僧堂清規の一浴も淋汗（風呂に入ること）も共に溫浴（廣義の）であつたことは疑ふべくもない。いづれにしても、洗浴に關する佛陀の戒律に比して、頗る肯定的であると謂ふべしだ。

而して之を以て、更らに基督教が浴に對する態度に比すれば、誠に思半ばに過ぐるもののあることを發見する。聖尼ポウラが『身體及び衣服の清潔は靈魂の不淨を意味す』といひて其配下の尼僧を叱責せし極端なる時代のことは暫く措くとする

も、中世紀に至つて[illegible]と云ひし時代に於ても、病氣の時の外、普通の僧侶は年に只二回の浴を取るを常として

をつた。佛國クラニーのベネヂクト派寺院にては入浴用の手巾を只三筋丈備つけて置き、其一つは新發意のため、一つは學僧等のため、一つは作家同行衆のためだといふことであつた。第十七世紀の終りに於てさへ、マザリン夫人が遁世して寺院に入つた時、其脚を洗ひたしと望みし許にて、全院の非難を崇り、直ちに入院を拒絶せられたといふことである。されば其手だに曾つて洗ひしことなしと誇れる聖僧の尠からざりしといふも驚くに足らぬことゝなる。基督教が是の如くに洗浴を排斥したことは、相當の理由を有つてをる一時の變態であつたであらうが、さるにても、之を日本寺院生活の洗浴に對する態度に比して餘りに甚だしき懸隔なりといはねばならぬ。

とにかく日本寺院内の溫室は、類例稀れなる態度にて盛んに使用せられることになつてをつたのであるが、單に度々使用せられるばかりでなく、また甚だ大切なるものとして重んぜられてをつた。これがまた日本特異の現象である。蓋し日本固有の禊思想と相合して成れる結果であらうと思ふ。

○禊の思想との結合

（禊經と沐浴）

佛教に於ける洗浴が、日本固有の禊思想と相結びて、殊に重んぜらるるに至つたことは寫經の儀式に於て最も著るく見ることが出來る。

寫經事業の國史に見えたるは、天武天皇の元年（西紀六七三）三月、書生を集めて、一切經を川原寺に寫さしめられたるを初めとするさうであるが、聖武天皇の時に至つては、寫經司を置き、寫經堂を建てられたるなどして、經典書寫の事業は空前絶後の盛況に達した。鎌倉時代に版經流行するやうになつて漸やく衰微したといふことである。

寫經の功德、隨ひて之を爲す目的は、之によりて、父母長上または一切衆生の追善追福をなし、且つは自己往生成覺の勝果を得えうといふとにある。これは「本邦古寫經」の中に收められたもの等につきて明かに見ることが出來る。洩れ承はる所によれば、明治天皇崩御の後、昭憲皇太后も、御冥福を祈らせられて、自ら經を遊ばされたといふことである。此の如き難有きものであるから寫經の用意は清淨と精勤とを極むるを要する。今昔物語集に左の如き話がある。

「今は昔 御代に左近の少將橘敏行といふ人有けり、和歌の道に通じ亦能書の聞え高かりしが、人の賴みによりて法華經の書寫をぞなし奉りける。然るに或日時ならぬに死ぬるが如き心地になりけるよと思ふほどに、忽ち怖し氣なる者共、走り入り來りて搦めて將行けり。此は何なる錯に依りて此許の目をば見るぞと問へば、將行く人答へて日く、我は不知、慥に召て來れと有る仰を承はりて也。但し汝は法華經を書し奉りたるかと。敏行云く、相知れる人の語に依りて、二百部許書し奉れり。使云く共事に依てなめりと、他を云はず、步び行く間、甲冑を着たる軍共二百人許、其眼は電光の如く、其口は火焰を吐き、鬼の如き馬に乘りて來會へり。怖しさに肝碎けて倒れんとするを將行く人に被扶られて、我にもあらでゆく。軍共敏行を見て、打返て前に立て行く。敏行此れは何なる軍ぞと問へば、使の云く、不知や、汝に經を誂へて令レ書し者共也。書寫の功德に依りて極樂にも參り、天上人中にも可レ生りしに、汝精進せず、肉をも不嫌、女人をも遠けざりしに依り、功德に不叶、嗔の高き身と生れ、汝を嫉むで怨を報ぜむと訴へしなりと。敏行聞きて、身を碎くが如く、さても我を何にせんとて、此くは申すにか。使の云く、軍の持つ刀劍を以て、汝が身を二百に切り割き、各一切づゝ取らむ。其二百切毎に汝の心有て、痛み悲まんとすと。敏行聞へん方なく悲しみて行く程に、大河あり、濃き墨を流せるが如し。怪しき水の色かなと云へば、汝が書き奉りたる經の墨の流るゝ也。心淸く誠を致し、精進して書き奉れる經は、龍

宮に納りぬ。汝の如く不淨懈怠によりてなれるものは、嗟き野に棄てられ、雨に洗はれて、墨の此に流れ來れる也」と說くにも彌々怖るゝ心限りなし、……」

寫經の功德及び其の冥罰は此の如く怖しきものであるから、之を行ふに當つては、沐浴、精進殊につゝしまねばならぬわけである。彼の有名なる彫刻家運慶か發願して、法華經を書寫せしめたる時にものせる文に左の如きものがある。

抑大願ノ爲レ體、書二寫經一部一也。其內此經者、去安元年中之比發心、語二色紙工一、沐浴精進、令レ着二淨衣一、殊汲二靈水一。染レ儲二料紙一畢、其後自然送二年序一、而間宿願開發、今年四月八日 寅壬 初打レ紙。爰女大施主阿古丸又發心、相二語色紙工一、精進如レ前、儲二料紙一、同時打レ紙、同廿八日 壬戌 功畢。同廿九日 癸亥 請二人書手一、同日同時點二兩淨一書寫間、計二每日行數勸二男女一、行別三度禮拜勸レ之、同唱二寶號並念佛一、隨分納二三衆一、其中於書手二人 珍賀榮印 者沐浴潔日、殊致二精誠一例時懺法无レ怠、所志行儀者半如法也、如此功畢。件硯水者三ケ所之靈水也。

また終りに書寫の間、惡魔降伏のために四十五日間、每日三時寂法供養を爲したることや、また禮拜結緣の男女五十名許を揭げて、已上の人々、書寫の間、一禮拜五萬返、念佛十萬返、法華經寶號十萬返」を行じたることを書き添へてある。當分念の入つたものといはねばならぬ。そして此の如き面倒なる儀式のうちに沐浴が如何に重きをなしてをつたかと云ふことは『沐浴潔日、殊致精誠』といふ句でも察せらるゝが、また法然上人が元久元年(西紀一二〇四)大和前司親盛入道のために作られたと云ふ寫經の法次第を見れば一層明かである。

其法則によれば、先づ經料紙に製すべき楮の種子を植えるに當ても沐浴し、其後千日間、念佛禮讚を修し、いよ／＼寫經にかゝる前七箇日の間、沐浴齋戒して道場に入りて修法し、それから、寫經七箇日の間、沐浴齋戒を怠らぬやうにせねばならぬといふことになつてをる。猶太の史家ジョセフアスの記する所によれば、プトレミー王の發願によつて、舊約聖書の希臘語飜譯に從事せるし七十二名の猶太人等は其聖業にとりかゝる前に、每朝、其手を洗ひ、身を清めることを常としたさうである。何れも同じ思想から來てをるものではあるが、我邦に行はれた寫經作法に比して其差著しきを見るのである。

啻に寫經の場合に止まらず、密敎にて行ふ各種灌頂の場合を始めとして種々の儀式にも度々入浴を行ふことになつてをる。これは全く我國特異の現象と謂ひつべきであらう。私は之を以て祓思想の顯現であると云ひたいのである

〔溫室の經費〕

沐浴は斯く許り重んぜられ、また盛んに使用せらるゝので、溫室の費用は寺院會計に於ても特別の項目となつて居た。天平十九年（西紀七四七）二月十一日の調査に係る資財帳によれば、經代の總額を合若干と立てゝ其の分目を通分、佛分、功德分、盂蘭盆分、溫室分の五となしてをる。左に合と溫室分と丈を揭げる。

法隆寺（溫室一口）
合穀　四千二百十二斛
內溫室分　貳拾七斛

大安寺（溫室三口）
合稻　二百二拾萬壹千六百六束八把三分半
內溫室分　三萬五千五百二十束九把七分
現　二萬七千五百六束四把
每年未納　八千十四束五把七分

他の分目との比例等は今煩はしければ略するが、何れにしても分目の一つに立てられてをるといふ事丈にて、如何に重んぜられてをるかがわかるであらう。

而して此費用に充つる爲に溫室田なる名目のもとに寄進施入のことが屢々行はれた事は古文書の中によくあらはれてくる。今その一例として東大寺大湯屋溫室田に關するものを左に揭げる。

寄進　合壹町貳段者
在二東大寺一以上御庄之內
一、田漆段字井口　一、田參段字丸坂　一、田貳段字十坪
右爲レ奉レ始二本朝聖靈先師等尊靈一、並先亡後滅寺衆、及自他法界成等正覺上、期二永代一、每月一箇度、溫室料所ニ寄進一如件
永久五年（西紀一一一七）七月十五日　大法師慶觀敬白

啻に田畠を寄進せるのみならず、溫室用の器具（湯船、湯釜等）を施入せるものも尠くはない。それ等の一例として、醍醐寺新要錄より抄出する。

醍醐寺要抄下奧云、大治四年（西紀一一二九）六月日依二座主權律師定海ノ勸進一、權中納言源朝臣雅定、施二入釜一口一十石納置二湯屋一、又座主　造二湯船一、云々。

啻に寄進施入を待つのみならず、更に當方よりして勸進狀を發して、之を促がしたものである。高野山古文書などに其の例が尠からず有つたやうに記憶する。何れも溫室經の思想に基きて洗浴衆僧の功德を說いたものであるが、その文書、今私の材料函中に見當らないから、其代りに『淋汗疏』より一例を示す

ことゝする。これは京都建仁寺の住持達が、溫室の費用を得んが爲に作りたる一種の勸進文を集めたもの（今津洪嶽氏所藏）である。左に掲ぐるのは、同寺二百四十五世の住職たる雪嶺永瑾の作で、明應三年（西紀一四九四）のものである。

昔賢首尊者、施レ僧以レ浴、由二彼淨緣一、其貌端正如レ花也。叢林暑月、淋汗之設、其典維舊矣。然吾山乏恒產、薪水之資、何從而出乎。輙製短疏、遍募衆緣、庶幾樂施、所獲勝報、必當レ具二足花色妙相一也

炎日燎レ空、塗レ身以二白梅屑一、沙塵滿レ陌、濯レ足於金蓮盆、久矣渴麥香レ江、宜乎水觀投瓦、馮異抱新、鄧禹爇火、敢論杓柄短長、蜜漿扇炭、豐隆奮椎、何問皷聲前後、箇箇長爪梵志、人人離垢先生、蕩滌瘡痂、諸消毒珠之出、磨蝸洗空淨穢嫌無熱香之熏閻浮、寧勞卓錫於濟泉、不用葵扇於浴殿、四禪巖、八解淵、急救頭然、百尺井、一壺氷、悉除見濁、倒二爾積塵一堅二吾願輪一、

溫室の使用、盛んなるにつれて、其の費用を要することの大なるは當然のことである。而して社會の變遷に伴ひ寺院の會計は漸く困難となり行く折からであるから、此の如き勸進の必要も生じたことであらう。然かも溫室の爲に、大本山の住持が此の如き勸進文を代々作ることになつて居るなどは、これまた他國に例なき事であらう。之を以て我國寺院の溫室に對する態度如何を知ることが出來るのみならず、溫室思想の根柢、如何に深く廣がり行きしかを知ることが出來るであらう。

○溫室思想の進轉

（光明皇后の衆生施浴）

溫室經の思想は上述の如く我邦に弘布し、日本溫浴發達の上に大活動を現じつゝあるのであるが、こゝに注意すべきは、溫室經の思想は衆僧に施浴するといふことにある。前生に於て不治の惡瘡に罹りし居りし阿難が、當世に淸淨端嚴の身と生れたるも衆僧に施浴し、その汁を以て瘡を洗ひし因緣によるといはれ、また昔し首陀會天、毗婆尸佛の時、貧家の子たりしが、佛が洗僧の功德を說きたまひしを聞きて、欣然作務したるために、天に生れて、形體殊妙、大に光相を有するに至つたと傳へてあるのも、何れも皆、衆僧施浴の思想に外ならぬ。然るに此の衆僧洗浴の思想を一轉して、衆生洗浴の思想となし、大善見王が極樂淨土に於いてなされし試みに、倣はんとせられたるは、惟ふにわが光明皇后であらう。光明皇后（西紀七〇一—七六〇）の千人施浴の話は甚だ名高き、世間周知のことであらうが、日本溫浴の發達史には最も光輝ある地位を占むる人物であるから、長きを厭はず、元亨釋書の記事を左に抄出して、同好

諸君と共に通讀一過したいと思ふ。

天平應眞皇太后光明子者、淡海公（藤原不比等）第二女也、聖武帝儲貳時納爲妃、天平元年八月册爲ニ皇后一、體貌姝麗、似レ有ニ光耀一、聖武帝造ニ國分寺、東大寺一皆后之勸發也。又置ニ悲田施藥二院一、恤ニ天下飢恙一、及ニ東大寺成一后以謂、大佛大殿竹已備足、帝功ニ于外一、我營ニ于內一、勝功鉅德。不レ可レ加也。月有ニ詭意一、一夕閤裏空中有レ聲曰、后莫レ誇也、妙體宜明、浴室滿澣、其功不レ可レ言而已、后惟異乃建ニ溫室一令ニ貴賤一取レ浴、后又誓曰、我親去ニ千人垢一、君臣憚レ之、后壯志不レ可レ沮也。既而竟ニ九百九十九人一最後有ニ一人一、徧體疥癩、臭氣充レ室、后雖レ去レ垢、又自思而言、今滿ニ千數一豈避レ之哉忍而楷レ背、病人言、我受惡病、患ニ此瘡ニ者久、適有ニ良醫ニ教曰、使レ人吸レ膿、必得ニ除愈一而世上無ニ深悲者ニ故我沉痼至ニ于此一、今后行ニ無遮悲濟一、又孔貴レ之、願后有意乎、后不レ得レ已、吸レ瘡吐レ膿、自レ頂至レ踵皆遍、后語ニ病人ニ曰我沉ニ汝瘡一、愼勿レ語レ人。于レ時病人放ニ大光明一、告曰、后去ニ阿閦佛垢一、又愼勿レ語レ人、后驚而視レ之、妙相端嚴、光耀馥郁、忽然不レ見、后驚喜無量、就ニ其地一、構ニ伽藍一、號ニ阿閦寺一、寶字二年受ニ尊號一、四年六月崩、年六十、

歴史家のうちには此話を以て、元亨釋書の作者の捏造せしものと疑ひ去る向もありと聞けるが、此書の成れる元亨二年（西紀一三二二）に先つこと百五十七年前なる永萬元年（西紀一一六五）に成れる僻珍愛の東大寺溫室田施入狀（正倉院文書）に『光明皇后、淨三十千之道俗一、阿閦觀音現光云々』の句があるし、またそれより少しく後れたる寶物集（西紀一一八〇頃）にも『光明皇后の湯を沸かして十方の衆生に浴し給ひて一日に三人が垢を摺り給ひけるに、いぶせく怖しげなる乞兒（カタヰ）の我垢摺り給へと申しければ云々』との記事がある。また東大寺所藏の同寺緣起にも

聖武皇帝の后、光明皇后は慈悲深重のあまり溫室をかまへ每月六度癩病の者を入たまへり則皇后身つから湯屋に出御ありて、かたじけなく御手つから癩病の者を浴浴し給しかば大慈大悲の利益廣大無邊なるを感應し阿閦如來、每度影向あり其より後溫室を阿閦寺となつけ侍る

とある。此等によりて見れば、光明皇后施浴の傳說は可なり以前より言傳へられたるもの丶やうである。或は每日三人つゞといひ、或は每月六度といふなどまち／＼であるから、果して千人浴の願を立てられたか否かは定め難い。また果し 癩者の膿をロづから吸はれたか、どうか。當時行基菩薩が有馬溫泉再興の時、道に倒れたる癩者の膿を吸ひたりといふ傳說もあること

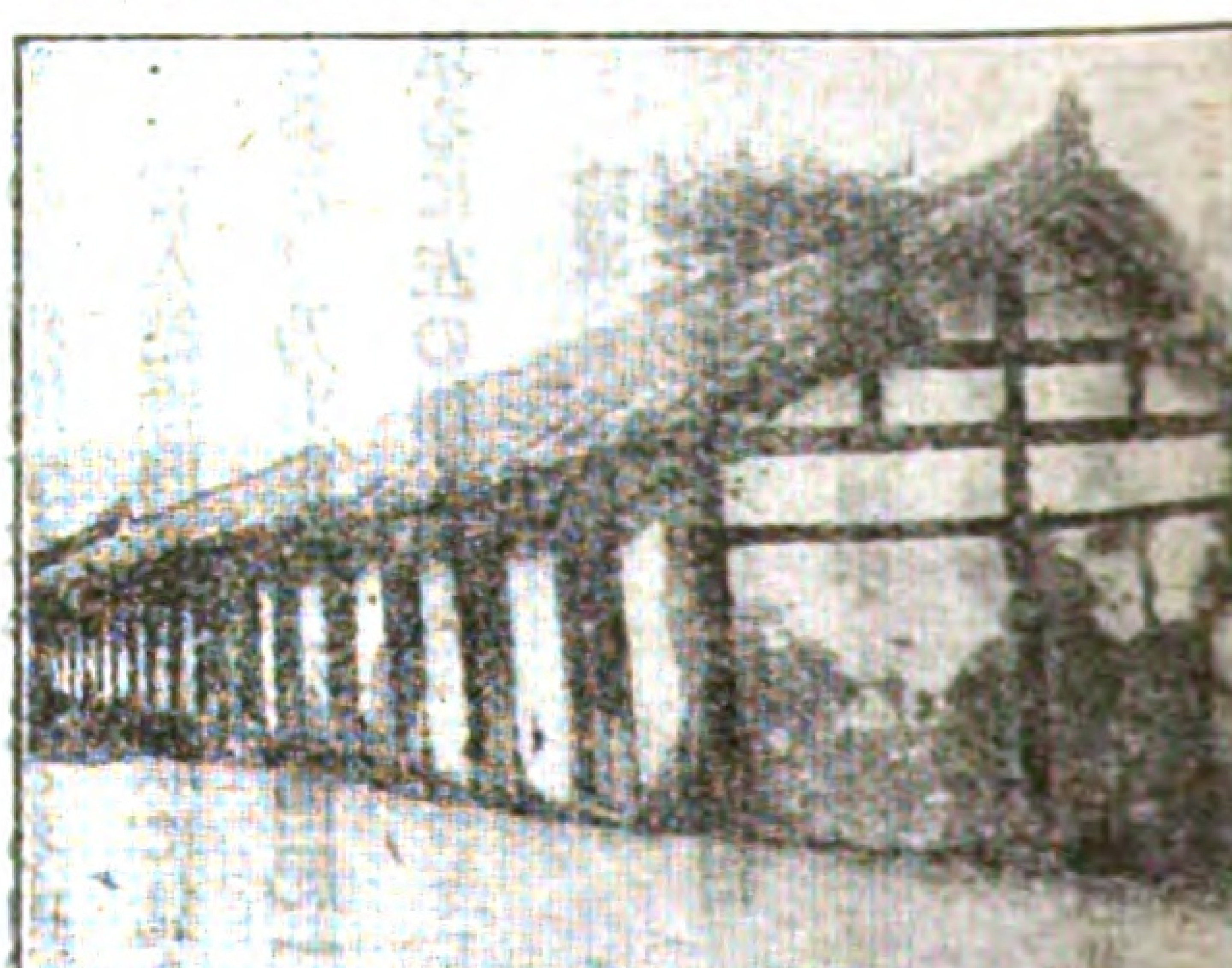
であるから、此の如き傳說の出來る種子が何かあつたこととも思ふが、勿論何れとも定め難い。併し何等かの形式に於て、一般の人々に施浴せられたることのありしは、皇后の性行、及びその他の事蹟によりても承認することが出來るやうだ。否定し去らねばならぬ證據の擧るまでは、此の如く、宗教的感興に富み、詩的趣味の豐かなる、美はしき傳說は、國民の誇として、また日本婦人の榮として長く保存したいものである。

假りに此傳說は歷史上の事實ではないとしても、生命を有する精神的事實として後の人を感奮激勵することが出來、爲に衆生施浴の思想は種々なる形を取り繼紹發展したのである。その最も著るしき發現の一として私の知り得たるは

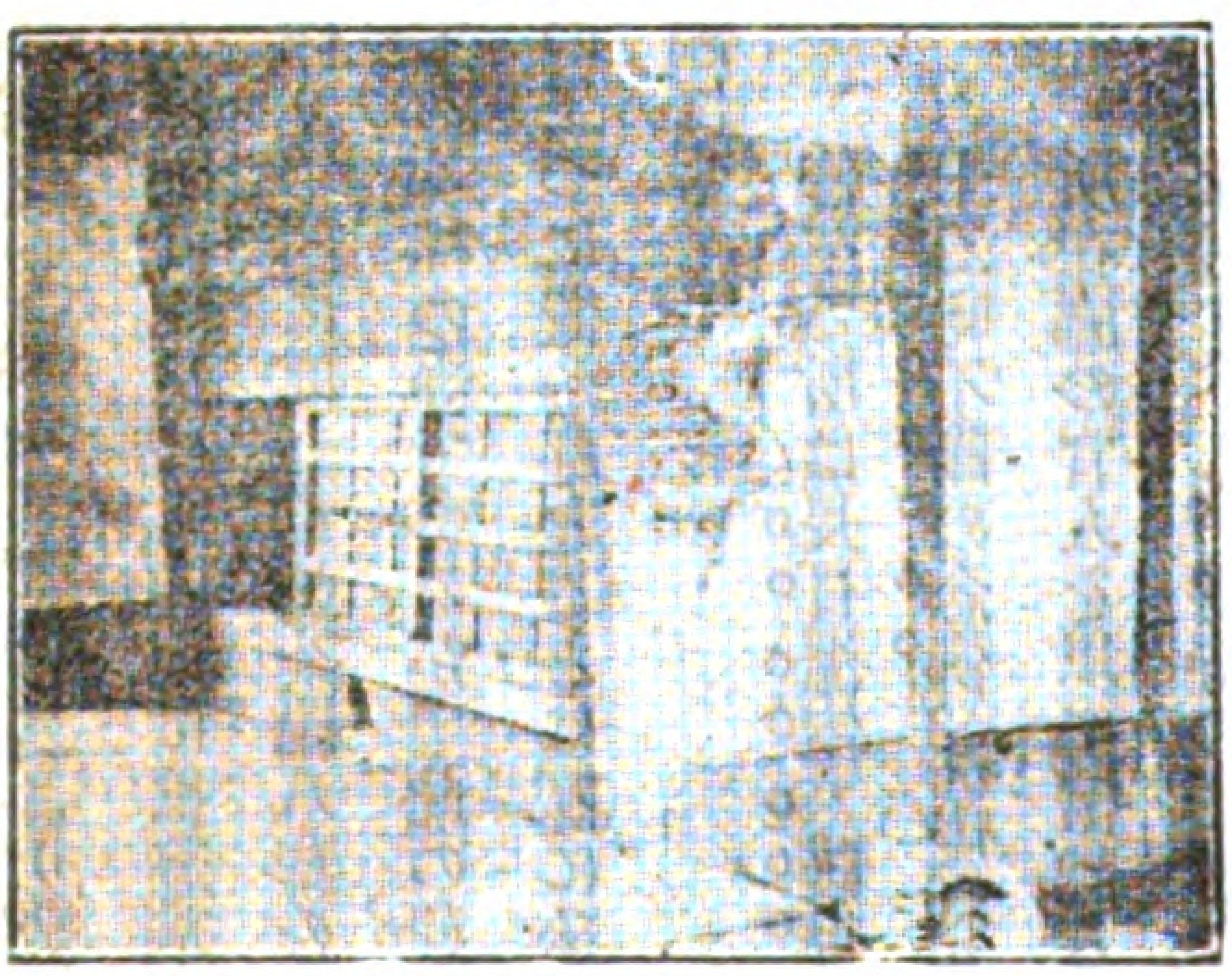
○忍性上人の事蹟

（北山十八間戸と鎌倉極樂寺）

である。忍性(西紀一二一六―一三〇三)又良觀上人ともいひ、和州の產で、仁慈の心殊に深く、西大寺に住職たりし折、光明皇后の事蹟に感激して、奈良に常施院を建てゝ病客を扶け、悲田院を設けて、乞兒を濟ひ、所有の衣服は悉く之を非人に施し、步行に堪へざる疥癩人は自から脊負うて之を每日送迎したといふことであるが。上人が建てたりといふ癩宿は北山十八間戸として、今なほ奈良の般若坂に殘つてをる。これは縱十八間、橫



北山十八間戸



其の浴室

二間の長屋建であつて其一隅に方一間半の浴室を附設したもので、癩病者を收容し、之に溫浴を施したる所である。昨年の夏、私共が其處を訪問したる時は、その浴室は既に取拂はれ、十八間の長屋も、染物屋の工場とやらに變化しかけてをつたが、此の偉き聖蹟に對して、いひ知らぬ悲哀を感じ、低徊去る能はざるものがあつた。

忍性上人は其後、鎌倉に來り、極樂寺の開山となつたが、聖德太子の四天王寺の偉業を追慕して、こゝに敬田、悲田、施藥、療病の四院を建て、癩病者の爲にも別に一舍を設けまた浴室

を備へたのである。(南東征遊記に此寺の溫室始めの事や、雜漢を溫室に勸請した事が記してある。)私は先年此寺を訪問し、所藏の古圖によりて、その遺趾をたどつた事があるが、昔し癩宿のあつた邊には、今は江ノ島電車の車庫が立つて居つた。癩者の爲の藥湯室の跡は、今もとむる由もないが、一般の人のための浴堂の井戸は、そのまゝに殘つて、製藥の石臼などと共に、在りし昔を語つてをる。

○重源上人の念佛と溫室
（阿彌陀寺建立の本願）

衆生施浴の思想の發現史に閑却することの出來ぬのは俊乘坊重源上人である。重源上人は法然上人の弟子である。入宋歸朝の後、法然上人の推薦によりて東大寺再興の大勸進となり、自から造れる一輪車に乘り、全國を遍歷募緣し、遂に建久六年(西紀一一九五)を以て目出度、東大寺大佛殿の落慶式を營むに至つたのであるが、その時、大湯屋を造つた事は前にも述べた所である。此上人、溫室に特殊の興味を有せらるゝものと見えてあちこちに湯屋を建て、又湯船や、湯釜を施入せられてをることは『南無阿彌陀佛作善集』に詳らかであるが、殊に興味深いのは、その阿彌陀寺建立である。

阿彌陀寺は東大寺の別院として周防國府の東、枳部山の麓に、文治三年(西紀一一八七)より造築せられたるものであつて、上人誓願の記文にも『東には瑠璃の淨刹として東大寺總國分寺を作り、西には九重曼茶羅八葉の蓮中として華宮を建つ』と申してある程の寺であるが、此の建立の願を不斷念佛と長日溫室との二つに置かれたことは誠に珍らしいことではないか。同寺緣起にも

修する所は長日溫室ノ護摩、鎭護國家の祕法、勤むる所は十二時不斷の念佛、濟度利生の淨行なり。代々の國司留守、所在廳の官人を以て檀越とし、國人は寺塔の嚴威によりて繁昌すべし。當寺の崇替は州郡の盛衰なれば向後念佛溫室の勤行退すべからざる由、正治二年十一月の廳宣、同在廳官人結緣同心の誓狀に見えたり

とある。乃ち正治二年(西紀一二〇〇)十一月八日の『廳宣』を見るに左の如くある。

建立
淨土堂　壹宇　七間四面
藥師堂　壹宇　仝
舍利殿　壹宇　方丈
　安二置高五尺鐵塔一基一、其中奉二納佛舍利五粒一
鐘　壹口　高三尺

御所　御宇　五[illegible]円両
在大釜　壹口　廿五石納
鐵湯舟　壹口　同之
施入
永田　貳拾參町伍段
陸田　參町
田壹町者毎日佛前燈油料
田拾貳町者自八日辰時至十五日、毎月七ケ日夜不斷高聲念佛衆
十二口衣食料、口別一町宛之
田參町六段者毎月藥師講、阿彌陀講、舍利講三ヶ度講延僧供料、
度別壹段宛之
田玖段者承仕三人衣食料、人別參段宛之
但閑月佛餉燈油者承仕可令備之
田陸町、畠參町者長日溫室之維那六人衣食料、人別田壹町畠
反宛之

之によりて見るに、毎月八日より十五日に至る七ケ日の間、十二人の僧をして日夜不斷に高聲念佛せしむると同時に、六人の維那をして終日湯を立てゝ一般民衆に施こしたものと見ゆる。重源上人は如此して念佛と溫室とを結びつけてをる。抑も如何なる理由によれるのであらうか。彼は只『抑念佛之行業、溫室之功德者、諸佛之所ㇾ歎、殊勝之善根也』とのみいふてをる。(他に意見の發表があるかも知れぬが、私は未だ知り得ぬのである。)依つて梁の道珍傳を見たるに

釋道珍未ㇾ詳二何人一、梁初(西紀六世紀の初)住二廬山中一、作二彌陀業觀一、夢有ㇾ人、乘ㇾ船、處二大海中一、云、向二阿彌陀國一、珍欲二隨去一、船人云、未ㇾ作二淨土業一、謂須下經二營浴室一、並誦上二阿彌陀經一、既覺、卽如ㇾ夢所作、年歲綿遠、云々

とある。或は重源上人の思ひつきは此邊にあるのであるまいか、併し道珍に於ても、念佛溫室併行につきては何等の所說がないやうである。私の考ふる所によれば、專稱念佛の引攝する境界は溫室入浴によりても持來たされ得るからではあるまいか。入浴によりて此境涯を持來すにつきては、日本式溫浴は殊に便宜を有つてをる、而して阿彌陀寺の湯屋も東大寺の大湯屋も日本式の溫浴であつたと信ずべき理由がある、その說明は他の機會に讓りて、姑くかく假定すれば、重源上人は理論はとにかく溫室入浴に於て念佛に於けると同樣の功德を實驗せられたるものであるまいか。かく考ふれば念佛と溫室とを寺院建立の願とせられた意味も分明るし、東大寺の大湯屋に「南無阿彌陀佛」の額を揭げられたいはれも解せらるゝやうである。もし斯うだとすれば施浴は單に衆僧に止めずして、一切衆生に及ぼすべきであらう。かくすれば、溫室思想の一面たる供養の意味は一層

明かになることであらう。光明皇后が此點に氣附かれて、從來の溫室思想に一進轉を與へられたことは啻に難行きことゝいはねばならぬ。而してこれは重源上人によりて寺院建立の本願にまで達したのであるが、此の如き願によりて建てられたる寺院は類例稀なることであらう。併し此意義深き阿彌陀寺の溫室は、いつの世よりか亡び去つた。寶曆六年(西紀一七五六)の記錄には「内に切石の風呂あり、開山の仕置なり、今現在す。釜一口、闊六尺、重一千斤、廿五石入、今破損して二王門に置く、建久九年の作」とあり。今、如何なる狀態であらう、此儘なりとすれば惜しむべきことと謂はねばならぬ。

○遠忌供養

溫室を以て念佛と同様なる功德があるものとすれば、之を追福追善、遠忌逆修等の爲に用ゐるに至るは自然のことである。然しながら是は溫室經には未だ明かに示されてない所で、正に溫室思想の進轉を示すものと云ふべきであらう。阿彌陀寺建立の念佛溫室の願の中には『功德の上分を捧げて、後白河禪定法皇の御滅罪生善、出離生死、成等正覺を祈り奉る』といふ意味をも含んでをるのであるから、一種の遠忌供養といふてもよい。但し遠忌の爲に長日溫室を永久的に行はんとするは、誠に珍らしきことであるが、一時的の施浴供養は此以前にもあつた、而して此以後にも屢々行はれた。私の求め得たる資料のうちより左に抄錄する。(括弧内の數字は例の通り西紀年號である)

保延六年(一一四〇)僧西念、五百日溫室供養。(明治四十三年建仁寺境内發掘文書)

天養元年(一一四四)東寺僧禪惠、修千日之溫室、三個處、(酒井家所藏瓦經拓本)

久安四年(一一四八)鳥羽法皇逆修の爲、山々寺々にて溫室之事を修。(本朝世紀)

元曆元年(一一八四)先考遠忌、施行清水坂溫室、例事也。(吉記)

建久三年(一一九二)法皇追福の爲、於山內、百個日溫室(吾妻鏡)

暦仁二年(一二三八)政子得脫の爲。義時每月六日、法華堂傍新築溫室にて衆僧施浴(同上)

寛元三年(一二四五)先考遠忌、於大湯屋有溫室(平戸記)

其他、南北朝より足利時代にかけて、此の如き例は中々に多いやうである。是等の內、吉記と平戸記とのものは恒例なることを明記してあるから、供養の爲の施浴は恒例となつて多少以前より行はれをつたものと見ゆる。また吾妻鏡の法皇追福の爲にせる百個日溫室は『往反諸人並士民等可浴之由被立札於路

頭己とあつて、供養の爲に、一切衆生に施浴せるものなること
を明かに示してをる。而して此の遠忌供養の思想に發展して、
彼の名高き

○雁風呂

といふものにまで至り、俳諧の好題目となつて、人の詩興をそゝつてをる。笈埃隨筆の記する所を左に掲げる。

言傳ふ奧南部の地に雁の渡り來る海上甚遠し、故におのおの小さき木の枝をくわへ渡る中途にして此木を海に落し、夫に乘て暫く羽を休め、又くわへて立、南部の地に至る時ことごとくすて去、然して春歸る時、又此木をくわへて歸るに所々にて撃取られ、綿に懸りて多くの人の手に落、故にいつにても此木跡に殘り有るを國人、捕らはれし雁の爲に此木を以て風呂を焚て、諸人を入浴せしむ、是其追善也是を號して雁風呂といへり。……

何んと美はしき詩思豐かなる話ではないか。

○擱筆に臨みて

私は佛教温泉思想の發達をたどりて、こゝまで達した。寺院内の温室生活は以上にて盡きないことは云ふまでもない。殊に足利時代に於ける享樂生活など面白きものも尠くない。併しそれ等にまで語り及ぶことは、本題の範圍を脱することになる、且つまた、未だ明言は致さなかつたが、私の是迄の話は、特殊の場合の外は、大體鎌倉時代に限ることにした。何となれば、日本温浴史は茲に一時期を劃して、更に加はり來れる要素によりて新たなる發達を見るに至るからである。新要素とは『風呂』をいふのである。日本温浴の發達をたどり來りて鎌倉時代前後に至れば『風呂』といふ語に出合する。一體『風呂』とは何であるか、湯屋、温泉などとの關係は如何。是等の問題は新しき研究を惹起して、温浴史に一生面を開くことゝなるのであるから、是等は凡て、他日の機會にゆづり、日本温浴發達の成因三つだけを述べたことゝして茲に一まづ筆を擱くことゝする。いつも原稿〆切間際になりて、大急ぎにまとめることになるので脱漏も尠くない。更らに不行屆を加ふるに至つたにつきては幾重にも、御わびを申上げる外はない。

○正　誤　八月號所載『日本温浴史話』中の主なるもの

四〇頁下段四行目　感ずることもあり、は　感ずることや、また

五九頁下段六行目　『時の……は　『明治十四年、時の

研究會の膨脹と其構成分子

鵜崎鷺城

一

貴族院改革の聲が叫ばれる今日、研究會を中心として侯、伯、子三爵議員の大合同が行はれたのは、從來各爵が互ひに割據して小黨分立の姿であつた上院に新形勢を齎らしたもので、政界に少からぬ衝動を與へた。今度の事は何か裏面に策士が飛躍したかに觀測するものもあるが、要するに斯う云ふ形勢になつたのは人爲的と云ふよりも時の勢ひで、自然起るべきエヴオルーションに外ならぬと思ふ。

貴族院には最近十數年間に團體の離合が行はれたが、研究會も種々の變遷があつた。曾ては伊東已代治、金子堅太郎の如き伊藤系の政治家に依つて操縱された時代もあれば、山縣系の清浦が操縱した時代もあつたが、後に至て多年研究會の牛耳を執つたのは岡部と堀田である。特に堀田は持前の親分肌をもつて衣食住の世話まで燒いたから、一時は彼の周圍に人が集り自然研究會は岡部派と堀田派に別れ、表面にこそ現はれされ、裏面には絶えず暗闘があつたやうである。又た政府の方でも研究會を操縱するには、此の兩人を抱込む必要があると見て、第二桂內閣は岡部を司法大臣に任じ、第二西園寺內閣は堀田を遞信大臣にしたが、而かも中心勢力は其々の中に移動しつゝあつて、世間が堀田、岡部を代表的人物と見て居たとき、既に三島彌太郎の時代となつて死ぬまで彼が研究會の事實上の首領であつた。

由來研究會は、昔から事大主義の傳統を帶びた團體で、問題に依つては時として政府に反對した例もないでは無いが、不言實行の名に隱れて盲從に傾いたのが多い。同會は貴族院の多數黨で、之れが嚮背に依つて大勢を左右したから、何れの政府も研究會の操縱に苦心し、機嫌を損ねぬやうに努めた。現に或る內閣は貴族院議院選擧規則を改正して尙友會の爲めに利益を與へたことがある。蓋し尙友會は研究會の母體で、從來子爵議員の製造を一手に壟斷し、專橫偏頗な振舞いがあつたと云ふので

それに憤慨した故秋元興朝子は談話會なるものを組織し、尚友會の向ふを張つたので、玆に子爵界の分野は二元の勢力が相對峙することになつたのである。

是れより先き研究會には分裂があつて、伯爵の一團が袂を聯ねて脫會し、別に伯爵同志會を起した。此の同志會こそは甲寅俱樂部の前身となつたものである。勢頭に叛旗を飜したのは、現侍從次長徳川達孝、宗重望、大木遠吉、小笠原長幹等で、是等は政治上の經驗には乏しいが、一番政界に氣焔を揚げて見ようと云ふ少壯氣鋭の公達である。之れに刺戟されて廣澤金太郎、柳澤保惠、柳原義光、松木宗隆、川村鐵太郎等の伯爵等も續いて研究會を脫會し、同志會に合して別に扶桑會と云ふ院內團體を造つた。そこへ秋元の談話會が顯はれて貴族院の形勢を一變する運動を始めたので、自然伯爵同志會とも聯盟の形を造り、研究會は一時に二つの勁敵に面して守勢の地位に立つことになつたのである。今度入會した伯爵議員守には徳川達孝と宗重望が居ない丈で、他は皆な研究會の反對に立つた人々である。

二

今から考へると、伯爵議員が研究會を脫會したのは、種々の意味に於て米國の共和黨が二つに別れて、the conservative wing に對して progressive movement が起つたのに似た所がありはせぬか。

從來研究會は時勢後れの老物が出しやばつて少壯者の頭を抑へ、權力が堀田、岡部から三島に移つたのは外見上少壯派の勝利の如く見えるが、實際は三島も年寄の機嫌を取つて自分の位置を得やうとしたところがある。何事も黨議を以つて態度を定むる點は政黨の形を取りながら、政黨に加盟するものは議員に選ばぬと云ふやうな褊狹なる內規を設け、會員以外のものを排斥するなど、保守的空氣が充滿して居た。特に正親町、淸棲、大原、萬里小路の四伯は同族に冷淡にして子爵の勢力に屈し、官僚主義非政黨主義の色彩が濃厚であつたから、新思想を抱く少壯派は不快に堪へずして飛出したのである、最も中には仲間外れになるの不利益なるを思ふて餘儀なく進退を共にしたものもあるが、概して革新的氣分を以つて起したプロパガンダと見るべきものであつた。伯爵同志會が研究會派に對して實力を試驗さるべき第一戰の補缺選擧には、貧乏公卿の淸閑寺を立てゝ元老の芳川顯正を向ふに廻し、美事に之れを破つて彼等の氣勢頓に揚つたので、官僚系の策士は同志會と談話會の破壞運動に惡辣極る手段を用ゐ、今まで社交團體であつた伯爵界を選擧團體に直す目論見をした。特に同志會には感情の衝突や策士の惑亂で團體力が弛み、四十四年夏の改選に際し伯爵議員の或者は分離

して[illegible]倶樂部を起し、徳川達孝は無所屬に去つて別の行動を執り、或者は排斥されて候補に立てなくなるなど變化の避くべからさるに至つたが、昨年の改選には大正會と云ふ一つの纏つた團體になつた。

今度の合同は以前研究會に居つた手合が元の古巣に歸つた迄だと無雜作に見て了へば夫れ迄である。研究會の方では伯爵を併呑したとし、甲寅倶樂部の方では併呑されたのでは無く、此方から飛込んで行つて研究會を覺醒させるのだと云ふかも知れぬが、双方が解散して新團體を組織したのと違ふから、結局は研究會の黨勢擴張である。七八年前と今日とは時代も違ひ、研究會にも多少人物の新陳代謝が行はれて少壯派が幅を利かすやうになり、伯爵派の感情も自然違つて來て居る。特に今日は元老も軍閥も官僚　時代の力の壓迫で影が薄くなり、無方針無經綸の現内閣はボロ澤山で、何とかせねばならぬと云ふ頭が誰れにもある。政府が國政に堪へずして早晩投出すとせば、憲政會の食指は動いても種々の事情から加藤に渡りさうにも思へず、如何に收拾されるかと云へば殆んど混沌たるものがある。斯う云ふ際貴族院の政治家が在來の思想因習に囚はれずに、一齊發して勢力を養ふ必要があるとし、伯爵側にも研究會の若手にも野心と妄想が言はず語らずの中にありはせぬか。それには十八人が孤立的境遇を脱し、又た研究會も今までの狹隘固陋な考を去つて門戶を開放せねばならぬと云ふ自覺點に一致した結果とすれば、研究會の擴大も意味ありとする。

三

今度の合同は徳川頼倫侯が先づ入會して兩派の間に骨を折つたと云はれてゐるが、侯の人物聲望は確に有力なる。楔子である。從來侯爵議員は黒田長成外二三の研究會に籍を置くの外は定つた所從が無く、平素議席に居ることも極めて稀れで、僅に大問題が起つたとき、狩出されて頭數を揃へる爲めの人足に使はれるのみだから、纏つた勢力が無い。黒田侯は副議長になつたと云ふ丈けで、研究會の食客たるに止り、餘りに重視されて居らぬが徳川頼倫は貴族院を通じて重きを爲して居る。

侯は議長家達公、侍從次長達孝伯と三人兄弟で、舊田安家から紀州家へ養子に行き、ケンブリッヂで教育を受けた人である。今までは餘り政治の方に心を傾けずに、圖書館とか古蹟調査とかに興味を有つて來た人で、學問も相當にあるし、阿兄の家達公よりは意見に富んで居る。前年山本内閣が倒れて大隈内閣が出來るまでの曲折時代に、元老が家達公を首相に推戴したとき、專ら不同意を唱へて辭退させたのは頼倫侯であつたさうである。彼は平素餘りに口を開かぬが、政治上の主張があつ

て、選舉問題については急進派を代表してる政派に反對し、又た山本内閣のとき、擴兵策に對する反感が貴族院に漲つた際に係らず海軍充實案の賛成演説を試みた。阿兄が政友會臭いと云はれる如く、侯も政友會に意を傾けて居ると思ふものもあるが、強いて色を附ければ多少其の氣味があるにもせよ、自分は努めて公平を期し、言ふことは平凡でもチヤンと條理が立つて居る。既に研究會中には黑田の副議長を罷めて彼を推さんとしたものがあり、又た家達公よりも彼れの議長を望むものがあつた位で、此の次の議長は當然彼に行く順序になつて居る。其の風相といひ品格といひ、一言にして盡せば貴族の典型である。

研究會が侯を迎へたのは確に一勢力を加へたことになり、若し故三島子の地位に立つとせば、三島のように腕は切れぬけれども、重望は遙に勝り、研究會派と伯爵派との間に議論が起つた場合は、調和劑となつて緩める力がある。今後研究會が或る問題に關して意見を定めた場合侯ならば研究會を代表して貴族院の演壇に立つことが出來る。

研究會にはかねてから舊頭腦派と新知識派との暗鬪があつたが、漸く近年になつて少壯派が頭を持揚げて來た。現幹部即ち常務委員の中に於ても前田利定、酒井忠亮、榎本武憲などは大學で新教育を受けた少壯派である。酒井は牧野忠篤と共に從來一般の政局となり、表面に立たないけれども、裏面には相當勢力がある。前田は近來殊に親切りと評判を上げ、水野直と共に新知識のチヤキ／＼である。此の外に青木信光も幹部級の一人で、新知識では無いけれども、智惠の多い人物だから、研究會では有力者になつて居る。堀田時代には下司張つた華族が居つたが、今は二三人居るだけである。又た年齢の方では今猶ほ老人が大部分を占めて居るが、以前よりも明治生れの議員が多くなつた。然し保守氣分と骨董尊重の風はまだ容易に取れ無い。

四

甲寅俱樂部から行つた伯爵議員は、扶桑會、辛亥俱樂部時代から一人一黨と云ふ所があつて、各自領袖を以つて任ずる天狗連許りである。其の中で新華族では大木遠吉、廣澤金次郎、寺島誠一郎、林博太郎、大名側では、松浦厚、柳澤保惠、小笠原長幹、堂上側では柳原義光、松木宗隆などが先づ目星しいところであらう。同志會の全盛時代は徳川達孝を上置として大木、小笠原、柳澤、柳原、林などが其の中堅で、特に大木は最も鋒鋩を出した爲めに、恰も彼の同志會の如く思はれ、隨つて仲間から出過ものゝやうに思はれたのみならず、官僚派からも一番睨まれた。

大木は故喬任伯の一粒種で、小兒時代から蒲柳の質であつた

から正式に學校教育を受けなかつたが、一通り漢學の素養があつて、彼の思想は多く漢學が根抵を爲し、ハイカラ氣分が無いから忌味がない。先考は江藤の策士大隈の才子に對して佐賀の智者といはれ、江藤や大隈が失脚した後も巧みに薩長兩勢力の間に處して大臣の地位を保ち、樞密院議長にまでなつたが、今の大木は先考の巧慧と細心とを缺いで自ら韜晦するの術を知らず、氣を負ひ勢ひに任せて行くと云ふ方だから、自然周圍に敵を造る。明治四十一年川村鐵太郎と競爭して敗れ、間も無く補缺で貴族院に入つた時分は年少氣鋭でもあつたし、特に伯爵同志會の活動時代は、世間がヤタラに煽て揚げてエライものにしたので、幾分調子に乘つて面白半分に强がり、自ら大能流と稱して露骨に羽目を外した。滿々たる稚氣寧ろ愛すべきものがあつたが、官僚派は彼の反抗に鬼胎を懷き、彼をトッチメさへすれば同志會を破壞することが出來るだらうと考へて、目の上の瘤にして壓迫を加へた。或る時彼が皇室費に關する批評を公にしたといふので、大浦、有松などは、皇室の藩屏に有るまじい振舞だと、固陋な華族連に不敬呼ばりをさせて伯爵間の攪亂を企てたが、却つて彼を評判男にすると共に、ますます性來の稚氣を煽り立てたのである。

一時同族間には彼の前途を心配して、親類の大隈に意見を賴んだが、それでも止めぬので、まるで國賊のように思つたものもある。斯くして四十四年の改選期には候補者から省かれ、一時は失意の形で餘り氣焰を吐く機會がなかつたが、昨年の改選には大正會から推されて貴族院に復活したのである。今日は以前のように腕白氣質や圭角が取れて何分か分別が出來たようであるが、それでも伯爵十八人の中では一番野武士的氣分と痛快味に富んだ論客で、研究會に行つても大人しく居るか何うか疑問である。

廣澤は世故に長じて居る丈けに、大木のようにザックバランの一本調子では無く、人間に表裏と曲折がある。彼は明治四年九段の妾宅で一夜或者の爲めに暗殺された長州の參議廣澤兵助の遺孤で、英國へ行つてケンブリッヂに學び、日清戰爭の初期に歸つて三十年初めて貴族院議員になつたが、亡父の關係から長州先輩特に山縣が目を掛けて三十一年の山縣內閣には總理大臣秘書官に任ぜれたとがある。早く父を失つて實世間を見て居るから、普通の貴公子と違つて拔目が無く、興味と應揚を缺き、こ餘りに頭が打算的だから、人に依つては輕薄才子のように貶すものもないでは無い。早くから營利會社に關して金儲けに熱中し、華族と云ふよりも平民、政治家と云ふよりも商賣人と云ふ風格があつて同志會時代にも餘り共の方の活動には身を入れ

なかつたようである。其の代り實際の仕事をさせると役に立つ方で、院内の活動などはテキパキして居る。彼も四十四年の改選に拔けて昨年復活した歸り新參の一人である。

寺島は明治初期の薩州外交家寺島宗則を父とし、オツクスフオード出身で語學に長じ、久しく外務省にあつて秘書官を勤めて居た。總ての調子が外交的で、極めて折合つた才物であるけれども、思想が官僚的で勢に左右せられ、同志會時代から毅然として守る所に乏しい。三井家より夫人を迎へ、財界方面にも關係がある。林は帝大出身の新智識で、政治に對する理解を疑ふが、一寸豪傑染みたところがあつて一種愉快な人物である。

五

松浦は唐津の殿様で、故稻葉正縄、大隈信常の兄に當り、伯爵中有數のミリオネアである。早くから政治上の野心があつて、伯爵同志會が出來ると直ちに飛込んだが、頭立つものとの間に感情の衝突があつたのみならず、松浦の野心家なるを見て取つた他の連中は、彼の金力で掻廻されはせぬかと云ふ心配から敬遠策を執り、四十三年島津忠亮の補缺選擧に彼れを排斥して中川興長を推立てたので、彼は不平滿々であつた。そこで同志會に居ては迚も議員になれぬと思ひ、元と大木の選擧運動に金を食つた平野某と云ふ華族を喰つて歩く羽織ゴロを手先に使ひ、伯爵の故老連を説いて廻つて伯爵團を攪亂にする運動を企てた。之れを見て取つた官僚派の策士は、同志會破壞の爲めに松浦の不平と野心を巧みに利用したので、終に彼の望み通りになり初めて四十四年に議員になつたが、[illegible]の爲めに少からぬ金を平野に取られたさうである。

彼はケンブリッヂ出身で新しい智識があり、號を鷺洲と云つて漢詩を作り、華族に似合はず腕力が強い。或る時同族の宴會で、酒癖の惡い岡部長職が眼をトロンコにして管を卷き、果ては松浦に喧嘩を吹掛けたので、松浦は腕に覺えの柔道で、大兵肥滿の岡部を取つて投げて筋斗を打たせたことがある。働のある人物だが、策略めいたことをするので一部に毛嫌ひされて餘り人望が無い。

柳澤は有名な吉保の後で、家柄も好く金もあるが事業慾があつて貴族院の外に保險會社、有樂座其の他種々の事業に關係して居る。妙に侵氣と衒氣があつて殿様らしいノンビリしたところが無く、鼻眼鏡を掛けて西洋人臭い所が鼻に附く、それに世間不通の理窟を捏ねて獨りで好がり、而も其の議論が窮屈で世の中の事は數字的で行くものと定めて居る。才氣はあつても對物的に嫌はれて對人的で無いから、餘り味方が無いようである。然と近き將來の大臣を以て任じ伯爵界第一の政治家學者たとし

て居る。獨逸仕込の統計學者で嘗て京都大學教授になつたことがあり、今までに法學博士になつて好い學者である。

小笠原は元と式部官を勤めた人で、少壯伯爵中では大分出色の人物に見られて居るが、上院政治家として何程發展するか未知數である。然し常に何かしようと云ふ熱と元氣を有ち、多才多趣味であつて彫刻などは萬更殿様藝では無い。柳原は見掛けに似ず氣骨と勇氣があつて交際術に長じ、物事が早分りする。鶴澤仲助を師匠として義太夫を稽古し、誰れの前でも『今頃は半七つさん』と妙な聲を出したり、一六風の書が自慢で賴まれもせぬのに揮毫したりする義太夫勇氣と揮毫勇氣には感服する。遺傳的に酒亂癖があると云ふが、人間は樂天的でネバリ氣が無いから、同族間の氣受けが好い。舊公卿側では物を云ふ位置に居るから、研究會でも粗末に扱はれる心配は無からう。柳原と共に公卿派中の變種は松木である。彼れは古い法學生で、漢學の素養はあつても新智識では無いが、人格を以つて同人の間に重んぜられ、如何なる問題にぶつつかつても從容自若として騷がず迷はずと云ふ態度は、禪の修養から來て居る。缺點と云へば融通の利かぬことであるが、云ふことは組織的で眞面目で、叮嚀で對手を感服させる。それ故に交渉問題の起つた場合には彼れが行けば必ず纏まると云ふ位で、調和に適した一種の人物である。

是れから先の研究會は頭數の上では横綱でも何でも出來るが、それよりも少壯派が中堅となつて世界的大風潮に棹し、眞に時代に覺醒した活動振を見せるか、若しくは宣言許り立派でも其の實が伴はず、單に今迄の百十八名が百三十九名に殖えたと云ふ丈けに止るか、世間の注目を引いた合同の有意味無意味は此の點にある。

續發音遊戲

菅原教造

一

六月號の私の未定稿は、取扱ひ方が不完全なものであつたに拘らず、主題其ものが幸に文化史的の或る懐かしさを有つて居た爲めか、讀者諸君から未見未知の私へ、いろ／＼興味の深い有益な御教示を賜つた事を深く感謝致します。御かげ樣で短かい時日のうちにかなり澤山材料が集まりましたから、之れに力を得てもう一度此の續稿を書く事にしました。

此の折を以て私は、面談の際に御教示を受けた内田魯庵氏。三田村鳶魚氏、及び久保田米齋氏、佐藤功一氏、笹川臨風氏、書面によつて御教示を賜つた諸氏――大阪市の池田蘭子氏、兵庫縣の石關猾介氏、天津の堀内輝氏、市外大井町の渡邊一氏、麻布の龜田周一氏、京橋の河崎茂氏、和歌山市の川北榮三郎氏、京都市の横野明率氏、兵庫縣の高津才次郎氏、長野縣の高昌學氏、牛込の都並伊佐氏、麻布の中西賢三氏、廣島縣の中山嘉夫氏、京都府の村上義徳氏、埼玉縣の山口堪助氏、福岡縣の松藤次郎氏、下關市の松岡京介氏、福山市の松下紘氏、西大久保の前田香峰氏、西大久保の駒井濃作氏、日本橋の江島欽次郎氏、島根縣の青山青苑氏、牛込の淺田惠一氏、新潟縣の佐野貫之助氏、牛込の宮地金次郎氏、福岡縣の諏訪道氏、神奈川縣の元城邦太郎氏、京都市の盛口敬太郎氏、並びに匿名又は雅號の諸氏、中澁谷の澁谷氏、永田町の安豐齋氏、京都市の熱心生氏、廣東日本人會の一閑人氏、興文社内某氏、下戸塚の京都人氏、大阪市のS氏、長洲のY－氏、外國語研究者逸名氏――に篤く御禮を申上げます。

二

私は先づ尻取りから始める。尻取りは江戸の言葉で、三田村鳶魚氏によれば、昔上方では之を段々と稱したさうである。

この尻取りは本來は發音遊戲よりも寧ろ文字遊戲又は文學遊戲に屬して、折句・沓冠・天地の歌・廻文などゝ同類のもので、古くは「つらね歌」から「文字鎖」に轉じたものと見る事が出來

る。例へば曾丹集の「つらね歌」、御土御門院の「十二字錄」、三條西逍遙院の「源氏物語卷名文字錄」、後水尾院の「源氏卷次第文字錄」などが、この方面の古典的のものであり、近くは「東海道往來」などが有名であつた。尙精しくは大正八年五月一日發行「心理研究」八十九號所載、福井久藏氏の『日本文學に見えたる文字上の遊戯』を參照せられたい。

扨て六月號五〇頁に掲げた「牡丹に唐獅子に虎」の尻取りには、駒井氏によれば其の先きがあり、澁谷氏によればまだ其の後が澤山ある。

兎も角もこの尻取りに就てはいろ〳〵の說がある。どの部分が本體で、どれ丈が後人が附加したものか、又繪入りの一枚刷りとして最も廣く行はれたのはどの部分であつたか等は、古老に就いて精しく訊して見た上でなければ、にわかに斷言が出來にくいやうである。

今駒井氏によつて前を繋ぎ、澁谷氏によつて後を加へて一つの長い纒まつたものを仕上げて見る。澁谷氏によれば全體の中にお正月が三つあつて、これをあちこちに繋いで、時に應じて伸縮の加減をする事が出來る事や、幕末の頃酒席で三味線に合せて唄つたものである事も明かに成つた。

又「相場のお鐘がどんちゃん〳〵——ちゃんやおつかあ四文おくれ」は「相場のお鐘がどんちゃんかあちゃん四文おくれ」と、二句につめても唄はれたさうである。

結末の二句の括孤で挿んだ所は、兒童本位でない爲めに一般に略して教へられたものと見える。

三

（い）大山の入道が笑つて　笑ふ門には福來る　喜太郎が餅搗く杵の歌　歌の中山清閑寺　清閑寺の和尚さん坊さんで　牡丹に唐獅子竹に虎　虎をふまへて和藤内　内藤様はさがり藤　ふじみ西行うしろむき　むきみはまぐりばかはしら　柱は二階と椽の下　したや上野の山かつら　桂文治ははなしかで　でんでん太鼓に笙の笛　ゑんまは盆とお正月　かつょりさんは武田びし　菱餅三月雛まつり　まつりまんどうだしやたい　たいにかつをにたこまぐろ　ろんどん異國の大みなと　とさんするのはおふじさん　三遍廻つて煙草にしよ　しようじきせうだゆいせのこと　ことにさみせんふえたいこ　たいこうさまはかんぱくじや　白蛇の出るのは御島　しまの財布に五十兩　五郎十郎曾我兄弟　鏡臺針箱煙草盆　坊やはいゝこだねんねしな　品川女郎衆は十匁　十匁の鐵砲二つ玉　玉屋は花火の大元祖　さうしよのでるのはばせうあん　あんかけどうふによたかそば　そうばの

おかねがどんちやん〱　ちやもやおつかあ問文おくれ
おくれがすぎたらお正月　お正月のたからぶね　たから船
には七福神　じんごうこうごうたけのうち　うちだはけん
びしなゝつむめ　むめまつさくらは菅原で　わらでた
ばねしなげしまだ　しまだかなやは大井川　かはいけ
りやこそ神田からかよふ　かよふふか草百夜のなさけ　さ
けとさかなで六百出しやまゝよ　まゝよ三度笠横たにかぶ
り　かぶりたてにふるさがみの女　女やもめに花がさく
さいた櫻になぜ駒つなぐ　つなぐかもじに大ぞうもとまる
丸い玉子も切りよで四角　角にや出やせぬ窓の月　月の八
日はお藥師さまよ　鎧かぶとに鎗一本　ほんによい人意氣
な人　當世はやるはだんぶくろ　福祿壽は頭が長い　永井
兵助居合拔　拔き差しするのは煙管筒　つゝツポ襦袢はは
やります　ます〱ふゑるは唐物屋　やがて諸色がやすく
なる　鳴海絞りの派手姿　姿よいのは柳腰　腰の曲つたか
ざり海老　海老で鯛をば釣あげた　あげた饅頭タントある
歩るく渡世の町飛脚　口も八丁手も八丁　蝶々とまれや
菜の葉にとまれ　禮者の來るのはお正月　つから手鞠は大
神樂　かぐらはやして町々めぐる　めぐる月日の大晦日
晦日に取るのは大やさん　三人よれば文珠の智惠　智惠が
なければ皆愚者ぞさ　堅い約束石山で　（山さいろすりや
木の根が枕　頼光様は大江山）　山と川との合言葉　鳥羽
に伏見に淀竹田　蹴出しの目につく緋縮緬

四

池田氏による次の尻取り二種は、昔し伊豫の今治町で行はれたもので、中でも〔ろ〕は氏の大祖父君が當時江戸で習はれたものださうである。熟れを誦して見ても吾々の幼い時の幻があり〱と浮いて來る——

〔ろ〕近江で石山秋の月　月に叢雲花に風　風のたよりは田
舍から　唐をかくせし淡路島　縞の財布に五十兩　十郎五
郎は曾我の事　まことに日出度う候ひし　らいしは嵐の三
五郎で　ごろ〱なるのは雷か　稲荷の鳥居に猿の尻のし
り熨斗目の上下で　下の關まで押ろせ〱　おせきの弟の
長のし吉は　チョチ〱アババツムリテン〱　テン〱
天滿の裸巫女　行こかもどろか住吉まゐり　參り下向の足
休め　主馬の判官盛久は　久松其處にかつめたかろ　逆櫓
が船頭松右衛門衣紋つくろい正座する　駿河に千年不二の
山　山に合ひろふ合ひ心　心は石竹氣は紅葉　紅葉は通天
荷稲山　となりにもちつく時の音　淀の川瀬の水車　何を
たよりにくる〱とくる〱と

〔は〕お娘何處へ行きやろ油買ひに茶買ひに・高い山から谷みれば　みれば齒がため齒のくすり　藥師の權現様よ　様に三度笠三味や猫の皮　可愛い男に逢ふ夜はゆかし　ゆかし〳〵とあつたとさ　淺草の觀音様は一寸八分　八分しやれてもまだ二分殘る　津輕合方外が濱　濱にはつけら毛の毛が生へて　さいた桜下駄足駄　吉田通れば二階から招く姉貴や二十一妹は廿　はだしで道中がなるものか。

五

織田氏によれば〔い〕の尻取りの一小部分を變化した次の句〔に〕が福岡下の關地方に行はれ、福岡では市祭(ドンタク)の日に杓子を敲いて之を謡ひ騒ぐさうである。そうして今は東京にも及んでゐるとの事である。

〔に〕ボンチ可愛いネン〳〵しな　品川女郎衆は十匁　十匁の鐵砲玉　玉屋が可愛いスツポンポン

此のやうに最後の句が再び最初の句に返つて行くものには、次のやうなのが有つた事を思ひ出す。

〔ほ〕ショー〳〵しようつく婆さん屁垂れた　タタ狸の金丸八疊敷　キャ狐の尻っぽ團子にしよ

之で同類の次の句は日清戰爭當時のものである。

〔へ〕リリ季鴻章の禿げ頭　ママ饅頭食つて皮殘す　スス損丁木頭で味噌すつて　テテ帝國萬歲大勝利(高津氏)

尻取りを應用した記憶研究法の一例として、中西氏が兒童に試みられたものは

〔と〕ウソヂヤ　ジヤノメ　メジロ　スケ　ケン〳〵バタ〳〵タヌキ、キツネ　ネコ　コンニヤク　クワイ　イタチ　チンバ　パケツ　ツルベ　ヘンキョウ　キョウダイ　イノシシ　シマイ

之を記憶させてから、全體を一つに合併したものを一氣に、しかも各部々々の意味を保存させながら次のやうに讀み通させる。

〔と〕嘘ジヤノメジロスケンケンバタヌキツネコンニヤクワイタチンバケツルベンキョウダイノシシマイ。

これは〔い〕にある「相場のお鐘がどんちやんかあちやん四文おくれ」の例を全體に廣げたものである。

〔と〕に似たもので日露戰爭當時馬關で行はれた次のやうなものがある。

〔ち〕日本ノ　乃木サンガ　凱旋ス　スズメ　メジロ　ロシヤ　野蠻國　クロパトキン　キンタマ　負ケテ逃ゲルガチヤンヤン〳〵坊　棒デタタクガ犬殺シ　シアン坊主ノ柿ノサネ

猫ニ小判　眞說(松岡氏)

(g)月にむら雲花の風　聞いたよりに田舎から　からの財布に五十兩　五郎十郎仇討(香亭遺文)(高津氏)(ろ參照)

六

本來の發音遊戯に入る前に、もう少しの寄り道を私に許して頂きたい。つられ歌、文字鎖から來た段々又は尻取りは、文字遊戯と發音遊戯とを兼ねた者である事は既に述べた通りである。

然るに、この字音の鎖を心持の上で繋いで行くと、自然に、吾々の幼時の夢を誘うてくれた不思儀な童謠や民謠がいくつも生れて來る。私は池田氏・高津氏・青山氏によつて、其傑作の數品を讀者諸君に紹介したい。

(a) 油屋の門へ油一升返してその油どうした　犬がねぶつて候　その犬どうした　打殺して候　その皮どうした太鼓に張つて候　その太鼓どうした　くどへくべて候　その灰どうした　瓜へもぶつて候　その瓜どした　からすがつゝいて候　その烏どうした　向ひの山へとんでいつた〳〵。(池田氏)

(b) 花のお江戸の兩國で　坊さん簪しよ買ひに來た　坊さん簪しよ買ひそなこーとよ　御寺がどてらを買ひに來た　御寺がどてらを買ひそなこーとよ　按摩さんが眼鏡を買ひに來た。(高津氏)

(c) 螢々なして　ほえりや　ひだりて　ほえる　ひだりけりや　田すけ　田すけや　足がよごれる　よごりや　あらへ　あらうや　ちめて　ちめてけりや　あたれ　あたりや　あつい　あつけりや　あとしされ　あとしさりや　のんがく　のんがくはや　ころせ　ころしやごらしけや　だいてね　だいてねりや　よけく。(青山氏)

(d) かわこが　屁こいた　何ぼこいた　十こいた　洞光寺山へ聞えて　松が三本ころんで　何ぼかしてか〳〵ころんだ。(青山氏)

(e) 向うの山に　猿が三匹とまつて　前の猿は物識らず　後の猿も物識らず　中の子猿がよう物識つて　ごされ友達花見に行こや　花は何處花地藏の前の櫻花　一枝折ればパツと散る　二枝折ればパツと散る　三枝か先きに日が暮れて　何方の紺屋へ宿取ろか　東の紺屋へ宿とろか　南の紺屋へ宿とろか　殿様の紺屋へ宿とつて　晝は短し夜は長し　曉起きて空見たら　ぎつこのばつこのきいせんご　船ども漂へて帆を掛けつ　帆掛船の吊り物は　白糸赤糸　赤地の交つた錦刀。(青山氏)

(f) お寝んねお寝んね御寝んねや　宵には早から御寝なり

あさまは早からお目覺めて　お目覺の褒美になあに何　お乳の出花を上げましよぞ　お乳の出花がお嫌なら　鷄蹴合せお目にかきよ　鷄蹴合せお嫌なら　お菓子は澤山おあがりか。(青山氏)

(a)は尻取りの(ろ)(は)と共に伊豫の今治地方のもの、(b)は云ふまでもなく江戸のものである。(c)から(f)までは出雲地方のもので殊に(c)(h)は出雲訛りが有りのまゝに示されてある。(e)は今から二十年前に流行した民謡で、小泉八雲氏の選ばれたものださうである。(f)ば出雲の殿様のねんね歌である。

出雲は神代史の上から見ても、考古學・人類學上の研究から見ても、神話・民謡の方面の興味から見ても、ラフカヂオ・ハーン氏を惹付けたより以上に、幾等の新しい神秘と暗示とを、吾々にさとらせようとしつゝある。私は此の機を以て、青山氏によつてこの神代的の地方の民謡の特有なもの五篇を掲げる。

(g)千家北島にや　燒餅がはやる　中に味噌入れて　ぽつぽほやく\と。

(h)蕎麥もちごのござるやう　紅い帷巾(かたびら)で　ぶりりしやらりと　紅い帷巾で

(i)だいく\蟲(カタツムリ)　角ちとだしやれ　雨風吹くから角ちとだしやれ

(j)蕊々　舞うて見せ　あしたの晩に　鳥にかくしてねずみやる

(k)わりが(オマヘ)家が燒ける　早いんで(カイツテ)水かけ　水がなきややるぞ　餘つたら子にやれ　子が無きやもどせ

七

私はこれから愈々發音遊戲に入つて、先づ同韻反覆(六月號五三・五四・五五頁)の例を報告したい。この方面の材料は和歌・道歌・狂歌に非常に多いけれども、之れが一つの纒つた作品に現はれたもの(發音しにくい部として「外郎賣りの臺詞」や之を燒直した「鼻下長物語」のやうに)としては次の掲げる狂言の「酢薑」が代表的のものである(松下氏)。

酢薑

二人　酢賣括り袴、竹杖に酢筒をつけてかた薑賣括り袴、竹杖に薑苞(つと)をつけてかたぐる。

▲はじかみ罷出たるは、山城の國賣(みやこ)薑、でござる。又今日も商賣に參らうと存する。それ商人とは足をはかり、擧をはかりに商はねばならぬと申す。まづこれからよばはりませう。はじかみこん。▲す罷出でたるは、和泉の國の酢賣でござる。又今日も商(あきなひ)に參らうと存する。やれさて、一段の日

田に出合せたる事かな。先づ喰りませう。すこん。▲はじかみこん。▲すりこん。▲はじかみやい、其所な者耳の邊、寄りて、何をつこん〱といふぞ。▲すやい、其所 者、おぬしは又、何をはじかまろ〱といふぞ。▲はじかみや、こちか何事を云うたとまゝよ。この藥包などには、いから系圖のあるものぢや。▲す何といふぞ。その藥包に系圖があるといふか。▲はじかみなか〱有る。▲すちつと聞きたうおぢやるの。▲はじかみいや、知らずは云うて聞かせう。藥包に黄色といふことがある。其上薑などには、いから系圖の多いものぢやが、そちが其の酢などには系圖があるまい。▲すいや、酢にこそ系圖がおぢやれ。▲はじかみ何ぢや、酢にも系圖があると云ふか。▲すなか〱おぢやる。▲はじかみや、ちと聞きたうおぢやるの。▲すお、なか〱、語つてきかせうが。して、位に負けたらば、其方は簀子になるか。▲はじかみおんでもないこと、どちらなりとも簀子にならうず。▲すさらは、これへ寄つて聞かせませ。昔推古天皇の御時に、一人の酢賣、禁中を賣りまはる。その時わうゐん、酢賣々々と召されしが、すの門をするりと通り、簀子緣にすくと立つておぢやる。その時わうゐん、透張障子をするりとあけする〱と、御出であつて、すきの御酒を下された。一つたべ、二つたべ、三つ目に御詠歌を下された。おすこにも聞かうずるよ。▲はじかみ急いで語りやれ。▲す住吉の間に住お菓を賜けて、さぞや位は住みよかるらんと、下された。これに増したる系圖はあるまい。簀子にならせませ。▲はじかみまづ薑がもお聞きやれ。昔からく天皇の御時、薑賣と召されしが、唐門をからりと通り、から緣にかしにまる。その時わうゐん、唐紙障子をからりとあけて、から〱と御出ありて、辛き御酒を下されたり。一つたべ、二つたべ、三つ目にお肴とし、御歌を一首下された。これへ寄つて聞かせませ、からし、からもの、から木でたいて、からいりにせんと下されだ。これに増したる系圖はあるまい。お主、簀子にならせませ。▲すいやはや、これもよつぽどの系圖でおぢやる。さりながら、すゐこ天皇も、からく天皇も、住は同じ事。いまからは、相商に參らず。▲はじかみお、まことに仰る通、酢のいる所には薑もいらうず。さゝ。まづ賣らせませ。どれへ向けて參らうず。▲す眞直に、行かせませ（下略）。

八

次に主として中西氏よつて、和歌・道歌・狂歌の形式のものを澤山揭げる。

(一〇七)月々に月見ぬ月はなけれども
月見る月はこの月の月（中西氏）

(一〇八)月々に見る月なれどこの月の
こよひの月に似る月ぞなき（中西氏）

(一〇九)草刈が歸る野中に輝くは
傾げし籠の鎌の三日月（安豊鎮氏）

(一一〇)櫻咲く櫻の山の櫻花咲く櫻あり
散る櫻あり（中西氏）

(一一一)思はじと思ふも物思ふなり
思はじとだに思はじや君（中西氏）

(一一二)世の中を思ふも苦し思はじと
思ふも身には思ふなりけり（中西氏）

(一一三)思ふ人思はぬ人の思ふ人思はさらなん
思ひ知れやと（中西氏）

(一一四)身を思ふ心で身をば苦しむる
身を思はねば身こそ安けれ（中西氏）

(一一五)心こそ心をはかる心なれ心のあだは
心なりけり（中西氏）

(一一六)心こそ心を迷はす心なれ
心に心心ゆるすな（中西氏）

(一一七)人多き人の中にも人ぞなき
人となれ人人となせ人（中西氏）

(一一八)人にして人を知らざる人多し
人の非をば學べ人々（中西氏）

(一一九)世の中に夢と思ふも夢なれや
夢を迷ひといふも夢なり（中西氏）

(一二〇)夢の世に夢に夢見る夢の人の
夢物語するも夢なり（中西氏）

(一二一)人の非は非とぞ惡みて非とすれど
我非は非とぞ知れど非とせず（中西氏）

(一二二)よき人のよしとよく見てよしと云ひし
吉野よく見よよき人よく見つ（天武天皇）（中西氏）

(一二三)爲せばなり爲さねばならず成るものを
ならぬといふは爲さぬなりけり（中西氏）

(一二四)毒多き毒の中にも氣の毒は
何より毒なものでこそあれ（中西氏）

(一二五)事多き事の中にも何よりの事と
云はるゝが何よりの事（中西氏）

(一二六)今今と今と今といふ間に今ぞなく
今といふ間に今ぞ過ぎ行く（中西氏）

(一二七)親もなし妻なし子なし板木なし
金もなければ死にたくもなし(林子平)(高津氏)

(一二八)南無釋迦ぢや娑婆ぢや地獄ぢや
苦ぢや樂ぢやどうぢやかうぢや
と云ふが愚ぢや(一休)(高津氏)

(一二九)辛きもの辛子から蓼からひるや
唐木で焚いて辛炙にせん(高津氏)

(一三〇)のの宮ののちのしのぶののちの世の
秋のかたみの種ののこりて(中院通茂公)(中西氏)

(一三一)老の身の腰ののびたる杖つきの
のの字のなりの字の如くにて(靈文法院)(中西氏)

(一三二)片假名のノの字のなりの似たものの
笹の葉の墨の一ふで(武者小路實陰卿)(中西氏)

(一三三)まのののの字のなりの世の中の
人の心のまるきのぞよき(風早公長朝臣)(中西氏)

九

和歌の形式によらないものを一括して次に掲げる。

(一三四)ひら／＼ひらめく日の御旗(松下氏)

(一三五)密柑金柑酒のかん
親は折檻子はきかん

(一三六)大寒小寒酒のかん
親は折檻子はきかん

(一三七)姦夫と姦婦と喧嘩して姦夫が姦婦を姦婦と
云へば姦婦も姦夫を姦夫と云ふ(中西氏)

(一三八)神田鍛冶町の角の乾物屋の勘兵衞さん
の所で勝栗買つたら固くて嚙めない
返しに行たら勘兵衞さんの嬶が出て來て
癇癪起してかり／＼嚙んだらかり／＼
嚙めた

(一三九)神田鍛冶町の角の菓子屋の嘉七の
嬶(かゝ)が菓子箱かつくり返してかゝとに
瘡かいた嘉七が河の中へかつこんだ(中西氏)

(一四〇)神田鍛冶町の角の乾物屋の
嘉平の嬶の片頰ぺたに蚊が止つて
痒いから搔いたらかさかき出した

(一四一)神田鍛冶町の角の乾物屋の嘉七の
嬶が蚊に食はれてかゆいつて蚊張
の中へかこんだ

(一四二)加賀の金澤の家中の內儀(かみ)さんの
肩に蚊が一匹止つた搔いたらかいたら

かさかき出した

(一四三)加賀の家中の嘉左エ門の娘の顔をば蚊が食うて痒ゆうて痒ゆうて掻いたらかさに成つたかさとる剃刀貸さんせかさ取つて返す(熱心生氏)

(一四四)鍛冶屋の嘉兵衛が蚊からかぶられて痒いから掻いたら掻き目が瘡になつてかく／＼駕籠へ乗て川棚温泉に行つた(飯田氏)

(一四五)四郎丸の四郎の尻穴へ虱が四匹しつかりしがみ付いて四郎が死んでも知らん顔の虱四匹(佐野氏)

(一四六)八匹の蜂が八公の禿げた鉢びたいを八針さした(佐野氏)

(一四七)四條の新町糝粉屋の新兵衛さん臀糝粉はさんで辛氣臭さがつて死なはつた(京都人氏)

(一四八)四條の新町しんこ屋の新兵衛はんが尻にしんこはさんでしんきがつて死んだ(盛口氏)

(一四九)二條の西洞院西入人形屋の二階で鶏が二匹西向いて逃げた(京都人氏)

(一五〇)二條の西洞院西へ入にわとり屋の二階に鶏が二羽居て俄に西向いて逃げた(盛口氏)

(一五一)善通寺のつう／＼念佛五口申せば金佛に成ると云ふさうと云ふ

(一五二)黒田さんの黒助が黒茶町に黒鯛を買ひに行つて黒犬に食ひ付かれて黒血が流れた(松下氏)

(一五三)せんがとこの千なり瓢箪千なつて一つ呉れろと云うたらばせんが居らんでやう遣らぬ(村上氏)

(一五四)綾部本町蛇が居るちやげな惡い蛇ちやげな噓ぢやげな(村上氏)

(一五五)御前が午前五時に御ぜんを五膳召し上つた(松下氏)

(一五六)男は度胸で女は愛嬌で坊さんが御經で鶯ほけきよで歸ろは故郷で年寄

雲居(高津氏)

(一五七)瀬戸の唐橋大津の鍛冶屋が親子諸共
汗水たらして朝から晩までトッチンカッチン
叩いてのばして持て來てかぶせた唐金
唐擬寳珠(熱心生氏)

(一五八)わが嫁ひ生意氣生醉生嘈り生でよい
のはなまこ生貝生がつを何よりよい
のが現ナマぢや」免糞錄」(高津氏)

(一五九)田ッ端のへじろ端の老爺がゐろり端で
しりつぱたやけつぱたした(山口氏)

(一六〇)歌うたひが家の裏歌うたひうたひ
行きよつたよつて歌うたうなと云つたら
歌うたひやよつて歌うたふ云うて歌うたひ
うたひゆきよつた(S氏)

(一六一)可部(かべ)の願專(かんせん)坊には聽聞ががんすか
がんせんかがんしやがんすような話が
がんしようが話ががんせんけいがんせん
のでがんしよてい(中山氏)

(一六二)可部の願成寺には說教ががんすでがん
しようかがんすならがんすやうに
お願れががんしようががんせんから
がんせんのでがんしよう(松下氏)

(一六三)坂本町の山王さんの櫻の木に
猿が三疋下がつたほんぼにあ
下がらでな眞逆さあまに下が
つた(元城氏)

(一六四)向うの方から　ふかり物が　ふかり〳〵と
ふつ飛んで來て　向うのふとのふたへへ
ふたりとふつついた　ふつぱつても〳〵
とれないから　ふんどすふツかけて
ふつぱつたら　ふたりとふつたぎれた
(一閑人氏)

神田鍛冶町は六月號の(一三)(一四)の外に、(一三八)から(一四一)まで四種もある。(一四二)から(一四四)までは、之を地方化したものであらう。(一四五)は越後長岡のもので、六月號の(三〇)に似たものである。(一四七)から(一五〇)までは云ふまでもなく京都、(一五一)は丸亀、(一五二)は福岡、(一五三)(一五四)は丹波、(一五九)は埼玉、(一六一)(一六二)は廣島縣可部殊に(一六一)は可部在住の中山氏のもの、(一六三)は筑後の柳河、(一六四)は東北語でふとひの混用の例として興味が多い。

（一六五）近江源氏の嫡流はチヤ〱木のチヤム郎
チヤカ綱がチヤチ頭のチヤムトを冠り
茶色の胴春茶のよろひ駒は茶色
で茶のチヤ綱チヤラ鞍おいてチヤラり
と打乘り（佐藤氏）

（一六六）宇治川や宇治は茶所茶屋娘
茶色の前垂チヤツくり返して茶々
無茶苦茶に茶に無茶々（佐藤氏）

最後の二つは共に「ちや」の反覆で、殊に（一七五）はかなりの名文である。（一七六）は大坂のもの。

十

譯の分らぬ長い名は六月號（五六・五七頁）に三つ四つ掲げたが、笹川氏によれば（三七）の註釋として「壽限無考」と云ふ小論文が何かの雜誌に出た事があるとの事である。

中西氏は（三六）に就いて左の通り幼時の記憶を報告された

（一六七）アリアテ三平郎　テキ〱屋
テキスリゴンボウノ　走心坊
宗高入道　播磨ケ別當
茶碗茶ブ助　引井幸助（中西氏）

次の二つも此の類に入るものである。

（一六八）クミチンチン　チヨーロケン　クルメン
カリン　カンキヨ　サイベンスル　シヨウベンスル
ゴフンタカリン　タカトンダカ　ハネタカ
スウトンダオウシヤ　スオラ〱
テキ〱ノテキロンポ　大高入道
燒山彌次郎　茶碗茶ワスノ榮助

（一六九）ヘイトコカイ　ヘイトコカイ　ヘイメイ
カイメイ　エイメイシクシク　ヘイカンジ
ハラシヨ　イツチヨウキリカイ　チヨウキリカイ
テンモクモクラノ　チヨチヨラノホイ（松下氏）

（一六七）の後半は六月號に出た（二）に似て居る所を見るとこの二つには更に其の原型があるかも知れない。それから（一六六）の結末の所も、何となしに（三六）に似て居る。

（一七〇）三なめかけたが三かけたびつちく
でつちくぼうねん坊のつうだ
左工門（鼻下長物語）

十一

右のやうな譯の分らぬ名は、掛け聲又は動物の鳴き聲とか、棒讀みの漢音吳音とか、其他朝鮮語や支那語や和蘭語の發音などが混入したものであるかも知れない。

次の三つは動物の鳴聲で出來て居る發音遊戲である。

(一七一)鳩にとんびに雉に鶯鳴く聲は
くうかびん／＼しよーろびんから
けんじやく／＼　ほーほけきよー

(一七二)鳩と鳶と雉と狐とカナリヤと鶯と
鳴聲聞けば　のんより　くう／＼
ぴいひよろけん／＼　ぴいひよろけん／＼
ちやつちく／＼　ころりん　ほけきよう
と鳴いた／＼

(一七三)奥山で　雉と狐と猫と犬めが集つて　何と
云つて鳴いて居た　雉はけん／＼わん／＼
にやんこん　にやんけんこんにやん
わん／＼けんこん　にやんけんこん／＼
にやん／＼／＼

意味は通じないけれども耳には不思議に面白く響て來る外國語は、かなり多く發音遊戲の中に入つて異鄕的の趣味を唆つてよい筈である。(十八參照)

古い時代の宗教上の經文や祈禱や呪文の發音は、後世には遊戲的に模倣されたであらうし。其他漢音の「チンプンカンプン」・や近松の國性爺に現はれた「チー／＼パー／＼」や、歐洲語の「ペラ／＼」などは、確かに輕文學や落語家の高座の材料たるを失はない。今日でも吾々のよく聽く手品師の掛け聲などもこの部に入るであらうし、又すてゝこ踊の「テケレッツノパ」などは、佛蘭西語の打消しの副詞の ne……pas のパが、特に著しく邦人の耳に響いたからであらうと云ふ事である。

私は今集つた丈けのこの種類の材料と思はれるものを揭げる。

(一七四)トーリヤン／＼　ヘペロレロンノ
アイガモメ　トーロロンノ　ホツシヨー
ローンノ　アイガモメ　マーリコスツチヤン
ヘロ／＼ヘツポンパイ(佐藤氏)

(一七五)インニコ　ニコ／＼　サンコデシヲツク
ゴンゲン　チヤラフク　チーヤリパー(中西氏)

(一七六)いろはにほへと唐人の寢言には　サイコ
サンマイコ　ネコギヤアーデギヤアー　フーギヤア
ギヤアドーシヨーテレンカ　ドーシヨーボー
アサキニヘキンクルクル／＼クルメン
タカトモリントモ　ナーク　スツペン
スルトモ　ソージロボージロ(佐藤氏)

(一七七)　ドンチヤ／＼　チヨツクリマキヤ

チョツクリクリ〳〵　晩にやショー〳〵
ケンヤク　ターラリフーラリ　ミョー
ミョーチキリンリンチン
チン〳〵ボコ〳〵　ナカ〳〵ソコリキ
ヤーパツパ(佐藤氏)。

(一七八)アリタガ　チンサー　イツペンヤ　サキデ　シツ
ペンスルトモシツポンスルトモ　リントコ〳〵
リン〳〵トン〳〵　ヒチリクピングノ　メコ
ショーリョー　ショーリョー(都並氏)

之と共に日本語を外國語風に發音する遊戯も、古くは寶暦の風來山人から明治の英學生に至るまで、いろ〳〵に工夫された。たとへば、饅頭をオストアンデル、袴をスワルトバートルdictionaryを「字引く書也」などは誰れでもよく知つて居る例である。しかしこれは本來は舶來の又は合の子の洒落・地口・語呂合せの部に入るべきもので、私の云ふ發音遊戯からよほど離れて來るから、精くは立ち入らない。

しかし日本語でも、餘り發音が變つて來れば、自國語かどうか一寸見當の付かない事がある。次の二つは恐らくはさう云ふ例になるものであらう。

(一七九)イーイ　イーサイコークガイルリ　イラランノ
イーサイコークガ　イッタングルマノ
マルマナコ　イーサラバーサラ
イットウジンガ　イキモメ十三ダ
イキモメサンダンハ(内田氏)

(一七〇)トントン　カンカン　ピコピーヤ
カツタニ　キツタニ　ダチアアカン(佐野氏)

(一七九)は六月號の(四九)の全文で、イを順次に口を取り換へハに置き換へて詛し合ふものである。(一八〇)は越後の方言で、トントンは男の子、カンカンピコピーヤは女の子、カツタニはどうしても、キツタニはいやはや、ダサチアカンは役に立たぬ——と云ふ意味である。

十二

口がもつれて言ひにくい發音遊戯を一括して掲げる。

(一八一)野分(佐野氏)
(一八二)篝火(佐野氏)
(一八三)卷柱(佐野氏)
(一八四)鐵所(佐野氏)
(一八五)かけ鏡(佐野氏)
(一八六)丸髷(山口氏)
(一八七)第六師團司令部(中西氏)

(一八八)特許局の局長(宮地氏)

(一八九)特許局の特許局報(宮地氏)

(一九〇)生米、生味噌、生卵、生午蒡

(一九一)生米生豆寫生道中(中西氏)

(一九二)生葱、生米、生卵(山口氏)

(一九三)戸棚の上に生米一升(横野氏)

(一九四)大眞瓶、中眞瓶、小眞瓶(中西氏)

(一九五)向うの塀に丸穴一つ(鼻下長物語)

(一九六)お玄關前のお生壁

(一九七)玄關番の雨合羽の番合羽(鼻下長物語)

(一九八)馬屋の前のぬれ生藁(松藤氏)

(一九九)御厩まや助濡手で濡藁ちよと持てこい

(二〇〇)お前のがま口からがま口

(二〇一)今米の隱元豆ようなる隱元豆(淺田氏)

(二〇二)夏の生夏豆(松藤氏)

(二〇三)李も桃ももう賣れた(中西氏)

(二〇四)赤い屛風白い屛風(淺田氏)

(二〇五)殿様ぢやつたつちや誰ぢやつたつちや(松藤氏)

(二〇六)筑後牛蒡備後牛蒡(調氏)

(二〇七)増井、廣峰、骨根、書寫、惣社(河崎氏)

(二〇八)向ふの竹垣に誰か竹たてかけた

(二〇九)向うの土堤岸に牛が石臼うせて通る(松藤氏)

(二一〇)親猿が大生唐芋食うて子猿が

小生唐芋食うた(松藤氏)

(二一一)きたきたきた山くづれて

京都がをはり(山口氏)

(二一二)兵庫の坊主が屛風を持て來て

坊主が屛風に上手に坊主の繪をかいた(中西氏)

(二一三)金屛風に備後の坊主が屛風に

坊主の繪を畫いた(松下氏)

(二一四)この屛風よい屛風攝津の坊主

に屛風がない此の屛風攝津へ

やつて攝津の坊主の屛風しせう

(二一五)高野の坊主が東寺の坊主の屛風に

東寺の坊主の繪を畫いた其屛風を

東寺の屛風にしよう(前田氏)

(二一六)如何なくゞり戸もくゞりくゝつ

たがお錠口のくゞり戸はくゞり

にくいくゞり戸でくゞられませぬから

あがりませぬ(鼻下長物語)

(二一七)隣のくゞり戸は栗の木のくゝり戸で
くゞりづらいくゞ戸でくゞりつければ
くゞりいゝ(山口氏)

(二一八)久留米のくゞり戸は栗の木の
くゞり戸くゞりつけりやくゞり
いゝくゞり戸だがくゞりつけ
なけりやくゞりにくいくゞり戸ぢや(興文社某氏)

(二一九)鴨が米喰て小鴨が小米喰て
鴨が米小鴨か小米喰ふ(横野氏)

(二二〇)裏の小池小川に鴨が八百匹小鴨が
八百匹鴨が米噛めや小鴨が小米
かむ鴨米かめや小鴨小米かむ

(二二一)隣の戸棚に置いてある柿は
客の喰ふ柿か客の喰はぬ柿か(横野氏)

(二二二)お客が柿よむきあ飛脚が柿食ふ
飛脚が柿よむきあお客が柿食ふ
お客も飛脚もよく柿食ふ客飛脚

(二二三)高野の弘法大師この兒を抱いて
粉をひいてこの兒の眼に粉を入れて
これからこの兒抱いて粉をひくまい(淺田氏)

(二二四)緣の下の地藏樣に足さし出さつ
しやいますなと言うたに又足
さし出さつしやいました

(二二五)家の前の細溝に泥鰌によろり
鰻のろりに泥鰌によろり(鼻下長物語)

(二二六)湊の長町七曲りにくい七曲り
曲つて見れば七曲り易い七曲り(川北氏)

(二二七)淸水流れの柳の下に蛙ピヨコ〳〵三ツピヨコ〳〵
合せて六ツピヨコ〳〵(YI氏)

(二二八)蛙一ひよこ二ひよこ三ひよこ
ひよこ〳〵(久保田氏)

(二二九)家の簞司に鼠がごと〳〵
隣の簞司に鼠がごと〳〵
共又隣の簞司に鼠がごと〳〵
三ツ三家の三簞司三鼠三ごと〳〵(YI氏)

(二三〇)梢から猿が三匹三下り
合の手を引く手と手と手(安豐鎭氏)

(二三一)山王の櫻の木にお猿が三匹下つて
お手と手と手と手と手と手(佐藤氏)

(二三二)庭の石竹は引拔きにくい(河崎氏)

(二三三)橋の下の杭引抜きにくい(村上氏)

(二三四)上加茂の加茂の傘屋で傘かつて
　加茂の歸りに返すからかさ(前田氏)

(二三五)上加茂の紙屋の孫兵衛か下加茂の
　鹽屋の孫兵衛か上加茂の紙孫か
　下加茂の鹽孫か(前田氏)

(二三六)向うの鶴は白鶴首か黒鶴首か
　あれこそほんとの直黒々の黒鶴首か
　白鶴首か(鼻下長物語)

(二三七)御前の脚絆はかわうその皮の
　革脚絆私の脚絆もかわうその皮の革脚絆
　川向うでかわうその皮の革脚絆の
　皮くらべしよう(佐藤氏)

(二三八)茶一斤田一反、茶二斤田二反、茶三斤田三反、
　茶四斤田四反、茶五斤田五反、茶六斤田六反、
　茶七斤田七反、茶八斤田八反、茶九斤田九反、
　茶十斤田十反(都並氏)(鼻下長物語)

以上の中で、六月號に掲げた例の原型と見るべきものが二つある、(二三五)は(四一)の、(二二六)は(四二)の原型である、(二二六)の地名は和歌山市の湊部たる東長町と西長町との間の七曲りと云ふ小路を指したものである。又(二〇七)の増井と曾根は地名、廣峰と書寫は山、惣社は神社の名で、孰れも姫路地方の名所である。

十三

六月號の(三)(四)は、反覆して速く云つて居るうちに、何時の間にか別の意味の句に變化する例として掲げたものであつた。次の四句はこの類の例を示したものである。

(二三九)琴三味線(佐野氏)

(二四〇)馬の股に薬一本(鼻下長物語)

(二四一)向うの古桃の木に青ばる赤
　下つた

(二四二)奥様の大ぼんぼり殿様の
　大丸行燈

(二三九)は「今年や見せん」となり。(二四〇)(二四一)(二四二)は六月號の(四)と共に、erotic motive を有するものである。

最後に發音遊戲が腕の運動を伴ふものを掲げる。

(二四三)讃岐の金毘羅大權現
　あの子の金着八丈島
　狸の金玉八疊敷(興文社某氏)

これは二人對座でする遊びで、甲は「讃岐の金比羅大權現」と云ひながら兩手を合せて拜む形をする、乙は「あの子の金着八丈島」と云ひながら兩指で金着の形を作つて右の腰に下げる形をする、更に甲は「狸の金玉八疊敷」と云ひながら兩手の拇指と示指で圓形を作る。乙は今度「讃岐の金比羅大權現」に移る。これを追々に速くしかも間違はないやうに繰り返へす。

…………………………………………

九と十二に入れなければならなかつたもので、私の不注意から取り殘したものを玆に集める。

(二四四)加賀の金澤上の町の上の角の
加藤のか、樣片手で蚊張釣つて片足蚊
にかまれ痒がつてかいたらかき跡かぶ
れてかさぶた………(高津氏)

(二四五)猿が町の三拾院の櫻の木に猿が
三千三百三十三匹下つたたども下らず
猿子抱いて下つた(高津氏)

(二四六)茶釜　晦日(高津氏)

(二四七)一本の薪二本の薪三本の薪(渡邊氏)

(二四八)向ひの客は柿を食はぬ客だ(高津氏)

(二四九)たちベポー綻ベポー(高津氏)

(二四九)のベポーは三河地方で遺松の事である。

十四

外國語の發音遊戲を、古典語と近代語に就いて蒐集して、之を文學や詩學や修辭學、雄辯術の發達と照應して調べたら、非常に興味のある文化史的の研究が出來上らう。しかしこのやうな大問題は、其範圍の廣い丈け、特別に語學の才のある西洋文學の深い研究者を俟たなければ、容易に望む事の出來ない仕事である。

今姑らくさう云ふ根本問題を措く事にしよう。私は讀者諸君及び友人の好意と、雜誌英語界の上條氏の記事によつて、特に英語に就いて、かなり多くの蒐集を得た事を感謝しなければならぬ。

英語の此の方面の參考書としては、江島氏によれば C. Flaming. Art of reading and speaking. 「英語界」五月號所載、上條氏の記事『英語の發音實習』によれば、S. A. King, Graduated exercises in articulation 等があるさうである。

私は先づ松下氏の蒐集(250―272)を紹介しなければならぬ

(250) Six little thistle sticks.

(251) Mixed biscuits.

(252) **Six slender saplings.**

(253) Flesh of freshly-fried fish.

(254) Stop at the shop at the top of Sloane Street.

(255) Two toads, totally tired, tried to trot to Tedbury.

(256) Give Grimes Jim's great gilt gig whip.

(257) She sells sea shells down by the sea shore.

(258) Around a rugged rock a ragged rascal ran.

(259) Theodore Throstle threw a thimble into a thicket of thistles.

(260) She stood at the door of Mrs. Smith's fish-sauce shop welcoming him in.

(261) Susan shineth shoes and socks, socks and shoes shineth Susan. She ceaseth shining shoes and socks, for socks and shoes shock Susan.

(262) A haddock, a haddock, a black-spotted haddock, a black spot on the black back of the black haddock.

(263) Strict, strong Stephen Stringer snared slickly six sickly silky snakes.

(264) Swan swam over the sea;
Swim, swan, swim;
Swan swam back again
Well swum, swan.

(265) A right-handed writer named Wright,
In writing "write" always wrote "rite."
Where he meant to write "right,"
If he'd written "right" right,
Wright would not have wrought rot writing "rite."

(266) A fly and a flea in a flue
Were imprisoned. Now what could they do?
Said the fly: "Let us flee!"
"Let us fly," said the flea—
So they flew through a flaw in the flue.

(267) A canny young canner of Cannee
one morning observed to his granny,
"A canner can can
A lot of things, gran,
But a canner can't can a can, can'e?"

(268) If you stick a stick across a stick,
or cross a stick across a stick,
or stick a cross across a stick,
or cross a cross across a stick,
or cross a cross across a cross,
or stick a crossed stick across a stick,
or cross a crossed stick across a cross,

or cross a crossed stick across a crossed stick,
or cross a crossed stick across a stick,
or cross a crossed stick across a crossed stick,
How will you stick a cross across a crossed stick?

(269) A smart young fisher named Fisher,
Fished fish from the edge of a fissure.
A fish, with a grin,
Pulled the fisherman in,
Now they're fishing the fissure for Fischer.

(270) Tom Tye tried his tie twice to tie,
But, tugging too tight, tore the .
Tom turned to Ted Tye,
Then told Ted to Ted Tye,
Then told Ted to try
To tie the tie Tom tried to tie.

(271) Peter Piper picked a peck of pickled pepper;
A peck of pickled pepper Peter Piper picked:
If Peter Piper picked a peck of pickled pepper,
Where is the peck of pickled pepper Peter Piper picked?

272) In Huron, a hewer, Hugh Hughes,
Hewed yew trees of unusual hues,
Hugh Hughes used blue yews
To build sheds for his ewes;
So his ewes a blue-hued yew-shed use.

(273) A big black bug bit a big black bear.

(274) Bees build beautiful abodes.

(275) Billy Button bought a butter'd biscuit:
Did Bill Button buy a butter'd buiscuit?
If Billy Button bought a butter'd buiscuit,
Where's the butter'd buiscuit Billy Button bought?

(276) People partake plenteously of supper.

(277) The parson prags for peace.

(278) The miserable mule moves mournfully.

(279) Money may make much misery.

(280) Mathew Mendlegs miss'd a mangled monkey?
Did Mathew Mendlegs miss a mengled monkey
If Mathew Mendlegs miss'd a mangled monkey,
Where's the mangled monkey Mathew Mendlegs miss'd?

(281) Two tame tigers taught Timothy timidly.

(282) Ten troops went straight to the fort.

(283) Tip-toe Tommy turn'd a Turk for two pence:
Did Tip-toe Tommy turn a Turk for two pence?
If Tip-toe Tommy turn'd a Turk for two pence,
Where's the Turk for two pence Tip-toe Tommy

turn'd?

(284) Daniel did his duty diligently.

(285) Daisy devotedly dug danelions.

(286) Davy Dolldrum dream'd he drove a dragon:
Did Davy Dolldrum dream he drove a dragon?
If Davy Dalldrum dream'd he drove a dragon,
Where's the dragon Davy Dolldrum dream'd he drove?

(287) Names mean nothing it not noted.

(288) Nine nuns began normal work.

(289) Neddy Noodle nipp'd his neighbour's nutmegs:
Did Neddy Noodle nipp his neighbour's mutmegs?
If Neddy Noodle nipp'd his neighbour's nutmegs,
Where are the neighbour's nutmegs Neddy Noodle nipp'd?

(290) The cat kindly kissel the kittens.

(291) This key can conquer creaking locks.

(292) Kimbo Kemble kick'd his kinsman's kettle;
Did Kimbo Kemble kick his kinsman's kettle?
If Kimbo Kemble kinck'd his kinsman's kettle,
Where's the kinsman's kettle Kimbo Kemble kick'd?

(293) Disguised guards gathered the guns.

(294) Gertrude giggled and gasped.

(295) Gaffer Gilpin gat a goose and gander:
Did Gaffer Gilpin got a goose and gander?
If Gaffer Gilpin got a goose and gander,
Where's the goose and gander Gaffer Gelpin got?

(296) Singig mindled with the clanging noise.

(297) Moaning and groaming he flung himself over.

(298) Singing bees are thronging among them.

(299) Relinquish your standing in the crisping frying-pan, by jumping over the windling railing; and while you are laughing, crying, sleeping, waking, resting, or working, you may be sailing on the swelling, boliing ocean, where the limping herrings are leaping, skipping, and dancing around.

十五

前節 273—299 及び以下 300—319は「英語界」五月號六月號及び七月號の上條氏の記事を拜借したものである。全體で四十七種の中、273—275 はbの練習、276—217 はpの、278—275 はmの、281—283 はtの、284—286 はdの、287—289 はnの、290—292 はkの、263—295 はgの、296—299 はngの、300—302 はfの、303—305 はvの、306—307 はsの、308—313 はzの、314—316 はlの、317

—319は1の練習である。

(300) Finny fishes furnish me food.

(301) Fun and frivolity follow foolish fancies

(302) Francis Fribble figured on a Frenchman's filly:
Did Francis Fribble figure on a Frenchman's filly?
If Frances Fribble figured on a Frenchman's filly.
Where's the Frenchman's filly Francis Fribble figured on?

(303) His voice revived the vile villain.

(304) The violent vandals vanished.

(305) Villiam Veedon vip'd his Vig and Vaistcoat.
Did Villiam Veedon vipe his Vig and Vaistcoat?
If Villiam Veedon vip'd his Vig and Vaistcoat.
Where are the Vig and Vaistcoat Villiam Veedon vip'd?

(306) The last fruits are the sweetest.

(307) Sammy Smellie smelt a smell of small-coal:
Did Sammy Smellie smell a smell of small-coal?
If Sammy Smellie smelt a smell of small-coal.
Where's the smell of small-coal Sammy Smellie smelt?

(308) Buey bees always buzz and buzz.

(309) Cozy cows graze at their ease.

(310) These are scissors; those, razors.

(311) The prize pleased the visitors.

(312) Pleas exeuse Susie's sneeze.

(313) He gives, as is his custom at this season, a series of sermons.

(314) All listen to the liquid melody.

(315) Laughter lasts longer then melancholy.

(316) Lanky Lawrence lost his lass and labster.
Did Lanky Lawrence lose has lass labster?
It Lanky Lawrence lost his lass and labster,
Where are the lass and labster Lanky Lawrence lost?

(317) Her remarks were ready and reproachful.

(318) The roar receded as it rapidly retired.

(319) Rary Rumpus ride a raw-bon'd race-horse:
Did Rary Rumpus ride a row-bon'd race-horse?
If Rary Rumpus rode a raw-bon'd race-horse,
Where's the raw-bon'd race-horse Rary Rumpus rode?

十六

私は次に江島氏と逸名氏の寄附を紹介する。320—325は江島氏、326—329は逸名氏のである。共にかなり面白いものに富

んで居る。

(320) The pre-contract pre-contracts the prefix which is prefixed to the present he presents.

(321) He spoke communicatively of his indisoluble slovenliness, which he hieroglyphically and peremptorily insisted was antipestilential and incontrovertibly congratulatory.

(322) His salary was celery, and he lived in the capital of the country, just under the Capitol, opposite the office which is opposite to his purpose.

(323) The ragged rascal drags the rhinoceros round and round the rugged rocks; while a rabit rat from a rat-trap ran through the rain on a ricketry rail with a raw, red rhadaman thus.

(324) Peter Prickle Prandle picked a peck of prickly prangly pears from the prickly prangly pear-tree; if, then, Peter Prickle Prandle picked a peck of prickly prangly pears from the prickly prangly pear-tree, where is the peck of prickly prangly pears that Peter Prickle Prandle picked from the prickly prangly pear-tree? Success to the successful picker of prickly prangly pears.

(325) The litigious lawyer legally tells his lonesome, luckless client that the law legalizes the illogical legislation of the land, and laughs at the leather looking leviathan, lying along the lizard's loathsome load of lanky locusts, while the Levite from Lebanon looks for the lost legion of Libyans in Laodicea.

---

(326) A friend in need is a friend indeed.

(327) I bubble into eddying bays,
I babble on the pebbles (Tennyson: Brook.)

(328) He is a poor patlry prerate proud of pretty popularity percetually preaching to petticoat.

(329) Theophilius Thistle, the successful thistle-sifter, in shifting a sieveful of unsifted thistles, thrust three thousand thistles in the thick of his thumb.

Now, is Theophilius Thistle thrust three thousand thistles in the thick of his thumb, see that thou, in sifting a sieveful of unsifted thistles, thrust not three thousand thistles in the thick of thumb.

十七

英語の發音遊戯の最後の例として、一風變つた石關氏の苑集

を紹介しよう。

(330) Cat got rat, rat got cat; cat got rat, rat got cat....

(331) Don't you trouble trouble
'Till trobule troubles you,
D'ont you look for trouble,
Let trouble look for you,
Then don't you trouble trouble
'Till trouble troubles you,
You'll only double trouble
And trouble others, too.

(332) One Mr. Knott and a Mr. Shott,
Into a quarrel got,
The matter what? No matter what,
Their anger then waxed hot.
Mr. Knott called Mr. Shott
Some hard names—no matter what;
And Mr. Shott replied to Knott
In termes—no matter what.
Wrote Mr. Knott to Mr. shott,
And Shott wrote back to Knott,
And Mr. Knott from Mr. Shott
They deadly challenge got;
And Mr. Knott replied to Shott
That he declined it not.
Big Mr. Knott and big Mr. Shott
Their tried revolvers got.
The friends of Knott and the friends of Shott
Repaired into an open lot,
Where Mr. Knott and Mr. Shot.,
Three glorious rounds there fought
Mr. Knott he got the shot.
But Shott he got it not,
For Mr. Knott had missed his shot
And Shott had missed his not.
As Mr. Knott had missed his shot,
And Shott had missed his not,
Why, Knott was shot, and Shott was not,
So Shott the glory got.

332 は随分古くから英國の說話者（Comedian）が劇場や寄席などでしやべつたものだそうで、これを速く巧みに發音するには、かなりむづかしいものとされて居るとの事である。

十八

扨てこれ丈け集まつて見ると、英語の發音遊戲の例が、邦語のに比べて割合に多いのに驚かされる。全體で八十三種を示し

	原圖の記載		今日の解釋
	日本	いぎりす	
1	わたくし	アイ	I
2	あなた	ミネヘル	?
3	よくお出でなされた	ウェルゴトム	welcome.
4	こちらへお上りなさい	コミナツプ	come up to me in
5	よい天氣でござる	ウワインウヘソル	fine weather.
6	ありがたふござゐます	モツチチブライチ	much obliged.
7	あなたは何ござるや	ウワトイトスウル	?
8	何の御用でござる	ウワツトイスユルウヲンド	what is your want?
9	あなた御機嫌よく御いでなさるか	ハウヅウユウヅウ	how do you do?
10	私あんばいわるい	アイガツトシツキ	I got sick.
11	かんにんせよ	テエキペイシンス	take patience.
12	じやうだん	ジョチク	joke.
13	いかる	エンキリイ	angry.
14	ゆるす	ツデリバア	to deliver.
15	がてんする	ツコチプルヘント	to comprehend
16	ねむる	ソスリ	?
17	かあいがる	ロヲブ	love.
18	まこと	インジイド	indeed.
19	かほ	カウンテネンシ	countenance.
20	らた	サ・プスデュツク	?

て居る。この事實はやがて[illegible]の生活上の關係の程度とを語るものであらう。

このやうな語學と生活の問題を更に一層廣くして、日本へ入つて來た外國語の歴史と云ふやうなものを、若し天主教の傳來や蘭學の勃興から下つて幕末の英佛獨露關係や、米佛渡來あたりにかけて調べて行つたら、非常に興味の多い問題が幾つも開展して來るに違ひない。

私はこの機會を以て、英語の發音遊戯の歴史的の珍品として萬延元年（一八六〇年）に江戸で出版された「英吉利言葉幼な繪解き」と題する一枚摺りの繪草紙を紹介したい。これは子供に見せる玩具繪に屬するもので、畫工は歌川芳員らしく、編輯者は不明である。勿論目よりも耳を主として編輯したものであるが、吾々はこれによつて當時（ペルリ渡來後七年）の英語の發音遊戯的の通俗化の程度を知る事が出來る。

この表の中で、2・7・16・20は、私には完全に解釋し兼ねる。2は古い英語の Meneer 20は和蘭語の Zangstuk ではあるまいかと思はれるが、如何であらう。尙專門の語學者の御教示を賜はりたい。

十九

英語の發音遊戯がこのやうに盛んであつたのに比べて、當代

語の其他の國民の發音遊戲の集まらなかつた事も亦殘念である
のであつた。私は辛うじて獨逸語で八、佛蘭西語で四、露西亞語
で一を得たに過ぎない。

　私は先づ獨逸語から報告しよう。(333)—(337)は外國語學校の
田中孝一郎氏を煩はして同校教授から教へて頂いたもの、(338)
は堀内氏の、(339)(340)は逸名氏の教示によるものである。

(333) Siebenhundert siebenundsiebzigmal sieben Schüsseln saure Suppe.
(334) Gern gar gross wäre unser George gar gern.
(335) Blau Papier, grau Papier, neunmal neun Blatt blau gepappt Papier.
(336) Eine zischende Schlange sass zischend zwischen zwei Steinen und zischte.
(337) Lieschen blies Lieschens lieblichstes Liebeslied lispelnd über die lieblichen Lippen.
(338) Der Fischer Fritz fischt frischen Fisch.
(339) Beim Abendglockenlauten
ging die Natur zu Ruh!
(340) Saust sehr stark schlechten Schnaps.

　私が集めた佛蘭西語の發音遊戲の中で、(341)は非常に拍子の
惡くないもの、(342)は發音が美しく且つ非常におもしろいも
のである。

(341) Ton thé t'a-t-il ôté ta toux ?
(342) Un plein banc de pains blancs.
Un banc plein de blancs pains.
(343) Petite pomme d'apis
Quand te dépomme d'apiras-tu ?
Je me dépomme d'pirai
Quand les autres petite pomme d'apis
Se dépomme d'apiront.
(344) Il était une fois
Un petit homme de foie
Qui vendait du foie
Dans la ville de Foie
Il dit "ma foie, c'est bien la première fois.
Que je vends du fois
Dans la ville de Foie."

　次に子音に特徴のある點から私が最も知りたいと思つた露西亞語のは、渡邊氏によつて一つの獲物があつた。括弧は其讀み方を示すものである。

(345) ОДИН ДРОВА, ДВА ДРОВА, ТРИ ДРОВА.
(odin drova, dva drova, tri drova)

其他の近代語は集まらなかつたけれども、逸名氏によつて思

ひおけたい古典語の發音遊戲が二つ擧られた。私はこれ以てまた獲物を以て私の續發音遊戲を終らう。

(346) Petrus Pontanus poeseos professor publicus propter pocula prohibitur (Petrus Pontanus ist wegen allzustarken Becherns ausser Stande, Vorlesung zu halten).

(347) Piper peperit pecuniam,
pecunia peperit pompam,
pomma pererit pauperiem,
pauperies peperit pietam.
(Der Pfeffer brachte Geld, Geld brachte Aufwand. Aufwand brachte Armut, Armut brachte Frömmigkeit).

二十

校正を終へて――

私がこの「續發音遊戲」を脱稿したのは七月二十二日であつた。それから今日までの間に、私は更に左の諸氏――和歌山縣の石橋清次氏、小石川の鶴岡春三郎氏、名古屋市の松田操氏、印度孟買の朝日五十四氏、新潟縣の阪西文治氏、滋賀縣の森田寛一氏――から、それ〴〵興味の多い御報告を受けた。しかも其數がこの校正の餘白に盛り切れないほどに多數であつたから其紹介は更に他日を期せなければならない事に成つた。

この數ケ月間の發音遊戲の小研究を機にして、私に言語や說話藝術の問題を社會的及び心理的に考へて見た。そして說話藝術發達の人類學的・社會史的方面は、「說話藝術と其社會史」と云ふ題で、九月號の「我等」に發表する機會を得た。

更に私は機を得て、發音遊戲の問題と聯關して說話藝術の心理學的美學的方面の觀察を本誌に寄せて、其時に前記の御寄附の例を紹介したいと思ふ。

最後に私は六月號の例の中の主な誤植を正して置きたい。

(四八頁 上段 一一―一三行) 地理的に……後に九に掲げる二代目市川團十郎……
(四二頁 上段 七行) 虎屋惣右衞門……
(同 下段 四行) いかん師匠
(同 同 一六行) 雨合羽か番合羽か
(五三頁 上段 一行) 奈良の生まな鰹
(同 同 九行) がらぴい〳〵風車
(五五頁 上段 末行) 金ほとけ
(五六頁 下段 一七行) 武井ノコツケ
(五七頁 下段 五行) のら如來のら如來
(五八頁 上段 四行) 小まな箸
(同 同 一七行) 親露小子孫平
(五九頁 下段 一五行) 御泥鰌ちよよによろり
(六〇頁 上段 四行) 上の溝に
(同 下段 七行) 三つ合せて

平和の武器の出產◇國文典の一大修正

空前の大著

稻留正吉氏著

漢字に代はる
新日本の文字其綴字法 上卷
附 日本の國字と其綴字法

新文字の活字使用
菊判總クロース金文字入

定價金壹圓八拾錢

(送料)
市內 金六錢
內地 金拾貳錢
臺樺 金參拾錢
朝支 金參拾錢
外國 金參拾錢

皇室が生命である如くに、また國民としての眞の生命は、國語の尊重である、さうして、國力發展の根本たる教育の唯一の救ひ主であるべき、この改良文字の出產は漢字に生れた新日本にとつては天の最後の惠で永遠に竭さる幸福の最も大なる授りである。

よしや、この改良文字は到底現代には採用せられなくとも、その綴字法に據つて國語の音韻組織を根抵より覆し、これまで漢字に妨げられ、假名の間に隱れてゐた先人未發の事實が新に發見せられ、國語の特質たる添着語の眞相が綴字の上で會得せられ、新事實は新事實を產み、眞相や新事實は、更にまた文法の領域を開拓して、現代の生きた文法が明にせられ、從つて從來の語法や分類や解剖に尠からぬ變化を促して、在來の模倣的日本文典が西洋の文典より獨立して始めて眞正の日本文典が出來るのである、さうして現在の國語文典の教科書や國語の爲めのローマ字綴は、將に必然の處置を執るべく一大修正の着手に躊躇すべき餘地が無いのである。

さなきだに、文字の爲めに子孫の心身を犠牲に供し漢字に苦しむ新日本の不幸を見殺し、泣き寢入りの儘で第二維新の革命たる國字の選擇が未だに定まらなかつたのは、畢竟漢字に代はるべき優等な文字及び國語の本性と一致すべき適當な綴字法が見附からなかつたからである。

靈妙なる添着語の實體は音節文字と音素文字との調節に據つて初めて現る、さうしてそれ等の連脈が進行的視線に伴ひ綴字の骨組だけで其の語の印象が得られるのである。

內容見本 送料金貳錢

發行所 東京府荏原郡駒澤村新町 **文字の革命社**

發賣所 東京市日本橋區通一丁目 振替貯金口座二三八番 **大倉書店**

時論

新總督及び新政務總監を迎ふ

法學博士 吉野作造

久しく我々の待ち望んで居つた朝鮮騷擾の善後策は愈よ此程に至りちらほら其輪郭の大體を外間に示したのであつたが、先月央ば新總督及び新政務總監の任命によつて餘程其姿が明かになつた。改革官制の發表も、本誌の讀者に見ゆる頃には無論發表になつて居ることと信ずる。

細目の條項は改革官制の發表並びに之に關するいろ〳〵の手續きを詳細見た上でなければ判斷の出來ぬことであるけれども、今日まで世上に傳唱せらるる所に據つて觀るに、現內閣は朝鮮統治の方針に殆ど根本的とも云ふべき大改革を加ふるの決心を固めたらしい。今日まで明かになつて居る點は、朝鮮總督を文武併用とし且つ從來の天皇に直隷するの地位を改めて內閣總理大臣の指揮監督を受くるの地位に置いたことが一つ。もう一つは今度の騷擾に就いても大部分の責任を負ふべき、而して從來朝鮮統治上の百弊の源として指彈せられて居つた憲兵制度の撤廢である。無智頑冥の下級憲兵が或は獨斷に、或は上官の訓令を曲解して、如何に無辜の良民を虐げたかは今更ら縷述するの必要は無い。けれども憲兵制度の主たる弊害は此處に在るのではない。憲兵が朝鮮全土に亙る警察權を掌握し、而も自ら一種の軍閥的獨立系統を作つて、文官系統とは全然懸け離れ、謂はば朝鮮に於て一個獨立の治外法權の別天地を爲して居つたことである。從て如何に本當に政治を理解する文官系統の者が、如何に適切なる施設を考案しても、軍閥系統の氣に入らなければ全然之が實施を要請するの途は無い。之れ朝鮮の官吏中相當見識ある者を網羅せざるに非ずして、而かも事實驚くべき非文明の政治が行はれて居つた所以である。而して今や所謂憲兵制度の撤廢に因つて此惡弊を取除かんとして居る。吾々は少くとも此點に於て朝鮮の爲めに、否、日本の爲めに現內閣の明斷に多謝を表するを至當と認むる。

總督を天皇直隷の地位より貶して宰相の指揮監督の下に置いたことは、亦之と關聯して朝鮮統治上の一大改善である。天皇に直隷するを改めて宰相を通して上奏するの關係にしたのは總督の面目に關し、又朝鮮の不名譽であると云つて、過般此改正の撤回を求めた者が朝鮮貴族中に有つたと云ふことであるが、之れは寔に噴飯の至りである。武官總督が天皇に直隷して內閣の指揮監督の外に在つたことが從來憲兵政治を可能ならしめたものであつた。植民政策を文明的に指導する點から觀ても、又國內の政治を內閣の手に統一するの必要から觀ても、總督は――獨り朝鮮に限らず、臺灣でも何處でも――必ずや內閣總理大臣の指揮の下に立つべきものである。日本では殊に軍事上に於て內閣を離れた天皇直隷の諸機關甚だ多く、之に因つていろいろ軍務を國民の容喙の外に置き、全然專門家の手に獨占するの便宜はあらんも、國務統一を害するの弊之より甚だしきはなく、斯かる惡制は他の諸國に於て餘り其例を見ざるところである。況んや植民政治の如き純然たる民政事務に於ておや。從來の制度が總督を以て必ず武官ならざるべからずとしたのは、驚くべき不當の規定であつた。尤も武官では惡いといふ理窟もない。植民地統治者として必要の才能があれば、文武孰れでも構はないが、要は唯一國全體の施政方針と步調を合すべきことである。此點に於て今度の改革は少くとも制度上正に然かあらねばならぬ當然の軌道に復歸したものと云はなければならない。

然し制度だけではまだ安心が出來ない。更に之が適當に運用せらるるか否かが問題であるが、之は統治の局に當る者の人選と、統治方針決定の結局の根柢たるべき民心の趨嚮に繫る問題である。而して一般民心の趨嚮に就ては近時段々開發せられて居るやうであるが、然し此點は今吾々の直接問題とする所でないから略さう。局に當る者の人選に就ては總督としては齋藤海軍大將、政務總監として水野前內相の任命に於て、予輩は理想的とは云はないが、略ぼ統治の改革に關する前途の光明を期待せしむるに足るべき人選たる事は疑はない。偶々武官なるの故を以て齋藤大將を忌避せんとするは、同大將の人格、經歷並に所謂軍閥との關係を思はざるの俗論である。若し夫れ水野前內相が行政官として並に學者として相當令名を博して居つた經歷に顧る時、吾々は姑く彼等をして自由に其手腕を揮はしめて見たいといふ感を抱かざるを得ない。

何れにしても予輩は朝鮮統治の開發に一新紀元を劃するものとして、新總督と新政務總監とを歡迎する。細かい施設はゆるゆる之を將來に觀ることにして、唯差當り彼等に希望したいの

は何を措いても先づ内鮮兩民間の凡ゆる差別待遇を撤廢せられんことである。言論の自由を尊重し、少くとも内地以上に無用の拘束を爲す事を避け、殊に朝鮮人には出來るだけ發言の機會を與へられんことである。更に進んで形式上だけでなく、本當に朝鮮人の開明を圖り、彼等に教育を受くるの十分の機會を提供せられんことである。一言にして云へば朝鮮民族をして朝鮮民族として十分發達するを得しめ、此基礎の上に彼等が我々の眞箇賴もしき友人たるやうに導かれんことである。

擴大せられたる研究會に望む

之より段々政治季節に入らんとするに際し、甲寅倶樂部の合併に由つて研究會が事實上貴族院の大勢を獨りで支配し得るの地位を占めたといふ報道は、少くとも一時沈滯せる政界を大に驚かしたことは怪しむを須ひない。

前にどれだけ永い秘密の運動が行はれて居つたにしろ、事が突如として起つただけ世間は之に對していろ／＼の揣摩臆測を逞しうした。或は公正會の結束が自ら其因を爲したといふ者があり、又は現内閣の上に於ける某系の足下に屬する者あり、又甚だしきには早く青年貴族一派の政友會内閣對抗策と見て、黒幕の裏に某々子爵の劃策を想像する者もある。其孰れが眞相なりやは固より予輩の與り知る所ではない。又與り知らんとする所でもない。何となれば今日の政界に於ては政治上の或る出來事は、それが何人によつて計劃され、又如何なる魂膽によつて目論まれても、一旦糸を切り離した以上は、計劃者の魂膽如何に頓着なく、理の正に落着くべき所に落着くの外は無いからである。自分の好にしようと思つて多額の金を苦學生の養成に費しても、其者が偉らければ偉いだけ不羈獨立を望んで、自分の思ふ通りにはならない。況んや政治上の出來事は多數の綜合意思の結果として動くものであるから、當初の計劃者たる個人との心理的關係は存外薄弱なものである。故に研究會の膨脹がどんな魂膽で、何人によつて操られたとしても、其今後の發展を全然色眼鏡を掛けて觀るの必要は無からう。かく觀ずる時、吾々は研究會最近の態度並に特別の意味を以て新に入つて行つた連中の爲人より推して、今後の研究會が假令政治上の根本思想が吾々と大に異るもののありとしても、公平中正の態度を以て國家に貢献せんと努めべきは疑を容れない。少くとも、吾々は斯の如き期待を熱心に彼等の上に繫くるものである。

唯、此際事實上の絶對過半數團體としての研究會に特に希望すべき一事がある。それは貴族院の權限の道德的運用といふことである。

議會の主要任務たる法律及豫算の議定に關して、貴族院が全然衆議院と同一の權限を有することは今更ら申すまでもない。衆議院と其觀る所を異にせる場合、何處迄も其所信を執つて下院の反省を促すは上院の權限でもあり、又義務でもある。併し乍ら之を楯として下院の議定に斷じて讓歩すべからずといふのは畢竟法律上の形式的解釋である。道德上の一面から云へば、衆議院の背後には數千萬の國民を控へ、貴族院が僅に數百の同族を背景とすると同日の談ではない。此處に法律上全然同一なるべき貴族院の權限に對し、實際の運用上、一つの道德的制限が與へらるべき理由がある。即ち爭ふべきは何處までも爭つていいが、爲めに議會其物の意思決定を不可能にし、國務を澁滯せしむるの惧れある場合には、最後の道理上の判斷は姑く國民の輿論に一任して、貴族院は一先づ衆議院の決定に肯從すべき事である。斯く云ふと如何にも貴族院を無視するやうに聞えるけれども、然し元來貴族院なるものは國民中の特別階級を特に重く用ひて、輿論の代表者たる下院の意思決定の爲に一つ誤ることとあるを警戒牽制せしめんが爲めに設けられたものであるから、貴族院の發言は常に國民に對して最も重きを爲すやうになつて居なければならない。然るを貴族院が其法律上の對等の權限を楯に乘つて、些末の事にまで衆議院と輕々しく衝突するやうでは、自然鼎の輕重を問はるるやうになる。大抵の事は異議があつても自分も過なしと限らないから下院に讓歩して置く、唯一旦非常に重大な問題に就いて意見の相違せる場合、それだけは讓歩が出來ないと云つて飽くまで下院と爭ふといふ態度を取れば、恰度めつたに口を開かない德望ある長者が稀に猛然として起つたといふやうた場合と同じく、初めて國民も之に耳傾けて下院の態度を冷靜且つ儼正に批判することとならう。斯くて初めて貴族院を設けた國家の精神が通るのである。斯くて初めて貴族院は國家の期待するが如く、眞に時に誤ることある國論を警戒牽制することが出來るのである。法律上之を爲すは妨げなしとて一から十まで下院に楯を衝くのは、口矢釜しい主人が決して下女下男の心服を得さると同樣である。

尤も我國の衆議院は健全なる輿論の代表者と見るには未だ幾多の遺憾がある。選擧法の改正、政黨氣質の改善に伴つて下院と健全なる輿論との關係がもつと密接して來るまでは、貴族院は必ずしも一々下院の決定に肯從するに堪へないといふやうな事もあらう。けれども我國の貴族院が從來餘りに輕々しく下院

と云ふ[illegible]はなかつたのは、[illegible]の是[illegible]
用を原則として勧奨するの不當なるを思はしむる。
しも之は[illegible]全[illegible]い事であるけれども、研究會[illegible]今そ
實力を以て優に其大勢を支配し得るの地位を占めたりといふが
故に、特に之を彼に向つて此希望を開陳して置く。

陪審制度採用の議

法制審議會の構成に依つて、現内閣が所謂家族制度の維持尊重の意義で現行民事法規に根本的の改正を加へ、併せて政友會多年の主張たる陪審制度を採用せんとするに意ある事は最早隱れもない事實となつた。家族制度の方面の事は他日之を論ずるの機會あるだらうと思ふが、茲には近頃專門家の間に、又新聞雜誌等に矢釜しく論ぜられて居る陪審制度の事に就いて予輩の考の一端を述べて置く。

陪審制度の利害得失に就いては西洋でも殆んど論じ盡されて居るし、又我國に於ても十年餘り前に一度朝野法曹の間に相當精密なる研究を遂げられたのである。而して昨今新聞雜誌等に表れる議論も畢竟以上の範圍を出づるものでないと思はるゝが、それでも隨分事新らしく色々の事が述べ立てられて居る。

[illegible]しこ[illegible]たる議論を要約して[illegible]に我[illegible]は（一）陪審制度の精神其物には何人も反對せざる事、（二）[illegible]陪審制度の[illegible]實行の[illegible]に於ても其[illegible]に於へる事を示して居る事、（三）少くとも今日迄行はれた型に於ての陪審制度は之を採用して格別の利益なきのみならず、却つて弊害あること、（四）其癖何處でもそれならばと云ふて直ぐ様陪審制度を廢めた所もない事である。然らば我々は之に依つて今日迄各國に行はれた所謂陪審制度には缺陷に富み、弊害を伴ふけれども、陪審制度採用の要求を促した所以の根本には何等か見逃すべからざる或物がある事である。之を一部の人の云ふが如く昨今デモクラシーの説の盛なるにつれて、裁判にも民論の參與を許さうとする一時の流行に過ぎないと見るのは恐らく正當の見解ではなからう。若しもデモクラシーの説の流行と全然關係が無いとは云はない。併し法の適用は元、專門家の仕事に屬し、必しも民論の參與を許さねはならぬものでなく、又民論の參與を許さないと云ふ事は必しも我々の所謂デモクラシーの趣意と相容れざるものではない。それでも尚陪審制度要求の聲に世人が何等か合理的の根據を許さんと欲するのは他に深い原因があると見なければならない。

然らば何が陪審制度の要求を叫ばしむる根本の淵源であ[illegible]る

か。曰く、法の適用を嚴格にやると云ふ裁判官の當然の職務より來る所の社會的矛盾卽ち之れである。詳しく云へば此社會的矛盾は二つの方面から來る。一つは裁判官の任務は固定した法律に依つて社會の事物を裁くと云ふ事から來る。蓋し法は死物にして社會は活物である。或時代を背景として出來た法は必しも次の時代に適應しない。之れ時に法の改正を必要とする所以であつて、其改正を見る迄は悪法と雖も矢張社會を矯正する權威を有するから、こゝに法と實際と矛盾すると云ふ止むを得ざる結果を生ずる。もう一つは裁判官が其職務上自ら全力を形式法律の論理的解釋に注ぎ、日に〱進んで已まざる社會の活勢に疎遠なるを免れざる事から來る。卽ち此結果彼は法の適用に誤りなきを得ても之を適用すべき事實の認定に於て必しも誤なきを保し難い。殊に我國現行法の如く、刑罰の量定に關し、裁判官に廣き裁量の範圍を認め、卽ち事實の認定に關する或判官の自由判斷を廣く信頼するの主義を採つて居る國に於ては右の懸念が殊に深い。是れ世上往々裁判官の非常識を訴ふるものある所以である。而して以上の矛盾は之れ裁判官の心掛けの悪い爲めでも無く、修養の足らざる爲めでも無く、其當然の職務に伴ふ殆んど必然の結果とも云ふべきものであるから、其弊害は裁判官にもつと常識を養へと云ふ位の事で除かるべき事ではない。矢張り客觀的の制度の力によつて之に應ずるの策を講ずる事が必要であらう。社會の出來事に對して法律の附する價値、殊に裁判官を通してあらはるゝ所の法律的價値決定が、其社會一般の常識と餘りに掛け離れると云ふ事は決して輕々に附すべき問題では無い。法律萬能論者は所謂法律的價値決定に絶對の權威を認め、社會的常識を壓服して其承認を強制することが社會の爲めになると云ふ一種の專制的態度を執りたがる。我國在來の法律家は兎角此流儀であつた。然しながら事實に於いて常識の判斷は如何なる場合に於ても法律家の形式的判斷よりも有力である。已に法律其物が時勢の進展に伴つて改正せらるべき者たる以上、之に道徳的權威を認めんとするのは正當でない。而かも法は如何に社會の實情と合はないとしても、改正を見るまでは之を強制することが又一面に於て動かし難き社會的要求である。そこで此と彼との間に調和を計るべき何等かの仕組みが必要となるのである。所謂陪審制度要求の實質に此根據に出づるものに外ならない。

右述べたやうな必要は我國に於ても已に久しき間痛感せられて居る。試に一例を擧げんか、或る德望聲名ある某名士は其常ぜる一篇の文章が禍を成して忌むべき大罪に問はれた。世人はどうしても彼を刑罰の對象に値する人とは思はない。而かも彼

が故に直に立法の[illegible]
大いに昏迷せざるを得ない。之れだけでも已に社會の精神的一破綻たるを失はないが、事によると、吾人は未も親近せる問題の中には遂に國法の權威を疑ふに至るもの無きを保し難い。此外にも數へ立てれば色々の事はあらう。何とかして之を救ふ途が無いかと云ふのが現代の要求である。

此要求を抱いて其回答を世上に求むる時、取敢へず出て來たものは所謂陪審制度であつた。陪審制度其物が適切に此要求に應ずるや否やは姑く之を專門家の研究に任せるとして、よしんば所謂陪審制度には幾多の弊害がありとしても此根本の要求にはどうしても耳を傾けなければいけない。所謂陪審制度其物が採用に堪へないからといふて、根本の要求其物をも無視し去らんとするは大いなる誤りである。

暴利取締の要求

所謂勞働不安が戰爭終熄後に於ける世界的流行たる事は之まで屢々說いた。而して最初は勞働條件の改善、殊に賃銀値上げの要求を以てする同盟罷業の頻發にあらはれたが、近頃は更に進んで資本家に對する暴利取締の要求と云ふ形に變らんとしつゝ[illegible]
注意を要する點と思ふ。

佛蘭西に於て暴利を貪るものを死刑に處すべしとの提案があつた事は已に人の知る所である。英國に於いては六月半ば二千圓の罰金と六ヶ月の禁錮とを以て暴利取締の効を收めんとしたが、勞働派は此政府提案を以て不十分としたとの事である。米國では大統領ウイルソンが已に勞働者の要求に對して物價騰貴防止策を講ずべきを約束して居る。之と一部の勞働者の要求にかゝる産業國營の主張とは、所謂暴利取締と相表裏するものたるは云ふ迄もない。固より賃銀値上げの要求もある。又暴利取締の緩漫を理由とするストライキもある。細かく見ればいろいろの種類の要求が雜然として唱へられて居るのであるけれども、併し大勢を達觀して見れば、勞働者は賃銀値上げ要求の時代から更に一歩を進めて、今や暴利取締要求の時代に入りつゝあることは明かである。

貪慾なる後見人が被保護者の幼弱なるに乘じて其財産を横領したとする。該未丁年者は稍々長ずるに及んで後見人に小言をねだる。もと〳〵之をねだるに相當の權利があると考へて居るから隨分思切つたねだり方をする。聽かれなければ亂暴もする。併しよく考へて見ればいくら脅迫して思ふ存分のねだり方をした

とはいへ、後見人の横領を大目に見て置いては結局自分の胸が納まらない、そこで寧ろ單刀直入後見人の横暴を訴へて財産の回復を計るに若かずと考へるのは當然である。資本家を此横暴なる後見人に譬ふるのは倫を失して居るけれども、勞働者が賃銀値上げのいはゞ姑息な運動より、比較的根本的な暴利取締の運動に進んで來るのは前記の譬喩で略ぼ其意味を諒解することが出來よう。

暴利取締の要求は資本家に對する單純な道德的要求としてなら今に始まつた事ではない。昔からあつた。併しながら今日西洋に於て叫ばれて居る此主張の裏には勞働資本の關係に關する正義の判斷が動いて居る。暴利を貪るなと云ふ際は今や資本家の慈善心に訴へて居るのではない。之は正義の要求である、義務の命令であることを忘れてはならない。偶々權利として之を主張するの權限なき勞働者が主張するからと云うて忽諸に附してはいけない。勞働者を通じて社會的正義が之を主張すると觀ずる時、我々は此聲に崇高なる響を感得せざるを得ない。果して然らば暴利取締の要求は、總て資本主義に對する一大鐵槌たらざるを得ない。少くとも現代の資本主義は此新らしき傾向に對して大いに反省するの必要があらう。日本と西洋と國情が違ふなど〻嘯いて居る間に眉毛に火の附くやうな事がないとも限らない。

果して理想派の凋落か

孫逸仙の一派が所謂南方派の實勢力と相容れずして廣東を去つたのは已に久しい昔の事だ。其後上海に隱れて悠々讀書と著述とに沒頭して居つたが、最近「孫文學說」第一卷を公けにして讀書界を賑はし、八月に至つて多年の政友胡漢民、廖仲愷、朱執信、戴天仇等の諸君と協同して雜誌「建設」を發刊して居る。久しく空名を擁して居つた軍政府政務總裁の辭任を最近宣明するに及んで彼は愈々實際政界と絕緣せんとして居る。而して彼の此態度は即ち彼を戴く一派の政客――之を我國の新聞などは理想派と呼んで居る――の態度を代表するものであつて、我等は之によつて彼等がいよ〳〵國民の教育者として思想界に活きんとするの決心を堅めた事を看取せざるを得ない。

獨り孫文一派の諸君ばかりではない。支那の改革に對して多少の理想と、多少の熱情とを有するものは多く政界の現狀に失望して、實際界から足を遠ざけた。それ丈また南方の實際政治家は、所謂理想家の牽制を免るゝを得て、南北妥協の議を進む

るのに必須條件を得たらしい。以外の形勢が安福派[illegible]要求して已まざる今日、安福派は益々窮局に陥るを[illegible]色を示して居る。よく／＼先きの見極めの附かない以上、決して表面に立つ筈のない安福派の首領王揖唐が南から莫大なる權限を與へられて北方總代表の任に就いたといふ事、會議地が南京に決まったといふ事は已に理想派の牽制を免れた南方の實際政治家が何等かの好餌に甘んじて多大の讓歩をなした事を想像せしむる。果せる哉、新聞紙は已に内定せる南北妥協の條件なるものを報道して居る。兎まれ角まれ、斯の如きは卑屈實際政治家の成功を語るものであって、之が圏外に刎ね出された所謂理想派は目前の事象に[illegible]たるものの眼からすれば、如何にも慘めなものに見ゆるに相違ない。之れ我國の新聞雜誌が昨今頻りに理想派の凋落を嘲笑する所以である。

併しながら實際政界から予を引いて思想界に立脚地を求めた理想派は、末永き支那の文化生活に於て、果して凋落の終りを甘受せざるべからざるものであらうか。孫文一派の諸君の支那思想界に於ける勢力の如何なる者であるかは我邦未だ之を審かにせざるも、予の知る限りに於て疑なき一事は、彼等の思想的覺醒運動に共鳴するもの支那の教育ある青年識者の間に極めて多數なる事である。予は最近いろ／＼の關係から支那の各方面の[illegible]青年と交渉して居るが、彼等の[illegible]して居る所が數ケ月前のそれと著しく異る點に一驚を喫して居る。數ケ月前まで彼等の專ら念とする所は南北の統一であった。如何にせば主として南方派の支持する思想を勝たしめ得るかの問題であった。然るに今日は此問題に關して彼等は更に興味を感ぜざるやうに見ゆる。彼等の所謂南北の交渉を見るは恰度勞働問題などに熱中する我國の青年が冷然として政友會と憲政會との時勢後れの駈引に對するが如くである。政友會が天下を取らうが、憲政會が天下を取らうが、國民の煩累は同一だと見るものがあるやうに、最近の支那の青年はそれ以上に緊切迫の大問題を眼前に彷彿せしめて居る。俗人が理想派の凋落を說いて居るのに、彼等は恐らく實際政治家の明日をも知らぬ砂上の樓閣に骨折つて居る陋態を嗤つて居るだらう。彼等の見識がすべて正しいかどうかは問題であるとしても、彼等の態度には眞摯なものがあり、また永久なものがある。支那を本當に救ふものは南北妥協に成功すべき實際政治家にあらずして、寧ろ此等の理想派の諸君であらう。而して孫文一派の諸君が此種新運動の一方の旗頭であることを見る時、我國の論客中其凋落を說くものあるに接して餘りに其近視的なるに驚かざるを得ない。

支那は確かに覺めつゝある。前途を晉る時は、吾も輪に追ひ越さるゝことであらう。讀者願はくは隣邦近時の内面的發展の大勢に注意せられんことを。

小題小言十則

◎イグォール・フーティング

勞働者を奴隷的境遇に置いてする一切の所謂勞働施設には今日の勞働運動家は悉く反對して居る。勞働と資本とは今日の産業組織に於て對等の地位を占めざるべからずといふと、資本家は直ちに喧嘩腰で來るものと勞働者を誣ゆるが、今日の社會は其平衡を保つ爲めに、場合によつては親を訴ふる權利をさへ子供に認めて居る。其處まで對等の地位を認めて置いたればこそ和衷協同の實が擧る。幸にして此意味は少數の資本家階級を除いては今日大體徹底的に諒解されつゝある。併しながら本當の調和協調は獨立對等の關係を前提とするの義は獨り勞働と資本との關係に限つた事ではない。昨今問題となつて居る朝鮮統治の改革に於ても同じ事である。勞働問題に氣勢を擧げた我々國民は、獨り朝鮮問題に關してケチな資本家的態度を執つてはならない。

◎朝鮮統治に於ける「向上」と「正義」

勞働問題に對して一部の無識なる資本家は今日勞働者の地位は以前より遙かに向上したと云ふ事實を以て抗辯せんとする。併し今日勞働問題の要求する所は、勞働者の地位の姑息の向上ではない。産業界に於ける正義の實現である。斯う云ふ動機で勞働問題が起くるものに向つて、生活の幸福は以前に比して大いに増したではないかと云ふのでは何の役にも立たない。此點に氣附いた我々國民は朝鮮問題についても亦同じやうな態度を取らなければならない。日本の統治以來朝鮮人の物質的幸福の増進した事は疑ふべからざるものがある。併しながら朝鮮統治の主眼とすべき目標は漫然たる「向上」でなくして、「正義」の實現である。之れ朝鮮人の專ら要求する所であつて、又統治者たるものゝ責任とする所である。

◎朝鮮人の自治能力

今度の騷動に關聯して朝鮮自治の問題も時々議論の標題になつたやうであるが、之に對する多數者の共通の結論は、何時も朝鮮人には尚未だ自治の能力が無いといふ事であつた。成程此事は事實であるかも知れない。けれども朝鮮人に自治能力が無いから日本人の統治に任かすことは必要だと云ふ議論を肯定するには、事實の上に日本人の統治能力を示さなければならない。併しながら先達の騷擾事件の結果に見て我々は此試驗に落第した。寛大なる試驗

官は屢續督、各政務監督の下に再試驗を許して居るが、我々は果して之に合格して眞個文明國民たるの免狀を與へ得るや否や。

◉山東在留民諸君に告ぐ　山東在留民大會の代表者と稱する者が昨今東京に來て、山東省に關する日本政府の聲明に反對すべく頻りに運動して居る。廿四日の諸新聞には彼地に於ける大會の決議文なるものが掲載せられた。廿五日には東京に於て代表者が演說會を開いて居る。幸か不幸か此等の人の運動は本國に於て、少くとも民間に於て殆んど何等の反響が無い。蓋し在留民諸君の希望と主張とは、冷靜に觀察すると、餘りに其居る所の地位に偏した利己的の議論である。自分達の都合の外世界の大勢も國際間の情誼も無視した謬論である。我輩は國民の一人として斯の如き議論が臆面もなく唱へらるゝことを遺憾とする。山東在留の同胞中にはも少し物を正しく視る人がある筈だ。我輩は切に此等の人の囚へられざる見識に信頼して、彼の謬論が必ずしも在留民全體の輿論にあらざることを中外に明白ならしめられんことを希望する。

◉國民的日支親善に對する呪咀　我儕は屢々本欄に於て日支兩國の青年間に本當の國民的親善の可能なることを說き、更に進んで具體的の計畫を進むべき旨を述べた事がある。其結果は最近大いに懸念したのであらうか、早くも已に一部官僚軍閥の走狗の間から呪咀の聲を聞くのは豫期した事ではあつたが、些か不快の感を催さゞるを得ない。彼等は云ふ、「彼等の計畫は日支國交に至大の害あり」と。成程至大の害あるに相違ない。併し害を受くるは官僚軍閥的日支國交であつて、國民的日支國交では無い。我々は前者を打破することによつて後者を建設せんとするものなるが故に、此呪咀の聲を聞くことに於て我等の愛國的運動が着々功を收めつゝあることを喜ぶものである。

◉苦々しき政爭　八月末西園寺侯の歸朝をキツカケに憲政、政友兩黨の間に交々演說會が開かれた。而して其演說會が常に多數の彌次によつて妨害された事は例によつて例の如くである。最後の政友會の演說會に於ては多數の怪我人をさへ出した。而して此等の彌次は表面は何と辯明するにしろ、政黨の幹部が雇ひ入れたものたるに至つては實に言語道斷である。以て如何に今日の政黨が眞實言論を以て爭ふの誠意なく、如何に不眞面目であるかゞ分る。今日の政黨が若し口に日に進歩して已まざる國民の智見と歩調を一にして永く其信頼を博し、國家に對する當然の勤めを果さんとならば此等の弊風は一日も早く止めて貰ひたい。否らずんば國民は終に政黨を厭棄して獨り其

進むべき路を進むであらう。

◎所謂政黨の改造　今日の政黨が不眞面目だといふ事は、又一面に於ては國民の罪でもある。今日の政治組織に於ては政黨は國民を啓發すると共にまた國民から啓發さるゝものである。從つて、政黨の改造は又國民の改造と相待たなければならない。政黨が駄目だといふと、現在の政黨に全然失望して別の新らしい政黨を作るか、甚しきは立憲政治其物を呪はんとするものもあるが、之は持誤りである。國民が變れば政黨は其儘でも自然に進歩發達を見る。現に去年まで選擧權の制限を七圓だ五圓だといつて居つた連中が、今年は二圓だ三圓だと云て居つたではないか。同じ人間でも周圍の輿論が變れば自ら其説も變るものだ。今日のやうな低劣な政黨自ら甘んずるといふのではないけれども、國民の開發を第二にしては如何に新しい政黨を作つても大した變りはあるまい。政黨の改造は政黨に新分子を入れると云ふ事も必要だが、それよりも必要なのは國民を啓發して健全なる輿論を作ることである。普通選擧の實施の如きは差詰め此事に關する最も緊急の事項である。

◎改造同盟の成立を祝す　今や我國にはあらゆる方面に於て改造の必要が認められて居るに際し、主として政治經濟の方面に亙り、徹底的の社會改造を旗幟として吾人が尊敬する知友の間より改造同盟の生れた事は我々の双手を擧げて歡迎する所である。十九日の新聞にあらはれた宣言によれば、本同盟の目的とする所は即ち我々の多年唱道し來つた所と其根本に於て異らない。只此種の運動に最も尊ぶ所は主義主張の共同といふ事よりも人生觀の一致、もつと平たくいへば氣分の合致と云ふ事である。此點に於て本同盟の發起者が同志の糾合に誤る所なくんば幸である。

◎講和特使に關する誤解を辯ず　西園寺侯の歸朝に際して侯を成功者として歡迎すべきや否やについては當時随分議論もあり、又之を政爭に利用して随分亂暴な説を流布したものもあつた。而して予の説として或る新聞にあらはれた記事について、予は數名の友人から注意や詰問を受けたのであるが、予は玆に該記事は全然予の考を正當に傳へたものでは無い事を斷言する。偶々中央公論社に於て此同じ問題を論ぜんとして相談を受けたから、快く之に應じて述つた意見の大要が、本誌の卷頭にあらはるゝ筈である。注意を與へられた友人諸君に其好意を謝し、併せて卷頭言によつて予の眞意を諒解せられんことを希望する。

◎滿蒙除外論を排す　對支借款團加入の條件として我國より滿蒙除外の特別提案を爲すに決した事は我が帝國の政

策として當然の樣に言ひ做されて居る。除外の理由としては滿の說く所に據うである。滿蒙は我が新領土朝鮮と接壤して、經濟上國防上至大の密接關係がある。之に外國の勢力の擴がるが如きは許し難い。之れが一つの理由。も一つには、最近親日黨の旗頭徐樹錚が、西北籌邊使として夫の國防軍を率ゐて此方面に蟠據することゝなつたから、滿蒙と我國との關係は一層親密なるを得る譯である。之を態々我から捨てゝ新借款團の一般投資範圍たらしめんとするは、現在並に將來の獨占利權を一擲し去るに均しく、之れ程馬鹿氣た事はない。

併しながら、若し滿蒙除外論の本當の趣旨が斯んな處に在るのなら、是れ疑もなく一には支那の輿論の大勢に逆行し、又一には我國一部の侵略主義者を悅ばすに過ぎざるものと云はざるを得ない。

滿蒙除外論の表面上の口實は、領土接壤を理由として滿蒙方面に特殊活動の許容を世界に要求し得べしと云ふに在る。日本が一般借款團と行動を共にする外、獨立に特殊の活動を恣にするの必要ありと云ふ事が、領土接壤といふ理由に基くのなら何故に之を滿蒙に限るのであるか。支那全體、少くとも支那本部全體について、夫の要求を提出するのなら分つて居る。之を滿蒙に限るは甚だ論理の一貫を缺いて居る。

手段として躊躇なく言はしむるなら、帝國は滿蒙に對する特別の野心を有せざる以上、斷じて非除外を主張すべきではなかつた。領土接壤を理由として既定の又は計畫中の事業の除外を求むべくんば、支那全體に亘つて之を爲すべきであつた。而して之を外にしては、留保なしに借款團に加入すべきであつたと思ふ。當今の時代に於ては、巧言美辭を以て腹の底を隱すことは出來ない。滿蒙除外は大國の面目として餘りに意地穢い。

更に一步を退いて、滿蒙除外に依て日本の利益する所如何を考へて見よ。支那民衆の心を損ひ、排日氣勢の緩和阻止に何等貢獻する所なきの今日、僅に國民の怨府たる徐樹錚君一派に憑りて無理な利權を設定するの外、之に由りて何の得る所もあり得ないではないか。空名を取つて實利を失ふの愚に陷らずんば倖である。

思潮

無抵抗主義

中澤臨川

わたくしは本誌にラッセルを論じた中で、彼の無抵抗主義を一寸紹介して置いた。ラッセルの無抵抗主義は主として國際關係に於ける政策として說かれてゐるのであるが、この主義はもつと廣い範圍に應用の能きる一の賢明な手段であるやうに思はれる。無抵抗主義は新福音書の中で基督の稱へたところであるが、不思議にもこれだけは實行困難の理由によつて、いつの時代にも、いかに熱心な信者によつても、殆ど棄てゝ顧みられない有樣であつた。殊に生存競爭の劇しい現代に這入つてから、眞面目にこの教を信ずる者はクエーカー宗の歸依者とトルストイとに限られ、世間はそれに對して冷笑を酬ゆる價値さへないとした。

世間のこの態度にはまさしく至當な理由がある。人間の生活はその根柢が難苦と殘酷との上に立てられてゐる。文明の努力は成るべく此世から生活の難苦を少くし、お互の間に行はれる殘酷を減らさうとするのであるが、然し、いつの世にか難苦が絕え、いつの世にか不正義の斷たれる時の來るべしとは思はれない。我等が今日生活をつなぎで行く爲めに獲得する一片のパンさへが無難に我等の手に這入ると思ふか。それは實に未知の無數の人を傷害する込み入つた殘忍の歷史の結果である。我等の生活は掠奪の上に立てられてゐる。我等は我等の頰を打つ者に酬いなければならないのみならず、進んで他の頰を打たねばならないのである。我等の社會は、日常無數に行はれる、かやうな殘酷の行爲に就て考へるなといふことを知らず識らずの間に我等に教える。「それを我等がどうできるものか。考へたとてどうするものだ。それはセンチメンタリズムだ。我等は生きなければならないではないか。この不公平な世界を造つたのは我等ではない……………」之が我等の僞らざる聲だ。

それにしても我等の心の氣弱く純なる時、我等の心が同情にふくらむ瞬間、言ふべからざる「世界苦」が我等を襲ふ。かやうな時我等は基督の教を笑つて捨てることが能きるであらう

[illegible]でお互の頬を打ち合ひながら、良心の滿足を買ひうるたらうか。

少くとも我等は基督やトルストイの誠實を信ずる限り、かやうな人達の重大視した問題を、深い思慮を仕拂ふ事なしに捨てて了ふのは得策でないと考へる。現代は至難な闘爭の時代である。切迫した經濟關係による個人間の生存競爭はもとより、漸く幕を閉めた歐洲戰爭につぎて、更により大きな階級戰爭が我等を脅やかしてゐるではないか。我等の行爲が平衡を保つて正しき道を進む爲めには、我等は闘爭に對するカウンターバランスを要する。今日の時代、殊に平和論者が、無抵抗主義に一顧を拂はないといふことを私は不思議に思ふ。

無抵抗主義は世間が輕るはづみに信じてゐるほど然かく迷妄な教義ではない。それは實際上の政策又は行爲としても、可能の範圍の汎い、賢明な手段である。否な現に廣く世間に行はれてゐる實踐道德である。我等が遂行に代ゆるに法律を以てし、又は國際間の關係を成るべく戰爭によらずして解決しようとする如きは、無抵抗主義への接近にほかならない。

こゝに斷つて置かなければならないのは、無抵抗主義と卑屈主義との差別である。世人は無抵抗主義を以て一種の卑屈主義[illegible]よ、凡ての力に屈從して決して逆らうなといふ風に解してゐるが、之は大きな間違である。基督は決して權勢の前に屈しなんだ。彼は十字架上に立つてもその信念の一毫たりとも讓らなんだ。無抵抗主義の近代のチャンピオンたるトルストイは、何人にも增して社會のあらゆる不正義に反抗した一人であつた。無抵抗主義は決して卑屈なれとは教えない。反對にそれは正しいと信じたことは十字架の前に立つとも曲げるなと教える。正しきものはいかなる暴力をも惧れるなと教へる。たゞ暴を以て暴に酬ゆるなと説く。我に正しき道理あらば、之を恐れるものの反抗に逢ひて——眞理は世間の恐れるところであるから——我が右の頬を打たせたとて何ほどのことがあらう、よし更にかの暴者をして我が左の頬をも打たせよう。わが生命をも彼に奪はせよう。然し彼が世界の權力を擧げて來ようともわが眞理だけは奪うことができぬ。我が眞理は永遠である。いつかは勝利は我にある。かういふ信念の上に立つものが眞正の無抵抗主義である。無抵抗主義には堅い信念と犯すべからざる勇氣とが伴ふ。無抵抗主義は眞勇主義である。それは眞理に對する暴力のどれだけ無價値であるかといふことを教える。

個人の場合を例にとつて考へるに、ある夜わたくしの家へ一

人の強盗が這入り、刄物を以て私をおびやかしたとする。その場合勿論私は彼の要求に從つて、私の所持する金錢なり何なりを彼に渡すであらう。わたくしが武術の達人であつたとしても、さうすることが私には賢こき手段であり、決して恥づべきことではないと思ふ。また若し私の所持する金錢が私の家庭の明日の糊口に必要なものであるか、又は家族の者の安寧の爲めに是非無くてならないものであつたとしても、それだけの理由で賊に逆らうことは考へものである。偶々その賊が狂暴であつて私の命を請求したとせよ。私が幸ひその場合彼を打ちまかすのことのできる短銃を所持してゐたにせよ、わたくしは多少の手傷ぐらゐは我慢して、逃げ了せるものなら逃げようと思ふ。私はかうした私の行爲を以て決して卑怯とは考へない。で、どうあつても私が逃げられないとしたら、彼に私の命を渡すか、夫とも彼の命をとるか？。假にその時私が一國または世界に對して大きな使命を果す途中にあるやうな場合に立つとしたら、私は躊躇なく賊の命を貰つたかも知れない。然し尋常の場合ならば、私と賊とのどちらが死んでいゝかといふことは判斷のできない問題である。我等が已むなく自衛の地位に立つ場合でも、一なるべく暴力を他人に加へてならないと言ふのは、一つは自己の爲めである。なぜなら、暴力を用ゐたあとの心は騷がしく荒ぶものである。それは一生癒すことのできない傷をその人の精神に與へる。わたくしは幼い頃級下たの小兒をいぢめた折の記憶を今でも忘れないでゐる。それから四五の惡太郎とともに野道で一匹の猫を殺した折の記憶がいま〳〵しくもこの歳まで私の頭にこびり附いてゐて、ともすれば不意に私をおびやかす。

今日、勞働組合のとる同盟罷業は、組合側の主張に充分の道理があつて、資本家がむげにそれを斥けた場合、その行動は一種の無抵抗主義によるものである。然しかやうな場合、無抵抗主義と暴力主義との境界は間一髮にかゝつてゐて、ともすれば前者は後者に變じ易い。その罷業が多日に渡り無辜の消費者に害を及ぼす場合の如き、その組合以外の他の勞働者の職業に差しさわりを來たす場合の如きは間接的暴力と見るべきものであるが、それよりも罷業者それ自ら何等かの積極行動に出づる場合は、もうそれは無抵抗主義とは言はれない。同盟罷業に伴ふ積極行動の是非は別として、とにかく今後の勞働運動が極端に流れるのを防ぐためには、今日無抵抗主義に附隨してゐる世間の妄想を正し、この主義の眞精神をその運動に浸み渡らせることが、何よりも必要であると考へらる。

社會政策の危險

資本主義的經濟組織が現代に於て行き詰つてゐることは、改めて說くまでもないが、之を彌縫する爲めにいろ／＼施される所謂社會政策の矛盾と其結果の危險とを見ては、益々我等の信念の誤でないことを思はせる。

今こゝに思ひつくがまゝの二三の例を擧げて見やう。現今頻出する勞働者の直接要求に對して、資本家は之に抵抗しえない有樣である。然し資本及賃銀制度の維持せらるゝ限り、この要求の聲は止むべくもない。なぜなら、かやうな制度は物慾と物慾との對抗であつて、それには制限がないのであるから。所有慾の根本心理は掠奪であり、そしてそこから起る鬪爭である。根本の制度を飽くなき慾その物の上に置きながら、溫情を說き道德を說いたとて何うならうぞ。かやうな係爭にして長く續き、勞働者をして慾の掠奪に增し慢心せしむる結果は、寒心に堪えないものがあらう。彼等をして未來の暴君たらしめる萌芽がこの間に潜んでゐはせぬか。

現在の社會に於て鬪爭の武器を缺いてゐるものは知識階級である。彼等は資本家ともつかず、勞働者ともつかぬ賴りない位置に迷ひながら、[illegible]今日の[illegible]には兩方から挾み擊ちとなつて、日常の生活にさへおびやかされてゐるのである。また彼等社會の生産率は年々減少する徴候を示してゐる。今後この徴候は益々加速度的に增進するであらう。社會の文化の中心をなす社會が斯の如き不安と[illegible]に瀕してゐるといふことは、捨て置きがたき由々敷事柄である。之が救濟は矢張社會組織の改造に俟たなければ能きないことである。

現制度のもとに於て勞働者の飽くなき要求が續くならば、低廉な女工使役によつて漸く利益を擧げてゐる我國の生絲工場の如き、今日利益の割合に薄い幾多の小工場の如きは、數年を俟たずして倒壞する運命に向つてゐる。その結果はどうなるであらうか。マルクスの豫言の如く、大資本家の少數のみが生殘し、小資本家は皆な無産階級へ追ひ込まれるといふ現象を呈しはせぬか。果して然らばそれは資本主義の轉覆を促進する結果となるに相違ない。所謂社會政策はどの道資本家にとつての自繩自縛である。

これ等の事例からみても、資本主義が現代の要求と相容れないものであることは明瞭である。一の事物に對する論理的考察よりも、その事物の推移が示す事實の反證が却てその事物の眞僞を暴露するに役立つ。資本主義の不合理は如上列記の事實

の中に充分謳されてゐる。我等の惡るいと信じた事は果して惡るいことであつた。かくまでに現實卑近な事實の示す道理にまで誰が目隱しをすることが能きるか。

「成功」教育

わたくしの知る青年で今年第一高等學校の入學試驗を受けた者が、試驗問題をわたくしに見せた。その英語解釋の第一問は次のやうなものである。

1. Life is hard. Make up your mind to go steadily forwards and bear your burden, and if you will do this while you are young, you will become comfortably rich when you get old, and will have the respect of society and the enjoyment of every thing good in this world.

世渡りは骨の折れるものだ。汝はかたい決心を以て堅實な道路をとれ、汝の重荷 雙肩に荷へ。で、汝が若いうちにさうするならば、汝は歳とつてから安樂に財産を殘すだらう、それから汝は社會の尊敬をうけて、世の中の凡てよい物を樂むことができるだらう。

私はその青年の請ひに應じ、この一文を意譯して聞かせながら、密かに顏を赧らめざるをえなんだ。

今日の教育は被教育者の「個人」に就ては餘り親切でない。然しそれが個人を相手として教える場合には、必ず「成功」の奬めを說く。金錢をつくれ、よき位置を得よ、すると汝は社會の名譽と尊敬とを受け、汝は世間のどんな快樂をも意のまゝにすることが能きる、といふのが今日の學校、家庭、及び社會に於ける教育の憲法である。それを犯す者は必ず罰せらる。今日の青年男女はこの點に關し驚くべき訓練を經てゐて長い年月の無趣味な試驗勉强に堪え、成金と高等文官の及第者とを最上の理想とすることを忘れず、文學や科學をさへ一の「成功」の道としてよりほかには考へてならないことを知つてゐる。あまつさへ彼等は成功と戀との使ひ分けに巧みであつて、眞面目な男女間の關係がどれだけ世渡りの道に不便であり、安價な性慾滿足の惡結果に對し現代の醫學が如何に安心に保證してゐてくれるかといふことを覺えてゐる。或る小說の中で、人のよい老父がその子に對し訓戒を施してゐるくだりに斯ふ文句がある。

"Make money――honestly if you can――but make money."

「できるものなら正直に金錢を儲けろ」の「できるものなら正直に」は人間の良心の聲でもあり同時に現代人の消極的なあきらめでもある。次の「然し金錢を儲けろ」の「然し」は、ほかにはどうにもないではないかといふ意味を含んでゐて、現代社會の切迫した要求が悲しい音に發てゐるのである。わたくしはひとり學校教育を咎めようとするのではない。物質慾の禍は現代生活の中核まであまりに深く喰ひ入つてゐるので、之が救濟は部分的の療治によつて得られるものではない。それはこの社會の根本的改造に待つほかはなからう。

中央公論第卅四年秋期大附録

小説 有り得べからざる事……正宗白鳥

小説 妖婆……芥川龍之介

戯曲 順番……菊池寛

小説 海邊の望樓にて……佐藤春夫

小説 或る少年の怯れ……谷崎潤一郎



有り得べからざる事

正宗白鳥

（一）

民雄は去年の大晦日間際に、父の使ひとして田原町の叔父を訪ねた次手に、公園の活動寫眞をちよつと覗いて、それから紅梅燒などを買つて家へ歸つて來たことを思出した。その時に見た活動寫眞は、クレオパトラが苦痛の無い自殺法を撰ぶために、魔女から得た毒藥やナイル河のアスプの利目を、奴隷によつて試驗してゐるところであつた。殘忍な所行に驚かされるとゝもに、美しい女王の心持に同感されないでもなかつた。

疼みも惱みもなしに、淡い悲しみのみ感じながら、眠るやうに死んで行く快い死に方を、彼れは今日もクレオパトラを例として想像してゐた。雨上りの初夏の空氣は滿腹後の彼れを眠りに誘ふやうに生暑くてドンヨリしてゐた。煙草を吸ひながら庭を眺めてゐた彼れは、やがて疊の上へ手足を伸して、醒めてゐるとも眠てゐるともなく、暫く朦朧とした心が現を描き夢を描くのにまかせてゐた。肉つきが豐かで

大柄で、目や鼻に卑しい表情の浮んでゐた活動寫眞中の女王の影が、彼れの目蓋を撥するやうに力強く浮んで來たり、雲のやうに白い軟かな乳房の側を黒い蟲の匍つてゐる様が彼れの神經をいゝ氣持に擽つたりした。久振りに思出した昔の異國の女王は、いくら女王らしくなく下品であつても、肉感的であつても、彼れにいゝ氣持ちをさせるばかりで、神經に何の煩ひにもならなかつたが、よし子の面影がちよつと目の前を掠めたゞけでも、彼れは魘されさうであつた。

二階の父の居室では話聲が止んで碁石の音がしだした。先つきから一度客の前へ出しなければならぬと思ひ思ひ、無性してゐた民雄は、假寢から起上ると、帶を締直して自分の居間を出て、茶の間に居合はせた母に向つて、

「ちよつと挨拶して來ようかな」と、欠伸しながら云ふと、

「あ、行つといでな。そして、若しもあの話が出たら、お前の方からは惡い口を利かないやうにおしよ。成べく曖昧な返事をしとく方がいゝと思ふよ」と、母親は小聲で注意した。

「あの話つて村瀬の品行のことですか」民雄は母親のほとりへ腰を卸して訊返した。彼れはこの頃友人の村瀬の名前を耳に觸れるたびに、自分でも理由の解らないやうな焦立たしさを感じるやうになつてゐるのだつた。

「あの方の養子の話が本物になりかゝつてるらしいんだから。訊かれても迂濶なことは云はない方がいゝよ。お前が餘計な事を云つたためにいゝ養子の口がフイになつたと、萬一村瀬さんに憎まれるやうなことがあつちやいけないからね。さうかつて、あの人を空褒めしても、見す〳〵元中さんを欺くやうで、後で分つた時に困ることになるのだし、からいふ時には成べく曖昧に返事をしといたらいゝと思ふよ。」

「だけど、さう曖昧な返事ばかりしてられやしないさ。元中さんの質問次第で、僕の知つてることは隱立てしないで云つちまふかも知れませんよ。——元中さんの方で僕を信用して訊ねるのにいゝ加減な返事をして濟ましちやゐられませ

んからね。そのために村瀬が金持の養子に成りそこねたつて止むを得ないことだ。全體結婚や養子の話を極めるには、お互ひに缺點も秘密もさらけ出して、それでも異存はないといふ所まで行かなけりや駄目ですよ。兩方で隠し合つて上べだけの綺麗づくで緣を極めるから後でイサコサが起るんぢやありませんか。」

「それはさうだけれど、他家の緣談にお前がムキになつて立入つた事を云ふには及ばないだらうよ。當らず觸らずにしてお置きな。」

「ところが僕はこの頃當らず觸らずがいやになつたんでね。結果がどうだらうとも、大いに當つたり觸つたりしようと思つてるんです」

民雄は笑ひ〳〵さう云つたが、母親は興の醒めた顏して相手を見やつて、

「お前は先日來からどうかしてるのね。いやに私達の云ふことに逆らつたりして」

「さう思はれますか。……さうかも知れないが、しかし、私がこの頃一人で寢起してゐるために、氣が鬱して矢鱈に傍の者に八つ當りをしてるんだと思つちや大間違ひですよ。實はこの頃は久振りで、自分の頭が自分の物になつたやうで、ノビ〳〵してるんです。……僕もちつとは肥つたでせう」

「お前は一人でゐる方が氣樂で肥つたか知れないけれど、私は今のやうな忙しい思ひを永くしてゐると瘦せつちまふよ。よしもいゝ加減で切上げて歸つて來たらいゝだらうにね。靜岡へ行くと何時も長くなつていけない。早く歸るやうにお前からも手紙をやつたらいゝぢやないか」

「お母さんは何でもいゝ加減が好きなんですね。僕は何時までゞも飽きるまで、そちらで遊んでゐろ、こちらにはちつとも差支えがないからと、今朝靜岡へ手紙を出しときましたよ。あれがゐないためにお母さんの用事が殖えて困るのな

ら、僕が自分で出來るだけのお手傳ひはしますよ。少くも僕の身のまはりについちや、今日からお母さんの厄介にならないやうにしませう。僕は汚れ物の洗濯くらゐ人手を借らないで自分でやつたつていゝんです。下女がゐつかなければ僕が八百屋へでも豆腐屋へでも使ひ歩きをしてもいゝんです。そんなことは何でもないことだ」

「詰らないことをお云ひでないよ。男のくせに濯ぎ洗濯なんか貧乏たらしい眞似をしようなんて、情ないことを云ふもんぢやないよ。お前も一軒の主人になるんだから、もつと威嚴を持つやうに心掛けといでな」

　母親は不斷民雄が妻に對してあまりに寛大過ぎるやうなのを齒痒く思つてゐたのだつた。民雄は今の母親の言葉にもその意味を含んでゐるのを察して苦々しい氣がした。

　二階では勝負が終つたところらしく、サラ／＼と碁石を片付ける音がしてゐた。

「とに角ちよつと云つて來ようかな」

　民雄は再びかう呟いて、母親の出して呉れた羽織を引掛けて二階へ上つて行つた。老人二人は碁盤を押のけて高笑ひを洩らしながら一服やつてゐた。客の元中老人は長者らしい品のいゝ眉をピリ／＼動して、挨拶してゐる間にも、民雄の顏から注意深い目を放さなかつた。こんないゝ息子を有つてゐる熊岡の幸福を羨むとゝもに、自分の養子の候補者を民雄と比較するやうな氣持になつてゐた。

「先日有樂座の清元の會で貴下をお見掛けしたやうでしたが、あゝいつた所へ時々お出向きになるんですか」と、元中が訊ねると、

「いえ、偶然ある友人に切符を貰つたから行きました」と、民雄は答へたが、ある友人とは村瀬のことなのをわざと隱して、「貴下も彼處へ行つてゐらつしやつたんですか。氣がつきませんでしたよ。貴下は三味線の音曲がお好きなんです

一たに、私は音曲には一向不案内な方なんだが、切符を押賣りされたので、氣まぐれにちよつと入つて見たのです。二つばかり聽くともう閉口して、早速御免被つたのでしたが、どうです。あの晩舞臺へ出てゐた連中はあの道では名人上手と云はれてゐるんですかい。節まはしも三味線の彈き振りも巧みは巧みで違ひないが」

「私にも無論解りませんが、聽いてゐる間に惡い氣持はしないぢやありませんか。演つてる連中も皆んな藝者ださうですが、聽者にも藝者らしい女が大勢來てゐましたから、私だちがその間に交つてるのが、何だか變でしたね。男は大抵は知合ひの藝者から切符を賣付けられるか、その道のたしなみのある者だつたのでせう」

「しかし私はさうぢやない」元中は邪氣のない笑ひを浮べながら、民雄の父親の方を見て「ねえ、龍岡さん、お互ひに無風流すぎるから、老後の樂みに何かやらうぢやありませんか。まさか長唄や清元を唸る譯には行かないでせうが、世間並みに謠曲の稽古でもはじめちやどうでせう。貴下が贊成なされば、私も勇氣を出して一つやつて見るつもりなんですがな。家の者には迷惑かも知れないが、この年齡になつて謠曲の道樂くらゐは許して貰つてもいゝと思つてゐますよ」

「いや、私は謠曲も清元も、さういふ藝事は眞平ぢや」父親も笑ひを洩らしたが、それは苦笑に近かつた。「年齡ばかり取つても、先祖から引繼いだ身代を碌に仕上げもしないで、謠曲なんぞ唸つていゝ氣になつちや居られませんな。貴下がお樂しみに何かおやんなさるのは至極結構ぢやが、私が貴下のお倣をして風流事に身を入れるのは、身の程を知らん振舞ひです。」

「さう六ヶ敷く考へなさらなくつてもよろしいぢやありませんか。此家にはかういふ立派な御子息がおありなさるんだ

から、私どもよりや心に餘裕が出來てゐる譯だ」

「どうして〳〵。……私のやうな親甲斐のない親を持つた子供はあんまり仕合せぢやありますまいて」

民雄は村瀨の事について、元中老人から何か訊ねられるかと待設けながら、興もない老人同志の雜談を殊勝らしく聞いて、自分もをり〳〵口出しゝてゐたが、何時まで立つても豫期した質問を得られなかつた。村瀨の養子の一件は最早確定してしまつて、隱れた身許しらべなどをする必要はなくなつてゐるらしかつた。

「今の負けはどうも諦めがつかんから、もう一合戰願ひませうか」と、元中は快活な顏して新たに碁盤を引寄せた。

民雄はそれを機會に、張合ひのない思ひをしながら階下へ下りた。母親は林檎の皮を剝いてゐた。

「村瀨さんのお話が出たのだらうね。お前はどんな返事をして？」

「傍から心配するほどでもないさ。村瀨の奴、無條件で一躍して金持の跡嗣者になれるんだからお目出たい譯さ」

「障礙がなくつて御養子の話が極まれば、元中さんもお仕合せだよ。村瀨さんもお前が案じてるやうに、何とかいふ夫婦約束した女に何時までも懸り合つてゐやすまゐさ。養子になることを承知した以上、その女とは奇麗に手が切れてるのだらうよ。それほど無分別な人とは思はれないからね」

「だけど、あれほど思合つた仲で、さう早く手が切れるものでせうか」

「村瀨さんは元中さんのお氣に入つたくらゐだから、餘程利口なんだらうよ」

「なに、あの男は見掛け倒しさ」

民雄は皿の上の林檎を二三片抓んで、自分の居室へ入つた。「あれほど思合つてゐた女と無雜作に手が切れたのか」と、村瀨の所行に疑を寄せだしたが、さうすると、自分の煮え切らない氣持が一層もどかしくなつた。女との離合でも

務子沙汰でも、自分の好むまゝに自由に處置して行ける村瀬の境涯が、自分の身に引くらべられた。

庭の檜葉にかゝつてゐる蜘蛛の巣や、巣の中で藻搔いてゐる小虫を眺めながら、彼れは何時となしにまたアスプを柔かい胸に戯せたクレオパトラの姿を見詰めて、眠つたいやうな快い死を空想してゐた。……村瀬の境涯が羨ましかつてはゐたが、さうかと云つて、兩親や妻から離れて、平和な家を去つて、自分一人でかういふ事をしたいといふ確かな當てがあるのではないので、たゞ肉身の者から受ける有形無形の壓迫が心苦しくて、もどかしかつたのだつた。

二階では碁石の音や煙管の音や、客の快活な話聲が響いてゐたが、父親の方でさして氣が進まぬながらも、努めてお相手をしてゐるのが、民雄にはよく察せられた。

日暮れ近くなつて、客はやうやく歸つて行つた。父親は久振りに訪ねて來て呉れた舊友が機嫌よく遊んで行つたことを喜んで、

「先生。後嗣者が極つて餘程悦しいと見えて、おれに知らせに來たのぢや。しかし碁は相變らず弱い。始終打つてゐるくせに、ちつとも上達しないのぢやから、頭のすぐれた男とは思はれないが、それにしちやよく財産を殖やしたものぢや。運のいゝ人間にはかなはん」と、民雄や母親に向つて云つた。元中の持つてゐる紡績株はこの半期にも五割から七割の配當があるらしいと告げた。

「ぢや、田原町でも景氣がいゝんでせうね。何とかの株をドッサリ買込んでるさうですから」と、母親も云つて、去年田原町に勸められた時に何故割のいゝ株を買はなかつたのかと、口惜しさうに云つたりした。

民雄は今日の生活を豐かに立てゝゐられる身分でありながら、殖財の事に心を尖らせてゐる兩親に少しの同感をも持つてゐなかつた。

「お父さんのやうに他人の賓の計算をしたつて詰らないぢやありませんか。それよりも今年の夏は何處か涼しい所へでも保養にお出でになつちやどうです？。……露西亞なんかの事を思ふと、財産を有つてゐる間に費へるだけ費つとく方がいゝんですね。銀行預金まで政府が沒收したといふから、節儉して溜込んだ人間が一番馬鹿な目に會つたんですよ」

「そんな無法な世が何時までも續くもんぢやない。人民の勤勞の結果を無にしようとするやうな國が榮えやう筈はないんぢや」

　金を減らすことを何よりもの苦痛にしてゐる父親は、金によつて得られる快樂は快樂とは感ぜられないので、避暑や旅行は夢にも念頭に浮べてゐなかつた。それに頑健な身體には醫藥や保養の必要はなかつた。

「おれが行かなくつても、お前は行きたければ海へでも山へでも行つて來ればいゝ。田原町でも達也がこの頃少し腦の加減が惡いので、夏季休暇には轉地させると云つとつた。あれと一緒に行くことにしたらどうぢや。さうすれば宿料もなんぼか經濟になるだらうし、退屈もせんでいゝだらう。田原町でも親爺は丈夫だが、子供がどれも弱くつて困ると云つとつたが、今時の若い者が揃ひも揃つてから弱くつちや、日本國の將來が案ぜられるな」

「日本國もお父さんに心配して貰はなくつてもいゝでせう。僕はお父さんに避暑を勸めても僕自身は決して行きたかないんです。旨い物もこの頃はさう食べたくはないし、金のかゝることは何もしたかないんですよ」と、民雄は悠長な口調で云つたが、さういふ殊勝な言葉を快く聞いてゐるらしい父親の顔を見い／＼「だけど、僕にも差當つてたつた一つ望みがあるんですがね。僕の望みをかなへて下さらないでせうか」

「改まつて何だい」

「一月でも半月でも下宿生活をして見たいんです。僕は下宿屋にゐた經驗がないんだから、一度やつて見たいんです」

「何を馬鹿な」父親は民雄のたつた一つの願ひがあまりに詰らな過ぎるのに呆れて、取合はなかつた。

「いけないんですか」

民雄は強ゐて自分の望みを押通さうとはしなかつた。下宿してある研究物を纏めたいと云ふのは、腹からの止みがたい慾望ではなかつたのだから、兩親の同意を得ないのが、さして不平でもなかつた。

そこへ、よし子からの手紙が屆いて、明日歸宅することが分ると、兩親は嫁や嫁の實家の噂に耽りだしたが、父と母とのそれ〴〵の氣持が、こんな話のあるたびに、ハッキリと分るのを、民雄は今更のやうに感じてゐた。何の情味をも興奮をも感じないで、無私公平に分るのだつた。何の冒險をもしないで殖財に齷齪してゐる父親が、嫁の實家と金錢の貸借もなく、何事にも淡泊に親みを保つて、嫁自身も少しの波瀾をも起さずに、この家に居ついてゐることに無刺戟な安心を抱いてゐて、嫁に向つてその心掛けや所行に今以上求めるところもなければ、此方からも舅としてもつとよくしてやらうとも思つてゐないのを、一つの老人氣質として、民雄は見詰めてゐた。父の平生の一々の言行が、その氣質に嵌つてゐるのを知つてゐた。嫁の締りのない、上品でない言葉付を氣にしたり、臍くりにも迂散くさい目を向けながらも、嫁を此家へ居つかせようと努めてゐる母の氣質をもよく知つてゐた。

民雄には兩親の頭がさういふ氣質の螺旋で動いてゐる機械のやうに思はれてゐた。が、しかし、兩親と同じやうに一つ屋根の下に住んでゐても、よし子に對しては、彼れの冴えた目も曇り勝ちになつて、相手の腹が見透かせなかつた。祖父の三回忌を濟ませて歸つて來る筈のよし子の心の働きは機械仕掛のやうに見做す譯には行かなかつた。

「今日の日曜は寢て暮しちやつた。腹こなしに少し運動して來ませう」

民雄はふと村瀬の訪問を企てたが、兩親には行先を云はなかつた。元中老人の妹で、實の兩親には早くから死別れて

今は老人の養女になつてゐる辰子とは、二人きりで打解けた話をしたことこそないが、幼い時からの顏馴染で、今も屢々會つてよく知つてゐる民雄は、村瀨が元中家の財産を目當てにしないで、あんな女と結婚する筈はないと思つてゐたので、一躍して金持の婿にならうとしてゐる友人の氣持を聞かうとしてゐた。長い間見馴れた村瀨の下宿住ひを見るのも、これが最後のつもりで足を向けた。

酒屋の電話を借りて、相手の在否を訊ねると、自分で電話口に出て來た村瀨は、

「僕の所へ來たつて仕方がないから、此方から出掛けようか。何處か君の都合のいゝ所で待合せて貰ふことにして」と云つた。

「君の下宿へ行きたいんだから、とに角待つてゐて呉れたまへ」

民雄はこの友人と、カツフエーなど飲食の場所へ出入りすることは好まなかつたので、直接に先方の下宿屋へ行つて會ひたかつた。で、村瀨が初夏の夕を下宿でボンヤリしてゐるのに堪へられないらしいのを押留めて置いて道を急いだ。

(二)

下宿の階子段を上ると、落着かない村瀨の顏が直ぐに目についた。意外にも元氣がなさゝうだつた。

「君が電話を掛けた後で、直ぐ外から電話が掛つて來て、僕に急用が出來たんだ」と、慌たゞしく云つて、「しかし、三十分ぐらゐは餘裕があるから、それまででも話して行きたまへ」と、部屋へ入つた。

時間が乏しいのだから、民雄は緩くり無駄話などしてゐられなかつた。打つけに養子の一件について訊くと、

「妙な羽目で話が確定しさうだよ。今夜は僕に取つちや重大な晩なんだ。今夜の樣子で誰れかの助けを借らうと思つて

ゐたんだが、君なら申分なしだから、僕のために一臂の勞を取つて呉れないか」と、村瀬は生眞面目に思ひを籠めて云つた。

「僕に出來る事なら何でもやるが、柄にないことは御免だよ。却つて君のためにもならんだらうからね」と、民雄は女との手切れ話や養子話を豫想して、そんな事に關はつた頼みは斷はらうとしてゐたが、

「いや、君でいゝんだから頼むよ」と云つて、村瀬はちよつと躊躇した。そして、本箱の上に置いてあつた葡萄酒の壜を持つて來て、二つの洋盃に注ぎながら、「今度の話についちや僕も隨分迷つたんだが、先方は兩親とも善良なやうだし、洋行もさせてやる、職業についても束縛しないと、僕の都合のいゝ條件が具はつてるから承知したんだがね。僕は貧乏しながらも、とに角獨立でやつて行けるんだから、少しばかりの財産のある家へ強ゐて養子に行きたいつていふ屈辱的な考へは有つてゐないんだが、どういふものか、先方の老人が非常に僕を望んでるんで、二三度會つてる間に僕も知己の感じに打たれてる譯さ。故郷（くに）の者も無論喜んでゐるし、話は略々確定しちやつて、今夜形式的に仲人に會つて、最後の調印をして、婿入りの手順を極めることになつてるんだが、……君には隱す必要がないと思ふから云つちまふが、意外な障礙（さはり）が起りかゝつてるんだ。こんな事はこれまでにないことだが、僕は自分で自分の仕末がつかんくらゐに迷つてゐる」

「どうして？」民雄はそんな障礙（さはり）を有りさうなことゝして、意外には思つてゐなかつた。

「君はあの女のことで故障が起つたとでも思つてるのだらうが、さうぢやないよ。あの女には僕はもう拘泥してやしない。僕の心にはあの女は記憶として殘つてるばかりで、生きて働いてやしないよ。仲人の末永さんにも一通り打明けてあるんだから、僕の過去の事はちつとも邪魔になんかなりやしないが、今問題にしてるのは僕の相手の肝心な女のこと

なんだ。以前から變な噂が耳に入つてゐたのを氣にも留めないでゐたんだが、この二三日急に打遣つて置けなくなつたのだ」

「辰子さんことで變な噂なんか、僕は聞いたことがないがね。君はどういふ所で聞いたのだい」

「なにもあの女に暗い秘密があるつていふ譯ぢやないが、僕との結婚を望んでゐないらしいんだ。養父が獨斷で極めた話なんで、當人ははじめから氣が進まないといふことだが、若しさうだとすると、僕は今からでも破約しようかと思つてゐる。嫌はれてるとこへ押掛けて行くほどに僕も無神經にはなれないからね」

「君にも似合はない。馬鹿に氣を廻すぢやないか」

「さう冷笑するな。僕も根の無いことを疑ふぢやないから。……それで今夜の話の樣子によつたら、君か君の妻君を煩はして、先方の眞相を確めて貰ひたいんだ。實は僕自身が當人に會つていろ〳〵訊ねたり話したりしたいことがあるんだが、何時も親爺か母親かゞ側についてゐて、何故だか二人きりで自由に話の出來る機會を與へて呉れないんだよ。それが弊で結婚前の交際を許さないとばかりは思へないんだ」

「僕が辰子さんの腹の中を索ることは出來ないが、妻はあの人と可成り懇意になつてるやうだから、近々に會つて訊かせることにしよう」

「さうして呉れたまへ。……要するに僕は先方の財產と結婚するんぢやない。當人の心持が何よりも肝心なんだから」

「それはさうさ」

民雄は自分の家庭の色も香もない寂しさを話したが、相手が何時ものやうに身を入れて聞いて呉れないのに張合ひがなかつた。嫌はれるの好かれるのと、あんな容色の惡い平凡な女について焦慮してゐるのが、平生の村瀨とは人が異つ

たやうなので不思議であつた。しかし、あたりに生眞面目なのを見ると、冷かされもしないで、いゝ加減に調子を合はせて、暫くして葡萄酒の微醺氣分で暇を告げた。

歸りには賑かな神樂坂を傍目も觸らずに、そのくせノロ／＼通つて濠端へ出た。電車には乘らないで土手に沿つて三番町の自宅まで歩いたが、今夜は珍らしく月が冴えてゐた。彼れは屡々濠端に足を留めて空を仰いだ。……まだ電車の敷けなかつた頃、夜このあたりを通るたびに怖い思ひをしてゐたことが、ふと思出された。人並以上に臆病だつたのか、黑い松の蔭に怪物が潜んでゐるやうに思はれたり、後から近づいて來る足音に脅かされたりしたのであつた。

「何處まで行つて來たの？」と、母親に訊かれても、民雄は明らさまには云はなかつたが、やがて、

「お母さんは辰子さんをどう思ひます？」と訊ねた。

「容色は何だけど、大人しさうな女ぢやないかね」

「あの女に男に好かれるところがあるんでせうか」

「さうねえ」

母親ははつきりした返事をしなかつたが、民雄は辰子の何處にも男好きのするところを見出し得なかつた。いくら財産があつても、あんな女を一生の妻とするのは味氣ないやうに思はれるのに、色慾に經驗のある村瀨のやうな男が、今までの　を棄てゝあんな女に眞面目に心を傾けてゐるらしいのは、如何にも理解し得られなかつた。

で、彼れは寢床へ入つてからも、頻りにその事を考へてゐた。すると、不意にある物が稻妻のやうに彼れの頭にきらめいて、彼れの心臟を鼓動させた。彼れはこの一日の無氣力な妄想や退屈な家庭の空氣から離れて、異樣な興奮を覺えた。たるんでゐた眼も闇中を見得られるやうに冴えて來た。

「村瀬さんがこの頃のやうにたび〳〵遊びに入らつしやるのをお母さんは大變嫌つてゐなさるんですよ」と、よし子が囁いたことがあつた。それは春の末ごろであつた。

「僕も村瀬を好いてゐやしないが、普通に交際するだけなら差支えはないぢやないか。おれだちに比べると世間通だから話が面白くつていゝぢやないか」

「多分私だちがあの人に化れるのを、お母さんはいやがつてゐらつしやるのよ。お母さんも隨分嫉妬やきね。……それで、村瀬さんが元中さんの御養子になることまで、大變氣にしてゐらつしやるんだから可笑しいでせう。私から辰子さんに忠告したらいゝだらうと勸めなさるんだけれど、まさか私の口からそんな餘計なことは云はれないわね」

「お母さんは田原町の逹也を元中さんへ養子にやりたかつたのだから、村瀬の養子話を聞くと殘念に思つたんだらう。だけど、田原町でもあれだけ身代があるんだから、次男を他所へやる必要はないよ」

「傍から云ふまでもない、辰子さんは私なんかとは違つて、今風のえらい考へを持つてゐなさるから、お父さんの云ひなり次第になりやしますまいよ」

「だつて、あの女にや村瀬は過ぎてらあ」

民雄が事もなげにさう云ふのを、よし子は否定して、村瀬の放縱な所行を責めたが、民雄は揶揄半分に、「人間は男でも女でも、些とは道樂氣のあつた方がいゝやうだよ。家のやうに皆んなが殺風景でも面白くないからね。村瀬のやうな亭主を持つた女は幸福かも知れない。彼奴は少くもおれや逹也なんかよりや男振りがよくつて、女の氣に入るやうな話に富んでゐるし、唄の一つぐらゐ唄へるんだからね。それに金離れがいゝ」

「男が唄が唄へたつて何になるもんですか」よし子は氣色ばんだ。

「だけど、元中の老爺もさう長生はしまいから、死んだ後では金庫に蔵つてる金を手掴みにして、パッパと遣へるんだから、村瀬も得意だらう」

あの時それについてもつと話合つたことは、民雄は忘れてゐたが、よし子が村瀬と辰子との縁談についていゝ氣持のしてゐなかつたことは今でも思出された。そして、自分がこの頃何となく村瀬について焦立たしさを感じてゐたのが、よし子に感化れたゝめだつたのに思當つた。達也をはじめ、自分だち夫婦、それに口でこそ他家の幸福を祝つてゐても、腹の中ではさうでもないらしい母親まで、村瀬に好意を有つてゐないのが淺間しく思はれた。

で、彼れはよし子が歸り次第訊糺したい事が出來て、明日の晩が待遠しくなりだした。

翌日、母親は平生よりも早く起きて、平生よりも丹念に家の掃除をした。丸の内のある役所に勤めてゐる父親が辨當持參で出掛けるのに倣つて、民雄も何時ものやうに質素な辨當を提げて、ある史料の編纂所へ出掛けた。紙魚の喰つた古文書を調べたり寫したりしてゐる間の彼れは、機械的ながらも落着いた靜かな氣持をもつて時を過してゐられた。

よし子が靜岡から乘つて來る汽車の時刻は分つてゐたので、民雄は勤めを終つて、電車道へ向ひながら、出迎へようか出迎へまいかと、例になく考へた。考へてゐる間に、兩親を座に加へないで緩くりよし子に話したいことがあるやうな氣がしだしたので、ふと足を轉じて、東京驛の方へ向つた電車に乘つた。

久しく市中を出たことのない彼れには、停車場の有様が珍らしかつた。それよりも出口の柵に寄つて、大勢の下車客の中にまじつてゐる妻を搜してゐるのが、われながら變だつた。

此方に氣づくと、よし子の顔には驚きと笑ひとが一緒に浮んだ。急ぎ足で出て來て、「わざ／＼迎へに來て下すつたの」と、懐つこさうに云つた。

「さうでもないが……」

民雄は出迎へといふ異例な所行が、妻に對しても、自分の平生の心持に對しても、極りの悪いやうな氣がした。

「家ぢや變つた事はないんでせうね」

「あゝ。……きくが二三日前に無理に暇を取つて出て行つたから、お母さん大變忙がしがつてるやうだよ。だけど、どうかかうかやつて行けないことはない。お前はもつと遊んで來ればよかつたのだ」

民雄はさう云つて、よし子の行く方へ隨いて歩いてゐたが、

「私、手荷物を受取つて來ますから、貴下は其處で待つてゐて下さいね」

「荷物は後で配達させることにして、歩いて歸らうぢやないか。急ぐことはないよ」

「さう?」よし子は不思議さうに夫の顏を見て、「何だか譯がありさうね」

「だつて、お前も急いで家へ歸る必要はないだらう。銀座でもブラついてから歸ることにするさ」

よし子は何か譯がありさうなのが氣掛りであつたが、とに角手荷物の仕末をつけて、夫と並んで外へ出た。日がまだ高くつて埃つぽい道は暑くるしかつた。數寄屋橋あたりまで問はず語りの妻の田舍話を聞いてゐた民雄は、此方から持出して話の種にするやうなことは何もないやうな氣がしたので、下女の出て行つた次第を、せめてもの話題として細かに話した。

「近所の家へ變つたのらしいが、お母さんはブツ〳〵云つてる。仕事は暇でも、給金が安いとか喰物が悪いとかで不平だつたのださうだ。」

「きくが居つかないのは私にはちやんと分つてゐたのよ。あの女も剛慾で、何でも欲しがるのはいやだつたけれど、ゐ

なくなると名殘惜しいやうな氣がしてよ」
「若奥樣によろしくと、きくはおれに云つてゐたよ」
「私が引留めたらあの女もまだ家にゐてくれたかも知れないわ。だから、私の歸らない間に急いで暇を取つたんですよ」
「どうだかね」民雄は苦笑して口を噤んだ。
人のゐない休み場所を求めたが、心當りがないので、徒らに銀座通りを歩いてゐたが、よし子は夫の出迎へといひ、無意味な散歩といひ、その擧動から推して、自分の不在中に何事か起つたのに違いないと、先つき停車場で夫の顏を見つけた時にふと萌した疑ひをいよ／＼確めるやうになつた。しかし疑ひが事實になるのは恐ろしかつたので、夫が言出すまで強いて訊ねようとはしなかつた。
「お前は何か買物はないのか」と、民雄は暫くして云つた。
「貴下は何處までいらつしやるの？」
「足が疲れたのなら、氷屋へでも入らうか。……晩餐を食べて行つてもいゝね」
「他所で御飯を食べて、それからどうするの？」
「どうするつて、詰り家へ歸るのさ。……また一緒に出て來ることは六ケ敷いから、次手に買ひたい物があれば買つて、見たい物があれば見て行くといゝんだね」
「そのために連れて來て下すつたの？　だけど、私汽車を下りたばかりで、まだ旅行中のやうな氣がして、緩くり物を見たりなんかしてゐられやしませんよ。貴下も變り物ね、今日に限つて私を引張り廻したりして」

「かうしてるのが旅行中のやうだつて、三番町へ歸つたら、お前は落着けるつもりなのかい」

「だつて。……」自分の家ですものと云はうとして、よし子は言葉を呑込んだ。目の前の洋酒屋の飾窓や、流行の飾裝をしてゐる男女などが、他郷の光景として彼女の目に映つた。そして、汽車の中でボンヤリ考へてゐたことが、激しく胸に迫つて來た。

「だつて仕方がないわ。……仕方がないわ。今朝電報を打つといたんですから、時刻に遲れないやうに家へ歸りませう」

「家ぢやお母さんはお前を待つてゐるし、心配することは何もない筈だが、村瀬は養子の一件でごたついてるよ。あの男も見掛けによらない子供くさいところがあるんだね。辰子さんが村瀬を愛してるかゐないか、おれがお前に探つて見て呉れと云つてゐたよ。結婚が極つてるのにそんなことを穿鑿したがるのは可笑しいぢやないか。これから結婚を申込まうとするのなら兎に角」

民雄は事もなげに冷かにかう云ひながら、妻がどう返事をするかと耳を留めてゐたが、

「でも、それが本當なのかも知れませんよ」と、よし子は生眞面目に一口云つたきりだつた。

（三）

「おれは何のために妻を誘つて來たのか」

「何のために私を連れて來たのだらう」

二人は互ひにかう思ひながら、氷入りのサイダを一本飲んだゞけで、電車で三番町の家へ歸つた。兩親が機嫌よく迎へて呉れたので、よし子は一先づ安心して、早速不斷着に着替えて、今夜から直ぐに働かうと身構へした。母親も手傳

ひ人が出來たので重荷を卸したやうな氣がして、今時の下女根性を罵つたりした。
「東京の者がずるくつて、私なんかぢや使ひ切れないよ。田舎から世擦れない女を寄越して貰はふかと思つてゐるんだがね」
「田舎だつて同じことですわ。御機嫌を取り〳〵使はなきやなりませんの」
高い給金出してと母親のこぼすのが、よし子には可笑しかつた。自分に主婦の權力が有つたなら、どうせ使ふためのお金だから、此家の人だちのやうにひどい物惜しみはしないで、召使ひや貧しい身内を充分に惠んでやつて、家の生活振りも、もつと陽氣に派手に面白くするのだけれどと、結婚當時から考へてゐることを胸に浮べて、母親がこぼすのを聞くにつけて、一層下女に同情を寄せてゐた。
「ぢや、當分代りを入れないで、やれるだけやつて見ようかね」と云はれると、
「その方が氣骨が折れなくつて却つて氣樂ですわ」と、よし子は口先の相槌を打つてゐたが、母親の話が止切れると、辰子と村瀬との事が不意に浮んで來て、茶碗や皿を洗つてゐる手先は氣だるくなつた。「生れながら人並すぐれたところは無いのに運がいゝ。それに村瀬さんをお婿さんに貰へるのを有難いとも思はないで、不平がましいことを云つてゐるとすると贅澤すぎる。僭越だ」と、ひそかに憤慨した。全體村瀬の方で辰子と一生連れ添ふ決心をしたのが、他人事と思はれないほど、よし子には情なくなつた。
「辰子さんの結婚披露にはおれ達も呼ばれて行くんだね」と、民雄は寢室へ入つてから云つた。
「私はそんな晴れがましい所へは、呼ばれても行かないつもりよ。……私もうそんな氣持にやなれなくなつたんですもの」

「結婚式だのホネームーンだのつて、世間の云ふやうに晴れがましい華やかなものなのか知らん。おれだちはどうだつたらう？。……お互ひにぼんやりしてゐたんだね」
「だつて貴下にははじめから結婚を幸福にしようといふ意志がなかつたんですもの。村瀬さんはさういふ意志があればこそ、辰子さんの心持まで穿鑿してゐなさるんでせう」
「そんな穿鑿は何の役にも立ちやすまいよ」民雄は自分の結婚生活や家庭生活が、年がかはつても季節が移つても、何時まで經つても、何か大切な物を忘れてゐるやうな不足を覺えるばかりなのに飽足らなかつたが、それをよし子に話すと、婦人雑誌にあるやうな今様の口說を聞かされるに極つてゐるので、滅多に口に出さなかつた。しかし、今夜は暫く離れてゐた後だから、いくらか寛いで妻に對することが出來たので、
「先つき村瀬からこんな手紙が來たんだよ。讀んで御覽」と云つて、机の上の手紙を取つて、寢衣に着替えた妻の前へ抛つた。
　よし子はふと胸騒ぎをした。夫に横顔を見せながら、夜具の上に俯伏しになつて、手紙の上に目を凝らした。
「……あれから末永さんに會つて、思ふ存分云ひたいことを云つて來たが、先方の親子の人達に僕が過分に信頼されてゐるのに感動したよ。君も喜んで呉れたまへ。昨夕ふとした事から君に詰らんことを賴んだが、あれは全然取消すからそのつもりでゐて呉れたまへ。どういふものか、今度の事にはいろ／＼な邪魔が入つてゐたんだが、昨夕こそ僕の頭は一點の雲も跟を止めぬやうに奇麗になつたよ。君は積極的に力を添へては呉れなかつたけれど、好意は持つてゐて呉れたが、陰險な妨害者があるのには驚いてゐる。僕に宛てゝ不快な疑惑を起させるやうな手紙を寄越した者もあつたが、先方のミスMへも、世間を知らないのに乘じて、餘計なことを吹込んだ奴があるらしいんだ。しかし、妨害が何の效も

褒しないで、圓滿に運んだのだから、僕は最早誰れをも怨んでゐやしないよ。却つて妨害があつたゝめに、幸福の感じが一層加はつたやうに思つてゐる。昨夕はしみ〴〵君と話す暇がなくつて殘念だつた。近日ゆつくり遊びに來て呉れたまへ。僕の方からもお訪ねしようと思つてゐる。結婚の準備などについて、君のお母さんにいろ〴〵お尋ねしたいことがあるのだから」

よし子は讀終つても、暫く手紙から目を放さなかつた。その中の文句は自分なんぞにも當付けられてゐるやうな氣がして胸苦しくなつた。

「それを讀んで何か感じたのかい」

寢床に横はつて、妻の横顏を見入つてゐた民雄は、妻の心の微動をも見のがさなかつた。村瀨の養子話によつて、深いか淺いかは兎に角、彼女の心に多少の刺戟が與へられて、他人事として淡白に見過してゐられないらしいのを、民雄はかねて察してゐたのだつたが、今夜はことにさう思はれて苦笑された。そして、洗ひさらしの浴衣に堅い伊達卷を締めたゞけのよし子の堅太りの姿形も、辰子よりは遙かに見勝るやうに思はれた。

「この方の字は讀みにくいから、考へ〳〵讀んでゐるのよ」と、よし子は邪氣なく云つたが、やがて慣ましやかに手紙を封筒に收めて、元の所へ置いてから、

「これで見ると、餘程辰子さんが好きになつてるのね。だから誰れかゞ二人の仲を割かうとでもしてるやうに氣を廻すんですよ。邪推なんかして男らしくもない」

「それよりも、村瀨と夫婦約束までしたといふおきぬといふ女が、結婚の席へ刄物でも持つて飛込みやしないかと、おれは思はれるよ。手を切つたと云つても、女の執念がさう淡白に消えやすまいからね」

「さうですとも」よし子は夫が芝居じみたことを想像してゐるのが可笑かつた。明日から早く起きて、下女がはりに働かねばならぬのだから、一刻も早く眠つて旅の疲れを癒して置かなければならぬと、電氣を消して寢床に就いて、實家でも後嗣者の兄に嫁が出來たからたまに歸つても居づらくなつて、今までのやうに心安く寢泊りは出來なくなつたことなど、欠伸まじりに話し〳〵、若い女らしい正體のない睡りに落ちた。

だが、民雄は獨り寢の時ほどに安らかに眠つかれなかつた。妻の胸に羽ぐゝんでゐるものを抉り取つて見たつて、この女に愛情が增して同棲の樂みが增しさうにも思はれないが、妻に不滿があるのなら、離緣でも何でも、キッパリした表立つた解決を試みたかつた。兩親に際立つた嫁困らせの所行がなくつて、亭主に際立つて非難を打つべきところがなくつて、穩かな家庭がつくられてゐるのだから、よし子の方で胸にくすぶつてゐる不滿に火を點ける機會のなさゝうなのが、民雄には察せられてゐた。そして民雄自身、その火が點いてパッと燃え上るのを待焦れるやうな氣になつてゐた。……今日停車場へ出迎へに行つて、目的もなく一緒に散歩をしたのも、知らず〳〵、何かを妻に云はせようと思つてゐたのだつた。昨夕ふと以前の妻の話など思出したのも、燃えつくべき火の種を搜してゐたやうなものだつた。

暗がりの中にスヤ〳〵眠つてゐる妻を呼醒まして、驚かすやうなことを云つてやらうかと思つても、驚かすべきことが內容を具へてゐるのではないから、迂濶に言出すのが躊躇された。……よし子が結婚前にも結婚後にも、他の男に關係があつたのではないし、家庭が舊弊で、夫以外の者と深い交際をする機會は今のところまるで與へられてゐないのだから、此方から妻の所行を責めるにも依りどころがなかつた。

翌朝、よし子は母親の雨戸を開ける音を鋭敏に聞きつけて、もつと樂みたいいゝ夢を振拂つて起上つた。明け方の夢に名殘りの惜しいのはよし子一人であるのか、父親も民雄も好んで早くから寢床を離れた。

民雄は妻の歸つて來たおかげで、寝床の取片付などに煩はされることを免れて、潮風の涼しい縁側で新聞を讀んでゐたが、するとそこへ、父親がやつて來て、

「お前の方で差支えがなければ、歸りにでも元中さんの家へこれを屆けて呉れんか」と、手紙を渡した。そして、民雄が郵便がはりに使はれるのをいやがつたらしいのを見ると、

「お前に持つて行かすといふ約束をしてあるんぢや。……今度ある有利な會社が創立されるについて、元中さんが發起者で大株主になる譯ぢやが、わしも昨夕一晩考へて、仲間の一人に入れて貰ふ決心をした。いよ〳〵極るとお前の名義で株を持つてもいゝと思ふとるのだから、お前も元中さんに會つて、會社の成立についてもよく聞いとくとへゝ。……あの人はいゝ運がつゞいて殆んど失敗といふものがなかつた。だから、今度の事業もあの人が主になつてやると、有利に發展するに違ひないと、わしは考へたのぢや」

「私の家が元中さんなんかの仲間になるのは柄にないことだと思ひますが、家にはそんなに資産があるんですか」

「なに、資産が有る筈はないが、わしも一生に一度は會社の創立委員くらゐになつて、大きく働いて見たいぢやないか。都合で役所は罷めてもいゝと覺悟をした」

「えらい決心ですね。」

民雄は父親がこの上頭を使つて、危い目をして殖財を計るよりは、氣樂をして傍からボツ〳〵減らす分別をしたらよさゝうだと思つたが、父親が元中にあやかつて運よく殖やした財産を、當然の相續者たる民雄自身が引繼ぐ時が來たにしろ、それをどうして使つていゝのやら、使ひ道が湧いて來なかつた。……生きてゐるのは死期の來るまでの間のつなぎに過ぎないやうに思はれてゐる彼れには、生きるために必要な以外の財産なんか餘計ものゝやうに思はれてゐた。

「元中の老人はお前を好いとる。使は使として、あの家を見て來るのも無用ぢやあるまい。新しい普請が出來て隨分立派になつとるぜ」と父親は云つた。

民雄は型の如く編輯所で勤めて、退け際に豫め電話を掛けて置いて、麥平の元中家へ向つた。父親に吩咐かつた役目以外に、辰子の様子の見られることが、この訪問に多少の興味を添へてゐた。

かねて父やよし子の話に聞いてゐた通り、元中では隣の家を買潰して、以前からの家に繼足してゐた。一目で成金の住居と見られるやうな表構への仰々しい家ではないが、それが扣へ目勝ちな品のいゝ主人の好みのやうに、民雄には感ぜられてゐた。

案内を乞ふと、一寸と應接室で待たされて、それから新築の方の座敷へ通された。舊宅から廊下傳ひで其處へ入ると、自分の家などゝは世界の違つたやうな豪奢な感じがしたが、それは瞬間のことで、周圍の物は彼れに窮屈な感じを與へた。安樂椅子一つに寢そべられる氣樂さがむしろ望ましかつた。來客をあしらつてゐた老人は、暫くして微醺機嫌で入つて來たが、子供の時から親しんでゐる民雄には、この老人がこの豪奢な住家の主人として座を構へるのが、不似合に思はれた。

「今お客が來てゐるんだが、直きに歸る筈だから、君はゆつくり遊んで行つて下さい」と云つて、老人は民雄から手紙を受取つて讀みながら微笑して、「あなたのお父さんはいろ／＼なことを考へてゐなさる。あなたとは親子でも氣風が違つてる。しかし、あなたはあなたの性分に適した道へ進んだ方がいゝでせうな」

「親爺が私のことを何か手紙に書いてゐるんですか」

「さうでもないが」老人は手紙を卷收めて、「まだ御飯前だらうから、有合せで何か差上げますから、今日はゆつくり遊

んで行つて下さい。」と云つて、違ひ棚から、退職紀念の美裝した書畫帖を持つて來て、民雄の前へ置いた。

老人の出て行つた後で、民雄は書畫帖を二三枚開けて見たが、社會的に高名な人だちの筆蹟を見たつて、さして面白くはなかつたので、廊下へ出た。そして、沓脱に庭下駄のあつたのを幸ひに庭へ下りて、楓の葉蔭へ寄つた。父親が後嗣者である自分を連中に近しくさせて、金儲けの教育を受けさせて、都合によつたら、實業會社の社員にでもならせようとするのだらうと、かねて父の洩らしてゐる意見から推して手紙の文句を想像したり、村瀬がやがてこの家の主人になることを不思議に感じたりしてゐたが、そこへ、庭木戸を開けて辰子の入つて來るのがふと目についた。人のゐるのに氣がつかないらしく、何か考込んでゐるやうな目をして紫陽花の咲いてゐる庭の片隅の方へそつと歩いてゐた。

民雄は見つけられないやうに念じながら、辰子の姿を見てゐたが、どう注意しても、その女に花嫁として若い男の心を惹きさうなところがなかつた。初夏の爽かな夕暮に、花に對してゐる結婚前の女としてはあまりに色も艶もなさ過ぎた。しかし、村瀬のやうな男があれで滿足してゐるのだとすると、何處かにいゝところがあるのか知らんと、民雄は自分の目を疑ひながら、顧み勝ちにそつと座敷の方へ歸らうとすると、幽かな足音を聞きつけた辰子は、振向いて驚いた。强いて笑顏をつくつて挨拶した。

民雄も笑顏をつくつて會釋した。そして、かういふ機會に何か訊ねたい好奇心を起して側へ寄つて、

「この頃はどうしてゐるんです？　僕の家へも暫く入らつしやらなかつたやうですね」と云ふと、

「奥樣はもう靜岡からお歸りなすつて？」と、辰子は快活に訊返した。

「えゝ」民雄はよし子の事を彼此噂にしたくはなかつたが、「あれが靜岡からお音信でもしたのですか」

「毎日のやうに繪端書やお手紙を頂きましたよ。私、筆不性なものですから、滅多に御返事も差上げませんでしたけれ

ど」

辰子は立話は變なので、緣側の方へ足を向けながら、「何時あなたが入らしつたのか、私ちつとも存じませんでした」

「お父さんのところへお客樣が來てゐるんですね」

「末永さんですの。あなたあの方を御存知なのね」

辰子は事もなげに仲人の訪問を知らせた。そして、民雄が緣側へ腰を掛けると、座蒲團を取つて來て與へて、自分もその近くに坐つた。紅茶や西洋菓子を持つて來た小間使に向つて、「此方のお客樣には私がお相手をしてゐますからと、旦那樣にさう云つといてね」と命じて、自ら進んで何だか話したさうにするのが、民雄には不思議であつた。しかし、村瀨に關はつたことを民雄の方から持出す譯には行かないので、辰子の學んでゐるピアノや、讀んでゐる書物のことなど、彼自身あまり興味のないことを訊ねたりしたが、辰子もさういふ問ひには卒々しく答へて、

「あなたにお目に掛れるやうに奥樣にお願ひしようかと思つてゐましたの」と、懐つこさうに云つた。

これまでしみ〴〵話をしたことは一度もなかつたのだから、民雄はます〳〵變に思つて、相手の顏を見詰めた。人並はづれた小さな耳が、著しく辰子の顏を醜くしてゐるやうに思はれたが、怜悧らしい目をしてゐるのに、今はじめて氣づいた。

「僕に何か御用があるんですか。……それなら今承つてもいゝですよ」民雄は老人のくだ〳〵しい話よりも、緣談に關したことを辰子の口から聞かれるのを望んで勢づいたが、

「でも、輕々しく申上げられませんわ。私に取つては大事な事なんですから。……何時父か母か此處へ來るかも知れませんし、お宅へ伺つても皆樣がゐらつしやるんだし」と、辰子は勿體ぶつた顏して考へてゐたが、「明日の朝何處かで

私に會つて下さらないでせうか。何處でもあなたの御都合のよろしいところへ、私の方から出掛けることにいたしますわ。明日は九時からピアノの先生のお宅へお訪ねする筈になつてゐますのですから、その時間を利用してあなたにお目に掛ることが出來ればよろしいのですけど。……お差支えがありますでせうか」

「九時には出勤しなきやならんのですけれど、一日くらゐ遲刻したつて構ひません。……だけど何處でお會ひすることにします？」

「知つた人に見られないところなら、何處でもよろしいんですわ。……日比谷公園でゞも、新橋の停車場でゞも。……だけど、この事は何方にも、あなたの奧樣にも、一日二日の間お知らせなさらないやうにして頂きたいんですの。さうでないと、私大變不幸なことになるんですから」辰子はさう云つて、先つき庭木戸から入つて來て花の前に立つてゐた時のやうな、心配事のありげな愁はしい顏をして、「出し拔けにこんな事を申上げていけませんでしたわね」

「なあに。……あなたの爲めになることで僕にでも出來ることなら何でもやりますよ」

民雄は半ば好奇心から賴もしげに云つて、妻に秘密にすることをも誓つた。九時過ぎには公園の池畔の藤棚の下あたりで待合はせる約束をもした。

「御迷惑でせうけれど、私には信じて身の上の相談の出來る方が外には一人もないんですから」

辰子はそれで餘程心を安んじたやうであつたが、民雄を持做す食膳が小間使の手で運ばれるとゝもに、座を退いて、その夜は姿を見せなかつた。仲人と酒酌みかはして、ゆつくり結婚式の打合せなどして、いゝ氣になつた老主人は、先客を送出すと直ぐに若い新客の側へ來て、自分の若い時代の苦勞話などして、一夕を快く過した。

民雄は實業の講釋、金儲けの自慢話などを聞かされないのを、もつけの幸ひとして、父の手紙に對する返事さへ、先方

が忘れてゐるのか、言出しもしなければ、此方からも強いし催促はしないで、老人の話振りがくどくなりかけるところに切上げて、暇を告げた。

先夜も村瀬の下宿で葡萄酒を飲まされて微醉のいゝ氣持で歸途に就いたが、今夜も舶來の芳醇な洋酒を饗ばれて、いい氣持で元中家の門を出た。……父親の使として來たといふよりも、辰子に會ひに來たやうであつたのが、民雄には可笑しかつた。よし子とこそ懇意であつても、自分とは深い親しみもない辰子が、自分を非常に信頼してゐるらしいのが、考へれば考へるほど不思議であつたが、しかし、平生無駄口を利かないで大人ぶつてゐるためかと思ふと、若い女の信用を得るのも當然か知らんと獨合點がされた。それに、元中老人などが平生自分の謹直を褒めてゐるのを、辰子も聞いてゐるのかも知れない。あるひはよし子とのをり／＼の打解話の間におれを女の命によつて動くやうな甘い男として辰子が觀察してゐるのかも知れない。よし子の奴、その身を重く見せるために、さも亭主が女房に御せられてゐるやうに吹聽してゐるのかも知れないから。…………

それは兎に角、妻にも秘密にして、公園なんかで待合せて、女の賴み事を聞くといふ企らみは、民雄には異例な事であつたので、平然として明日を待つてはゐられなかつた。家までの道すがらにも、それについていろ／＼と想像を逞くした。いくら空想で彩取らうとしても、辰子を美しい女として目に浮べることは出來なかつたが、若い女の胸に潜んでゐる思ひは、聞かぬ先から彼れの心を快く刺戟した。村瀬との結婚について何か苦惱の種が萌してゐるのかも知れないが、縁談の故障を友人のために悲むよりも、さういふ波瀾の起るのを待設けるやうな氣持が、知らず／＼彼れの心に浮んで來た。……「おれとよし子とのこれまでの結婚生活」「辰子と村瀬とのこれからの結婚」どちらにしても、珍重すべき事件とは思はれないから、こんな男女の結合はどうころんでもいゝやうにさへ思はれだした。

家へ歸つて、よし子から辰子の事を訊かれても、無論微見かしもしなかつた。
「あの家も厳格だから、娘を自由に出歩かさないやうにしてゐるんだね」と云ふと、
「辰子さんはよくそんなことを云つてこぼしてゐなさるけれど、それは贅澤過ぎた言草よ。あんなに可愛がられた上の厳格なら、ちつとも苦痛になりやしませんよ」と、よし子は無愛想に答へた。

（四）

翌日は梅雨空となつて霖雨が降つて、風も稍々冷たかつた。民雄は定刻に家を出たが、豫定の寄合の時刻にはまだ間があるので、途中で電車を下りて、ぶら／＼歩行することにした。村瀬などにはたび／＼かういふ經驗があつたのであらうが、それは戀人に會ふためだから、おれのやうに悠長な氣持で道を歩いてゐやしなかつたらうなどゝ考へたりして、無駄足を退屈には感じないで日比谷へ向つた。そして、公園へ入ると、俄かに興奮して、無頓着に足を進めてはゐられなくなつた。左右の人々にも氣が置けた。辰子の來てゐるかゐないかを遠くから見定めてから、池のほとりを彼方此方と歩いてゐた。小雨も稍々音を立てるやうになつて、藤棚の下にはベンチに休んでゐる人もなかつた。どんな風して女がやつて來るかと、花道へ現はれる役者を待受けるやうな氣持で、道の一方へをり／＼目を注いでゐたが、間もなく、傘を深く差した辰子が、違つた小徑の方の木蔭から現はれた。何時もの西洋髪も丹念に結つて、薄い夏コートの下には、この頃をり／＼見る青色のまじつた衣服（よし子が今年花見衣裳をつくる時、グリーンが流行るとか何とか云つて、年甲斐もなく慾しがつてゐた）を着けてゐるのが派手やかに目についた。往來の人がこの女に目を留めてゐるやうに、この時の民雄は思つて、側へ近づくのに氣が差した。
「こんなお天氣では來て下さらないか知らんと思つてゐましたの」と、辰子はその恰悧らしい目に感謝を浮べた。

「雨が降つてゐちや戸外でお話を承る譯には行かないし、困りましたね。其處へでも寄りますか」と、民雄は松本樓の方を顧みたが、

「人に聞かれるやうな所ぢや、私お話が出來ませんわ」

「ぢや困りましたね。まだ時刻が早いから食物屋へ入るのも變だし、第一僕は落着いて話の出來る家なんか知らないんですからね」

「それでは、私の懇意の家へ行つて下さらないでせうか」辰子は自分一人でかねて密會の所を定めてゐたのであつた。

「僕は何處でも構ひませんが、あなたはそれでいゝんですか」民雄は人に見られるのをいやがつてゐる辰子が、若い男を知人の家なんかへ連れて行かうとするのを怪んだが、辰子は案外平氣であつた。行先は去年の末まで元中家に雇はれて、昔彼女の乳母同樣にしてゐた老婢の家で、其家は元中家とあまり距つてはゐない同町內にあることを答へた。

民雄は日比谷から虎の門まで女に隨いて電車に乘つたが、電車の中の數分間、生まれて以來例のない奇怪不思議の感じに襲はれてゐた。幼時父に伴はれて銚子の濱へ行つてはじめて海を見た時やはじめて活動寫眞を見た時に感じたやうな不思議さを感じた。「世の中には思ひも染めぬことがあるものだ」と物珍らしげに向ひに腰掛けてゐる辰子の顏を見たり、他の乘客の顏を見たりした。

老婢は亭主が半身不隨の不自由な身體になつたゝめに元中家から暇を取つたので、息子はある商店に勤めて、出戾りの娘は遞信省の貯金課へ奉職してゐると、辰子は電車を下りてからその家へ着くまでの途すがら、民雄に話した。「老婢よりも老爺の方がもつと人がいゝんですよ」と云つた。

小奇麗な家であつた。辰子は先へ入つて行つたが、老婢が不在だつたので、老爺に一言斷はつて置いて、自分の家で

でもあるやうに、遠慮気なしに振舞つて、民雄を二階へ導いた。

「あなたが内所で僕に話さうとしてゐらつしやることは、一體どんなことなんです？」と、民雄は厭々しい口調で直ぐに訊ねた。最早昨日までのやうに、相手の女を冷淡に見てはゐられなくつてゐた。心が稍々焦立しくなつてゐた。

すると、辰子の顔は俄かに鬱陶しくなつた。半ばは見せかけるためでもあらうが、溜息を吐いて暫く默つてゐた。……民雄は女の大膽さを訝るとゝもに、自分も此家まで來た上は、女の求むるところが何であらうと、元中老人や自分の家の者に對して、最早平氣ではゐられないほどの責任が自分の肩にかゝつてゐることを感じない譯には行かなくなつた。

「村瀬君との結婚のことなんですか」と、民雄は訊ねて、女の答へをも待たないで、「今度の縁談はあなたのお父さんをはじめ皆さんが滿足してゐらつしやるんぢやありませんか。村瀬君は非常な秀才であるし、あなたとの結婚を非常に喜んでゐるんだし、圓滿に事が運んで、式の日取りもよう極つてるんぢやありませんか。あなたに異存のあるやうなことは、誰れからも聞かなかつたのですがね。妻(ワイフ)もそんな風なことは僕に云つてゐませんでしたよ」と、獨り極めの言葉を續けた。

「……私、近日元中の家を出ようかと思つてゐますの。……この頃になつて急に思立つたことぢやなくつて、長い間考へてゐたのですけれど、今度は考へてばかりゐて躊躇しちやゐられなくなつたのです。私はどうせあの家で一生を送られない女なのですから、父や母の命令通りに結婚する譯にはまゐりませんのですわ。……から申上げると、その譯を云へとあなたも仰有るでせうけど、それは少しの間待つて下さいまし。決して兩親が選んでくれる夫(をつと)を嫌つて逆ふんぢやありませんの」

「あなたのやうな幸福な境遇にゐて家出しようなんて、隨分突飛な考へぢやありませんか」と、民雄に動じないで冷かに

云つて、「あなたには實の兩親がないのだから、今の御兩親の家を離れたら、全くの孤立ぢやありませんか。十年も一緒にゐて實子以上に愛されてゐるあなたが、そんな考へを起しなさるのは變ですね。……それで、假りにあなたがそんな突飛な考へを實行なさるとして、僕が何か役に立つことがあるんですか」

「昨日うつかりあんなことをお願ひして、後で後悔いたしました。あなたに御迷惑を掛けちや、奥樣にも申譯がありませんから」

「そんなことはどうでもいゝから、あなたの望んでゐらつしやることを早く云つちやどうです。僕も約束を守つてあなたにお會ひしたのだから」

「……あなたが村瀨さんにお會ひなすつて、私のやうな者と結婚しちやあの方の爲めにならないと忠告して頂けないでせうか。私、人の妻として、夫を幸福に送らせる資格のない女なんです。それとも、村瀨さんの妻とする女はどうあらうとも構はない、元中家の財産が自由になりさへすれば滿足だと考へてゐらつしやるのなら、末永さんとでも御相談の上、私との結婚は一先づ中止して、行々養子にだけおなりなさるやうに話をおつけなさればいゝと思つてゐますの。父は村瀨さんを非常に信用してゐますから、私を離れてもあの方を相續者に迎へることに異存はないに極つてゐますわ」

「だつて、あなたのための養子ぢやありませんか」民雄は辰子の頼み事が、あまりに幼稚で詰らないのに張合ひが拔けて、微笑しながら、「妻としての資格があるとかないとか、何故そんな餘計な謙遜をするんです?。村瀨君も幸福な結婚だと思つてるんだから、友人のために祝してやりこそすれ、見合せろなんて、戯談にも云へた義理ぢやありませんよ」

「あなたも本氣でさう思つてゐらつしやるの?」辰子の怜悧さうな目が冷かに光つた。「私奥樣から不斷あなたのお心持を伺つて、能岡さんはかういふ方だと、自分一人で極めてゐたのですけれど、私の思違ひだつたのでせうかね」

「あれの云ふことなんか當てになりあ——ませんわ。何をお話ししたか知らないけれど」

「……あなただけは、外の人のやうに、一も二もなく結婚はお目出たいなんて私を煽てたりなさりやしないと思つてましたわ。……村瀬さんからはお手紙を二三度頂いたのですけれど、一度も御返事をしたことは御座いませんの。あなたからさう仰言つて下さいまし。あの方が眞心を籠めて私を思つて下すつても、私の方ではお受けすることが出來ないんですから」

「ぢや、僕が郵便代りにあなたのお使ひに立つんですね—」と、民雄は役目のあまりに詰らないのを苦笑しながら、「實は先日村瀬からも、あなたがどう思つてゐらつしやるか、よく聞いて呉れつて、僕が頼まれたんですよ。……結納まで濟んで、式の日取りも極つてゐるのに、兩方からそんなことを云ふのも可笑なものだが、あなた方の結婚に何の懸り合ひも持たない僕が、あなた方二人の間の使ひ役を言付かるのは不思議ですね」

「でも、あなたに懸り合ひが、まるで無いとは云へないかも知れませんわ」

「何故です？」民雄の心にはふと、先日からの捉まへどころのないやうな不快な思ひが湧いた。

「……それは私の口からは申上げられませんわ」辰子は相手の不快な思ひが顏に現れてゐるを見ると話を轉じた。「私、この老婢の家のやうな小さな家で、一人で暮して見たいと思つてゐますわ。女に生れて來たら夫を持つに極まつたもののやうに、父も母も極めてゐるんですから、私の方から何と云つて斷はらうにも斷はれないんです。どういふ人を夫にしたいと、自分に理想を有つてゐるのなら、こんな破目になるまでに、早く思つてることを云つて斷はることも出來たのでせうけれど、たゞ結婚はいやだといふばかりぢや、兩親の方で取上げて呉れませんの。世間の娘さんのやうに口先でさへ云つてるんだらうと思はれてゐますの。今のお父さんが丹誠して私を育てゝ下すつたのも、私に養子をして、老

後の安心をしたいと考へてゐたゝめでせうから、世間のどなたにお訊ねしても、無理はないと仰有るでせうけれど、私一人はそれが大變な無理なことに思はれてなりませんの。それで、あたりまへにしてゐちや免れる途がないんですから、式の日までに身を隱さうと決心してゐますの」

本當にそれほどの決心をしてゐるにしては、女の言葉の落着いてゐるのが、民雄の腑に落ちなかつたので、

「だけど、あなたがそんな非常な決心を持つてゐらつしやるのが、お父さんなんかは氣がつかないんですかね」

「私がひとり自分の居室へ入つて考へ事してゐれば、人の妻になる用意でも考へてるのだらうと父は思つてゐるやうですわ。儀式の着物だの帶だのと、傍で騷いでゐるのに、私の方で悅しさうな顏をしないのですけれど、それは不斷私が着物のことなんかは母まかせにして、自分の好みを口に出さないやうな女だからと、別に不思議には思つてゐないのでせう。……私は生みの親よりも今の兩親に大恩を受けてゐるんですから、心配を掛けちや濟まないのですけれど、そんな人情に惹かされて取返しのつかないことになつちや困りますわ。私はもうちやんと覺悟をしてゐますの。……それで、家を出るだけなら雜作はないのですけれど、私がゐなくなれば、後が大騷ぎで、警察に願つてでも行衛を搜索して、家へ連れ戻されるに極つてゐますから、そんなことにならないやうに、あなたに力を貸して頂きたいと思つてゐましたの。あなたの外には、私のこんな心持を理解して味方になつて下さる人は一人だつてある筈はないんですから」

「ぢや、私にどうしろと云ふんです？。」

「村瀨さんの方で破約をして下さらなければ、私斷然家を出ますから、その時置手紙をして、萬事を民雄さんにおまかせしてあると書いときたいんですが、あなたはさういふことを許して下さるでせうか。今の家へ連戻されさへしなければ、どんな惡名を負つても厭はないつもりですの」

「これぢや僕が迷惑しますよ。それに僕が何と云つたところで、あなたのお家であなたを打遣つときやすまいし、こんな遺手紙をしても何の効もありませんよ。……あなたも人騒しの夢見たいな話は止して、財産家と幸福な結婚をして、僕なんかに、新婚の楽しい生活振りを見せて下すつちやどうです？」

「あなたさへ私の申上げることを戯談にしておしまひなさるんですもの、外の人が真面目で聞いて呉れる筈がありませんわ。……ぢや、この話はもうおしまひにいたしませう。わざ〳〵こんな家まで來て頂いて、詰らないことをお聞せして申譯が御座いません」

辰子はさう云つて謝まつて、お茶を入れに階下へ行つた。民雄は一人になると、狐に抓まれたやうな氣持で周圍を見廻した。階下では老婢が歸つて來たのか、笑ひのまじつた話がはじまつてゐた。辰子の聲は快活であつた。

時刻も遅くなつたし、それに、こんな變つたことに出會つた後の編輯所勤めは、如何にも大儀になつて來たので、民雄は一日勤めを休むことにした。しかし、此家で悶々してゐたつて興もないし、辰子の異様な企てに關り合ひをつけられるのも煩はしかつたので、兎に角この家には早く暇を告げることにして、帽子を手にして階子段を下りかけると、その氣色に氣づいたのか、老婢が慌たゞしく近寄つて、遮り留めるやうに前に立つた。民雄にも見覚えのある老婢であつた。

「あなた様には私からも是非聞いて頂きたいことが御座いますから、もう少しの間お二階にゐらしつて下さいまし」と歎願されて、民雄は元の座へ押戻された。

「辰子さんは此家へよく遊びに入らつしやるんですかね」と云つて、彼れは金壺眼の老婢から、氣持のいゝ話が聞かれようとは豫期しなかつた。

「いゝえ、お孃樣は先日來から二三度入しつたばかりなんで御座いますよ。それもお宅の方やお知合ひの方には秘密にして呉れとお口留めになつて居るので御座いますが、あなた樣にだけは何事も隱立てしないでいゝと、只今お孃樣からお許しが出ましたから、それで、御迷惑でも聞いて頂かうと思つたので御座います」

「結婚のことですか。辰子さんが結婚を嫌つてゐられるのはどういふ譯なのか、あなたは知つてゐるんだらう」—

「いゝえ、それは存じませんですけれど、この御結婚を御兩親がお諦めなさるやうに、髮を剃つてしまいたいから、鋏や剃つてお呉れなんて、先日も仰有るんで御座いますよ。はじめは御戲談だかと思つてゐましたら、どうして、本氣で思詰めて云つてゐらつしやるんですから、吃驚いたしました。そんな恐ろしい事を仰有るくせに、不斷と御樣子がちつとも變らないのですから、安心してゐたのですが、よく承ると、御自分がお婿さんを取ると、生命に障ると平氣で仰有るんで御座いますよ。……男に觸れて惡い病氣になるつてことが本當にあるもので御座いませうか。私も心配でなりませんから、知合ひのお醫者さんに伺ひますと、そんな馬鹿なことがあるもんぢやないと、お醫者さんは云つてゐますのですが」

「そりやお醫者さんの云ふ通りだらう。辰子さんは身體がさう弱いやうでもないからね。男と女の一緒になるのは世間普通のことなんだから」

民雄は事もなげにさう答へたが、ふと今まで思ひもつかなかつたことを思出して胸騷ぎをさせた。……それは癩病の素質を有つてゐる男女が異性に接すると、病を發するといふ話を、生理上の事實だか、俗間の迷信だか知らぬが、聞いたことのあるのを思出したのだつた。すると、十年の前の辰子の實父の不慮の死樣に、心が馳せた。

「老婢さんは辰子さんのお父さんが亡くなられた時のことを知つてるんでせう」と、階下にゐる辰子の方を氣にしなが

ら、低い聲で訊いた。

「え丶/\、それはよく存じて居りますとも。あの旦那樣は御運の惡い方で御座いました。もつと生きてゐらつしやれば、今の大旦那樣の片腕にもおなりなされて、御出世をなすつたのに。さうでしたら、お孃樣は申すに及ばず、私どもまでもどれほど仕合せでしたか分らなかつたので御座いますよ。……でも、お孃樣には親御樣のことは一口も申上げないやうに、大旦那樣の御注意もあつて、氣を付けてゐるので御座いますけれど、お孃樣のお顏を見ると、時々昔の事が思出されて、ひとりでに涙がこぼれたりするので御座いますよ」

「鎌倉で泳ぎをしてる中に溺死しなすつたんだね。」

「あの時は、旦那樣御夫婦とお孃樣に、私たち親子がお伴してゐたので御座いますよ」老婢は久振りに當時を思出して、その時は自分の亭主が人並の働きの出來ない能無しであつても、身體だけは丈夫で、主人一家の避暑中は本宅の留守番をしてゐたことや、辰子が婿を取る時分には、お前の娘をもい丶家へ緣付かせるやうに世話をしてやると、主人夫婦に云はれてゐたことなど、相手かまはずの問はず語りをはじめた。

「お亡くなりになつた旦那樣は、大旦那樣とは御兄弟であつても、御氣質が餘程違つてゐらつしやいましたよ。私どもには涙のこぼれるほどお柔しかつたので御座いますけれど、御交際ぎらひで、お亡くなりなさる頃は、人樣にお會ひになることを大變煩がつてゐらつしやいました。」

「さうかねえ」

民雄は淡白に應へた。溺死の模樣やその前後の事を立入つて訊ねたくもあつたが、自分の想像してゐるやうな忌はしいことが確かめられて行くのが恐ろしさに、話を轉じて、「しかし、僕が辰子さんの御結婚のことについて口出しする譯

には行かないから、今日承つたことは一切聞流しときますよ。無論誰れにも話しやしない。老婢さんがお嬢さんに勸めて無事に首尾よく結婚の出來るやうにするんですね」と云つて、直ぐに座を立たうとしたが、老婢はなほ引留めて、

「お嬢樣はあなた樣お一人を手頼りにしてゐらつしやるんですから、御納得の行くやうに御意見なすつて下さいまし。私どもがいくら申上げたつて、お聞入れなさらないんで御座いますから」

老婢が民雄と辰子とがこれまで特別に懇意ででもあつたやうに誤信して話掛けるのに、民雄は當惑してゐたが、そこへ、辰子は茶を入れて有合せの駄菓子を添へて自分で運んで來た。

「老婢は何をお話しゝてゐたの？」と、辰子はまるで自分に關はつたことではないやうな口吻で訊ねた。

「老婢の愚痴を聞いて頂いてゐるので御座います」

「だつて老婢は仕合せぢやないの？ 老爺が病氣でも親子仲がよくつて、この先にはいゝ事が待つてゐるんですもの……

……老爺と話してゐるとそりや面白いのよ。若しも極樂があの世にあつたなら、老爺のやうな人が一番に極樂へ行くんだわね。生きてゐる間に手足の自由が利かなくつて人並の面白いことが出來なくつても、あの世へ行つてから面白い目が見られるんだから仕合せだと私が云ふと、若い時分からあんまり懶け過ぎたから、罰が當つてこんな身體になつたのだ。あの世の極樂よりもこの世で、も一度丈夫になつて勢一杯働いて見たいと、老爺は云つてゐるのよ」

「働いて呉れなくつても、生きてゐて呉れさへすればよろしんで御座いますよ。くやんでも役に立たないことをくやむのは馬鹿で御座いますわね」

「私、老爺の介抱をして上げたいと思つてよ。一年でも二年でも病人の介抱をして暮すことが、私には出來るやうに思はれてよ」

「勿體ない。そんなことを老爺に見せると、泣出しますでせうよ。お見舞ひを頂くたんびに拝んで頂いてゐるんで御座いますから」

「いやねえ、……」辰子は眉を顰めた。

そこへ、格子戸が開いて男の聲がした。老婢は帳場に答へて下りて行つたが、辰子は氣遣はしさうに耳を澄してゐた。

「私の家から誰れか來たのぢやなくつて？」と、やがて上つて來た老婢に訊ねると、

「水村さんでした。奥樣が私に御用があるならお晝過ぎに來て見れと云つてゐました。この頃ちつともお伺ひしないから、奥樣も變に思つてゐらつしやるかも知れませんね」

「行つて見といでな。いろ〳〵な衣服や道具が出來て來てるよ」

辰子は自分のために調へられた結婚用の衣服調度を、さも他人の所有のやうに話しだした。そして、老婢は婚期になつてゐる自分の娘の上に思及んで、話に聞いただけでも、それ等の品物が其處に並んでゐるやうに羨望の目を光らせてゐたが、民雄は貪慾な老女の目差しと冷かな處女の目差しとを見比べながら、二人の話をむしろ氣味の悪い思ひをして聞いてゐた。飽くまで結婚を拒絶しようといふのが本當なら、こんな氣樂な話をしてゐられる筈はないのにと思ひながら、自分一人は默つて聞いてゐた。

「とに角僕はお暇しませう。……今日あなたにお目に掛つたことは、無論家の者には秘密にしときますよ」

民雄は出し抜けに立上つて、二人の手から逃出さうとするやうに、後をも見ずに階下へ下りた。辰子に見送られたが、ろく〳〵に挨拶もしないで表へ出た。雨は稍々強く降出した。事務所を休むことにしても家へ歸る譯には行かないし、差當

つて日暮れまでの長い時間を過すべきところが思當らないので、琴平から銀座通りへかけて、雨の中をいたづらに歩いてゐた。そして、辨當は橋の上から溜水の中へ抛り棄てゝ、近所の洋食屋へ入つて、晝午餐の食卓に就いた。

が、かうして一日を勝手に休んでゐることが、些とも愉快ではなかつた。……今まで行つてゐた老婢の家の二階ででも、美しい女と戀語りをしてゐたのなら、よし子に隱れてゐる今の境涯では異つた興が起つたかも知れないが、相手が辰子では仕方がなかつた。

彼れは食事が終つてからも、長い間ぢつとしてゐた。そして、騒がしい電車通りに降灑ぐ雨をガラス越しに眺めながら、アスプを胸に匐はせたクレオパトラの姿を思浮べたりしてゐた。

（五）

平生より早目に家へ歸つたが、當てもなく方々に歩いた後だつたので、衣服は雨に濡れ泥に汚れてゐた。汚れた衣服の仕末をしてゐるよし子に向つて、「お母さんは？」と訊くと、

「急に思立つて田原町へ入しつたんです、久振りで御休みをなさるんでせう」

「お母さんのお出は珍しいね。おや、お前一人でピツソリしてゐてよかつたらう」

民雄は衣服を着替えて、廣々としてゐる疊の上へ疲れた足を伸して、腑に落ちない今日の事を思出してゐたが、すると、暫くして、

「今日もあなたは出勤してゐらしつたの？」と、よし子に訊かれたので、不意にドキマキしながら、

「あゝ。」……と曖昧に答へた。

「變だわね。村瀬さんに電話を掛けたら、今日はお出でがないつていふ返事だつたのですつて」

「村瀬が家へ來たのかい」

「えゝ。……お母さんかあなたか、何方かゞ歸つて來さうなものだつて、さつきまで待つてゐましたよ」

「そしてどんな話をしてゐた？」

民雄は村瀬の影をそこに見つけようとするやうに左右を見廻した。他に誰れもゐないところで村瀬とよし子とが對坐してゐる樣を想像するのは不快であつた。

「別段異つた話はしてゐませんでしたよ。今夜にもまた入つしやるんでせう」よし子は事もなげに云つて、「それよりもあなたは何處へ行つてゐなすつたの？。この頃毎日出勤してゐたんですかねえ」

「極つてるさ」

「どうだか……」よし子はむしろ冷かすやうに云つた。

「おれを疑つてるのかい。おれが勤めに行く振りをして毎日遊んでるとでも思つてゐるのか」

「あなたが今の職務に厭いて、外で遊んでいらしつたからつて何とも思やしませんよ。私はあなたが現狀に滿足なさらないやうになるのを、むしろ望んでゐますの」

「おれには遊びに行くところなんかありやしない。それにおれは今の仕事を嫌つてゐやしないよ。親爺の望んでるやうに元中さんの下に使はれたりするよりや、まだしも今の仕事の方がましだと思つてゐるのだ」

「あなたが元中さんの下に使はれることを望んでゐらつしやるんですつて。私、呆れちやつた。お父さんはそんなことしてまで財産を殖やさうと思つてゐらつしやるのね」

「さういふ譯でもないさ」

「でも、お父さんの望んでゐさうなことですからね。……あなたが元中さんの下に使はれゝば、自然村瀨さんにも頭が上らないやうになるのよ」

「なにを馬鹿な」民雄は投早妻が思ふがまゝにまかせて置いて、自分から辯解する氣はなかつたので、「今日村瀨に元氣のいゝ顔をしとつたかい」と話を轉じた。

「結婚前だから元氣がいゝんでせう。式の準備のことなんか何だか面白さうに話してゐましたよ」

「お前は羨ましかつたらう」

民雄は自分で意識しないながらも、その言葉は厭味や皮肉な調子をもつてゐたのであつた。少くもよし子の耳にはさう響いたのであつた。村瀨との話によつて派手な生々した、今の世が女に與へて呉れる趣味のある生活を、全身の血が湧きたつほどに力強く羨望させられた後だつたので、腑甲斐ない夫の厭味らしい言葉に、いぢ／＼するやうな反感を起して、

「私が羨ましがつてるんですつて」と、目を尖らせて、「私、そんなさもしい根性を持つてやしません。辰子さんなんぞを羨まなくつても、私には私の道があるんですからね」

「おれはさう云ふ譯で云つたんぢやないが、お前にはどんな道があるんだい。お前がどんな道へ進んで行くのだか、實行しなきやちつとも分らないぢやないか」、

「私の實行をあなたは望んでゐらつしやるの？。……時機が來さへすれば、あなたにも分るやうになりますよ」

「さうかねえ。しかし、おれにはさういふ時機が待遠しいよ。……おれや兩親に不服があるんなら、ハツキリさう云つたらいゝぢやないか。おれは放蕩をするぢやなし、女房を虐待するのでもないし、今以上にどういふ風に扱つて呉れと

云つたつて、おれにはどうしようもないんだがね。民子さんの画をいくら美術にかけたつて商賣にすることが出來ないやうに、いくら金をかけたからつて、おれといふ人間の性分は變りやすまいよ」

民子の美術が可笑かつたので、興奮してゐたよし子も思はず笑ひを洩らした。「一家の者を虐待しないで、凍えも饑えもさせなければ、それで主人の義務が充分に果せてるやうにあなたも思つてゐらつしやるのね。お父さんのお考へがさうだから、あなたもそれに化れてゐるのよ。あなたは三十近くにもなつてゐながら、何故何時までもお父さんに化れてゐるんです？。あなたのお友達の様子を見ても、雜誌の記事を讀んだゞけでも、こんな沒趣味な生活に堪へられないやうになりさうなものだと、私には思はれてゐるんですけど。……あなたの決心次第で、お金の番人見たいな老けた日を送つて行かなくつて、いくらでも意義のある生活を立てる方法があるのに、あなたはちつとも氣がつかないんですかね」

「そんなことを親爺にでも云つたら驚くだらう。親爺は雜誌や新聞の論説なんかは半可通な寢言見たいに思つてゐるんだよ。おれだつてさう思つてる方なんだから親爺を笑ふことは出來ないがね。……おれの世になれば、家にある金なら費つたつていゝと思つてるが、しかしそれは何時の事だか分らないし、第一金の力でどういふ面白いことが出來て來るんだい」

「金、金と、お父さんの口眞似をしてゐなさるけれど、私はお金の事を第一に云つてるんぢやありませんよ。……そりやお金も大事だけれど、私食客のやうにされたかないの」

「親爺や母親はお前を後嗣者の女房として大切に取扱つてるやうだがね」

民雄は眞面目によし子の言葉を考へた。彼自身妻に對して飽足らない思ひをしてゐながらも、妻の方で飽足らない思ひをしてゐるのが變に思はれて、不平面をされるのが忌々しかつた。……相手が自分をどう思つて、どこに不滿をもつ

てブス〳〵燻つてゐるのかと、二人は互ひに盲目捜しに捜し合つてゐたが、民雄はよし子の胸には以前から村瀬のやうな男が宿つてゐるのに、薄々勘付かないではゐられなかつた。村瀬が訪ねて來た後で、あるひは彼れについての話が出るたびに、屹度よし子がいら〳〵した氣持になつて、今の生活に滿足してゐられないやうな氣振りを見せるのに思當らないではゐられなかつた。で、

「お前はお前で好きなやうにやつて見るんだね。おれは親爺の子だから、お前の望んでゐるやうな人間にやなれないよ。世間の人の夫婦關係はおれ達のやうぢやないとすると、お前は勝手にどうかするといゝんだね。おれを突いて見たつて効はないんだから」と、諦氣を含んだ口調で云つた。

が、よし子は笑ひを洩らして、「あなたも損な性分ね。誰れか他にあなたのお氣に入つた女が出來たといふ譯でもないのに、私との仲をこと更氣まづくしよう〳〵としてゐるんですもの。私の口からは何も云へないけれど、あなたはその氣になりさへすれば、お父さんに強請んで御自分の望みをかなへることが出來るんぢやありませんか。私があなたの傍を離れたつて、あなたの身に新しい幸福な事が附いて來りやしないのよ。運の廻り合はせで、妻と夫とになつちやつたんだから、お互ひに若い時の樂みを樂まなきや、生れて來た甲斐がないと思はれてよ。お互ひに愚圖々々してる中に直きに歳を取つてしまふんですからね。お互ひにまだ若いつて云ふ有難さを、あなたは感じてゐらつしやらないから張合がない。元中さんのことを考へて御覽なさい、いくら成金になつても詰らないぢやないの。今にあなただつてあんなに白髪になつたり皺が出來たりする時が來るんですよ。……齷齪汗水垂らして稼がなければ御飯の頂けない身分ぢやなし、ちとむさい生活をするに及ばないと私思ふわ。編輯所の事業だつて隨分ちとむさいぢやないの。あなたの學問とお父さんの地位とを利用すれば、世間に出てもつと幅の利く職業がありさうに思はれるんですけど、私の考へが間違つ

てるのか知らん」

悄になくツケ〳〵と思つてゐることを述立てるよし子の顔を、民雄は呆氣に取られて見上げたが、その顔は晴々して[illegible]肌艶も不斷よりは輝いてゐた。

「おれのやうな者に適したことで、もつと面白い職業や樂みがあるんなら、やつて見てもいゝがね。しかし、おれには些つと見つからないよ。……先日も〈こなひだ〉お前の留守中に、當分獨りで下宿住ひをしたいと云て、お母さんに叱られちやつたよ」

「下宿住ひなんて詰らない思付きね。だけど、あなたが今のやうな生活に堪へられなくなりだしたから、戯談にでもそんなことを口に出すやうになつたのよ。私、あなたのために喜んでよ。……元中さんは大磯に別莊を持つてゐらつしやるから、今年の夏も避暑に入つしやるんだわね」

「新婚旅行が大磯だらうつて云ふのかい。おれ達だつて避暑くらゐに行けなかないよ。親爺がおれに勸めてゐた」

「へゝ。お父さんが。お父さんもあなたゞけは可愛いゝのね。……ぢや、今年の夏は思切つて避暑にいらつしやることにしちやどう？。……成べく大磯にするといゝわ。遊び相手があつていゝでせう」よし子は自分も一緒に行けるやうな口吻で調子づいた。

「だけど、村瀬の新婚旅行はどうなるか分つたもんぢやない。今にお前が驚くやうなことが出來て來るかも知れんよ。何だか夢見たいな事だから迂濶に話す譯には行かないがね」と、民雄は思はせ振りの口を利いて、「しかし、村瀬がどうだらうと、お前が避暑に行きたいと云ふのなら行くやうにしてもいゝよ」

「さうだと有難いわ」と、よし子は避暑といふ言葉だけで、もう醉つたやうに、胸の中に燻ぶつてゐた不穩な思ひなど

一時忘れてしまつたやうな晴々した顔して、「お父さんを強請つてでも是非出掛けることにしませうよ。あなたの健康のためにもいゝのよ」

「おれの身體は傍の者の思つてるほどに不健康ぢやないよ。不健康だからお前がよく云つてるやうないろんな快樂を味ふ氣になれんのぢやない。……それは兎に角、避暑旅行くらゐがそれほどにお前の樂みになるのなら、無論實行したつていゝよ。雜作もないことなんだから」

民雄は穏かに云つたが、避暑の望みのかなつたくらゐで心を和らげるよし子の淺薄さをふと笑ひたくなつた。「おれは東京を離れて何處の海へも山へも遊びに行きたいつて云ふ氣になつたことはなかつたが、お前は妙だね。夏になると世間の人が何處かしら田舍の方へ出掛けて行くから、お前も羨ましいんかい。しかし、辰子さんなんかは多分大磯へは行きやすまい」と、再びよし子の注意を呼ぶと。

「どうしてあなたはそれを知つてゐらつしやるの？」と、よし子は訊返した。この頃になく夫に對する親しみが感ぜられたので、「村瀬さんは今度の緣談が破約になるやうだつたら、何をするか分らなかつたと云つてゐましたよ。ぢや辰子さんに嫌はれたら自殺でもなさるつもりだつたのと揶揄ふと、おめ／＼自殺なんかはしない、もつと思切つたことをして見せると眞劍で云つてゐましたよ。本氣でさう云つてる村瀬さんの顔を見てゐると、辰子さんの事が破談になつて、村瀬さんが思切つたことをするのを私見たいやうな氣がしてよ。人間は時によつて意地の悪いことが考へられるのね。だけど、さういふ場合になつたら村瀬さんがどんなことをするか、私見たくつてならないのよ。あの人のことだから、屹度私達の意表に出るやうなことをするだらうと思はれるわ。あなたはさう思はなくつて？」

「さうかも知れないね」

民雄は口では斯く應へながら、良子の言葉を思出してゐた。そして、自分に釣り合ひのつきさうなのに、結婚事件について彼等に意表に出られたりするのが望ましくはなかつた。

「でも、變つた事は起らなくつて、近日お目出たい式があるんでせうから、私だちからもお祝ひをして上げなければならないわね」

「他人の結婚のお祝ひよりも自分のことが大事ぢやないか」民雄は一時柔らいでゐるよし子の心を逆撫ですやうに冷かに云つた。村瀬から受けてゐる刺戟が今もよし子の顏に漂つてゐるのを見詰めてゐるやうな氣持で、「かういふ時にすべて云つちまつてもいゝが、お前はおれから何を求めたつて駄目だぜ。假りに村瀬を立派な男子の例として比較を取つて見ても、おれには一つとして優つてゐるところはないんだからね。お前がおれの氣に入つてゐるかゐないかは別として、お前が我慢して此家にゐて呉れるのが、おれには苦しくつて仕樣がないんだ。人の女房といふものは舅や姑の命令通りに家の仕事をして、子供が生まれりや子供の世話をして、時々流行の衣服でも拵へて、をり〳〵の物見遊山にでも行けば、それで充分生きてゐられるんだと思つてゐたのだが、お前だけはさうでないのが不思議だ」

「眞面目でそんなことを云つてゐらつしやるの？」よし子はせゝら笑ふやうに云つた。

「それ以外に人の妻として幸福な暮し方があるのかい。お前は雜誌なんかを讀んで、よく何か云つてゐるが、いくら力んで見たつて格別異つたことつて無いやうに思はれるんだがね。男なら、女房以外の女を相手にして遊んでゐる人もあるが、それにしたつて、大して異つた生活法とは思はれない。しかし、女にはおれのやうな男には窺ひ知れないやうな不思議な幸福があるのかい。あるのなら一つ腑に落ちるやうに聞かせて貰ひたいものだね。……どうも女といふ奴、おれのやうな男には合點の行かない考へを持つてゐるやうに、今日はある事からおれは深く感じてゐるのだ。お前がどんな

事を云はうとも、怒りもしなければ、兩親はじめ誰れにも決して洩らしやしない。おれは人間は男でも女でも、死ぬる時期が來るまでの間のつなぎとして生きてゐるとしかと思つてゐないのだが、お前は女としてどんな非凡な不思議な幸福を胸の中に隱して持つてゐるのか、本當のところを是非聽かせて貰ひたいよ。そして、成ほどとおれにも合點が行つたら、どんな障礙でも排斥して、おれの身體を投出してお前に隨いて行つてもいゝのだ」

民雄が眞顏でさう云ふのが、よし子には可笑かつた。

「どんな妨げでも退けて私に隨いて來ると仰有るの？」と、わざと呆れたやうに云つて、「お互ひの幸福と云つて、間に變つたことはないわ。あなたがその氣になりさへすれば、直ぐにも得られるぢやありませんか」

「謎見たいなことを云つたつて駄目だね」

民雄はよし子の方から目を離して、仰向けに寢ころんだ。結婚を頑くなに拒まうとしてゐる辰子の心持が、理屈を棄てて次第に吞込めるやうに思はれだした。傍にゐて夫を揺り動かしてゐるよし子の胸の中よりも、辰子の云つてゐることがまだしも彼れの心に觸れるやうな氣がした。

よし子は母親の歸りの手間取るのを望みながら、茶を入れて、貰ひ物の西洋菓子を持出したりした。空はます〱鬱陶しくなつて家の中は早くから薄暗くなつた。

（六）

避暑にでも行かれる望みがなければ、日々こんな生活を續けてゐる張合ひがないやうな口吻を洩らして、しかも、夫がどう手酷いことを云はうとも、自分を離れて生きて行けやう筈はないといふ思上つた心持さへ微見かしてゐたよし子は、ふと足駄の音がして門の戸が開くとゝもに、不斷の我れに返つて座を立つた。

が、玄關へ出迎へに出て見ると、入つて來たのは、思ひがけのない元中家の書生であつた。

「私の家のお孃樣は此家へお出でになつてゐませんでせうか」と、出し拔けに訊ねられて、

「いゝえ、いらつしやいませんですよ。どうかなすつたんですか」と、よし子は水村の目付でたゞ事でないことを察した。書齋を開きつけて、民雄も玄關先へ顏を出した。

「今朝長沼さんのお宅へ入つしやると云つてお出掛けになつたきり、まだお歸りにならないんです」

「お友達の家へでもお寄りになつてゐるんぢやないでせうか」

「長沼さんではお孃樣は今日はお出でにならなかつたといふ御返事なんです。何時もは俥で入らつしやるのに、今日に限つて歩いてお出掛けになつたんですから」

「變ですね。不斷と異つてお大事な場合ですから、皆樣が心配してゐらつしやるでせう。……でも、間違ひのある譯はありませんよ。房子さんは氣紛れだから、何處かへ寄つて遊んでゐらつしやるんでせう。今にお歸りになりますよ」

よし子は自分が夢のやうに待設けてゐた意外な障りが房子の結婚について起つたのか知らんと、胸を轟かせながら、多少自分に關はりがあるやうに、空恐ろしい思ひをしてゐた。

「お宅へ來て入らつしやらないとすると、外に心當りが御座いませんか」と云つて、水村は訊ねられても内輪の事などは口へ出さないで暇を告げた。

どうしたのかと、二人は互ひに氣遣はしげな口を利きながら、まだ電氣の點かない薄暗い茶の間へ戻つた。そして、お互ひに不安な色を顏に浮べながら暫く默つてゐたが、さうしてゐる間に、よし子の恐怖の念は自ら薄らいだ。

「房子さんもいやに人騷がせする人ね。お友達の家へでも遊びに行つてるのよ」と云つて、目出たい結婚前に何の波瀾

もあらう筈はないと、ひとり極めにきめるとゝもに、稍々物足らないやうな氣持がした。

民雄はよし子に關はらずに沈默を續けてゐたが、そこへ、父親と母親とが前後して歸つて來た。昆子の事はよし子の口から簡單に語られて、一しきりその話で座が賑はつた。座が賑はつたと云つても、枝葉にわたつていろ／＼とその話を進めるのは兩親の間だけで、民雄やよし子はあまり口出しをしないで、めい／＼の思ひに耽つてゐた。

「田原町ぢやこの頃景氣がいゝと見えて、皆んなして大きなことを云つてゐますよ。達也を腦病の保養にやるのに、宿屋ぢや氣儘が出來ないから、箱根へ一軒別莊を借りて、老婢でも附けてやることにしたなんて云つてゐましたよ。民雄も行く氣があるのなら、一緒に行くことにしたらどうだらうつて、おくにさんが勸めてゐなすつたけど、それは一先づお斷はりにしときましたー」と、母親は自分の一人息子を從弟のお伴にするのをいやがつて、田原町に對して反感を抱してゐた。

「田原町でも次男は謹直で學問の出來がいゝと喜んでると病氣に罹つたりして、なか／＼世の中は思ふやうに行かんものぢや。彼家(そこ)もこの頃少しいゝ運が向いたと思つて、あまりお調子に乘ると、どかつと酷い目に會はんとも限らない。わしが不斷云つてる通り、人間は家運がよくなりかけた時に、一層締くゝりをしてかゝらなければならんのぢや。元中だつてこれまで運勢がよ過ぎたから、何かで不吉な事が湧いて出ないとは云へまい。わしは他所の家の事を聞くたんびに自分の身も少し注意せんといかんと思はれてならんぢや」

「何處の家だつて當りまへにしてゐさへすれば運も不運もないんでせうよ。元中さんにしても、御養子の撰び方が少し突飛だつたもんだから、差障りが出來て來るのも當然なのかも知れませんね。村瀬さんは身持から云つても無難な人ぢやないから、昆子さんの氣に入らないんですよ」

よし子は、父親にこの目標めくゝりのある生活を全うされて居るものぢやないと思ひながら、兩親の話を聞かされてゐたが、民子の家庭が本當なら、自分も意見を極めなければならないと、何處からか唆かされてゐるやうに感じてゐた。床に背を凭らせて呆然としてゐる夫の顔ををり／＼顧みても、この顔には彼女に樂しい空想を起させるほどの力を有つてゐなかつた。

時刻が來たので、母親が淺草から買つて來た薩摩揚げや竹輪を種にして、手輕に夕餐の仕度がされた。久振りに外出した母親が途中で見聞したことなどを重な話題として、四人は食卓を圍んで、水入らずの睦まじさうに箸を執つてゐたが、食事が濟むと、民雄は友人の訪問に假托けて、家を出た。

「變な話のある時だから、今夜は村瀨さんの所へは行かない方がいゝだらう」と、出掛けに母親に注意された。

民雄は無論村瀨に會はうと思つてはゐなかつた。むしろ先方から訪ねて來さうなのをよし子から聞いて、ひそかに恐れてゐたくらゐであつた。

彼れの足は自から琴平の方へ向つた。電車の中でゞも、電車を下りて例の老婢の家へ近づくまでにも、彼はいく度も民子かと見ちがへるやうな女を見つけた。家の前まで來ると、傘を傾けて暫く足を留めて耳を澄ましてゐたが、家の中では何の變りもないやうな話聲がしてゐた。

民雄は靜かに格子戸を開けて、つとめて平氣を裝つて聲を掛けた。が、彼れが閾を跨ぐとともに、家の中の話聲はパツタリ止んだ。「ハイ」と返事をしながら、暫らく誰れも出て來なかつた。やゝあつて出て來たのは、老婢の娘らしい若い女だつたので、「お母さんはゐますか」と訊くと、「今ゐませんです」と無愛想に答へて、客の顔を迂散くさい目付で見詰めながら、「何な御用で御座いますか」と訊返した。

「元中さんのお孃さんのことでお尋ねしようと思つてるんですが……」

「私どもではお孃樣のことはちつとも存じませんです」

膠もなくさう云はれると、民雄はわざ〳〵辰子の事を訊きに此家まで來たことを氣耻かしく思ひながら、急いで外へ出た。……辰子がどうならうと、おれに係り合のあることぢやないと、冷然としてゐようとしたが、村瀨と彼女との結婚の事ははじめから自分に何等かの禍殃を負はせようとしてゐると感ぜられてならなかつた。村瀨の妻定めや辰子の婿撰みが、よし子をいら〳〵させてゐることも夕方の雜談の中にます〳〵察せられてゐた。

このまゝ家へ歸つても、若しも村瀨に訪ねて來られたら面倒であるし、母や妻から辰子について話しかけられるのも煩いし、自分一人で誰れにも累はされないで、空虛な夢を見てゐられるところが、東京の何處かにないものかと、自分を棄てゝ儕かない人間の寄りかたまつてゐる家庭を、今夜はことに厭ひながら、雨の中をノロ〳〵歩いてゐたが、すると、後から來て擦れ違ひさま此方を顧みたのは、老婢であつた。今歸つて來て娘に聞いたから急いで呼びに來たと云ふのがいかにも空々しかつた。

「僕は別段用事がある譯ぢやないんです」と、民雄はわざと後戻りを躊躇したゐたが、豎間珍らしい思ひをして見てゐた老婢の家の質素な二階にでも、一人で横たはつてゐたらいゝやうに思はれたので、頻りに勸められるのを幸ひに、老婢に隨いて歩きだした。

「お孃樣は私どもの家にゐらつしやるんで御座いますよ」と、老婢は自分の家の前まで來てから云つた。

民雄はボンヤリ豫期してゐたことだつたが、さう云はれると、足が竦むやうな氣がした。この窪んだ目の底光りのしてゐる老婢の惡計が辰子を動かしていろ〳〵なことをさせてゐるといふ疑ひが咄嗟に起つたが、そんな風は見せないで

軽く聞流して入つて行つた。階子段を上るにも、異様な事を待受けるやうな氣持で耳も目も鋭くなつた。階下の座敷は先つきとは違つて寂として話聲が一つ聞えて來なかつた。

二階は晝間のまゝで、目新らしい物の一つもそこに置かれてはなかつた。民雄は丸中家の騒ぎを想像しながら、ホヤが焼けて光の薄い電燈に目を向けて、階子段の足音を待遠しく思つてゐた。

晝間と同じ派手な衣服を着けてゐる辰子の顔付が晝間と異つたところのないのが、民雄を驚かせた。晝間はまだしも微目かしてゐた心の動搖の現はれさへ、今は全く消えてゐるのが、却つて民雄に恐怖の感じをさへ起させた。思はず居住いを直して、

「あれからずつと此家にゐたんですか」と訊くと、

「えゝ、この後の方針を獨りでいろ〳〵考へてゐる中に、自然と時間が立ちましたの。私の家からお宅へ使ひがまゐりましたのでせうね。先つき老婢に頼んで、家へ電話を掛けさせて、今夜九時までには必ず歸るから心配をしないでゐて呉れと知らせときましたから、あなたも御安心なすつて下さいね。決してあなたに御迷惑を掛けやしません。………どうせ父や母が打遣つといて呉れゝうぢやありませんから、一先づあの家へ歸つて行きますわ」

「それは結構ですけれど、何のために人騒がせをするんです?。村瀬の外にあなたの思つてる人があるのなら兎に角……」

民雄がまだ云はうとしてゐる言葉を、辰子は慌てゝ遮つて、「私も人間の一人として生れたのですから男戀しいと思つたことがあつたかも知れません。だけど、何方を戀しいと思つたことは一度も御座いませんわ。そんなことは嘘だとお思ひなさるかも知れませんけれど、結婚だけはどうしても怖いんですの。………西の両親に死別れた時に、今の父に

引取られて育てられさへしなければ、孤兒になつて貧乏な無慘な思ひをして來たでせうけれど、それでも、後繼者にされて無理強いの結婚をさせられないだけでも幸福たつたらうと思はれますわ。村瀬さんにしても、私のやうな醜い女をお嫁にしなくつても、世間には美しい女の人がいくらもあるぢやありませんかね。あなたから村瀬さんによく云つて下さらなければ、私一人で抵抗しなければなりませんわ……父の機嫌を害ねて家を追出されるやうなことがあつたら、この先どうするか、自分でもちやんと覺悟を極めて居りますわ。こんな衣服を脱がせられて乞食の着てゐるやうな襤褸を着せられて門の外へ突出されたつて構ひませんの。金持のお嬢樣でピアノを習つたりいろ〳〵な教育を受けて來たのも、私には餘計なことだつたのですもの」

「あなたの仰有ることは僕には分らない」

民雄はこんなことを云つてゐる處女も、一旦男を知つたなら、人一倍惡どい執着を感じだすのぢやあるまいかと思はれたが、しかしよし子の話よりもいゝ氣持に聞かれた。人並外れて耳の小さな、年齢よりも著く老けてゐる辰子の顏立も、よし子などの肌に有つてゐる惡汁が抜けてゐるやうに今は思はれて、これまでほど醜くは思はれなくなつた。世間嵌めてゐた指環の一つが辰子の指から失せてゐるのにも氣がついた。

「私は今朝あなたにお會ひしたことを奥樣は御存じぢやないんでせうね」と訊かれると、民雄は、

「あれには何も知らせてやしないですが、あなたのお家からお使ひが來た時には驚いてゐたやうでした」と答へたが、よし子がこの結婚について意外な變事を待設けてゐたことに思當つて、「あれはあなた方の結婚を大變羨ましく思つてたやうでしたよ」

「此家の老婢の娘も羨んでゐましたの。それほど羨ましいものなら、私の婚禮衣裳でも何でも、お鈴さんも添へて上げ

ようかつて、先つきさう云つてたの。……それは父さんだつて、いかにあなたの御樣をお訪ねてくるか、此方の家へ遊びにくるか、その外には自由交際の出來ないところへこないんですから、世間の人のことはよく分らないのですけど、此家のお話や娘は慾が深いんですよ。人がよくつて私のためには親身に世話をして呉れるんですけれど、可笑なほど慾は深いんですの。母に秘密でいろんな詰らないものでも遣ると、そりや喜びますわよ。それから、おしなの――先きお取次に出てあなたをお斷りしたのがお老婢の娘のおしなですの――あの女にお婿さんの候補者が今二三人あるんですがね。どれがいゝの惡いのつて、家の者が皆んなしていろ／＼に評議をしてゐますのよ。男振りがどうのかうのと、そんな穿鑿までしてゐて、先つきも私に寫眞を見せたりしたのですけど、どれだつて同じことたらうつて私云つてやりましたの。慾張つて撰好みしたつて、男は男で、外の何でもないのぢやありますまいか。……私賴様にもたびたびさう申上げてゐたんですわ。」

「しかし、あなたどつて何時までもそんな氣でゐらりやしないでせうね」

民雄はひそかに恐れてゐたやうな異變が辰子の言葉にも擧動にも現はれてゐないのに安んじて相手になつてゐたが、間もなく歸宅の時刻が迫つて、俥の用意も出來たといふ老婢の知らせによつて、辰子が座を立つと、民雄自身の方でさも戀人に別れるやうな名殘りの惜まれる氣持がした。

「お父さんだちが私を折檻しようとして待つてゐらつしやるわね。お父さんやお母さんの前で泣けるといゝんだけど、私どうしたつて泣けないから駄目よ。私に得心の出來ないことを聞かされても、たゞ默つてゐる外に仕方がないんですわ」と、辰子は懷つこく訴へるやうに云つたが、でも最早躊躇しないで出て行つた。

民雄は階子段の側まで見送つてから、一先づ元の座へ戻つた。帽子を手に取つて直ぐに出て行かうとしかけながら、

何となくこの部屋を離れるのがいやだつたので愚圖々々してゐた。……父親同士が親しくしてゐたゝめ、自然幼い時分から辰子とは顔馴染になつてゐたとは云へ、しみ〴〵打解けた話を一度もしたことがなかつたのに、結婚前の今になつて、女の方から俄かに胸を披いて語らうとしたのは奇怪であつたが、それよりも民雄自身、以前から一圖に醜い〳〵と極めてゐた彼女に對して、親しみを感じだしたのが、自分ながら不思議であつた。辰子はところ〴〵破れて壁は赤茶けて、何の飾りもないこの二階が、東京中の何處の家よりも居心地がいゝやうに思はれたりした。辰子が兩親の極めた結婚を斥けるのに、人に云へないやうな深い譯があつても無くつても、そんなことは別にして、昨日元中家の庭で偶然出會つてからの出來事や辰子の言葉を思出してゐると夢見るやうに快かつた。……先日、活動寫眞のクレオパトラを思出して、魔藥の利き目を侍女に試みる殘忍な所行に驚くとゝもに、快い死に方を撰ばうとした心持に同感しながら、半醒半醉の快い夢を樂んでゐたやうに、辰子の所行や言葉が彼れを快い夢路に誘つた。そして、美しいクレオパトラの豔姿よりも醜い辰子の面影の方が、生物(いきもの)であるだけに一層親しみ深く彼れの心に觸れてゐた。

「辰子さんはあれで家へ歸りさへすればいゝんでせうね」と、やがて二階へ來た老婢に訊くと、

「お孃樣は拗ねて御覽なすつたですよ。お小い時からちよつと御氣風の變つた方なんですから」と、事もなげに答へられたので、民雄は却つて物足らぬ思ひをした。

「明日の晩にでも此方へ寄つて見ますから、若しも辰子さんの身に變つたことでもあつたら僕に知らせて下さい」

民雄はさう云つて老婢に暇を告げて外へ出た。電車に乘るには乘つたが、今までに例のなかつた秘密らしい秘密を抱いて家へ歸るのが後目たく思はれた。「何處へ行つてゐた？」と母親に必ず訊かれるのが、今夜は氣遣ひであつた。

父親の居間の明りは門の外からも見られた。潜戸を入つて掛金を掛けたが、その音を聞きつけた母親は玄關まで出て

來て、民雄の顔を見るや否や、

「村瀬さんが二度も訪ねて來たのだよ。私は何も知らない顔してゐたけれど、お前に是非會ひたいつて、何だか急な用事がありさうな風だつたよ。辰子さんの事をあの人も聞いてるのかも知れない」と慌たゞしく云つた。

が、民雄は冷淡に答へて、近所の道普請の後の泥濘(ぬかるみ)や時候外れの寒さなどを話しながら、茶の間には腰を卸さないで、用事ありげに自分の居間へ入つた。そして、女といふ女がみんなあんな風になつたら、人間の世の中も家庭も小ざつぱりしていゝだらうと、よし子などの有つてゐる女臭い臭ひに面を背ける氣になつてゐた。

「あなたは本當にどうかしてゐらつしやるわね。私今朝(けさ)からあなたの樣子が變だ〳〵と思つてましたの」夜の雜用を終つて、顔や手足を拭磨いて來たよし子は、とに角一日を暮した後のノビ〳〵した氣持で、民雄の傍へ寄つてさう云つた。

民雄はよし子から目を外して默つてゐたが、よし子はさして氣に留めない風で、

「辰子さんはなか〳〵えらいのね。村瀬さんくらゐな人をあんなに焦らしたりして。でも村瀬さんの方では、どんなにされても破談にしさうな樣子がちつともないんだから、傍で見てると、隨分齒痒くつてよ。結婚前から焦らしたり焦らされたりしてれば面白いんでせうね」

「まさかさうでもあるまい。」

「あなたにはさういふ經驗がないから、女の心も男の心も分らないのよ。村瀬さんのやうな方が辰子さんに執着してる氣持があなたには分らないでせう。蔭間の話によつても、あの人は辰子さんと一緒に自働車にでも乘つて、お友達を羨ましがらせようつて云ふ子供じみたことも考へてるの」

「もう澤山……」民雄は妻が說立て煽り立てやうとする浮ついた世の樂みに向ふ心を斥けて、妻の顔を見返した。その

目は何時もよりは邪氣を含んでゐると、よし子は思ひながら、稍々萎れて口を噤んだ。

妻が萎れたゝめに、民雄も今夜は自分一人の思ひを亂されないで靜かな眠りに就かれた。……夜毎々々のらうがはしきよし子の話など聞いてゐるよりも、多く例のありさうでない辰子の言葉でも思浮べてゐる方が、どれほど彼れの眠付をよくするか知れなかつた。

まだ梅雨の霽れ切らない鬱陶しい朝を同じやうに迎へたが、辰子があれからどうしたかを知ることが、彼れの一日の眠醒めをいくらか樂しくさせた。

「あなたは今日お勤めにいらつしやるんですか」と、よし子は起きがけに眞面目くさつて訊いた。

「極つてるさ。外におれの行くところはないぢやないか」

「何處かいゝ所を拵へなさるといゝわ。……今までは口ではどう云つてらつしやつても、私を離れる方ぢやないと思つてゐたのだけれど、この二三月の樣子では、あなたは私の氣のつかないやうなことを考へてらつしやるわね……私も隨分迂濶だつたわね」

さう云つたよし子には昨夕のやうな萎れた風はなかつた。民雄は辯解はしなかつたが、自分が秘密に仇し女でも拵へてゐるやうに見られるのに擽つたい思ひをして、ニヤ〱笑ひを浮べた。

父親が齒を磨きながら緣側に立つてゐるので、よし子は夫の冴えない頭を突つき立てるやうな話を進めることが出來なかつたが、民雄もそれを幸ひとして、朝仕度を急いで、杉瀬がまた訪ねて來ない前にと、定刻よりも早目に家を出た。

當てもなく歩いて途中で時を過しながら、妻の下らない疑ひを思出してゐると、自分たちの結婚生活に新しい累はさ

の加はつて來たことが彼れの胸に迫つた。

（七）

今日も糾察所の仕事は、日々の擇ろない職務である以上に、民雄の心にかなつてゐて、仕事に手を着けてゐる間は、外の雜事は自から忘れられてゐたが、珍らしく電話が掛つて來ると、直ぐに村瀬などの影を目先に浮べて吃驚した。

「私ですよ。よしです」と、意外にもよし子の聲が聞えて來たので、

「どうかしたのか」と、慌てゝ訊返した。

「いゝえ何も用事はないんですけど、今お使ひに出ましたから。………今日は四時にはおかへりなさるの」

「極つてるぢやないか」

「さう？」

よし子はまだ話を續けようとしてゐるらしかつたが、民雄は電話を切つて自分の椅子へ戻つた。結婚當時は妻から勤め先へ無駄な電話を掛けられたことも二三度あつたが、この頃はそんな例はなかつたのにと、彼れは怪みながら、うつかり歸りの時刻を斷言したのを後悔した。そして、勤務の時間の終るまで、そのために稍々もすると心を亂されてゐた。

霖雨もやうやく霽れて、冴えた光が珍しく玻璃越しにチラついた。民雄はちよつとでも琴平の老婦の家へ寄つて行く決心をして歸り仕度に取掛つたが、すると、そこへまた電話が掛つて來た。今度は意外にも彼れの父親からのだつた。

「元中の老人から、役所の退け次第わしに來て與れといふことぢやから、わしはこれから直ぐに彼方へまはらうと思ふ。夜がおそくなるかも知れんがそのつもりでゐて與れ」

「え、承知しました」と、民雄は返事をしたが、多少不安心であつたので、「元中さんはあなたにどんな御用があるんでせう?。展子さんのことなんでせうか」と訊返した。

「いや、あの事は何でもないらしい。電話を掛けた彼家の書生に念のために訊くと、昨夕無事に歸られたと云つとつた先日わしからお前に話した一件で、わしに急に相談したいことでも出來たのだらう。……とに角わしはこれから出掛けよう」と、父親は元氣のいゝ聲で云つて、「お前はもう間もなく家へ歸るんだらうな」

「えゝ直ぐ歸ります」

民雄は咄嗟の拵へ事が出來なくつてさう答へて、電話口を離れた。そして、同僚の一人と連立つて編纂所の階段を下りて、陰欝な雲が晴れてすがすがしい風の吹いてゐる戸外へ出た。

「君はこの夏休みには何處かへ出かけますか」と　同僚は夏らしい日光を見て云つた。

「さあ、僕はまだ分りません。君は?」

「僕は計畫は立てゝゐるんだが、實行出來さうぢやありませんね」

「さうですか」と云つたゞけで、その譯を民雄は訊かうとはしなかつた。この頃の生活難で旅費の餘裕がないのだらうと察したが、平生同僚間の生活難の愚痴つぽい話に加はつたことのない彼れは、旅行の出來ないことくらゐに同情は起らなかつた。

琴平へ寄らうとしながら、道連れがあつていろいろな話を仕掛けられるので、知らず知らず自分の家の方への電車に乘つた。引返すのは面倒であつたし、父親の言付でもあつたので、民雄は素直な道を取つて自分の家の門を跨いだ。

茶の間にゐるのは母親一人であつた。針の手を留めて顔を上げて、

「お前だつたのかい。……よしは晝飯後に、三崎町までやつて呉れと云つて出て行つてまだ歸つて來ないよ。四時までには是非歸つて來ると云つてゐたのに」と、不平らしく云つた。

「たまには遊びに出たつていゝでせう」

民雄は事もなげに云つた。それにしてはよし子の電話が變だつたと思ひながら、自分の居間へ入つて、先刻から雨に浸つてゐた庭の草木が久振りの光を喜んで乾いてゐるのを眺めながら一服吸つてゐると、やがて縫物一つ仕上げた母親が、一息吐いて茶を入れて、民雄を呼んだ。父親の傳言を言忘れてゐた民雄は、それを機會に思出して母親に知らせると、「お父さんもこの頃は焦つてゐなさるが、元中さんばかりを當てにして、いゝことがあるのだらうかね」と、母親は笑つた、

「お父さんはあんな風で死ぬるまで頭を使つてるんですね。……人間の頭は生きてる限り、無駄な事にでも使はなければならないやうに出來てるんですかね」

「だけど、元中さんが今日わざ〳〵お父さんを呼びなすつたのは、會社の御用ぢやあるまいよ。彼家では今そんな事どころぢやあるまいからね」

「だつて、彼家の結婚にお父さんが關係してゐやしまいし……」

民雄は若しも自分が辰子に會つたことが元中の兩親に知れてゐたらと思ふと、氣恥かしさよりも、むしろ激しい恐怖が感ぜられだした。元中老夫婦の思惑はとに角、自分の兩親やよし子の目の前に自分が滑稽な曝らし物になりさうなの

お怖かつた。」

「お父さんとは古い友達で、此方も手頼りにしてゐるのだから、先方でもまさかの時には相談相手にしようと思つてゐらつしやるんだらう。……今度の縁談には何か知ら故障が起りさうだと、私は早くからさう思つてゐた」

「でも、辰子さんは當り前の女ぢやありませんか。兩親に逆らふやうな女ぢやないでせう」

「それはさうだけれど、今時の若い女の腹の中は分りやしないよ。それに、元中さんのお家ではあんまり運がよ過ぎたから、魔が差すことはあるだらうさ」

民雄はこんな悠長な母親の話は聞いてゐられなかつた。座を立つて自分の居間へ入つたが、其處でも最早ぢつとしてゐられなかつたので、母親の怪むのも頓はないで、口の内で曖昧な言譯をしながら、ついと戸外へ出た。そして、電車に飛乘つて琴平へ急いだ。

老婢の家では魚を燒く油臭い煙を玄關までも漂はせてゐた。「いらつしやいまし」と、老婢は晴々した聲を出して迎へた。

「辰子さんはあれからどうしてゐます？」と、訊くと、

「今朝ちよつとお伺ひしましたが、不斷の通りでちつとも變つた御樣子は御座いませんでした。御安心なさいまし。お孃樣も素直に御結婚なさるおつもりなんでせう」

「それなら結構ですね」。

民雄は老婢の勸めに從つて、二階へ上つて行つて、不思議に馴染みの出來た部屋へ身を置いた。魚の臭ひは二階にも

語つてゐた。氣まぐれにもせよ、あんな事を云つてゐた辰子が花嫁の裝ひをするのが、彼れには不思議な事と思はれたが、それよりも民雄自身あのよし子と、夫婦として一つ家に一つ部屋に起臥してゐるのが、一層不思議に思はれだした。

昨日此處で辰子の不格好な顏が氣持よく見えたり、その氣まぐれらしい話が氣持よく聞えたり、彼女の運命を思ひ過して、世間一般の人とはちがつてゐるやうに、眞面目に考へてやつたりしたのは、あれが自分の心にでも宿つてゐる戀の影法師とでも云ふべきものだらうかと、彼れは部屋の中を見廻して、後の煤けた障子に映つてゐる自分の影法師をも顧みた。



妖婆

芥川龍之介

あなたは私の申し上げる事を御信じにならないかも知れません。いや、きつと嘘だと御思ひなさるでせう。昔なら知らず、これから私の申し上げる事は、大正の昭代にあつた事なのです。しかも御同様住み慣れてゐる、この東京にあつた事なのです。外へ出れば電車や自働車が走つてゐる。内へはいればしつきりなく電話のベルが鳴つてゐる。新聞を見れば同盟罷工や婦人運動の報道が出てゐる。――さう云ふ今日、この大都會の一隅で、ポオやホフマンの小説にでもありさうな、氣味の惡い事件が起つたと云ふ事は、いくら私が事實だと申した所で、御信じになれないのは御尤もです。が、その東京の町々の燈火が、幾百萬あるにしても、日沒と共に襲ひかゝる夜を悉燒き拂つて、晝に返す譯には行きますまい。丁度それと同じやうに、無線電信や飛行機が如何に自然を征服したと云つても、その自然の奥に潜んでゐる神秘な世界の地圖までも、引く事が出來たと云ふ次第ではありません。それならどうして、この文明の日光に照らされた東京にも、平常は夢の中にのみ跳梁する精靈たちの秘

密な力が、時と場合でアウエルバッハの窖のやうな不思議を現じないと云へませう。時と場合所ではありません。私に云はせれば、あなたの御注意次第で、驚くべき超自然的な現象は、まるで夜咲く花のやうに、始終我々の周圍に出沒去來してゐるのです。

たとへば冬の夜更などに、銀座通りを御歩きになつて見ると、必アスファルトの上に落ちてゐる紙屑が、數にして凡そ二十ばかり、一つ所に集まつて、くるくる風に渦を卷いてゐるのが、御眼に止まる事でせう。それだけなら、何も申し上げる程の事はありませんが、ためしにその紙屑が渦を卷いてゐる所を、勘定して御覽なさい。必新橋から京橋までの間に、左側に三個所、右側に一個所あつて、しかもそれが一つ殘らず、四つ辻に近い所ですから。これも或は氣流の關係だとでも、申して申せない事はありますまい。けれどももう少し注意して御覽になると、どの紙屑の渦の中にも、きつと赤い紙屑が一つある――活動寫眞の廣告だとか、千代紙の切れ端だとか、乃至は又燐寸の商標だとか、物はいろいろ變つてゐても、赤い色が見えるのには、何時でも變りがありません。それがまるで外の紙屑を率ゐるやうに、一しきり風が動いたと思ふと、まつさきにひらりと舞上ります。と、かすかな砂煙の中から嘯くやうな聲が起つて、其處此處に白く散らかつてゐた紙屑が、忽ちアスファルトの空へ消えてしまふ。消えてしまふのぢやありません。一度にさつと輪を描いて、流れるやうに飛ぶのです。風が落ちる時もその通り、今まで私が見た所では、赤い紙が先へ止まりました。かうなると如何にあなたでも、御不審が起らずにはゐられますまい。私は勿論不審です。現に二三度は往來へ立止まつて、近くの飾窓(ショウウインドウ)から、大幅の光がさす中に、しつきりなく飛びまはる紙屑を、じつと透かして見た事もありました。實際その時はさうして見たら、ふだんは人間の眼に見えない物も、夕暗にまぎれる蝙蝠程は、朧げにしろ、彷彿と見えさうな氣がしたからです。

か、東京の町で不思議なのは、銀座通りに落ちてゐる紙屑ばかりぢやありません。夜更けて乘る市内の電車でも、時々尋常の考に及ばない、妙な出來事に遇ふものです。その中でも可笑しいのは人氣のない町を行く赤電車や青電車が、乘る人もない停留場へちやんと止まる事でせう。これも前の紙屑同樣、疑はしいと御思ひになつたら、今夜でもためして御覽なさい。同じ市内の電車でも、動坂線と巣鴨線と、この二つが多いさうですが、つい四五日前の晩も、私の乘つた赤電車が、やはり乘降りのない停留場へぱつたり止まつてしまつたのは、その動坂線の團子坂下です。しかも車掌がベルの綱へ手をかけながら、半ば往來の方へ體を出して、例の如く「御乘りですか」と聲をかけたぢやありませんか。私は車掌臺のすぐ近くにゐましたから、すぐに窓から外を覗いて見ました。と、外は薄雲のかかつた月の光が、朦朧と漂つてゐるだけで、停留場の柱の下は勿論、兩側の町家が悉く戸を鎖した、眞夜中の廣い往來にも、更に人間らしい影は見えません。妙だなと思ふ途端、車掌がベルの綱を引いたので、電車はその儘動き出しましたが、それでもまだ窓から外を眺めてゐると、停留場が遠くなるのに從つて、今度は何となく私の眼にも、其處の月の光の中に、だんだん小さくなつて行く人影があるやうな氣がしました。これは申すまでもなく、私の神經の迷かもしれませんが、あの先を急ぐ赤電車の車掌が、どうして乘る人もない停留場へ電車を止めなどしたのでせう。しかもこんな目に遇つたのは、何も私ばかりぢやなく、私の知人の間にも、三四人はゐようと云ふのです。して見ると、まさか電車の車掌がその度に寢惚けたとも申されますまい。現に私の知人の一人なぞは、車掌をつかまへて、「誰もゐないぢやないか」と、きめつけると、車掌も不審さうな顏をして、「大勢さんのやうに思ひましたが」と、答へた事があるさうです。

その外まだ數へ立てれば、砲兵工廠の煙突の煙が、風向きに逆つて流れたり、撞く人もないニコライの寺の鐘が、眞夜中に突然鳴り出したり、同じ番號の電車が二臺、前後して日の暮の日本橋を通りすぎたり、人つこ一人ゐない國技館

の中で、毎晩のやうに大砲の響が聞えたり、――所謂「自然の夜の側面」は、丁度美しい蛾の飛び交ふやうに、この繁華な東京の町々にも、絶え間なく姿を現してゐるのです。從つてこれから私が申上げようと思ふ話も、決してあなたがた御想像になる程、現實の世界と懸け離れた、徹頭徹尾あり得べからざる事件と云ふ次第ではありません。いや、東京の夜の秘密を一通り御承知になつた現在なら、無下にはあなたも私の話を、莫迦になさる筈はありますまい。もし又しまいまで御聞きになつた上でも、やはり鶴屋南北以來の焼酎火の匂がするやうだつたら、それは事件そのものに嘘があるせいと云ふよりは、寧ろ私の申し上げ方が、ポオやホフマンの塁を摩す程、手に入つてゐない罪だらうと思ひます。何故と云へば一二年以前、この事件の當事者が、或夏の夜私と差向ひで、かうかう云ふ不思議に出遇つた事があると、詳しい話をしてくれた時には、私は今でも忘れられない程、一種の妖氣とも云ふべき物が、陰々として私たちのまはりを立て罩めたやうな氣がしたのですから。

この當事者と云ふ男は、平常私の所へ出入をする、日本橋邊の或る出版書肆の若主人で、ふだんは用談さへすませてしまふと、匆々歸つてしまふのですが、丁度その夜は日の暮からさつと一雨かかつたので、始は雨止みを待つ心算ででも、何時になく腰を落着けたのでせう。色の白い、眉の迫つた、痩せぎすな若主人は、盆提灯へ火のはいつた椽先のうす明りにかしこまつて、彼是初夜も過ぎる頃まで、四方山の世間話をして行きました。その世間話の中へ挾みながら、「是非一度これは先生に聞いて頂きたいと思つて居りましたが」と、殆心配さうな顔色で徐に口を切つたのが、申すまでもなく本文の妖婆の話だつたのです。私は今でもその若主人が、上布の肩から一なすり墨をぼかしたやうな夏羽織で、西瓜の皿を前にしながら、まるで他聞でも憚るやうに、小聲でひそひそ話し出した容子が、はつきりと記憶に殘つてゐます。さう云へばもう一つ、その頭の上の盆提灯が、艶かな胴へ秋草の模様をほんのりと明く浮かせた向うに、雨

上りの空がむら雲をただ黒く一面に亂してゐたのも、やはり妙に身にしみて、忘れる事が出來ません。

そこで肝腎の話と云ふのは、その新藏と云ふ若主人が（外に差障りがあるといけませんから、假にかう呼んで置きませう。）二十三の夏にあつた事で、當時本所一つ目邊に住んでゐた神下しの婆の所へ、ちと心配な筋があつて、伺ひを立てに行つたと云ふ、それが抑々の發端なのです。何でも六月の上旬或日、新藏はあの界隈に吳服屋を出してゐる、商業學校時代の友だちを引張り出して、一しよに與兵衞鮨へ行つたのださうですが、其處で一杯やつてゐる內に、その心配な筋と云ふのを問はず語りに話して聞かせると、その友だちの泰さんと云ふのが急に眞面目な顏をして、「ぢやお島婆さんに見て貰ひ給へ」と、熱心に勸め出しました。そこで仔細を聞いて見ると、この神下しの婆と云ふのは、二三年以前に淺草あたりから今の所へ引越して來たので、占もすれば加持もする――それが又飯綱でも使ふのかと思ふ程、靈顯があると云ふのです。「君も知つてゐるだらう。ついこの間魚政の女隱居が身投げをした。――あの死骸がどうしても上らなかつたんだが、お島婆さんに御札を貰つて、それを一の橋から川へ抛りこむと、その日の內に浮いて出たぢやないか。しかも御札を抛りこんだ、一の橋の橋杭の所にさ。丁度日の暮の上げ潮だつたが、仕合せとあすこにもやつてゐた、石船の船頭が見つけてね。さあ、御客樣だ、土左衞門だと云ふ騷ぎで、早速橋詰の交番へ屆けたんだらう。僕が通りかかつた時にや、もう巡査が來てゐたが、人ごみの後から覗いて見ると、上げたばかりの女隱居の屍骸が、荒菰をかぶせて寢かしてある、その菰の下から出た、水ぶくれの足の裏には、何だと思ふ、君？　あの御札がぴつたり斜つかけに食附いてゐたんだ。僕はさすがにぞつとしたね。」――と云ふ友だちの話を聞いた時には、新藏もやはり背中が寒くなつて、夕潮の色だの、橋杭の形だの、それからその下に漂つてゐる女隱居の姿だの――そんな物が一度に眼の前へ、浮んで來たやうな氣がしたさうです。が、何しろ一杯機嫌で、「そりや面白い。是非一つ見て貰はう」と、負惜しみの膝を進めまし

た上手な婆お案内しような。この間金錢を見て貰ひに行つて以來、今ぢやあの婆さんとも大分懇意になつてゐるから一つ分頼む」――かう云ふ調子で、肩へ楊子の與兵衛を出ると、[illegible]

から、ぶらりとその御下しの婆の所へ出かけたと云ひます。

此處でその新藏の心配な筋と云ふのを御話しますと、家に使つてゐた女中の中に、お敏と云ふ女があつて、それが新藏とは一年越互に思ひ合つてゐたのですが、どうした譯か去年の暮に叔母の病氣を見舞ひに行つたぎり、音沙汰もなくなつてしまつたのです。驚いたは新藏ばかりでなく、このお敏に目をかけてゐた新藏の母親も心配して、請人を始め傳手から傳手へ、手を廻して探しましたが、どうしても行く方が分りません。やれ、看護婦になつてゐるのを見たの、やれ、妾になつたと云ふ噂があるの、と、取沙汰だけはいろいろあつても、さて突きつめた所になると、皆目どうなつたか知れないのです。新藏は始終氣を使つて、それから又腹を立てて、この頃では唯ぼんやりと沈んでゐるばかりになりましたが、その元氣のない容子が、薄々ながら二人の關係を感づいてゐた母親には、新しい心配の種になつたのでせう。芝居へやる。湯治を勸める。或は商賣附合ひの宴會へも父親の名代を勸めさせる――と云つた具合に骨を折つて、無理にも新藏の浮かない氣分を引き立てようとし始めました。そこでその日も母親が、本所界隈の小賣店を見廻らせると云ふのは口實で、實は氣晴らしに遊んで來いと云はないばかり、紙入の中には小遣ひの紙幣まで入れてくれましたから、丁度東両國に幼馴染があるのを幸、その泰さんと云ふのを引張り出して、久しぶりに近所の與兵衛鮨へ、一杯やりに行つたのです。

かう云ふ事情がありましたから、お島婆さんの所へ行くと云つても、新藏のほろ醉の腹の底には、何處か眞劍な所があつたのでせう。一つ目の橋の袂を左へ切れて、人通りの少い竪川河岸を二つ目の方へ一町ばかり行くと、左官屋と荒

物屋との間に挾まつて、竹格子の窓のついた、煤だらけの格子戸造りが一軒ある――それがあの神下しの婆の家だと聞いた時には、まるでお敏と自分との運命が、この怪しいお島婆さんの言葉一つできまりさうな、無氣味な心もちが先に立つて、さつきの酒の醉なぞは、すつかりもう醒めてしまつたさうです。又實際そのお島婆さんの家と云ふのが、見たばかりでも氣が滅入りさうな、庇の低い平家建で、この頃の天氣に色の出た雨落ちの石の青苔からも、菌位は生へるかと思ふ位、妙にじめじめしてゐました。その上隣の荒物屋との境にある、一抱あまりの葉柳が、窓も蔽ふ程枝垂れてゐますから、瓦にさへ暗い影が落ちて、障子一重隔てた向うには、さも唯ならない秘密が潜んでゐさうな、陰森としたけはひがあつたと云ひます。

が、泰さんは一向無頓着に、その竹格子の窓の前へ立止ると、新藏の方を振返つて、「ぢや愈婆に見參と出かけるかな。だが驚いちやいけないぜ。」と、今更らしい嚇しを云ふのです。新藏は勿論嘲笑つて、「小供ぢやあるまいし。誰が婆さん位に恐れるものか」と、うつちやるやうに答へましたが、泰さんは反つてその返事に人の惡るさうな眼つきを返しながら、「何さ。婆さんを見たんぢや驚くまいが、此處には君なんぞ思ひもよらない、別嬪が一人ゐるからね。それで御忠告に及んだんだよ」と、かう云ふ内にもう格子へ手をかけて、「御免」と、勢の好い聲を出しました。するとすぐに「はい」と云ふ、含み聲の答があつて、そつと障子を開けながら、入口の框に膝をついたのは、嫺しい十七八の娘です。成程これぢや、泰さんが「驚くな」と云つたのも、更に不思議はありません。色の白い、鼻筋の透つた、生際の美しい細面で、殊に眼が水々しい。――が、何處かその顏立ちにも、痛々しい窶れが見えて、撫子を散らしためりんすの帶さへ、派出な緋絣の單衣の胸をせめさうな氣がしたさうです。泰さんは娘の顏を見ると、麥藁帽子を脫ぎながら、「阿母さんは?」と尋ねました。すると娘は術なさゝうな顏をして、「生憎出まして留守でございますが」と、さも自分が惡い事

でもしたやうに、眼を細めて答へましたが、ふと涼しい眼を格子戸の外へやると、急に顔の色が變つて、「あら」と、かすかに叫びながら、飛び立たうとしたぢやありませんか。泰さんは場所が場所だけに、さては往通の者でもしたのかと思つたさうですが、慌てて後を振返ると、今まで夕日の中に立つてゐた新蔵の姿が見えません。と、二度びつくりする暇もなく、泰さんの袂にすがつたのは、その神下しの婆の娘で、それが息をはずませながら、一生懸命な聲で云ふのを聞くと、「あなた。今の御連れ様にどうかさう仰有つて下さいまし。二度とこの近所へ御立寄りなすつちやいけません。さもないと、あの方の御命にも關るやうな事が起りますから。」と、かう切れ切れに云ふのださうです。泰さんは何が何やら、まるで狐に擔かれた體で、暫くは唖呆氣にとられてゐましたが、兎に角、言傳てを頼まれた體なので、「よろしい。確に頼まれました」と云つたきり、よくよく狼狽したのでせう。麥藁帽子もぶら下げた儘、いきなり外へ飛び出すと、新蔵の後を追ひかけて、半町ばかり駈け出しました。

その半町ばかり離れた所が、丁度寂しい石河岸の前で、上の方だけ西日に染まつた、電柱の外に何もない――其處に新蔵はしよんぼりと、夏外套の袖を合せて、足元を眺めながら、佇んでゐました。が、やつと駈けつけた泰さんが、まだ胸が躍つてゐると云ふ調子で、「冗談ぢやないぜ。驚くなと云つた僕の方が、どの位君に驚かされたか知れやしない。一體君はあの別嬪を――」と云ひかけると、新蔵はもう一つ目の橋の方へ落着かない歩みを運びながら、「知つてゐるとも。あれが君、お敏なんだ」と、興奮した聲で答へたさうです。泰さんは三度びつくりした――びつくりした筈でせう。何しろこれからその行方を見て貰はうと云ふ當の女が、人もあらうにお島婆さんの娘だと云ふ騒ぎなのですから。と云つて泰さんもその娘に頼まれた、容易ならない言傳ての手前、驚いてばかりもゐられますまい。そこで麥藁帽子をかぶるが早いか、二度とこの界隈へは近づくなと云ふお敏の言葉を、蛇色同様に饒舌つて聞かせました。新蔵はその言

菜を前に聞いてゐましたが、やがて眉を顰めると、迂散らしい眼つきをして、「來てくれるなと云ふのはわかるけれど、來れば命にかかはると云ふのは不思議ぢやないか。不思議よりや寧ろ亂暴だね。」と、腹を立てたやうな聲を出すのです。が、泰さんも唯言傳てを聞いただけで、どうした譯とも問ひ質さずに、お島婆さんの家を駈け出したのですから、いくら相手を慰めたくも、好い加減な御座なりを並べる外は、慰めやうがありません。すると新藏は猶更の事、別人のやうに默りこんで、さつさと歩みを早めたさうですが、その内に又與兵衛鮨の旗の出てゐる下へ來ると、急に泰さんの方をふり向いて、「僕はお敏に逢つてくりや好かつた」と、殘念らしい口吻を洩しました。その時泰さんが何氣なく、「ぢやもう一度逢ひに行くさ」と、調戯ふやうにかう云つた――それが後になつて考へると、新藏の心に燃えてゐる、焔のやうな逢ひたさへ、油をかける事になつたのでせう。程なく泰さんに別れると、すぐ新藏が取つて返したのは、回向院前の坊主軍鷄で、あたりが暗くなるのを待ちながら、銚子も二三本空にしました。さうして日がとつぷり暮れると同時に、又其處を飛び出して、酒臭い息を吐きながら、夏外套の袖を後へ刎ねて、押しかけたのはお敏の所――あの神下しの婆の家です。

それが星一つ見えない、暗の夜で、濕く地息が蒸れる癖に、時々ひやりと風が流れる、梅雨中にありがちな天氣でした。新藏は勿論中つ腹で、お敏の本心を聞かない内は、唯ぢや歸らない位な氣組でしたから、雲を流した空に柳が蒼えて、その下に竹格子の窓が灯をもした、薄氣味惡い家の格子にも頓着せず、いきなり格子戸をがらりとやると、狹い土間に突立つて、「今晩は」と一つ怒鳴つたさうです。その聲を聞いたばかりでも、誰だらう位な推量はすぐについたからでせう。あの優しい含み聲の返事も、その時は震へてゐたやうですが、やがて靜に障子が開くと、框越しに手をついた、やつやつしいお敏の姿が、次の間からさす電燈の光を浴びて、今でも泣いてゐるかと思ふ程、悄々と其處へ現れ

ましたが、こちらは元より酒の上で、麥藁帽子を阿彌陀にかぶつた儘、亂暴にお敏を見下しながら、「ええ、お婆さんは御在宅ですか。手前少々見て頂きたい事があつて、上つたんですが、――御面倒でもお婆さんに御取次」と、白々しくずつきり云つた。――それがどの位つらかつたのでせう、お敏はやはり手をついた儘、消え入りたさうに肩を落して、「はい」と云つたきり暫くは涙を呑んだやうでしたが、もう一度新藏が虹のやうな酒氣を吐いて、「御取次」と云はうとすると、襖を隔てた次の間から、まるで蟇が呟くやうに、「どなたやらん、そこな人。遠慮なうこちへ通らつしやれ」と、力のない、鼻へ抜けた、お島婆さんの聲が聞えました。そこな人も凄じい。お敏を隱した發頭人。まづこいつをとつちめて、――と云ふ權幕でしたから、新藏はずいと上りさまに、夏外套を脱ぎ捨てると、思はず止めようとしたお敏の手へ、麥藁帽子を殘したなり、昂然と次の間へ通りました。が、可哀さうなのは後に殘つたお敏で、これは境の襖の側へぴつたりと身を寄せた儘、夏外套や麥藁帽子の始末をしようと云ふ方角もなく、涙ぐんだ涼しい眼にぢつと天井を仰ぎながら、華奢な兩手を胸へ組んで、頻に何か祈念でも凝らしてゐるやうに見えたさうです。

さて次の間へ通つた新藏は、遠慮なく座蒲團を膝へ敷いて、横柄にあたりを見廻すと、部屋は想像してゐた通り、天井も柱も煤の色をした、見すぼらしい八疊でしたが、正面に淺い六尺の床があつて、婆娑羅大神と書いた軸の前へ、御鏡が一つ、御酒徳利が一對、それから赤青黄の紙を剪んだ、小さな幣束が三四本、恭しげに飾つてある、――その左手の椽側の外は、すぐに竪川の流でせう。思ひなしか、立て切つた障子に響いて、かすかな水の音が聞えました。さて肝腎の相手はと見ると、床の前を右へ外して、菓子折、サイダア、砂糖袋、玉子の折などの到來物が、ずらりと並んでゐる簞笥の下に、大柄な、切髮の、鼻が低い、口の大きな、靑ん膨れに膨れた婆が、黒地の單衣の襟を抜いて、睫毛の疎な目をつぶつて、水氣の來たやうな指を組んで、魍魎の如くのつさりと、座一ぱいに坐つてゐました。さつきこの婆の

ものを云ふ聲が、婆の呟くやうだつたと云ひましたが、かうして坐つてゐるのを見ると、婆も婆、容易ならない蟇の怪が、人間の姿を裝つて、毒氣を吐かうとしてゐるとでも形容しさうな氣色ですから、これにはさすがの新藏も、頭の上の電燈さへ、光が薄れるかと思ふ程、凄しげな心もちがして來たさうです。

が、勿論それ位な事は、重々覺悟の前でしたから、「ぢや一つ御覧を願ひたい。緣談ですがね」と、きつぱり云つた―その言葉が聞えないのか、お島婆さんはやつと薄眼を開いて、片手を耳へ當てながら、「何の、緣談の」と繰返しましたが、やはり同じやうなぼやけた聲で、「おぬし、女が欲しいでの」と、のつけから鼻で笑つたと云ひます。新藏はじりじり業の煮えるのをこらへながら、「欲しいからこそ、見て貰ふんです。さもなけりや、誰がこんな――」と、柄にもない鐵火な事を云つて、こちらも負けずに鼻で笑ひました。けれども婆は自若として、まるで蝙蝠の翼のやうに、耳へ當てた片手を動かしながら、「怒らしやるまいてや。口が惡いはわしが癖ぢやての」と、まだ半ばせせら笑ふやうに、新藏の言葉を遮りましたが、それでも漸く調子を改めて、「年はの」と、仔細らしく尋ねたさうです。「男は二十三――酉年です。」「女はの」「十七」「卯年よの」「生れ月は――」「措つしやい。年ばかりでも知れうての」婆はかう云ひながら、二三度膝の上の指を折つて、星でも數へるやうでしたが、やがて例のたるんだ眶を擧げて、ぎよろりと新藏へ眼をくれると、「成らぬてや。成らぬてや。大凶も大凶よの。」と、まづ大仰に嚇かして、それから又獨り呟くやうに、「この緣を結んだらの、おぬしにもせよ、女にもせよ、必一人は身を果さうてや」と、云ひ切つたらうぢやありませんか。かつとしたのは新藏で、さてこそ命にかかはると云つたのは、この婆の差金だらうと、見てとつたから、我慢が出來ません。ぢりりと膝を向け直すと、まだ酒臭い顏をしやくつて、「大凶結構。男が一度惚れたからにや、身を果す位は朝飯前です。火難、劍難、水難があつてこそ、惚れ榮えもあると御思ひなさい。」と、嵩にかかつて云ひ放しました。すると婆は又瞼

たなつて、厚い唇をもぐもぐ動しながら、「なれどもの、男に身を果された女はどうぢや。まし

男はの、泣かうがや。吼へようがや。」と、嘲笑ふやうな聲で云ふのです。「おのれ、お敏の體に指一本でもさして見ろ——」と氣負つた勢で、新藏は婆を睨めつけながら、「女にや男がついてゐます」と、眞向からきめつけると、相手は相不變手を組んだ儘、惡く光澤のある頬をにやりとやつて、「では男にはの」と、嘲くやうに問ひ返しました。その時は思はずぞつとしたと、新藏が後で話しましたが、これは成程あの婆に果し狀をつけられたやうなものですから、氣味が惡かつたのには、相違ありますまい。しかもさう問ひ返した後で、婆は新藏のひるんだ氣色を見ると、黑い單衣の襟をぐいと拔いて、「如何におぬしが惱らうとも、人間の力には天然自然の限りがあるてや。惡あがきは思ひ止らつしやれ。」と、猫撫聲を出しましたが、急にもう一度大きな眼を仇白く見開いて、「それ、それ、證據は目のあたりぢや。おぬしにはあのため息が聞えぬかいの」と、今度は兩手を耳へ當てながら、さも一大事らしく囁いたと云ふのです。新藏は我知らず堅くなつて、ぢつと耳を澄ませましたが、襖一重向うに隱れてゐる、お敏のけはひを除いては、何一つ聞えるものもありません。すると婆は徐々眼をぎよろつかせて、「聞えぬかいの。おぬしのやうな若いのが、そこな石河岸の石の上で、ついてゐるため息が聞えぬかいの。」と、次第に後の簞笥に映つた影も大きくなるかと思ふ程、膝を進めて來ましたが、やがてその婆臭い匂が、新藏の鼻を打つたと思ふと、障子も、襖も、御酒德利も、御鏡も、簞笥も、座蒲團も、すべて陰々とした妖氣の中に、まるで今までとは打つて變つた、怪しげな形を現して、「あの若いのもおぬしのやうに、おのが好色心に目が眩んでの、この婆に祟らせられた婆娑羅の大神に逆うたてや。されば立ち所に神罰を蒙つて、瞬く暇に身を捨てうでの。おぬしには善い見せしめぢや。聞かつしやれ」と云ふ聲が、無數の蠅の羽音のやうに、四方から新藏の耳を襲つて來ました。その拍子に障子の外の竪川へ、誰とも知れず身を投げた、けたたましい水音が、宵闇を破つて聞

えたさうです。これに荒膽を挫がれた新藏は、もう五分とその場に居たたまれず、挨拶を殘すのもそこそこで、泣いてゐるお敏さへ忘れたやうに、蹌踉とお島婆さんの家を飛び出しました。

さて日本橋の家へ歸つて、明くる日起きぬけに新聞を見ると、果して昨夜竪川に身投げがあつた。――それも龜澤町の楢屋の息子で、原因は失戀、飛びこんだ場所は、一の橋と二の橋との間にある石河岸と出てゐるのです。それが神經にこたへたのでせう。新藏は急に熱が出て、それから三日ばかりと云ふものは、ずつと床に就いてゐました。が、寐てゐても氣にかかるのは、申すまでもなくお敏の事で、勿論今となつて見れば、何も相手が心變りをしたと云ふ譯ぢやなく、突然暇をとつたのも、二度とこの界隈へ來てくれるなと云つたのも、皆お島婆さんの作略に相異ないのですから、今更のやうにお敏を疑つたのが恥しくもなつて來ますし、又一方ではこの自分に何の怨もないお島婆さんが、何故そんな作略をめぐらすのだか、不思議で仕方がなかつたさうです。それにつけても人一人身投げをさせて見てゐるやうな、鬼婆と一しよにゐるのぢや、今にもお敏は裸の儘、婆娑羅の大神が祭つてある、あの座敷の古柱へ、ぐるぐる卷に括りつけられて、松葉燻し位にはされ兼ねますまい。さう思ふともう新藏は、おちおち寐てもゐられないやうな氣がしますから、四日目には床を離れるが早いか、兎にも角にも泰さんの所へ、知慧を借りに出かけようとすると、丁度其處へその泰さんの所から、電話がかゝつて來たぢやありませんか。しかもその電話と云ふのが、外ならないお敏の一件で、聞けば昨夜遲くなつてから、泰さんの所へお敏が來た。さうして是非一度若旦那樣に御目にかかつて、委細の話をしたいのだが、以前奉公してゐた御店へ、電話もまさかかけられないから、あなたに言傳てを賴みたい――と云ふ用向きだつたさうです。逢ひたいのは、こちらも同じ思ひですから、新藏は殆送話器にすがりつきさうな勢で、「どこで逢ふと云ふんだらう」と、一生懸命に問ひかけますと、能辯な泰さんは、「それがさ」とゆつくり前置きをして、「何しろあんな內氣

な女だ、一二三度會つたばかりの僕の所へ、尋ねて來ようと云ふんだから、よくよく思ひ餘つての上なんだらう。さう思うと、僕もすつかりつままれてしまつてね、すぐに待合をとも考へたんだが、婆の手前は御湯へ行くと云つて出て來るんだと聞いて見りや、川向うは少し遠すぎるし——と云つて外に然るべき所もないから、よろしい、僕の所の二階を明渡しませうつて云つたんだが、餘り恐れ入りますからとか何とか云つて、どうしても承知しない。尤もこりや氣兼ねをするのも、無理はないと思つたから、ぢやどこかにお前さんの方に、心當りの場所でもありますかつて尋ねると、急に赤い顏をしたがね。小さな聲で、明日の夕方、近所の石河岸まで若旦那樣に來て頂けないでせうかと云ふんだ。野天の逢曳は罪がなくつて好い」と、笑を嚙み殺した容子でした。が、元より新藏の方は笑ふ所の騷ぎぢやなく、「ぢや石河岸ときまつたんだね」と、もどかしさうに念を押すと、仕方がないから、さうきめて置いた。時間は六時と七時との間、用が濟んだら、自分の所へも寄つてくれと云ふ返事です。新藏は禮と一しよに承知の旨を答へると、早速電話を切りましたが、さあそれから日の暮までが、待遠しいの、待遠しくないのぢやありません。算盤を彈く。帳合ひを手傳ふ。中元の進物の差圖をする。——その合間には、ぢれつたさうな顏をして、帳場格子の上にある時計の針ばかり氣にしてゐました。

さう云ふ苦しい思ひをして、やつと店をぬけ出したのは、まだ西日の照りつける、五時少し前でしたが、その時妙な事があつたと云ふのは、小僧の一人が揃へて出した日和下駄を突かけて、新刊書類の建看板が未に生乾きのペンキの匂を漂はしてゐる後から、アスファルトの往來へひよいと一足踏み出すと、新藏のかぶつてゐる麥藁帽子の庇をかすめて、蝶が二羽飛び過ぎました。鳥羽揚羽と云ふのでせう。黑い翅の上に氣味惡く、靑い光澤がかかつた蝶なのです。勿論その時は格別氣にもしないで、二羽とも高い夕日の空へ、揉み上げられるやうになつて見えなくなるのを、ちらりと

頭の上に仰ぎながら、折よく通りかかつた上野行の電車へ飛び乘つてしまひましたが、さて須田町で乘換へて、國技館前で降りて見ると、又ひらひらと麥藁帽子にまつはるのは、やはり二羽の黒い揚羽でした。が、まさか日本橋から此處まで蝶が跡をつけて、來ようなどとは考へませんから、この時もやはり氣にとめずに、約束の刻限にはまだ餘裕もあらうと云ふので、あれから一つ目の方へ曲る途中、看板に藪とある、小綺麗な蕎麥屋を一軒見つけて、仕度旁々はいつたさうです。尤も今日は謹んで、酒は一滴も口にせず、妙に胸が閊へるのを、やつと冷麥を一つ平げて、往來の日足が消えた時分、まるで人目を忍ぶ落人のやうに、こつそり暖簾から外へ出ました。するとその外へ出た所を、追ひすがる如くさつと來て、おやと思ふ鼻の先へ一文字に舞ひ上つたのは、今度も黒天鵞絨の翅の上に、青い粉を刷いたやうな、一對の烏羽揚羽なのです。その時は氣のせいか、額へ羽搏つた蝶の形が、冷やかに澄んだ夕暮の空氣を、鳥程の大きさに切抜いたかと思ひましたが、ぎよつとして思はず足を止めると、その儘すつと小さくなつて、互にからみ合ひながら、見る見る空の色に紛れてしまひました。重ね々々の怪しい蝶の振舞に、新藏もさすがに怯氣がさして、恐く石河岸なぞへ行つて立つてゐたら、身でも投げたくなりはしないかと、二の足を蹈む氣さへ起つたと云ひます。が、それだけ又心配なのは、今夜逢ひに來るお敏の身の上ですから、新藏はすぐに心をとり直すと、もう黄昏の人影が蝙蝠のやうにちらほらする回向院前の往來を、側目もふらずまつすぐに、約束の場所へ駈けつけました。所が駈けつけるともう一度、御影の狛犬が並んでゐる河岸の空からふはりと來て、青光りのする翅と翅とがもつれ合つたと思ふ間もなく、蝶は二羽とも風になぐれて、まだ薄明りの殘つてゐる電柱の根元で消えたさうです。

ですからその石河岸の前をぶらぶらして、お敏の來るのを待つてゐる間も、新藏は氣が氣ぢやありません。麥藁帽子をかぶり直したり、袂へ忍ばせた時計を見たり、小一時間と云ふものは、さつき店の帳場格子の後にゐた時より、もつ

と苛立たしい思ひをさせられました。が、いくら行つてもお敏の姿が見えないので、我知らず石河岸の前を後にながら、お島婆さんの家の方へ、半町ばかり歩いて來ると、右側に一軒洗湯があつて、大きな柳の枝を垂らした上に、[illegible]湯と古めかした、ペンキ塗りの看板が出てゐます。お敏が湯に行くのを口實に、家を出ると云つたのは、この洗湯ぢやないかと思ふ。——丁度その途端に女湯の暖簾をあげて、夕闇の往來へ出て來たのは、紛れもないお敏でした。なりはこの間と變りなく、撫子模様のめりんすの帶に紺絣の單衣でしたが、今夜は湯上りだけに血色も美しく、銀杏返しの髮のあたりも、まだ濡れてゐるのかと思ふ程、艶々と櫛目を見せてゐます。それが濡手拭と石鹸の箱とをそつと胸へ抱くやうにして、何が怖いのか、往來の右左へ心配さうな眼をくばりましたが、すぐに新藏の姿を見つけたのでせう。まだ氣づかはしさうな眼でほほ笑むと、ちと遊藝に男の側へ歩み寄つて、「長い事御待たせ申しまして」と便なささうに云ひました。「何、いくらも待ちやしない。それよりお前、よく出られたね。」新藏はかう云ひながら、お敏と一しよに元來た石河岸の方へゆつくり歩き出しましたが、相手はやはり落着かない容子で、そはそは後ばかり見返りますから、「どうしたんだ。まるで追手でもかかりさうな風ぢやないか」と、わざと調戲ふやうに聲をかけますと、お敏は急に顏を赤らめて、「まあ私、折角いらしつて下すつた御禮も申し上げないで——ほんたうによく御出で下さいました」と、それでも不安らしく答へるのです。そこで新藏も氣がかりになつて、あの石河岸へ來るまでの間に、いろいろ仔細を尋ねましたが、お敏は唯苦しさうな微笑を洩らして、「かうしてゐる所が見つかつて御覽なさいまし。私ばかりかあなたまで、どんな恐しい目に御遇ひになるか知れたものではございませんよ」と、それだけの返事しかしてくれません。その内にもう二人は、約束の石河岸の前へ來かかりましたが、お敏は薄暗がりにつくばつてゐる御影の狛犬へ眼をやると、ほつと安心したやうな吐息をついて、その下をだらだらと川の方へ下りて行くと、根府川石が何本も、船から揚げた儘寐かして

ある。――其處まで來て、やつと立止つたさうです。恐る恐るその後から、石河岸の中へはいつた新藏は、例の猶太の陰になつて、往來の人目にかからないのを幸、夕じめりのした根府川石の上へ、無造作に腰を下しながら、「私の命にかかはるの、恐しい目に遇ふのつて、一體どうしたと云ふ譯なんだい」と、又さつきの返事を促しました。するとお敏は暫くの間、蒼黒く石垣を浸してゐる竪川の水を見渡して、靜に何か口の内で祈念してゐるやうでしたが、やがてその眼を新藏に返すと、始めて、嬉しさうに微笑して、「もう此處まで來れば大丈夫でございますよ」と、囁くやうに云ふぢやありませんか。新藏は狐につままれたやうな顔をして、無言の儘お敏の顔を見返しました。それからお敏が、自分も新藏の側へ腰をかけて、途切れ勝にひそひそ話し出したのを聞くと、成程二人は時と場合で、命位は取られ兼ねない、恐しい敵を控へてゐるのです。

元來あのお島婆さんと云ふのは、世間ぢや母親のやうに思つてゐますが、實は遠縁の叔母とかで、お敏の兩親が生きてゐた内は、つき合ひさへしなかつたものださうです。何でも代々宮大工だつたお敏の父親に云はせると、「あの婆は人間ぢやねえ。嘘だと思つたら、横つ腹を見ろ。魚の鱗が生へてゐるぢやねえか」とかで、往來でお島婆さんに遇つたと云つても、すぐに切火を打つたり、浪の花を撒いたりする位でした。が、その父親が歿くなつて間もなく、お敏には幼馴染で母親には姪に當る、或病身な身なし兒の娘が、お島婆さんの養女になつたので、自然お敏の家とあの婆の家との間にも、親類らしい往來が始まつたのです。けれどもそれさへほんの一二年で、お敏は母親に死なれると、世話をする兄弟もなかつたので、百ケ日もまだすまない内に、日本橋の新藏の家へ奉公する事になりましたから、それぎりお島婆さんとも交渉が絶えてしまひました。さう云ふあの婆の所へ、どうして又お敏が行くやうになつたかは、後で御話しする事にしませう。

所でお島婆さんの素性はと云ふと、殁くなつた父親にでも聞いて見たら兎も角、お敏は何も知りませんが、唯、昔から口寄せの巫女をしてゐたと云ふ事だけは、母親か誰かから聞いてゐました。が、お敏が知つてからは、[illegible]婆娑羅の大神と云ふ、怪しい物の力を借りて、加持や占をしてゐたさうです。この婆娑羅の大神と云ふのが、やはりお島婆さんのやうに、何とも素性の知れない神で、やれ天狗だの、狐だのと、いろいろ取沙汰もありましたが、お敏にとつては産土神の天満宮の神主などは、必何か水府のものに相違ないと云つてゐました。そのせいかお島婆さんは、毎晩二時の時計が鳴ると、裏の縁側から梯子傳ひに、竪川の中へ身を浸して、ずつぷり頭まで水に隠した儘、三十分あまりもはいつてゐる――それもこの頃の陽氣ばかりだと、さほどこたへはしますまいが、寒中でもやはり湯浴き一つで、紛々と降りしきる雪の中を、まるで人面の獺のやうに、さぶりと水へはいると云ふぢやありませんか。一度などはお敏が心配して、電燈を片手に雨戸を開けながら、そつと川の中を覗いて見たら、向う岸の並藏の屋根に白々と雪が殘つてゐるだけ、それだけ餘計黑い水の上に、婆の切髪の頭だけが、浮巣のやうに漂つてゐたさうです。その代りこの婆のする事は、加持でも占でも驗がある。――と云ふと、善い方ばかりのやうですが、この婆に金を使つて、親とか夫とか兄弟とかを呪ひ殺したものも大勢ゐました。現にこの間この石河岸から身を投げた男なぞも、同じ柳橋の藝者とかに思をかけた或米問屋の主人の頼みで、あの婆が造作もなく命を捨てさせてしまつたのださうです。が、どう云ふ秘密な理由があるのか、一人でも其處で呪ひ殺された、この石河岸のやうな場所になると、さすがの婆の加持祈禱でも、そのゐまはりにゐる人間には、害を加へる事が出來ません。のみならず、其處でしてゐる事は、千里眼同様な婆の眼にも、はいらずにすむやうですから、それでお敏は新藏を、わざわざこの石河岸へ呼び寄せたと云ふ次第なのです。

ではどう云ふ譯でお島婆さんが、それ程お敏と新藏との戀の邪魔をするかと云ひますと、この春頃から相場の高低を

見て貰ひに來る或株屋が、お敏の美しいのに目をつけて、大金を餌にあの婆を釣つた結果、妾にする約束をさせたのださうです。が、それだけなら、兎も角も金で埒の開く事ですが、此處にもう一つ不思議な故障があるのは、お敏を手離すと、あの婆が加持も占も出來なくなる――と云ふのは、お島婆さんがいざ仕事にとりかかるとなると、まづその婆娑羅の大神をお敏の體に祈り下して、神憑りになつたお敏の口から、一々差圖を仰ぐのださうです。これは何もさうしなくとも、あの婆自身が神憑りになつたらよささうに思はれますが、さう云ふ夢とも現ともつかない恍惚の境にはいつたものは、その間こそ人の知らない世界の消息にも通じるものの、醒めたが最後、その間の事はすつかり忘れてしまひますから、仕方がなくお敏に神を下して、その言葉を聞くのだとか云ふ事でした。かう云ふ事情がある以上、あの婆がお敏を手離さないのも、まづ尤もと云はなければなりますまい。所が株屋の方は又それがつけ目なので、お敏を妾にする以上、必お島婆さんもついて來るに相違ありませんから　そこでこれには相場を占はせて、あはよくば天下を取らうと云ふ、色と慾とにかけた腹らしいのです。

が、お敏の身になつて見れば、如何に夢現の中で云ふ事にしろ、お島婆さんが惡事を働くのは、全く自分の云ひつけ通りにするのですから、良心がなければ知らない事、こんな道具に使はるのは空恐しいのに相違ありません。さう云へば前に御話ししたお島婆さんの養女と云ふのも、引き取られるからこの役に使はれ通しで、唯でさへ脾弱いのが益々病身になつてしまひましたが、とうとうしまひには心の罪に責められて、あの婆の寐てゐる暇に、首を縊つて死んだと云ふ事です。お敏が新藏の家から暇をとつたのは、この養女が死んだ時で、可哀さうにその新佛が幼馴染のお敏へ宛てた、一封の書置きがあつたのを幸、早くもあの婆は後釜にお敏を据ゑようと思つたのでせう。まんまとそれを種に暇を貰はせて、今の住居へおびき寄せると、殺しても主人の所へは歸さないと、强面に云ひ渡してしまつたさうです。が、勿論

新藏と堅い約束の出來てゐたお敏は、その晩にも逃げ出る心算だつたさうですが、向うも用心してゐたのでせう、何しろ入口の格子戸を潜つても、戸外に一匹の蛇が大きなとぐろを卷いてゐるので、到底一足も踏み出す勇氣は、起らなかつたと云ふ話です。それからその後も何度となく、隙を狙つては逃げ出しにかかると、やはり似たやうな不思議があつて、どうしても本意が遂げられません。そこでこの頃は仕方がなく何も因縁事と諦めて、泣く泣くお島婆さんの云ひなり次第になつてゐました。

所がこの間新藏が來て以來、二人の關係が知れて見ると、日頃非道なあの婆が、お敏を責めるの責めないのぢやありません。それも打つたりつねつたりするばかりか、夜更けを待つては怪しげな法を使つて、兩腕を空ざまに吊し上げたり、頸のまはりへ蛇をまきつかせたり、聞くさへ身の毛のよ立つやうな、恐しい目にあはせるのです。が、それよりも更につらいのは、さう云ふ折檻の相間々々に、あの婆がにやりと嘲笑つて、これでも思ひ切らなければ、新藏の命を縮めても、お敏は人手に渡さないと、忌々しく嚇す事でした。かうなるとお敏も絶體絶命ですから、今までは何事も宿命と覺悟をきめてゐたのが、萬一新藏の身の上に、取り返しのつかない事でも起つては大變と、とうとう男に一部始終を打ち明ける氣になつたのです。が、それも新藏が委細を聞いた後になつて、さう云ふ恐しい事をする女かと、嫌ひもし蔑みもしさうでしたから、愈々泰さんの所へ駈けつけるまでには、どの位思ひ迷つたか、知れない程だつたと云ふ事でした。

お敏はかう話し終ると、又何時ものやうに蒼白くなつた顔を擧げて、ぢつと新藏の眼を見つめながら、「さう云ふ因果な身の上なのでございますから、いくらつらくつても悲しくつても、何もなかつた昔と諦めて、この儘――」と云ひかけましたが、もう我慢が出來なくなつたと見えて、男の膝へすがつたなり、袖を噛んで泣き出しました。途方に暮れた

のは新藏で、暫くは唯お敏の背をさすりながら、叱つたり励ましたりしてゐたものの、さてあのお島婆さんを向うにまはして、どうすれば無事に二人の戀を遂げる事が出來るかと云ふと、殘念ながら勝算は到底ないと云はなければなりません。が、勿論お敏の爲にも弱味を見すべき場合ではないので、無理に元氣の好い聲を出しながら、「何、そんなに心配おしでない。長い間には又何とか分別もつかうと云ふものだから」と、一時のがれの慰めを云ひますと、お敏は漸く涙をおさめて、新藏の膝を離れましたが、それでもまだ潤み聲で、「それは長い間でしたら、どうにかならない事もございますまいが、明後日の夜は又家の御婆さんが、神を下すと云つて居りましたもの。もしその時私がふとした事でも申しましたら――」と、術なさゝうに云ふのです。これには新藏も二度吐衝いて、折角のつけ元氣さへ、全く沮喪せずにはゐられませんでした。明後日と云へば、今日明日の中に、何とか工夫をめぐらさなければ、自分は元よりお敏まで、とり返しのつかない不幸の淵に、沈淪しなければなりますまい。が、たつた二日の間に、どうしてあの怪しい婆を、取つて抑へる事が出來ませう。たとひ警察へ訴へたにしろ、幽冥の世界で行はれる犯罪には、法律の力も及びません。さうかと云つて社會の輿論も、お島婆さんの惡事などは、勿論哂ふべき迷信として、不問に附してしまふでせう。さう思ふと新藏は、今更のやうに胸を組んで、茫然とするより外はありませんでした。さう云ふ苦しい沈默が、暫くの間續いた後で、お敏は涙ぐんだ眼を擧げると、仄かに星の光つてゐる暮方の空を眺めながら、「いつそ私は死んでしまひたい」と、かすかな聲で呟きましたが、やがて物に怯えたやうに、怖々あたりを見廻して、「餘り遲くなりますと、又家の御婆さんに叱られますから、私はもう歸りませう」と、根も精もつき果てた人のやうに云ふのです。成程さう云へば此處へ來てから、三十分は確に經ちましたらう。夕闇は潮の匂と一しよに二人のまはりを立て罩めて、向う河岸の葺の山も、その下に繋いである苫船も、茫茫たる一色に隱れながら、唯竪川の水ばかりが、丁度大魚の腹のやうに、うす白くうね

うねと光つてゐます。新藏はお敏の肩を抱いて、嬉しい眼を合せながら、「兎も角も明日の夕方には、又此處まで來てくれ。私もそれまでには出來るだけ、知慧を絞つて見る心算だから。」と、一生懸命に力をつけました。お敏は頷いて涙の痕をそつと濡手拭で拭きながら、無言の儘悲しさうに頷きましたが、さて悄々根府川石から立上つて、これも萎れ切つた新藏と一しよに、あの御影の狛犬の下を寂しい往來へ出やうとすると、急に又涙がこみ上げて來たのでせう。夜目にも美しい襟足を見せて、せつなさうにうつむきながら、「あゝ、いつそ私は死んでしまひたい」と、もう一度かすかにかう云ひました。するとその途端です。さつき二羽の黒い蝶が消えた、例の電柱の根元の所に、大きな人間の眼が一つ、朦朧として浮び出したぢやありませんか。それも睫毛のない、うす雲い膜がかかつたやうな、瞳の色の濁つてゐる、何處を見てゐるともつかない眼で、大きさは彼是三尺あまりもありましたらう。始は水の泡のやうにふつと出て、それから地の上を少し離れた所へ、漂ふ如くぼんやり止りましたが、忽ちそのどろりとした煤色の瞳が、斜に社の方へ寄つたさうです。その上不思議な事には、この大きな眼が、往來を流れる闇ににじんで、朦朧とあつたのに關らず、何とも云ひやうのない惡意の閃きを藏してゐるやうに見えました。新藏は思はず拳を握つて、お敏の體をかばひながら、必死にこの幻を見つめたと云ひます。實際その時は總身の毛穴へ、冷風がふきこんだかと思ふ程、ぞつと背筋から寒くなつて、息さへつまるやうな心もちだつたのでせう。いくら聲を立てようと思つても、舌が動かなかつたと云ふ事でした。が、幸その眼の方でも、暫くは懸命の憎惡を瞳に集めて、やはりこちらを見返すやうでしたが、見る見る内に形が薄くなつて、最後に貝殼のやうな瞼が落ちると、もう其處には電柱ばかりで、何も怪しい物の姿は見えません。唯、あの烏羽揚羽のやうな物が、ひら〳〵飛び立つたやうに見えたさうですが、それは事によると、地を掠めた蝙蝠だつたかも知れますまい。その後で新藏とお敏とは、まるで惡い夢からでも醒めたやうに、うつとり色を失つた顔を見合せましたが、忽ちの

眼の中に恐しい覺悟の色を讀み合ふと、我知らずしつかり手をとり交して、わなわな身ぶるひしたと云ふ事です。

　それから三十分ばかり經つた後、新藏はまだ眼の色を變へた儘、風通しの好い裏屋敷で、主人の泰さんを前にしながら、今夜出合つたさまざまな不思議な事を、小聲でひそひそと話してゐました。二羽の黑い蝶の事、お島婆さんの祕密の事、大きな眼の幻の事——すべてが現代の靑年には、荒唐無稽としか思はれない事ですが、兼ねてあの婆の怪しい呪力を心得てゐる泰さんは、更に疑念を挾む氣色もなく、アイスクリィムを薦めながら、片唾を呑んで聞いてくれるのです。「その大きな眼が消えてしまふと、お敏はまつ蒼な顏をして、『どうしませう。此處であなたに御目にかかつたのが、もう御婆さんに知れてしまひました』と云ふんだ。が、僕は『かうなつたが最後、あの婆と我々との間には、戰爭が始まつたのも同樣なんだから、知れようが知れまいが、かまふもんか』つて威張つたんだがね。困つた事には今も話した通り、僕は明日又あの石河岸で、お敏と落合ふ約束がしてあるだらう。所が今夜の出合ひがあの婆に見つかつたとなると、恐らく明日はお敏を手放して、出さないだらうと思ふんだ。だからよしんばあの婆の爪の下から、お敏を救ひ出す名案があつてもだね、おまけにその名案が今日明日中に思ひついたにしてもだ。明日の晩お敏に逢へなけりや、すべての計畫が畫餠になる譯だらう。さう思つたら、僕はもう、神にも佛にも見放されたやうな心もちがしてね。お敏に別れて此處へ來るまでの間も、まるで足は地に着いてゐないやうな心もちだつた。」——新藏はかう委細を話し終ると、思ひ出したやうに團扇を使ひながら、心配さうに泰さんの顏を窺ひました。が、泰さんは存外驚かずに、暫くは唯軒先の釣忍が風にまはるのを見てゐましたが、漸く新藏の方へ眼を移すと、それでもちよいと眉をひそめて、「つまり君が目的を達するにや、三重の難關がある譯だね。第一に君はお島婆さんの手から、安全にだね、安全に御敏さんを奪ひ取らなければならない。第二にそれも明後日までには、是非共實行する必要がある。それからその實行上の打合せをする爲に、

明日中にお敏さんに逢つて見たい――と云ふのが第三の難關だらう。そこでそれは――さへ切り拔けられりや、どうにでもなると思ふんだ」と、自信があるらしい口調で云ふのです。が、泰さんはまだ不審な顔をした儘、「どうして？」と、疑はしさうに尋ねました。すると泰さんは面憎い程落着いた顔をして、「何、譯はありやしない。君が逢へなけりや――」と云ひかけましたが、急にあたりを見廻しながら、「かうつと、こりやいさと云ふ時まで伏せて置かう。どうせさつきからの話ぢや、あの婆め、君のまはりへ嚴重に網を張つてゐるらしいから、うつかりした事は云はない方が好ささうだ。實は第一第二の難關も破つて破れなくはなさうに思ふんだが――まあ、さあ、萬事僕に任せて置くさ。それより今夜は麥酒でも飲んで、大いに勇氣を養つて行き給へ」と、しまひにはさも氣樂らしい笑に紛してしまふぢやありませんか。新藏は勿論それを、もどかしくも腹立たしくも思ひましたが、さてその麥酒が始まつて見ると、やはり泰さんの用心が尤もだつたと思ふやうな事が起りました。と云ふのは二人の間に浮かない世間話が始まつてから、ふと泰さんが氣がつくと、燻し鮭の小皿と一しよに、新藏の膳に載つて居るコップがもう泡の消えた黑麥酒をなみなみと湛へた儘、口もつけずに置いてあります。そこで泰さんが水の垂れる麥酒罎の尻をとつて、「さあ、ちつと陽氣に干さうぢやないか」と、相手を促した時の事でした。何氣なくそのコップをとり上げた新藏が、ぐいと一息に飲まうとすると、直徑二寸ばかり圓を描いた、つらりと光る黑麥酒の面に、天井の電燈や後の障子が映つてゐる――其處へ一瞬間、見慣れない人間の顔が映つたのです。いや、もつと精密に云へば唯見慣れない顔と云ふだけで、人間かどうかもはつきりとはわかりません。こちらの考へ方一つでは、鳥とでも、獸とでも、乃至は蛇や蛙とでも、思つて思へない事はないのです。それも顔と云ふよりは、寧ろその一部分で、殊に眼から鼻のあたりが、まるで新藏の肩越しにそつとコップの中を覗いたかの如く、電燈の光を遮つて、ありありと影を落しました。かう云ふと長い間の事のやうですが、前に

も云つた通りほんの一瞬間で、何とも判然しない物の眼が、直徑二寸の黑麥酒の圓の中から、ちらりと新藏の眼を窺つたと思ふと、忽消え失せてしまつたのです。新藏は飲まうとしたコツプを下へ置いて、きよろきよろ前後を見廻しました。が、電燈も依然として明ければ、軒先の釣忍も相不變風に廻つてゐて、この涼しい裏座敷には、更に妖臭を帶びた物も見當りません。「どうした。虫でもはいつたんぢやないか。」――かう泰さんに尋ねられた新藏は、仕方なく額の汗を拭つて、「何、妙な顏がこの麥酒に映つたんだ」と、恥しさうに答へました。これを聞くと泰さんは、「妙な顏が映つた？」と反響のやうに繰返しながら、新藏のコツプを覗きこみましたが、元より今はさう云ふ泰さんの顏の外に、顏らしいものは何も映りません。「君の神經のせいぢやないか。まさかあの婆も、僕の所までは手を出しやしなからう。」「だつて君は今も自分でさう云つたぢやないか。僕の體のまはりにや、拔け目なくあの婆が網を張つてゐるからつて。」「大きにさうだつけ。だがまさか――まさかその麥酒のコツプへ、あの婆が舌を入れて、一口頂戴したつて次第でもなからう。それならかまはないから、干してしまひ給へ。」――かう云ふ具合に泰さんは、いろいろ沈んだ相手の氣を引き立てようとしましたが、新藏は益々ふさぐ一方で、とうとうそのコツプも干さない内に、もう歸り仕度をし始めました。そこで泰さんもやむを得ず、呉々も力を落さないやうにと、再三親切な言葉を添へてから、電車では心もとないと云ふので、車まで云ひつけてくれたさうです。

その晩は寢ても、妙な夢ばかり見て、何度となくうなされましたが、それでも漸く朝になると、新藏は早速泰さんの所へ、昨夜の禮旁々、電話をかけました。すると電話に出て來たのは、泰さんの店の番頭で、「旦那は今朝程早く、どちらかへ御出でかけになりました」と云ふ挨拶なのです。新藏はもしやお島婆さんの所へでも、行つたのぢやないかと思ひましたが、打ち明けてさう尋ねる譯にも行かず、又尋ねたにした所で、餘人の知つてゐる筈もありませんから、歸り

匆々知らせてくれるやうにと、よく番頭に頼んで置いて、一まづ電話を切つ今度は泰さんから電話がかかつて來て、案の定今朝お島婆さんの所へ、家相を見て貰ひに行つたと云ふのです。「實は、お敏さんに會つたからね、僕の計略だけは手紙にして、そつとあの人の手に握らせて來たよ。返事は明日でなくつちやわからないが、何しろ非常の場合だから、お敏さんも振つて引受けさうなもんだ。」——かう云ふ泰さんの言葉を聞いてゐると、如何にも萬事が好都合に運びさうな氣がしますから、愈々新藏はその計畫と云ふのが知りたくなつて、「一體何をどうする心算なんだ」と尋ねますと、泰さんはやはり昨夜のやうに、電話でもにやにや笑つてゐる容子で、「まあ、もう二三日待ち給へ。あの婆が相手ぢや、電話だつて油斷がならないからね。ぢやいづれ又僕の方から、電話をかける事にしやう。さやうなら」と云ふ始末なのです。電話を切つた新藏は、何時もの通りその後で、帳場格子の後へ坐りましたが、さあ此處二日の間に自分とお敏との運命がきまるのだと思ふと、心細いともつかず、もどかしいともつかず、さうかと云つて猶更又嬉しいともつかず、唯妙にわくわくした心もちになつて、帳面や算盤も手につきません。そこでその日は、まだ熱がとれないやうだと云ふのを口實に、午から二階の居間で寢てゐました。が、その間でも絶えず氣になつたのは、誰かが自分の一擧一動をぢつと見つめてゐるやうな心もちで、これは寢てゐると起きてゐるとに關らず、執念深くつきまとつてゐたさうです。現に午過ぎの三時頃には、確に二階の梯子段の上り口に、誰か蹲つてゐるものがあつて、その視線が葭戸越しに、こちらへ向けられてゐるやうでしたから、すぐに飛び起きて、其處まで出て行つて見ましたが、唯磨きこんだ廊下の上に、ぼんやり窓の外の空が映つてゐるだけで、何も人間らしいものは見えませんでした。

かう云ふ具合でその翌日になると、益々新藏は氣が氣でなくなつて、泰さんの電話がかかるのを今か今かと待つてゐましたが、漸く昨日と同じ刻限になつて、約束通り電話口へ呼び出されました。しかし出て見ると泰さんは、昨日より

更に元氣の好い聲で、「とう。とう君、お敏さんの返事があつてね、一切僕の計畫通り實行する事になつたよ。何、どうして返事を受取つた？ 又用を拵へて、僕自身あの婆の所へ出馬したのさ。すると昨日手紙で頼んであるから、取次に出たお敏さんが、すぐに僕の手へ返事を忍ばせたんだ。可愛い返事だぜ。平假名で『しやうちいたしました』と書いてある――」と、得意らしく辯じ立てるのです。所が今日は妙な事に、かう云ふ言葉の途中から、泰さんの聲ばかりでなく、もう一人誰かの聲がはいりました。尤もこの聲と云ふのも、何と云つてゐるのだか、言葉は皆目わからないのですが、兎に角勢の好い泰さんの聲とは正反對に、鼻へかかつた、力のない、喘ぐやうな、まだるい聲が、丁度陰と日向とのやうに、泰さんの饒舌つて行く間を縫つて、受話器の底へ流れこむのです。始めの内は新藏も、混線だらう位な量見で、別に氣にもしませんでしたから、「それから、それから」と促し立てて、懷しいお敏の消息を、夢中になつて聞いてゐました。が、その内に泰さんにも、この妙な聲が聞えたのでせう。「何だか騷々しいな。君の方かい」と尋ねますから、「いや、僕の方ぢやない。混線だらう」と答へますと、泰さんはちよいと舌打ちをした氣色で、「ぢや一度切つて、又かけ直すぜ」と云ひながら、一度所か二度も三度も、交換手に小言を云つちや、根氣よく繋ぎ直させましたが、やはり蟲の呟くやうな、ぶつぶつ云ふ聲が聞えるのです。泰さんもしまひには我を折つて、「仕方がないな。どこかに故障があるんだらう。――が、それより肝腎の本筋だがね、愈々お敏さんが承知したとなりや、まあ、萬々計畫通り成功するだらうと思ふから、安心して吉報を待つてゐ給へ」と、又さつきの話を續け出しましたが、新藏はやはり泰さんの計畫と云ふのが氣になるので、もう一遍昨日のやうに、「一體何をどうする心算なんだ」と尋ねますと、相手は例の如く澄ましたもので、「もう一日辛抱し給へ。明日の今時分までにや、きつと君にも知らせられるだらうと思ふから。――まあ、そんなに急がないで、大船に乗つた氣で待つてゐるさ。果報は寢て待てつて云ふぢやないか」と、冗談まじりに答へました。す

るとその聲がまだ終らない内に、もう一つのぼやけた聲が急に耳の側へ來て、「惡あがきは思ひ切つたがいゝや」と、はつきり嘲笑つたぢやありませんか。泰さんと新藏とは思はず同時に兩方から、「何だ、今の聲は」と尋ね合ひましたが、それぎり受話器の中はひつそりして、あの呟くやうな笑聲さへ全く聞えなくなつてしまひました。「こりやいけない。今のは君、あの婆だぜ。惡くすると、折角の計畫も──まあ、すべてが明日の事だ。おれもこれで失敬するよ。」──から云ひながら、電話を切つた泰さんの聲の中には、明かに狼狽したけはひが感じられました。又實際お島婆さんが、二人の間の電話にさへ氣を配るやうになつたとすると、勿論泰さんとお敏とが秘密の手紙をやりとりしてゐるにも、目をつけてゐるのに相違ありませんから、泰さんの慌てるのもむりもないのです。まして新藏の身になつて見れば、どうする心算か知らないにもせよ、兎に角かけ換のない泰さんの計畫が、あの婆に裏を掻かれる以上、それこそ萬事休してしまふより外はありません。ですから新藏は電話口を離れると、まるで喪心した人のやうに、ぼんやり二階の居間へ行つて、日が暮れるまで、窓の外の青空ばかり眺めてゐました。その空にも氣のせいか、時々あの忌はしい鳥羽揚羽が、何十羽となく群を成して、氣味の惡い更紗模樣を織り出した事があるさうですが、新藏はもう惱む心もすつかり疲れ果ててゐましたから、その不思議を不思議として、感じる事さへ出來なかつたと云ひます。

以上掲載したる分は「妖婆」の略ぼ三分の二位の由なるが、こゝまで進行するや、作者も此「妖婆」の妖氣に祟られしにや、急に發熱して、臥床數日に及ぶも未だ頭を枕より上ぐるを得ず、作者も編者も多大の遺憾を以て、我文壇に比類なき驚くべき藝術的新怪譚の結末を、次號の發行まで、讀者諸彥の高覽に供する能はざることを謹謝す（編者しるす）

順番

菊池寛

人物

吉原一郎……二十六歳、狂人

その弟二郎……

その弟豐……中學を出たばかりの少年

武田……豐の友達

兄弟の伯父眞崎……五十五六の老人

所及び時代

四國の北の海岸にある城下町。明治四十年頃のこと。

舞臺の景情。 此の城下町に殘つて居る少數な士族の家の一軒である吉原の家の表座敷、疊や襖などは古びて居るが、此家が昔は相當に裕福であつたことが、何からともなく觀取される。座敷の左手に廊下があつて、その廊下に接して作られて居る座敷牢の格子の一端が、見えて居る。此家の長男の一郎が、その中に入れ

られて居て、時々思ひ出したやうに、意味不明な叫び聲を揚げる。右手に二階へ上る階段が見えて居る。長押に掛か二本掛けられて居る。襖が開くと、此家の三男の豐が、右手緣側に近い所に机を置いて、勉强をして居る。暫くすると、次男の二郎が、左手からそゝくさとは入つて來る。奥の庭か何處かに居たものらしい。豐、兄の顏を見て。

豐。兄さん！大きい兄さんが、やかまし云ふて勉强も、何も出來やせん。

二郎。（豐の言葉を、耳には入れないやうに、默つたまゝ、行き過ぎようとする）……。

豐。もう、試驗に十日しかないのに、困るなあ。から、勉强が出來んで……此の頃は、大きい兄さんの病氣が、募つとるけに、高坂さんにでも、見せたらえゝ云ふて、お母さんが云ふとるのに、何うして見せんの。

二郎。（一寸階段に足をかけながら、立ち止つて）あないな藪醫者に見せたつて、氣狂が、癒るもんか。やかましいのが嫌なら、氣狂の弟にやこし生れて來るな（と云ひ捨てたまゝ二階に上つてしまふ）

豐。（激昂して何か云はふとしたが思ひ止まつたらしく、いま／＼しさうに、兄の後を見送りながら）何ぢや！小いさい兄さん迄が、氣が變になつて居る。無茶な事を云ひよる。

（机に改めて向ふが、暫らくに何も出來ないやうに、ヤケに本の頁をめくつて居る。暫らくすると戶外で、「吉原君！」と、呼ぶ聲がする）

豐。（耳を欹てながら）誰だい！武田君かい！は入らないかあ。

（「は入つてもえゝかい！」と云ふ聲がして、豐の友達、武田は入つて來る。豐と同じ位の少年、紺飛白の衣物を着て居る）

武田。失敬！

豐。失敬！

武田。何ういや、もう調べは濟んだかい。

豐。いゝや、やつと幾何と代數を濟したばつかりぢや。昨日から三角にかゝつとるんぢやけど、仲々間に合ひさうもない。

武田。けど、君の調べはもう二度目なんぢやらう。僕は、初てゞまだ暗記物にちつとも手を付けて居らんのぢや。

豐。暗記物なら僕だつて、同じぢや。それに、兄さんが此間中から、容態が惡うて、騷ぎ廻つて仕樣がないんぢや。勉强どころぢやないんぢや。落着いて何も出來やせんのぢや。

武田。困るなあ。ちつとも、好うならんの。

豐。氣が違ふたら、ちつとやそつとの事で、癒りやせんからなあ。この頃は、夜通し叫びよつて、ロク／＼寢られやせんがぢや。靜にして居るかと思ふと、想ひ出したやうに、狂ひ廻るんぢや。

武田。そりや困るなあ。

豐。實際、何を云ふても、相手が氣狂ぢやけに、何うする事も出來んのぢや。僕も、入學試驗にうまくパスして、東京へ行つてしまひたいなあ。こなゝ家に居ると、堪らんからなあ。

武田。（話頭を轉じようとするやうに）君は、もう行く準備が出來たの。

豐。試驗の五日前位に、向ふへ着くやうに、此の三日に發たうと思つとるんぢや。

武田。（懷から敎科書を、取出して頁をめくりながら）今日、僕は君に幾何を一つ敎へて貰はうと思つて、來たんぢや。定理が一つ解らんのぢや。

豐。あゝえゝとち。

武田。百三十二頁の定理九十九。面積の定理なんぢや。

豐。（武田から、本を受取りながら）面積は、やつぱり一番難しいなあ。あゝ。こいつか、こいつなら解つとる。

（豐、說明しようとして居る時、玄關の開く音がして、伯父の眞崎默つて、は入つて來る。瘠せた男。豐と顏を見合はすと、豐一寸お辭儀をする。）

豐。伯父さん今日は。

眞崎。豐、お母さんは居らんかい。

豐。居らん。用があつて、藤野へ行た。

眞崎。二郎は居るかい。

豐。居る。二階に居る。

眞崎。また酒を飲んどりはせんか。

豐。何うか、わしや知らん。

（眞崎二階へ上つて行く。一郎の叫び聲、頻りに聞え始める。武田、いぶかしげに眞崎を見送つて）

武田。誰れ、今の人。

豐。眞崎云ふて、僕の伯父さんぢや。（幾何の本の圖を、指で辿りながら、前よりは元氣のない聲で）此の定理はかう考へたら、直ぐ解るんぢや。ほら、此の弦の上の正方形と、半徑OBと半徑OCとで、包む角形とが等しくなるぢやらう。從つて、此の三角形の面積と、此の正方形の面積とが同じになるんぢや。

武田。あゝさうか／＼。解つた／＼。僕はこの弦の上の正方形と云ふことを、ちつとも氣が付かなんだのぢや。こないに頭が惡いと、今年はとても駄目かも知れん。

（二階で、眞崎と二郎との云ひ爭ふ聲が、段々高くなつて來る。それに連れて、座敷牢の中の一郎の叫び聲も、劇しくなつて來る。豐、不安な顏付きになりながら、友達の手前を繕ふて何氣ない顏をして居る。）

武田。（當惑したやうな顏をして、モヂ／＼して居たが）あゝ僕は失敬しよう。君の勉强の邪魔をしたら、惡いから。ぢや君が發つのは三日ぢやのう。僕は、岡山ぢやけに、二時間もあつたら行けるけに、前の日位にゆつくり行かうと思ふとる。ぢや、さやうなら。

豐。もう、歸るんか。まだ、えゝぢやないか。もつと、話して行つてもえゝぢやらう…………氣の違つて居る者も、氣の違つて居らん者も、掛合でやかまし云ふとる。

武田。（氣の毒さうな顏をしながら）また、ゆつくり來る。いづれ、君が發つ前に、ゆつくり會はう。君も陸方にでもやつて來んか。

豐。あゝ行かう。きつと、行かう。

武田。ぢや、さやうなら。

豐。さやうなら。

（豐、武田を送つて、右手へ行く。直ぐ歸つて來る。二階の爭ふ聲は、極端にまで、激しくなつて居る。眞崎が、座を立つて、降りて來る氣勢がする）

眞崎。（階段に下半身を見せながら、極度に激昂した調子で、聲高く）阿呆め！お前のやうな道樂者に、此の吉原の家を

潰されて堪るもんか、伯父さんは、外の家を繼いで居るが、生れた家の大事なことには、ちやんと知つとるぞ。お前の父は、今こそ貧乏しとるけど、御家老の上席を勤めた立派な家柄ぢやぞ。お前見たいな阿呆に、やみ／＼と潰されて堪るもんか。豐と云ふ、よう出來た立派な子供もあるんぢや、お前やこしに勝手にされて、堪るもんか。（怒鳴りながら、階段を降り切つてしまふと　今度は豐に）豐！お前にも一寸云ふて置くが、今後兄さんを禁治産にすることに定めたからな、今度はお前が、此家の心棒になつた積で、しつかりせないかんぜ。

豐。（伯父の見幕に、茫然として居たが、やゝ落着いて）何うしてそなゝ事をするの。兄さんが、どなゝ惡いことをしたの。

眞崎。お前は、子供ぢやけに、何も知るまいが、兄さんはひどい事を、やつとるんぢやぞ。ひどい散財を續けて居るんぢや。家の道具や掛物を、手當り次第に持出して、賣飛して居るんぢや。此家の寶物の雪村の山水迄　もうとうに無しになつとるんぢや。あれは、吉原の家では、何よりも大切な御拜領の品なんぢや。それに、この頃では、閑座にある田地迄、賣らうとしとるんぢや。あれを賣られて見い、お母さんやお前や、それに氣狂ひの一郎迄明日から何を喰べて行くんぢや。五千圓もあつた公債も、もう一枚も無しにしとるんぢや。此儘にして置いたら、少しばかりの吉原の財産は、一たまりもないんぢや。一郎のやうな一生飼ひ殺しにせないかん病人を控へて居る上に、之から修業に出やうと云ふお前があるのに、兄さんに無茶をされて堪るもんか。

豐。（涙ぐみながら默つて聞いて居たが、漸く顏を上げて）けど、なんぼ使ふても、兄さんのお金ぢやけに、兄さんの勝手ぢやないかしら。大きい兄さんが、あゝなつとるんぢやけに、此の家の物はみんな小いさい兄さんの物ぢやないかしら。

眞崎。お前迄、そないゝ阿呆な事を云ふとる。二郎のやうな道樂者よりも、なんぼ吉原の家の方が、大事だか知れやせん。それに、二郎は、此の頃少し氣が變になりかけとる云ふ噂ぢやぞ。此間も、片原町の料理屋で、藝者や女中の前で、一圓札を三枚燒いて見せとか云ふことぢや、まるで阿呆か氣狂のする事ぢやないか。そないゝ阿呆らしいことを、させて置けるもんか。お前も、もう直きに東京へ行くのなら、しつかり勉强して二郎のやうな阿呆な眞似をするな。吉原の家は、もうお前ばかりが賴ぢやけに、しつかりせんといかんぞ。お前の學資を送るにしても、兄さんを今のまゝにはして置けんのぢや。

豐。(蒼白な顏をしながらも、ある落着は失はないで)それで、兄さんは承知したの。

眞崎。承知するもせんも、あるもんか。今も放蕩を止めればよし、止めなければや、準禁治產にする云ふても止めんと云ふんぢやもの。

豐。それで、お母さんは何と云ふの。

眞崎。お母さんは、無論承知しとる。お母さんが、何うかして呉れ云ふて、俺に泣き付いて來たんぢやもの。それに、二郎は此の頃、家に居ても容子が、變ぢや云ふぢやないか。

豐。僕は、さうは思はんけど。

眞崎。お母さんの云ふのには、夜中に襲はれたやうに、時々跳ね起きたり、夜通し二階を步き廻つたりする云ふぢやないか。まあ、何しろこの家は、お前が賴りぢやけに、しつかり勉强して呉れないかんぞ。氣狂の兄さんも、お母さんも、みんなお前が見て上げな、いかんのぢやからな。

豐。(暗然としながら默つて居る)………。

眞崎。（歸りかけやうとしながら）お前が學校へは入る前に、ちやんと片を付けて、學資の心配のないやうにしてやるけにな。入學試驗はしつかりやるんぢやぞ。伯父さんは、これで歸るけに、お母さんが歸つて來たら、よう云ふといて呉れ。

（眞崎歸る。豐、見送つて直ぐ歸つて來る。机の上に顏を伏せたまゝ、しばらくはじつとして居る。一郎の叫び聲、相變らず暗慘な響を家中に漲らせる。やがて、階段に、足音がして二郎が二階から、降りて來る。眼が血走つて居て、先刻の興奮がまだ消えて居ないことを示して居る。）

二郎。（稍怒氣を含んだ聲で）豐！

豐。、何んや。

二郎。禿頭は、もう去んでしまふたんか。

豐。眞崎の伯父さんは、今去んだぜ。

二郎。お前に、なんぞ云ひはせんだか。

豐。云ふとつた。兄さんを、準禁治産にするとか云ふとつた。

二郎。（全く自棄的に）何にやと、するがえゝわ。そない事にする前に、此の家の財産はびた一文も殘らんやうに、使ふてしまふてやるけに。

豐。（反抗的に）そないな事云ふて、お金が一文も無しになつたら、大きい兄さんやお母さんは何うするんぢやらう。

二郎。眞崎の禿頭が、何うにかするぢやらう。口癖のやうに、自分の生れた家は、大事ぢや大事ぢやと云ふとるんぢやけに。

豐。(益々反抗的に、兄の方に向きながら)兄さんは、何うしてそないゝ無茶な事を云ふやうになつたんぢやらう。さうなつたら、俺の學資に、誰が出して呉れるんぢやらう。

二郎。(弟の反抗に對抗するやうに劇しく)そぢやけに、兄さんが何時も云ふとる。學問やこしやめてしまふたら、えゝんぢや。

豐。(憤然としながら)無茶な事を云ひよる。兄さんは。自分が高等學校の入學試驗に、落第したもんやけに、俺にもは入らせたくないんぢやらう。俺は、もう二三日したら、東京へ行かう思ふとるのに、兄さんがそないな無茶なことを云ひ出すんぢやもの、困てしまふのう(豐、涙ぐんで居る)。

二郎。(冷淡に)學問やこしして何うする氣ぢや。吉原の家に生れた者は、學問なんかするのはやめとけ。

豐。兄さんは、學問にお金を使ふよりも、お茶屋で使ふ方がえゝと、思ふとるのかのう。兄さんが、家の少しの財産を使ふてしまふたら、氣の違ふた兄さんや、年の寄つたお母さんは何うして喰べて行くのぢやらう。お母さんや大きい兄さんが、路頭に迷ふやうになつてもかまんと思ふとるのか知らん。それに、兄さんやて、準禁治產や云ふことになつて自分で世間に風が悪いと思はんのか知らん。

二郎。(捨鉢な口調で)俺は何になつたつて、かまやせん。

豐。俺は、もう直ぐ東京へ行かう思ふとるのに、兄さんがそないゝぢや、學問も何もする氣がせん。學資やつて、積かないのに、定まつて居るからのう。(豐、興奮して泣いて居る)兄さんは、小學校の時から、ずつと品行方正で、中學の四年の時には、縣知事さんから、品行方正學力優等の褒狀を貰ふたのを忘れたのか知らん。

二郎。………………。

豐。兄弟三人の中では、小さい時から、二郎が一番大人しい云ふて、お母さんが、口癖のやうに、人に話して居たのを、兄さんは忘れたのか知らん。その兄さんが、こない無茶な事をするんぢやけに、俺や口惜うてならん（頻りに泣いて居る）

二郎。（前よりは、やゝ沈痛になつて、默つて弟の云ふことを聽いて居る）…………………

豐。大きい兄さんが、あなになつてしまふたし、お父さんはないし、僕は兄さん一人を賴りに思ふとるのに、その兄さんが、こないぢや、わしは此先何うしてえゝか判りやせん。

二郎。（稍々眞面目な聲で）まあ、そなに泣くのはやめとけ。俺やつて、面白うて遊んどるんぢやないぞ。

豐。面白うなうて、何うして遊ぶんやらう。そない理屈に合はんことがありやせん。

二郎。俺は、その譯を云ひたうは無いんぢや。人に云ふたつて解らん事ぢやからな。

豐。兄さんは、家を潰すやうな事をしながら、その譯が云へんのか知らん。云へん筈ぢや、お茶屋で散財をするのに、譯があつて堪るもんな。あない眞面目な、敬虔なクリスチャンであつた兄さんが、田島のやうな不良少年と一緒になつて、新地へやこし遊びに行くんぢやもの、俺や、見て居る丈でも辛い。友達にやつて、合はせる顏がない。それとも、なんぞ深い譯でもあるんなら、云ふて下さい。弟に云へん云ふことはないでしよう。

（豐は、しやくり上げながら、熱狂して兄に詰め寄せて居る。二郎は、やゝ蒼白な顏になつて、默然と聽いて居る。折々、座敷牢の中に居る一郎の鋭い叫び聲が、合の手か何かのやうに、聞えて來る。しばらく沈默が續く。）

二郎。（眞面目な、沈痛な顏になつて）俺は、その譯をお前に云はん積ぢや。が、俺は眞面目でお前に云ふんぢやが、學問やこしやめて、小學校の先生になつたら何うぢや。

豐。(前よりも一層興奮して)阿呆な！。兄さんが、學資を出したくないんなら、俺も出して貰はんでもえゝ。俺は中學校へは入つてから、三番と席順が下つたことはないんぢや。小學校の先生をせなならんほど、自分の頭を惡いとは思ふとりはせん。兄さんが學資を出して呉れんのなら、出して貰はんでもかまやせん。苦學でも、何でもするんぢや。俺は身體だつて、他人に負けるとは思つとらん。

二郎。(弟の熱誠に動かされたやうに)お前は、何うしても、學問がしたいのか。

豐。そないゝ事は訊かんでも判つとる。兄さんは自分が、上の學校へは、は入れなかつたもんぢやけに、俺がは入るのを邪魔するんぢや。お茶屋で二三千圓も、使ふとりながら、弟の學資が出せん云ふ理屈がありやせんもの。

二郎。(豐と同じ位に、興奮して)おい、豐！俺がお前の學校へ、は入るのを邪魔するなんて、俺はそれほどさもしい兄ぢやないんぢやぞ。俺が、お前に學問をするなと云ふのも、自分が滅茶苦茶に、遊んどるのも、皆譯があるんぢや……(暫らく沈默した後)お前には、聽かせたくない思ふとつたけれど、肉身の弟から、そないさもしい兄ぢやと思はれては、俺も堪らんし、それにお前は、もう直き東京へ行くんぢやけに、今話して置かんと、一生話せんかも知れんけに、今話して置かう。豐！お前は、俺達のお父さんが、何で死んだか知つとるか。

豐。知らん！お母さんに訊いても、教へて呉れんもの。

二郎。お父さんが死んだ時は、お前はまだ二つぢやつたから、知らんのも無理はない。が兄さんは、もう五つだつたから、薄々知つとるんぢや。お父さんは、彼處の格子の中で死んだんぢやぞ。

豐。(蒼白になりながら無言で合點く)…………。

二郎。兄さんの座敷牢は、二番目なんぢや。いや二番目どころか、此の家ぢや、此の吉原の家ぢや、三番目か四番目か、

判りやせん。お父さんの座敷牢も、兄さんが今居る座敷に、作へてあつたんぢや。お前は、大工が兄さんの座敷牢を作へる時に、此部屋には一度格子を入れた痕がある云ふたのを忘れたのか。お父さんや、兄さんばつかりぢやないんだ。お父さんのお父さんは、女中の顔が鬼に見えた云ふて、手打にしてから、氣が狂つたんぢや。お父さんの姉さんも、嫁入先で、氣が狂つて離縁になつて歸つてから、長い間彼處に居たらしいんぢや。而も、俺達のお父さんは、尋常の死方をしたんぢやないんだ。あの格子の中で、首を縊つて死んだんぢやぜ、而も、その首を縊つた帶は、此の兄さんの帶なんぢや。俺が、自分の帶を、あの格子の前に落してあつたのを、お父さんが格子の中から拾ひ上げたんぢや。俺は、その時から、子供心に自分の身に付き纏つて居る呪ひを、薄々感づいたんぢや。

賢。…………。

二郎。俺達のお父さんも兄さんも、獣のやうにあないな檻の中に、追込まれたんぢやぜ。こないなお父さんや兄さんを持つた者が、安閑として居れると思ふのか。此の次の順番は、誰だと思ふんぢや。

賢。(默つたまゝ俯むいて居る)…………。

二郎。自分の意識が、何時狂ひ出すか判らないのに、落着いた仕事が、何か手に付くと思ふかい。死刑を宣告せられた人間が毎日々々殺されやしないか、殺されやしないかと、恐ろしい恐怖と焦慮の裡に、一日々々と過して行くのと同じやうに、俺も何時狂ひ出すか、何時狂ひ出すかと思ふと、片時もぢつとして居られないんぢや。死ぬのなら、まだえゝ。死ぬのは、外聞が悪いこともないからなあ。死ぬことも出來ないで、而も死んだと同じ身體になつて、獣か何かのやうに、あの座敷牢の中で、一生狂ひ廻ることを考へて見るがえゝ。杞憂でも、何でもありやせん。目前の事實なんぢや。現在血を別けた俺達の兄さんが、俺達の目の前で、毎日々々手本を見せとるんぢや。俺は、兄さんを見て

居ると、一年先の俺、いや一年先どころではない、半年先、いや一日先の俺の姿をマザ〱と、見せられて居るやうで、立つても坐つても居られんのぢや。お前は、兄さんが高等學校の三年の時に氣が狂ふて、眞崎の伯父さんに迎へられて、東京から歸つて來た時の事を、覺えて居るぢやらう。俺は、あの時兄さんの姿を一目見ると、その時迄忘れて居たお父樣の記憶が、アリ〱と蘇みかへつて來たんぢや。その時に、俺は此次の番は自分ぢやなあと思ひ出してからは、もう何も手に付かんのぢや。お前も知つとるぢやらう、大きい兄さんの氣が違ふたのと、俺が墮落し始めたのは、丁度同じ時ぢやつたらう。眞崎の伯父さんやしこは、大きい兄さんが氣が狂ふたので、俺が吉原の後繼になつたけに、遊び出したんぢや云ふけども、そないゝ阿呆らしい事ぢやないんぢや。その後の兄さんの煩悶は、お前も少しは思ひ當ることがあるぢやらう。大きい兄さんのあの聲を、毎日〱聽いて居ると、命が一寸〱縮んで行くやうな氣がするんぢや。あの聲を聽きたくないばつかりに、外へ飛び出すやうになつたんぢや。

（一郎の叫び聲、斷續して聞える。）

豐。（默然として、眼に一杯涙を湛へながら、聽いて居る）…………。

二郎。俺はこの事はお前に話したくはなかつたんぢや。折角、何も知らんで幸福なお前の心を、惱らすにも當らんと思ふとつたけにぢや。が、小いさい時から、仲のよかつたお前から、卑しい兄だと疑はれるのも情ないし、それにお前はもう直ぐ東京へ行くと云ふし、わしは續け樣の放蕩の報ひで、身體も段々衰弱したし、おつと何か考へ詰めて居ると、頭に霧がかゝつたやうに、ぼんやりとしてしまふので、お前と正氣で話すことゝ、之が最後かも知れんけに、何もかも云ふてしまふたんぢや。氣の弱い、心の小さい兄さんは、此の恐怖を紛らすために、無茶もした、亂暴もした。之からもする積ぢや。酒でも飲まなけりや、おつとして居られんのぢやからのう。もう、此の頃では、自分で自分の

頭が、頼りにならんやうに思はれて、いつ氣が狂ふか、判らんやうな氣がするんぢや。一層のこと、早く氣が狂ふてしまへばえゝと、思ふとる位ぢや。無茶や亂暴を續けて、早う氣狂になつて、しまひたい位ぢや。

（二郎、興奮して半狂亂のやうになつて居る。二郎のさうした心持をいよ／＼狂ふやうに、一郎の聲が段々激しくなつて來る）

二郎。兄さんのあゝ云ふ聲を、聞いて居ても、お前は何ともないんか。たゞやかましう云ふので、勉强が出來んと云ふ丈か。

賢。……………………。

二郎。俺は、お前の學資が惜しいで、お前に學問をするなと、云ふとるんぢやないんぢやぜ。學問をした兄さんは、たつた二十一で氣が狂ふたんぢやぜ。俺は、兄さんと違ふて頭が惡うて、學校へは入れなんだお蔭で、まだかうして、何うかかうか正氣で居られるんぢやぞ。俺は考ぢや、お前は俺と違ふて元來がえゝし、小學校の教員でもして、呑氣に暮して居れば、一生恐ろしい運命に出會はんでも、濟むかも知れんと思ふとるんぢや。眞崎の伯父さんは、お父さんの弟ぢやけど、小いさい時から學問が嫌ひで、おなゝ商賣をして居るけに、今迄も平氣で居れるんぢや。が、お前が飽くまで、勉强する云ふんなら、するがよからう。お前の學資にする積で、公債で千五百圓だけは、ちやんと別けにあるんぢや。兄さんが持つとるよりも、お前にやつとくから、自分で保管しとるがえゝ。

賢。（兄が怖れて居たほどの激動も受けず、兄が思つたほどに、失望も落膽もして居ない）兄さんは、餘りくよ／＼思ひ過ぎるんぢや。お父さんや大きい兄さんが、氣が狂ふたとしても、俺迄までが、氣が狂ふとは定まつとりやせんからのう。そなに、病氣になりやせんかと心配するのは、ヒポコンデリイ云ふて、一種の病氣ぢやないかしらん。

二郎。(自分の述懐が、弟にあまり深い感銘を與へないのを、少し失望したやうに、同時に欣んで居るやうに)お前が、さう思ふとれるのなら、それで幸福ぢや。わしは、もう長いことはない思ふとる。

豊。(兄を劬はるやうに元氣よく)兄さんのやうに、心配しとつたら、一日ぢやつて、生きとられやせん。どなゝ人ぢやつて、何時死ぬか判りやせんのぢやものなあ。第一、兄さんのやうにそなゝ無茶をして、家の財産は一文も無くなるし、兄さん迄氣が狂ふてしまふたら、大きい兄さんやお母さんは、何うするんぢやろ。

二郎。俺が、氣狂ひになつた後の事は、心配して呉れんでもえゝ。氣が狂つてしまへば、死骸も同然ぢやからなあ、大きい兄さんと一緒に、兄弟揃つて狂ひ死に死んでもえゝ。お母さん丈は、眞崎で世話はするぢやらう。

豊。(極めて元氣よく)俺は、自分の頭が狂ふたりしようとは思はれん。俺は、中學へは入つてから、數學が得意で、幾何でも代數でも、一問題でも、しくじつたことはないんぢや。俺の此の頭が、狂ふたりしようとは、夢にも思はれん。

(一郎の叫び聲愈々劇しくなる)

二郎。あゝひどい!あの聲を、聞いて居ると、ぢつとしては居られないやうな氣がする。あの聲を聽いて居ると、大きい兄さんが、俺に早く狂へ〳〵と催促をして居るやうにしか思はれんのぢや。お前には俺の苦しみは解らんのぢや。何時、狂ひ出すかも知れんと云ふ俺の不安がお前には本當には解らんのぢや。が、お前に解らんのは却つて、仕合せぢや。お前はしつかりやつて呉れ。兄さんは、金のある丈正氣の中に、使ふてしまふ積ぢや。俺が氣が狂ふてしまふたら、お母さんは伯父さんの家へ預けとけ。大きい兄さんと、俺とは捨て置いてもえゝ。決して、かまふて呉れるな。どなに、扱はれても同じことぢやからな。

豊。俺は、自分の頭を、飽くまでも信じとる。けど、兄さんの心持も解らんことはない。

（一郎の叫び聲益々、烈しくなる）

二郎。それならえゝ……お母さんを賴んだぜ。

豐。うむ。

（兄弟相對して暗然として考へ込んで居る。一郎の聲、續け樣に聞える）

二郎。（今迄の暗憺たる話から、話頭を轉じやうとするやうに）お母さんは、何處へ行つたんぢや。

豐。わしが、發つ前に、一度赤い御飯をたいて、親類の子供達を、呼ぶ云ふとつたけにその案內に行つたんぢやらう。

（一郎の叫び聲、急に激しくなつて、銳い大聲が、家の中に響いたかと思ふと、急にをとなしくなつて、低いうめき聲が聞えて來る）

豐。（立ち上りながら）大きい兄さんの今の聲は、少しをかしいなあ。何うしたんぢやらう。

（立つて、座敷牢の方へ行く）

豐。（姿は見えないで）あつ！兄さん、來て下さい。大きい兄さんが大變ぢや。あつ！血が！血！

二郎。（急に蒼白になりながら、而も行かうとはしないで）何うしたんぢや。何うしたんぢや。

豐。（周章てながら）早く繃帶を。繃帶を。兄さんが咽喉を突いて居る。鋏で、花鋏で。

（狂亂のやうになつて、駈つて來る）

二郎。（戰きながら、而も冷靜に）え……俺が奴は引き受けた。お前は、早くお母さんを呼んで來い。

豐。（息をはづませながら）兄さん、お醫者を呼んで來なけりや。

二郎。（それには、相手にはならないで、顫へながら興奮して獨語のやうに）醫者を呼んで來て、何うするんぢや。癒し

たつて……癒したつて……。早く行つて、お母さんを呼んで來い。

豐。（取擾した調子で、兄の云ふことを、うつゝに聞きながら）あないに刄物に氣を付けとるのに、何うしたんぢやらう。花鋏やこしを。誰が持たしたんぢやらう。（疑惑と叱責の眼付とで兄を見る）

二郎。（叱り付けるやうに）早うお母さんを、呼んで來いつたら。

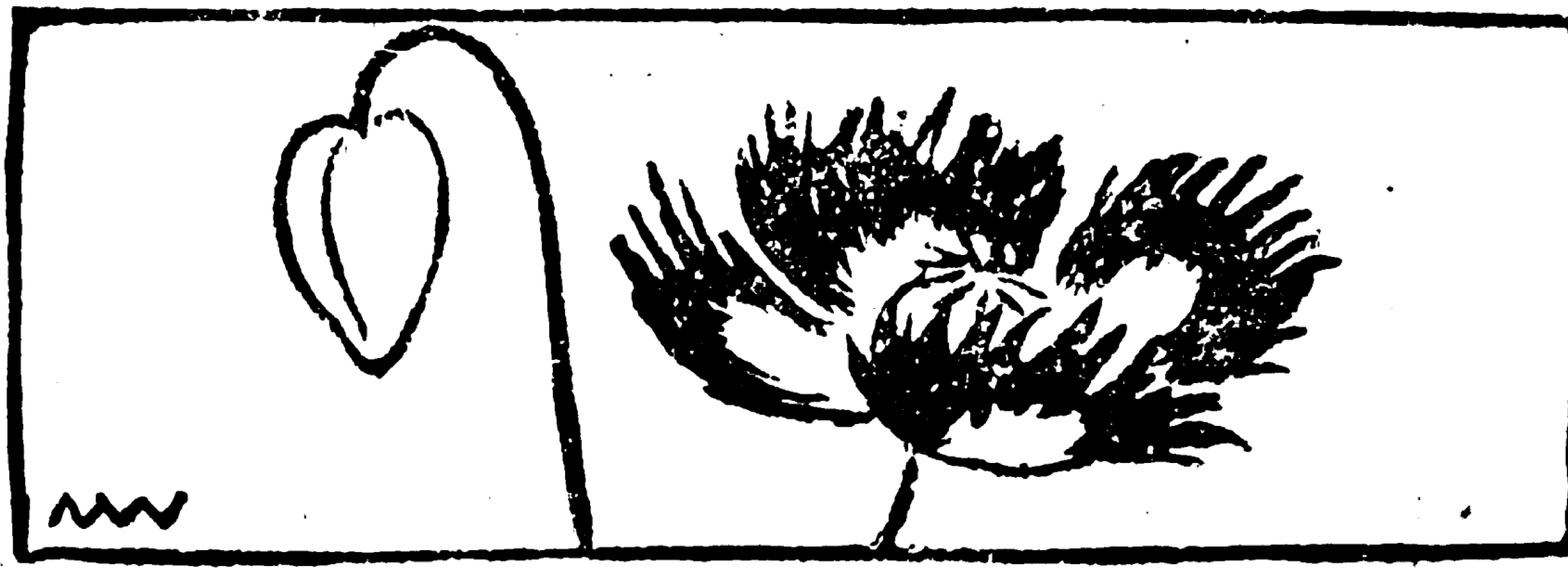
豐。（いら〳〵しながら）それよりも早う戸をあけて、鋏を取上げて下さい、兄さん。

二郎。（尙座敷牢の方へは行かうとはしないで）えゝわ、俺がすると云ふたら。お前は、早うお母さんを呼んで來いつたら。

豐。（兄の態度に明に反抗しながら）お母さんを呼んでから、高坂さんに來て貰ひましよう。（豐、玄關の障子を音高く開けながら、馳け出す。一郎のうめき聲、全く絕えてしまふ）

二郎。（少し狂亂じみて）高坂を呼んだつて、あないへボ醫者を呼んだつて。（座敷牢の方へは行かないで、部屋中を不安らしく足早に歩き廻りながら）兄さんは、それでも片づいたんぢや。今度は俺の順番ぢや。場所は空いたからな。

――幕――



海邊の望樓にて

A Phantasmagoria

佐藤春夫

人物

村瀬穆彥

玲子(故人)

增田憲吉

村瀬の母

村瀬の乳母

穆彥の幻影に現はれる者ども

穆彥は今年二十六歳になる青年であるが、メランコリヤに罹つてゐる。病氣は五六年前からのもので、その爲めに彼は高等學校を卒業前に廢學した。病症はそののち重くなるばかりであつた。その妹の玲子が增田憲吉と婚約をしたのは彼の二十二歳の時で、彼が病氣に罹つたのと相前後してゐた。玲子は兄よりも一年後に生れた

妹であるが、その容貌は兄妹全く相似て居た。彼の女は美人だと謂はれて居たが、實際、典雅なさうしてか弱げな顔立ちであつた。又、姿でも性質でも物靜かな優しい生れつきであつた。音樂の才能を持つてゐた。彼の女がそれを發揮したのは十二三の少女時代からであつた。——それ程に豐かにである。さうして彼の女が増田憲吉と婚約をするやうになつた頃には、もう立派に一家をなしたヴァイオリストとして鑑識のある人人のなかで知られた。紫陽花のやうな憂愁があつて、いつも彼の女の身のまわりを裹んで居た。さうしてそれが彼の女を一そう美しく見せた。憲吉の心をしつかりと囚へたのもそれであつた。彼の女は藝術をもつて身を立てるために一生を獨身で暮すと言つて幾多の求婚者を斥けた後に、たうとう憲吉と婚約をすることになつた。當時、憲吉は二十四歳の文科大學生で穆彦の最も親しい友人であつたから、先づ穆彦を動かして事をさういふ風に運んだのである。それが彼の女の二十歳の秋の十月であつた。さうして未だ結婚もしないうちに——翌年の一月には玲子はもう死んで居た。死は突然に來たのであつた。或る外國から來遊した有名な聲樂家を歡迎するために催された音樂會があつて、玲子はその晩に初めて公衆の前で處女演奏をしたのである。曲は何でも彼の女自身がコンポオズしたものであつた。彼の女はそこからの歸りに自動車から墜ちて死んだのであつた。疾走する自動車の扉が完全に閉められてなかつたか、或はそれがひとりでに明いて來たのか、兎も角もそこに倚りかかつて居た玲子は、車が道を曲るはづみに道の上へ投げ出されたのである。その車のなかには憲吉も居た、玲子の母も居た。愕然として停つた車から二人が下りて、五六間馳せ戻つた時に、玲子はもう物を言はなかつた。新聞がそれを傳へた時に、來遊中の聲樂家は彼の女の死を非常に惜んだ。さうしてこの權威のある人は彼の女の當夜の演奏を極力激賞したと傳へられた。さうして玲子の名は喧傳されて居た。しかし穆彦の病症は妹の不慮の死で一層昂進した。それからだんだん加速度を加へた。憲吉は彼が深く愛した者とそんなに早く死別しなければならなかつた時に、愛した者の思ひ出

を握つて、その兄と以前よりももつと親密に交らうとした。さうして屢々この別莊に來るのがお常であつた。けれども、いつでも人を避けて沈默の底で何かを視つてゐるやうな目つきをした穆彦は憲吉に對しても同じことであつた。憲吉が穆彦の部屋のなかへ這入つて行く時には、穆彦は澄んだ目でこの侵入者を疑ひ深さうに見上げた。さうして凍りついて居るやうな笑ひ顏で友達を迎へた。さうしてただそれつきりであつた。憲吉はさういふ友達に逢ふ度に心を苦しめた。たとひそれは不慮の災難ではあつたとは言へ、玲子の死を齎した自動車のなかに、その時同乘してゐた憲吉は、それに就て何かしら彼自身に責任があつたやうに感じられたからである。又、玲子の死が穆彦の見上げる空一面を鉛にしてしまつたこと、穆彦がそれほど彼の妹を愛し、妹の死を歎いたことを憲吉は知つて居たからである。さうして憲吉としてはその爲めに、一層屢々この別莊へこの病人を訪はなければならないやうな氣がした。たとひその病人がそれほど彼を喜ばないにしたところが。それにこの別莊では、穆彦は今も言ふとほり別としても穆彦以外の人人は憲吉が度々そこへ來ることを大へんに喜んだ。何故かといふのに、今日ではこのもの憂い重い氣分で一杯になつてしまつた別莊が待つてゐる殆んど唯一と言つていい訪問者が憲吉であつたからである。さうしてそのやうに憲吉を迎へた人たちといふのは二人の年とつた婦人、憲吉と玲子とを生んだ母とその乳のない母を持つた二人の嬰兒に乳を與へた女とであつた。この乳母はこの二人の嬰兒たちがもう乳を要求しなくなつた時に、その忠信な性狀を主人たちに知られて、ちやうどその當時出來たばかりであつたこの別莊の番人を彼の女の二度目の夫にして、このいくらかは年をとつて居たけれども素朴な夫によつて、あまり幸福ではなかつた前半の生涯が償はれて、それ以來この別莊のなかで割合に平靜な生活をつづけて來た女であつた。併し彼の女も五年以上前に二度目の夫に死に別かれた。かうして二人の婦たちはその孤獨を兩方から僅かに支へ合つた。それ故、彼の女たちの友情は深く美しかつた。二人はよく昔のことを語り合つた。——この別莊が出來

た時の立派であつたこと、そのころの彼の女たちの生活のうちのごく些細な事柄、それは主に二人の男兒たちに就てのこと、その二人がどんなに賢いおもいやり深い子供であつたかといふこと、憲吉と玲子とわけても玲子がどんなに美しく育つて行つたかといふこと、さうして時々には彼の女たちの夫のこと、其他。さうしてそれを言ひ出すものはいつも乳母の方であつた。しかし彼の女は話柄がだんだん今に近くなることを怖れていつも極く遠いことばかりを言つた。それを聞いて泣くことのある者は母であつた。けれども相手がたとひ泣いても、話しかける者の方はそれがずつと古い時のことである限りは言ひつづけることを憚りはしなかつた。それは乳母も時には泣くことがあつて、それ故に彼の女はもう前途に望みを見捨てなければならない人人が過去のことのために濺いで居る涙は樂しいものであることを知つて居たからである。けれども一度現在のことを思ふ時には、この二人の年とつた婦人たちには彼の女たちの生活そのものが一つの長い吐息であつた。第一の者にはその吐息が深いものであつた、第二の者にはその吐息がやや輕いものであつた。けれども彼の女たちはその生活にも、もうだんだんと慣らされて來て居た。さうしてあの氣まぐれな息子、氣まぐれな主人、學彥が時々ふと平常は全く豫想出來ないやうな優しい口調で、この二人に交々ものを言ひかけるやうなことが思ひがけなくあるやうな時には、彼の女たちは淋しい微笑をもつた目を見交しては互に相手の目からこの不思議な現象の解釋を見ようとし合つた。彼の女たちは言はば長い陰雨の雲の晴れ間からふと日かけを見て、それをまぶしく思ふ人たちのやうなものであつた。かういふ單調な日日のなかに憲吉が時折り訪ねて來た。彼も亦この家の氣分にそぐはない人ではなかつた。さうして、彼のたうとう娶らなかつた妻の母をつれ誘うて出ては、重に波の靜かなこの入江の汀に近い沙の上を歩いた——夏には夜に、冬には午後に。彼等は本當の母と子とのやうに並んで、また二つのものの日影のやうにゆつくり歩いた。且つ、そんな時には二人ながら常に默つて居た。

一たいこの別莊は、背後から村々に向つた、ところどころに松の生えた丘の上にあつた、そしてここに限り劃されてそこに三千坪には少し足りないちよつとした空地があつて、別莊はそこに建てられてあつた。そこには最初には人手を惜まなかつた日本風の庭園が殆んど全地一面にあつて、その最も窪んだところには池もあつた。けれどもこの庭には土地から言へば樹は少なかつた。あまり地味の豐かではないこの場所には、いろいろの庭木の類がよく生えつかなかつた。なかには植え附いたことは附いたけれども、その後だんだん枯れさうになつて行くものもあつた。その代りには地味に適したものは皆——それは庭園を築く時にも殘して置かれた松が主であつたが——茂るがままに茂つてゐた。さうしてこの優雅に造られた庭はもう廢園になりかかつてゐる。といふのは、この別莊を立てた人である穆彥と玲子との父が殆んど全財産を傾けて死んでしまつてからは——それは十年以上以前に、その死後に初めて解つたことであつたが——もうこの庭園にさへ植木屋を毎年缺かさずに入れるといふことさへ充分ではなかつた。一度、惠吉が、ひ慣はしては居るけれども、彼等にはもう本邸といふものもなかつた。人に賣り渡してしまつたから。別莊、別莊とさう言私が遊びに來てもあまり鬱陶しいからといふ口實で、四五年前の夏ここに植木屋がちよつと這入つたことがあるだけであつた。けれどもこの庭の池がいつも涸れないで水を湛えて居ることが未だしも、やつとその趣を支へることが出來て居た。さうしてこの別莊で育つて來た、逞ましいしかしもう充分に年をとつた番犬メリが樹々の間を見廻つたり、そこの日向や影に身を横へたり、苔の生えた石段を下りて汀から池の水を喰んだりするより外には、誰も別だんこの庭園を樂しむ人はなかつた。（夜更けなどに穆彥が時折この庭に忍び出て、そこを歩き廻ることを母は見たけれども、穆彥はこんな時にも彼はこの庭園そのものを歩いてゐるのではなくて、恐らくは彼のもの惱ましげな重い足どりは險ばかりが領して居る彼の心のなかを歩いて居たに違いない。）この庭の隅に、この別莊の建物のはづれに、それにつづいて一つの望

樓へ立つて居た。それは地面から八間或は九間も高く拵えて居た。この高い大きな望樓はそれを設けた人の風變りな好奇心からであつたか、それとも實際上の必要からであつたか、螺旋狀の階段で頂きへ登るやうに造られてあつた。この別莊の地勢から見て、この別莊が海面への眺望を持つためには、どうしてもこれだけの高さが入つたのである。最初にこの別莊が出來た時に、この別莊地の人人を驚かしたのはこの望樓であつた。又、その頃ここを訪問したいろいろな人たちが最も好んだのもこの望樓であつた。當座はこの望樓が客間と同じだけの人人を迎へた。そこには程遠くに美しく曲つた入江の線をすつかり取り收めた眺望があつた。その眺望は涼しい風を持つて居た。それに人人には自分達がさういふ高いところに居るといふことの無邪氣な滿足もあつた。就中、何かにつけてそこへ登ることを好んだのは、穆彦と玲子とやはり彼等と同じ年ごろの友だちなどであつた。彼等はそこで望遠鏡を持つて遊んだ。それを逆に目にあてて小さく遠い海原を見た。また未だ快活な少女であつた玲子はよく北窓ぎわに立つて海の方へ歌を歌つた。穆彦はそこにあるお茶を乘せるテーブルの上で一日本を讀んだ。玲子はそのころ未だ生きて居た爺やに背負せてそこへ大きな鏡を持つて來させたりした。——やはり玲子が未だそれほど快活な少女であつた頃にである。けれども穆彦はいつからともなく其處へは登らなくなつた。メランコリヤに罹り初めたころに、母や乳母などが鬱ぎ込んで居る彼に向つて、時にそこの見晴らしを勸めたりすることがあつても彼は決してそこへは登らなかつた。そこに立つとあまり見晴しが廣くて目まひがする、怖ろしいと答へたこともあつた。それを忘れて居てまたその同じことを勸めるやうなことがあると、彼は險しい目で鋭く母の顏を凝視したこともあつた。又、何だつてお父さんはあんなものを建てたのだらう、と呟くやうに答へたこともあつた。母や乳母などはもとよりそこへはもう登らなかつた。この年とつた婦人たちにはそんな快活な氣分になることも無かつたし、又そんた氣分があまり缺乏して居ることを感じてそれを搜すためにそこの上にでも立つて見たらばと思ふことがあつたにして

ら、この塔に就くまた少々急な螺旋狀の階段を見上げると、もう其處へ登つて見ようといふ氣もくづれた。さうして實際危かしくて崩れさうにちがひなかつた。それほど母も乳母も年をとつてゐた。歿せた時は六十九であつた。乳母も同じような年であつた——丈夫な所はして居たけれども。かうしてこの望樓も何時からか人々に忘れられた——いつか激しい暴風雨があつて、この望樓の軒や屋根や或は窓に附屬して居たものが風に捥ぎとられた時にも、誰もそれを直さうと言つた人はなかつた程。けれどもこの望樓はただ忘れられたやうに見えただけである。憂鬱狂の穆彦のこころが絶えずこの望樓のなかに囚へられて居て、この望樓が絶えず穆彦の彩やかな色彩を持つた惡夢のなかへ忍び込んでくるといふ事を、またその理由を、知つてゐる人は誰もなかつた。……穆彦はそこで一度惡魔を見たことがあつた。さうしてその恐ろしい望樓のなかには惡魔と一緒に玲子の亡靈が住んで居て、彼の女が奏でるヴァイオリンの音を氣の違つてゐる穆彦は、毎夜そこからはつきりと洩れ聞くのであつた。その微かに、けれどもきいきい言つて慄へながら聞えるヴァイオリンの音に合せて、穆彦は歌を歌ひ出すことがあつた。それは皺枯れては居るけれども調子に適つた美しい小聲の最低音であつた。穆彦は自分で歌ひながら自分の歌に耳を傾けた。さうしてそれに聞き入る時に彼自身の歌聲のなかに玲子の聲がいり雜つて居るのを聞きわけた。又、歌ひながら考へつづけた——これはあの晩に玲子が演奏したといふ曲に相違ない。それはプログラムには何と記されてあらうとも、きつと「樂しい死に就ての幻想曲」でなければならない。いつか自分で歌ふことを忘れてゐて、耳を欹てるとヴァイオリンの音ももう消えて居た。その代りに、穆彦の枕もとには何者かが來て座つた。それはすすり泣いて居る玲子であつた。それから彼の女の隣りにはやはり泣いてゐる者が居た。それが玲子の手をとつてゐる。彼等は望樓のなかにさうして穆彦の妄想のなかに住んで居る者どもであつた。そこで穆彦は寢床の上に座つた。それからいつものとほりあとへあとへ無限に連續する物思ひをつづけた。不愉快な數學のうち

の不氣味なほど意地の惡い問題にそれは類似して居た。それは或る數位までくると必ず同じ數字をくり返す循環小數の性質を持つて居る。その循環は無制限につゞく。さうしてそれは決してどこでも切り上げてはならないものである。玲子、（さう穆彥は彼の女の名を呼びかけて考へた）お前はそれをうまく解釋した。お前は中途で投げ出したのだ。さうして私はその後永く考へはするけれども、お前のした通りにすることだけがこの問題の唯一の答であらう。私たちはあの第一の機會で運命に敗けた。さうして憲吉が現はれた第二の機會でもう一度敗けた。ねえ、間違つた一つの原動力、いや、一つの原動力が間違つて働いたのだ、その時第一の齒車が一つ廻轉して、それから次の齒車が廻轉して、それから、それからそれがどこまで波及して行くことであらうか。穆彥がさう考へた時に、穆彥の前には母と憲吉とがおぼろげに通り過ぎた。それでも、お母さん――穆彥はその母の幻影に目で追ひ縋つて呼びかけた。さうして言ひつゞけようとした時に、憲吉と並んで行きすぎる母は立ちとまらなかつた。さ、さ、さ、さささささあ、と波の引いて行く渚に沿うて彼等は歩いて行つた。さうして消えた。過去の出來事――しかし穆彥にとつてはそれが今も現在であるところの出來事を、穆彥はすべて抽象的に考へた。具體的に考へることを怖れた。ただ未來の出來事、それは直ぐ手を伸べさへすればいつでも捉へることの出來る未來の出來事を心ゆくまではつきりと具體的に描き出した。それが好きであつた。それは何かといふのに「死」である。穆彥はよく夢を見た。それは夢と言つていいか、幻であるか、彼が見ようとする時に現はれた。さうしてそれには鮮やかな色彩があつた。それは最初はふとした時に偶然見たものであつた。それを穆彥は夜毎の夢のなかで補つて行つた。さうしてそれが今ははつきりとしたものになつて來た。それほど明瞭な靈が出來上つた時に、穆彥には、それが何か彼の昔讀んだことのある或る長い小說の結果ではなかつ　かとも思へた。それ程彼の夢がわざとらしいものであることに氣がついた時に、彼はそれが氣に入らなかつた。死といふものはそんな遊戲ごとではな

いことを希ひ[illegible]ながら[illegible]にはどうしても彼はやはりこの夢をよく見た。さうしてあの鉄製の階段を登つて行く時に、玲子の亡靈はあの夜毎のヴアイオリンの音で彼を迎へてくれるに違ひないと穆彥は思つた。そこにはささやかな月が窓から射し入つて居て、それが窓の敷居の上で光つて、その光はまた窓のなかを探く部屋のなかへ流れ込んで居て、床と壁との上へ直角に屈曲して窓全體の形を明るく歪めて寫し出した居た。さうして床の上には平に置かれた大きな鏡があつて、その鏡の上に端座した穆彥は、うつぶせになつて鏡のなかを覗き込んだ。どういふわけか穆彥は素裸であつた。その鏡の下からも穆彥が上に居る穆彥を見上げて居る。穆彥は夢のなかで自分の顏を鏡にうつして見た時に、今からいふ運命で歎いて居る男の顏がこれであるかと思つて淚が出るのが常であつた。さうして自分の顏をもつと鏡に近くおしつけた時に、實體と映像との二つの同じ顏がひつたりと接吻をしてゐる二人の者のやうにくつつき合つた。そのうちに穆彥はその淚で冷たい瘦せほうけた頰を、もつと冷たい鏡の上へ押しあてた。それ故に鏡のなかの映像も横顏になつて、この二つの同じ横顏が淚でぬるぬるした冷たい頰を頰擦りし合つてゐるやうにも思へた。しかしぬるぬるしてゐたものは淚ばかりではなかつた。穆彥の鏡に當ててゐた方の頸から血が流れ出て居た。塊りになつて居た。冷たく光つた鏡の上には、ちやうど板の上に流れた水銀のやうに血がまるく盛り上つて居る。だんだん劇しく流れ出るに從つて、それは穆彥の素裸の體のぐるりに沿うてそれを輪廓づけるやうに流れた。血は鮮かに赤かつた。さうしてもう穆彥は死んで居た。月の動いて行くがままにおもむろにそのかげの移り動いて居た光は、徐々と忍びやかに床の上を爬行して、うつ伏しの形をした穆彥の素裸の屍を照し出して、それを悲歎に沈んで居る者の彫像のやうにぽつかりと浮き上らせた。穆彥の體を滑つた月の光は、その殘りが鏡の面にあたつた。そこで一度屈折した光が壁の或る部分に明るくきつはりと反映した。その反映した光のなかにも穆彥の倒れてゐる部分だけは黑い影を描き出して居た。もう鏡の上一ぱい

に擴りただようた血のために、明るい反映の影はほんのりと赤い。美しい。その死屍の穆彥の側に、別に突立つてゐる穆彥が居てそれを見つめて居る……。――穆彥の見るのはさういふ夢であつた。ああまたこの夢を見た、と穆彥は思ふ。このよく見る Weird な夢から目を覺した時には、必ず夜あけ方の光が戸の隙間から穆彥の目の上に射して居た。さうして穆彥はぐつたりと疲勞して居た。けれどもそれは寧ろ快よい疲勞であつた。耳にはあの望樓の方から洩れる吟子のヴアイオリンの音が殘つてゐた。穆彥はその奇異な夢のなかで、何故に彼自身が素裸かであるか、それが妙に、ただ夢だからと言つただけでは濟まないやうに氣掛かりであつた。あの望樓のなかに登つて行つたならば、ほんとうに穆彥自身が其處にさうした形で倒れて居はしないか。穆彥にはふとさう思はれる瞬間があつた。さうして或る宿命的な年の九月十一日に探險にそこへ登つて以來、決して登つたことのない望樓へ、もう一度登つて見たいと思ふことがあつた。穆彥が母と乳母とに優しい言葉をかける日といふのは、重にさういふことを穆彥が考へた夜明けの後の日にであつた。

穆彥の母と乳母とはさういふ心の狀態になる穆彥を全く知らなかつた。彼の女たちはただ穆彥の底深い瞳と、滅多に知られることのないしかし黑々とした髮と、內側から削りとられた頰と、その堅く閉された唇の上に生へた薄い口髭が憂鬱であることを見た。又それらのものを具へた顏が常に月の光を浴びて居るやうに蒼白いのを見た。彼の女たちの知ることの出來たのはただ穆彥の假面のやうな闇い顏の上に浮ぶその日その日の微かな表情だけであつた。例へばそれは、常に海の上にその命を托して居る漁夫たちが海の上に來る極め微かな影と色との變化によつて、そのはかり知ることの出來ないものの僅かな部分を感知するやうなものである。又、例へば彼の女たちは、實際、穆彥といふ一つの星を圍んでそれをとり環らして小さく運行しながら、さうしてより大きな星とともに僅かにより大きな軌道を運行する衞星のやうなものであつた。さうしてそのより大きな星は、その衞星を曳き廻りながらひたすらに悪運の軌道を辿つて行つた。

この別莊のなかで、幾人かの人人はさういふ生活をした。その生活をつづけてゐた。

さうしてそれは或る荒れ方であつた。その日ごろ、彼の氣分がよほど輕快になつたやうに見えた穆彥は、沙濱の上を歩きたいと言つた。年とつた犬メリをつれて出た。メリは歸つて來たけれども、穆彥は未だ歸らなかつた。もう二時間の以上を經たと思へた時に、彼の母は乳母を頼んで彼を濱邊へ迎へにやらせた。一度、濱邊から無駄に歸つて來た乳母は、穆彥が夕方樂しさうにそこを歩いて居たのを見た人に逢つたと言つた。又、今夜そこに何か催しがあるといふ濱つづきの別の別莊地へ多くの人人が歩いて行つたことをも聞いたから、もう一度そこへ行つて見ようと言つた。彼女たちは少し遲れて居るにしても柱時計が八時半をすぎたばかりであるのを見た。この家はあまりに靜かであるが、まだ宵であつたことを知つた彼の女たちは心を安んじた。さうして憲吉はいつも彼がさうするやうに多分九時二分の汽車で來るであらうとも語り合つた。それから乳母は彼の女の後を慕はうとするメリを追ひ返して、女主人と一緒にそこに殘つてゐるやうにと彼に命じた。穆彥の母は暫くひとりで再び椽側に座つた。灯された岐阜提灯の下にである。メリは主人と相對して土の上に坐つた。この物言はぬものはぢつと主人の顏を見上げた。穆彥の母は寂しさと不安とに微かに襲はれた。それ故、小聲で犬の名を呼んで、庭の方へ下りて行つた。いい月夜だから濱邊に行くと穆彥の言つたとほりいい月夜であつた。泉水の上に月の影がくつきりとあつた。庭はもう秋のやうにしつとりとして居た。穆彥の母は歩き出した。大きなメリは痩せて小さなこの女主人のあとに從うた。彼等は前と後とに竝んだ。各の影を曳いて動いた。この忠實な生き物は主人の行くがままに歩いた。池の土橋を彼等は渡つて見た。疎らな植込みのなかをあちこちと歩いた。蟲の音があつて、彼等が近づいた時に啼き止んだ。彼等が遠ざかつた時に再び啼き初めた。母は靜かな樹々のなかに立つて、遠く停車場の方から聞える汽笛が消えた時に、早く憲吉が來ればいい、穆彥も歸ればいい、とさう思つた。今度は

憲吉と穆彦をも誘うて積雪を歩かうとも思つた。ふと輕快な氣持を母は感じたが、さういふものは彼の女が永い間忘れて居たものであつた。彼の女はもう來るであらうと穆彦や憲吉を待ち受けて居ようと、樹々のなかから家の方へ歩み出した時であつた。メリは突然吠えた。吠える犬は地に坐つて長い細い聲を顫はせた。それが穆彦の母の心をも震はせた。犬はもう一度今のと全く同じ聲で吠えた。吠えながら彼は或る高いところを見入つて居る。穆彦の母は試みにメリの見上げた方に目をやつた時に、そこに高い鐘樓の開け放された窓扉が、それのガラスの上に月光をきらきらと碎いて居るのであつた。穆彦の母はそれを見つめて、それがいつから開かれて居たかを知らない。彼の女はもう暫くその高い鐘樓を注意したことがなかつたからである。訝しげに見上げた彼の女の目は、窓のなかにほの白く何人かが突立つて居るらしいのを認めた。しかし年とつて霞んだ目は月の光のなかでそんなに高いところのものをはつきりと知ることは出來なかつた。

「穆彦！」

母は息子の名を呼んで見た。しかし、どうも穆彦に違ひない窓に立つてゐる者は答へなかつた。輕い身ぶるひが彼の女のなかを通り過ぎた。決して開かれては居なかつたと思ふ窓が開かれて居ることを、こんな機會に見るが彼の女には不安であつた。

「穆彦！」

そんなに恍惚として物に見とれて居るらしい息子が窓から落ちはしないかが危まれる。

「穆彦！」

しかし高い窓の上の者は決して答へない。だんだん高くなる呼び聲が鐘樓まで聞えないのではない。それは鐘樓へも出

彦のやうにひゞく。ただ窓ぎわに見える者は穆彦ではないからである。それは一時間ほど前までは穆彦であつた者だ。さうしてその望樓のなかで玲子の亡靈といつもの通りの呟き節で台話をづけた者であつた。彼は窓ぎわのテーブルの前に玲子の亡靈と相對して坐つた。玲子(と穆彦は言つた)私はお前が死んだのはお前自身が企てた結果であつたのをよく知つてゐる。お前がその晩演奏したのは「樂しい死に就ての幻想曲」であることも私はよく知つてゐる。あの晩、私は増田と一緒に並んで坐りたくない、坐つて居られないばかりにそれを聞きには行かなかつたが、その後の夜毎にお前はそれを聞かせてくれた——今のさつきも。私も死ぬ。私の知つてゐる限りのすべての人に私は許して貰ふのだ。もう何も言つて下さるな。それから誰にも何も知らしては下さるな、お母さまにも、あの人にも——玲子はさう言つて泣きじやくりした。……突然、この望樓を住家にしてゐる惡魔が出て來た。それは穆彦と全く同じ形で同じ聲であつた——いやいや、何もかもすつかり知らせなければならない。玲子、お前は増田を本當に愛して居たのか！いや私は悉く増田に打ち開ける。お前はいつまでも私のものだ！と。惡魔はさう叫んでから穆彦の上にのしかかつた。穆彦は窓を開けて遺書を書いた。惡魔は消えた。穆彦は全てを忘れた無邪氣な幼心になつて遠い入江を眺め入りながら窓に立ちつくした。

「穆彦！」

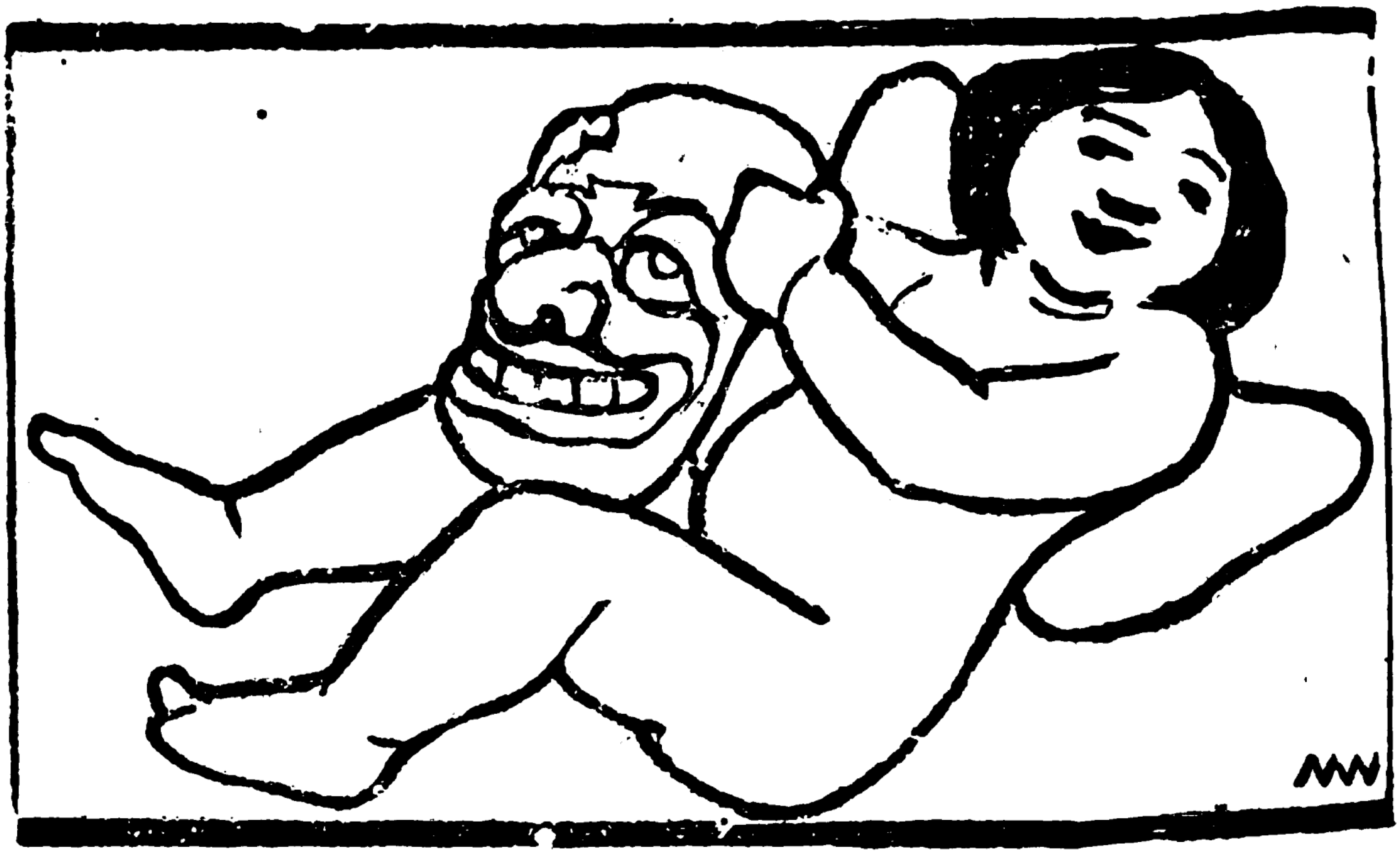
しかし今、その窓に立つて居る者はもう穆彦ではない。それはただ跪いて祈つて居る形に吊された者に過ぎない。天井から下りて居る一本の帶があつて、それが彼をテーブルの上へさういふ形に吊し支へて居る。その帶によつて彼の下顎はつり上げられ、それ故に彼の顔は空の一方に向けられた。彼の手の十本の指は死が來た瞬間に無意識に組み合され、力一ぱいに膝の上へ突き延した双の腕は硬ばつた。帶のない白い著物は、死んで居る者を柔かく裹んだ。月に開かれた窓を通して流れ入つて、その光は跪いて祈つてゐる者の肩から胴を斜にかすめて、その下半身を照し出した。組み合さ

れてゐる骨ばつた手の上には形に沿うて影と光とが組み重つた。この吊された者の正面には一枚の大きな鏡があつて、月の光を肋骨の上に浴びた胴體と手とをその面に明るく映した。その祈つて居るものの形を持つた横姿を透して、窓の外は松の上を遠く、白く光る波の緣（きべり）をもつた美しい入江が一目に見えた。その白い濱邊を小さく黑い人影が時々蠢動した。これらの奇異な緒のある窓をもつたこの望樓のなかには、既に玲子の亡骸も居なければ、惡魔も居ない。また穆彥も居ない。唯、足音なく動く月かげと、それから一疋の蜘蛛を見た。この小さな蟲は、その下のものの重さによつてがつしりと下がつて居る帶と開かれた窓の枠とを足場にして、新らしい巣を營まうと用意して居た。彼は、その網を張るところとしては風の通ふところが適して居ることを、その本能によつて知つて居たからである。——この望樓のなかの吊されてゐる者の姿を、半ばは沈着な半ばは呆然自失して居る人の名づけ難い精密で見たものは憲吉であつた。彼は彼を待ちあぐんで居た穆彥の母に大急ぎで導かれた。彼等は庭の上に傍り沿うて立つた。彼の女のふるへてゐる指尖を逐うて、憲吉はその開かれた窓のなかにほの白い穆彥を見た。憲吉の目は老年によつて霞まされても居なかつたし、且つ彼の理智はその肉眼での遠望以上のものを見た。それは單に物に見恍れて居る人ではない、それより以上の恍惚が彼を捉へて居ることを憲吉は豫想した。それ故に、彼がその望樓に登つて行かうと決心をした時には、その一瞬時に憲吉の心は常人のそれから飛躍した何物かであつた。彼はそのくるくる廻る階段を思慮に沈みながらくるくると登つた。手燭と彼と彼の影とがくるくると登つた。登り詰して扉を開けた時に彼は彼が豫想したと同じ物を目（ま）のあたりに見た。窓ぎわのテーブルの上に座つて自分自身の手で縊れて居る者と、それを見出した者がそこに置いた手燭との間には一枚の紙があつた。紙には文鎭の代りに鋭い刄のあるナイフが乘せ置かれてあつた。しかし狂人が月の光のなかで書いたこの遺書は全く讀むことは出來なかつた。何故かといふのに、字は字の上に重り合ひまた一つ一つの字はそれを組み

立てるさまざまな線があちらこちらとばらばらに錯落して字の形をなして居なかつた。玲子といふ字と思へるものがところどころにあつて、それが何かアラベスクになつてつながつて居る。憲吉には、その時、より以上にそれを判斷してゐる暇はなかつた。彼は穆彥の母が彼のあとから高い階段を這ひながら上つて來るであらうことを知つた。さうしてこの不幸な年とつた母に、その子のかういふ姿を見せたくないと憲吉は思つたからである。それは彼の亡き玲子に對する愛によつてである。憲吉は兎に角死屍をそこからとり下さうと思つた。それ故に彼はテーブルの上に昇つて、これから死屍を吊し下げて居る帶を解からうとした。——そこに網を營まうとしてゐる一疋の蜘蛛を憲吉が見たのはその時にである。細くしごかれた絹の帶は死屍の首にその結び目がしつかりと食ひ入つて居た。首は二重に卷かれてあつた。それはどうしても解けさうにもなかつた。憲吉はあの紙の上にあつたナイフを思ひ出してそれを拾ひ上げた。それから死屍の穆彥を片手で抱きかかへた時、ふと彼の不氣味に澄みきつた心のなかで、彼の抱いてゐる者を死屍にした事實の眞相が解るやうな氣がした。さうして憲吉はそれを自分にはげしく打ち消した。それから弓弦のやうに緊張して下りて來てゐる帶にナイフの刄を當てた。自分から斷ちきれようとしてゐた帶は一度に斬れた。重心のない死屍は憲吉に倒れかかつた。その重量に壓された憲吉はよろめいて倒れた。窓の方へである。階段を三分の一ほど登つてゐた穆彥の母は、鈍い重苦しい地聲を開いた。螺旋狀の階段のうつろは甲高にひびいた——それは彼の女が思はず上げた叫び聲が反響したからである。

　庭に立つてゐる穆彥の母は、彼の女の足もとに彼の女のよく見たことのある二人の若い男が、折り重つて土の上に横につてゐるのを見た。その一つは首に何かを卷いてゐる。それからそれのそばに小さなナイフが落ちて光つてゐる。又彼の女は高い方を見上げて、或る一つの窓でそのカーテンがゆらゆら揺れて、それには光の薄い炎がついて居る。彼は

上の方を見た。それから下の方を見た。彼の女は少しも愕いては居ない。彼の女の目は焦點の合はない寫眞機に似た作用をしてゐるだけである。何故かと言ふのに彼の女は普通人の意識をもう持つてゐないからである。メリは彼の女の足もとに來てきしめくやうに鳴いた。鳴きつづけた。彼の女はこのうるさい生き物を追ひのけた。メリは植込みのなかから鳴いた。心配げに濱邊を廻つて歸つて居た穆彦の乳母は、ふと目を上げた時に、月の光のなかに小さく聳えた望樓から、澤山の煙が白く搖れもせずに一すじに天の方へ立ち昇るのを見た。彼の女は何か美しいものでもあるやうにそれを見た。それほどその煙が靜かであつたからである。しかしすぐその次には、彼の女はさくさくと深く踏み込む砂に足をとられながら夢に追ひ剝ぎに逢つた人のやうに走つた。眼の前に大く展開してゐる月明りの砂濱を見ながら走つた。



或る少年の怯れ

谷崎潤一郎

少年の名は田島芳雄と云つた。芳雄は自分の兩親がどんな人であり、どんな顔をして居たかはまるきり知らない。彼の兩親は彼が生れて四つになるまでの間に死んでしまつたのである。彼は物心が附いてからは兄の幹藏の家で育てられた。幹藏は彼が五つの歳の時に二十四だつた。幹藏の下に二十になる祿次郎と云ふ弟と十六になる柳子と云ふ妹とがあつた。さうして柳子と末子の芳雄とは歳が十一も違つて居たのに、其の間には兄弟が一人もなかつた。いや、實は一人か二人あつたのださうだけれど、生れると直ぐに死んでしまつたのだと云ふ事を、芳雄はずつと大きくなつてから知つた。

だから芳雄は四人の兄弟の一人ではあつたやうなもの丶、自分だけがひどく幼い爲めに何となく除け者にされて居るやうで淋しかつた。芳雄はよく「芳雄さんは一番可哀さうですね」と云ふことを親

類の人たちから云はれた。それは彼が二た親の顔を知らないと云ふことが哀れみの原だつたのである。しかし芳雄は二た親を知つて居たところで、自分が今の兄弟たちに對する心持ちと格別變りはないだらうと云ふ氣がした。外の三人の兄や姉たちは友達のやうに對等に話し合つて遊んで居ながら、彼だけは子供だからと云つて相手にされない。それは何も虐待されると云ふのではなかつたけれども、殊に姉の柳子などは彼を自分の子のやうにしてはくれたけれども、其の「子のやうにされる」のが彼には何だか不服だつたので、「子のやうに」されないでも「兄弟のやうに」されて欲しいのだつた。そんな事を芳雄が折々感ずるやうになつたのは彼が七つになつた歳の頃からである。三人の兄や姉のうちではもちろん總領の兄がいくらか威張つて居るらしい樣子だつたが、さうして芳雄に取つても其兄が一番恐いには違ひなかつたが、それでも其の兄は外の兄弟に對しては、芳雄を叱る時のやうには叱る事は出來なかつた。その外の兄や姉たちも總領の兄と一緒になつて芳雄を叱る權利は持つて居た。彼等は芳雄に對する時だけ、いやに兄貴ぶつたり姉ぶつたりして居るやうに思はれた。總領の兄が、外の二人と違つて居るところは、三人の兄弟の名前を呼ぶのに「祿次郎」とか「柳子」とか「芳雄」とか云ふ風に一樣に呼び捨てにする事だつた。さうして彼は三人の誰からも「兄さん」と呼ばれて居た。それから祿次郎と柳子とは互ひに「祿ちやん」だの「柳ちやん」だのと云ひ合つて居た。たゞ芳雄だけが、二番目の兄や姉に對してまでも、「祿次兄さん」だの「姉さん」だのと呼ばなければならなかつたのである。

芳雄が七つの歳の夏に、總領の兄は大學を卒業して醫學士になつた。で、今迄は毎朝角帽に金ボタンの制服を着て出て行つたのが、間もなく紳士の着るやうな洋服を着て、毎日午前八時ごろから夕方の五時ぐらゐまで、大學病院の方へ通ふやうになつた。その時分親類の叔父だの叔母だのが内へやつて來て、

「祿藏さんもとうとう立派な學士になつたんだから、こんなめでたい事はありません。お父樣やお母樣も草葉の蔭でさ

ぞ喜んでおいでなさるだらう。」

と云つて、日々に兄の出世を喜んだことを芳雄はうろ覺えに覺えて居る。が、それよりもはつきり覺えて居るのには、明くる年の三月に兄が結婚した折のことである。式を擧げたのは日比谷の太神宮で、晩には上野の精養軒でおひろめの宴があつた。芳雄は牛込の廣澤と云ふ親類の叔母や「祿次兄さん」や柳子と一緒に自働車に乘つて、日比谷から上野へ廻つた。自働車の中で叔母が、

「ほんたうに好ささうなお嫁さんだこと。――今度は祿ちやんの番ですね。」

と、そんな事を云ふと、

「なあに、僕よりは柳ちやんの方が先ですよ。」

と、「祿次兄さん」が云つた。さうしたら姉は眞赤な顏をして、

「いやな祿ちやん」

と云つたやうだつた。

その日から芳雄には新しい姉が一人殖ゑた。新しい姉の方をたゞ「姉さん」と呼んで、今迄の姉の方を「柳子姉さん」と呼ぶやうになさいと、廣澤の叔母はわざわざ彼に注意をしてくれた。たゞの「兄さん」にたゞの「姉さん」に「祿次兄さん」に「柳子姉さん」、――から二つづゝあるのがおかしいと云つて芳雄が笑つたら、「兄さんや姉さんが多勢あるのは結構ぢやありませんか。」と云ひながら叔母も笑つた。新しい姉が出來たと云ふ事は、芳雄も何だか物珍しいやうな氣持ちで、嬉しくないことはなかつた。新しい姉は「柳子姉さん」より二つ上の二十で、喜多子と云ふ名前だつた。「喜多子」……「喜多子」と、婚禮の明くる日から總領の兄は呼び捨てにした。それが耳馴れないせゐか、暫くの間芳雄には新しい姉に

氣の毒なやうな感じがした。

精養軒のおひろめの席に連なつた晩に、芳雄は新しい姉と今迄の姉と孰方がいゝ女だらうか知らと思つて、そつと顔だちを見くらべたりしたものだつた。しかし其の晩は孰方も派手なきらきらした御祝儀の着物を着て、お白粉を濃く塗つてキチンとして居たので、顔が同じやうに綺麗に見えてよく分らなかつた。新しい姉の方が今迄の姉よりも別嬪だと云ふ判斷が、いつの間にかはつきりと頭にあるやうになつてしまつて居たのは、その後二た月か三月過ぎた時分だつたらう。とにかく新しい姉は柳子よりも優しい顔や姿をして居た。さうして芳雄を親切に可愛がつてくれることは柳子と同じだつた。晝間は外の兄や姉は病院や學校へ行つて内に居ないことが多かつたから、芳雄は自然新しい姉に早く馴染むやうになつた。いつたい彼は赤ん坊の頃から病身な子供だつたので、大きくなつてからも月に一度か二度はきつと熱を出したり胃腸を惡くしたりしたので、そんな折に新しい姉は氣を揉んで自分が醫者へ附いて行つてくれたりした。姉は芳雄にばかりでなく、外の兄弟や親類の人たちにも評判がよかつた。取り分け柳子とは仲がよくて血を分けた姉と妹とのやうだつた。でも、柳子は弟があまり度び度び病氣で寢たりなんかして姉に面倒をかける事が多いので、をりをりは氣の毒がる樣子で、芳雄が姉に甘へたりして居ると、

「芳ちやん、お前なるたけ姉さんに世話を燒かすんぢやありませんよ。」

かう云つてたしなめることもあつた。

それは今でも半分は夢のやうな工合で芳雄の記憶の中に殘つて居る——姉が赤ん坊を生んだことと、そのことは結婚の

明くる年の正月時分だつた。芳雄は一度その赤ん坊の顔を見たやうに覺えて居る。それから生れる時のおぎやあ、おぎやあと云ふ泣き聲も、お產のあつたのが宵の口のことで芳雄はちやうど二階座敷に居た時だつたから、たしかに聞いたやうに覺えて居る。けれど其の後赤ん坊は居なかつた、生れたと思つたのは芳雄の思ひ違ひであつたかのやうに。——しかしそれから二三年も立つて或る時芳雄が柳子から聞いたのに、生れたやうに覺えて居るのは芳雄の思ひ違ひではなく、やはりほんたうだつたのだのが、生れると間もなく二三日して死んでしまつたのださうで、その所の記憶が芳雄の頭からはポツリと拔けて居たのである。子供の時分に見たり聞いたりした事はどうも不思議で、ところどころをはつきりと覺えて居るけれど、その後先がぼうツと霞んで繫がりが付かない事が多い。で、芳雄は其の赤ん坊の死んだのは知らずに居たが、その後姉が二度お產をして、その時の赤ん坊たちも皆同じやうに直ぐ死んでしまつたのは、明かに覺えて居るのである。姉のお腹が大きくなる度ごとに今度こそは大丈夫だらうと云つて、內中の者が樂しみにした效もなくて、いつもお產はうまく行かなかつた。芳雄にしても赤ん坊が出來れば自分も兄になれるのだから、可なり熱心に其れを願つては居たのだけれど。

　家の間數のわりあひに家族が多勢だつたので、內の中は赤ん坊が生れないでも隨分賑かだつた。四人の兄と姉とが集まつて、その外に男や女のお友達などもやつて來て、骨牌をしたりトランプをしたり音樂會をしたりして夜おそくまで騷いで居ることが間々あつた。芳雄は晩の八時になると先へ寢かされたが、騷々しくて寢つかれないくらゐだつた。彼は子供の癖に神經質で眼敏い性分だつたから。トランプの時はやり方が分らないので見て居ても詰まらなかつたけれど、音樂會の時は皆がいろいろ冗談を云ひ合つて面白さうなので、芳雄も傍へ置いて貰ふのが常だつた。

「芳ちやん、今度はお前の番よ。さあ、何か唱歌を歌つて御覽。」

みんなが一としきり歌ひ疲れてがつかりした折なぞに、芳雄がぼんやりと手持ち不沙汰で居ると、柳子はよくこんな事を云つた。

「さあお歌ひなさい。今御馳走が來ますから歌つたら芳ちやんにも上げますよ。」

と、上の姉も一緒になつてすゝめた。芳雄は大きな人たちの仲間へ入れて貰へるのは嬉しくない事はなかつたが、兄や姉のお友達も居るので、何となく斯う羞かしくつて歌はうと云ふ氣にはなれなかつた。すると柳子は、

「ほんとに芳ちやんははにかみ屋だねえ。歌はなければお菓子を上げなくつてよ。」

などゝ云つてからかつたものだつた。

上の姉は三味線が好きだつた。柳子はいつも姉の三味線で長唄を語つた。兄たちはトランプだと得意だつたが音樂會では何がうまいと云ふことはなしに、英語の唱歌をうたふとか勸進帳をやるとか芝居の聲色を使ふとか、好い加減な節で出鱈目に怒鳴るばかりだつた。芳雄には、彼に對してはいつも眞面目な顏つきをして居る上の兄が、義太夫を語つて女の聲で臺辭を云ふ時が一番おかしかつた。餘所から遊びに來るお客の中には隨分いろんな藝人が居てヴイオリンやマンドリンを彈く者もあつた。上の姉の從妹にあたる女學生で、みんなが「瑞枝さん、瑞枝さん」と云つてた人――芳雄だけは其の時分、「瑞枝さん」とは呼ばないで、「麻布の姉さん」と呼んで居た――その人は會のあるたびにやつて來て、非常に高い好い聲で西洋の歌をうたつた。ハイカラな女だつたから日本の物はあまりやらなかつたけれど、ヴイオリンが上手なので、瑞枝の番が來れば皆が耳を澄まして聞いて、曲が終ると盛んな拍手だつた。「ソプラノ」だとか「バリトン」だとか「獨唱」だとか云ふ音樂に關係した言葉が、をりをり瑞枝の口から出ることがあつたので、芳雄もいつの間にか其れを聞き覺えるやうになつたくらゐである。瑞枝はその外にも芳雄には意味の分らない英語を、ぺらぺらと話の間へ

交ぜて語る癖があつた。柳子も可なりお轉婆の方だつたが瑞枝にはかなはなかつた。男の人たちに冗談を云はれなぞしても、瑞枝は負けずに云ひ合ひをしてやり込めたりする。ほかの女たちはトランプは下手だのに瑞枝は其れもなかなか强かつたので、どんな會の時でも彼女が一番持て囃されて居た。

兄は大學病院に二年ほど勤めた後、其處をやめて、銀座の裏通りへ「田島醫院」と云ふ看板を出して町醫を開業した。しかし家族が多勢でもあつたし、醫院の方は狹かつたものだから、內中共方へ引越す譯には行かないので、やはり兄は今まで通り本鄕の彌生町の家から每朝通つて居た。そんな譯で家庭の空氣は相變らず呑氣で賑かだつた。たゞ、開業と同時に內の方へも電話が引かれて、夜おそくなどに兄が呼び出されることはあつたけれど、それも極たまだつたのである。

或る時――それは芳雄が十歲の年の暮れで姉がちやうど二度目の赤ん坊を生んだ折のこと――その赤ん坊は前にも云つたやうに生れると直ぐ死んで居たが、姉はお產のあとの疲れが出て半月ばかり床の上に寢たり起きたりしながら退屈がつて居たので、それを慰ろる爲めに夕方からいつものやうな音樂會が彼女の枕もとで催されることになつて居た日に、芳雄は學校から歸つて來ると、柳子に云ひ附かつて銀座の十字屋へ蓄音器のレコードを買ひにやらされた。彼は憶病な子供だつたから獨りでなんぞそんな遠くへ使ひに行くのは厭だつたけれど、十字屋なら所が分つても居たし、柳子や女中は晩の會の支度で忙しくて手が放されなかつたから、どうしても彼が行かなければならなかつた。京橋で電車を降りて十字屋で買ひ物をしてから、まだ表はうす明るかつたので、芳雄はレコードの包みを壞さないやうに大事に抱へながら、

こんな遠い所まで子供が獨りで使ひに來たのを誰かに見せてやらうと思つて、直き近くにある兄の病院へ寄つたが、這入つて行くと、兄はもう本郷へ歸つてしまつた跡らしく玄關や藥局室はガランとして誰も居なかつた。たびたび來て勝手を知つて居たから、芳雄は梯子段を上つて二階の部屋のドーアを明けると、兄は歸つてしまつたのかと思つたら、もう一人思ひもかけない人と——瑞枝と二人ぎりで其處に居た。芳雄ははつとして、見てはならないものゝ所へ來たやうな氣がして、でも又すぐ其の部屋を出てしまふのは惡いやうにも考へられて、ちよいとの間、ぢつと立つたまゝだつた。瑞枝と兄はちらと芳雄を見て眼を外らして、——少し顏色を變へたやうだつたけれど、——別に騷ぐやうな風はしないで、ぢつと暫く動かずに居て息が詰まつたやうな工合に默りつゞけた。瑞枝は寢ころんで居て、兄は其の首のところに据わつて下を向いて顏を寄せつけるやうにした形のまゝで居た。

「いゝえ、其處のところぢやございませんわ。……もつと此方、こゝの胸の所が痛いんでございますの。……」

ふいと、瑞枝がさう云つて、襟をひろげて自分の胸の上をコツコツ叩いた。

「こゝですか、こゝが痛いんですか。」

兄もさう云ひながら、藥局室から聽診器を取つて來て彼女が指で叩いて居る所へ其れを貼つてやると、瑞枝は立ち上つて、

「芳ちやん、またた一人でいらつしつたの?」

と、芳雄を見てにつこりして着物の襟を直して居た。

「えゝ、僕は銀座へ蓄音器のレコードを買ひに、お使ひに來たんです。」

なるたけ兄の方を見ないやうにして、芳雄は瑞枝にだけさう答へた。何でもないんだ、僕んだ思ひ違ひだつたんだ、と

云ふやうな氣も半分はしながら。

「あら、お使ひにいらしつたの？　それは感心ね。――あたし此れから兄さんと御一緒にお宅の音樂會へお伺ひする所なのよ。芳ちやん先へ行つて姉さんにさう云つて置いて下さいな。直きに參りますからうんと御馳走を拵へて置いて下さいツて。」

と云つて、瑞枝は其のあとで何か冗談を云つて芳雄にふざけたやうだつた。

晩になつてからの音樂會は、姉が半病人のやうな姿で蒲團の上に据わつて居るのが陰氣だつたけれど、外の人たちが思ひきりはしやいでくれたので其の陰氣さは忘れられてしまふくらゐだつた。兄も機嫌がよかつたし、兄と一緒にやつて來た瑞枝も、みんなを相手にいつもの通り元氣にしやべつたり遊んだりした。

田島の一家に陽氣な空氣が充ち亘つて居たのは、其の時分が絶頂だつた。其の時分は誰も彼も幸福だつたし、臆病な芳雄も淋しいと云ふ心持ちを餘り味はずに濟んで行つたのである。姉の床上げがあつてから後も、暫くの間は音樂會や骨牌會が催されて、みんなが詰まらない事にきやツきやツと云つて轉げて笑つたりするほど氣輕な心になつて居て、始終集まつて來る瑞枝を始め多くの定連の人たちもよく氣が揃つたものだつたが、芳雄の十一の歳の秋に工學士になつた二番目の兄の祿次郎が神戸の造船會社の方へ行つてしまつたのが、家の中の淋しくなり出した始めだつた。でもまだお轉婆な柳子が居て瑞枝と負けず劣らずに騷いで居る間はそんなでもなかつたのに、柳子も其の年の暮れに澁谷の宮本と云ふ内へお嫁に行つたので、それからは急に家の中が陰氣になつて、今迄のやうに會を催すこともなくなつてしまつたのである。姉は、二度もお産をやりそくなつた上に、貧血症になつて時々眼まひがしたり氣が遠くなつたりして寢て居ることが多かつたから、人が尋ねて來ることを嬉しがつて、音樂會の定連のうちで今では瑞枝一人だけが相變らず

ちよいちよい話しに來てくれるのを、たいへん懐かしく思つて居るらしかつた。さうして、病氣が直ると瑞枝を誘つては兄と三人で芝居を見に行つたり、芳雄も連れて日比谷公園へ出かけたりすることがあつた。けれどどうしても以前のやうには面白くなれなかつたのは、――其れは一つには、その時分から兄が妙に重々しい、いつもむつつりと塞ぎ込んで居るやうな人間になつてしまつたせゐでもあつたには違ひない。兄はもともとぢつと沈んだところのある、愛嬌の乏しい無口な性質だつたのに、今までは家庭の空氣に釣り込まれて派手な人間に見えて居たのだけれど、祿次郎や柳子が居なくなつてからはいつとなしに自分の元の性質に復つて居たのだつた。それに不愛憎なわりには鷹揚で暖かみのある人だつたから、姉の病身な事や、子供の出來ない事や、いろいろそんな事で人知れず氣を使つて居たのかも知れなかつた。たゞ瑞枝と二人ぎりで居る時に、兄が例になくにこにこ笑ひながら話をして居たのを、芳雄はたつた一度、――或る日小石川の植物園へ行くと向うの木かげを二人が手を曳いて歩いて居たので、――そつと見たことがあつた。二人の方では氣が付かなかつたやうだつたが、……

柳子が結婚した明くる年の三月に、姉は三度目の流産をして又床の上に寢たり起きたりする體になつた。瑞枝はもちろん柳子もをりをりは丸髷に結つた變つた姿で澁谷から尋ねて來ては、

「瑞枝さん、ほんたうにあなたには濟みませんことね。毎日毎日お見舞ひに來て頂いて。」

と、心から禮を述べて、瑞枝のやうにしげしげとは出歩く譯に行かなくなつた自分の今の身の上をかこつ事もあつた。

「いゝえ、あたしなんか暇な人間なんですから毎日でもお伺ひして、柳子さんの代りに姉さんのお相手をいたしますわ。どうせ遊んで居るんですから何でもありはしませんの。」

瑞枝はいつも柳子にさう答へて、夜おそくまであとに殘つては例の花やかな笑ひ聲を響かせながら面白さうな世間話

を姉に聞かせて居た。兄も大概の日には、醫院の方を早く濟ませて枕もとに附き添ひながら、それほどにゝる病人でもなかつたのに、隨分やさしくして親切な言葉をかけてやると云ふ風だつた。

「瑞枝さんや卿ちやんが遊びに來て下さるので、あたしちつとも退屈なんかしやしませんから、そんなにして頂かなくつてもようござんすわ。今日はあなたお忙しいんぢやなかつたの?」

姉はさう云つて兄の親切を氣の毒がることもあるくらゐだつた。姉は氣だてのいゝ人には違ひなかつたから、兄からこんなに大事にされるのはあたり前だつたけれど、それでも芳雄は、自分が病氣の時などに兄があの半分も自分にはやさしくしてくれない事を思ふと、姉を仕合はせな人だと云ふやうに考へずには居られなかつた。さうしてさう考へることが芳雄には羨ましいよりは嫉しい感じを起させたには違ひなかつたが、しかし兄だの瑞枝だのがあんまり姉を大事にし過ぎると云ふことは、其處には何か氣づかはしい譯があるやうな暗い心地のする折もあつて、痩せて青ざめた姉の顔をぢつと見て居ると云ふ事は、なぜか芳雄には堪へ難かつた。

産後の疲れと云ふだけで大した病(やまひ)ではなかつたのだが、みんなが心配して看病したり、姉も妙に淋しがつて人懐(ひとなつ)つこいことを云つたりしたのはやはりよくない出來事のある前兆だつたのかも知れない。――姉はその後一旦床上げをしたのだけれど、前からの貧血症がだんだんひどくなつて、流産をしてからちやうど三月目の五月の末に、ふとした事で死んでしまつたのである。死ぬ二三日前までは別に不斷と變つた樣子はなくて、たゞ折々眼まひがしたり氣が遠くなつたりするだけで、ふらふらしながらも寢るほどではないと云つて起きて居たのに、或る日の夕方、いつも時々するやうに兄に注射をして貰ふと、明くる日の朝あたりから急に容態が惡い方へ向いて行つた。それも、まるで赤痢にでもかゝつたやうに幾度も幾度も激しい下痢をして、眞白な牛乳のやうなものを口から吐きつゞけて、三日目の晩には危篤と云ふ事

になつてしまつたのだつた。いよいよ息を引き取らうと云ふ時には、電報を見て神戸から歸つて來た祿次郎や前の晩からずつと看病をして居た柳子や、牛込の廣澤の叔母や姉の實家にあたる麻布の荻原家の親たちや瑞枝などが、兄や芳雄と一緒にぐるりと枕もとを取圍んで「姉さん」だの「喜多子」だのとてんでに姉の名を呼びながら、しまひにはみんなが鼻を詰まらせてしくしくと泣いた。女の人たちは子供のやうに聲を上げてまで泣いて、ほんたうにどうかしてもう一遍姉をよみ返らせたいと願つて居るやうだつた。だが、最初に兄が、それから祿次郎、柳子、芳雄と云ふ順序に、其處に居る殘らずの者が末期の水を脣へ滴らしてやつて居る間に、姉の淨い眼の中から魂が遠くの方へだんだんと消えるやうに立ち退いて行く樣子が、芳雄にもよく分るやうな風になつて、さうして姉はとうとう死んで行つたのである。眼瞼を閉ぢてやつたり、胸の上へ兩方の掌を組み合はせてやつたりしてから、暫くの間はみんな一度にがつかりしたやうに遺骸の傍に据わつたまゝ默つて居た。立ち退いてしまつた魂が、まだそんな遙かな所へは行き切れずに、此の部屋の中にさまようて居るのを恐れてゞも居るやうな工合に。……

「僕は電報を見てびつくりしちまつたが、どうして斯う急にいけなかつたんでせう。」

その時、祿次郎がふいとそんな事を、隣に居る兄の方へ囁くやうに云つた。

「……急性の腸加多兒を起したんだ。普通の人なら助かるんだが何しろ衰弱して居たもんだから……」

さう答へた兄の顏つきが芳雄には氣になる事があつたので、こつそりと其の方を窺ふと、兄は——死んだ姉よりも眞青な顏をして居た兄は、芳雄と眼を見合はせたと思つたらどんと衝かれたやうな風に首をちゞめて項垂れてしまつた。芳雄も其の時は顏が眞青だつた。

お通夜や、葬ひや、初七日の法事や、そんな事が引きつゞいてある間は元の音樂會の人たちだのいろいろの顏觸れが

集まつて來て、わりあひに賑かだつたけれど、それが濟んでから後、謙次郎は神戸へ歸つてしまふし、たまに柳子と廣澤の叔母とが佛壇へお線香を上げがてら兄や芳雄を慰めに來る外には、めつたに尋ねてくれる人もないやうになつて、あれほどしげしげとやつて來た瑞枝も、——淋しい時にはあゝ云ふ人の花やかな笑ひ聲が何よりも戀ひしいものだのに、どう云ふ譯かふつつりと姿を見せなかつた。兄は毎日、朝早く起きて染井の墓地へお參りに行つて、そのまゝずつと銀座の醫院の方へ廻つたが、姉が生きて居る時分には必ず日の暮れには戻つて來たのに、その頃は夜おそくまで歸つて來ない晩が多くなつて、芳雄は一日兄の顏を見ないで暮らすことがあつた。芳雄は尋常六年生だつたので午後の二時頃にはいつも學校から戻つて來たけれど、お若と云ふ飯焚きの女とお元と云ふ年寄の女中と二人しか居ない家の中に逼入つて居る氣にはなれなくて、夕方明りのつく時分まで表に遊んで居るのが常だつた。でも、晝間のうちはさう云ふ風にして、いくらか紛れて居たやうなものゝ、夜になつてからの味氣ない心持ちは、——ほんたうに獨りぼつちの、頼りのない心持ちはどうしていゝか分らなかつた。

「坊つちやん、さあもう八時でございますからお休みなさいましよ。夜更かしをして居らつしやると今に兄さんがお歸りになつてお叱りになりますから。」

晩飯を濟ませてからしよざいなさに女中部屋へ來て、女中たちの針仕事をして居る傍でひつくり返つて居たりすると、ぢきにお元はさう云つて少し離れて居る書生部屋の四疊半へ、蒲團を敷いて蚊帳を釣つてくれるのだつた。柳子が嫁に行つてからは其處へ獨りで寢る習慣になつて居た芳雄は、姉が死んでしまつた今になつてまでさうする事は厭だつたけれど、——成るべくなら二階の兄の部屋へなり女中たちの間へなり一緒に寢かせて貰ひたかつたけれど、獨りで寢るのが恐いと云ふ事を兄に訴へるのが何となく氣塞せで、兄に對して悪いやうな氣持ちがしたりして、つひ其のまゝに辛抱し

なければならなかつた。芳雄は、あの、姉が亡くなつた晩の事があつて以來、面と向つては兄の眼の中を見ないやうに努めて居たが、それにも拘らず兄が自分をどう思つて居るのだかが氣に懸つて居た。あまり年が違つて居たので昔からさう打ち解けた仲でもなかつたし、お互ひの氣心はよく分らなかつたが、兄の方でもあの晩の事があつてから妙に芳雄を氣味惡く感じて居るのではないだらうかと云ふ考へが、芳雄の胸の奥深くにあつて、その爲めに、猶更兄と親しめないやうな工合だつた。

「兄が自分を氣味惡く感じて居ると云ふ事、それがほんたうだとすればなぜだらうか？」――その考へを押し詰めて行くと、はつとするやうなものに行きあたらなければならなくなつて、芳雄は兄を恐ろしいと思ふよりは、自分を恐ろしい子供だと云ふ風に感じるのだつた。兄を疑ひの眼で見る事はならないと心にきめて居ながら、しかしやつぱり其の考へから逃れる譯には行かなくて、毎晩々々、兄の歸りがおそい折などには殊に、寢床へ這入つてもまんぢりともせずぢつと其ればかりを思ひ詰める。――姉が亡くなつてから後は電燈をつけて寢るやうにはして居たけれど、萠黄の蚊帳が釣つてある部屋の中はもやもやと煙るやうに薄ぐらく、一つ所をあまり長く見て居ると見えないものまでも見えさうになつて來て、若し姉が幽靈になつて出て來る事があるとすれば、きつと誰よりも自分の所へ出て來るに違ひないと思つて居た芳雄は、それが隨分ありさうな事のやうにも思はれたので、其の爲めに一層神經が昂(たかぶ)つて睡られなくなり、何度も何度もちやうずに立つたり蒲團の上へ怯えたやうに起き上つたりするのだつた。兄は、時計が九時を打ち、十時を打ち、十一時を打つてまでも歸らない晩が屢々で、どうかすると十二時が鳴つてから餘程過ぎた時分などにお酒に醉つて戻つて來ることがあつた。

或る晩、芳雄が寢床で眼を覺ますと電燈が消えて居て部屋の中は眞暗だつた。今何時(なんじ)だらう？……兄は歸つて來たの

か知らん？……ふとさう思ひながら、いつもの四疊半に自分が居ることをたしかめる爲めに、手を伸ばして蚊帳の裾に觸つたり枕もとの障子のありかを搜つたりして、それでもいくらかは安心したやうに頭から夜具を被つてしまつたけれど、いつもならば二三分も待てば直き電燈がつく筈だのに、其の晩はいつ迄立つてもつきさうもなくて芳雄は容易に寢られなかつた。闇がそんなにも長くつゞいて居ると云ふこと、さうして寢ようとすればするほど眼が冴えて來るやうな心持ち――それが芳雄には、電氣の故障のせゐだとばかりは思へないで、其處から何か芳雄の眼に見え耳に聞えて來るものが、今にこつそりと忍び寄るのではないだらうかと云ふやうな豫感がしたが、なぜか其れが其の時は不思議に恐くも何ともなくて、姉がきつと、自分を恐がらせないでくれるのだと云ふやうにも考へられた。姉が其處へ出て來たところで自分を怯えさせたり怨んだりする譯はない、姉は何か、尋ねたいこと、でなければ聞いて貰ひたいことがあるにしても、きつと芳雄にだけは生きて居た時分のやうに優しい姿をして情深い言葉をかけてくれる。そんな事を思ふと、芳雄は急に姉が懷しくてたまらなくなつて、

「姉さん……」

と、小さな聲で呼んで見たかつた。もしさう云つたら其れに應じて闇の中から、

「芳ちやん……」

と云ふ細く悲しく透き徹る姉の聲が、直ぐと聞えて來さうな心地がした。それに、芳雄の寢て居る四疊半の次ぎの間は、姉が達者で居た時分に彼女の居間としてあつたので、其處には今も姉の鏡臺だの簞笥だのが昔のまゝに置いてあつたのだから。

芳雄はふいと、自分でも分らない或る怪しい昂奮が自分を不斷の臆病な子供とは全く別な者にさせてしまつたことを

感じながら、もしや姉の襖が開けるかと云ふ戀ひしさで胸一杯になりながら、それをどうにも制する譯に行かなくなつて、蒲團を拔け出してふらふらと闇の中を次ぎの間の方へ手さぐりに辿つて行つた。此の頃は晝間でもあんまり人が出這入りをしない其の部屋は疊が微温く濕氣て居て、べとべとと足の裏へ粘り着くやうなのを、芳雄は夢の中をさまよふのに似た心持ちで氣味惡く踏みしめて、簞笥の置いてある隅の所に暫くしーんとして彳んだまゝ暗い眼の前を梟のやうに視詰めて居た。瞳を圍んで居る濃い闇の何處か知らで明るい泡がぽんやりと浮かんで其處からひらひらしたものが見えさうになつて來るやうな、さうして其れが「あれ」と云ふ間もなく消えてしまつたかのやうな、そんな氣持ちが二三度はしたけれどもたゞ其れだけに過ぎなかつたので、またべとべとと疊の上を歩いて簞笥の横の方の壁にぴつたりと添ひながら蜘蛛が這ふやうにして行くと、思ひがけなく芳雄の手に觸つたものがあつた。――それは姉の三味線が、今もなほ其處の壁に懸けてあつたのである。芳雄は、其の時は魔がさしたやうになつて、或る恐ろしい經驗を我から味はつて見たく思ふ根強い好奇心から、その絲の一とすぢを摘まんでぴんと鳴らした。ぞうッとして、身の毛が竦つやうになつて、闇の底にふるへて消える餘韻の果てから姉の聲が響いて來るのを想像しながら、ぢつと耳を澄まして居たがそれでもそんなものは聞えて來ない。ぴん……と、もう一遍彼は鳴らして、さうしてまたぢつと耳を澄まして息を凝らして居ると、眞暗な中にぽうッと明るくなつた所が現れて、今まで見えなかつた障子の棧が眼に映つて來て、外の廊下を出來るだけ忍びやかに歩いて居るらしい足音がみしみしと近寄つて來るのだつた。と、その障子は幽靈が這入つて來でもする時のやうに靜かに明いたが、寢間着を着て片手に手燭を持つた兄が、蠟燭の穗先に顏の眉間のあたりをてらてらと赤く照り返されながら、默つて部屋の閾際に立つた。

その顏は、ちらちらと瞬きをつゞけて居る蠟燭の灯の向う側に、燈明に照らされて居るお廚子の奥の佛樣のやうに其

れだけが一つ闇に浮き出て、高い鼻の影を片方の頬ッぺたへ真黒くくツきりと落して、物云ふ術を忘れたやうに唇を固く閉ぢたまゝ凍り付いたやうな凝視を芳雄の上に据ゑて居た。芳雄は箪笥と壁との隅の所へ身をちゞめて、生れたばかりの赤ん坊がするやうにしつかりと握りしめた兩手の拳を頤の下へ入れて、たとへやうのない戰慄に體中を任せながら、――姉の幻を見たにしても恐らくこれほどではあるまいと思はれる怖じい兄の形相を、あの、姉が死んだ晩以來決して見ようとはしなかつたもの、――兄の眼の中を、動物的な恐怖を以て睨み返した。が、兄の眼の中には芳雄のそれに劣らない氣違ひじみた恐怖が充ちて光つて居たかのやうに思はれたのである。

「芳雄、……お前は其處で何をして居るんだね？」

その聲は、しかし其の眼よりももつと露はな恐怖の爲めに微かにわなゝいて居た。兄はさう云つて芳雄の姿と其の傍にある三味線とを見比べるやうにして、それから斯う、叱ると云ふよりは哀願してでも居るやうな或る奇妙な優しさを帶びた調子になつて、

「え？　何をして居るんだ？　今何かお前はしやしなかつたか？」

「いゝえ」

と云つて、芳雄は何處までもさう云ひ切る心でまだ兄の眼を執念深く睨んで居た。それは反抗的にではなく、恐怖が彼の視線を其處へ釘着けにしてしまつたやうに。――

「何もしない？　ほんたうに何もしなかつたかね？」

兄は、いかにも疑惑に脅やかされた顔つきで重さねてさう云ひながら、芳雄を見る次ぎにはまた恐る恐る三味線の方を見て、それを云はうか云ふまいかと云ふ事を暫く考へて居る風だつたが、

「お前は今、その三味線をいぢつて居ただらう？　え？　さうだらう。」

と云つて、片手に蠟燭を持ち變へてもつとよく彼の方へ芳雄が見えるやうにした。部屋の中に何本もの線を伸ばして居た物の影が其れと一緒に一時はゆら／＼と入り交つてやがて又前と違つた形にぢつと落ち着いて、兄の頬ツぺたにあつた眞黑に尖つた鼻の影はもう其處に映らなくなり、顏は今迄よりも平べつたく明るくなつて見えた。でも、いまだにてらてらと赤く照つて居る其の色つや、どんよりと濁つて異樣に潤んで燃えて居る瞳の輝き、――それが芳雄には、その時やうやう、兄が恐ろしく泥醉して居るのだと云ふ事をありありと發いて見せたのである。

「い丶え、……」

芳雄は、今度は前とは違つた意味の、醉拂つた兄が何か想像もつかない物凄い眞似をしやしないかと云ふやうな怯えを感じながら、ぐつと體中を角立てるやうに引きしめてまだ剛情に同じ文句を繰り返すのだつた。

「だけどお前は、こんな夜半に此の部屋へ這入つて何をしようとしてたんだね。大分先から此處でごとごとやつて居たやうだつたが、何か夢を見て寢惚けて居たんぢやないのかね？」

「え丶」

と、口の内で微かに云つて芳雄が頷いたのを、その曖昧な樣子を兄はどうも信じられないと云ふやうに、忌ま忌ましいのを堪へて居るらしい顏つきでぢろぢろと胡算臭く眺めてから、

「よし、よし、そんならもうお休み、そんなところにうろうろしてないで。」

と云つて、まだ執拗く追ひかけて睨めて居る芳雄の視線を少し極まりが惡さうに避けて、廊下を二階の方へ戻つて行つた。

その晩はそれで済んでしまつても明くる日になつたら芳雄は改めて叱られるのではあるまいかと思つて居たのに、兄はそれきり幾日立つてももう其の事を云ひ出さうとはしないのだつた。たゞ、それまで裸で懸けてあつた姉の部屋の三味線には、いつの間にか鬱金の切れの袋が被せられたけれど。さうして兄は默つては居ても腹の中では芳雄をますます變な子供だと思ふやうになり、あの晩の事をいつまでも疑ひ深くねちねちと考へて居るらしいのが餘所目にも分るやうな氣がして、芳雄はどうしても兄と親しめないやうになつて行くばかりだつた。

「そりやあさうですけれどね、氣に入つた家と云ふものは容易に見付からないもんですし、そんな事を云つて居たら切りのない話ですから、やつぱり引越してしまはうかと思つて居るんです。――」

芳雄がちらとそんな話を聞いたことがあつたのは、それはちやうどあの晩の事件があつてから四五日立つた時分、姉の三十五日の日に廣澤の伯母と柳子とが彌生町の家へ寄つて兄と何か相談をして居る折だつた。

「まあお前さんが其の氣ならさうしたらいゝでせう。此の節の若い人はそんな事を何とも思ひはしないだらうけれどよく佛様は四十九日の間は家の棟を離れないなんて云ふものだし、私なんぞは舊弊な人間だもんだから成るべくならもう少し待つた方がいゝとは思つて居るけれど。」

「ほんたうに伯母さんは舊弊よ。」

と、傍から柳子が兄に加勢をして云つた。

「……こゝの内も先には狹過ぎたくらゐだつたけれど、今ぢや兄さんと芳ちやんぎりでがらんとしてしまつて、何だか斯う陰氣臭いやうな氣がしますわ。こゝに居ると兄さんだつていつ迄も姉さんのことをお忘れになることが出來ないでせうから、いつそもつと陽氣な所へお引越しになつた方がいゝだらうと私此の間からさう思つて居ましたの。そんない

い内があるならさうなすつた方がよござんすわ。」

伯母もそれには強ひて反對もしなかつた樣子で、とうとうそれに話がきまつたのだつたらう。——間もなく一家は慌しい兄の云ひ附けで小石川の原町の方へ引き移つて行つた。その家は南向きの高臺にある新築の借家で、彌生町の家より部屋の數はずつと少なかつたが、眼のさめるやうに明るい晴れ晴れとした間取りの住居だつた。今までは始終姉の幻に追ひかけられて居るやうだつたけれど、それからは芳雄もほつと救ひ出されたやうになつて、夜も安心して眠ることが出來た。あの姉の三味線だの琴だの鏡臺だのは、引越しの時に兄がそれらをどう云ふ風にしてしまつたのだか、新しい家のどの部屋にももう置いてはないのだつた。

みんな、——兄と芳雄との外には誰も、——此の二人の兄弟の仲が新しい住居に移つてから後も次第に鬱陶しく餘所餘所しくなつて行くのを、氣が付いて居る者はないらしかつた。それはあまりに年齢の違つて居る兄がまだ尋常科の生徒で居る弟に構つて居られないのは當り前の事だつたし、姉の生きて居る時分からもさうだつたのだから、それを當り前でなく考へるのは何か自分の僻みであるやうに時々は芳雄自身にも思はれる、——けれど、さう思ふ下からいつの間にか僻みが根を張つて來て、心の奧でぢいッと兄のする事を覗詰めて居るやうな氣になつたりした。

その頃になつて、或る日、それまでは久しく顏を見せなかつた瑞枝が、ちやうど芳雄が學校から歸つて來た時にふいと訪ねて來てくれたことがあつた。

「まあ、ほんたうに御不沙汰をしてしまつて濟みませんでしたわね。一度お伺ひしようと思つて居たんですけれど、忙しかつたもんですからつひつひ不精をしてしまつて、——」

と、いつものりんりんとしたよく響く聲で馴れ馴れしくさう云つて、芳雄を抱きかゝへるやうにして懷しさうに頬擦

りをしたり頭を撫でたりしながら、

「芳ちやん、あなたどうなすつて？　姉さんが居らつしやらないで淋しかないこと？　あたしきつと芳ちやんが毎日淋しがつて居るだらうと思つて居ましたわ。」

と、しんみりした調子で云ふのだつた。芳雄はさうされると直ぐほろほろと涙が湧いて來る眼の中へ、うつむいて自分を覗き込んで居る瑞枝の房々した前髪のほつれ毛が薄暗く蔽ひ被さるやうに垂れかゝるのを悩ましく覺えながら、何と答へていゝかも分らずに、その眞黑な大きな庇髪の中にある彼女の顏を、悲しさのあまり顫へ潸きでもしたいやうな眼つきで見上げて居るばかりだつた。

「あら、あたし悪かつたわね。折角芳ちやんが忘れて居たのに、姉さんの事を思ひ出させたりなんかして。ほんたうに濟まなかつたわね。御免なさいね。」

さう云つたけれど、瑞枝の美しい眼の球も櫻ん坊のやうに薄紅く光つて來て、つやつやと涙に濡れて來る眞實な様子が、とてもそれを疑ふことは出來ないやうに力強く芳雄の胸に迫るのだつた。

「兄さんは此の頃はどんな御様子？　いつも何時ごろにお歸りになつて？」

「何時ごろですか。……僕は早く寢ちまふからよく知らない。」

「あら、ぢや兄さんはそんなにお歸りがお遲いの？」

瑞枝は驚いて眼を瞬つて、

「さう？　そしてどんな御様子？」

と、さもさも其れが心配な事らしく繰り返して尋ねた。

「兄さんは何だかいつも默つて居て、碌と話なんかする事はないの。」

氣むづかしく眉根を寄せて恨めしさうに芳雄が云ふのを、瑞枝はにこにこ笑ひながら見守つて居たが、急に眼もとを擽つたさうに細くしてからかふやうな言葉つきで、

「ちや芳ちやんは兄さんが恐いのね？　え？　さうぢやないこと？」

さう云つて、そんな時にはよく昔さうしたやうに、芳雄の兩手を掴まへて其れを柔かい彼女の掌の中で揉むやうな眞似をした。

「恐いことはないけれど、……でも時々兄さんはお酒に醉つて歸つて來ることがあるんだもの。」

「まあ！　お酒に醉つて？……惡い兄さんだこと！　だけれどね兄さんは姉さんがお亡くなりになつたんで淋しくつて溜らないもんだから、それで氣晴らしにお酒をお飲みになるんだわ。きつとさうに違ひなくつてよ。芳ちやんには分らないかも知れないけれど……」

瑞枝の、長い睫毛の生え揃つた眼瞼が、凸面鏡のやうに圓くむつくりと飛び出て居る黑眼がちの瞳の上を忙しなくばたばたと瞬いて過ぎたかと思ふと、その度毎に其處からまた少しづゝ涙が粘膜のやうに光つて濕り出して來て、それを怪しげに見上げて居る芳雄の額を撫でながら彼女は情深い調子で教へ諭すが如くに云つた。

「兄さんはね、あんなに姉さんを可愛がつて居らしつたんですから、いつ迄もいつ迄も忘れることが出來ないでほんたうに力を落して居らつしやるのよ。だから芳ちやんも兄さんを氣の毒だと思つて上げなければ惡くつてよ。ね分つたでせう？……あんな事があれば誰だつてぼんやりしてしまふのは當り前だわ。あんな、姉さんのやうないゝ人はなかつたんですもの。……」

さう云ひかけて直ぐ氣が付いて涙を拂ひ落しながら、

「あ、またこんな事を云ひ出して惡かつたこと！　勘忍して頂戴よ。もう止しませうね。さうして何か唱歌でも歌ひませうね、此れからは私きつとちよいちよいお伺ひして芳ちやんと一緒に遊びますわ。だからもう淋しがらないでも大丈夫よ。ね、きつと來るわ。」

などゝ云つて、佛壇へお線香を上げたりして、其の日は芳雄の部屋で一時間ほど話をしてから歸つて行つたが、それからはほんたうに折々尋ねて來てくれるやうになつた。瑞枝はしかし大抵午後の二時か三時ごろにやつて來て、芳雄をつれて活動寫眞を見に行つたり、本郷通りを散歩して少年雜誌を買つてくれたりして、兄には會はずに歸つて行くと云ふ風だつた。

「芳ちやん、又この頃に兄さんにさう云つて音樂會を開かふぢやありませんか。――さあ、あたしがいゝ唱歌を敎へて上げるから一緒に歌つて見ない？」

そんなことを云つて、いつの間にか昔の快活な彼女に復(かへ)つて元氣よく歌をうたふ瑞枝。――その生き生きとした色つやのいゝ頰の肉を眺めながら、彼女と仲よく遊ぶと云ふことは亡くなつた姉に惡いやうな心地はしたけれど、でもいろいろ親切にしてくれて優しい言葉で慰められたりすることは、芳雄に取つて滿更嬉しくないのではなかつた。それに、瑞枝とさうして睦じく遊んで居たら、いつかは兄も自分に優しくしてくれるだらうかと思はれたので、――

神戸の祿次郎の所からも折々芳雄に繪葉書を送つて來ることがあつた。

「此れは楠木正成を祭つた湊川神社の寫眞です。僕は二三日前こゝへ遊びに行きました。東京では誰も變りはありませんか。今度の原町の家はいゝ家ですか。僕は十二月にお土産を持つて行きますから樂しみに待つておいでなさい。さう

してよく勉强をしなければいけません。兄さんは姉さんがなくなつてから、淋しがつておいでゞせうから、みんなで慰めて上げるやうに賴みます。」

など〻書いてあるのを讀むと、芳雄はいつも返辭をやるのに困るやうな氣持ちだつた。

「祿次兄さん、たびたびお葉書を有り難うございます。今度の家は新しくつてい〻家です。十二月には樂しみにして居ますからどうかきつと歸つて來て下さい。さうして一しよにお正月を迎へませう。うちの兄さんは淋しがつて居らつしやるやうです。僕は慰めて上げたいと思ひますが、子供ですからどうしてい〻か分りません。」

けれども芳雄は、なぜか瑞枝が來ることは一度も書いてやらなかつた。

ついぞ兄の笑ひ顏を見たことのなかつた芳雄が久し振りでそれを見たのは、明くる年の正月に、神戸から歸つて來た祿次郎や柳子や瑞枝などが集まつてみんなで百人一首をした折のこと、それも兄は成るたけ芳雄には其の笑顏を見られないやうにして外の人たちとばかり强ひて浮き浮きと話し合つて居るかのやうに、――氣のせゐか芳雄には思はれたのである。柳子や瑞枝が、何かの時に芳雄をおもちやにしてからかつたりしてどつと賑やかな笑ひ聲が一座を搖がすことがあると、そんな場合には兄も仕方なく笑つてはくれたけれど、それがいかにもわざとのやうで却て氣の毒な氣がして來て、芳雄も兄の居る前ではさうでない時ほど元氣にはなれなかつた。

「まあ、芳ちやんは此の頃どうかしてるんぢやないの、先にはそんなでもなかつたのに厭にひねこびた兒になつたねえ。」

と、柳子がそれを不思議がるくらゐに、芳雄はだんだん無邪氣なところのなくなつた、遠慮深い、氣ぐり深い子供に變つて行くやうになつて居た。

或る時、――それはもう正月が過ぎて祿次郎が神戸へ歸つてしまつてから、一と月か二た月も立つて芳雄が直き其の四月には中學へ這入らうとして居た時分、――日曜の日に柳子がわざわざ迎ひに來て、「子供のくせにさういぢけてばかり居ないで、ちつと私の方へでも遊びに來たらいゝぢやないか。」と、氣が進まないでもぢもぢして居る芳雄を無理に引き立てるやうにして、澁谷の宮本の家へ誘つて行つたことがあつた。姉が達者で居た頃に一二度つれられて訪ねた覺えがあるぎりで其の後は久し振だつたから、行つて見ると宮本の兄や母親などが珍しさうに「芳ちやん、芳ちやん」ともてなしてくれるのが嬉しかつたし、其處には柳子の義理の妹や弟たち、――芳雄とは三つ違ひの姉だの一つ違ひの兄だのいくつか年下の弟や妹が多勢居たので、原町の家よりはずつと廣い其の家の座敷で芳雄は其の子供たちと一日賑やかに騷いで暮らした。日あたりのいゝ緣側にはハンモックが釣つてあつて、それへみんなして代る代る乘つて傍から搖す振つて貰つたり、兄がいろいろの鳥を好くので飼つてあると云ふ鸚鵡やカナリヤをからかつたり、ベエビー、オルガンを鳴らしたり、庭へ出て藤棚の下の池に居る、鵞鳥の泳ぐのを眺めたり、それは近頃の芳雄にはめつたに味はられない夢のやうに愉快な一日だつたが、だんだん日が暮れて來ると、ふと自分だけが此の賑やかな兄弟たちの仲間に別れてあの淋しい原町の家へ獨り歸らなければならないことを思ひ出して、何だか急に悲しいやうな心地になり、出來るならいつ迄も此の家の子にして置いて貰ひたく、さうして自分も此處に居る幼い兒たちと同じやうに年上の兒を「姉さん」だの「兄さん」だのと呼ぶことが出來たらどんなに幸福だらうかとさへ思ふのだつた。

「芳つちやん、それぢや又遊びに入らつしやいな。もう暗くなつたから誰かに送らせて上げようか。」

「いゝえ、……僕獨りでも歸れます。」

さう云つて柳子の顏を見上げた時は、芳雄はしみじみと遣る瀨ない氣持ちになつて、面白かつた一日がこんな心細い事になるなら一層始めから來ない方がよかつたと、それが今更恨めしくなつたくらゐだつた。——でも、それからは日曜になると矢張り時々は招かれて遊びにも行つたし、さうでない日には瑞枝が尋ねて來てくれたりするので、その人だちの親切で一としきりよりはいくらか氣が紛れて居られることもあつた。

お茶の水の附屬中學へ這入つてから間もなくの日曜日に、芳雄は學校の制服を着て、それを見せたさに澁谷へ行つたことがあつたが、其の日は生憎子供たちは兄につれられてお花見に行つたとかで内には母親と柳子だけしか居なかつたので、姉の部屋の緣側にうづくまりながら庭に咲いて居る連翹の花をぼんやりと視詰めて居ると、

「芳ちやん、今日はほんたうにお氣の毒をしたことね。その代り姉さんがたんと御馳走して上げるからゆつくり遊んで行くといゝわ。」

さう云ひながら柳子が其處へやつて來て柱に凭れたまゝ同じやうに庭先の黃色な花を眺めて居た。が、暫くして、ふいと、

「芳ちやん……」

と云ひかけて、何か面白い事があるらしく急ににこにこと笑ひ出して、芳雄の眼の中を判じるやうな顏つきで覗き込むのだつた。

「……芳ちやんはね、此の頃でもやつぱり原町の内が淋しいと思つて居て？」

「えゝ、」

芳雄には不意にそんな問をかけられた譯が分らなかつたので、不思議さうに彼女の笑顔を見返して居ると、柳子は一層にこにこと眼元に皺を寄せながら、

「それぢや芳ちやんは大分此處の内が氣に入つたやうだから、若し内の子になれと云つたらなるだらうか？」

――それは勿論冗談には違ひないと思つたけれど、ふだんからそんな事を夢のやうに考へて居た折なので、芳雄はいつと圖星を刺されたやうな工合でにやにやと極まりの惡い笑ひ方をしながら默つて居たが、若しさうなつたら嬉しいと思ふ心持ちが自然と顏に表はれるのをどうにもする事は出來なかつた。

「今云つたことは冗談だけれどね……」

さう云つて、柳子はほんの一時の戲れが案外強く芳雄の心を動かしたのを看て取つて、氣の毒なことをしたと云ふ風に少し慌てたらしい樣子で打ち消してから、

「でもね芳ちやん、此處の内の子になるよりか芳ちやんにはもつともつと嬉しい事が近いうちにあるかも知れないのよ。」

と、ふざけて居るやうな言葉のうちにも今度は多少眞面目らしい調子を含めて云ふのだつた。

「うれしい事つて、なあに姉さん。」

「近いうちにね、お前の内にも新しい姉さんが出來るんだよ。芳ちやんはまだそんな話を聞かなかつたも知れないが、兄さんがまたお嫁さんをお貰ひになるの。」

「お嫁さんを？」

さう云つた芳雄の聲の中にある微かな戰慄には心付かずに、柳子は其れがどんなに樂しい出來事でゞもあるかのやうに、歡びに輝く瞳を子供のやうに無邪氣にぱつちりと瞬いて云つた。

「あゝ、――そのお嫁さんと云ふのはね、しかもお前のよく知つて居る人よ、お前がほんたうに大好きな人よ、――誰だか中てゝ見なくつて？」

「僕の知つてる人だつて……」

芳雄はその時に、柳子の氣輕なのに對して自分の心の奥に湧いて來る祕密な恐れを見破られまいとする苦しさを感じながら、もう大凡は分つて居るその人の名を云はうか云ふまいかに就いてちよいとの間迷はなければならなかつた。もし其の人の名を云つて中つた時、どうして分つたのかと次第々々に問ひ詰められるやうなことだつたら、――それは何でもない筈のことだけれど、――芳雄は其の問に平氣では答へられない譯があつて、それを柳子に訝しまれるやうな場合がないとは限らない。けれどもまたあまり明かな事柄なのを空惚けた爲めに却て疑ぐられるやうな心配もないではないので、斯う、急にばつたり行き詰まつたやうな工合になつて默つて居ると、――若し其の時間がいつ迄も續いたら芳雄はしまひには顏へ出したかも知れなかつたのに、好い鹽梅に柳子は程なく言葉を繼いだ。

「芳ちやんの大好きな人でよく知つて居る人だと云つたら、もう大概は分つたゞらう？、――兄さんはね、今度あの瑞枝さんをお嫁さんにお貰ひになるのよ。」

瑞枝さんて、――麻布の伯母さんのこと？」

芳雄は、何處か遠いところを視詰めながら、わざとそんなことを何の意味もなく獨り語のやうに云つた。

「あゝさうよ。麻布の伯母さんがもう直きお前の姉さんにおなりになるの。ねえいゝだらう？知らない人が來るよりか瑞枝さんなら兄さんにもち芳やんにもどんなに仕合はせだか知れやしないし、さうなればお前の內だつて又きつと賑やかになつて、兄さんの氣持ちもお直りになるだらうから、もうほんたうに淋しいことなんかありやしないわ。」

それを知らせてやつたらば飛び着くやうにして喜ぶだらうと豫期して居たらしい柳子に對しても、芳雄は是非さうして見せなければならなかつたし、瑞枝を姉に持つことだつてもたゞそれだけならば隨分うれしいやうな氣がしたので、

「そりやほんたうなの？　姉さん」

と、殊に元氣を出して云つて、異樣にどきどきと胸が動悸を打ち出したのを感じて居ると、その動悸は嬉しいためのか其れとも外の理由のためのかやがて分らなくなつて來て、今、自分が瑞枝の來ることを喜んだ瞬間に、亡くなつた姉の眼に見えぬ姿が、——悲しく恨めしく訴へるやうな其の人の細い聲音が、ちらと自分の傍を通り過ぎて行きはしなかつたかと云ふ風な恐怖に襲はれて、顏の色が直ぐと青白く總毛立つて來るのを隱し切れなくなつて行つた。

「どうしたの芳ちやん？」

「どうもしやしないんです。………」

さう云つたけれど、誤魔化してしまふことはとても出來なくなつて、

「………麻布の伯母さんが來てくれるのは嬉しいには嬉しいけれど、先の姉さんのことを想ひ出したら何だか急に悲しくなつたもんだから、………」

「まあ、お前は厭な兒だつたらないね。くよくよとそんな事ばかり考へて居て、まるで女みたいね。ちつとも男の兒らしいところはありやしない！」

柳子は呆れて眼を圓くしながら、どうしたら此の兒は斯うまでひねくれた性分なのだかと云ふやうに、いぶかしさうに芳雄の樣子を眼瞬きもせず見守るのだつたが、さうされゝばされるほど芳雄は頑固に口を噤んで眼に涙を溜めてうつむいてしまつたまゝ、病人らしく痩せた指の先で新しい制服の上衣のボタンをしよざいなささうに神經質にいぢくつて

居た。

兄が瑞枝と結婚をする。——それは大人の柳子までがそれほど無邪氣に喜んで居ることだのに、自分はなぜ子供の癖にそれをしつこい疑惑の眼を以て見なければならないのだらうか？——芳雄は其の譯を此れ迄にまだ一遍も奥の奥まで突き詰めて考へたことはなかつたが、今に瑞枝が兄の後妻になりはしないかと云ふ想像は、あの先の姉が或る不思議な慘しい死に方、——少くとも芳雄にはさう思はれたところの死に方をした時から、ぼんやりと彼の頭の中に描かれて居て、それが彼の心に霧のやうに淡い暗い影を落して居た。芳雄は時々自分だけがそんな邪推をして居ることを考へると、兄に對しても瑞枝に對しても濟まないやうな氣持がして、自分はまだ歳が行かないせゐでそんな根も葉もない妄想を氣に病むのだと云ふ風に思つても見て、どうかするともう其の事をひよいと忘れかけて居る折もあるくらゐだつたのに、それが今になつて見ればやはり自分の想像がだんだんと事實になつて來て居るのだつた。——

自分は柳子姉さんがいろいろ心配をしてくれるにも拘らず斯うして次第に疑ぐり深く片意地になつて行く。兄を疑がひ、亡くなつた姉の死に方を疑がひ。自分にあんなに優しくしてくれる麻布の伯母さんまでも疑がつて、しまひには自分で自分の心をさへも疑がふやうになつて來て、それを誰にも云ふことが出來ずに、みんなからは子供らしくない子供だと思はれて今に可愛がられなくなつてしまふ。上の兄さんばかりでなくみんなが自分を嫌がるやうになつてしまつたら、自分はほんたうに獨りぼつちになる。さうしたら死んだ姉さんが自分を蔭ながら守つてくれるだらうか知ら？……

……」

そんなことを胸のうちに繰り返して思ひ煩らひながら、芳雄はまだ眼に涙を浮べて、柳子が傍に居るのを忘れてでもしまつたやうにしよんぼりと連翹の花を眺めた。

五月になつて、先の姉の一週忌があつて、その時にまた神戸から出て來た祿次郎が居るうちに、上の兄はいよいよ瑞枝と結婚をすることになつて法事が濟んでから五六日すると日比谷の太神宮で式を擧げた。芳雄は今までは「麻布のをばさん」と呼んで居たその人を、急に「姉さん」とは呼びにくいやうな氣がして居たけれど、祿次郎や柳子までがもう結婚の明くる日から瑞枝を「姉さん、姉さん」と云つて大事にするので、それほど極まりが惡くなく自分もさう呼ぶことが出來た。瑞枝は柳子より三つ歳下で其の時は二十一だつたのに、前には友達のやうにして居た人たちからさう呼ばれても別段羞かしがるやうな樣子はなく、それをすつかり覺悟して居たやうにお轉婆なところもあまり見せないでしつとりと落ち着いた品のいゝ姉になつて居た。それを芳雄が殊にさう感じたのは、兄と「姉」とが箱根へ新婚旅行をするので中央停車場から立つ時に、みんなしてそれを送つて行つた晩のことである。

「芳ちやん、直きに歸つて來ますから淋しがらないで待つて居らつしやいよ。たんとお土産を買つて來て上げますから。――さうしてね、今夜はもう遲いんですから歸つたら直ぐに寢なければいけませんよ。」

新しい姉は、汽車の窓から首を出して、プラットフォームに立つて居る芳雄を見て機嫌のいゝ顏をしながら、何となくさう云つたのだつたけれども、いつもは束髮に結つて居るのに其の晩は圓髷だつたせゐか別の人のやうに面變りがしてずつと老けてしまつたやうに見えて、そんな言葉にいかにも姉らしい品格が備はつて聞えるのだつた。

「それぢや御機嫌よう。――いづれまたそのうちに、」

と、その直ぐ次ぎの列車で神戸へ歸ることになつて居た祿次郎が、彼女の窓の下へ來てさう云つて帽子を取つた。

「祿ちやんもほんたうに御機嫌よう。今度またいつ東京へいらつしやるの？」
「さうですね、まあ今年の暮れでせうかね。――どうです、箱根もあまり平凡だからいつそ後の汽車で僕と一緒に神戸まで行つたら？」
「それも面白いでせうね、神戸でなくつても京都から奈良の方をお廻りになるとよござんすわ。」
と、柳子も傍でそんなことを云ふのだつた。
「……でも何でせう、僕なんぞが一緒ぢやあいけないでせう。」
祿次郎は、内を出る時から少し醉つて居たので、低い聲で姉の耳へ囁くやうな風に云ふと、
「知らなくつてよ。」
と云つて、姉は俄かに顏を赧くしてうろたへた樣子だつたが、それは初ひ初ひしく妙にはにかんだ風情だつたので、芳雄は男のやうに活潑だつた其の人のそんなところを見ることは始めてで不思議なやうな心地がした。
「うちの兄貴も新しいラヴが出來たんだから兎に角まあ仕合はせさ、此れでちつとは元氣になるだらう。」
――兄の夫婦が立つてしまつてから神戸行きの列車の出るのを待ちながらプラットフォームを二三十分ほど散歩して居る間に、祿次郎はそれを柳子と語り合つて居た。
「ほんたうね。あれでいつまでも先のことばかり考へて居られちや今度の姉さんが可哀さうだわ。………」
柳子はさう云つて、暫く默つて居て、又ぽつりと思ひ出した事があるやうに云ひ足した。
「でもね、瑞枝さんだつて仕合はせでないことはないわ。兄さんのやうに奥さんを大事にする人はないんだから。」
「つまり兄貴の其處に惚れ込んだんだらうね。」

と云つて、詠次郎は上を向いて大きな聲で笑つた。

新しい姉は箱根へ行つて居た間にも始終繪葉書を送つてくれたし、旅行から歸つて來てからは先の姉だつてもこれ程ではなかつたと思はれるくらゐ親切にしてくれて、兄と二人暮らしで居た時分には誰もそんなに氣を附けてはくれなかつた小遣ひのことや着物のことや喰べ物のことや、何かにつけて細かく行き屆いて面倒を見てくれて、芳雄の方から甘へてねだつたりする折があると其れを一度でも承知してくれないことはないのだつた。兄も結婚をしてから後は一と晩でも遲く歸つて來るやうなことはなくて、大概は四時か五時ごろに戻つて來て、姉が芳雄と遊んだりなどして居ると、

「瑞枝さん………」

と云つて、——先の姉は「喜多子」と呼び捨てにされて居たのに、——さん附けにして彼女を呼んだ。

「はあい」

姉はさう云つて、

「芳ちやん、それぢや又あとでね。」

と愛想よく云ひながらいそいそと立つて兄と一緒に二階の居間へ上つて行つて、長い間其處に二人きりで睦じく話し合つて居ると云ふ風だつた。兄は暇さへあればいつでも影のやうに姉の身に添つて居て、ちよいとでもお互ひに離れたくはないやうな樣子だつたので、隨分仲の好い夫婦だと云ふことは芳雄の子供心にも眼にあまるやうにさへ感ぜられる折があつて、先の奥さまの時分にはどんなに仲が好くつても此れほどではなかつたのにと、女中たちまでがさう云つて陰

口をきくくらゐだつた。

芳雄は、それほど姉を可愛がつて居る兄の心の內では、自分のやうな疑ぐり深い弟のあることをどんなにか邪魔にしても居るだらうと云ふ風に氣を廻して居て、姉があんまり自分をちやほやしてくれることを兄に對して濟まないやうに感じて居たが、兄はそれを別段不愉快には思つて居ないで、此頃はだんだん芳雄とも親しくすることを望んで居ると云ふ樣子で、それを芳雄に分つて貰ひたいやうに素振りに出して見せるのだつた。夕方から夫婦が散歩に出かけようとする折などに、姉が、

「芳ちやん、あなたも一緒に來なくつて？」

と、そんなことを云つたりすると、

「芳雄、お前一緒に來たらどうだね、お前が來れば淺草へ行つて活動寫眞を見てもいゝが、……」

さう云つて、兄はいくらか餘所々々しいところを隱し切れずに、それでも何となくにこにこ笑つて見せたりした。

三人で表を步く時には姉が二人の間へ這入つて居て、彼女の兩側を行く兄と弟とは成るべく直接には言葉を交さずに、姉を通して話をすると云ふ風にしながら少しづゝ親しみを感じ合はうとするやうに見えた。

「芳ちやん、あなた何か欲しい本があるんぢやなかつたの。あるなら兄さんに買つてお頂きなさいな。」

などゝ云つて、姉の方からそんな機會を作つてくれるので、

「何だね、欲しい本と云ふのは？　買つてやるからさう云ふがいゝ。」

と、兄もわりあひに不自然でなく情愛のある言葉を云ふこ　が出來るのだつた。

そんな時に芳雄は自分でも齒痒いやうな不思議な氣後れを感じながら、兄を失望させるのは惡いと思ふ心づかひから

出來るだけは懐しさうな樣子をして兄の顏を見上げたりすることがあつたが、それでもあの兄の眼の中を長く長く凝て居ると、その眼の奥に情愛を裏切るものが光つて居るやうな心地がして來て、兄の方でもはつと其れに氣が付いたやうな工合になつて、二人が慌てゝうつむいてしまふ場合があつた。兄は、どうかして自分の眼の中にさう云ふものの現はれるのを防ぎたい、芳雄にいくら見守られても平氣で居られるやうになりたいと思つて其れを始終心がけて居るらしかつたが、いつもそれほど大膽にはなれないで眼と眼を見合はせさへすれば直きにそうツと横を向いて、口もとではやはり機嫌よく笑ひながらそ知らぬ風を裝つて居るやうにして居た。

姉は、――兄から其れを云ひ附かつて居たのかどうかは分らないけれど、――兄が非常に芳雄のことを思つて居て、學校の成績だの體の工合だのを心配したり、どんな物が好きだとか嫌ひだとか云ふやうなことまでも氣にかけていつでも姉に尋ねたりするくらゐだと云つて、それを恩に着なければ惡いと云ふ調子で芳雄に話し話しした。

「兄さんはね、あゝ云ふ口數の少ない方ですから芳ちやんには何とも仰つしやらないけれど、それはほんとうに始終なのよ。だから芳ちやんが他人らしく遠慮なんかしたりすると却つてお氣持ちを惡くなさるわ。芳雄の爲めになることならどんなことでもしてやるからつて、兄さんはいつもさう仰つしやつて居らつしやるの。」――

さう云ふとき、芳雄は何とも答へずに上眼を使つて姉の顏をまじまじと讀むやうにするのが癖だつた。彼女の顏にはたゞ美しく眩い笑ひが花やかに輝いて居るばかりで、其處からはいかなる秘密をも搜り出すことは出來なかつたけれど、…………

かうして、兄とはうはべだけは以前よりもずつと親しくなつて居て、或る所までは兩方から近づいて行つて其處へ來てぱつたり行き詰まつたまゝ動けなくなつて居るやうなちぐはぐな心持ち、――それは芳雄には以前の關係とさう變ら

ない氣がねと重苦しさとを覺えさせるのに過ぎなかつた。それを何處までも何處までも追ひ詰めて考へて行くと、今まではぼうツと遠くに霞んで居た或る物がだんだんはつきりした形で芳雄の心に映つて來るやうになつて、芳雄が次第に頑是ない子供ではなくなつて來るに隨つて、月日と共にそれが根も葉もない想像から實際の世界の方へぢりぢりと歩み寄つて來る。或る物の影――ちやうど眞暗な夜路などを歩いて居る時に向うの闇からお化けのやうなものが近づいて來るのを、あれはお化けではない、人間だ人間だと思つて居るうちにずうツと傍へやつて來たのを見るとやつぱり恐ろしいお化けだつたりするやうな薄氣味の悪い物の影――が、とうとう芳雄に追ひ着いて來てそれを成るたけ見ないやうに見ないやうにとすればするほど見ずには居られないやうな氣分に誘はれて行くのだつた、さうして其の誘惑は、兄が自分にわざとらしい親切を盡してくれゝばくれるだけ餘計に強くなつて行くやうに芳雄には感ぜられる。――兄が自分に親切を盡す。以前には年の行かない弟に對してあんなに冷淡だつた兄が、此の頃になつて俄かに情愛を持ち始めていろいろとやさしくしてくれる。それは、芳雄の成長して來たことに或る恐れを抱くやうになつて、敵意を持たれてはならないと思ふ弱味を感じ出したのではないだらうか？

「お前はもう中學生だしそろそろ分別が付いて來たのだから、あの時分に己と瑞枝とが何をして居たのかと云ふこととは、だんだんお前にもよく分るやうになつて來たかも知れない。しかし此れからは己もお前を子供だと思つて馬鹿にはしない代りに、お前の方でもよく物事を考へて、詰まらないことを思つたりしやべつたりしないやうにして貰ひたい。」

――芳雄は、兄のさう云つて居る心の聲を聞くやうな思ひがした。

先の姉が達者で居た時分、芳雄が十だつた歳の暮れに銀座の醫院の二階の部屋で見た今の姉と兄との樣子、――その時の二人の體のこなしだの驚いた顔つき、――姉は襟をひろげて居たので兄に診察をして貰つて居るやうに見せはした

ものゝ、その部屋は診察室ではなかつたし、今になつて考へれば其れがどう云ふことだつたかはもう幾らも記憶にはない。兄も姉もそれに就いて別に芳雄に口止めはしなかつたけれど、兄は内々その時から芳雄と云ふ者のあることが氣にかゝるやうになつて居て、あの先の姉の亡くなつた晩に芳雄が妙な顔をしたのでそれからほんたうに彼を疎んずるやうになつたのでないだらうかと、さう云ふ風に芳雄には推量されるのだつた。芳雄はしかし、兄と今の姉とが二人ぎりで人に見られては悪いやうにして居るところを、その後一年も立つてからも小石川の植物園で見たことがあつて、兄は其の頃ひどく陰鬱なむつつりした人間になつて居たのを、ちやうど先の姉が病氣で寢て居た時分だつたのでその心配の爲めだらうと云ふやうに多くの人は思つて居たが、芳雄には其の時から兄を陰險な人だと思ふ心持ちが湧いたのだつた。さうして間もなく先の姉のあの突然な怪しい死に方、——それを藤次郎に尋ねられた折の真青になつた兄の表情、——姉の病氣は兄がいつでも診察をして居て、死ぬ前の日に注射をしたのも兄だつたと云ふやうなこと、……さう云ふやうに一つ一つに四年前からの出來事を想ひ浮べて細かく根掘り葉掘りして行くにつれて、芳雄の頭に根ざして居た疑がいか或る纏まつたものになつて恐ろしい形に見えて來るのを、兄もさう・感づいて居て其れを默つて置く事が出來なくなつて居るのではないか知らん？

兄は、自分の過去の罪が芳雄の心に或る證據を殘して居て、それが芳雄の大きくなるのと共に育つて來るのを薄氣味わるく感じて居る。——自分が瑞枝と一緒になつて先の妻をうまく欺して居たことや、芳雄を除いた兄弟たちの眼までも巧みに晦まして先の妻を愛して居たと云ふ風に見せかけて居たことや、先の妻の死と云ふことが瑞枝と結婚をする爲めには煩はしかつたと云ふやうなことや、——それ等の事情が現在の芳雄の智慧で次第に見透かされるやうになつて來て居るのを、兄の方でも今では明かに知つて居るに違ひない。けれども兄の犯した罪がたゞそれだけに過ぎないのなら

ば芳雄に兄ならどんなにまで嫉所々々し、疑はせられはしなかつたらうと云ふやうに考へられる。いつぞや姉が亡くなつてから間もなくの晩に、夜半に電燈が消えて眞暗になつたとき、芳雄がふと眼をさまして姉戀ひしさの心からふらふらと妙な氣になつて彼女の部屋へ迷つて行つた折のこと、闇の中で三味線の絲に觸つて其れを鳴らしたと思つたら兄がいつの間にか手燭を持つてうしろの廊下に立つて居た——その時の兄の顏つき、それはお酒に醉つて居たせゐでもあつたらうけれど、どんよりと濁つて、或る物の影を一直線に睨んで居るやうに動かなくなつて居た瞳の樣子。其處には凶惡をでも見たやうな怯えた色がありありと露はれて居たのを芳雄は今でも其の通りに想ひ出すことが出來るほどまざまざと覺えて居るのである。兄はあの時、亡くなつた姉の部屋の中でひとりでに三味線の音がしたと思つて恐ろしさに戰へられずに階下りて來たのではなかつたらうか？　さうして事に依つたら兄の耳には三味線の音ばかりでなく其の外の聲までも聞え、その瞳には見えない筈の幻までが見えたのではなかつたらうか？　兄が其の頃毎晩のやうにお酒に醉つて歸つて來たことも、それから程なく彌生町の家を引き拂つてあの三味線を何處かへ隱してしまつたことも、兄の胸の奧に良心の苛責があつて犯した罪を忘れよう忘れようと悶えて居たのだと云ふやうに取れるのだつた。

そんな事を芳雄がいつもくよくよとしつくどく考へてばかり居たと云ふのは、それは幼い時分から病身な子供だつたのが中學へ這入つてからもよく風を引いて寢て居ることが多かつたし、十三の歳の冬から十四の春へかけての頃は氣管支加答兒だのインフルエンサだので一週間も二週間もつゞけて床に就いて居たので、さう云ふ折に自然とそれを考へさせられるやうになつたのだつた。夕方、熱が四十度近くもあるやうな時などに、芳雄はもしひよつとして其れを譫語に云つたりして傍に看病して居てくれる婆に聞かれはしなかつたかと云ふ心配の爲めに、すやすやと眠りかゝつたと思ふ頃に急に「あツ」と云つて叫ぶやうな口つきをして眼をはつきりと睜いたり、枕もとをきよろきよろと見廻しながら體

中に冷汗を拭いてふるへて居たりすることがあつた。
「芳ちやん、……どうかしたの？　恐い夢でも見たんぢやなくつて？」
さう云つて姉に尋ねられる場合があると、芳雄は「恐い夢を見た」と云ふ事だけでも兄に知れては悪い様に感ぜられて、
「いゝえ、何でもないんです。」
と、さう云ひながら、眞青になつた顔の色を姉に見付けられないやうに氷嚢の下に隠して又すやすやと寝入るやうな風を装はねばならなかつた。
しかし芳雄は、實際には屡々恐い夢を見た。夢の中に出て來る兄はいつも大概はほんたうの兄と變りなく心配さうにふさぎ込んで居て、芳雄とたゞ二人ぎりで何處か分らない淋しい暗い通り路をすたすたと歩いて行くのである。
「芳雄……………」
と、兄は其の路を歩いて行く途中に、胸に重苦しい蟠まりがあつてそれをどうしても云はずには居られなくなつたやうに突然聲をかけるのだつた。
「芳雄、己はお前が己を疑がつて居ることを知つて居る。もう隠すには及ばない、己はよく知つて居るのだから。……」
さう云つてから、又長いこと默つてすたすたと歩いて行つた時分に、
「……己はお前がなぜ己を疑ぐつて居るのかと云ふ譯も知つて居る。先の姉さんが死んだ時に、あの晩に己はお前に顔を見られて眞青になつたことがあつた。さうしてお前はあの時から己を疑ぐるやうになつたのだ。ねえさうだらう。さうに違ひない。……………」
さう云はれて芳雄は兄の顔色を窺ふと、背の高い兄は上の方から芳雄の姿を見おろしてにやにやと笑つて居るのだつ

た。

「お前は己があの時あんな眞靑な顏をしたので、己が姉さんを殺したのぢやないかと云ふ風に思つたのだらう。だけれど己は姉さんを殺した爲めに眞靑な顏をしたのぢやない。己が眞靑になつたのは、お前がきつと己を疑ぐつて居るだらうと思つて其れが恐かつたからなんだ。己は成る程お前に疑ぐられるだけの事はして居る。己はあの時分先(せん)の姉さんが死んでくれゝばいゝと思つて居た。だからお前が疑ぐるのは無理もないのだが、お前に疑ぐられて居ると思ふと己は薄氣味が惡くなつてそれで眞靑な顏をしたのだ。」

さう兄がぶつぶつと口の中で獨り語のやうに云ふ。………

「兄さん、どうか勘忍(かに)して下さい。僕が兄さんを疑ぐつたのは惡うございました。先の姉さんは殺されたのにしろさうでなかつたのにしろもう死んでしまつたんですから、僕は今更そんなことを詮索しようとは思ひません。僕は兄さんを罪人にさせたつて何も愉快なことはありません。ですからどうか兄さんも安心して下さい。」

「お前はそれがよくないんだよ。お前は兄さんに安心をしろと云ひながら、心の内ではまだ兄さんを疑ぐつて居る。兄さんは決して先の姉さんを殺した譯ぢやないんだから、それを信じてくれなけりやいけない。先の姉さんはあの通り腦加答兒で死んだんぢやないか。」

そんなことを云つて兄は夢の中でしきりと芳雄に云ひ譯をする。芳雄は心のうちで、自分はまだ子供だし、大人のすることは大人になつて見なければ分らないのだから、自分が今まで兄を疑ぐつて居たのは濟まなかつたと云ふやうに考へさせられて來て兄を慰めてやる氣になつたり、また或る時には子供だからと云つて大人のする事に欺されはしないと云ふつもりで、兄を何處までも問ひ詰めてやつたりするのだつた。問ひ詰められると兄はだんだんあの三味線を鳴らし

た晩の時のやうな怪しい眼つきになつて、氣を失つて倒れさうな工合によろよろとよろけながら、

「芳雄、もう其のことは云つてくれるな。後生だから勘忍してくれ。己が姉さんを殺したのは悪かつた。」

と、一生懸命に頼むやうな口調で繰り返し繰り返しさう云ふので、眼がさめてから後までも其の言葉は芳雄の耳に附いて居ることがあつた。

芳雄が一番恐れたのは、かう云ふ風にして毎日そんな夢ばかりを見て居るうちに、今に亡くなつた姉が出て來て自分がどう云ふ方法で殺されたかと云ふやうな話をこまごまと說明して聞かせたりしやしないかと云ふこと、――さうして眼がさめてからだんだんと事實を調べ上げて見ると夢の話にぴつたり合つて居たりするやうなことだつた。芳雄はそれでなくてさへ自分が此の頃のやうに始終病氣になつて寢てばかり居て、明け暮れいやな夢を見るやうな境遇に置かれたのも、みんな亡くなつた姉がさせて居るのだと云ふ風に考へて來て、兄の罪が世間へ露顯しないうちはいつまでも斯うして祟られるのではないだらうかと思つたりするのだつた。

「芳ちやんや、姉さんはほんたうに兄さんに殺されたんですよ。それを知つて居るのはお前だけなのに、どうして芳ちやんは默つて居るの？　お前はまあ、あたしが生きて居る時分にはあんなに可愛がつてやつたのに、何と云ふ薄情な子なんだらう。………」

と、姉はいつでも草葉の陰からそんな泣き言を云つて居る――さうして芳雄が彼女の味方につくまでは何處までも何處までも芳雄にいやな夢を見させる。――

「今の姉さんがいくらお前の看病をしてくれても、あたしの云ふことを聞かないうちはお前の病氣は直る筈はない。今の姉さんは親切らしくして居るけれど、それはお前を自分の味方につけたい爲めにあゝして猫を被つて居るので、心の

内は鬼のやうな人なんだ。………」

　しまひにはさう云つてあの物やさしい今の姉をまでも呪ふ言葉が聞えて來る。――

　ほんたうに今の姉さんはそんな陰險な人なのだらうか？　先の姉さんがあゝ云ふ不思議な死に方をしたのは、それは兄さんばかりの知つたことではなく、今の姉さんもその相談にあづかつて居たのだらうか？　兄さんは自分の犯した罪の爲めに始終良心の責め苦を受けて居るらしくも見えるけれど、姉さんの方はそんな様子が少しも見えないところから思へば、やつぱり姉さんは兄さんの罪を知らずに結婚したのだらうか？――だけれど又、今の姉さんがほんたうに鬼の様な心を持つて居る人だとしたら、兄の罪を知りながらでも平氣で結婚をしてあゝ云ふ風に猫を被つてやさしい顏つきをして居ないとは限らない。――芳雄はさう思ひながら、枕もとに坐わつて居る姉の姿をつくづくと眺めて居ると、さうして此の人が兄と一緒に先の姉を欺したのだと云ふ風に考へて來ると、いつもは自分を我が子のやうにいたはつてくれる情愛の深い彼女の眼つき、雪のやうに白くほつそりしたしなやかな襟つき、先の姉よりはずつと優れて美しい器量の顏だちが、兄に比べても幾層倍か物凄い惡魔のやうに其處に現れて來るのだつた。

「姉さん、僕はもう此の頃では親切にして下さる姉さんをまで疑がふやうになつてしまひました。姉さんはあの事を御存知なのではないでせうか？　さうして兄さんに頼まれて僕の様子を探るために傍に附いて居らつしやるのではないでせうか？」

　若しそんなことをむきつけに云つて尋ねでもしたら、愛嬌のある姉の面持ちが見る間に鬼のやうに恐らしく變つて來るのではないだらうかと、芳雄はそれをただ氣味が惡いとばかり思ふのではなくお伽噺を讀んででも居るやうな物好きな心持ちで空想したりすることもあつた。

毎月毎日高い熱がつゞいてぢつとして寢て居ながら直きにうつとりと遠い所へ持つて行かれさうな氣分になることがよくあつて、ひよつとするともう死ぬのではないのだらうかと思つて居たために、三月の初旬ごろから漸う芳雄は學校へ出られるやうになつたのだつた。あんまり長く休んで居たから成績がいゝ筈はなかつたけれど、四月には兎に角及第することが出來てそれから暫くの間は珍しくつづけて學校へ通つて居たのに、その年の五月に先の姉の三回忌があつて一週間ばかり立つた或る日に、夕方から急にまた熱が出て來て血を澤山咯いたことがあつた。いゝ鹽梅に四五日すると熱が七度臺に下つて少しづゝ直つては來るやうだつたが、兄が學校を休んで成るべく靜かにして寢て居なければいけないと云ふので、さうして居ると、やつぱり先の姉の祟りと云ふやうなことが思ひ出され、そればかりでなくまた別のいろいろな恐ろしい想像が頭に湧いて來るのだつた、自分がこんなにちよいちよい病氣に罹つたりするのは、兄がいつでも診察をして藥を飲ましてくれるからではあるまいかと云ふやうなこと、先の姉をさうしたのと同じ方法で兄は芳雄をもさうしようとして居るのではないだらうかと云ふやうなこと、それはいつから芳雄の胸にそんな考へが起つたのだつたかは分らないが、その疑がひは亡くなつた姉の祟りだと思ふことよりも遙かに現實らしく芳雄の神經を脅やかさずには措かなかつた。先の姉もやつぱり斯う云ふやうな工合に半年も一年も前からぢりぢりと煩らつて行つて、貧血を直す爲めだと云つて兄が時々注射をしてくれるのを其の通りにされて居ると或る日俄に容態が變つて死んだのだつた。芳雄はまだ注射をされたことはなく病氣も姉のとは違つて居るやうだけれども、兄がいつ藥の中へさう云ふ仕掛けをしなかつたものでもない。兄さんではいやだから外のお醫者に見せてくれろなどゝ云へば其れはもう兄に向つて其の罪を發く

むも同じことだし、そんなにしてまた此の上も兄から疎まれるやうになるのも恐ろしかつたし、もしかうして居て死ぬやうなことがあるならそれも運命だと云ふ風に芳雄はあきらめても見るのだつたが、いよいよ死なゝければならない時が來たやうだつたら自分は兄さんの惱みを思つて何も云はずに大人しく死んで上げるのですと云ふ意味を一と言兄の耳へ入れたいと云ふやうにも考へるのだつた。

……或る日芳雄はこんな夢を見た。……

彌生町の先の家のうしろのところが高い崖になつて居て其處を其れで降りられる様に出來て居る細い急な坂路の足場の惡いでこぼこな石だらけな段々を降りて行くと、東京の町の中とは思はれないやうに草がぼうぼうと繁つてすゝきなどの一面に生へて居るのが風になびいてさやさやと鳴つたりして居る、うら淋しい、ちよいとした廣い原場の窪地があつた。其處へ或る雨の降る晩に、――それは六月の半ば時分のことだつたから、鬱陶しい入梅の季節の雨でしよぼしよぼと糠のやうに細かくしめやかに降るのだつた。――芳雄は何を考へたのか小石川の家を抜け出して獨りで傘もさゝないでちやうど眼に見えぬ繩にでもおびき寄せられて行くやうにぼんやりと歩いて行つた。自分はまだ病氣がよくならない、夫だのに斯うして寢間着のまゝでこんなお天氣に表へ出たりしてきつと後で惡くはないかとは思つたが、その細かな雨に濡れるともなく顏が濡れて汗のやうにぬらぬらして居るのを手の中で氣味惡くべつとりと拭き取りながら引き返す譯には行かないやうな氣持ちになつて歩くのだつた。彌生町の家のうしろ、――彼處には死んだ姉さんの魂が迷つて居る。彼處へ行けばきつと姉さんに會へるのだ。姉さんは自分に何か話したい譯があつて自分をあの原場へ呼び寄せるのに違ひない。――芳雄は歩いて居る途中で、自分にはこんな考へがあるので斯うやつて内を抜け出して來たのだらうと云ふ風に思つた。

今は知らない人が住んで居る元の家の門の前へ出て、塀の外から庭の椎の木の向うに部屋の庇が見えて居るのを「ああ彼處に今でも彼の部屋があるんだな。幼い時分に死んだ姉さんとよく話をしたり、音樂會を開いたりしたあの部屋が今でもちやんと彼處にあるんだな。」と芳雄は胸の中でさう獨り語を云ひながら塀の外側を裏口の方へ廻つて例の崖の縁へ出て、すゝきが着物の裾へからまるほども生ひ茂つて人が笑ふやうな工合にゆら／＼と搖れて動いて居る坂路をだんだんを降りて、何だか遠い山奥へでも來たやうに其の晩は特にさう思はれた原場のまん中まで辿つて行つて、もう十分か二十分待つと姉さんに會へるんだと、堅い約束をして置いたつもりで其れを信じながら立つて居ると、兄が後ろから

「芳雄」

と云つて呼ぶのだつた。

跡をつけられたんだなと思つて芳雄は兄を振り返つて見てさう驚かずに居たので、其れが兄には物凄かつたやうに二三歩たぢたぢとなつてから

「芳雄、お前は體が悪いのに何だつて今時分こんなところをうろ／＼いて居るんだね。」

さう云つて、成るたけ芳雄に疑ぐり深い眼で見ることを止して貰ひたさうに機嫌を取るやうな笑顔を作つて、

「さあ、こんなことをして居て又病氣が悪くなると大變ぢやないか。ね、兄さんと一緒にもう歸らう。さうしておくれ。それでないと兄さんは心配で困るんだよ。」

「僕は今ぢき歸りますから、どうか兄さんは一と足お先へいらしつて、――」

芳雄は其の時に自分の聲には死んだ姉の幽靈が乘り移つて居て何となく云ふ言葉のうちにでも兄には身の毛が悚つた

うに閉えるものが潜まれて居はしないかと云ふ風におぼろげに感じながら云つたのだつたが、それがやつぱり其の通りだつたと見えて兄はその言葉を聞くとひとしく鬪ひを挑まれた獸のやうな眼つきになつて暫くの間默つて芳雄を睨まへて居た。

「兄さんに先へ歸れと云ふならそりや歸つてもいゝけれど、……」

と、兄は稍へてから考へ考へ物を云ふらしいをづをづした口調で云つて、あんまり恐ろしい態度を取るのは損だと云ふことに氣が付いた風でそれから少しやさしい低い聲になつて、

「しかしお前はこんなところに獨りで立つて居てどうしようと云ふのかね。何かそれには譯があるのだらう。ゑ？　その譯を兄さんに云つてお聞かせ。」

「別に譯なんて云ふほどのことはないんですから、どうかそれを聞かないで下さい。兄さんにそんなことを云はれると僕は悲しくなるんです。」

さう云つた芳雄の心には、兄さんの罪はもう僕にはよく分つて居る、だがそれを兄さんの前で云はせられるのは辛いから赦してくれろと云ふのだつた。

「お前がその譯を云ふのがいやなら兄さんが云つて見よう。……」

と、兄が云つた。

「……兄さんは今迄お前にその譯を聞くのが恐かつた。だけど斯うしていつまでもいつまでも其の譯を聞かずに放つて置くと、己とお前との仲がだんだん氣まづくなつて兄弟の間に妙な隔たりが出來るやうになる。それではお互ひによくないと思ふから今夜兄さんの方から其の話をして見よう。――お前が今日ひとりでこんなところへやつて來たのは、

此處へ來れば先の姉さんに會へると思つたからぢやないのかね。」

「兄さん、——どうかもう止して下さい。——僕は恐くなつて來ましたから。」

「いゝや何も恐がるには及ばない。恐いことがあると思ふのはそれはお前が間違つて居るんだよ。お前はあの姉さんが氣毒になつてまだ此の世に迷つて居ると考へて居るさうだけれど、先の姉さんは此の世に思ひが殘る樣な死に方をしたんぢやないんだから、決してそんなことがある筈はありやしない。兄さんはそれをお前によく話して置きたいと思つて居る。」

「でも、兄さんがいくらさう仰つしやつても僕の心の奧にある疑がひは消すことが出來ませんから、——」

と、芳雄はさう口へ出して云つたのではなく、ただ胸の中で考へただけだつたが、其れが聞えたやうに兄は直ぐと答へるのだつた。

「それぢやお前はどうして其れを疑がふと云ふのだね。あの死に方の何處に怪しいところがあると云ふのだね。お前の心に疑念があるならどうぞ正直に云つておくれ。それを云つてくれさへすれば已はお前に分るやうにくはしく説明して上げるから。ね、お互ひにさう云ふやうにして胸の中を打ち明けてしまふ方が却て感違ひをするやうなことがなくつていゝんだよ。さあ、芳雄、遠慮しないで何處がおかしいと思ふのかそれを云つておくれ。先の姉さんは腸加答兒で死んだのではないとお前が思ふ譯は？」

「あゝ——」と、芳雄は其の時さう心の奧で叫んだ。——先の姉さんが自分を今夜此の原場へ呼び寄せたのは、かうして此處へやつて來た兄をつかまへて自分に姉さんの代りになつて其の罪を問ひただしてくれろと云ふのではないのか知ら？それともまた自分が此れ迄疑ぐつて居たことはみんな根も葉もない妄想に過ぎないので、そんなつまらない感違ひの爲めに兄弟の仲が割れて居るのを姉さんは心配して下すつて、自分と兄とを和解させようとして此處へ落ち合はせたので

もあらうか？　どつちにしても自分には姉が附いて居てくれると云ふ氣がしたので、

「兄さん、――そんなことを疑ぐつては濟みませんけれど、僕が不思議に思ふのは姉さんが死ぬ前の日に兄さんが注射をなすつたことなんです。あれから姉さんの容態が急に惡くなつたんですもの。」

と、さう云ふと、兄は口では笑ひながらぎよつとしたやうに瞳を光らせて、斯う、暗い夜の中に居る芳雄の姿をすうーと奥深く見究めるやうにして立つて居た。

「……あの注射が何でおかしいことがあるんだね、注射をしたのはあの時が始めてだつた譯ではなし、あれは貧血の病人を直すのに普通のお醫者は誰でもさうすることなんだからちつとも不思議ではないんだよ。成るほどあのあとで直きに死んだには違ひないけれど、それは先も云つた通り急性の腸加答兒を起したんで何も注射をしたからと云ふ譯ぢやない。……」

「いゝえ、姉さんは腸加答兒ではないんです。あれはあの注射をした藥の中に這入つて居た砒素の中毒だつたんです。」

いつかはさう云はう云はうと思つて居たことをとうとう云つてやつたな、と云ふやうな小氣味のいゝ氣持ちと兄がそれを聞かされた場合に何か尋常では濟まないことが持ち上りはしないかと云ふ豫感とで芳雄は眼の前がごちやごちやと見えなくなつて來るやうな混亂した心になりながら其れを投げ出すやうに云つた。

「砒素の中毒？」

と云つて兄はもう其の時に氣絶をしさうな工合になつて、

「お前はそんなことを誰から聞いたのだ。――そりやあの中には砒素が這入つて居たには違ひない。だけども砒素と云ふものは貧血の藥なんだから、それを使つたつて別に怪しいことはないんだよ。」

「でも、人を殺さうと思つて砒素をわざと澤山使へば殺すことも出來ると云ふ話を僕は薬局の書生に聞いたことがあるんです。さうしてそれで死ぬ人は、ちやうど姉さんのやうに下痢を起して眞白な牛乳のやうなものをもどすんだつて云ふぢやありませんか。」

芳雄は、その一言の爲に兄が不意に鐵砲の玉か何かで額を射殺かれでもしたやうな形をして仰向けに反つて倒れてしまひはしないだらうかと思つて居たのに、兄はそれをぐつと堪へてやり過してしまつたやうな様子で、

「ふん、さうか、……」

と云つて、俄かに肩をゆすぶつてせゝら笑ふのだつた。

「……お前が其處まで知つて居るなら兄さんももう何も云ふまい。しかしお前だつて兄さんを罪人にしたくはないだらうから、まさかそんな事を誰にも云ひはしないだらうね。それを秘密にして置いてくれれば兄さんは此れからお前をいくらでも可愛がつて上げる。ねえ、その方がお前の爲めにもどんなに得だか知れないぢやないか。さうしてほんたうに兄弟仲よく暮らすやうにしようぢやないか。」

「えゝ、僕もさう云ふ風になりたいと思つて居るんです。――たゞ兄さんが心の底から後悔して下すつて先の姉さんに詫まつてさへ下されば。」

「そりや後悔して居るとも。兄さんは毎朝毎朝佛壇へお線香を上げる度毎にいつでも死んだ姉さんにお詫びを云つて居るんだよ。」

「それぢやほんたうに後悔して居らつしやるんですね。」

芳雄は胸が晴れ晴れしてうれしかつたのでさう云ひながら兄の體へ飛び着きさうにしたとたんに、――兄は自分を欺

して居る。かうして油斷させて置いて此の淋しい原場の中で自分を殺さうとたくらんで居る。——と、そんな考へが外から囁く人があつたやうにふいと湧き上つて來て、その心で兄の顔色を窺ふと其れを悟られてはならないとして居るやうに兄は一と入機嫌よく笑つて見せて、

「あゝさうだとも。ほんたうに兄さんは惡いことをした。その爲めにお前にもそんな心配をかけたりなんかして濟まなかつたね。だがもう此れで分つたんだからお互ひに仲好くしようぢやないか。さうしてね、こんなところにいつ迄もぐづぐづして居るとお前の體にも觸るしするからさつさと內へ歸らうぢやないか。ね、分つたらうね。——さあ、兄さんが手を曳いて上げるから此方へおいで。」

兄が芳雄を殺さうとして居るらしい證據には、原町の家へ歸るためには反對の方角になる以前の崖縁のだんだんのある足場の惡い坂路の方へ、兄はさう云つて甘やかすやうに誘ひながらそのくせ手には力を入れて芳雄の手頸をしつかりと握りしめて歩いて行くのだつた。だが、いよいよさうに違ひないと芳雄に思はれたのは、だんだんの上り口へ來た時に眞つ暗な中で「おほゝ」と笑ふ聲が聞えて坂路の上の方に今の姉が二人の上つて來るのを待つて居たのだつた。

「芳ちやん、あなた兄さんと仲直りをなすつたんですつてね。ほんたうにいゝ鹽梅でしたこと。あたし心配だつたもんだからお迎ひにやつて來たんですの。——そこは足場がわるうございますから轉ばないやうに氣を付けてね。」

姉がそんなことを云つて居るうちに、兄は芳雄を先へ立てゝ自分は後から上つて來たが、それはいざと云ふ場合にどつちへも逃げられないやうに芳雄を自分たち夫婦の間へ挾んで歩かせる積りであるらしく、さうして此の坂を登りつめるまでのうちに後ろから危害を加へようとする計略なのだと芳雄はさう感づいてしまつたので、あゝもう自分の命も此處で終るのか、此の姉さんは自分を守つてはくれないのか、もうとても仕樣がない、と、考へて居る間にもでこぼこの

石のある路は一と足一と足にちゞまつて行つて、いまだにしいよ〳〵しいよ〳〵と降つて出る樣になつてしよりとその草の葉の径が脛へぺいとぺいとと粘つてく絡みついてそれでなくてさへ歩きにくいのだからいざと云ふ時にはとても迯げることは出來ないのだと觀念しながら、今殺されゝか、ほら、もうやられるかと眼を潰つて歩いて居ると、路ばたの露に濡れたすすきの葉が折々ひやりと裸を撫でるのにも「あッ」と云ひさうになつて生きて居る容はなく、もう一と足で坂の頂邊まで登り詰めるところまで來た時に、

「あなたもう此處で坂がおしまひになるんですよ。」

と、上から姉がさう云つて兄に合圖をするのだつた。芳雄は急に足が竦んで恐ろしさで一杯になつてしまつて今迄の覺悟も何もかも忘れたやうになつて、

「あッ、姉さん助けて下さい！　僕は殺されるのはいやです！」

と、一生懸命にさう叫んだ拍子に夢を見て居るんだと氣が付いて、でもまだ眼をあくことが出來ずに居ると、自分はやつぱり熱が高くつて起きも上れずに蒲團の上に寢て居ることや、頭の方が壓さへつけられるやうに重くぼうッとなつて居ることや「芳ちやん、姉さんは此處に居るんですよ。」と云ひながら姉がしきりに自分を揺り起してくれて居ることやが次第にはつきりと分つて來て、ぽつと救はれたやうな心持ちで眼を開いた。

「芳ちやん、何をうなされて居たの？」

姉のその聲がかゝると芳雄は電燈のあかりを眩しさうに避けてぱちぱちと二三度瞬きをしてから、

「えゝ？」

と、わざと惚いたやうに云つて、極まりが惡かつたので、枕もとの電燈を背にして坐わつて居る姉の頭の大きな蔭い

影の中へ自分の顔を入れながら、とうとうその人に譫語を聞かれてしまつたと思ふその人の様子を謎を讀むやうな工合に恐々見上げると、姉は別に氣に留めて居るらしい風はなくにつこりして、

「どうしたの芳ちやん、あんなにうなされて、何か夢に見て居たの？」

と、――その顔は明りの陰にありながら花やかな笑ひの爲めに顔の後ろにある心の秘密がとても外からは覗けないやうにぎらぎらとかゞやきながら、――云ふのだつた。芳雄はほつとして、未だにどきどきと體中へ響く動悸が鳴つて居る胸の上へ手をあてゝ居たが、姉から餘りしみじみと注視されるのがいやだつたので其れを避けようとして右を下に横向きになるやうに寝返りを打つと、枕にぴつたりと附けて居る片方の耳から動悸が前よりも一層強く傳はつて、腦髄が槌を打ち込まれつゝある地面のやうにがんがんと響いて痺れて來たので、ぢーいツと我慢しながら眉間の方へずり落ちさうになつて居る氷嚢の下から蒲團の外に平べつたく海のやうにひろがつた疊の目を越して部屋の衝きあたりの唐紙の方へ視線をやつたとき、――其處に、ゆかたを着て腕を組んで體をコチコチに堅くさせて据わつたまゝ、狙ひを付けるやうな眼つきで此方を睨んで居る兄が居た。と、芳雄は自分がもう死んでしまつたのぢやないかと云ふ風に思つたのだつた、なぜかなら其の折の兄の顔色がちやうど先の姉の屍骸を見た時のあの晩のそれと少しも違はないくらゐに眞青だつたから。――さうして其の瞳は猫のそれのやうに眞円くなつて動かずに居たから。

「芳雄――」

と、兄はやがて呪ひから解かれたやうな風つきで兩腕をだらりと肩から垂らしてしまつた後、落ち着いた聲でさう云ひながら寐の傍へ擦り寄つて來て、

「どうしたね工合は？」

と云つて、叉腕を組んで下顎をぐつと落すやうな態度に深く息をついてから何か大ぎに云はうとすることを考へて居るらしくも見えた。……

「どうだね、工合は？……」

　さうもう一遍云つた時にたつた今夢の中で會つた通りの底氣味の悪い無理に押し出したやうな薄笑ひが兄の口もとに浮き出して、それが木へでも彫つたもののやうに微動だもせずに兩頰に凍り着いて居たが、ふいと見ると、芳雄がそれまで氣が付かなかつた兄の右手の指の間には、小ひさくピカピカと光る注射の針が持たれて居て、それが手と一緒に細かく顫へて蜘蛛が天井から糸を引きながら吊る下つて來るやうに芳雄の顔の上に垂れ懸つて居るのだつた。

「芳雄、今夜は一つ注射をして見よう。……さうしたら多分よくなるかも知れないから、……」

　それを聞くと、芳雄は血がぞうッと頭の方へ上つて來て、かツかツと火照つた火の氣のやうに熱いものが皮膚の上をゆらめいて燃えて通つたあとで、今度は反對に氷の如く冷めたい感じがひたひたと手足へ一面に寄せて來るのを覺えながら、自分でも意外だつたほどの敵意を含んだ恐ろしい眼つきをして、

「兄さん、御免なさい、僕は注射なんぞされるのはいやです。」

と、一生懸命な調子で云つて憎々しく兄の顔を睨み返した。

「なぜだい？　なぜいやなんだい？」

　兄に凄じく怒つてやらうとしても顔の筋がま血のやうに硬張つてしまつたかの如くに依然としてその頰には例の薄笑ひを刻みつけたまゝ瞳だけを落ち窪ませてぎろりと殺氣立てゝ光らせながら、皺嗄れた、陰氣に重々しく響く聲で云つたが、その聲の下から芳雄は一層反抗的な氣分になつてきたうなされて居るやうな工合に物狂はしく身悶えしながら云

ふのだつた。

「兄さん、後生だから止して下さい。僕は死ぬのはいやですから。……」

それからちよいとの間、あたりはしいーんとした靜かさで、その時やつと兄の頰にある笑ひの線がピクピクと動き出すらしい樣子が見えて、馬鹿げて大きくぱつちりと開かれた瞳の据わつた眼の中から何か氣違ひじみたものがぴよいと飛び出したやうだつたが、突然、

「馬鹿！」

と云つて兄は猛惡な相になつて芳雄を怒鳴りつけたかと思ふと、その反動で自分自身が氣を失つてしまつたやうに見る見るうちに唇を土氣色にして、注射の針を指の股からぱたんと落して仰向けになつた。……

その明くる日から一と月ばかりの間は兄は芳雄の病室へは姿を見せないで、姉や看護婦に云ひつけて藥を飲ませるやうにするだけだつた。でも、七月の月はなになつて、芳雄の衰弱がだんだん目に見えて加はつて來るのを捨てゝ置く譯にも行かないのでそれからは又をりをり診察してくれたけれど、用の外は殆んど口をきかないで默つて脈を見たり熱を測つたりして直ぐに病室を出て行くのだつた。姉も、兄からさうしろと云はれて居るのかどうか以前ほどには親切にしてくれないでたゞ時々お役目のやうに附いて居たが、夕方兄が醫院から戻つて來た後には殊にさうして芳雄の傍にばかり居るのは兄に對しても悪いと云ふ風に考へて居るらしかつた。

兄は、姉が芳雄の部屋へ行くのを實際いやがつて居る樣子で、少しの間でも彼女が見えなかつたりすると病室の外の

廊下へ來て、

「瑞枝さん」

と、いくらか急かちな調子で襖の向うから呼ぶのだつた。さうして內に居さへすれば嫂の跡ばかりを追ひ廻して居て、彼女を可愛がる度は芳雄を疎んずるにつれて日増しに激しくなつて來るらしく、御飯をたべるのにも御湯へ這入るのにも何から何まで一緒でなければ承知が出來ないと云ふ風になつて行つた。

長らくじめじめと降りつゞいた入梅がもう二三日で明けると云ふ頃のこと、――それは蒸し暑い靜かな晩で、芳雄の病室には兄の夫婦や神戸から電報で呼ばれた祿次郎や宮本の柳子や廣澤の伯母などが多勢集まつては居たけれどひつそりと水を打つたやうになつて居て、芳雄はたゞ自分の額の上に載つて居る氷嚢の中の氷のぢとぢと溶けて行く微かな音を、遠く遙かな物の響きにでも耳を傾けつゝあるやうな心地で聞いて居るのだつた。芳雄にはその氷の溶けるのと同じやうに自分の命がもう終りに瀕して居る危篤な狀態にあるのだと分つて居ても、それが今では悲しくも恐ろしくもなくて、自分は僅か十四の歲で死なゝければならないことや、此れと云ふ面白い思ひもせずに人を疑ぐつてばかり居て苦しい氣持ちを味はひ通した短い一生の間のことや、そんないろいろな不運を考へ合はせても芳雄はもつと生きたいと云ふ氣にはなれないで、成る程死ぬときには人間は斯う云ふ工合にだんだんとあきらめが附いて來て樂に此の世を立ち去ることが出來るのだなと云ふ風に感ぜられた。

「芳ちやん、お前ね、まだ何でもないんだからね、決して力を落すには及ばないんですよ。……」

柳子がさう云つて傍近くへ寄ると、芳雄は却つて彼女の言葉を憐れむやうに笑ひながら、

「えゝ有り難う。だけどね姉さん、死ぬなんてちつとも苦しくも何ともないんですから、そんなに心配して下さらないやうに。」

と云つて、それから直ぐに笑ふのを止めて蠟のやうに白い色をした顔に淨く嚴かな表情を浮かべて、今死なうとして居る自分だけにしか分らない或る貴い神聖な物をぢつと視詰めるやうな眼つきで、やゝ長い間瞳を大きく明らかに瞬いて居た。——それは其處に居る凡べての人が誰しも其の神聖な物が芳雄にだけははつきり見えて居ることを疑ふ譯には行かないやうな、さうして其の人たちも其の時の彼の瞳を通してそれを堅く信じるやうになるくらゐな神々しさの充ち溢れて居る眼つきを以て。——

「芳ちやん、ほんたうに大丈夫なんですから氣をたしかにして居らつしやいよ。氣さへしつかりして居ればきつと直るつて、兄さんもさう仰つしやつて居らつしやるんですから。」

姉が慰めるやうにさう云ふと、彼女に並んで坐わつて居た兄も恐る恐る言葉を添へた。

「芳雄、氣をしつかりするがいゝぞ。まだ大丈夫なんだから。」

さう云つたとき、芳雄の眼はやはり以前の神々しさを一杯に湛へたまゝで徐ろに兄の方へ向いた、——ちやうど芳雄の視詰めようとして居る貴い神聖な物が其の兄の胸の奥にでもあるかのやうに。兄はその威に打たれたかの如くはつとして下を向いて、いまだにまだ心の秘密を讀まれまいとするやうだつたが、芳雄はその氣の毒な空しい努力を嘲けるよりも兄をそんなに氣の毒にさせた自分の今迄の狭い心が淺ましくなつて、先の姉も死ぬ時にはきつと現在の自分のやうに凡べての人を許してやつたらうと思ふと、あゝほんたうに兄には濟まなかつたんだと云ふ感情がむらむらと湧き上

て來て、

「兄さん、兄さん！」

と、しきりに瘦せた手頸を伸べて兄を呼んだ。

「兄さん、——今迄は僕が惡うございました。僕は兄さんの仕合はせを祈つて居ます。どうか此れからもいつ迄も姉さんを可愛がつて上げて下さい。さうして仲よくお暮らしなすつて下さい。」

「あゝ有り難うよ。」

と、さう云ふ兄と妹との聲が、今は眼を閉ぢてうつらうつらと眠るやうになつて行く芳雄の耳に聞えた。芳雄は、先の姉が嘗て通つて行つた煩らひのない安らかな道を自分も今通りつゝあるのだと云ふ心地がして、今度こそほんたうに憧れて居た彼女の蹤にもう直き共處で會へるのだと、固く固くそれを信じた。…………

（大正八年八月作）

洛陽堂圖書秋季大特賣

□今回大方各位平素の御眷顧に酬ゆる爲め弊堂發兌圖書全部大割引特
□賣仕候間何卒御引立御買上の榮を蒙り度く伏して願上候
□期限十月一日より十月廿四日迄，左は其一部にて詳細目錄は御通知
□次第進呈仕可候期限以後は斷然正價に復し候

書名	著者	定價	特價	郵税
△文學に現はれたる我國民思想の研究（貴族文學の時代）	津田左右吉	三、〇〇	二、六五	、一八
△同　武士文學の時代	同	三、五〇	三、一〇	、一八
△同　平民文學の時代	同	四、五〇	四、〇〇	、二四
△土の叫び地の囁き	加藤一夫	一、五[illegible]	一、二〇	、〇八
△民衆藝術論	同	一、六〇	一、三〇	、一〇
△文藝復興の三大藝術	中山昌樹	一、〇〇	[illegible]	、〇八
△自然科學者としてのゲーテ	小川政修	一、〇〇	、七五	、一〇
△ハイネ評傳	藤浜由之	一、〇〇	、七〇	、〇八
△茶話	薄田泣菫	一、七五	、六五	、〇四
△ミケルアンゼロ	ロマン、ロラン	二、八〇	二、四〇	、一[illegible]
△ベエトフエンとミレエ	同	一、六五	一、[illegible]〇	、一二
△近代音樂家評傳	同	一、四[illegible]	一、一五	、一二
△ヴアン、ゴツホの手紙	木村荘八	一、三〇	一、〇五	、一[illegible]
△上世美術	同	一、三[illegible]	、九五	、一二
△ロダンの生涯と藝術	渡邊吉治	一、[illegible]〇	一、〇〇	、一〇
△ノア、ノア	ゴオガン	一、〇〇	、八五	、一二
△ボテイチエリ	木村荘八	一、三〇	一、〇〇	、〇六
△エル、グレコ	同	一、一〇	、九〇	、〇六
△レオナルド	同	一、三〇	一、〇〇	、〇六
△泰西の繪畫及彫刻　全九冊	洛陽堂編纂	價目參照	同	各、一八

書名	著者	定價	特價	郵税
△ド氏感想及印象	新城和一	[illegible]	[illegible]	[illegible]
△ロオレンの少女バレス	同	[illegible]	[illegible]	[illegible]
△藝術上の理想主義	赤木桁平	[illegible]	[illegible]	[illegible]
△痴人の懺悔	ストリンドベルヒ	[illegible]	[illegible]	[illegible]
△スタルコット	同	[illegible]	[illegible]	[illegible]
△ストックホルムの殉死者	同	[illegible]	[illegible]	[illegible]
△ヘッベル傑作集	吹田順助	[illegible]	[illegible]	[illegible]
△彼が三十の時	武者小路實篤	[illegible]	[illegible]	[illegible]
△向日葵	同	[illegible]	[illegible]	[illegible]
△後に來る者に	同	[illegible]	[illegible]	[illegible]
△留女（小說）	志賀直哉	[illegible]	[illegible]	[illegible]
△全譯ダンテ神曲（全三冊）	中山昌樹	各二、[illegible]	各二、[illegible]	[illegible]
△ダンテ新生	同	[illegible]	[illegible]	[illegible]
△アシジの聖フランチエスコ	同	[illegible]	[illegible]	[illegible]
△[illegible]	ソロイヨフ	[illegible]	[illegible]	[illegible]
△我等何を爲すべき乎	トルストイ	[illegible]	[illegible]	[illegible]
△我等何を信ずべき乎	同	[illegible]	[illegible]	[illegible]
△滅び行く宇宙及人類	兒玉昌	[illegible]	[illegible]	[illegible]
△生命神秘論	小酒井光次	[illegible]	[illegible]	[illegible]
△宗教と人生	帆足理一郎	[illegible]	[illegible]	[illegible]
△哲理と人生	同	[illegible]	[illegible]	[illegible]
△人生者ブラウニング	同	[illegible]	[illegible]	[illegible]
△教育哲學說論（デウイ）	同	[illegible]	[illegible]	[illegible]
△兒童を謳へる文學	高島平三郎	[illegible]	[illegible]	[illegible]
△トルストイ一日一想	加藤一夫	[illegible]	[illegible]	[illegible]
△生命論	永井潜	[illegible]	[illegible]	[illegible]
△生物學と哲學との境	同	[illegible]	[illegible]	[illegible]
△日本基督教史（上卷）	山本秀煌	[illegible]	[illegible]	[illegible]
△同（下卷）	同	[illegible]	[illegible]	[illegible]
△耶蘇傳	上澤謙二	[illegible]	[illegible]	[illegible]
▲[illegible]學上より見たる[illegible]人	高島平三郎	[illegible]	[illegible]	[illegible]

東京市麹町區隼町廿番地
洛陽堂
電話九段三九一六
振替東京二〇九一四

洛陽堂圖書秋季大特賣

東京市麹町區隼町廿番地
洛陽堂
電話九段九六六・五一一
振替東京二〇九一四

□今回大方各位平素の御眷顧に酬ゆる爲め弊堂發兌圖書全部大割引特賣仕候間何卒御引立御買上の榮を蒙り度く伏して願上候
□期限は　月一日より十月廿四日迄、左は其一部にて詳細目録は御通知次第進呈仕可候期限以後は斷然正價に復し候

書名	著者	定價	特價	郵税
△文學に現はれたる我國民思想の研究（貴族文學の時代）	津田左右吉	三、〇〇	二、六五	、一八
△同（武士文學の時代）	同	三、五〇	三、一〇	、一八
△同（平民文學の時代）	同	四、五〇	四、〇〇	、二四
△土の叫び地の囁き	加藤一夫	一、五〇	一、二〇	、〇八
△民衆藝術論	同	一、六〇	一、三〇	、一〇
△文藝復興の三大藝術家	中山昌樹	一、〇〇	、七〇	、〇八
△自然科學者としてのゲーテ	小川政修	一、〇〇	、七五	、一〇
△ハイネ評傳	藤浪由之	一、〇〇	、七〇	、〇八
△茶話	薄田泣菫	一、七五	、六五	、〇四
△ミケルアンゼロ	ロマン、ロラン	二、八〇	二、四〇	、一[illegible]
△ベエトフエンとミレエ	同	一、六五	一、四〇	、一二
△近代音樂家評傳	同	一、四〇	一、一五	、一二
△セザン、ゴッホの手紙	木村荘八	一、三〇	一、〇五	、一二
△近世美術	同	一、三〇	、九五	、一二
△ロダンの生涯と藝術	渡邊吉治	一、[illegible]〇	一、〇〇	、一〇
△ノアノア	ゴオガン	一、〇〇	、八五	、一二
△ボテイチエリ	木村荘八	一、三〇	一、〇〇	、〇六
△エル、グレコ	同	一、一〇	、九〇	、〇六
△レオナルド	同	一、三〇	一、〇〇	、〇六
△泰西の繪畫及彫刻　全九冊	洛陽堂編纂	價目録參照	同上	各、一八

書名	著者	定價	特價	郵税
△ド氏感想及印象	新城和一	一、七五	一、[illegible]〇	、〇八
△ロオレンの少女、バレス	同	一、七〇	一、五〇	、〇八
△藝術上の理想主義	赤木桁平	一、三〇	、八〇	、一二
△痴人の懺悔	ストリンドベルヒ	一、六〇	一、四〇	、一八
△スタルコット	同	一、五〇	、二〇	、〇
△ストックホルムの殉死者	同	[illegible]	、二五	、〇
△ヘッペル傑作集	吹田順助	一、六〇	一、四〇	、一八
△彼が三十の時	武者小路實篤	一、五〇	一、二五	、一
△向日葵	同	一、五〇	一、二〇	、一
△後に來る者に	同	一、[illegible]	一、三〇	、一二
△留女（小說）	志賀直哉	各二、〇〇	各二、八〇	、一〇
△全譯ダンテ神曲（全三冊）	中山昌樹	一、五〇	、一〇	、一八
△ダンテ新生	同	二、二〇	、七〇	、〇八
△アシジの聖フランチエスコ	同	一、五〇	二、〇〇	、一八
△[illegible]人	ソロイヨフ	二、二〇	[illegible]	、〇八
△我等何を爲すべき乎	トルストイ	一、〇〇	一、七〇	、一一
△我等何を信ずべき乎	同	一、七〇	一、四〇	、一〇
△滅び行く宇宙及人類	兒玉[illegible]門	一、七〇	一、四〇	、一〇
△生命の神秘	小酒井光次	一、九〇	一、六〇	、一八
△宗教と人生	帆足理一郎	一、九〇	一、五〇	、一二
△哲理と人生	同	一、七〇	一、[illegible]	、一〇
△人生詩人ブラウニング	同	一、八〇	一、五〇	、一〇
△教育哲學試論、デウイ	同	一、八〇	一、四〇	、一八
△兒童を謳へる文學	高島平三郎	三、〇〇	三、七〇	、一八
△トルストイ一日一言	加藤一夫	一、五〇	一、二〇	、一八
△生命論	永井潜	五、〇〇	四、五〇	、一八
△生物學と哲學との境	同	九、〇〇	四、五〇	、一八
△日本基督教史（上巻）	山本秀煌	一、七五	一、[illegible]	、一一
△同（下巻）	同	一、八〇	一、五〇	、一二
△耶蘇傳	上澤謙二	一、[illegible]	一、[illegible]	、一〇
▲[illegible]	高島平三郎	一、七〇	一、四〇	、〇八

中央公論大賣捌所

東[illegible]	東[illegible]
同 神田區裏神保町	上田屋
同 京橋區銀座三丁目	東海堂
同 京橋區元數寄屋町	北隆館
同 京橋區西紺屋町	良明堂
同 日本橋區本石町	至誠堂
同 本郷區本富士町	盛春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同 北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同 四條西洞院	前田大盛社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

○定價 金四拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金貳圓·四拾錢	金貳圓八拾八錢
十二冊	金四圓八拾錢	金五圓七拾六錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金六圓八拾錢外國は金八圓拾六錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし。

廣告取次所

博報堂、弘報堂、正路喜社、一星社
金蘭社、萬年社、電通社、信賴社
三誠社、東亞通信社

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金口座は東京三十四番なり
一郵劵代用は謝絕す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるゝを拒まず
一代金引替小包の取扱は一切謝絕す
一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌を發送せず

一金一圓迄 金六錢
一金五圓迄 金七錢（集金委託料及送料共）
一金拾圓迄 金八錢

一受領證請求は必ず返信料を要す

大正八年八月三十一日印刷納本
大正八年九月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人 菅谷憲治
印刷人 高木酉三

發行所 東京市本郷區駒込西片町十番地
中央公論社
電話（長小石川一四四四 小石川三四二〇）
電信略號コウロン

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

◉本號特價 金壹圓 郵稅金四錢

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同　神田區裏神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　京橋區西紺屋町	良明堂
同　日本橋區本石町	至誠堂
同　本郷區本富士町	盛春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同　四條西洞院	前田大盛社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

一定價　金四拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾錢但支那ヲ除ク）

前金 冊數	內　國	外　國
六　冊	金貳圓四拾錢	金貳圓八拾八錢
十二冊	金四圓八拾錢	金五圓七拾六錢
以上郵稅共		

▲但し[illegible]

賣捌所 [illegible]

送金注意

一誌代郵税は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一振替貯金口座は東京三十四番なり

一郵券代用は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割増にて代用せらるゝを拒まず

一代金引替小包の取扱は一切謝絶す

一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

一金一圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
一金拾圓迄　金八錢

但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌を發送せず

一受領證請求は必ず返信料を要す

大正八年八月三十一日印刷納本
大正八年九月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　曾谷憲治
印刷人　高木[illegible]

東京市本郷區駒込片町十番地
發行所　中央公論社
電話[illegible]

東京市牛込區市谷加賀町[illegible]
印刷所　[illegible]

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6,80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す